
武装守護霊(旧)

改樹考果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装守護霊（旧）

【Nコード】

N5073F

【作者名】

改樹考果

【あらすじ】

両親の仕事の都合で母方の叔母に預けられる事になった高校生・黒樹夜衣斗。だが、叔母の住む星波町には「必然的に秘密になってしまう秘密」があり……。主人公・黒樹夜衣斗の「変えられた運命」と人の「宿命の悪意」が重なり始まる物語です。

プロローグ1

願わくば、
君に与えた運命を変える選択が、
あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を……

主人公

ガタンガタンと揺れる電車。

窓に薄く映る前髪で目を隠した冴えない男の顔。

流れる海岸風景。

周囲から聞こえる雑談。

俺は窓枠に頬杖を付きながら、深いため息を吐いた。

緊張とどうしようもない現状から出た溜め息だ。

小心者である俺が、一人で電車に乗り遠出する緊張。

両親の急な海外出張で、大して面識もない母親の妹に預けられる事になった現状。

再びため息が出る。

叔母がいる町は、星波町と言う山々に囲まれた港町。当然、一度も行ったことがない。

胃がむかむかしてきた。

ネットで調べてみると、昔、近くの海に何度か星が落ちた事があり、その度に高波に襲われた為、星波町と言う名前になったとか……そんな由来があつて、町の中心には隕石博物館があり、世界中から隕石が集めて展示しているらしい。もっとも、その知名度はあまりない。星波町で最も有名なのは、十年前に開校した小中高大貫の学園・星波学園……らしいが……正直、聞いたことがない学校なんだよな……だが、全国から生徒を募り、結構大きな寮もあるらしく、かなりの人数が通っているみたいだし……ん？ どういうことなんだろう？……まあ、そんな事より、最も驚いたのは、そ

の学園が、二十年前に政治家などの汚職発覚で建設途中で放棄された空港跡地である人工島の上にあることだろうか？

と言うか、人工島に学校って……まるでゲームか漫画みたいな話だな……現実味がない……まあ、これから通う事になる学校なのだから、嫌でも現実になるだろうが……

などと色々考えていると、窓の外に学園らしき島が見えた。

学校らしき建物に、何だか分からない建物に、島と星波町を繋ぐ大橋。大橋には車だけではなく、電車が走っているのが見える。

こんな学校が日本の中にあるなんて思いもしなかったな……。

そんな素直な感想が心に浮かぶと同時に、電車はトンネルの中に入った。

黄色い光が流れるトンネルの中。

一瞬、違和感を全身に感じた。

何かが全身を駆け抜けたような……気持の悪い感覚。

周りを見回すが、他の乗客は普通にしている。

気のせいか？それとも風邪でも引い……た？

思考を巡らしながら視線を正面に向けると、いつの間にか見知らぬ女性が座って、俺を微笑みながら見ていた。

かなりの美人で、驚くと共に動揺する俺。

「結局、こういう運命になったね」

……綺麗な声だが……電波か？

女性の言葉に俺が少し引くと、女性は苦笑した。

まるで俺の心の声が聞こえたかのような絶妙なタイミングでだ。

俺が対応に困っていると、電車がトンネルと抜けた。

反射的に視線が窓の外に向く。

「またねヤイト」

驚愕に近い驚きに、俺は女性のいる方に視線を向けたが、女性の姿はかき消えていた。

慌てて周りを見回すが、女性の姿はどこにもない。

それどころか、俺のその行動が周囲の視線を集めてしまい、恥ず

かしい思いをする羽目になった。

いったい、なんなんだ？幽霊？……そんな馬鹿な。

あまりの出来事に混乱する俺。

俺の名前は黒樹くろき 夜衣斗やいと。

何の取り柄もなく、マイナス面ばかり目立つ、平均以下の高校生だ。

そんな俺が、見知らぬ女性に名前を知られる事なんて・・・あり得るか？第一。こういう運命？訳が分からない。

突然現れ、言葉少なく忽然と消えた女性に、俺は何とも言えない寒気を感じつつ、目的の駅に停車した電車から降りた。

プロローグ2

???

それは生じた時から腹を空かしていた。

しかし、その周囲には何も無い。

あるのは先の見えない闇と、自身を拘束する見えない鎖。

それは空腹からもがくが、鎖はとれず、逆に体に食い込み、苦しくなる。

少しずつ、空腹より、恐怖がそれを支配し始めた。

恐怖の浸食と共に、それはますます暴れたが、その度に鎖はますます食い込み、終には暴れる事すら出来なくなる。

それはやがて恐怖より、怒りを感じるようになった。

身を焦がすほどの怒り。

どれほどのその怒りに身を焦がしていたか、ある時、不意に鎖が千切れ、闇が開けた。

開けた視界に、町が見えた。

それはそれに疑問を思うことなく、突然の自由に喚起する事なく、その周囲にそれと全く同じ姿形をしたものが無数に存在する事すら気にすることなく、自身の怒りに身を任せて走り出した。

それと同時に、けたたましいサイレンが町中から聞こえ始める。

主人公

「いや〜ごめんね夜衣斗ちゃん。お姉さんすっかり忘れていたわ」

「……」
「……」
「ここ最近、締め切りに追われててね。多分、それで忘れちゃったんだわ」

「……」
「しかも、今現在も追われている最中でね。お迎えに行けないの

よ

「……………」

「そんな訳だから、自力で家まで来てね。住所は知ってるでしょ？」

「……………」

「あ！来る途中でプリン買ってきてくれると嬉しいな。でっかい奴ね」

「……………」

「それじゃあねえー」

…………… なんじゃそりゃ！！！！

母親の話では駅で叔母が待っているって聞いていたのに、行ってみたら誰もいないので電話してみたらこれだ。

怒りより…………… 疲れが出てきて、俺は深い溜め息を吐いた。

とりあえず、駅前のコンビニでっかいプリンを二つ買う。

面識はないんだが、叔母はかなり適当な性格だと聞いていたので、まあ、これぐらいは予想の範囲内だと言えなくないが…………… まあ、予測の範囲内でも怒りが込み上げてくるのは抑えられはしない。

もう一回、深い溜め息。

まあ、携帯とかで地図を見れば、何とかなるか。

そう思って俺は叔母の家に向かって歩き出した。

歩きつつ、これから住む町の様子を見る。

まあ、普通の町かな？当たり前だが。

などと思っていると、奇妙な光景が視界に入り、思わず歩みを止めた。

スピーカーだ。

それも、電信柱に一本一本あると言っていいほどスピーカーがある。

…………… 港町だからか？津波対策とかそんなんで…………… それにしては過剰なほどある様な…………… あれか所謂、役所の無駄使って奴か？

そんな事を考えていると…………… 不意にスピーカーからけたたまし

いサイレン音が流れ出した。

プロローグ3

けたたましくなり続けるサイレン音に、俺は思わず耳を塞いだ。そこで携帯が振動しているのに気付く。叔母からだ。

サイレン音で聞こえるか不安だったが、とりあえず電話に出る。

「はや どこい にげ な い」

案の定所々しか聞こえず、眉を顰める俺。

するとサイレン音が止まり、今度は落ち着いた女性の声がスピーカーから聞え出した。

「「星波海岸にて『はぐれ』の発生を確認しました。市民の皆様は、自警団が『はぐれ』を駆除するまで家もしくは建物の中から出ないでください。また、外出中の人は、すぐに近くの家や建物に避難してください。繰り返しです。星波海岸……」」

……意味が分からない。はぐれ？自警団？駆除？……「冗談に聞こえないから、なお訳が分からない。……とにかく、携帯の方に耳を集中させよう。」

「ちよつと聞いている夜衣斗ちゃん！夜衣斗ちゃん！」

携帯から切羽詰まったような、先程ののほほんとした叔母とは思えない声が聞こえてくる。

「聞いてますよ」

「放送は聞いた!？」

「ええ、ど」

どう言う意味ですか？と聞く前に、叔母が早口で喋り、遮る。

「いい？さっきは説明しなかった。と言うか、『出来なかった』。と言うより、こんなに早く『次が来る』。ああ！そんな事を言いたいんじゃないかと、とにかく、今、外は危険なの！近くに人がいる家はない？あつたらすぐに中に入れて貰いなさい！家の中なら『はぐれ』に襲われる事はないから！」

「だから、そのはぐれってなん」

ですか？と言おうとして、俺は固まった。

ズツチャと音を発てて目の前に何か落ちてきて、それが視界にはつきりと入ったからだ。

「ああおおおおおん」

それは歓喜だろうか？それは俺を見て、空気が震えるような遠吠えをした。

それは『犬』だった。

ただし、『全身に黒く千切れた鎖を巻き、全身から炎を噴き出す骸骨の犬』。

あまりの出来事に、俺は身体のみならず、思考も止まってしまっただ、ただ、

「逃げなさい！早く！！」

そう言う叔母の声だけが、頭の中に響いていた。

プロローグ 4

それは俺にしては、上出来な反応だった。

突然、空から降ってきた化け物。

全身に千切れた黒い鎖を巻き、至る所から炎を噴き出す骸骨犬。そいつは現われ一吠えし、現れたときと同様に突然、飛び掛ってくる。

その瞬間、俺は手に持ったコンビニ袋をそいつに向かって投げた。狙いも定めず、反射的な行動だったが、投げられたコンビニ袋は骸骨犬の目に当たり、俺が横に避ける隙を作った。

自分のこの反応に軽く驚きつつ、俺は全速力で駆けだす。

駆け出したはいいが、どう考えても俺の走る速度じゃ、あつと言う間に追い付かれる。速度もそうだが、持久力も、全くと言っていいほど俺はないから。

骸骨犬を避けた時、感じた炎の熱は現実で……そうになると、あからさまに鋭い爪と牙は俺を簡単に引き裂くのは間違いない。

命の危機。

『久しぶり浮かんだ言葉』に、俺は歯を食いしばった。

現状に実感がわかないせいか、『過去の怒り』が再度噴出したんだろう。そんな場合じゃないのは頭では分かっているんだが……。

俺は真っ先に目に入った家に駆け込んだ。

叔母が家に逃げると言っていた事から、骸骨犬は……多分、家中に入れないのだろう……そうとしか考えられないし、それしか逃げの方法がない。

俺は走る勢いそのまま玄関にぶつかる様に止まり、そのままドアを強く叩く。

「すいません！誰かいませんか！？誰か！？」

何度も叩くが、一向に反応がない。

つで気付いた。

玄関のポストに、新聞やらハガキやらが溜まっている事に、
運が悪い事に、長期間留守にしている家に来てしまったようだった。

まずいと思う間もなく、俺は背後に何かを感じ、振り返った。

そこに、骸骨犬がいた。

警戒しつつ、じりじりと間合いを縮めながらだ。

骸骨犬の動きを警戒しながら、周囲を見るが、家の周りは高い塀に囲まれており、逃げる道がない。

絶体絶命。

その言葉が俺の脳裏に浮かんだ。

プロローグ5

今までの人生の中で一度も経験した事がない状況に、俺の動悸は激しくなり、頭がくらくらし出す。

正直、現実感がない。だが、骸骨犬から発せられる炎の熱気、アスファルトが焦げる臭いが、否応無しに俺をこれが現実だと自覚させようとする。

吐き気がする。

骸骨犬の鋭い牙は勿論、その足先にある鋭そうな爪、全身から出ている炎、そのどれもくれば大怪我。いや、絶対にそれだけでは済まない。殺され、喰われる。

そんなの絶対に嫌だ！

その強い思いが、俺に覚悟を決めさせた。

すると、動悸・めまい・吐き気がすうと消える。

コンビニ袋が当たったという事は、物理的な存在だという事。なら、倒す事だって出来るはずだ。

周りを見るが、武器になりそうな物は一切ない。

手には携帯を持っているが、投げた所で、警戒されている今の状態ではあっさり避けられるだろう。

……なら、腕一本を犠牲にして……壁に叩き付ける。

正直言つて、この時の思考は危機的状況も相まって、普段の俺とはかけ離れた結論を導き出していた。

要するに、キレていたわけだ。

もし、このまま状況が変わらなければ、俺は確実にそれを実行していたと思う。

だが、それを実行する前に、唐突に視界が塞がった。

「やれ、剛鬼丸」

同時に聞こえた頭上からの声。

視界を塞いだものの急激に前へと動き、同時に犬の悲鳴が聞こえ、

パキンと何か割れる音がし、ドチャと何か落ちる音。視界を塞いでいたものの全容が見えた。

それは、二メートル以上はある鎧甲冑だった。

教科書とかで見る戦国武将が着ている様なやつ。

その足元には、頭部が無くなつた骸骨犬が倒れている。

俺が啞然としていると、その鎧甲冑が振り返つた。

目に映つたその顔は、『鬼』だった。

……これは、助かつた……なんだよな？

プロローグ 6

突然現れ、俺を救った鎧甲冑を着た大鬼。

振り返って向けられたその視線は、俺には向けられておらず、俺の上、家の屋根へと向けられていた。

「よくやった」

そう声がして、人が俺の前に降ってきた。

短髪で、目付きの鋭い中肉中背の成人男性だった。その腕には、『星波町自警団』と書かれた腕章が嵌められている。

さっきの放送を思い出す俺。まあ、思い出したからと言って、わけのわからない状況であることにはかわらないが……。

「君、大丈夫かい？」

大丈夫です。

そう言おうとした時、周囲に何か着地する音が聞こえた。それも複数。

視線を向けると、そこには倒された骸骨犬と全く同じ骸骨犬が何匹もいた。

「つち。他の連中は何やってんだか」

男性は俺を庇う様に動き、腰に付けていた伸縮式警防を構えた。

「蹴散らせ、剛鬼丸」

男性の命令に、剛鬼丸と呼ばれた大鬼は最も近くにいる骸骨犬に拳を振るう。

その素早い拳撃に、骸骨犬は避けられず、たった一撃で全身が粉砕された。

それを見た骸骨犬は、ターゲットを剛鬼丸だけにし、一斉に襲い掛かる。

剛鬼丸は、骸骨犬が襲い掛かってくるのに避けもせず、骸骨犬の爪や牙が剛鬼丸の鎧に突き刺さる。

だが、攻撃を全身に受けている剛鬼丸は平然としており、それど

ころか、肩に牙を突き立てている一匹の頭部を無造作に掴み、握り潰した。

危機を感じたのか、一斉に剛鬼丸から離れようとする骸骨犬だが、何故か剛鬼丸から離れる事が出来ない。よく見ると、爪や牙が突き刺さっている鎧が急速に修復されて、まるで鎧に掴まれているか様な状態になっていた。

そして、剛鬼丸は逃げられない骸骨犬を一匹一匹確実に握り潰し、全滅させた。

最後の一匹が握り潰された所で、俺は玄関にもたれかかる様に座ってしまった。

張っていた緊張の糸が、ぷつぷつと切れたんだろう。

深い溜め息を吐く俺に、男性は苦笑した。

「だらしないな。お前、おと……」

男性の言葉が不自然に途切れた為、俺は反射的に男性を見て……

…最悪だ。と思った。

何故なら、男性は驚愕に目を見開き、自分の『胸に突き刺さった骨』を凝視していたからだ。

プロローグ7

正直、あまりの展開の緩急に、意味が分からなかった。

目の前で胸を骨に突き刺されて血を吐き、前のめりに倒れる男性。大量の血が玄関先に広がる。

そのあまりの血の多さに、今まで味わったことがない悪寒を感じ、俺は硬直した。

音がした。骨と骨がぶつかる。そんな音が。

何も考えられず、条件反射的に音のした方を見ると、そこで……

…最初に倒された骸骨犬が再生を始めていた。

全身から出ていた炎が、ばらばらになった骨を回収。そして、まるで巻き戻しされているかの様に、骨が次々と組み立てられ、元に戻る骸骨犬。

骨を回収している炎は、男性の胸に突き刺さっている骨にも細かい炎で繋がっていた。そして、まるで紐のように骨を引っ張り、一気に男性から骨を抜いた。

抜かれた骨は骸骨犬のろっ骨に収まり、身震いして炎を散らす骸骨犬。

確信的な予感を感じ、他の倒された骸骨犬を見ようと視線を変えると、骸骨犬の再生と更なる絶望的な光景が俺の視界に入った。

骸骨犬をあっさり倒した剛鬼丸が『すうと消える』のを目撃したからだ。

助かったと思った直後のこの奈落に、俺は絶望するしかなかった。再生した骸骨犬達は、俺の周囲を取り囲み、徐々に間合いを詰めてくる。

死が、目の前に……………？……………？……………

……………！？

そして……………気が付くと……………俺はどこかの公園にいた。

プロローグ 8

砂場に、ブランコに、滑り台に、僅かばかりの木々。

簡素な小さな公園。

どこかで……見覚えのある公園で、俺はぼけと突っ立っていた。

先ほどまで、俺は炎を全身から吹き出す骸骨犬に追われ、命を奪われようとしていた。はずなのだが……気が付くと、俺はここにいた。

前後の記憶が全くない。

あまりにも唐突過ぎて、さっぱりわけがわからない。と言うか、さつきから何も分かってないんだが……それにしても、どこかで見覚えがある公園だな……考えてみると、幼い頃、俺の両親は仕事の関係で引越しばかりしていた。その引越し先にあった公園なのだろうか？……いやいや、俺は星波町にいたはずだろ？

「そんなに混乱しなくても、夜衣斗はまだ星波町にいるわよ」

唐突に背後から声があった。

聞き覚えがある声だった。

……それもそのはず、さつき電車で唐突に現れ、唐突に消えた女性の声なのだから……。

「はあ〜い。夜衣斗」

振り返ると、やっぱりその女性だった。

「ひどいな、私にはちゃんと『サヤ』って名前があるんだよ」

……初めてあった女性の名前なんか知るか。

「夜衣斗が付くてくれた名前なのになあ……しょうがないか。憶えてないんだもんね」

なんだそりゃ……って、俺、一言も喋ってない。

「別に喋らなくても、考えている事は全部、私に伝わるわよ。だって、私は、あなたの中に住んでる『んだもん』」

……取り憑かれているのか俺。

「失礼ね。私、幽霊じゃないわよ」

……同じだろ。

「もう！違うったら」

じゃあ、何なんだよ？

「……教えてあげない」

………はあ、悪い夢でも見ているんだらうか？

「うん。夢だよ」

はああ？………あんな状況で、寝てるってか。

「寝てるって言うより、私が夜衣斗の精神世界に引き込んだと言ったほうがいいかな？だから、ここは夜衣斗の心の中、記憶の中にある場所」

不意に、それまでからかう様な表情から一変して、悲しそうなそれだけで優しい笑みを浮かべる女性。

「夜衣斗の、『運命が変えられた場所』よ」

プロローグ 9

運命を変えられた？

そのサヤの言葉に、俺は眉をひそめた。

電車では、こういう運命になったって言ってなかったか？

「うん。そうだよ。だから、正確には『まだ変わってない』んだ
よ」

意味が分からない。

「本来の運命だと、夜衣斗はあの場所で骸骨犬が『喰い殺される運命』なんだ」

……はあ！？なんだそりゃ！

「でも、その運命を変えられる選択があなたの中にあるの……この場所で、夜衣斗は渡されたんだよ」

渡された？何を？誰に？

「だから、選択して」

無視すんな！

「ここで人生を終えるか」

……冗談じゃない。そんな運命、絶対に認めない。

「もう一つは」

また、悲しそうなそれでいて優しい笑みを浮かべ、俺の前に両手を差し出す。

その手の中には、白銀色のミニチュアがあった。

これは！なんで！いや、夢の中だったらあり得るか？

驚く俺に、ほほ笑むサヤ。

それは、俺が子供の頃から考えている『空想の物語に登場する主人公ロボット』だった。

「この子を受け入れて、『過酷な運命』を歩むか」
受け入れてって？……それに、過酷な運命？

「ここで死んだ方がよかったと思えるほどの過酷な運命」

……なんだよ、それ。

「どうする夜衣斗？」

どうするも何も……俺は死にたくない。わけのわからないまま喰い殺されるなんて、絶対に嫌だ。

過酷な運命と言われても……正直、俺にはピンとこない。平凡な場合によっては平凡以下の人生を歩んできた俺だが……今までに感じた事がない不安を感じる。

……だが、死ぬよりはましだ。

俺がそう決意した瞬間、サヤの姿が消え、ロボットのミニチュアが中に浮き、光に包まれた。

光は急速に大きくなり、二メートルぐらいの大きさになって、消えた。

光が消えたその場所には、騎士の甲冑を鋭角的にした様な姿をした主人公ロボットが、実寸大(?)になってこちらを見ていた。

主人公ロボットは、まるで本物の騎士がやるように片膝を地面につけて、頭を俺に対して下げた。

「名前を呼んで上げて、この子の名前を」

どこからともなくサヤの声が聞こえてきた。

……こいつの名前は……

物語の中で、主人公ロボットが、登場人物に呼ばれるシーンを俺は思い出した。

「王の機械にして王の騎士、『オウキ』！」

プロローグ10

再び気が付くと、俺は玄関前に戻っていた。

事態は進展も好転もしておらず、骸骨犬達に囲まれ、男性は地面に倒れて血を流していた。

ただ一つ違うのは、俺の前に鋭角的な騎士甲冑……オウキが立っていた。

多分、突然現れたであろうオウキを警戒する骸骨犬達。

(少しだけ、教えて上げる)

またどこからともなくサヤの声が聞こえてきた。

サヤの言葉通りなら、俺の心の中からという事になるが……よそう。今は目の前の事だけに集中しなくては……。

(オウキはね。『自分の意思』をちゃんと持つてるの。でも、あなたの命令無しでは、攻撃できない『仕様』になっている。だから、命令して。どうして欲しいか、心に強く思い描きながら。そうすれば、オウキは答えてくれるから)

そう言われてもな……

(じゃあ、がんばってね)

な！ちよ！ちよっと！？

そう言うと、サヤはこちらの呼びかけても何も言わなくなった。

……なんなんだか。

俺は戸惑いながら、俺の中にあるオウキのイメージを思い浮かべる。オウキが、俺の考えたオウキなら、現状でこれが最も使える機能なはず。

「オウキ。セレクト。冷凍弾装填。二丁拳銃」

俺の命令に、それまでピクリとも動かなかったオウキが、両腕を骸骨犬達に瞬時に向ける。

その瞬間、腕の内側が開き、二丁拳銃が飛び出して、オウキの両手に収まった。

その動きに、骸骨犬達が反応し、一斉に飛び掛かってくる。オウキのみならず、俺に対してもだ。

恐怖に固まる前に、俺の口は「撃て」と口にする事が出来た。

命令を受けたオウキは、素早く、正確に二丁拳銃を連射する。

凄まじい銃声の連続に、耳が痛くなるが、放たれた弾丸は狙いがわず、全て骸骨犬に着弾した。瞬間、骸骨犬達は白い煙に包まれ、煙が消えた時には、炎が消えて、『氷漬け』なって次々と地面に転がった。

冷凍弾は、その名の通り、弾丸に着弾した相手を瞬時に凍らすガスが入っている弾丸……と言う想像をしていた。……本当に、俺の想像した通りのオウキの様だ。……驚きと喜びともう心の中はぐちゃぐちゃだ。……まあ、これで一応、何とかなった……んだよね？

その疑心が浮かぶとほぼ同じタイミングで、凍った骸骨犬の一体から炎が噴き出した。

ああ！ やつぱり。

なんとなくそんな気がしていたので、あまり驚かなかったが……。

俺の見ている前で、次々と凍った骸骨犬達が炎を吹き出し、ゆっくりと立ち上がり始めた。

プロローグ11

冷凍弾で凍っていた骸骨犬達が、次々と自らの炎で復活する。

そんな危機的状況に、俺の次の一手を打ちかねていた。

こうした場合……ゲームとかでは、聖水とか回復魔法で倒すんだろうけど……いくら非常識な現実にさらされているからと言って、ゲームじゃないしな……となると、やっぱり全身を消滅させるような攻撃か？……『あれ』だと一体一体に時間がかかり過ぎるし、広範囲系の攻撃だと……どう考えても近過ぎるよな……どうする？

などと考えなら、俺は倒れている男性を見る。

かなりの出血をしていて、一切動かない。

何とも言えない恐怖と動揺が俺の中を駆け巡った。

どうする？救急車……って現状で救急車なんて……それに……いや…………だけど……。

思考がまとまらない。

何の解決策も浮かばないまま、全ての骸骨犬達が完全に復活した。時間稼ぎの為に、もう一度、冷凍弾を撃つ様に命令しようとして、その男性の変化に気付いた。

倒れている男性の身体から、消えたはずの剛鬼丸がゆっくりと姿を現し始めるのを。

何なんだ？

と考える間もなく、唐突にオウキが拳銃を両腕に勝手に収納し、素早く俺に近付き、俺を抱えあげた。

本当に自分の意思を持っているようだが……いきなりなんなんだ？オウキは俺の戸惑いを無視して、そのままジャンプした。

周囲の光景が一気に流れるほど高く早くジャンプされた為、俺は急激なGの変化に一瞬意識が飛びそうになる。

上昇から下降する直前で、オウキは自身の機能の一つである背中
の白い翼の様な飛行装置『ウイングブラスター』を開き、現れ、空

中に静止した。

文句を口にしようとした瞬間、下の方で激しい閃光が発生した。

光に視界が奪われ、空気が激しく動くのを感じる。

徐々に見えるようになり、まだかすむ目で下を見ると……そこに
は、『クレーター』があった。

プロローグ12

下に見えるクレーター。

留守の家は完全に消滅しており、道路や周囲の家も一部消滅している。ただ、そのクレーターの中心には、倒れている男性と、全身を現した剛鬼丸がいた。

どう言うわけか、剛鬼丸の全身の鎧が開いており……その下にあ
る無数の目の様なものをあらわにしていた。……かなり気持ち悪
い。

どう見ても、このクレーターはあの剛鬼丸の目が作り出したもの
だろうが……あれって、多分だが、オウキと『同質の存在』……
なんだよな？男性は剛鬼丸に命令してたし、さっきまでは命令無し
に攻撃はしてなかった。これが何なのかはさて置き、命令無しで剛
鬼丸がこんな事をしたと言う事は……俗に言う、『暴走状態』と
言う事か？……なんで何にも分かってないのに、次から次と……

…いや、こんなものが現実か。

俺が心の中で嘆いていると。

目が合った。剛鬼丸と……

一瞬の間。

気が付いたら、『目の前に』剛鬼丸がいた。拳を振り上げた状態
で。

無茶苦茶早い!!？

俺が何かを言う前に、急上昇して避けるオウキ。

飛ぶ能力がないのか、落下する剛鬼丸。

このままじゃまずい!この状況を打破するのに最適な装備は……
…と言うか……このオウキ……全部再現されているだろうか?
どうしても出てくる不安を抱えつつ、オウキへの命令を頭の中で
イメージする。

「セレクト。シールドサーバント。六機」

プロローグ13

俺の命令にオウキの両肩が開き、そこから小型の円盤が六機現れる。

……なんか、一瞬……意識がクラとした様な？……今はそんな事を気にしている場合じゃないか……。

「キューブゲージ」

俺がそう言うと同時に、剛鬼丸が再び目の前に現れた。

それと同時に、シールドサーバントの一機が剛鬼丸と俺の間に入り、放たれた剛鬼丸の拳を受け止めた。その間に、残りのシールドサーバントが剛鬼丸の上下右左後ろに展開する。

六機のシールドサーバントが、剛鬼丸を取り囲むと同時に、シールドサーバント達の装甲が開き、巨大なレンズが露わになる。

その瞬間、剛鬼丸の動きが固まり、空中に固定された。

シールドサーバントは、不可視の力場を発生させるサーバント（オウキ搭載の半自立小型遠隔操作兵器の名前）で、複数使えば、今みたいに対象を拘束する事が出来る。つが、さっきのクレーターを作ったあれをやられて耐えられるかどうか……。

まあ、少なくとも、多少の時間は稼げるはずだ。その間に……。

「オウキ。倒れている男性の近くに降りてくれ」

オウキは俺の指示に従い、クレーターの中心で倒れている男性の近くに降り立ち、俺をゆっくりと地面に下ろした。

俺は男性の脈を測ろうと思ったが、止めた。どう考えても……死んでいる。嫌な、認めたくない現実だが、受け止めて、何とかするしかない。

「セレクト。ヒーラーサーバント」

オウキの両肩が再び開き、そこからシールドサーバントよりややごてごてした小型円盤が二機現れる。

その瞬間、また意識がクラ付く。

……もしかして、オウキは俺の『意志力とか』で具現化しているのか？……つで、何か新しい装備を出す度に、意志力が消費される……とか？……考えても分からない事だし、確かめる時間はないが……なんにせよ。あまり時間がかけられない事は確かだな……。

俺がごちゃごちゃと考えている間、ヒーラーサーバントは男性の上に移動し、一機が力場を発生させて男性を宙に浮かし、もう一機が男性の周囲を回って男性をスキヤニングしている。出血は止まっている。ヒーラーサーバントの力場が、止血の役割をしている……からだと思う。そういう設定だったし。

男性を蘇生出来れば、剛鬼丸の暴走が止まるんじゃないかと、思っただけでヒーラーサーバントを出したが……本当に出来るんだろうか？ と言う原理で具現化しているか分からないが、オウキは俺の想像の産物である事は間違いない。つまり、想像上では、ヒーラーサーバントでどう治療するか（ナノマシンによる治療）は考えているが、それはちゃんとした医学に基づいていないわけで……下手したら、これのせいで余計に助からなくなるんじゃないだろうか？

そう不安が過った時には、ヒーラーサーバントはスキヤニングを終了させて、男性の傷口に貼り付けて治療を開始していた。

神様とか、仏様とか、そういうのは信じない主義だが、今だけは思わず祈りたくなる。

つが、祈り出す前に、頭上で強烈な閃光が生じた。

プロローグ14

閃光は、見るまでもなく、剛鬼丸がああ必殺技みたいなのを使っ
たんだろう。

光が収まり、頭上を見上げると……心臓が止まりそうな程に驚い
た。

ほぼ目の前に、剛鬼丸の拳があったからだ。

間一髪の所で、シールドサーバントの力場が、剛鬼丸の拳を止め
ていた様だった。

周囲を見ると、シールドサーバントは四機に減っており、ぼろぼ
ろで動いているのが不思議な状態になっている。

冷や汗が流れる。

「オウキ！」

剛鬼丸の腕を掴むオウキ。

残りの腕でオウキの腹部を殴る剛鬼丸。

オウキの体が、宙に浮いた。

「セレクト。貫通弾。拳銃」

剛鬼丸を掴んでいない腕から拳銃を出し、オウキは剛鬼丸の顔面
に銃口で殴り付け、連射。

撃たれている間も、剛鬼丸はオウキを殴り続ける。

撃ち込まれた銃弾は剛鬼丸の鎧に食い込むが、それ以上進まない。
拳を撃ち込まれる度にオウキは上へ上へと浮くが、装甲には一切
の凹みはない。

互いのダメージは無いように見えるが、剛鬼丸の拳がオウキに当
たる度に、オウキの手が剛鬼丸の腕かずれる。

俺が何か次の手を指示する間もなく、剛鬼丸は唐突にオウキを全
身を使って振り回し始めた。

物凄い音を立てて回転する剛鬼丸。

目で追えない速度になり、剛鬼丸が回転を止めた時には、オウキ

の姿がいつの間にか消えていた。

投げられた。どの方向に、どれだけ投げられたかは分からないが、少なくとも、その間に……。

剛鬼丸は、悠然と俺に向けて拳を振り上げた。

プロローグ15

一撃で俺の身体を粉碎するであろう剛鬼丸の拳が放たれる。ぼろぼろとシールドサーバントがそれを防ぐが、四機ある一機が活動を停止して地面に落ちて霧散した。

二撃目、二機目が落ちる。

三撃目、三機目が落ちる。

オウキ！早く戻って来い！！

四撃目、最後の一機が落ちた。

剛鬼丸が、五撃目を放とうと拳を振り上げる。

その背後に、飛行して戻ってきているオウキの姿が見えた。

どう見ても、間に合わない！

今度こそ、死ぬ！

そう諦め掛けた瞬間。

何かが剛鬼丸の脇に当たり、丸の字に折れ曲がって剛鬼丸が横に飛んだ。

啞然とするしかない俺。

剛鬼丸が飛んだ方向に視線を向けると、巨大な赤い鱗の様なものが剛鬼丸を地面にめり込ませて押さえ付けていた。

そして、背後から、何かか飛んでくる音がした。

鳥の様だが、音の大きさが全然違う。

振り返って、音の発生源を確認すると、そこには『巨大な赤いドラゴン』が飛んでいた。

赤く十メートルぐらいありそうな巨大なドラゴン。

それがこちらに向かって飛んできていた。

正直……驚き疲れた。

次から次と非常識な事ばかり起きて……いい加減にして欲しい。

そんな事を考えていると、オウキが戻ってきて、ドラゴンから俺

を守る様に降り立った。

ちよつと、ほつとする。

現状、唯一明確な味方はオウキだけだからだろうか……。

状況から考えて、剛鬼丸を抑えているのは、このドラゴンなのだろうが……待てよ。もし、これがオウキや剛鬼丸と同じ存在なら……。

何となく予感めいたものを感じて、道路の方を見る。

間を置かず、自転車に乗った誰かが来た。

ショートカット。活発さを絵に描いたかの様な顔付き。青い上下のジャージ。年頃は俺と同じか、もしくは下ぐらいの女の子だ。個人的に……美少女の分類に入るんじゃないかと思う。……そんな感想を思っている場合じゃあいんだが……。まあ、何にせよ。いかにも体育会系で、はきはきしてそうな、俺の苦手なタイプっぽい。……どうでもいいが……。

どうしたものかと、剛鬼丸を警戒しながら女の子を見ると、目が合った。

視線が俺からオウキ、オウキから治療中の男性へと動き、驚き、困惑の表情を浮かべる女の子。

彼女が何かを言う前に、赤いドラゴンが彼女の前に守る様に降り立った。

どう言うわけか、その大きさが二メートルぐらいのサイズに縮んでいる。

これでドラゴンは女の子の……パートナーか？……だと確証を得たが、何か言わないと攻撃されそうな感じでドラゴンに威嚇されている。

女の子の腕に腕章はないが、こんな所に来るぐらいだから、男性と同じ役割か、それに近い人間なんだろう……多分。

だが、なんて言えばいいんだ？

正直、初めて会った女の子に話し掛ける度胸は無いし、経験も無い。何より何にも分かっていないこの状況が、それに拍車を掛けて

いる。それ所ではないのは分かってはいるが……。
何だか、さっきとは別の意味でピンチだ……かなり情けないな、
俺。

プロローグ16

俺が困って沈黙していると、ドラゴンの後ろから自転車から降りた女の子が出てきて、威嚇するドラゴンを手で制した。

途端に大人しくなるドラゴン。

「……私はいかいます。この子はコウリュウ。あなたはいかいますか？」

あかいは？ 赤井……美羽……か？……まあ、そんな事より、名乗られたら、名乗り返すのが礼儀だよな……。

「黒樹夜衣斗……こいつはオウキ」

俺の名乗りに困った顔になる赤井さん。

「夜衣斗さんとオウキですね……初めて聞く名前ですね。どちらも……もしかして、ここに引越してきたばかり……だったりしますか？」

とりあえず、頷く俺。

かなり困惑した表情になる赤井さん。

その時、何かを叩く強烈な音と、バキンと何かが割れる音がした。音のした方。剛鬼丸の方を見ると、剛鬼丸は自分を抑え付けている巨大な鱗に、拳を器用に叩き込んでいた。

一撃でひびが入ったと言う事は、あまり持ちそうにないな……。「とにかく、詳しい話は後で」

そう言うと、赤井さんは素早くコウリュウの背中に乗った。

「夜衣斗さん。オウキをどこまで使えますか？」

そう問われて首を傾げる俺。どこまでって言われてもな……。本当に困った顔になる赤井さん。

剛鬼丸の二撃目の音がした。鱗のひび割れが更に大きくなる。

「と、とにかく、私の後ろに乗ってください。一旦、逃げます……。」

プロローグ17

……まあ、逃げるのは賛成だが……あんな狭い場所に乗れって言われてもな……女の子の後ろつてのも……

「早く！」

剛鬼丸の三撃目の音と、赤井さんに怒鳴られた事により、俺は慌てて交流に駆け寄り背に乗った。

場所が狭くて、バランスが上手く取れない。

「肩に掴まって下さい！」

四撃目の音。殴るコツでもつかんだのか、剛鬼丸の攻撃の間隔が速くなっている。

これは、遠慮なんてしている場合じゃないな……。

俺は意を決して、赤井さんの両肩に手を置いた。

柔らかくて……困る。色々……なんだか近くににいるせいかいい匂……うお！何考えてんだ俺は！？これじゃあ、変態じゃないか！

場違いな葛藤で苦しむ自分に……近くに壁があったら頭をぶつきたい。

「夜衣斗さんは、オウキに避難の指示をして下さい。行きますよ。コウリュウ」

五撃目の音と共に、コウリュウは羽ばたき、低く宙に浮き、そのまま滑空して治療中の男性を両足で掴み、一気に上昇した。

あまりの急激なGと風圧に目を瞑る俺。

ほぼ一瞬と言える時間でそれは穏やかになり、目を開けると小さくなった町並みが見えた。

しかも、気が付くと足下のコウリュウが再び巨大になっていた。

どうやら、大きさを自在に変化させる事が出来る様だ。……もしかして、オウキも大きさを変化させたりできるんだらうか？まあ、今は大きくする必要は全くないが……。

「夜衣斗さん」

風音に負けない様に大声で赤井さんが話し掛けてきた。

「たむらさんを治療してるんですよ」

その赤井さんの質問に俺は頷いたが……よくよく考えると前を見ているから見えないな。と言うか、あの男性、たむらさんって言うのか。普通に考えて田村だよな。うん。

「一応……そうだが」

「大丈夫です。そう言う設定のものなら。どんな原理だったとしても、ちゃんと治療されます」

……なるほど、物理法則とかそんなの関係ないんだな。オウキとか……本当に、何なんだろう？

いつの間にかコウリユウと並んで飛んでいるオウキが視界に入り、改めてそんな疑問が浮かんだ。

「問題は、剛鬼丸ですね」

そう言っつて後ろを見る赤井さん。

つられて俺も後ろを見る。

丁度、そのタイミングで何かが下から上に……ジグザグにこちらに向かってくる光線が俺の視界に入った。

どうやら剛鬼丸は、直線限定で空を飛行できるようだ……空まで追ってくるとなると……逃げようがないじゃないか……。

プロローグ18

「コウリユウ。防御鱗十枚!」

赤井さんの命令に、コウリユウの背中中の鱗が次々とはがれ、ジグザグにこちらに向かってくる剛鬼丸に向かって一気に飛んで行き、剛鬼丸の動きを邪魔する様に動く。

鱗がはがれた場所を見ると、既に新たな鱗が生えている……。

「一度ああなると、例え宿り主が蘇生されても、元に戻る事はないんです」

宿り主?……つまり、寄生生物なわけだ。と言うか……俺の目論見は物の見事に外れたわけだ。……まあ、田村さんが助かる確率が上がっただけでも、良しとするべきだな。

「ですから、倒さなくちゃいけないんです……けど」

「……私のコウリユウと剛鬼丸って相性良くないんですよ」
……相性?……まあ、確かに、コウリユウが見た目通りのドラゴンとしての能力を使うなら、剛鬼丸と相性は良くなさそうだな。プレスとか、剛鬼丸との戦いを思い出せば、効きそうな感じは全くしない。……ん?と言う事は……。

「……あの、聞いてます?」

俺が無言で思考にふけっていると、赤井さんはいつの間にか振り返って俺に視線を向けて、困った顔をして声を掛けてきた。

結構顔が近かったので、思わずのけぞる俺。

俺の反応に、不思議そうな顔をする赤井さん。

とりあえず、落ち着け俺。

目を瞑り、息を吐く。……少し落ち着いた。

「もしかして、女の子が苦手だったりします?」

俺の様子にそう察した様だ。……まあ、それもあがるが、そもそも喋りが苦手なんだよな、俺。……本当に困った性分だよ。

とりあえず、頷く俺。

「っそ、そうですか……まあ、その、えっと……とりあえず」
対応に困った様に口籠る赤井さん。まあ、そりゃそうだ。

「今、他の人達は、はぐれの大量発生で動けません」

……と言ふ事は……やっぱり……。

「だから、私達だけで、あの剛鬼丸を倒さなくちゃいけないんです」

……そうなるよな………ってか、何この展開………漫画とか、アニメとかの展開だって、これ………。

プロローグ19

「ですから、今から私の知っている限りの剛鬼丸の能力を教えま
す。オウキでどうにか出来るか考えてくれませんか？……もしかし
たら、オウキの能力で剛鬼丸に対抗できるかもしれませんし」

……そう言われてもな……まあ、結構色々と考えてるから……ど
うにか出来るかもしれないが……正直、こう言う事態を俺が收拾す
ると言う想像は……出来ないな。都合のいい妄想なら嫌でも出て
くるんだが……。

俺がそうごちゃごちゃ考えていると、背後で強烈な閃光が生じた。
剛鬼丸があゝの必殺の閃光を放ったんだろう。

閃光に目を背ける赤井さん。

「防御鱗十枚」

赤井さんが再びコウリユウの鱗を飛ばした。

その際に、赤井さんの頭が少しふらついた。

「時間稼ぎもそう長く出来そうにありませんね……それに、こ
う何度も防いでいると、剛鬼丸の注意が下の町に向きかねませんし」
再び振り返った赤井さんは、真剣な表情で俺を見る。

「……夜衣斗さん。覚悟を決めて下さい。私達が剛鬼丸を倒さな
いと、確実に何の力も持っていない人達に被害が出てしまいます」
赤井さんの言葉に、俺は眉を顰めた。

ついさっきまで何の力も持ってなかった俺に言われてもな……

第一、他の人間がどうこうなるうが、知ったこっちゃないんだがな

……

と、そう思ったからだ。自分自身を酷い人間だと思わなくもない
が、現在の俺は『過去に色々あった』せいで、自分自身や家族以
の人間に対して何の感情も抱かなくなっている。だから、どうでも
いい……はずなんだが……。

……まあ、ここで逃げて、一生後悔する事は、間違いないだろ

うし………そんな重い物を俺は抱えたくない。

そんな自分自身に対する言い訳を心の中にする俺。……結局、どんな事があるうと、既に構築された『心の指向性』はなかなか変わらないんだろう。

………よし！

俺は目を瞑り、ゆっくりと息を吐いた。

「赤井さん……剛鬼丸の能力を教えてください」

プロローグ20

俺の決意の言葉に、赤井さんは俺が生まれて初めて初めて見る笑顔を見せた。

一瞬、その笑顔に、俺はこれまた生まれて初めて感じる感覚に襲われた……………ん？

「剛鬼丸の能力は、岩すら簡単に破壊する力・瞬時に再生する鎧・鎧の下にある強固な外骨格・周囲を消滅させる閃光・その閃光を利用した直線的な急加速と飛行です」

……………なるほど……………って、聞く前にどれも体感してるんだけど……………まあ、それ以上が無いと分かっただけでも、有益な情報だな……………オウキの銃弾を至近距離で直撃させてもびくともしなかった外骨格に、あの攻撃力と閃光……………必殺の閃光は、コウリュウの鱗で地面に押さえ付けられていた時に使用しなかった所からすると、鎧を全部開かなくては使えないんだろう……………いけるな……………まあ、上手いけばだが……………。

「美羽でいいです」

……………ん？

俺が思考にふけっていると、赤井さんが唐突にそんな事を言った。ちよつと考えて、その言葉を理解し、物凄く戸惑う俺。

その俺に赤井さんは、またあの笑顔を浮かべた。

「命懸けの戦いになるかもしれないのに、苗字で呼んで欲しくないんです……………それに、私はさっきから名前で呼んじゃってますし」

……………。

「嫌なら嫌でいいんですけど……………」

なんだかしゅんとした感じになった。

……………なんだか、名前で呼ばなくちゃいけない雰囲気だ。……………

……………あゝかなり照れ臭いんだが……………。

ため息一つ。

「……………美羽さん」

「はい」

嬉しそうに返事されても……………。

「……………今から言う通りにしてくれませんか？」

プロローグ 21

俺の話した作戦に、美羽さんは、特に疑問を口にする事も無く、

「はい。分かりました」

と言ってくれた。あの笑顔でだ。

ちよつとは否定されるかと思っただが……。

普通、初めて会った人間をここまで信じられるか？……この人

……馬鹿なんじゃ……まあ、こう言う馬鹿なら嫌いじゃない。むしろ、素直に好感を持てる……こんな事は、多分、生まれて初めてだ

……だから、俺も、その信頼に、絶対に答えなくちゃいけない。

だろ！オウキ！

俺の心の呼び掛けに、並行飛行しているオウキが力強く頷いた。

そして、俺は『準備』を始めた。

「お願い。コウリュウ！」

美羽さんの命令に、それまでばらばらに剛鬼丸をかく乱していた

コウリュウの防御鱗が、一斉に集まり、剛鬼丸の行く手を遮った。

その瞬間、剛鬼丸は全身の鎧を開いた。

「オウキ。セレクト。接着弾。狙撃銃」

俺の命令に、オウキの右脇が開き、そこから長大な狙撃銃が現れる。

必殺の閃光を放つ剛鬼丸。

全ての防御鱗が消滅し、剛鬼丸の鎧が閉まるその瞬間、「撃て！」、オウキは狙撃銃を撃った。

弾丸は狙い変わらず、閉まる鎧の隙間を通って、剛鬼丸の胸に着弾し、鎧は完全に閉まる。

剛鬼丸は弾丸が当たった事も気にせず、こちらに向かってくる。

「コウリュウ。防御鱗二十枚！」

美羽さんは、さっきの二倍の防御鱗を出し、剛鬼丸の進行を、必殺の閃光を使わせない程度の距離で、かく乱させる。

「夜衣斗さん。大丈夫ですか？」

心配そうに美羽さんが声を掛けてきたが、俺は返事をする事が出来なかった。

眠気とは違う意識の薄れに必死に耐えていたからだ。

「具現化のし過ぎですね。まだ、時間稼ぎは出来ますから、少し休んで下さい」

そう言う美羽さんも、どこか辛そうだ。

何とかしたくても、何ともしようもなく………歯痒かった。

プロローグ22

ふと思ったが、何か新しい現象や具現化を起こす度に、俺や美羽さんが疲弊していると言う事は、剛鬼丸も疲弊しているんだろうか？……見た感じ、疲弊してそうにはないな……そもそも、具現化の動源力（？）となっている田村さんから離れているのだから……時間が経てば、自然消滅するんじゃないか？……まあ、その間に、多大な被害が町とかに出そうだよな……会って間もないが、それを美羽さんが許すとは……到底思えない。何と云うか……どう見ても、美羽さんは、ヒーロー気質だろうし……うん。何にせよ、面倒な話だ。

俺はつい深い溜め息を吐いてしまった。

……そろそろいけそうだな。

「次の一手を仕掛けます」

「わかりました。お願いコウリュウ！」

美羽さんの命令に、一定の距離を保って剛鬼丸をかく乱していた防御鱗が、一斉に剛鬼丸へと密集し始める。

それを好機と見たのか、剛鬼丸のスピードが落ちる。

あの必殺の閃光を使う気なのだろう。

だが、鎧は開かなかった。

どこか戸惑った様な感じになる剛鬼丸。

どうやら、オウキに撃たせた接着弾が上手くいった様だ。まあ、

剛鬼丸のパワーから考えると、そう長い事持たないだろうが……

その一瞬で、十分！

「行けサーバント」

俺の言葉に、剛鬼丸の前で突然、巨大なアームが付き棒が組み込まれた円盤が出現した。その上には、半透明の円盤が、装甲を開いて浮いている。

仕掛ける前に準備しておいた二機の特殊サーバントだ。

半透明なサーバントは、自らのみならず、指定した空間・物体を不可視にするステルスサーバント。

そして、もう一つが、クラッシュアームCAサーバント。硬い相手に最適なサーバントだ。

剛鬼丸の胸にサーバントがアームで取り付く。

引き剥がそうとする剛鬼丸の両腕、両足、を密集した防御鱗が封じる。

流石の剛鬼丸も二十枚にも及ぶ防御鱗の力に身動きが取れなくなる。

「穿て！」

俺がそう言った瞬間、サーバントに組み込まれている棒の後部に爆発が起きた。

プロローグ23

CAサーバントに組み込まれた棒の正体は、爆発力で対象に撃ち込まれる『杭』。

剛鬼丸の様な高速で動き、硬い敵に対して考えたサーバント……だっただが……。

杭は少し進んで、止まってしまった。

「夜衣斗さん！止まっちゃいましたよ！？」

「オウキ！」

驚く美羽さんを取りあえず無視して、すぐさま次の手を打つ。

「セレクト。ブーストハンマー」

オウキの左脇が開き、長大な棒が飛び出す。

オウキが棒を両手で構えると同時に、棒の先端から液体が出て、瞬時に硬化、巨大な円柱になった。その円柱の片面には、ロケットで見る様なわかりやすいブースターが付いている。

「打ち込め！オウキ！」

命令と同時に、オウキは一気に近付き、ブーストハンマーを振り被る。

「ブースト！」

ブーストハンマーが振り下ろされるタイミングで、ブースター点火。目で追えないスピードで杭に叩き込んだ。

とてつもない金属音がしたが、杭は少ししか食い込まない。

二撃目。更に少し食い込むが、同時に防御鱗に封じられている剛鬼丸の両腕両足が少しずつ動き始める。

三撃目。四分の一ほど食い込むが、右腕の防御鱗が振り払われ、クラッシュアームサーバントが掴まれる。

四撃目。打ち込む前に、クラッシュアームがはがされる。だが、杭はしっかりと食い込んでいた為、杭だけ胸に残る。オウキはそこにブーストハンマーを振り下ろす。それでようやく二分の一まで杭

を打ち込めた。

五撃目。剛鬼丸を封じていた全ての防御鱗が振り払われ、オウキに殴り掛かる剛鬼丸。その放たれた拳を腹部に食らいながら、ブーストハンマーを剛鬼丸の頭頂部に叩き込んだ。

上下に吹き飛ぶ二体。

上に吹き飛んだオウキは、直に空中で停止した。だが、その腹部には、はっきりと分かるほどに拳型に凹んでいる。

下に吹き飛んだ剛鬼丸は、いつの間にか海岸に出ていた為、海に落ち、大きな水柱を上げた。

ブーストも具現化現象だったのか、意識がもうろうとし始め、俺は美羽さんの背中にもたれかかってしまう。

「大丈夫ですか！夜衣斗さん！？」

美羽さんは驚き、心配そうに声を掛けてくるが、俺はそれに返事が出来ない。

このまま意識を失ってしまいたいが……そうもいかなかった。海面から、再び水柱が上がったからだ。

プロローグ24

海面から飛び出した剛鬼丸は、コウリユウの進行方向上に現れた。その胸には、しっかりと杭が食い込んでいる。

一瞬の間。

剛鬼丸は自然落下し始める直前で、一気にコウリユウの眼前へと接近した。

コウリユウは殴られる寸前に、防御鱗を展開し、拳を防ぐ。

だが、その一撃で防御鱗は粉碎されてしまう。

打撃にスピードが乗っているからだろうが……威力あり過ぎ！

防御鱗を粉碎した剛鬼丸は、そのままこちらを攻撃せず、かき消える。

周囲に光線が走っているのが見えるから、コウリユウの周囲を回っているのだろう。

その為、コウリユウは逃げる事が出来ず、残りの防御鱗を防御に展開するしかなかった。

「これって、剛鬼丸の必勝パターンですよ！」

美羽さんがそう言うと共に、次々と防御鱗が破壊され始める。

「夜衣斗さん……」

不安そうに俺を見る美羽さん。

俺はまだそれに応えられる状況ではなく、必死に意識を保とうと足掻いていた。

緊張の沈黙。

防御鱗が壊れる音と、コウリユウの羽ばたく音。

オウキは、剛鬼丸のあまりのスピードに手も足も出ない。

ふっと何かを感じ、正面を見ると、剛鬼丸がコウリユウの背に降り立った。

いつの間にか、全ての防御鱗が破壊されている。

逃げれる距離でも、場所でもなく、美羽さんが唾を飲むのが聞こ

えた。

拳を振り上げる剛鬼丸。

振り下ろされるその拳は、俺達にはなく、コウリュウの背に突き刺さる。

コウリュウが凄まじい声を上げ、暴れ、振り飛ばされる美羽さんと俺。

振り飛ばされる直前に、俺は美羽さんを引き寄せ、抱き締めていたので、一緒に落下する。

抱き締めた瞬間、驚かれた気配があつたが、今はそんな事を気に出来る状態じゃないし、場合でもない。

俺がオウキに命令する前に、オウキは落下する俺達を優しく受け止める。

まだ意識がもうろうとする中、上を見上げると、コウリュウがいきなり霧散した。

反射的に美羽さんを見ると、緊迫した顔をしてはいるが、平気そうだ。

「夜衣斗さん」

ずっと上を見ていた美羽さんの声に、俺も再び上を見上げると、剛鬼丸が自然落下でこちらに向かっていた。

ぎゅっと俺の服を掴む美羽さん。

俺はそれに力無い笑みを浮かべた。

美羽さんはコウリュウを失い。

俺は次の装備を出せるほど意識が回復していない。

真上に迫っている剛鬼丸。

威力を考えて、一撃で即死だろう。

だが、

それでも、

俺は、

勝利を確信していた。

「CAサーバント。ブレイク！」

プロローグ25

気が付くと、俺はベットの上で寝ていた。

上半身を起こし、周囲を見回すと、いくつもの段ボールが置かれている小部屋だった。

……見覚えのある段ボールだ。と言うか、先に叔母の家に送った俺の荷物だな。

って事は、ここは叔母の家か？

……いつの間に叔母の家に来たんだ俺？

そう疑問が心に浮かんだ時、ぞわとした感覚と共に、思い出した。骸骨犬や剛鬼丸の事を、だ。

コウリュウウから落とされ、剛鬼丸の必殺の拳が叩き込まれる直前、俺はC Aサーバントの杭に仕掛けられた『爆薬』を、起爆させた。

外が堅くても、中が堅いとは限らない。それに、あれだけ硬い外皮内で爆発させれば、爆発力の逃げ場が無く、体内を破壊しつくす。考えて、その仕掛けがある杭をセレクトしていた。

狙いは、見事に上手く行った。

起爆の後、一瞬の間の後に、剛鬼丸は粉々に弾け飛んだ。

その剛鬼丸の破片を、起爆直前で出したシールドサーバントで防ぎ、破片となって落下する剛鬼丸がすうっと消えるのを確認。

その後、ヒーラーサーバントにより空中に浮いていた田村さんを回収して、砂浜に降り立ち、そこで気が抜けたのか、俺は意識を失った。

はつきり思い出せる。……っが、思い出せば、思い出すほど、何だか悪い夢でも見ていた様な気がしてくる。

……夢落ちってことはないよな……。

とりあえず、全身を確認するが、当然、どこも怪我していない。しいて言えば、足が筋肉痛っぽく、何故か尻が少し痛い。

……試してみるか。

そう思ったが……考えてみると、どう試せばいいかわからず……
……とりあえず、俺は小さな声で「オウキ」と言ってみた。

何も起こらない。

何だか恥ずかしくなった。

……本当に夢落ちか？

そう思って、再びベットに寝転がると、上の方の視界に、何かが入った。

驚き、慌てて上半身を起こし、振り返ると、そこには半透明のオウキがいた。

俺が目を見開き、固まっていると。オウキは首を傾げる。

なんか用か？と言いたげな感じだ。

「……呼んだだけ……」

何だか子供の悪戯みたいな事しか言えなかったが、オウキはそれで頷き、すうつと消えた。

……夢じゃないし……まあ、そりゃそうか。

と言うか、今のなんだ？

って、具現化する前の状態って事か？……と言うか、そもそもなんなんだ本当に。

そう考えても答えが出ない事をぐるぐる考えていると、部屋のドアがノックされた。

叔母さんか？

電話では何度か話しているが、直接会ったことがないで、動揺と緊張が走る。

「つど、どうぞ」

と、何とかその声を絞り出す。

「お邪魔します」

そう言って、恐る恐る入ってきたのは、美羽さんだった。

プロローグ26(終)

「気分はどうですか？」

そう言つて、美羽さんは近くにあつた机の椅子を引つ張り出して、俺の近くに座つた。

「これ」

手に持っていたコンビニ袋を俺の近くに置く美羽さん。

中にはおにぎり・菓子パン・ジュースが入つてる。

「食べてください。昨日からずっと寝てたから、お腹空いてません？」

……言われてみれば、確かに妙にお腹が空いている……つて、日が変わつてんの！

「武霊を限界まで具現化すると、深い眠りに陥つちゃうんです。人によつては、一カ月以上目が覚めなくなる人もいますから……とても心配したんですよ」

……そんな大事な事を今更言われてもな……

「これからは限界まで具現化しないように、気を付けて下さいね
これからつて……あんな事がしょつちゆう起きてたまるかつてんだ！……いや？起こるのか？」

「あ！梅と豚キムチは、私のですから」

……？……ああ！おにぎりの事か……お金、後で返した方がい
いよな。

「これを買つたお金、春子さんに貰つたお金ですから、遠慮しな
くでいいですよ」

……なんだか、読まれてるな……俺つてそんなに考えが読みや
すい奴なのか？……考えてみれば、ここに三年ぐらいまともに他
人と向かい合つたことがないような……春子さんつて誰だ？……

……ああ！叔母さんの名前だ。黒樹春子。これからお世話になる
この家の家主。その名前がすんなり出たという事は、この場にいる

事からしても、知り合いなのだろう。妙な偶然だ。

「ちなみに、私の家はこの隣です」
「すげえ偶然。」

「部屋も丁度、向かいだったりします」

「……ラブコメか？」

「何だかラブコメみたいですよね」

同じ感想を抱いたらしい。そして、ちょっと考えて、からかう様に、

「覗かないで下さいね」

と楽しそうに言った。

覗くか！漫画じゃあるまいし………煩惱滅却！煩惱滅却！

他の事を考えないと、と言うか他の話題にしないと………って、
そつだ！田村さんはどうなったんだ？

「田村さんの事ですけど」

俺の様子の変化に気付いたのか、俺の知りたい話題に変えてくれる美羽さん。

「さつき自警団の人から電話があつて、身体の方が完治している
そつです」

「身体の方？」

「剛鬼丸がはぐれ化しちゃいましたから………多分、一カ月は目を
覚まさないじゃないんでしょうか？」

「………」

「気にしないで下さいね。油断した田村さんがいけないんですか

ら………」

「………」

「一体、何なんだ？」

「え？」

「オウキとか、コウリユウとか………」

俺の問いに、美羽さんは、「ん〜」と少し悩み、ぽつりと言った。

「『武装守護霊』」

武装……守護霊？

唐突に美羽さんの背後から半透明のコウリユウが現れ、美羽さんの頬にすり寄る。

美羽さんは、すり寄せるコウリユウを撫でながら、

「本当に霊なのは、わかってないですけど……こつやって背後から現れる所から、守護霊。その多くが攻撃的な能力を有しているから、武装。合わせて武装守護霊。通称、『武霊』。『星波町限定の精神寄生生命体』です」

武装守護霊プロローグ終了

プロローグ26（終）（後書き）

これでプロローグは終わりです。

次からは第一章『武霊のある町』が始まります。

プロローグに引き続き、読んで頂けると幸いです。

第一章『武霊のある町』 1

????

欲しい。

欲しい。

全てが欲しい。

世界の全てが欲しい。

あれも欲しい。

これも欲しい。

それも欲しい。

……でも、手に入らない。

だって、私は、私は、弱い人間。

ただ、ただ、奪われるだけの、弱い人間。

……だから、私は、欲しかった。

奪われる弱い人間じゃなくて、奪う強い人間になる為の力を、欲
しかった。

……そう願いつつ、私は、私じゃなくなった。

願いは叶わないまま、私は奪う人間になった。

奪う弱い人間に、なった。

だから、私は、奪われる。

全てを奪われる。

……それが、私の末路。

それが、私の運命。

……そうなるはずだった。

奇跡が起きるまでは……

夜衣斗

「もう！心配したんだからね！」

そう言って、いきなり抱き付いてくる叔母さん。

「……………今、失礼なこと考えたでしょ？お・ね・え・さん。だからね」

……………勘の良い人だな。

俺が星波町に来て、骸骨犬や剛鬼丸に襲われた翌日の事。

美羽さんに用意してもらった朝食を食べている所を、ある意味、襲われたわけだ。

まあ、心配してたのは分かる。なんせ、あれだけの事があってから、ずっと寝ていたんだからな……………まだよく知りはないが、中には一ヶ月以上起きない人もいるらしいし……………ちよつとぞつとするな。

まあ、何にせよ。

「離れてくれませんか？」

出来るだけ冷静に言う。

「どうして？感動の初対面なのに……………」

いや、そうしゅんとされても……………。

「……………ははん？」

何かに気付き、唐突にニヤリと笑うお……………お姉さん。

多分、俺の顔は真っ赤になっていたのだろう。なんせ……………当たってるからな。って、余計に強く抱きつかないで……………。

「春子さん。夜衣斗さんが、困ってるじゃないですか」

俺の困り様を見かねたのか、苦笑しながら止める美羽さん。

ちなみに、お……………お姉さんは、俺の母親のかなり歳の離れた妹で、まだ二十代で許容範……………何考えてんだか俺は……………こんなんでやっていけるのか俺は……………俺を預かったお姉さん……………春子さんでいいか……………春子さんの考えも分からないが、両親の考えも全く分からない。いな……………なお、春子さんの職業は漫画家。少女漫画を描いているらしいが……………そっち方面はあまり興味無いので、俺は見た事がない。話によると、そこそこ売れているらしい。まあ、今いる二階建ての一軒家を借りているぐらいなのだから、それは間違いないだろう。

「困ってるからしてるんじゃない」

勘弁して。

「は・る・こ・さん」

ちよつと怒気の含んだ美羽さんの言葉に、さつと離れる春子さん。……どう言う関係なんだ？ただのお隣さんって感じじゃないな。「はいはい……ん〜とりあえず、美羽ちゃん。後は任しいい？まだ、原稿終わってないのよ」

俺から離れた春子さんは、少し悩んでそんな事を言った。……何を任せるんだ？

「はい。仕事、頑張ってくださいね」

「勿論よ。じゃあね、夜衣斗ちゃん。日が暮れる前には、帰って来てね」

そう言つて、春子さんはふらふらしながら部屋から出て行つた。

……徹夜でもしてたんだろうか？通りでテンションが妙に高かつたわけだ……と言つか。俺が出かけるありきで話が進んでないか？

「夜衣斗さん。食べ終わったら、町の事、私が案内しますね」

案内？

「気になる事があるでしょ？色々」と

……確かに、知りたい事は色々あるな。

「それに、色々と手続きしなくちゃいけないですから」

……転入届も転居届は既に済んでんじゃなかったけな？

「勘違いしないで下さいね。しなくちゃいけないのは、『武霊使』としての手続きですから」

……武霊使い？……言葉からして、武霊を具現化できる人間の事か？……つまり、俺はこれからそう呼ばれるって事かなんだか、色々とめんどくさい事になつたな……

第一章『武霊のある町』2

美羽

運命という言葉に憧れは抱いても、実際に運命に出会うなんて絶対にならないって思ってた。

でも、私は運命に出会った。

黒樹くろぎ夜衣やいと斗。

町に来てたつた一日で武霊を具現化させて、あの剛鬼丸を倒した人。

その場にいたのを、運命と言わないで、他になんて呼ぶのか、私は知らない。

だから、顔がつついっつい笑みを浮かべちゃってしかたがない。

その夜衣斗さんは、歩く私の後ろを文句も言わず、無言で付いて来てくれている。

武霊が『出るようになってから』の町の慣習で、『新しい住人が引越してきた場合、お隣もしくはご近所の人が、この特殊な町の事を案内しなくてはいけない』事になってる。

そうしないと突然のはぐれの発生とかに対応できなくて、怪我を、悪くて死んでしまう事もあったからなんだけど……夜衣斗さんは既にはぐれの発生を体験してるし、武霊使いになっちゃってるから……まあ、それでも町の案内は必要だよな。まだまだ夜衣斗さんが知らない事とか、疑問に思ってる事とかが沢山あるだろうし……でも……その割には、何にも聞かないんだよね。夜衣斗さん。普通はもっと質問詰めになったりするんだけど……そう言えば、女の子が苦手なんだっけ？……聞きづらいのかな？

私が歩調を緩めて夜衣斗さんの隣に並ぶと、夜衣斗さんは少し動揺した感じになった。

夜衣斗さんって、前髪で目を隠してるけど、感情とか、ばればれなんだよね……うん。本当に女の子が苦手なんだ……昨日も思っ

たけど、どうしよう？……まあ、考えても仕方がないつか。普通に接しよう。うん。

考えている間、ずっと夜衣斗さんの顔を見ていたみたいで、夜衣斗さんはふいつと視線を風景に向けた。

……それにしても、ちよっともつたいないな。夜衣斗さんって、前髪をちゃんとすれば、結構いい顔だと思っただけ。

私は昨日見た夜衣斗さんの素顔を思い出しながら、素直な感想を抱いた。

昨日、コウリユウに乗っていた時、夜衣斗さんの前髪が風圧で後ろに流れていたの、その時見たんだけど……うん。昨日会ったばかりの私が前髪をなんとかしなさいって言うのは変だよね。うん。

……なんだか、一言も会話がないまま目的地に着いちゃった。

目的地と言っても、町境のトンネルなんだけどね。

「外から来た人は、まず最初にここで『ある現象』を『体感』してもらおう事になってるんです」

私の説明に、多分、夜衣斗さんは眉を顰めた。

「疑問に思ってますよね？町の外で『武霊の事が一切知られていない』事を」

第一章『武霊のある町』 3

夜衣斗

星波町の外に武霊の事が一切知られていない。

確かに、それは最大の疑問と言える。

あれだけ『派手な事』が起きたのに、ニュースにすらなっていない。普通なら日本中大騒ぎになるはずだ。

しかも、美羽さんはそれがさも『日常』の様に振舞っている。

つまり、星波町には、武霊関係の情報が『外に出ない何か』があるっと言う事だ。

そして、その何かが、見羽さんが最初に案内してくれているこのトンネルにある。……………らしい。

見た目は、何の変哲もないトンネルに見える。と言う事は、トンネルではなく、『町境』に何かがあるってことだろうか？

……………それにしても、トンネルに近付くにつれ、物凄く『嫌な気配』を感じるな……………この感じ、気のせいって気がしないな。俺はどちらかと言うと、鈍感な方だと思っただが……………。

美羽さんは、特に何の説明もなくトンネルに入った。

仕方なく、俺も後に続く。

「はい。ストップ」

そう言っただけで美羽さんはトンネルの中ほどで止まった。

疑問に眉を顰める前に、トンネルの壁に『赤い太い線』が引かれている事に気付いた。

なんだか、ここから先に行くのは『危険』。とても言いたい感じにだ。

「コウリュウ」

美羽さんの呼び掛けに、半透明のコウリュウが美羽さんの背後に現れ、急に縮んで、具現化した。

ちっちゃい。手乗りドラゴンだ……………なんだか可愛く見える。

……………それにしても、大きくなったり、小さくなったり……………具現化に加減が出来ると言う事だろうか？……………そう言えば、今更の疑問だが、オウキを具現化した時、どうやって具現化させたんだ？……………まあ、追々教えて貰おう。

手乗りコウリユウはパタパタと宙を飛び、トンネルの赤線を越えようと……………唐突にコウリユウが消えた。

俺が驚いていると、美羽さんの背後に、再び半透明のコウリユウが現れる。

「武霊は、星波町を離れると、こうやって具現化が強制解除されちゃうです。しかも、この半透明の状態の時には、同じ武霊使いにしか見えないんです」

……………なるほど、だから、星波町限定なわけだ。……………だが、それだけじゃ、町の外に武霊の事が知られていない理由にはならないな。

「勿論、それだけじゃないですよ。コウリユウ」
再び手乗りコウリユウを具現化させる美羽さん。

今度は赤い線とは反対方向に少し飛び、俺の頭の上に乗った。

……………。

「はい。チーズ」

いつの間にか取り出していた携帯のカメラで、俺とコウリユウを取る美羽さん。

……………何してんの？

「写ってますよね？」

そう言って、俺に携帯の画面を見せる。

当然、かわいいドラゴンと、相変わらず冴えない俺が写っている。「これを、こうすると」

携帯を赤い線の上に一瞬だけ超えさせ、美羽さんは再び俺に携帯の画面を見せた。

「こうなります」

その携帯の画面には、『何も写っていないかった』。

第一章『武霊のある町』 4

美羽

毎回思う事だけど、星波町の事を外から来た人に説明するのは面白い。

私達にはほとんど常識になっている事だから、特に驚かないんだけど……。

夜衣斗さんの反応は、特に面白いなあ。

本当にわかりやすい人だ。いちいち反応してくれるし。

ちよつとおかしい。

夜衣斗

なんだか笑われている。

なぜ笑われているか分からないが……なあ、悪意ある笑じゃないのは分かる。だからか、特に嫌な気はしない。……俺が今まで向けられてきた笑いは、ほとんどが『悪意あるもの』だったから……何と言っか、こそばゆい。

「ごめんなさい。夜衣斗さんが、あまりにも素直に驚いてくれるから、つい」

くすくすと笑いながら、そう謝罪してくれる美羽さん。

何とも言えず、俺は後頭部を搔くしかなかった。

少し揺れた為か、俺の頭に乗っていた手乗りコウリユウが少し羽ばたくのを感じる。

ひとしきり笑った美羽さんは、俺に携帯を差し出した。

「携帯の中に、さっき撮った写真が無いか確認してください」

そう言われて、俺はちよつと戸惑った。

人の携帯、しかも、女の子の携帯を本人の目の前で操作する事に、かなりの抵抗を感じたからだ。

まあ、だからと言って、このまま確認しない訳にもいかないよな

……話が進まないし。

意を決して、携帯を受け取り、中のデータを確認する。

猫やら、見知らぬ女の子やら、叔母……春子さんやら、花などの写真がデータがあるが、さっき撮られた写真データがどこにもなかった。

つまり、

「武霊に関するあらゆる情報は、『星波町を出ると、消えてしま
う』んです」

と言う事だよな。

……まあ、武霊なんてものが存在する町だ。何が起こっても不思議じゃないと言えは不思議じゃないが……。

「当然、人の記憶も消えます。と言っても、記憶の場合は、町に戻ると戻るんですけどね。私達は、この現象の事を『忘却現象』ってまんま名前ですんでいます」

……忘却現象ね……なるほど、確かにこれじゃあ町の外に武霊の情報は一切伝わっていないのには頷ける。……だが、そうになると、かなりの『歪み』がこの町にある事になるな……。

「こんな現象が起こる様になったのは、武霊が星波町も現れ始めたのと同じ時期。『十年前』からなんです」

十年前？

第一章『武霊のある町』 5

美羽

十年前、私が七歳の時、星波町に突然武霊が現れるようになった。何が原因で、どうして現れたのか、十年たった今でも分かって無くて……色々な噂や仮説が出ては消えてる。

政府の陰謀だとか、悪の秘密結社の実験だとか、何にも証拠らしい証拠がないから、どれもありえなく聞こえるし、ありえる様な気がする。私としては、人の意志が介入しているような感じはしないから、仮説の中で最も有力とされている『隕石付着説』なんじゃないかなあって思ってる。

昔落ちてきた隕石に、武霊がくっ付いていて、それが十年前に活動し始めたと言う説。

勿論、今まで見つかった隕石は調べられているけど、何にも隕石説を証明する証拠は出てない。

だから、まだ仮説なんだけど……それ以外に原因らしい原因もなくて、一番可能性があるって私は思ってる。

でも、今は、ほとんどの町の人達は、原因なんて、もうどうでもよくなってるみたい。

町の人達は、分からないそんな事より、現実的な問題の方が重要なんだと思う。

だって、星波町には、『星波町にしかない問題』がいくつもあるから……。

ひとつは、武装守護霊が人の中に現れる様になると同時に現れるようになった『はぐれ武装守護霊』。通称、『はぐれ』。

彼らは、人に寄生せず、単独で具現化し、具現化の維持の為に人を襲う上に、一週間前後のサイクルで必ず出現する。だから、その度に、町の人達は生活を邪魔され、時には命の危機にさらされる。

でも、確かに、はぐれは、危険な存在だけど、体制も整っている

今は、気を付けていれば、滅多な事で危険な目に遭わなくなってる。それに、はぐれは、『無機物に囲まれている人を知覚できない』みたいで、建物の中に入れば、襲われる事はない。だから、星波町の人は、警報が鳴ったら、すぐに近くの建物・民家に避難するようにしている。

……そう言えば、昨日のはぐれは異常だったなあ……『連日で出現するなんて今までなかった』んだけどな……そのせいで、町の人や自警団の人に『治療系の武霊使い』が治療しきれないほどの多くの怪我人が出たって……幸い、誰も死んでいないからよかったんだけど……んゝまあ、許容範囲内なのかな？……とりあえず。

もう一つは、現在、最も星波町住人を悩ませ、恐れさせている『犯罪武霊使い』。

犯罪行為を起こす武霊使いは後を絶たなくて、星波町警察や自警団の人達だけでは対応しきれしていない。その上に、町の二つの施設が不法占拠されて、迂闊に近付けなくなってる。

「だから、町の『山側になる廃校』と、『海側にある廃工場』には、近付いちゃ駄目ですよ。夜衣斗さん？」

そう説明すると、夜衣斗さんは素直に頷いてくれた。

第一章『武霊のある町』 6

???

その女は姿鏡の前で長い黒髪をとかしながら、機嫌よく鼻歌を歌っていた。

でたらめで、調子の外れたその鼻歌は、どこかで聞いた事があるヒーローアニメの主題歌だった。が、その鼻歌にどこか狂気じみたものがあり、聞く者がいたら、そのアニメとはかけ離れたイメージを抱かせただろう。

この女はおかしい、近付くと危険、狂ってる。

そんなイメージを。

彼女のいる場所は、木々で作られた廃校の元保険室。

残された姿鏡で、彼女は外へ行く準備をしていた。

なんの服も着ない状態だ。

姿鏡に映る彼女の裸体は異様に白く、その白さが彼女の狂気さを更に増長させている。

彼女の背後には寢床として使っているであろうベットが一つあり、そのベットの上にはシーツにくるまって寝ている誰かがいた。

シーツにくるまって寝ている誰かが、もそもそと動く。

鏡越しにその動きを見た彼女は、くすりと笑う。

その間だけ、何故か彼女から狂気の気配が消えた。だが、直に元に戻り、その濁った眼を姿鏡の上に張り付けてある写真に向けた。

その写真には、『黒樹夜衣斗の武霊オウキが写っていた』。

彼女はその写真を愛おしそうに写真を撫でた。

「あは。待っててね。私の武霊ちゃん」

夜衣斗

武霊が現れ始めてから十年も経てば、国の支援がなくてもそれなりの体制は立てられるらしく、星波町にはこの町独自の組織がいく

つかあるらしい。

その一つが、『星波町自警団』。

星波町の有志（大人限定）の武霊使いによって構成されている集団で、主に星波町で起こる武霊事件やはぐれの発生の対処をしているらしい。

美羽さん曰く、何か武霊に関するトラブルがあったら、彼らに相談すると大概は解決するそうだが……田村さんの件や、犯罪武霊使いを放置している事から考えると、それほど頼りにならないんじゃないかと思える。

まあ、危ない所や人に近付かなければ、そうそうとトラブルに巻き込まれる事も無いだろう。

……多分。

つで、現在、俺は星波町役場に来ている。

星波町独自の制度の一つに、武霊使いになった者は、その武霊と共に武霊使いとして登録しなくてはいけないらしく、写真撮られたり、あそここうだ質問させられている。

美羽さん曰く、犯罪の予防とはぐれの大量発生などの、自警団だけでは手に余る事態が起きた時の為の登録らしい。

……それってつまり、昨日みたいなのが起こる度に、呼び出されて戦わなくちゃいけないって事か……まあ、戦うのは俺じゃないから……いや、よくはないな……酷く面倒な話だ。

つい深い溜め息が漏れる。

「大丈夫ですよ。はぐれの大量発生なんて、滅多に起きませんし……なにより、オウキは物凄く強いじゃないですか」

溜め息を聞いた美羽さんが、溜め息の内容を察して、そう言ったが……そう言う問題じゃないんだよな……昨日は、なんだかその場のノリと勢いでうまく体と頭が動いたけれど、普段の俺は、ハッキリ言っつて『へたれ』だ。同じ様な場面にまた遭遇して、同じ様に戦えるとは、とても思えないんだよな……都合のいい妄想は出来ても、現実的な想像は出来ない。逃げ出し、恐怖で身動きのできない

自分なら予想は出来るが……なににせよ。見羽さんは、どうも俺を
買い被っているようだ。昨日の様な『まぐれ』。そうそう都合よく
起きやしないって言うのに……俺は少なくとも平凡以下の男だぜ
？

第一章『武霊のある町』 7

美羽

普通、武霊使いになったばかりの人は、武霊を具現化させるのに手間取ったり、上手く出来なかつたりする。

現に私も、最初の頃はなかなか上手くコウリュウを具現化出来なくって、武霊使い登録にかなり手間取った。

……でも、夜衣斗さんは特に苦も無く、まるで何年も武霊使いをしていた人の様に、あっさりとオウキを具現化させた。

それに周囲が驚いている事に、夜衣斗さんは気付いていないようだけど……これって結構すごい事なんだけどなあ……。

そもそも、夜衣斗さんは色々武霊使いになる為の条件とか過程とかを無視したりしている。

本当は、武霊使いになる為には、

- 一、星波町に一ヶ月以上住むか通っている。
- 二、明確な心に刻まれた何かのイメージを持っている。
- 三、自分の武霊を正しく認識する。
- 四、自身が武霊を受け入れる。
- 五、自分の武霊に拒絶されない。

と言う条件と過程が必要で、そのどれが欠けても、武霊使いにはなれないって言われてた。

だけど……夜衣斗さんは、最初の条件を無視している上に、結構時間が掛る三とか、四とかも……あっさりクリアしているし……。

そう考えると、本当に運命の人なのかも、って思える。

私にとっても、星波町にとっても。

……夜衣斗さんは、何か……『特別な存在』なのかな？

夜衣斗

武霊使い登録の時、オウキの具現化は拍子抜けするほど簡単に出

来た。

オウキの武装を新たに出すみたい、オウキの姿を明確にかつ強くイメージして、名前を呼んだ。

それだけで、軽い意識の薄れと共に、オウキは俺の背後から現れ、具現化した。

その時、何故か、役場にいた人達のざわつきが少し変化した気がした様な……。

昨日、派手に空中線をしてたから、オウキが有名になってるかもと、事前に美羽さんに言われてたので、それでざわついたのかと思っただが……どうやら、違うらしい。

役所から出てしばらくしてからしてくれた美羽さんの説明によると、どうやら俺はかなりイレギュラーな経緯で武霊使いになったらしい。

……どうも、話によると……普通の武霊使いが、自分の武霊を初めて認識するのは、大体が『自分の命が危険にさらされ、寄生者を守る為に勝手に具現化する時』……らしい。

命の危機にさらされたのは確かだが……話の感じからして、その時に俺の様に『誰か』が接触してくる事は普通はないんだろう。

だとすると、俺のイレギュラーの原因は、あのサヤと名乗った……なんだろうな？あの人、いや、人じゃないのは、多分、間違いなிடらるうが……幽霊じゃないのかも言ってたしな……とにかく、サヤが原因なのは間違い無い。

……それにしても……運命が変えられたって言っていた場所は、間違いなく星波町以外の場所だった。……だとすると、武霊は星波町限定の精神寄生体なのだから、俺はその場所で、『武霊以外の超常的な何か』をされたって事なんだろうか？……まあ、サヤの言葉を額面通り受け取ればの話だが……。

「っで、ここが星波学園に続く学園大橋です……って、聞いてます？夜衣斗さん？」

役所での登録を終えた後、美羽さんは星波町のあらゆる所を案内

してくれている。デパートやら、商店街やら、公園やら、隕石博物館やら、図書館やら、スポーツセンターやら、色々だ。

正直、普段あまり外出しない俺は……かなり疲れていた。

……考えてみれば、昨日、あんな事があつたと言うのに、呑気に町の案内を受けている、している場合なんだろうか？……まあ、美羽さんに見れば、あれは日常なんだろうか……こんな町で、俺はやっていけるんだろうか？

「おい。夜衣斗さん」

気が付くと、俺の目の前に美羽さんの顔があつた。

第一章『武霊のある町』 8

美羽

あまりにも反応がなかったので、近付いて大声で呼びかけたら、夜衣斗さんは思いつきり仰け反った。

……面白い。

顔を近付けたくらいで、こんな反応をする人……私の周りにはいないなあ。

なんて思いながら、私は大橋の向こうに見える星波学園を指差した。

「あれが星波学園です。電車からも少し見えたでしょうけど……すごいでしょ？」

小中高大のそれぞれの校舎に、それぞれのグラウンド、各部活動・サークルに必要な設備、学生寮など、普通の学校だとありえない光景が、橋の先にはある。

でも、設備だけ見てもすごい学校なんだけど、町の外にはその凄さは伝わっていないし、武霊に関係したごたごたのせいで、生徒も全国に知られるほどの活躍が出来ていない。去年の野球部なんて地区予選落ち。他の部活も、みんなそんな感じなんだよね……だって、武霊使いの密集度が『最も高い』のが、星波学園だから。

それを夜衣斗さんに言うと、夜衣斗さんは物凄く嫌そうな感じになった。

夜衣斗

ちょっと考えれば、気付く事だった。

武霊使いになる過程と条件が最も揃いやすい場所をだ。

そう、それは学校。そして、星波町で唯一ある学校が、星波学園。俺が明日から通う学校だ。

……なんだか、胃がきりきりしてきた。

役場の自意識過剰な所はあっただろうが、星波学園では間違いない注目を集めるだろう。なんせ、武霊使いが大勢いる所だ。昨日のはぐれ発生に対応した武霊使いが、あの空中線を目撃していないはずがないだろうし……色々嫌な想像ばかり出てくるな……家の帰りた。

「大丈夫ですよ。いざとなったら、私が夜衣斗さんを守ってあげます」

いざとなったら……やっぱり武霊に関するトラブルが絶えない場所なのか。

「だって、武霊使いとしては、私が先輩ですからね」

そりゃそうだ。昨日は武霊の相性の問題があったからコウリュウの強さは正確には分からないが、どう見ても、物凄く強そうだ。

「じゃあ、明日から学校でもよろしくです。夜衣斗先輩」

……先輩？

「高二だって、春子さんに聞きましたよ。私、高一なんです。だから、先輩って事で」

……名前で呼ばれるのも居心地が悪かったが、今更先輩って呼ばれ始めるのも更に居心地が悪い。

「……出来れば、先輩って言うのは……」

「はい。勿論、そのつもりです」

先輩呼びを止めて貰おうとしたら、そう即答された。

……からかわれているんだろうか？……まあ、悪い気はしないが。俺は溜め息を吐き、明日から通う学園を見た。

規模がでつかいせいか……なんだかやたらと異質に感じる。

「じゃあ。今度は私のとっておきの場」

不意の突風が起こり、美羽さんの言葉が不自然に途切れた。

何事かと隣を見ると、美羽さんがいなくなっている。

どこに行ったのか探す前に、海の方で何かが落ちる音がした。

第一章『武霊のある町』9

夜衣斗

海の方に視線を向けると、コウリュウが美羽さんをその両手に抱えて海から飛び出してきた。

何が起こったのか思考する前に、オウキが勝手に具現化する。

意識が一瞬かすんだので、文句でも言おう背後を見ると、オウキが空を見ていたので、反射的に同じ方向に視線を向けた。

空に耳を広げて飛ぶ巨大な機械の象がいた。

俺は思わず目を瞬かせた。

その機械の像は、子供の頃に見ていたアニメの主人公達が乗っていたロボットと全く同じ姿形だったからだ。

……どう考えても、あれは武霊だな。

と言う事は、美羽さんはあれに襲われたのか？なんでだ？警報がなかったから、あれははぐれ武霊じゃない。……つまり……。

「みつけたあ」

思考に没頭していると、右側から若い女の声が出た。

その声を聞いた時、どう言うわけか、俺の背筋が寒くなる。

理由が分からず、声のした方に視線を向けると……そこには、異様に肌が白く、髪の毛の長い女がいた。

そして、背筋が寒くなった理由が分かった。

「私のお、かわいいかわいい武霊ちゃん」

その声と目に、俺でも分かるほどの『狂気』が宿っているからだ。

美羽

気が付いた時、一瞬で具現化したコウリュウが私を包む様に覆い被さる。

その行動の意味を理解するより早く、後ろから凄い衝撃が走り、

一瞬の浮遊感の後、海に落ちた。

少し海水を飲んだけど、溺れる前にコウリュウが私を抱えて空へと飛び出してくれた。

せき込みながら、周囲を見回すと、コウリュウの前に巨大な機械の像が現れた。

ぞつとした。

その武霊は、キゾウと名付けられた武霊で、私が……いえ、星波町の武霊使いが、『最も会いたくない犯罪武霊使いの片割れの武霊』

山側にある廃校を不法占拠している『最悪の』犯罪武霊使い『高神姉弟』の弟、礼治の武霊。

……ちよつと待って、礼治の武霊が私を襲ってきたって事は……オウキが『狙われている』！夜衣斗さん！！

慌てて海岸を見ると、最も見たくなかった光景が視界に入った。

夜衣斗さんはオウキを出して高神姉・麗華と対峙していた。

犯罪武霊使いの中で、

『最も武霊使いを殺している女』
と。

夜衣斗

俺が何かを言う前に、その女は背後から武霊を出した。

その武霊は、人型でもなく、獣型でもなく………そう………しいて言えば………いや、そのまんま『スライム』だった。

ファンタジー物で出てくるあの不形生物。色はまるで血の様に赤く、大きさは人より大きい。

………どうも、武霊は通常、人より大きいのが基本みたいだな………なんにせよ。うねうね動いているスライムを、実物で見るとかなり気持ち悪いな。と言うか、どう言うつもりなんだこの女？

「あは。私の武霊ちゃんに付いている虫い。自分で死ぬのと、苦しんで死ぬの。どっちがあ、いい？」

不気味な笑顔を浮かべて、物騒な事を言う女。

俺が命令する前に、オウキが俺の前に庇う様に出た。

「あらあ？ダメよ。私の武霊ちゃん。そんな虫を庇っちゃ」

………どうやら、俺は虫らしい………なんなんだこの女？

そう疑問に思った時、俺の耳に切羽詰まった美羽さんの声が入った。

「夜衣斗さん逃げてえー！ー！！」

美羽

高神麗華を見た時、私は背筋が寒くなるのを感じた。

「夜衣斗さん逃げてえー！ー！！」

気が付くと反射的にそう叫んでいた。

と同時に、コウリユウが一気に上昇する。

キゾウが突進してきたからだ。

「邪魔！コウリユウ、サンダーブレス！ー！！」

私の命令に、コウリユウは胸のブレス袋に電撃を溜める。

キゾウには誰も乗っていない。

だから、全力で撃ってコウリュウ！

膨らんだ胸に押されながら、そう強く命じた。

再び突進してくるキゾウに、コウリュウのサンダープレスが撃ち込まれる。

キゾウは避ける間もなく、プレスが直撃し、凄い音共に吹き飛んだ。

夜衣斗さん！

キゾウが吹き飛ぶのを確認して、私は夜衣斗さんがいた場所を見る。

そこには何故か、白い煙がもうもうと立ち込めていて、夜衣斗さんの無事が確認できない。

でも、私の見ている前で、煙の中から『様々な武霊』が次々と飛び出して、それぞれが違う方向に向かっていったので、夜衣斗さんはうまく逃げてくれたみたい。

高神麗華の武霊は、見た目はスライムで弱そうだけど、いえ、実際に本体は弱いけど、でも、他の武霊にはない『恐ろしい能力』がある。

その能力の為、警察も自警団もつかつに麗華に手を出せなかった。不意にコウリュウが回避運動に入った。

原因は、キゾウ。

頭部が多少焦げているだけで、それほどダメージを受けている様には見えない。

キゾウとは何度か戦ったことがあるけど、前はこんなに丈夫じゃなかった。

片手間で相手を出来る相手じゃない。

私は奥歯を噛み締め、キゾウとの戦いに集中する事にした。

どうか無事でいて、夜衣斗さん！

第一章『武霊のある町』 11

夜衣斗

なんなんだあれは！

俺はオウキに抱き抱えられて逃げていた。

美羽さんの逃げてと言う叫びを聞いた直後、スライム武霊が変化した。いや、正確には『分裂』した。

次々と分裂したスライム武霊の分裂体は、瞬く間に形が『某戦隊ヒーロー』や『某ロボットアニメのロボット』などの『どこかで見ただ事がある姿形』になり、一斉に襲い掛かってきた。

反射的に、

「セレクト。ジャミングスモーク」

と命令し、オウキの肩・腕・腰を開かせ、そこから白い煙（目くらましと通信などを阻害する煙）を出して逃げた。

とにかく、このまま逃げていても……正確に数えたわけじゃないが……十数体は出ていた。そんなにいれば、捕まる可能性が高い。

……それに、今は……幸いな事に……人がいないが、このまま逃げ続ければ、誰かを巻き込みかねない……何にせよ。

「セレクト。ステルスサーバント」

隠れるのが、とりあえずの最善策だろう。

オウキの肩から半透明の小型円盤が現れ、オウキの頭上に移動し、装甲を開く。

それと共に、多分だが、周囲の光を操るナノマシンが散布され、オウキと俺の姿を透明にする。

走っていると、足音ではばれる可能性があるな……よし。

「オウキ。あの空地に隠れよう」

俺は視界に入った空き地を指差し……って、今は見えなくなってるな。なんだか不思議な感じだ。まあ、それでもオウキは理解し、空地に入った。

何かを言う前に、オウキは俺の意思を汲み取り、俺を降ろした。
……それにしても、本当に『喋らない』な……。

俺は少し期待していた事だけに、思わず溜め息を吐いてしまった。

美羽さん曰く、武霊は鳴いたり、唸ったりは出来るけど、『喋る事は出来ない』らしい。そう言う器官や機能を持った武霊でもだ。理由は当然、分かってない。……武霊自身が喋る事を拒否しているのだろうか？まあ、十年間大人達が調べて分からない事を、俺が考えて分かるわけないよな。

まあ、何にせよ。今はそんな事を考えている場合じゃないな。

俺がそう思った時、不意に携帯が震えた。

しかも、タイミングが悪い事に、空地の前に『赤い某変身ライダー』が現れ、こちらを見た。

変身したスライム分裂体は、形は変わっても『全身赤一色』だったから……間違はなくこの某変身ライダーもあのスライム分裂体だろう。と言う事は、見付かると……まずい。

俺は慌てて携帯を取り出し、電源を切る。

スライム分裂体は、一瞬の間を置いて、どこかへ走り去った。

ほっと一息付く間もなく、何故か再び携帯が震える。

切り損ねたか？

俺は眉を顰め、再び電源を切ると、今度は俺が見ている前で、『勝手に』電源が入り、震え出した。

……どう言う事だ？携帯って、こう言う事出来たっけ？

俺が疑問と得体のしれない不安感に硬直している間も、携帯は震え続けている。

相手はどうしても俺と話したいらしい。

着信相手を確認すると、どう言うわけか、画面には何も映って無かった。

分けが分からないが、このまま震えさせ続ける訳にもいかないよな……何にせよ。携帯のコントロールが向こうにある以上、これ以

上待つと着うたとか流される可能性もある。流石に今の状況でそれは困るので、

俺は意を決して、携帯に出た。

「初めまして、黒樹夜衣斗」

携帯から聞こえてきた声は、全く効き覚えのない、どこか違和感のある男の声だった。

第一章『武霊のある町』 12

美羽

「学園大橋前で、高神姉弟に襲われました。至急警報と救援をお願いします」

キゾウに追われながら、私は携帯電話で自警団に連絡を入れた。

忘却現象で武霊に関する事を伝えるのに、『普通の携帯は星波町では使えない』。でも、この携帯は星波町で全て『完結』する仕様になってる特別製の『星波町限定携帯電話』。通称『星電』なので、普通に自警団と連絡を取れている。

「わかりました。今から警報を流します」

連絡担当の美坂ゆかりさんがそう言うと同時に、サイレンが聞こえ始める。

「学園大橋付近にて武霊使い同士の戦闘が確認されました。付近の住民並びに外出中の人は、安全の為、避難してください。また、これから安全が確認されるまで、学園大橋付近への接近を禁止します。繰り返します。学園大橋」

なんだか災害警報みたいでやけど、実際に武霊使い同士の戦闘は災害に近いから仕方がない。特に、私や高神礼治の様な『レベル2』の武霊使いは、戦闘の度に町を破壊している。

レベルとは、武霊の具現化レベルの事。今の所、レベル3まで確認されていて、1が『通常具現』、2が『巨大化具現』、3が『憑依具現』。

レベル2に至ってる武霊は、巨大化している分、その攻撃範囲が広がるから、レベル2同士が戦闘をすれば、町に被害が出るのは確実で……。

「赤井さん」

「あ！はい」

冷静なゆかりさんの声で、私は感傷から引き戻された。

「現在、レベル2に達しているこちらの武霊使いは、全員連日はぐれとの戦闘で、レベル2化出来ない状態にあります」

やっぱり……そうじゃないかと思った。

はぐれの次の発生は、今までは、一週間以上経って起つてた。でも、昨日はまだ二日しか経ってなかったのに発生した。しかも、大量に。だから、春子さんは油断して、夜衣斗さんを迎えに行かなかったみたいんだけど……。当然、その油断は自警団の人達にもあって、はぐれの対応に遅れ、『治療系の武霊の治療』が間に合わないほど怪我人も多く出たって聞いている。それに、レベル2の具現化は、武霊使いに負担が大きく、人によつては意志力の回復に数日かかる場合があつて、私はなんとなくゆかりさんの言葉を予想していた。

……一人で何とかするしかないか……。でも、礼治は何とかなるにしても、逃げている夜衣斗さんは、麗華の事を何にも知らない。あの『恐ろしい、麗華が最も武霊使いを殺している理由である武霊の能力』を……。早く礼治をなんとかしないと！

「無茶をしちゃ駄目よ。こつちも何とか自警団以外の武霊使いに連絡を付けてみるから」

私の雰囲気が変わつたのを携帯越しに感じたのか、ゆかりさんが心配そうにそう言ってくれた。

「はい。わかりました」

そうは言つたけど、私はあまり期待していなかった。

確かに、自警団以外の武霊使いなら、元気な人はいるとは思うけど、相手があの高神姉弟だつて聞けば、ほとんどの人が応援を拒否すると思う。それほど高神姉弟は、武霊使い達にとって恐怖の対象だから……。

携帯を切り、私は覚悟を決めた。

「コウリユウ。キゾウを倒すよ」

私の言葉に応える様に吠え、旋回し、追って来ていたキゾウと対

峙した。

夜衣斗さん。すぐに行きますから、無事でいて下さいね。

私はそう心の中で呼び掛け、コウリュウが大きくなるイメージを強く浮かべる。

その瞬間、コウリュウは巨大化し、抱き抱えられていた私はコウリュウの右掌に指を支えて立ちあがった。

「行くよ。コウリュウ！」

第一章『武霊のある町』 13

夜衣斗

町中からサイレンと緊急放送が聞こえる。

「どうやら、美羽さんとあの機械象の武霊が戦っているようだが…

…。

「赤井美羽なら心配はいらない。彼女は星波町でトップレベルの武霊使いだ。昨日の様に、よほど相性が悪くない限り、簡単にやられはしないだろう」

携帯から聞こえて来た声は、成人男性のものだった。

「……だが、何か違和感があった。自然な感じの声だが、どこか機械的な感じがする様な……。」

「君の考えている通り、この声は合成音声だ」

「……………」

「言っておくが、僕の正体を隠す為に合成音声を使っているわけではない。僕の喉は声を出せない状態になっていてね。人とコミュニケーションを取る為には、これを使うしかないんだ。気を悪くしないでほしい」

声を出せないね……。

「僕のような正体不明の相手を警戒するのは、正しい。しかし、喉が潰れていると言う嘘に、メリツトがあると、君は思うか？」

「……まあ、ないんじゃないだろうか？嘘か、真実か、どっちにしろ今の状況であまり意味をなさないよな……それにしても、さっきから俺、一言も喋ってないんだが……って事は、これは、間違いなく、『携帯を操れる以外』に、電話の相手は、こちらの『心が読める』って事なんだろう。」

「そう警戒しなくても、深く読めるわけではない。せいぜい、表層を少し読める程度だ」

「……一体あんたは誰で、俺に何の用だ？……こっちはこれでも忙

しいんだが……。

「そつちらの状況は勿論、分かっている……単刀直入に言おう。このままいけば、『君は多くの犠牲を出して、高神麗華に殺される運命』にある」

たかがみれいか？あの女の名前か？

ふつと気付くと、携帯の画面が光っており、そこに高神麗華と出ていた。

……親切な事で。

それにしても……また、『運命』か……何なんだ？俺の運命ってやつは……。

「だが、僕はその君の運命を望んでいない」

……。

「だから、僕は君を助ける為に、今、君の携帯電話に少々反則な方法で電話を掛けている」

反則な方法ね……待てよ？そもそも、何でこの普通の携帯電話で、武霊の話が出来るんだ？確か、美羽さんの話だと、忘却現象の影響で、普通の携帯電話は使えないはずだが……つまり、電話の相手は、少なくとも星波町内において、俺の携帯電話を無線機の様にして電話をしている。と言う事か？

「その予想は、大体あつてるよ」

……だったら、こんな面倒な事をせず、直接来ればいいんじゃないか？俺が携帯を取らない可能性だつてあつただろうし……

「僕にも、僕の事情がある。今は、君に会いに行ける状態じゃなくてね……だが、もし、君が今回の運命に撃つ勝つことが出来たのなら、僕は君に会いに行く事を約束しよう」

……別に、そんな約束をしなくてもいい。

「……………」

……。

「や・く・そ・く・だ！」

……………勝手にすればいい。

何とも言えない状況に、俺は深い溜め息を吐いた。

「……さて、後は、君が僕の話信じるか、信じないかだが」

……一応、話は聞く。信じるか信じないかは、それから決めるさ。

「賢明な判断だ」

そりやどうも。

「まず、高神麗華の武霊だが、『本体自体はそれほど強くはない』

。だが、他の武霊にはない特殊な能力を持っている為、『最も危険で、最も会いたくない犯罪武霊使い』。と言われている」

あのスライム分裂体の事だろ？

「半分は正解だ」

半分？

「あれは元、別の武霊使いの武霊だ」

……それってつまり、

「そうだ。高神麗華の武霊は、他の武霊使いの武霊を奪う能力を持っている」

……なるほど、だから、あった時、オウキの事を私の武霊ちゃん
って言ってたのか……。

「最も、『ただ奪うだけならもう一人、同じ様な能力を持つ武霊
はいる』」

奪うだけなら？

「高神麗華の武霊は、奪う武霊の武霊使いを『喰らい、消化する
事で奪う』」

……勘弁してくれ。

と言う事は、あの出てきた武霊は、全部、武霊使いを『殺して奪
った』。って事か？

衝撃的な情報に、軽くクラと来た。

「高神麗華は、『武霊コレクター』とも呼ばれている異常者だ。

当然、人を殺す事に一切のためらいはない。その上、異様なほど執
念深い。今まで狙った獲物は、『必ず手に入れている』。対峙する
なら、加減はしないことだ」

……それって、俺に『人殺しになれ』って事か？……冗談じゃない！

「それは、君の選択次第だ。君なら、殺す事も、撃退する事も、出来るだろう？」

……。

「さて、君と直接会う為にも、もう少し高神麗華の武霊について教えよう」

第一章『武霊のある町』 14

????

彼女は呑気に鼻歌を歌い、ゆつくりと海岸沿いを歩いていた。楽しそうに、しかし、どこか狂気じみた雰囲気だ。

その彼女に線の細い綺麗な少年が近付いてくる。年の頃、十五・六歳ほどの少年だ。

「麗華お姉ちゃん。麗華お姉ちゃん。もう終わった？終わった？近づいてきた少年は、外見とは不相応な幼い口調で彼女・麗華に声を掛けた。

声を掛けられて少年に気付いた麗華は、どこかおかしな笑顔を少年に向ける。

「まだよお。礼治は、あのくそ虫女を、殺した？」

「ごめんなさい。まだなんだ」

麗華の問いに、少年・礼治は怯えた様に麗華を見て、空に視線を向けた。

その視線の先で、礼治の武霊キゾウと赤井美羽の武霊コウリュウが激しい空中線を繰り広げている。

「いいわよお。あなたはあのくそ虫女を抑えてくれていれば」

「うん。わかったよ麗華お姉ちゃん」

麗華の言葉に、礼治は一気に明るくなって、無邪気に麗華に抱き付いた。

その礼治の行為に麗華は起こらず、逆に、優しげに礼治の頭をなでる。

礼治は頭をなでられ、気持ち良さそうに目を細めた。

この二人、態度だけ見れば、仲の良い姉弟だが、その外見は全くと言っていいほど似ていない。

明らかに姉弟ではないが、この瞬間だけ、麗華から狂気が消えているのからして、二人は姉弟以上の絆で結ばれているのだらう。最

も、その絆が『正常な絆』だと到底思えない。

しばらく二人はじゃれあっていると、二人の傍に赤い狼男の武霊が走り寄ってきた。

その瞬間、麗華に狂気が戻り、一瞬、礼治の顔が悔しそうに歪み、元の無邪気な顔に戻る。一瞬だった為、麗華はその礼治の様子に気付いた様子はない。

「見つかったあ？」

麗華のその問いに、赤い狼男は頷いた。

「礼治い。お姉ちゃん行くね」

そう言って、麗華は礼治の頭を撫でるのを止めた。

「うん。行ってらっしゃい」

礼治は名残惜しそうに麗華から離れる。

「僕、頑張るね」

そう言って、礼治は麗華に背を向けて走り出した。

「無理をしちゃダメよ」

麗華はその背中に声を掛けて、赤い狼男に近付いた。

赤い狼男は、麗華を抱き抱え、礼治とは反対方向に駆け出した。

「あはっ。待っててね。私の武霊ちゃん」

第一章『武霊のある町』 15

美羽

キゾウの鼻から炎のブレスが吹き出し、コウリュウに炎が迫る。迫る炎を避け様とするコウリュウを、私は反射的に翼で防御するよつに心の中で命じた。

コウリュウはそれに忠実に答えて炎を翼で防御。コウリュウは、苦悶の叫びを上げ、お返しに炎のブレスを吐く。けど、避けられてしまう。

「ごめんねコウリュウ」

私はコウリュウに謝って、後ろの町を確認した。炎は飛び移ってはいない。

ほっと一息を吐いたけど、その瞬間、私の意識が一瞬クラッとした。

キゾウとのブレスの吹き合いを始めて十数分。

コウリュウに町にブレスがいかない様にブレスを撃たせているこつちに対して、キゾウはこつちのバツクに町があろうと躊躇なく撃ってくる。だから、攻撃・回避の両方に気を使わなくてはいけない。私は予想以上に苦戦していた。

早くしないと夜衣斗さんが危ない。って意識があるので、戦闘にうまく集中出来ていないのも、苦戦の原因の一つなんだろうけど……このままじゃ、夜衣斗さんだけじゃなく、町の方にまで被害が出てしまう。

そう思って……私は少し無理をする事にした。

「コウリュウ。防御鱗十枚」

コウリュウの背中から、鱗が十枚飛び出し、組み合わせあって大きな盾になる。

その大きな盾で、また撃ってきた炎のブレスを防ぐ。

炎が盾に防がれて、広がり、一瞬、キゾウからコウリュウの姿が

見えなくなる。

コウリュウはその瞬間を逃さないで翼をたたみ、一気に下降して、くるっと反転。落下しながら口を上空のキゾウに向けた。

「レーザーブレス！」

私の命令に、コウリュウの胸のブレス袋が輝き始める。

「貫いて！」

コウリュウの口が大きく開き、巨大な光線が吐き出され、一瞬でキゾウを貫く。

腹部から背中を貫かれて、霧散してキゾウは消えた。

武霊使いは、自分の武霊からどんなに離れていても、自分の武霊に心の中で命令できる。だから、礼治は安全な所で私達が苦戦するようにキゾウに命令をだしてはいたはず。でも、武霊自身も自らの意志で動いているから、どうしても命令から実行までタイムラグが生じてしまう。だから、キゾウに気付かれないように動けば、今みたいに隙を付いて倒す事も出来る。

もっとも、今の攻撃で、ただでさえ消費させられていた意志力が消費されて……気を抜くと意識を失いそうな状態になってしまった。

でも、休んでいるわけにはいかない。早く夜衣斗さんを助けに行かないと……

第一章『武霊のある町』 16

????

少年にとつて、彼女は全てだった。

あの絶望的な環境で、唯一汚くない笑顔を自分に向けてきてくれた彼女。

自分を唯一の支えとして求めてくれた彼女。

心が壊れてもなお、自分を求めてくれた彼女。

たとえ、彼女がまともじゃなくても。

たとえ、彼女が正常じゃなくても。

たとえ、彼女が自分をまともに見てくれなくても。

少年は、彼女の求めるままに。

彼女が渴望するままに。

行動する。

なぜなら、そうしなければ、彼女は壊れてしまうから。

大切な、大切な彼女が決定的に壊れてしまうから。

美羽

薄れる意識を何とか堪えて、夜衣斗さんを助けに行こうとした時、コウリュウが突然翼で私の視界を塞いだ。

そのコウリュウの意図に気付く前に、コウリュウが激しく揺れた。翼の隙間から水飛沫が見えてから、多分、高圧縮の水撃。

コウリュウの翼が開き、水撃が撃たれた方向を見ると、砂浜に線の細い少年・礼治と巨大化したキゾウがいた。

なんて無茶を……………。

武霊は、はぐれ化していない限り、倒されようと何度でも具現化できる。それは、武霊の『本体』が寄生者の中にあるから出来るって言われているけど…………その具現化の度に武霊使いは意志力を大きく消費されてしまう。特に武霊の本体を具現化するのは、消費意志

力が最も多くて、一日にそう何度も出来ない。そして、レベル2化も負担が大きい具現化で、その両方を使って失った礼治は、もう武霊を具現化して再びレベル2化させるほど意志力を持ってないはずだけと…………。

遠目から見ても、礼治はかなり辛そうだった。

かなり無茶をしているのは間違いないけど…………。

高神姉弟が星波町に来る前、彼女達がどこで生まれ、どう育ち、どんな事をして、どう生きてきたか…………誰も知らない。彼女達自身が武霊に関するその者の行動ばかり取るから、忘却現象で調べに行く事も、調査を頼む事も出来ないからだけど…………でも、確実に分かる事が一つある。それは、二人が『本当の姉弟じゃない』と言う事。あの二人は、兄弟と言うには、あまりにも容姿が違うから、明らかに血の繋がりは無い。それなのに…………礼治は、血の繋がってない女性を姉と呼び、ここまで無茶をする。そして、麗華のあの狂気…………その根底に、『私には想像できないほどの過去』があつたって事は…………予想出来る。…………それに、同情はする…………でも、それで自分の欲を満たすために、人を殺していい理由にはならない。

…………だから、私はこの状況をチャンスだと思つた。なかなか捕まえる事が出来なかつた高神姉弟の片割れを捕まえるチャンスだと。

夜衣斗さん、ごめんなさい。

私は心の中で夜衣斗さんに謝り、礼治を捕まえる決意を固めた。

実の所を言うと、この時、私は夜衣斗さんならあの麗華に追われなくても、大丈夫なんじゃないかなって思つてた。

だって、夜衣斗さんの武霊・オウキは、あの剛鬼丸を倒すほど強かつたし、対象を見えなくさせる能力も持つてた。だから、私はあまり夜衣斗さんの心配をしていなかった。

でも、それを私はすぐに後悔する事になつた。

突然、大きな爆発音がした。

驚いて爆発音がした方向を見ると、もうもうと立ち込める黒い煙と、煙の中から飛び出す夜衣斗さんが見えた。

その後ろからスライムとは思えない素早さで迫る麗華の武霊も。

「え!?!」

そして、夜衣斗さんは、私が見ている前で、『喰われた』

「……………嘘……………」

第一章『武霊のある町』 17

夜衣斗

再び高神麗華と対峙した時、俺は隠れていた空地とは違う海に近い空き地で、十数体の赤い武霊に囲まれていた。

オウキはこの場にはいない。

高神は、赤い狼男の様な武霊に抱き抱えられて現れ、異様なほどここにこしている。

「あらあ？かくれんぼは終わり？ゴミ虫」

俺は高神に肩を竦ませて見せた。

「ふん？まあ、いいわあ」

そう高神が言うと、俺を囲んでいた赤い武霊の一体が、唐突に形を失い、あのスライムになった。

どうやら本体も喰らった武霊になる事が出来る……と言うのは本当だった様だ。

「うふふう。私の武霊ちゃん」

赤い武霊達が、俺を逃がさないように包囲を縮めてくる。

スライムが俺の正面にずると移動し、まるで大口を開けるかの様に変形し、俺に迫る。

……高神は、オウキがこの場にいない事を特に気にしていないようだ……それほど、自分の武霊に自信があると言う事なのだろうか？……まあ、こちらとしては、その方が都合がいい。

よし！作戦開始だオウキ！

俺が心の中で合図を出した瞬間、上空でステルスサーバントによって隠れていたオウキが一気に降り立ち、既に出していた二丁拳銃を連射。

予想されていたのんだろう。ほとんどの武霊達に防御されたが、使用した弾丸が着弾した瞬間対象を炎で包む『火炎弾』であった為、この場の全ての武霊が炎に包まれた。その内の三体が、炎に弱かつ

たのか、消滅する。

「私の武霊があ！！なんて事をするの！？このゴミ虫が！！」
鬼気迫る感じで激昂する高神。

先程の謎の男からの情報によれば、高神の武霊（名前は付けていないらしい）が使う『喰らった武霊使いの武霊を具現化し、自在に操る能力』は、言うなれば『制御された武霊のはぐれ化』なのだそうだ。つまり、武霊の核がその体にある為、『一度倒せば、二度と具現化する事が出来ない』と言う事になる。更に、その能力故か、本体の具現化にかなりの意志力を消費するらしく、一日に一回の具現化が限度なのだそうだ。そして、現在、高神が所有する武霊の数は、『二十五体』

残り、本体と二十二体。

第一章『武霊のある町』 18

夜衣斗

二丁拳銃収納。セレクト。振動双刀。

俺の命令に瞬時に二丁拳銃が両腕に収納され、代わりに二振りの刀が両手に収まった。

切り開け！

次いで、の命令で、オウキはまだ炎に包まれている武霊達に突っ込み、右左の刀でそれぞれ一体ずつ一刀両断にし、消滅させる。

昨日の剛鬼丸に比べれば脆い事脆い事。

開いた武霊の包囲網からダッシュで飛び出す俺。

背後で刃と刃がぶつかった様な音がした。

それを無視して、そのまま海へと向かって走る。

だが、その前にカブトムシの様な変身ヒーローの武霊が立ち塞がった。

その武霊の全身の装甲が少し開く。

一瞬、開いた装甲の隙間から炎が見えた。

予知めいた予感に、俺は反射的にオウキに命令。

俺の命令に、上空に待機させていたシールドサーバントが俺の前に移動させ、力場を展開させる。

力場展開と同時に、立ち塞がった武霊の装甲が一気に全て開き、爆発。

シールドサーバントのおかげで吹き飛ばされずに済んだが、爆発で生じた黒い煙に視界が塞がれてしまう。

……あの女！俺を生きたまま自分の武霊に喰わせたんじゃないか？ たのか？ それとも、今のは死なない程度の爆発だったんだろうか？ ……何にせよ。行け！サーバント。

シールドサーバントを力場を発生させたまま突撃させ、立ち塞がっていた武霊を抑えさせる。

煙でちゃんと抑えられたか分からないが、俺はそのまま煙の中を走り、抜けた。

その瞬間、俺は『喰われた』。

????

「あは。やあ〜つと、捕まえた」

そう言つて高神麗華は歪んだ笑みを浮かべた。

その視線の先には、体積を三倍にした自身の武霊がおり、その武霊の中には、もがき苦しんでいる黒樹夜衣斗がいる。

夜衣斗の武霊は、近くの空き地で五体の武霊によつて抑え込まれており、あの忌々しい赤井美羽も、弟が抑えている。

当然、近くに誰もおらず、夜衣斗を助けられる者は、誰もいない。「あは。どんなに暴れても無駄よお。もう、あなたは死ぬしかないの。あは、あははははは」

楽しそうに笑い声を上げる麗華。

近くで何かが発射される音がし、それに気付いた麗華は音の発生源を見る。

礼治の武霊キゾウだった。

キゾウが、接近してくるコウリュウを撃ち落とそうと、鼻から水撃を連続で射出している音だったようだ。

コウリュウにはその武霊使いである赤井美羽がその手に乗っており、必死な形相で何かを叫んでいる。

誰かの名前を呼んでいる様だったが、麗華は気にならなかつた。

多分、今喰らっている武霊使いの名前だろうとは思つが、彼女にとつてそんな事は特に意味のない事だった。

ただ、その美羽の必死な表情が面白くて、面白くて、再び笑い声を上げる。

狂った様に。

美羽

麗華が笑っていた。

その笑みを見た時、私は怒りに歯を噛み締めた。
いつもそうだった。

私はどこか甘くて……覚悟が足りない。

だから、いつも守れない。

だから、いつも助けられない。

だから……止められない。

……もう、そんなのは……嫌だ！

私は、『覚悟』を決めた。

罪を犯す覚悟を。

武霊は、なんでかは分からないけど、命令無しでは、『攻撃的な行動はしない』。

だから、物を壊すのも、人を傷つけるのも……人を殺すのも、その武霊使いの意思次第。

私は今まで、コウリュウで人を傷つけるのも、人を殺すのもしたくなかったし、するつもりもなかった。

自警団の人達や、他のほとんどの武霊使いの人達も、そうだと思う。

誰だって人殺しにはなりたくない。

でも、だから、私達は人殺しを平然とし、今の礼治の様に自分を人質にしても攻撃してくる犯罪武霊使いを逃がし、放置し続ける結果になってる。

だから！『殺す気』で掛ければ、私だけでも二人を倒し、夜衣斗さんを助ける事が出来る。

……そう言い聞かせても、私の身体は震えていた。

人を、夜衣斗さんを助ける為とは言え、高神姉弟を殺そうとしている自分の意思に、怯え、恐怖しているんだと思う。

応援はまだ来そうにない。

私は……私は……

「……コウリュウ！……レーザーブレス！！」

????

コウリュウのブレス袋が光り輝き出した時、麗華ははつきりと感じていた。

殺意を。

怯え、恐怖しながら、それでも向けられる殺意を。

「あは」

楽しかった。

あのまっすぐに自分達に怒りを向けながら、それでも一線を越えようとしなかったあの赤井美羽が、自分達と同じ様に堕ち様としている。

その根底がなんであろうと、どんな理由であろうと、殺意は、殺意。

その根底がなんであろうと、どんな理由であろうと、殺しは、殺し。

堕ちれば、後は堕ち続けるだけ、

「あは、あはは」

だからこそ、楽しく、殺しがいいがある。

麗華は、その感情に身を任せ、自身の武霊にストックしていた全ての武霊を解放させた。

「さああ。楽しい。楽しい。殺し合いをしましょお」

そう言って、麗華は自分の武霊を見た。

そろそろあの武霊が手に入る頃だからだ。

武霊を奪う瞬間、武霊は宿り主からはずれ、宿り主は徐々に消化される。

皮膚が溶け、肉が溶け、骨が溶ける。

その凄惨な光景が、麗華は堪らなく好きだった。

だが、視線を向けた先には、なんの変化も起こっていないかった。

少なくとも、武霊がはがれ始めてもいい頃合いなのだ。
更におかしな事に気付いた。

武霊の中にいる男が、『ずっともがき苦しんでいる』のだ。
普通なら、空気を吸えず、とつくに気絶していると言うのに。
その意味を麗華が理解する前に、閃光が走った。

コウリュウがああ必殺のブレスを吐いたのだろう。

そう必殺のブレス。

自分の弟が殺されると言うのに、麗華はその瞬間、笑みを浮かべていた。

（死んだら死んだで、『また弟を手に入れればいい』。今度は妹でもいいな）

そう考えながら、結果を見ようと砂浜へと視線を向けた。

どう言うわけか、弟は無事だった。

あまりにも予想と違う光景に、驚く麗華。

そして、その視界に、不自然なものが入った。

弟の武霊の前に、五つの小さな円盤が飛んでいるのだ。

空を見ると、美羽も同じ様に驚いている。

その美羽が、唐突に慌てたように視線を弟とは違う方向に向けた。
つられて麗華がその視線の先を見ると、そこに、
夜衣斗がいた。

第一章『武霊のある町』 21

美羽

「撃つてコウリユウ！」

私の命令に、コウリユウは従わなかった。

戸惑う様に私を見るコウリユウ。

ごめんねコウリユウ。あなたに人殺しなんて……本当はさせたくない……でも、このままじゃ。夜衣斗さんが殺されてしまう。

昨日会ったばかりの人だとしても、高神姉弟と天秤に掛ければ、どっちが重いか……そんな事を考えたくないけど、明白だから……それに、私は、夜衣斗さんとの、『運命』を、こんな所で終わらしたくない！

だから！お願い！！

「コウリユウ……！！」

私の覚悟の願いに、コウリユウはキゾウに顔を向け、必殺のレーザーブレスを撃った。

具現化のし過ぎで動けない礼治と礼治を守るキゾウ。

一人と一体を貫通して、私は人殺しに……なるはずだった。

だから、私は、その瞬間、思わず目を瞑ってしまった。

身体が震え、頭がくらくらして、気持ちが悪い。

それでも、私は私の意志でした事を、受け止めなくちゃいけない。自分自身を失わないためにも。

恐る恐る目を開けると、レーザーブレスによって穴の開いた砂浜が……なかった。

そこには、ブレスを撃つ前と変わらない位置にいる礼治とキゾウ。その二人の前に浮いている五つの小型円盤。

……シールドサーバント？

あれって、確か、昨日夜衣斗さんがオウキから出していた防御用の……。

反射的に麗華の武霊に掴まっている夜衣斗さんを見た。

夜衣斗さんは、麗華の武霊の中で苦しそうにもがいている。そして、気付いた。

……おかしい。前に麗華の武霊が人を食べた時は、その人はすぐに気を失って動かなくなっていたはず。

……と言う事は……。

私が結論を出す前に、私の視界に隅に人影が入った。

慌てて視線をその人影に向けると、そこに……夜衣斗さんがいた。

夜衣斗さんの姿を確認した瞬間、私の視界が何故か歪んだ。

その原因が涙だと気付いて、私は慌てて涙を拭った。

安心の涙か、嬉し涙か、分からないけど、今は泣いている場合じゃない。

麗華が出した武霊達の何体かが、私達の方に向かってきたから。

第一章『武霊のある町』 22

夜衣斗

その美羽さんの行動に、俺は度肝を抜かれていた。

コウリュウのプレス攻撃がどれほどの威力かは知らないが、あの機械象の武霊の後ろには、人がいる。

機械象の武霊使いが、多分、高神弟なのは分かるが……どう考えても、攻撃すれば危険な距離だ。

昨日会ったばかりだが、美羽さんがそんな事に気付かない人じゃないだろうし、人を傷付ける側の人間には見えなかった。と言う事は、何らかの理由が……って、俺か！つちよ！ちよつと待った！！俺は慌てて、万が一の場合に俺の周りに展開させていたシールドサーバント五機を機械象の前に展開させ、プレスを何も無い空の方に反射させるようにU型に力場を展開させた。

力場が完成した瞬間、コウリュウが極太の光線を撃った。

撃たれた光線は、シールドサーバントにより上手く反射し、空の彼方へ一瞬で消える。

っあ、あぶねえ。

冷や汗ものだ。俺のせいで、美羽さんが人殺しになるなんて……冗談じゃない。そうだったら、どう責任をとればいいって言うんだか……責任……いやいや、変な想像は止そう。と、とにかく、これ以上美羽さんに無茶をさせない為に、『姿を現した方がいい』なそれに、俺の考えが足りないせいでとんでもない事になるところだったとしても、『思惑通り俺が喰われている』し、『思惑以上に麗華の保有武霊が全て出ている』。これは、予想外のチャンスだ。

「ステルス解除」

俺の言葉に、頭上で『俺を透明にしていた』ステルスサーバントがステルス機能を止めた。

透明でなくなっただ途端に、高神に気付かれ、狂気の含んだ視線を

向けられる。

……どうやら、上空にいる美羽さんが先に気付いて、その視線で俺に気付いたようだ……まあ、気付かれるのは予定通りだが……改めて高神と面と向かうと、めっちゃくちゃ恐いな。これが、人殺しの目って事なのだろうか？

「どーゆーことかしらあ？」

そう言っつて、高神は俺に向けて武霊を展開した。

どうもこうもない。今、高神の武霊に喰われているのは、サーバントの一種、『ドツペルゲンガーサーバント』。要人警護並びに用のサーバントで、対象としたものと同じ姿になるサーバント。それに高神はまんまと引っ掛かったわけだ。

だから、その問いに、俺は『ある思惑』を載せて、鼻で笑ってやった。

無茶苦茶強がりなので、上手く笑えたか怪しいが……。

「……虫があ！虫があ！手足の一本一本千切って殺して上げるわ」
うわ……ゲームとか漫画でしか聞いた事がないセリフを言われた。

この場にいる武霊達が、一斉に俺を捕まえる体勢に入る。

……さあ、こっからが『勝負所』だ……いけるよな俺？

そう自分自身に問いかけ、うるさいくらい高鳴る心臓の鼓動と、気を抜くと震えて動けなくなりそうな身体を、俺は必死に奮い立たせた。

第一章『武霊のある町』 23

武霊達が俺に飛び掛かる瞬間、俺と武霊達との間にコウリュウのブレスを防いだシールドサーバント達が割り込ませ、力場を発生させる。

力場に弾き返される武霊達を確認して、俺は駆け出す。

武霊達によって押さえ付けられているオウキの下へ。

シールドサーバントの防御のおかげで何の障害もなくオウキの近くに来ることができた。

振り返り、追ってきた武霊達と高神を見る。

『予想通り』、スライム武霊はのろろと高神達と大分離れて付いてきていた。

「なーあにい？ 追い駆けっこはもう終わり？」

ニタニタと怖く気持ち悪い。

だが、その笑みもすぐに終わる。

俺はあまりにも思惑通り事が進んでいるで、思わず笑みを浮かべてしまった。

「何、笑ってんだ虫！！」

怒りの表情を浮かべて叫ぶ高神に、俺は、

「ブレイク！」

と言った。

高神がそれに疑問符を浮かべる前に、海岸の方で『爆発』が起きた。

その爆発は、スライム武霊の中から生じ、スライム武霊を一瞬で消滅させる。

実はドツペルゲンガーサーバントには、自爆機能が付いる（おとりになったドツペルゲンガーサーバントに喰い付いた敵を一気に殲滅する為に付いている）。それを最も効果的に爆発させる為に、わざとスライム武霊に喰わせた。と言うわけだ。

なぜそんな手間の掛り、危険な事をしたのかと言うと、あの携帯電話を操る謎の男がこう言っていたからだ。

『高神の武霊は、本体の武霊がないと出した武霊をしまう事が出来ない。また、その特殊な能力故か、一日に一度具現化するのが限度の様だ』。

と。つまり、本体のスライム武霊を倒し、今出ている武霊を全て倒しさえすれば、高神麗華を自警団が捕まえる事が容易になる。

その為に、出ている武霊達に邪魔されず、確実に倒す方法としてドッペルゲンガーサーバントを使用したわけだ。もつとも、高神が所有している全ての武霊を出すのは流石に予想外だったが……。

後は、『次の一手』に全ては掛かっているわけだが……。

「……あは。なあに？私の武霊を倒したぐらいで勝ち誇ってんの？虫が」

そう言つて、高神は笑みを止め、異様なほど無機質な無表情になった。

「もう、いらないわ。その武霊」

ぞっとするほど何の感情もこもっていない冷たい声。

次の言葉を容易に予想でき、俺は慌ててシールドサーバントに俺を完全に囲んで守る様に命令した。

「死ね」

第一章『武霊のある町』 24

高神の予想通りの言葉と共に、一斉に武霊達がそれぞれの能力・機能で攻撃し始めた。

炎・電撃・水撃・真空刃など……。

シールドサーバントによって完全に守られているとは言え、怖いものは怖い。

……早めに決着を付けるべきなんだろうが……問題がある。それは、次の一手である『あれ』が、どれほどの意志力を消費するか分からない。って事だ。

美羽さんの話によると、武霊の具現化は、『物理現象からかけ離れたばけ離れるほど、意志力の消費が多くなり、当然、その維持の消費も多くなる』……らしい。

……少なくとも、かなり気合いを入れなくちゃいけないのは……間違いはない。

となると……ちょっと恥ずかしいが……まあ、そんな事を言っている場合じゃないな。

俺は自分で作ったオウキの物語の一シーンを心に描く。

「今こそ！」

大声で、そのシーンでオウキが仕えていた王が言ったセリフを言う。

シールドサーバントの力場に囲まれているから、音は外に出していないだろうから……まあ、恥ずかしさは多少は軽減されるな。

「そのもう一つの名の意味を知らしめる時！！」

俺の言葉に合わせて、五体の武霊に抑え込まれていたオウキが、ゆっくりと動き始める。

「ライオンハート機関フルドライブ！」

その言葉と共に、オウキの装甲全体に黒い線が走り、一気に武霊達を振り解く。

武霊達の攻撃の隙間から、高神が驚く顔が見える。

「シールアーマー解放！」

立ち上がったオウキの鎧が、黒い光線が走る場所から開き、そこから黒い光の霧の様な物が出てくる。

黒い光の霧は、一気にオウキを覆い隠す。

「オウキは、王の機械。オウキは、王の騎士」

オウキを包んだ黒い光の霧が、徐々に形を変え始める。

「そして、オウキは、王の鬼」

黒い光の霧が完全に固着化し、オウキの姿が黒い大鬼の様な姿になった。

「オーバードライブモード解禁！！」

第一章『武霊のある町』 25

夜衣斗

オーバードライブモード。

俺が考えているオウキの物語の中で、オウキがその時に仕えている王の命令のみで使える『切り札』。

オウキの動力源であるライオンハート機関を限界まで活動させ事により、限界以上の運動・攻撃・防御を発現させる。そして、その活動に耐えられない機体の保護と強化も兼ねて、余剰エネルギーで新たな黒い鎧を構築する。

それが、オーバードライブモード。

当然、限界以上の機能強化は、オウキに多大な負荷が掛り、エネルギー消費も激しい。その為、物語の中でも三分の活動限界を設定していた。

そして……想像通り……物凄く……辛い。

さっきまでそれほど感じなかった意識の薄らぎが、急に強くなり出した。……これは……どう考えても、三分も持たない。

「一分で決めるオウキイイ！」

薄れる意識を必死に抑える為に俺は叫ぶ様にオウキに命令し、黒い鬼と化したオウキが応えるように吠えながら高神の武霊達に突撃した。

美羽

その爆発が起きた時、私とコウリュウはキゾウの水撃をかわしながら、麗華の武霊達と空中戦を繰り広げていた。

驚いて爆発が起きた方向を見ると、あのスライムのような麗華の武霊が無くなっている。

そして、理解した。

麗華の武霊が食べられていた夜衣斗さんの偽物が、自爆して麗華

の武霊を消滅させたって事を。

……本当に色々と考えている人だなあ……夜衣斗さんって。

私はその夜衣斗さんの用意周到さに、呆れに近い感心を抱いてしまった。

武霊の基となっているイメージは、寄生者の『心に強く刻まれたイメージ』。つまり、その人の『人生』や『心の根底』を形作っているもので……夜衣斗さんみたいに全くのオリジナルのイメージを武霊になるほど強くイメージできる人は本当に『稀』だったりする。私のコウリュウだって、私が『子供の頃から大好きな児童小説に出てくるドラゴン』が基で、他の武霊使いの人達も、『昔飼っていた犬』とか『子供の頃に見ていたテレビ番組のヒーロー』とかが武霊の基になってたりする。

……と言う事は、夜衣斗さんは、オウキの事を毎日イメージしていたって事になって……止そう。あまり人の過去をあれこれ予想するのは良くない。過去が何であっても、夜衣斗さんは夜衣斗さんだもんね。うん。

ちなみに、武霊の分類付けの一つとして、イメージの基となったものが使われている。コウリュウがタイプ小説。オウキがタイプオリジナル。って感じに。

……とにかく、今は私達に襲いかかってくる麗華の武霊達を倒して、早く夜衣斗さんの援護に行かないと。

そう思っ、少し無理をしようとした時。

黒い光線が私の視界にいくつも走った。

その光線に麗華の武霊達が巻き込まれ、一瞬で消滅する。

え！えええええ！？何？何！？

私達を襲ってきた武霊達とは、何度か戦ってるけど、そうそうと攻撃の当たる武霊じゃないし、一撃で消滅するほど防御力は低くなかった。

その武霊達が一撃で倒された事に、ちょっと混乱しそうなりかけて、思い付く。

夜衣斗さんだ！

慌てて光線が撃たれた方向を見ると、そこには黒い光の煙を出して片膝を付いているオウキと、麗華に『首を絞められて地面に倒れている』夜衣斗さんがいた。

第一章『武霊のある町』 26

????

全てが瞬く間に終わった。

突然黒い鬼の様になったオウキに、麗華はそれまでオウキを抑え付けていた武霊達に攻撃させた。

その瞬間、麗華の視界からオウキの姿がかき消えた。

そして、攻撃させた五体の武霊達が真つ二つにされて消滅。

麗華がそれに感情を露わにするより早く、消えたオウキが現れた。その両手には、禍々しく黒く大きくなった双刀が握られている。

そのあまりの早さに反応出来ない麗華を守る為に、武霊達がオウキに襲い掛かった。

無造作に刀を振るうオウキ。

刀が振るわれた瞬間、黒い刀身が伸び、麗華の周りにいた武霊達が一刀両断にされた。

防御が間に合った武霊もいたが、その防御ごと斬られ、消滅している。

麗華が驚きから回復して、攻撃の命令を出そうとしたが、思考が止まる。

こんな圧倒的な相手に、どんな命令をすればいいのか？

再びかき消えるオウキ。

振り向くまでも無く、残りの武霊達が消されるのを感じ、麗華は、『キレた』

夜衣斗

圧倒的だった。

オウキのオーバードライブモードは。

これほどだったら、剛鬼丸の時も使えばよかった……か？……いや、あの時、確かにこれを使う考えはあったが……これを思い出

し時には既にしんどい状態だったし、発動まで使えたかも怪しかった。物凄く負担が来るのは何となく予想できたし、結果、しなくて正解だった。

今現在、十秒も経ってないのに、意識を失いそうなほどくらぐら来ている。

どう考えても、これは本当の切り札とししか使えない機能だな、これ。

地上にいる高神の武霊は全て倒した。後は、上空にいる美羽さんと交戦中の武霊達のみ。がんばれ俺！

「振動双刀収納。セレクト。二丁拳銃。レーザーモード！」

その言葉に、オウキは俺の見えない速度で刀を収納し、二丁拳銃に持ち替えてた。

二丁拳銃はオーバードライブモードの影響で大きく黒く禍々しくなっているが、基本構造は変わっていないので、銃身が銃口からガシャンと音を立てて十字に開き、レーザーモードになった。

「撃ち落とせオウキ！！」

俺がそう命令した瞬間、不意に俺の前に高神が現れた。

顔が下を向いている為、その表情をうかがい知る事は出来ないが、『より異常な状態』になっているのは分かる。

『嫌な予感』を感じた。

その次の瞬間、高神がいきなり俺に向かって飛び掛かってきた。『ぞつとした』。

高神の『その行動にはなく』、次の瞬間に高神の身に起こるであろう惨劇を瞬時に想像してだ。

シールドサーバントの力場には、三つのモードがある。

それぞれ、『液体』・『固体』・『気体』の三つの名前が付けられていて、それぞれが『名の通りの特性』を持っている。

液体が、流動的に力場が展開されていて、力場が常に流れている。その為、柔軟性があっても脆い。だが、直に修復出来る特性がある。固体が、展開されている力場が固定されていて、柔軟性は全くな

い。が、その分液体より硬く、対象を拘束するのに向いている特性がある。

気体は、力場が常に放出され続けていて、最も強固な上に、攻撃されて力場が相殺されても、次々と新たな力場が展開されるので、よほどの強力な攻撃でない限り、消える事はない特性を持っている。詳細な知識を持たない子供の頃から考えている機能なので、少々デタラメな所はあるが、今、問題なのは、現在使っているモードが、気体だと言う事だ。

気体は、最固のモードではあるが、拘束するのに向いていない。何故なら、気体モードは、常に力場が放出され続けている……つまり、力場の外側表面は、『常に超振動している針の山の様な状態』と言う事。

つまり……

このままだと、高神が『ミンチ』になる！！
反射的にそう思った俺は、

「シールド解除！！」

と命令してしまった。

まさか、飛び掛かってきた高神に、そのまま首を絞められながら、押し倒されるとは思いもしなかったが……

第一章『武霊のある町』 27

美羽

なんでそんな状況になっっているか分からなかった。

でも、このままじゃ夜衣斗さんが死んでしまうのは間違いない。

「コウリユウ！」

私はコウリユウをレベル1にして、夜衣斗さんの下へ急がせた。

礼治とキゾウはいつの間にかいなくなっていて、気になったけど、

それを気にするほど余裕のある状況じゃない。

お願い！間に合って！！

夜衣斗

苦しい。

意志力の使い過ぎのせいか、身体に力が入らない。

首を絞められていると言うのに、俺は抵抗する事が出来なかった。

このままでは殺される！！

オウキに助けを求めようとして視線だけ何とかオウキの方向に向けてると、オウキはオーバードライブモードから勝手に解除していて、地面に片膝を付いて一切動かなくなっていた。

黒い外装になっていた黒い光の霧が、煙の様にオウキの体から上がっているのからして、緊急停止システムが働いたのかもしれない。確か、オウキが初めてオーバードライブモードを使った時、オウキが慣れないモードの制御に失敗して同じ状況になるシーンを作った覚えが……何もそこまで忠実に再現しなくても……いや、考えてみれば、オウキは『姿形とその機能が一緒でも、中身は別の存在』なんだよな……。『オウキはオウキであってオウキじゃない』。今の状況でそんな基本的な事に気付くなんて……最悪だ。

「あは！あははははは！！なーんにもない。なーんにもない。」

そう叫びながら首を更に強く締め付けてくる高神。
なんなんだ！？
やばい！意識が……

夜衣斗

意識が落ち掛け、視界が暗くなる。

その瞬間、急に首絞めから解放され、上に乗られている荷重を感じなくなった。

咳き込み、足りなくなった酸素を思いつきり吸う。

意識が少し回復したので、何が起こったか確認しようと周囲を見回すと、俺の隣に『巨大な白い犬』がいた。

あり得ない大きさなのからして、これも武霊なのだろう。

「大丈夫か、少年」

そう言われた方向を見ると、眼帯をし、右手にギブスをはめているポニーテールの女性がいた。

その腕には、星波町自警団団長と書かれた腕章がある。

自警団の団長？女性が？……まあ、何にせよ。助かった。

美羽

突然現れ、夜衣斗さんの首を絞めていた麗華を突き飛ばした武霊に、私は見覚えがあった。

星波町自警団団長・幸野 ユキノ 美春 ミハルさんの武霊コロ丸。

と言う事は、美春さんが助けに来てくれた！？……って、美春さんって、治療系の武霊使い待ちで、昨日から怪我をしたままなんじゃ……あの人が、普段団長なんてやる気無いつてよく言うくせに……義務感が強いと言うか……。

私は少し苦笑をしながら、夜衣斗さんの近くに降りようとして、気付いた。

コロ丸に突き飛ばされ、道路に倒れている麗華の隣に、レベル1になったキゾウが現れたのに。

???

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

麗華は心の中で絶叫していた。

「意志力の消費し過ぎと、コロ丸の体当たりによるダメージで、麗華は指一本動かせなくなっていた。」

更に「今の今まで精神を安定させていた奪った武霊達」を失った事により、急速に精神が崩壊し始めている。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ……。

「麗華お姉ちゃん」

気が付くと、麗華は弟礼治に抱き抱えられて、弟の武霊に乗っていた。

麗華の瞳に礼治が映った途端、自然と涙が流れ、「最後に残された自分の物」を確める為に手を動かそうとするが、僅かしか動かない。

麗華の動き気付いた礼治はその手を握り、ゆっくりと口付けを交わす。

それで安心したのか、麗華は穏やかな顔になって意識を失った。

第一章『武霊のある町』 29

夜衣斗

あつと言つ間だった。

突然、機械象が麗華の隣に現れ、同時に現れた少年が高神を抱え、機械象に飛び乗った。

「キゾウを消せ、コロ丸」

団長の命令に、犬の武霊・コロ丸は機械象に飛び掛かろうとするが、その瞬間に機械象の口から大量に出てきた小型機械象に阻まれる。

……そう言えば、そんな機能があつたな。あのアニメのロボットには……。

などと思っていると、機械象が耳を広げ、空へと飛び去ってしまった。

その直後に、体毛を刃に変化させて全ての小型機械象を倒したコロ丸。すかさず機械象を追おうとするが、

「もういい。コロ丸待て」

と団長に言われ、急停止。もつとも、その顔はどんどん小さくなる機械象に向けられ、悔しそうに唸っている。

団長は苦笑して、そのコロ丸の頭に無言で手を置き撫でた。

その団長達の隣に、コウリュウがゆっくりと降り立ち、腕に抱いていた美羽さんを下ろした。

「怪我は大丈夫なんですか美春さん」

「死ぬほどの怪我じゃない。気にするな」

……と言つか。なんで男言葉？……結構美人なのに……いや、逆にありか？

などと今の状況に全く関係ない事を考えていると、美羽さんは周囲を確認して、どこか困惑した表情になっていた。

「美春さん……だけですか？」

「ああ」

「そうですか……」

……よく分からないが、どうやら美羽さんは自警団に応援を頼んだんだろう。ついで、団長しか来なかった。

まあ、誰だつて殺人鬼、しかも無数の武霊を同時に使える武霊使いに会いたくないだろう。俺だつて、不可抗力じゃなければ、一生会いたくなかった。

「大丈夫ですか？夜衣斗さん」

さつきからずっと仰向けに倒れている俺に、ようやく美羽さんが声を掛けてくれた。

まだ動く気になれないので、とりあえず頷く。

「君の話は美羽から聞いている」

団長はそう言うのと、まだオーバードライブモードのダメージから回復していないオウキを見た。

「……話通り、強力な武霊を持っている様だな」

ふっと思つたが、この人、たった一人で応援に来て、どうするつもりだつたんだろうか？……まあ、深く考えるのは止めよう。と言うか、今はなんも考えたくないな。

「まさか、高神麗華に狙われて生き残るどころか、武霊も出せなくなるまで消耗させてるとは、思いもしなかった」

……そう言われて、ふっと思ひ付いた。

「今」

俺が唐突に声を出したので、ちよつと驚いた様に俺を見る美羽さん。

……考えてみれば、朝に一言二言喋つたきり、喋つてない俺。

団長も俺を見たので、俺は続きを口にした。

「高神麗華の保有している武霊はゼロになってます」

第一章『武霊のある町』 30

美羽

夜衣斗さんの言葉を、私は一瞬理解できなかった。

「それは……本当か？」

美春さんもあまりの内容に、困惑した表情になっている。

「はい。二十五体。全て倒しました」

私も美春さんも絶句するしかなかった。

確かに麗華の保有している武霊の数は二十五体だって言われてるけど……本当に全部倒したのかな？中にはあの剛鬼丸と互角の戦いを繰り広げた武霊もいたはずなんだけど……そう言えば、何で夜衣斗さんは武霊の保有数を知ってるんだろう？麗華の名前も知ってるのもそうだけど、どこで知ったのかな？

「本体も倒していますから、今日中になら簡単に捕まえられるんじゃないでしょうか？」

「……確かに、武霊を出せる状態じゃなかったが……」

夜衣斗さんの言葉を黙って考え出す美春さん。

短い沈黙の後、美春さんは小さく頷いた。

「わたった。警察に連絡して、すぐに高神姉弟の捕縛に向かおう」
そう言った美春さんは、私に「後で応援を頼むかもしれない」
そう小さく言って、コロ丸の背中に飛び乗る。

背中に乗った美春さんの身体を固定するようにコロ丸の毛が美春さんに巻き付き、コロ丸は美春さんを背に乗せ走り去った。

んゝ多分、夜衣斗さんの言葉が本当でも、本当じゃなくても、今が高神姉弟を捕まえるチャンスだと考えたんだと思う。

私も、そう思う。

空から見ても麗華が今まで見た事がないくらい疲弊してたし、礼治だって私との戦いでかなり消耗してたから。

……それにしても、高神姉弟が星波町に現れてから三年。何度

か警察・自警団が武霊使いを集めて捕まえようとした事もあるのに、
そこまで追い詰めた事は一度もなかった。

……本当に、夜衣斗さんは『運命の人』なのかもしれない。
私だけじゃなくって、星波町にとっても。

第一章『武霊のある町』 31

夜衣斗

俺の前を歩く美羽さんが、妙にこちらをチラチラとこちらを見ている。

自警団の団長・幸野美晴さんと言つらしい、と別れ、俺は、美羽さんが最後に見せたいと言うお気に入り場所に案内されていた。

……個人的には、既に肉体も精神もボロボロに近くて、とつとと春子さんの家に帰って休みたいんだが……まあ、そんな空気じゃないな……にしても、元気だな美羽さん。流石、星波町でトップレベルの武霊使い……ってか、本当に何なんだろう？ チラチラチラと視線が気になる……俺、何かしたか？……チャックが開いてるか？……開いてないな……ん~~~~ん？

視線の意味が分からず、悩みながら美羽さんの跡を付いて言つてると、不意に俺の横を小さな何か走り抜けた。

反射的に視線をその走り抜けた何かに向けると、『ねじり鉢巻きをした小さなひげもじゃおっさんが、自分の体より大きなハンマーを担いで走っていた』。

思わず凝視していると、美羽さんがそれに気付き、苦笑した。

「あれ。私達の間では、『源さん』って呼ばれています」

……まあ、確かに源さんって感じだな。

「はぐれの一つなんですけど。普通のはぐれと違って、『人を襲わないで武霊に壊された建物とかを、壊される前の状態に戻してくれる』んです」

……はあ？

「見に行きます？」

考えてみれば、いくらのはぐれが建物内の人を襲わないからと言って、その戦いや武霊使い同士の激突で、町が壊れないはずはない。

と言っか、昨日、その現場を実際に見てるしな……あんな事がしょっちゅう起きていたのであれば、普通、町はボロボロになってるだろうし、仮に壊した所から直しているなら、町の財政状況はとっくに破綻して、町民に破産者が続出してはるはずだ。けど、今日案内された町の様子からしても、そんな気配は全くない。

っで、その理由が、今、目の前で起こっていた。

剛鬼丸が消滅させて開いたクレーターの前で、源さんと呼ばれるはぐれがハンマーを振るう。

その瞬間、目の前で信じられない現象が起きた。

ハンマーが降られる度に、地面や、塀や、家が、っぱっぱと擬音を付けたくなる様な感じで次々と元に戻る。

全てが元に戻ると、源さんは、ふーやれやれと言った感じで肩を叩き、ハンマーを肩に担いですうつと消えた。

恐る恐る家の方を確認してみると、ポストの中に無理やり詰め込まれていた新聞やら手紙やらも元に戻っている。

武霊つてのは、こんな事も出来るんだな……それにしても、何であのはぐれは、こんな事をするんだ？

「……元々、あの源さんは、武霊発生当時に武霊使いになった人の武霊だったそうです」

俺の疑問の視線に気付いたのか説明してくれる美羽さん。

「詳細は当時の混乱のせいによく分かっているんですけど、その人は町を蹂躪していた『大型のはぐれ』と戦って、まるのみされてしまったんだそうです」

……まるのみって……ってか、人を呑み込めるほどの大型のはぐれも出てくるのか……勘弁願いたいね。

「そのまるのみしたはぐれは、結局倒されることはなく、自然消滅しちゃったみたいなんですけど……」

自然消滅ね……そう言えば、はぐれは宿り主がないから、存在を維持する為に人を襲い、意志力を奪うって言うってたな。だから、人を食べなければ、はぐれは自然消滅する末路……うへえ。ここ

はサバナナか？

「っで、どう言うわけか、その後、あの源さんが、町が武霊に壊される度に出るようになったんです……多分ですけど、はぐれを発生させている『何か』に、はぐれにまるのみされた事で取り込まれてしまったんじゃないか。って言われてます」

……………

「あ！一様はぐれですから、他のはぐれ同様に『一度倒すと二度と出てこない可能性』があるんで、くれぐれも間違つて倒さないようにしてくださいね。今の所、あの源さんと同じ様な能力を持った武霊はいませんから」

……………なるほど。

とりあえず、俺は頷いた。

それにしても嫌な話を聞いた。

はぐれにのみこまれると、『何か』に取り込まれるね……俺のみこまれると、オウキが出てくるようになるんだろうか？……まあ、喰われたくはないが。

第一章『武霊のある町』 32

美羽

「ここが私が最後に案内したかった場所です」

私がそう言つて振り返ると、夜衣斗さんは両手を膝に付けて、肩で息をしていた。

考えて見れば、ここつて星波山の中腹なんだよね……見るかにインドア系の夜衣斗さんには、結構きつかったみたい。

私達が今いる場所は、星波森林公園……だった場所。なんでだった場所かつて言うと、この付近が現在『武霊使い以外が接近する事を禁じられている区画』だから。

実は、はぐれが発生するポイントは二つあって、一つは星波海岸一帯。そしてもう一つが、ここ星波山山頂一帯。どちらから出るかはほとんどランダム。

だから、万が一のはぐれ発生に対応できる武霊使い以外の接近は禁止されてる。でも、接近が許されている武霊使いだって、わざわざ危険だと分かっている場所に近付きたくないし、無理して近寄る必要性のない場所だから、公園は自然封鎖されちゃったわけ。

そんな訳で、ここは普段、誰もいない。

それでも私はここを、星波町で一番気に入っている。

森の雰囲気は好きだし、春になれば数多く植えられている桜の樹が視界一面に花を咲かせ、何より気に入っているのが、

「夜衣斗さん」

呼吸が整ってきた夜衣斗さんに、私は手を差し出す。

困惑している雰囲気がはつきりと見えるけど、私は構わずにしゃがんで夜衣斗さんの片手を取つて、立ち上がらせる。

「こつちです」

そして、そのままされるがままの夜衣斗さんを引っ張つて、目的の場所・星波町全体を見渡せる高台に移動した。

丁度、空が茜色に染まる頃だったので、町全体が印象的な光景になってる。

横にいる夜衣斗さんを見ると、夜衣斗さんはその光景に目を奪われていた様だった。

その様子に、私は自然と笑みがこぼれた。

ここに案内してよかった。

そう思ったから。

今まで町の案内をしてきた人は、当然だけど、全員武霊使いじゃなかった。だから、このとっておきの場所を案内できなくて、いつも何だか消化不良な感じで……だから、昨日の夜、夜衣斗さんを案内するルートを決めていた時、ここを案内できるって気付いた時、とっても嬉しくて……あ！そうだ。ここを案内出来たら、『これもやりたかったんだだけ。』

「夜衣斗さん」

私は繋いでいた手を離して、夕焼けに染まる星波町をバックに夜衣斗さんの正面に立った。

「ようこそ、星波町へ」

夕陽のせいかな、夜衣斗さんの顔が真っ赤になっていた。

第一章『武霊のある町』 33

夜衣斗

美羽さんは、遠慮なしに、躊躇いなく、こっちのテリトリーに入ってくる。

緊急事態でもないのに、こんな根暗な俺の手を躊躇わず取るし、純粹でまぶしいぐらいの笑顔を向けてくる。

「ようこそ、星波町へ」

そう言っただけで向けられた笑顔に、俺の心臓は高鳴り、多分、顔が物凄く赤くなっただんじやないんだろうか？

夕方なので、バレてはいないだろうが……これには、密かに狼狽するしかない。

明るく、真っ直ぐな女の子。他人を助ける為に、人を殺す覚悟が出来るほど意志の強い女の子。

今まで俺の周りに、こんな女の子はいなかった。

……今、ハッキリと分かった。

俺は彼女に惹かれている。

多分、昨日、コウリュウの背中であの笑顔を向けられた瞬間に、俺は美羽さんに『一目惚れ』してしまったんだと思う。

……今まで、そんな経験はなかったから、その瞬間に気付かなかった。ってか、そんな事に気付けるほど余裕のある状況じゃなかったな。

……それにしても、俺って美羽さんみたいなタイプは、苦手なはずだったんだけど……いわゆる恋の力って奴か？……うわ。何考えてんだ俺？

……何にせよ、『進展しない一方的な恋』になるだろうな……。そう思った俺は、思わずため息を吐いてしまった。

森林公園から家に帰る途中の事で、隣を歩いていた美羽さんが不思議そうな顔で俺を見る。

ため息の理由を説明するわけにもいかないの、俺は美羽さんの視線に気付かない振りをする事にした。

……それにしても、昨日今日で俺の心臓はかなり酷使されたろうなあ……今だって、こんな近い距離に美羽さんがいるっただけで心臓がうるさいくらい高鳴ってる……まあ、美羽さんだけのせいじゃないが……チキンハートめ……

今度は小さく美羽さんに気付かれように溜め息を吐いた。

いつもそうなのだが、俺は誰かを好きになっても積極的にアプローチが出来ない。内向的な性格だからと言う理由もあるが、何より人とコミュニケーションを取るのが苦手だし、それに輪を掛けて、俺の見た目と性格が、女性に嫌われやすい事を自覚しているからだ。目を前髪で隠し、全体的に暗い男が好きだって言う女性は滅多にいないと思う。思春期真っ直中の女の子なら、特にだ……その根拠に、俺の記憶の中に、女の子に嫌われた記憶があっても、好かれた記憶はない。

今日の町の案内だって、美羽さんにしてみれば、星波町民の義務みたいなものようだし……俺に向けられた笑顔は、彼女の本質的な優しさから出ているんだろう。

……まあ、当り前の話だな。昨日会ったばかりの男に、好意の入った笑顔を向けてくるはずがない……勘違いしちゃいけない。下手な勘違いは、自分も、相手も傷付ける……そう、傷付けるんだ。

第一章『武霊のある町』 34

美羽

ため息を吐かれた。

星波森林公園から家に帰っている途中、唐突に並んで歩いていた夜衣斗さんがため息を吐いた。

ため息の理由が分からなかったから、つい夜衣斗さんを見ただけで、夜衣斗さんはその視線に気付かない。

って、気付かれても、どうするんだろう私。なんでため息を吐いたんですか？って聞くの？……流石にそれは……聞けないかな？

ため息の理由……普通に考えれば、疲れているとか……この町でやっていけるのか……とか考えていたのかな？……もしかして、

強引に連れまわし過ぎたかな？……うざい女とか思われてたりして……いやいや、夜衣斗さんは、そんな事を考える人じゃないって

……多分……うん。でも、今日思い返して見れば、夜衣斗さんって女の子が、って言うより、人が、本当に苦手みだった……や

っぱり、無理に連れ回し過ぎたかな？……私、嫌われちゃったんじゃない……もしそうだったら……どうしよう？……どうしよう？？

……どうしてそんな事を思うんだろう？……まるで、私が夜衣斗さんにこ……えっと……これってどうなんだろう？確かに私は夜衣

斗さんに運命を感じたけど、そう言う運命じゃなくて、私の『閉塞した状況』を打開してくれる人って意味で……うん。そうだよ。ね。そんな人に嫌われちゃったら、いけないものね。うん。きっとそう。

そう結論付けた時、私の星電が震え出した。

確認してみると、美春さんからだった。

やっぱり十分な人数が集まらなかったんだ……。

私は覚悟を決めて星電に出た。

第一章『武霊のある町』 35

夜衣斗

「大丈夫ですって、すぐに終わらして帰ってきますから、夜衣斗さんは、先に帰っていてください」

そう言っただけで美羽さんは笑顔で、元来た道を走って戻って行った。

なんでも高神姉弟を捕まえる為の人数が中々集まらなくて、美羽さんにお呼びがかかったらしい。

ついで、俺が何かを言う前に、「夜衣斗さんは来なくていいですからね。いくら凄い武霊を持ってても、夜衣斗さんは武霊使いになっただけなんですから、無茶は駄目です」って言われたので、俺は一人で春子さんの家に帰っている。

……誰も一緒に行くなんて言うつもりはなかったんだが……美羽さんの中で、俺はそんなキャラになりつつあるのか？……明らかに真逆のキャラなんだが……。

などと思いつつながら交差点で信号を待っていると、背後から機械音が聞こえてきた。

どこかで聞いたことがある音だな……確か……電動車椅子の音だな。

そう思いだしていると、俺の隣にその電動車椅子が止まった。

ちらつと視線を向けると、四十代ぐらいの男性がその電動車椅子に乗っている。

その男性を見た時、俺は一瞬、ぎょっとした。

何故なら、横上から見えた男性の喉全体に、でらためと言っているぐらいの縫合跡があったからだ。

そんな傷を負ってよく生きていられたものだと思う。まさに奇跡と言っているんじゃないだろうか？……でも、あれじゃあ、多分だが、まともに喋れないだろうな……ん？喋れない？ってか、喉が喋れない状態って……まさか！

「正解だ。黒樹夜衣斗」

その聞き覚えのある声を発したのは、電動車椅子のひじ掛けに納められていたノートパソコンからだった。

第一章『武霊のある町』 36

美羽

「すまない美羽」

そう言つて頭を下げる美春さん。

「いえ。私も決着を付けたい相手でしたから……普通は信じられませんか。昨日、武霊使いになったばかりの人が、あの高神麗華の武霊を全て倒しているなんつて」

私はそう言つて苦笑した。

私が今いる場所は、夜衣斗さんと言つた星波山とは反対方向にある星降り山山道前。

この山の中腹に、廃校があつて、そこを高神姉弟が不法占拠している。

弱つた二人が星波町内で唯一逃げ込めるのが、そこしかないから、自警団の人達はここにいるんだけど……私と美春さんを合わせても十人しかない。それも、美春さんを含めた八人の身体のどこかに怪我をしていて……。

一応、八人全員が自警団の中でも古株の人達で、武霊使いの中でもトップクラスの人達なんだけど、今までの高神姉弟を捕縛しようとした時に比べて明らかに少ない。今日が日曜日なのがいけないと思うけど……多い時は五十人ぐらいいたんだけどなあ……でも、今の状態の高神姉弟なら、十人だけでも大丈夫かな？……唯一武霊を出せる状態だった礼治も、私との戦いで意志力を限界まで使つてるだろうし……。

「それにしても、本当なんだろうね？」

そうへらへらしながら問い掛けてきたのは、十人の中で私以外に怪我をしていない星波町警察の刑事・東山 賢治さん。

星波町警察の中で、最も強い武霊を持っている武霊使い……なんだけど、常にへらへらししているから、私はあまり好きな人じゃない。

「麗華が武霊を出せない状態にあるってのが、嘘だったら、俺達死んじゃうよ？美羽ちゃん」

「何体か倒している所を見えていますから、嘘じゃないと思います」
「へ〜え？昨日会ったばかりの男なのに、やけに信用しているねえ？」

私の答えに、どこかへらへら度を上げる東山さん。

「私、人を見る目はあるつもりですから」

私がつい、むっとして言葉を言い返すと、東山さんは急に真剣な顔になって、

「惚れちゃった？」

とか言い出した。

「っな！っな！」

驚きのあまりに言葉が出なくなった。

いきなり何を言い出すんだこの人は！

「惚れちゃったんだあ」

再びへらへら顔に戻る東山さん。

っこ、この人はあ〜！！

「東山。美羽をあまりからかわないでくれるか？」

「へいへい」

美春さんの言葉を軽く受け流す東山さん。

ため息を吐いた美春さんは、この場にいる全員を見て、

「召集連絡の時にも言ったが、高神麗華が武霊を出せなくなって
いるのは、私も確認している。黒樹夜衣斗の証言が、嘘か、嘘でな
いかにもかわからず、今が千偶一隅のチャンスである事には変わり
ない……………殺された人達の仇を討つ」

そう言った。

その言葉に、私も含めた八人の瞳に力が宿る。

「殺しちや駄目だからねえ〜」

「……………分かってる」

気楽に水を差した東山さんに、全員の白い目線が集まった。

第一章『武霊のある町』 37

美羽

防御系の能力を持った武霊を先行させながら、私達は慎重に山に登っていた。

夜だと言うのに明かりも付けずに登っているので、暗視能力を持った武霊の力を借りながらだからとても遅い。

なんで一気に攻め込まないのかと言うと、それは『狙撃』される事を防ぐ為。

実は高神姉弟は、『拳銃やマシンガンなどの銃火器を持つてる』。どこから持ってきたのかは分からないけど、前に人海戦術で武霊を使えない状態に追い込んだ時に使われて、何人もの負傷者が出た事があつた。

だから、こんなに慎重に進んでるんだけど……ん〜いくら警戒しながら進んでるからと言っても、結局は廃校までの道は一本道。そろそろ狙撃なり、待ち伏せなり、あつてもいいはずなんだけど……なんだか嫌な予感がする。

他のみんなもそう感じたみたいで、歩みが更に遅くなった。

不意に、どこからともなく呑気な口笛が聞こえてくる。

驚き、構えようとする前に、

「いた！」

と後ろから聞こえた。

不信の視線を後ろに向けると、東山さんが無言で美春さんにどつかれている。

「いたいつて、美春」

「黙れ馬鹿刑事」

口笛の犯人は東山さんだったみたい。

……何やってんだかこの人は……。

廃校校門近くまで、何も起きずに来れた。

何もない事はいい事だけど……今までの事を考えると……とても不気味だった。

「どうします美春さん？」

そう小声で美春さんに問いかけると、美春さんは少し考えて、唐突に校門へと歩き出した。

「つちよ！つちよと美春さん！？」

突然の行動に、慌てて後に続くこうとする私達を、美春さんは手で制し、まるで獣の様に四つん這いになる……片手がギブスで塞がれているから、三つん這い？

「行くよ。コロ丸」

そう美春さんが言うと同時に、美春さんの身体のまわりに半透明のコロ丸が、まるで身にまとっている様に現れる。

レベル3化。

武霊を自分自身に身に付けて、半具現化させる武霊使いの中でも数えるほどしか使えない具現化。最も武霊使いの近くで常に具現化している為か、普通の具現化以上の力を武霊は発揮できる上に、レベル1レベル2ではただ守られているだけの武霊使いが一緒に戦えるようになって、直接武霊を操れるようになる。武霊を身にまとっているから、武霊使い自身も人間以上の身体能力を発揮できる様になるんだけど……その反面、意志力消費が最も高くなるのと、肉体的にも負担が掛かる様になるので、短時間しか使えない。

今の美春さんは怪我をしている上に、昨日、意識を失うまで意志力を使ったって聞いているし、とてもレベル3化を使える状態じゃない。無茶ばかりして……一体何を考えているんだろ？

美春さんの真意に疑問符を浮かべている間に、美春さんはあつと言つ間に校門の向こうに消えてしまった。

緊張が私の周りを支配する。

私はいつでもコウリユウを出せる様に、身構える。

あくびをする東山さん。

全員ににらまれる東山さん。

……この人は……

……何も起こらない。

音もしない。

自警団の人に目線を向けると、困った顔をされた。

どうしよう？

そう思っていると、校門から具現化を解いた美春さんがゆっくりと出て来て、私達に手招きをした。

もしかして……逃げられた？

高神姉弟は、特に姉の麗華は、武霊のその能力もそうだけど、武霊にかなり固執していた。だから、星波町から出る事はないし、廃校以外星波町内で行く場所がない彼女達が、廃校から逃げる事はない。と思っただけ……。

美春さんの手招きに従って校門に近付くと、美春さんは持っていたハンデライトを点けて、光をグラウンドに照らした。

この場にいた全員が驚く気配を感じた。

何故なら、光が照らされてる場所に、高神姉弟が倒れていたから。まるで礼治が麗華を守る様に重なって……

????

自警団が星降り山に集まるより前、夜衣斗が源さんに出会うより前、高神姉弟は廃校のグラウンドに降り立っていた。

意識を失っている麗華を抱え、キゾウの背中から飛び降りた礼治は、ふらふらになりながらも廃校舎に向かって歩き出す。

その瞬間、地面から槍の様に鋭い木の根が飛び出し、キゾウを串刺しにした。

キゾウの断末の叫びに驚き振り返った礼治の目の前で、キゾウは消える。

そして、キゾウが消えた先、廃校の校門に一人の青年が立っていた。

礼治はその青年に見覚えがあった。

「大原………亮！」

その青年・『大原おおはら亮りょう』の背後には、『青い人型のドラゴン』が立っており、そのドラゴンが上げていた片手を下ろすと、キゾウを串刺しにした木の根が消える。

「くそおー！！」

礼治は必死に廃校舎に向かって走り出す。

だが、向かった廃校舎から見覚えのある少女が現れたのを確認して、礼治は足を止めざる得なかった。

その少女の右腕には、小さな龍が巻きついており、竜の頭と共に右手が礼治に向けられている。

礼治は反射的に腰に差していた自動拳銃に手を掛けるが、そんな物は武霊を具現化している武霊使いに、特にこの二人には意味がない事を思い出し、銃を構える代わりに麗華を強く抱いた。

「喰らえ、ブルースター」

亮がそう命令すると、人型のドラゴン『ブルースター』はゆっくり

りと礼治達に近付き、二人を丸飲み出来るほどに口を大きく開けた。

「守れなくて、ごめん。麗華」

そう言って、礼治はさらに麗華に強く抱き付いた。

その時、意識を失っていた麗華が、少しだけ意識を取り戻し、その礼治の思いに応える様に抱き付き返す。

礼治が泣きそうな顔で微笑みを麗華に向けると同時に、麗華と礼治はブルースターに喰われた。

「お前達の業は、俺が引き受ける」

亮がそうつぶやくと同時に、亮は辛そうな表情になり、意識を失った。

意識を失う事を予想していたのか、少女が亮に駆け寄り、倒れる寸前の身体を体で受け止められる。

亮が意識を失った事により、彼の武霊であるブルースターが消え、無傷だが意識を失っている麗華と礼治がグラウンドに落ちた。

「亮」

少女は亮の顔を見ながら名前を呼ぶが、苦しそうに意識を失っている亮は答えるはずもなく、少女は辛そうに亮を強く抱くしかなかった。

第一章『武霊のある町』 39

美羽

高神姉弟が乗せられている救急車の発車音を聞きながら、私は膝に顔を埋めてグラウンドの隅に座っていた。

「大丈夫か？美羽」

心配そうに声を掛けてくれる美春さんに、「はい」と言って笑みを返したけど……美春さんは困った顔をして廃校舎の調査に戻って行った。多分、上手く笑えなかったんだと思う。

救急車に乗っていた医療系の武霊使いの話によると、高神姉弟の二人は、意識を失っているだけだった。ただし、『武霊を失って』。

昨日の田村さんの様に、一度死んで、はぐれ化したなら、その暴走で周囲は壊れてるし、その音とかで麓の人達が気付いて自警団に連絡が来ているはず。それに、高神姉弟を一度殺してわざわざ生き返らせる事が出来る武霊使いの人は私には知らない……夜衣斗さんなら出来るかもしれないけど、人殺しなんて絶対にしそうにない人だし、そんな余力は残って無かったと思う。

……だから、こんな事を出来る武霊使いは、私は一人しかいなかった。

麗華の武霊以外に、『もう一体だけ他人の武霊を奪う事が出来る武霊』がいる。

それは、大原亮の武霊ブルースター。

麗華の武霊とは違って、『武霊使いを殺さずに喰らって、武霊を奪い、その能力を手に入れる能力』だけど、喰われた武霊使いは、『はぐれ化から生き返った武霊使い同様に一ヶ月以上意識を失ったままになる』。

状況から考えて、間違いなく大原亮の仕業……だと思う。

だけど……そうだとしたら……今、大原亮は、私では『想像出来ない様な悪夢に襲われている』はず。

何故なら、ブルースターの武霊を奪う能力を使うと、生きている人から無理矢理奪って取り込むせいから、『その武霊を形作っているイメージの記憶を、追体験してしまうデメリット』があつて……だから、奪った武霊のイメージの記憶が、明るいものだったらいいけど……もし、そのイメージが想像を絶する酷い記憶だったら……人の心が壊れてしまうほどの記憶だったら……。

……どうして……どうして。こんな事を続けるんだらう？

『一ヶ月前の、春休み中に彼が起こした事件』から、私は彼の……幼馴染であり、お兄ちゃんと慕ってた人』の考えが分からなかった。

????

日々繰り返されるのは、他人の欲望のはけ口とされる墮落した行
為。

望む、望まないにも関わらず、その行為を彼女は受け続け、
目が腫れるほど涙を流しても、

声を枯れるほど叫んでも、

手が腫れるほどドアを叩いても、

その行為は強要され続ける。

彼女に許されるのは、欲し続ける事だけ。

ベット以外に唯一あるテレビ。

そこから得られる外の情報。

彼女はただただ欲し続けた。

欲しい。

欲しい。

全部欲しい。

この世の全てが欲しい。

おれも欲しい。

これも欲しい。

それも欲しい。

でも、手に入らない。

何故なら、彼女は弱い人間。

昨日も、今日も、明日も、奪われ続けるだけの弱い人間。

夜衣斗

謎の電動車椅子の男は、喉の傷のせいで本当に喋れないらしく、
電動車椅子に付けられているノートパソコンに言葉を打ち込んで、

自身の代わりに喋らせている様だった。

人工音声なのだろうが、機械らしさは僅かしか感じさせない。かなり興味をそそられるが、今はそんな事を気にしている場合じゃないな……。

俺が今いる場所は、春子さんの家の近くにある小さな公園。

滑り台の柱に背を預け、正面にいる電動車椅子の男と対峙していた。

「「まずは、おめでとうとでも言うべきかな？」」

……そりゃどうも。

「「これで君はまた一つ過酷な運命を乗り越える事が出来たわけだ」」

……まるで俺の運命を知ってるみたいない言ひ様だな。

「「知ってるさ。僕はある程度、予知が出来るからね」」

予知？……超能力者？

「「まあ、言ひ様によつてはそうだな。もつとも、予知出来るとは言つても、『断片的』な上に、『自分に関連する事』以外、見る事が出来ない」」

……つまり、俺の『過酷な運命』つてやつに、『あんたが組み込まれている』つて事か？

「「正確には、『本来昨日死ぬべき君が生き残った事で、僕の運命と交差してしまつた』、だ」」
？

「「今は理解できなくてもいい。だが、これだけは理解して欲しい。僕と君の過酷な運命は、『人の宿命の悪意、もしくはその結果と相対しなくてはいけない運命』だと言う事を」」

人の宿命の悪意？その結果？

「「そうだ。人は、常に宿命の様に悪意をその身に宿し、常に相対しながら歴史を刻み、重ね続けている、そして、人は、その宿命の悪意に打ち勝つて、文明・文化を作り、社会を構築し、国を築き上げた。だか、打ち勝つたからと言って、宿命の悪意が消えたわけ

でもなく、今も人の中で人を呑み込む勢いで肥大化している。意図的に、無意識に」「

………それで………今回のどこ部分に、その宿命の悪意が関わっているって言うんだ？

「………高神姉弟は、星波町に来る前、『地下売春組織によって売春を強要されていた』」「

………はあ！！？

第一章『武霊のある町』 41

????

彼は世界に失望してた。

毎日毎日決まった道で学校に行き、塾へ行き、誰もいない家に帰り、冷たいご飯を食べて、歯を磨き、お風呂に入って、寝る。

毎日毎日。

少しだけ良い容姿に、周りが騒ぎ、羨み、妬んでいたが、彼はどうでもよかった。

何かしたいわけでもない。

将来に希望が持てるわけもない。

どうせ大人になった所で、大して変わるわけでもない。

同じ様に会社に行き、残業をし、誰もいない家に帰り、冷たいご飯を食べて、歯を磨き、お風呂に入って、寝る。

何も変わらない毎日。

そんな未来に、そんな仕組みの世界に、彼は失望していた。

だからと言って、他の生き方に今更なる気はないし、何か楽しみにしている事もない。

彼は、どうでもよかった。

……だから、彼は自分が誘拐されても、どうでもよかった。

例えば、自分を誘拐したのが、地下売春組織だとしても、どうでもよかった。

日々繰り返される残虐で、屈辱的で、人として終わった行為。

同じ様に誘拐された子供達は必死に抵抗して壊されていく中、彼だけは一切の抵抗もしなかった。

環境が変わっただけで、状況が変わったわけでもない。

そう思ってたからだ。

昨日と同じ様に、同じ事が毎日繰り返されるだけ、だから、彼は失望していた。

そんな中、彼を買った客の一人の気紛れで、彼に姉があてがわれた。

勿論、本当の姉弟にしたいわけでもなく、地下売春組織らしい腐った理由で。

最初は、それすらどうでもよかった。

だけど、彼は、そんな環境の中でも、つたないが、まるで本当の弟の様に接してくれるその姉に、心を初めて動かされた。

人としてどこかおかしい。まるで、ずっとこの場所に閉じ込められていたかのようなその姉は、本当の家族にすら向けられた事が無い、不器用で、乱暴で、穢れた優しさを彼に向け続けた。

同じ事を繰り返す日々に、単調で残酷な白黒の世界に、色が付いた。

そして、いつしか彼は、彼女に恋をした。

本当の恋なのかは、彼には分らなかつたが、彼は生れて初めて芽生えたその気持のままに、姉の望むままに、本当の弟の様に接する様になった。

第一章『武霊のある町』 42

夜衣斗

衝撃的な話を聞かされて固まっている俺に、謎の電動車椅子の男は更に衝撃的な事を語り出した。

「……しかも、高神麗華は『生まれた時から』、高神礼治は『誘拐されて』だ」

「な！な！なんだそりゃ！？つと、と言うか、待て待て待て！ここは日本だぞ！そんなふざけた話」

「『ないと言い切れるか？』人の宿命の悪意に晒された事がある君が？」

「っな！」

どうしてそんな事を知っている！？そう思考する前に、電動車椅子の男は続きを語り出した。

「『麗華の両親は、地下売春組織を運営している人間だった。人を人として思わない、全ての価値を金銭で測る人間のクズ。そんな二人が、互いを愛し合って結婚するわけもなく、ただ組織を運営していく上で、都合がよかったから夫婦になった。そんな関係だった』」

「……………」

「『そんな二人の間に産まれた麗華は、当然祝福されるわけもなく、『予定通り新商品が入った程度』にしか思われていなかった』」

「……………気持ち悪い……………」

意志力の使い過ぎとは違う、頭のくらつきが俺を襲い始めた。

武霊とは違う、あまりにも非日常的で、酷い話だから脳が拒絶し始めているのかもしれない……だけど、それを否定できるほど、俺は世界を知らないわけじゃない。

どこかの国では、今現在も親が子売り家を建て、それまたどこかの国では少女少女を麻薬漬けにして洗脳し兵士にする。

そんな話は、この世の中に腐るほどある。

更に過去をも視野に入れれば、それこそ底が見えないほどに……。それらの情報は、あくまで『間接的に知り得た情報』だ。

だが、それが全て偽りだと言えるほど、俺は人間を信じられないし、また人間を知っている。

だから、電動車椅子の男の話を完全に否定する気にはなれなかった。

……ますます気持ち悪くなった。

目をそらしていた残酷な光景のある方向に、無理矢理頭を押さえ付けられて見せられたのだから、当然と言えば当然だが……。

そんな俺の感情と状態が伝わっているわずの電動車椅子の男は、特に気にもせず話を続けている。

「高神と言う名字。麗華と言う名前。それは本当の彼女の名前じゃない」「

偽名だと？

その俺の問いに、電動車椅子の男は首を横に振る。

「彼女は両親に名前すら与えられていない。買われた客には適当な名前と呼ばれ、両親には物としてあれやこれなどと呼ばれていた」「

……。

「彼女が自身の事を高神麗華と言う名前は、彼女に唯一与えられていたテレビで見たアニメ、その登場人物に憧れて付けた様だ」「

……そう言えば、昔見たアニメの中に、高神麗華ってキャラクターがいたような……。確か、とてるもなく大金持ちで、何もかも持っているアニメにありがちなキャラクターだったような……。まさに正反対のキャラだな。

「日々売春を強要されるそんな生活の中でも、彼女は言葉を覚え、心を手に入れていた。しかし、そんな環境で、そんな親から生まれた彼女が、人としての心を持てるはずもなく、多く欠けた心を構築していた。やがて、顧客のニーズに応える形で、誘拐され売春

を強要されていた礼治が弟として麗華にあてがわれた」

平然とノートパソコンに言葉を打ち続ける電動車椅子の男。

俺はいつの間にか気持ち悪さは吹き飛び、身体そこからふつつとわき起こる怒りで、思考にすら言葉が浮かばず、いつの間にか握っていた両手が震え出す。

「麗華の弟としてあてがわれた礼治は、誘拐され、売春を強要されるそんな絶望的な状況の中で、唯一自身に優しく接してくれる麗華に、礼治は恋をし、麗華が求めるままに本当の弟の様に演じる様になる」

……なんじゃそりゃ!?!? ……いや……まあ、考えて見れば、赤の他人である二人が、ずっと姉弟として生活しているんだ。そこに何らかの理由があるのは当然だろうが……恋って……漫画じゃあるまし……ストックホルム症候群か? ……まあ、実際の所は、本人にしか分からない事なんだろうけど……適当言ってる感じでもないし……なんだかな。酷い話の中にそんな話が出てくるとなると、なんだか酷く異質に感じるな……。

第一章『武霊のある町』 43

?????

彼は後悔する事になった。

姉に本当の弟として接する事を。

何故なら、彼が弟として姉に接する度に、姉は人らしさを手に入
れ始め、その度に壊れていったから。

彼は理解し、失念していた事に気付いた。

この場所が普通の人間に耐えられる環境じゃない事を。

壊れなければ、壊れていなければ、更に壊れてしまう。

そして、姉は姉じゃなくなり、全てを壊して、自由になった。

夜衣斗

「そんな礼治に触れ、麗華の心に徐々に人としての心が芽生え
始め、人としての最も根本的な『欲』を持つ様になる。欲しい。欲
しい。つと日々思い、テレビに映る自分の手に届かない全てを欲し
がり、時には客にそれをねだる様になった。だが、例え客から欲し
かったものを貰ったとしても、すぐに両親に奪われた。そして、彼
女は自覚した。自分は弱い人間。ただただ奪われるだけの弱い人間
だ」と

ふつと昔の事を思い出した。程度は大分違うが、俺も『奪われる
だけの日々』を過ごしたことがある。 どうしてこんな目に、どう
してこんな事が起こるんだらう？

そう思った。

今は、それを理解している。

言葉にするとごちゃごちゃと様々な言葉が出てくるが、一言で言
うと、電動車椅子の男が言う様に、人の『宿命の悪意』によるもの
ってことなのだろう。

人の身に常に生じる逃れようのない悪の意思・意識。

人の理性と本能の負の側面。

「だから、彼女は欲し始めた。奪われる弱い人間ではなく、奪う強い人間になる為の力を、欲した。だが、その願いは叶うわけもなく、日々が過ぎ、出来始めていた人としての心は崩壊した……そして、彼女は弱いまま奪う人間になった」

????

だから、彼女は欲しかった。
力が欲しかった。

テレビの中に映る様々な力を。

奪われる弱い人間じゃなく、奪う強い人間になる為の力を。

そう願い続けて、彼女は、彼女じゃなくなった。

そして、願いは叶わないまま、彼女は奪う人間になった。

奪う弱い人間に。

そのままだったら、彼女は全てを奪われていた。

唯一自分のものになった弟すら奪われる。

それが、彼女の本来の結末。

夜衣斗

「三年ほど前にマスコミを騒がせた『商業ビル惨殺事件』の事を覚えているか？」

唐突にそう問われ、俺は眉を顰めたが……すぐに思い出した。結構印象的な事件だったからだ……そう言えば、一週間ぐらいでその事を報道するマスコミはなくなったような……。

「事件の舞台になった商業ビルが、地下売春組織の本拠地だったのが判明し、社会への影響の大きさを考えた政府が、大規模な報道規制を掛けたからな」

報道規制？……なるほど、その地下売春組織に結構な大物が関わっていたんだな。政治家とか、警察上層部とか。

「そう言う事だ」

そう言う話には、ありがちな話だが……実際にそんな事が、しかも、日本で行われていたなんて、思いたくもなかったな……ってか、なんでそんな事をあんたが知ってたんだ？

「勿論、この事件の犯人は高神姉弟だ」
「うわ。無視しやがった。」

「彼女の両親の隙を付いて部屋から抜け出し、両親だけでなく、その本拠地にいた全ての人間、同じ様に売春を強要されていた少女、その少女少女を管理する者達、少女少女を買いに来た客、その全てを殺害し、自由を手に入れた」

「……どうやってだ？そんな事、たった二人で出来るとは思えないんだが？」

「犯罪組織に銃や刃物は付き物だろ？」

「……確かに、そんな物を使えば、出来なくはないだろうが………考えてみれば、公に出来ない商売なのだから、かなりの閉鎖空間で行われていただろうし……何にせよ。随分と甘い管理だったんだな。両方とも。」

「管理は嚴重だったよ。ただ、客が麗華に籠絡されるなんて予想していなかったんだろう。もつとも、その籠絡された客も、入口付近で殺されていたがな」

なるほど……馬鹿な男だな。

「いや、女だったよ」

……………

?????

唯一壊されなかった彼は、姉が求めるままに姉の後を付いていき、覚悟していた。

このままでは、また、あの単調な日々に戻ると。

彼は世界を知っていた。

再び失望しかけた時、姉と彼は、辿り着いてはいけない場所に辿り着いた。

これで単調な日々に戻らなくて済む。
そう思った。

そして、同時に理解した。

姉は、『この場所』で『更に壊れる』と。

夜衣斗

「自由を手に入れた麗華は、礼治と共に町から町へ、犯罪を重ねながら移動し、追われ、やがて導かれる様に星波町に来てしまう」

導かれる様に……ね。

「その直前まで彼女は諦めていた。弱いままの自分は、やがて全てを奪われる。っと。だが、星波町に来て、彼女は手に入れてしまった。武霊と言う力を。欲しても、欲しても手に入らなかった力を。そして、彼女は力に依存した。心の望むままに、欲し続けていた力そのものの姿をした武霊を手に入れる為、武霊使いを襲う様になった」

……なるほど、だから、奪った武霊のほとんどがテレビとかで見た事がある姿形だったわけだ。

???

何も無くなる。

そうなるはず。っと彼女は思っていた。

武霊つと言う、まさに彼女が渴望していたそのものと言える存在・武装守護霊に出会うまで。

そして、彼女は狂喜した。

その『武霊のある町』には、彼女が欲しかった力そのものが『いた』のだから。

そして、彼女は更に壊れていった。

唯一の家族であったはずの弟をないがしろにしかけながら。

更に壊れた姉は、彼を徐々にないがしろにし始めていた。

それでも、彼は姉が求める弟を演じ続けた。

彼は理解していた。

そうしなければ、姉が更に壊れる事を。

姉の精神は誰かが守らなければ、あっさり崩れ去るほど脆い事を。

だから、いずれ終りの来る二人の偽りの姉弟の生活を、全てが壊れるその時まで、守ろうと彼は決めていた。

彼女は全てを失った。

思いもしない。たった一人の武霊使いによって、彼女は全てを失った。

そう思った。

でも、彼女の目の前に、弟が現れた。

「守れなくて、ごめん。麗華」

そう言われた時、彼女は理解した。

ああ、最も欲しかったものを、私はすでに手に入れていた。っと。

第一章『武霊のある町』 44

????

大原亮は目を覚ました。

悪夢の様な高神姉弟の断片的な記憶。

それを見たせいで、うなされていたのだろう。

着ている服はぐっしりと濡れ、頬には涙の気配があつた。

周りを見まわし、ここが自分の部屋である事を確認した亮は、着替える為に寝かされていたベットから出ようとした時、部屋に誰かが入ってくる気配を感じた。

亮が視線を向けると、そこには亮と共に高神姉弟と対峙した亮の恋人・朝日あさひ 竜子りゅうこがタオルと洗面器を持って立っていた。

「りゅう」

亮が竜子つと言おうとした瞬間、竜子から洗面器を思いっきり投げられ、頭にクリーンヒットする。

水も入って為、ベットまでもがぐっしりと濡れてしまった。

「いき」

いきなり何をする！？と言う前に、竜子にタックルに近い勢いで抱き付かれ咳き込む亮。

ぎゅっと強く強く抱き付く竜子。

「竜子。濡れるって」

「馬鹿！馬鹿亮。心配したんだかね！」

亮の言葉を遮って、竜子は怒鳴る様に言葉を重ね、抱き付いたまま、きつと亮を見上げ睨み付ける。

その竜子の目に涙が溜まる。

「馬鹿だな。心配する事も、泣く事もないだろ？……いつもの事なんだから」

そう言つて竜子の頭を撫でる亮。

「いつもの事じゃない！今回は普通の武霊じゃなくて、精神異常

者の武霊を喰ったんだよ！うなされ方も以上に酷かったし！もし！もし！亮が飲まれちゃったら！！もし！亮が変わっちゃったら！！」

そこまで言っつて、竜子は亮の胸に顔を埋め、声を上げて泣き出した。

「ごめん。ごめん竜子」

そう謝りながら、亮は竜子の頭を撫で続けた。

(それにしても……)

心の中で亮は先ほどまで見ていた高神姉弟の断片記憶を反芻した。非常に不愉快で、怒りの込み上げてくる過去だったが、ある意味では亮の予想の範囲内だった。あれほど狂った人間を生み出すなら、それくらいの過去があるはずだと思っていたからだ。

だから、そんな記憶より、亮は気になる事があった。

麗華の記憶の最後に少しだけ出てきた、麗華をあそこまで追い込んだ武霊使い。

(初めて見る顔と武霊だった……そうか、あいつが昨日、美羽と一緒にはぐれ化した剛鬼丸を倒した例外武霊使いか……名前は……黒樹夜衣斗だったか？……気の毒に……こんな『絶望的な町』に来てしまうなんて)

夜衣斗

……あんたの言う人の宿命の悪意。確かにそれが俺に関わったのは分かったが……さっきあんたは言ったよな？俺が死ぬべき所で死ななかつたから、あんたの運命と交差したって……つまり、同じ運命を背負っているって事だろ？なら、俺の過酷な運命ってやつを、あんたがどうにか出来るんじゃないのか？……正直、昨日今日みたいな事が毎日起こるなら、俺はそれに生き残る自信は全くない。

「……なんとかしてやりたいのは山々だが……無理だな」「無理って……何でだ？」

「確かに君の運命と僕の運命は交差している。だが、だからと言つて、君の運命と僕の運命が重なっているわけではない」

……要するに、大河（運命）の中をそれぞれ離れた場所で泳いでいるって事か？

「そう言う事だ……本来なら、今回の事に僕は一切関与しなくてもよかつた。だが、放つて置くと、僕の運命の決着が、予想していた時間以上に掛る事を予知した。だから、君の手助けをした」

つまり、俺の行動次第で、あんたの運命も変わり、俺が死ぬ事で、あんたの望む未来に辿り着けにくくなるか？……俺はあんたの風除けかよ。

「まあ、そう言つても過言ではないな」

……あんた……一体、何者なんだ？……もしかして、俺に運命を変えられる選択つてのをくれた奴なのか？

「そんな力を持っているなら、とつくに自分で使っているよ」「まあ、そうだろうな。」

「だが、君にその選択を与えた人を、多分、僕は知っている……もつとも、それに確証はない。だが、そんな事を出来る人を、僕は一人しか知らない」

誰なんだ？

「「知った所で、今の君には意味のない事だと思うが？」」
「「そりゃそうだが……」」

「「そもそも選択を与えられているなら、その時にあの人と会っているんじゃないのか？」」

「「……覚えてない。」」

「「……そうか……そろそろ時間だな」」

時間？

「「言っただろ？僕には僕の運命があり、君と同様にその運命と戦っている」」

「「……なるほど。」」

「「心配しなくても、可能な限りだが、君の手助けをするつもりでいる」」

それはありがたいが……何にせよ。逃れようがないわけだ。逃げて、忘却現象で逃げた理由を忘れるだろうし、親に説明すら出来ない……か……嘘を吐くのも苦手だしな……ってか、今気付いたが、いや、さっきから気付いていたが……名乗れよな。俺の名前は知ってたんだから。

「「すまないが、今の君には教える事が出来ない」」
「「なんだそりゃ？」」

「「代わりに、これだけは教えよう……君と僕との運命が本来重なり合うのは、君が『全ての運命を乗り越えた先』にある」」
「「……ん？なんだか、それって……」」

「「そう。僕は……君の、『最後の敵』だ」」

第一章『武霊のある町』 46

美羽

大原。

そう表札が掲げられている家の前で、私は立ち尽くしていた。

夜なのに、その家には光は灯っていない。

それもそのはず、今、この家には誰もいないのだから……。

亮兄さんは春休みに起こした事件以来、人前から姿を消している

し……。亮兄さんのお父さんは早くから病気で亡くなっているし、

お母さんは仕事で世界中を飛び回って中々帰ってこれない。だから、

この家は、今は無人。

それでも、つい、この家に来てしまった……。

高神姉弟は病院に搬送されて、目覚めるまで警察の監視下の下に入院させる事になった。

予定とは違うけど、これで星波町が抱えていた問題の一つが解決できた……けど……。亮兄さんが何のつもりで武霊の能力を集めているか分かってないから……。自警団の人達は口にはしないけど、不安そうな顔をしていた。

でも、捕まる様な武霊犯罪行為は一切していないから、警察も自警団の人達も亮兄さんをつまえるわけにもいなくて……。やっぱり、あの時、無理をしても、私が亮兄さんを止めるべきだったのかな？……でも、あれ以上、戦ってたら……。

自分の思考がどんどん暗い方に落ち始めていた時、ふっと人の心配がしたので、気配のした方向を見ると、先に家に帰っていたはずの夜衣斗さんがそこにいた。

夜衣斗

俺はちよっと思ひ違いをしていた。

美羽さんには暗い所がない人だと、笑顔を絶やさないと思っ

てた。

……だけど、あの自称最後の敵と別れて春子さんの家に帰っている途中、電気の点いていない家の前で見かけた美羽さんは、まるで別人かと思うほど暗い顔をしていた。

俺の気配に気付いて、俺の姿を確認した途端、笑顔に戻ったが、やっぱりどこか影がある。

多分、影を落としている原因であろう家の表札を見ると、大原つと書いてあった。

……色々と考えは付くが、深い詮索をするのは得策じゃないな……それに、美羽さんにとつても触れて欲しくない事かもしれないし……って、だったら、気付かれない様に別の道を探すんだっとな……やっぱり俺は配慮が足りない。こんなんだから、女性に好かれな……いんだろう……とにかく、ここで突っ立てるわけにもいかないの……で、

「帰りましょう。美羽さん」

そう俺が言うと、美羽さんは少し驚いた様な顔をして……頷いた。

第一章『武霊のある町』 47（終）

美羽

とぼとぼと歩きながら、私はちらちらと夜衣斗さんの方を見ていた。

夜衣斗さんは無言で、私の歩調に合わせて歩いていてくれる。私がどうしてあの家の前で立ち尽くしていたのか、夜衣斗さんは何も聞いてこなかった。

今の私にはそれはとてもありがたい事だけど……でも、言うべき事なんだと思う。

だって、夜衣斗さんは麗華に襲われた。だから、彼女がどうなったかを知る権利があると思うから……でも、高神姉弟の事を話したら、亮お兄ちゃんの事を話さなくちゃいけなくなる……私の口から、亮お兄ちゃんの事を、夜衣斗さんに言いたくなかった。

理由は……よく分からなかった……何だか、胸がもやもやしてて……私は、つい、ため息を吐いてしまった。

夜衣斗

……それにしても……何だったんだろう？あの自称最後の敵。色々と納得できない別れ際、あいつは、

「高神姉弟の事だが、安心してくれていい。君のほぼ思惑通り、警察に捕まっているからな……二度と君が襲われる事はないだろう」

そう言っただけかへ帰って行った。

少し気になる言い回しだったが、あの女に二度と襲われる事が無いのは、美羽さんが無事な事からして間違いないだろう……まあ、もつとも、最後の敵の言葉が正しければ、これから俺は今回の事の様な目にまた会う事になるんだろうな……死んだほうがよかった

と思える過酷な運命ね……………。

……………どうして俺がこんな目に遭わなくちゃいけないんだ？
そう思って、つい、ため息が漏れてしまう。

?????

同時に吐いたため息に、夜衣斗と美羽は驚いて互いの顔を見合わせてしまう。

あまりにもいいタイミングだったので、互いに目を瞬かせて沈黙。ほどなくして、どちらからともなく笑い出してしまう。

夜なので互いに声を押し殺して笑う二人。

ひとしきり笑った後、どちらからともなく笑うのを止め、ちょっと気まずそうな顔に互いになった時、美羽の携帯が震え出した。

美羽の母親からのメールで、

<夜衣斗君の歓迎会の準備、とつくに終わってるから、早く帰っておいで>

つと言う内容だった。

色々あって、すっかり歓迎会の事を忘れていた美羽は、慌てて夜衣斗の手を取った。

いきなりの美羽の行動に、驚く夜衣斗。

「急いで帰りましょう。夜衣斗さん」

わけも説明せず、やや強引に夜衣斗を引っ張って美羽は駆け出す。夜衣斗は何が何だか分からないまま、半ば引きずられる形で走り出し、苦笑と共に再びため息を吐いた。

第一章『武霊のある町』47(終)(後書き)

これで武装守護霊の第一章『武霊のある町』は終了です。

次は第二章。っと言っわけではなく、その間の話『間章その一』になります。

タイトルは『星波学園の人々』です。

第一章に引き続きこちらも読んで頂けると幸いです。

間章その一 『星波学園の人々』 1

夜衣斗

昨日は色々和最悪だった。

そう思いながら、俺は初登校の準備をしていた。

最悪の犯罪武霊使いとか呼ばれていた高神姉弟に襲われるわ、その二人の最悪の過去を聞かされるわ……極め付けは、叔母でありこれから何年かお世話になる春子さんが……家事全般が全く出来ない事を知った事だ。

前者二つとは最悪の種類が全く違う上に、あまりにも日常とかけ離れているから、頭では後者より最悪だと思っっているが……正直、実感が湧かない。だが、後者のその事実は生活と直結している上に、ある意味死活問題な事なので……もう、本当に最悪だった。

それは、昨日の夜、お隣の赤井家が俺の歓迎会をわざわざしてくれた時の話だ。

そんな事をされたのは初めてだったし、美羽さんの両親も美羽さん同様にとっても明るくていい人達だった。ので……何と云うか、かなり居心地が悪かった。と云うか、何でただのお隣と言っ関係で、ここまでしてくれるのか謎だったし、それを、まるでいつもの如く平然としている春子さんが謎だった。

っで、その理由は、歓迎会中に暴露された。

「ところで、夜衣斗君は知ってるの？」

と美羽さんのお母さん美衣みいさんがそう話を切り出した。

その時、にやははっと笑いながら美羽さんのお父さん羽流はるさんと酌を交わしていた春子さんの動きが固まる。

それに疑問符を浮かべつつ、美衣さんに視線を向けると、面白そうに笑いながら、

「春ちゃんが」

春子さんの事を美衣さんはそう呼んでいるようだ。

「ぜんぜん家事出来ない事」

一瞬、言っている意味が分からなかった。

何故なら、俺は母親から春子さんが、昔は駄目だったが、今は立派に自立している女性だと聞いていたからだ。

ちよつとの間を置いて、美衣さんの言葉の意味を理解し、絶句した。

……まあ、もともと喋ってなかったが……。

「春ちゃんがこつちに引越してきた頃にね。春ちゃん、あの借家を、ちよつとしたゴミ屋敷化しちゃってね」

じろつと春子さんを見ると、春子さんは思いっきり目を、と言っか顔を逸らした。

「軽い騒ぎになっちゃって、家主さんは怒るわ、春ちゃんは泣き出すわで、大変だったなあ」

……

「っで、あーだこーだしている内に、私が春ちゃんのお世話をする事になったの。そこから、もうなんだか、手のかかる妹が出来たみたいで……本当の家族同然に付き合ってるのよ」

聞いてないな……そんな話……とりあえず、

俺は無言で、携帯を取り出し、母親の携帯にリダイヤルしようとして、物凄いスピードで春子さんに抱き付かれた。

酒臭いは、胸が当たってるわ。脳みそ大混乱。

「姉さんには報告しないでえ〜今の生活を知られたら、私、姉さんに殺されるう〜」

……どんなイメージだ。そんな人じゃないぞ。俺の母親は……多分。

「別に大変じゃないから、気にしなくていいのよ」

と苦笑しながらそう言う美衣さん。

そう言われても……これから、春子さんじゃなくて、お隣とは言え、赤の他人の美羽さんのお母さんにお世話になる事になると考

えると……はあ、無茶苦茶気が重いし、恥ずかしい。

そんなわけで、朝食を赤井家で春子さんと共にいただいているわけ……。

ご飯・お麩とわかめのお味噌汁・ベーコンエッグ・レタスのサラダ・オレンジジュース。

なんだか、久しぶりにまともな朝食を食べた気がする。

俺の両親は、仕事の関係上、家を空ける事が多かった。

昔は、俺が物心を付くか付かない頃まで、仕事の度に引越していたらしく、それでは息子の精神教育上よくないんじゃないかって事で家を買ったらしいんだが……まあ、それで一緒にいられる時間が、出張とかで大幅に減ってしまった訳だから……どっちがよかったのか……今の俺にはよく分からないな。どっちでも『失敗』してそうだし……それにしても、ジャージ姿じゃない美羽ってのは……いや、まあ……それにしても、急な転校だって言うのに、何で俺の制服が既に用意されているんだろう？着といてなんだが……普通、転校したら何日かは新しい制服が出来るまで、前の学校の制服で登校するってのが、一般的なんじゃ？教科書とか学校に必要な物も全部そろってたし……まあ、まんがとかからの知識だから、当てにはならないが……。

そんな事を考えつつ制服を気にしていると、美羽さんがそれに気付いたのかくすりと笑って、

「夜衣斗さん。ここがどんな町か、もう十分過ぎるくらいわかってるでしょ？」

……なるほど、服作りとか物作りが得意な武霊がいても不思議じゃないな……ってか、本当に俺って考えが読まれやすいんだな……それとも、美羽さんが考えを読むのが得意なんだろうか？……後者であつて欲しい。いや、マジで。

今までの事を走馬灯の様に思い出しながら、俺は溜め息を吐いた。

「駄目じゃない夜衣斗君。朝から溜め息なんか吐いちゃって」

と言って笑う美衣さん。

「……すいません」

何となく対応に困って謝ってしまった。

間章その一 『星波学園の人々』 2

美羽

「お母さん。いってきまーす」

「はい、いってらっしゃい」

お母さんといつものあいさつをしてから、夜衣斗さんの方向を見ると、春子さんがチューの姿勢になっていて、無言で夜衣斗さんは春子さんの頭にチョップしていた。

昨日から、夜衣斗さんの中での春子さんの評価はダダ滑りだろうなあ…………… 自業自得だから仕方ないけど。

夜衣斗さんは「いたあくい」って言うって頬を膨らました春子さんのため息を吐いてリビングから出ようとした。

その背中に、困った子ねつと言いたい感じの笑みを浮かべてお母さんが、

「夜衣斗君。いってらっしゃい」

そう優しく言った。

夜衣斗さんはびっくりしてから、ゆっくりと振り返って、前髪で見えないけど、多分、目を瞬かせてお母さんを見ている。

少しの沈黙の後、

「……………いってきます」

夜衣斗さんはなんだか恥ずかしそうあいさつして、私と一緒にリビングを出た。

「初登校ですね」

家から出て星波学園に向かう途中、私がそう話しけると、夜衣斗さんはぎこちなく頷いた。

緊張しているのがまる分かり…………… ちょっと可笑的い。

あ！そうだ。学校に近づく前に、これを言っておかないと…………… 危うく『大変な事』になる所だった。

「夜衣斗さん。部活はどこに入るつもりですか？」

私のその問いに、夜衣斗さんはちよつと考えて首を横に振った。ふむふむ。帰宅部ですか……これはチャンス！

「じゃあ、夜衣斗さん。私と一緒にのぶ」

部活に入りませんか？と言いつ切る前に、私の星電が震えた。

何だか嫌な予感がしたので星電を見ると、案の定、掛かってきた相手は今一番掛ってきて欲しくない相手からだった。

「ごめんなさい。夜衣斗さん」

一言謝ってから、私は星電にむすつと出た。

「おはようございますですわ。赤井さん」

聞くだけで頭にくる声が星電から聞えてきた。

「ええ、おはようございます。殊更さん」

「だ！誰が殊更よ！！ぶつころしますわよ！！」

あだ名を言つてやつたら激怒する琴野。

彼女は星波学園全体の生徒会である星波学園統合生徒会の生徒会長であり、星波学園理事長・琴野（こしの） 優香（ゆか）の孫娘・琴野（こしの） 沙羅（さら）。要するに星波学園で最も偉い生徒なだけ……どう言うわけか、よく私に喧嘩を売ってくる。

星波学園で彼女と私で一二を争う武霊使いつて言われているせいか、あまり統合生徒会と仲が良くない自警団……星波学園の武霊使いのほとんどが町の外から来る武霊使いだから仲が悪いみたい。と言つても、はつきりと対立しているわけじゃないけど……の要請を私がよく受けているせいか、兎に角仲が良くない。会う度に火花を散らしてるし、毎回毎回武霊を使った喧嘩に発展してる。

そんな仲が悪い琴野が私に電話を掛けてきた理由は……。

「まったく！あなたと会話を交わすと不愉快で堪りませんわ！！」

「私もよ」

「……ですから！用件だけ言いますわ。分かつてると思いますが、監視から連絡がありましたの。あなたが『条約』を破りそうだと」

やっぱり……相変わらず素早い対応……もっと早くに言っとけばよかつたかな？もう手遅れだけど。

「わかってますわね。例え学園の外であろうと、あなたは仮にも我学園の代表たる生徒の一人なのですのよ。ですから、ルールはルールとして守っていただかなくては……よろしくて！」

「はいはい。わかりました」

「分かればよろしい」

そう言っただけで挨拶も無しに琴野は通話を切った。

……ほつんとに腹立つ奴！！

いらいらしながら星電を仕舞う。

……それにしても……どうしよう。これで、夜衣斗さんは、『明日から大変な目に遭う事が決定』しちゃった……とりあえず、

「ごめんなさい夜衣斗さん」

そう謝る私に、何で謝られているのか分からない夜衣斗さんは首を傾げた。

間章その一『星波学園の人々』3

夜衣斗

普通、中学・高校の転校は、学校見学やら、転校試験やら、転入手続きやらと色々である……らしい。ネットで調べた感じだと、そんな風にも書いてあったので、通常はそうなのだろう。

けど、星波学園に転入手続きをしてくれた春子さん……ではなく、美衣さんの話（電話でのやりとりでは春子さん自分でしたと言ったが、昨日の歓迎会でそれも嘘だと言う事が判明した上に、春子さんの代わりに美衣さんがしてくれたとも判明した。両親の代わりに春子さんの代わりに美衣さんが俺の転入手続きをしてもよかったんだろうか？そもそもそこからおかしい様な……）によると、星波学園は『来る者拒まず、去る者追わずの基本方針』らしく、転入に学校見学の必要性も無く、転入試験も無いらしい。学力に自身がない俺としては、かなり助かった事は助かったんだが……そんなんで、学校としていいんだろうか？……まあ、この学校がある町の特殊性を考えれば、そうでもしないと学生が集まらないって事なんだろうか？

……どうか不良が大量にいませんように。

などと祈りながら、俺は美羽さんと共に学園大橋を渡っていた。

周囲には同じ様に徒歩で星波学園に向かっている小学生から大学生までいて、かなり広く作られている学園大橋が狭く感じる。

……なんだか緊張するな。

転校なんて初めての事だから……てのもあるが、何より一昨日・昨日の事だ。

かなり目立つ事をしたわけだから、目立つのは間違いない。

それは、目立つ事とは無縁の生活を今までしてきた俺には、かなりの負担になっている。

「大丈夫ですよ」

不意に美羽さんがそんな事を言った。

「星波学園のほとんどの生徒は、町の外からの人達ですから」

……なるほど……って事は、忘却現象の影響で、一昨日・昨日の事をほとんどの生徒が知らない訳だ。

冷静に周りを見て見れば、誰もこっちを見ていない。自意識過剰だったわけだ……恥ずかしい。

「でも、朝のホームルーム終わりぐらいには、全校生徒に知れ渡ってると思いますよ。顔写真付きで」

……マジですか……ってか、顔写真付きって……

「星波町に住んでる学生の武霊使いの中に、何人が隠密が得意な武霊使いがいますから……」

そう言う美羽さんの目に一瞬怒りの炎が浮かんだような……盗撮でもされたのか？

間章その一『星波学園の人々』4

夜衣斗

学園大橋を抜けた先に、五つの大門があった。

「学園大門です」

そう言つて、美羽さんはさっさと真ん中の門へと向かう。

俺も美羽さんに続き、門の脇に立っている警備員らしき人と、風紀委員らしい小中高の学生を発見した。

その風紀委員を見た時、腕に付けられている腕章の文字に、俺は首を傾げた。

腕章には『武装風紀委員会』と書かれていたからだ。

俺のその疑問の視線に気付いた美羽さんが、俺に近付き、小声で、「あの人達は、星波学園統合生徒会直属の実働部隊です」

統合生徒会？小中高大の生徒会が一つになつてゐるって事か？つてか、直属の実働部隊？

「昨日も言いましたけど、星波学園は星波町の中で最も武霊使いが多い所です。当然、武霊に関するトラブルは毎日と言つてもいいほど起きてます。そのトラブルをいちいち自警団の人達を呼んで解決するわけにもいきませんから、星波学園生徒会は星波学園の生徒で構成された自警団を作つて、学園内で起こったトラブルの解決をさせているんです」

……なるほど……それは分かつたんだが、何でこそそしなくちゃいけないんだ？

「とにかく、夜衣斗さん。ちゃんと『生徒カード』を持ってきましたか？」

などと言いながら、美羽さんは俺を上手く引つ張つて、他の生徒の影に隠れて武装風紀委員に見えない様に門の中へ入った。

……仲が悪いのか？

生徒カードとは、星波学園の全生徒に生徒手帳と共に渡される身

分証明カードで、ICチップが内蔵されており、学園内限定で電子通貨としても使えるらしい。

登下校時には、このカードを使って、生徒の登下校状況を確認するらしいが……。

門の途中に、駅とかで見かけるような自動改札機がいくつもあるのを見つけた。

そこを生徒がカード入れなどをかざしながら、次々と通っている……なるほど。

俺は胸ポケットにしまっていた生徒カードを取り出した。

生徒カードつと言っても、俺のカードは顔写真の所に仮つと文字が書かれている仮生徒カードで……なんでもこればかりは代理でやるわけにもいかないらしく、本人が直接事務所に言って作ってくる必要性があるらしい。

……今さらだが、本当に普通の学校じゃないって事を実感してきたな……ん？カードで生徒の登下校を確認する学校は他にもあったか？……まあ、どうでもいいか。

などと思いつつながら、自動改札機を通り、大門を抜けると……一瞬、俺は今、どこにいるのか忘れてしまつた光景が目の前にあった。

様々な花や木が咲き乱れ、噴水や石像が所々にある……まるでどこぞの金持ちの庭園の様な……。

「驚いたでしょ？ここ、学園庭園って名付けられているですよ……なんでも、理事長の趣味兼園芸部とかフラワーアレンジメント部とかが異常なほど気合いを入れて造ってるとか」

………うん。やっぱり、普通の学校じゃねえや、こじ。

間章その一 『星波学園の人々』 5

夜衣斗

学校の事務所は、大体がその校舎の一階にあるものだと思っただけど、星波学園の事務所は小中高大の事務所が一つの建物に纏められて人工島のほぼ中央にあった。

まあ、ここを普通の学校の基準に当てはめるのは無理があるから、その事には対して驚きはしなかったが……と言っか、ここに来る途中に見かけた学園大講堂の大きさと、理事長兼学園長宅の豪華さには驚きと言うより呆れ疲れてしまったからかもしれないが……。
……にしても、どれだけお金が使われたのか見当が付かないな……。

何だか深いため息が出た。

事務所棟で生徒カードを作って貰い、とつとと事務所棟を後にする（仮カードを渡して写真を取って、静脈・指紋・網膜登録をして、10分もせずに出来た）。

高等学校校舎職員室で、俺の担任になる先生が待ってるらしいので、美羽さんの案内でやや急いで高校に向かう。

途中、やたらとでっかい学生寮と学園警備棟の横を通り、学園庭園を再び通り、やたらと長い船着場の横にある道を通る。

同じ様な小学校・中学校の校舎の横を通り、一番奥の高校に辿り着いた。

ちらつと横目で見たが、それぞれの校舎に体育館・室内プール・グラウンドが付いている様だった。

多分、元々空港として造られた人工島だから、場所が余ってたんだろうが……何だか勿体ない様な気がしないでもない……貧乏性だな俺。うん。

途中に事務所棟に寄ったせいか、さつきから他の学生を見かけていない。そろそろホームルームの時間って事だろうな……って、

それはまずくないか？俺じゃなくて、美羽さんが。

「……………美羽さん。後は一人で大丈夫ですから、案内はここまででいいです」

俺にそう言われ、ちよつと驚いた様な表情をする美羽さん。

……………まあ、確かに、俺が自主的に喋るのは珍しい事だが……………。

「えつと、そうですね。私もそろそろ自分の教室に行かないといけないですよ……………私、一年B組ですから、何かあったらB組に来て下さいね。あ！分かってると思いますけど、昨日教えた携帯番号には、武霊関連の話は使えないですからね。えつと、それから……………」

分かってるって……………心配し過ぎ、君は俺のお母さんか……………

俺が呆れた目線を送っていると、照れた様に笑ってじゃあつと言った感じで手を上げて、小走りで生徒用下駄箱に走っていた。

……………先生か……………どうか、変わった先生じゃありません様に……………。

間章その一『星波学園の人々』6

夜衣斗

「初めまして黒樹夜衣斗君。私が君の担任の高木弥恵よ。よろしくね」

そう言って頬笑み、手を差し伸べた高木先生は、何故か大きめのサングラスを掛けていた。

サングラスで目元が隠れ、顔に僅かなしわがあるが………間違はなく美人な先生だった。

美人である上に、今まで握手を求められる事をあまり体験した事がなかったので、かなり緊張しつつ、手を差し出す俺。

ちよつと間があつた。

何故か互いに手を空中に差し出したまま固まっていた。

俺が？マークを浮かべる前に、ちよつと困った様に、

「ごめんなさい。私ね、目が全く見えないの」

そう言つて、サングラスを少しずらす高木先生。

ずらしたサングラスの向こうに、思わず目を見開くような酷い傷跡があつた。

ずらし方が絶妙だったので、目がどうなっているか分からないが………これだけの傷跡だ。もしかしたら、義眼になつているかもしれない。

……なるほど、だからサングラスを掛けているのか……

今気付いたが、高木先生の机には杖が立て掛けられていた。

ちよつと考えれば気付いただろうに………俺もまだまだだな。

などと考えていると、差し出したままの手が握られた。

驚いて握った相手を見ると、高木先生だった。

目が見えなんじゃないのか？

と疑問に思つたが………よくよく思い出してみると、こんだけ近いのだ。多少手を彷徨わせれば、手に当たる………の割には、ジャスト

で握手された様な……

「驚いた？私、ずっと目が見えないせいか、ちょっと集中すれば
気配で人の位置とかが分かるの」

……なんだか武術家みたいな人だな……

「後ね。黒樹君。相手から握手を求められている時は、自分から、
それほど間を置かずにするのがマナーよ」

「………すみません」

「わかればよろしい………じゃあ、教室に行きましようか？」

夜衣斗

身体のだよかの器官が失われれば、他の器官がそれを補おうと発達する。って話は聞いた事があるが……何と言うか……高木先生は凄かった

俺に先行して教室まで歩いたのだが……杖を突きながらだが、健常者と変わらないスピードで歩き、階段もさつさと歩く。本当は見えてるんじゃないかと疑いたくなる。

なんでも、十年以上、この学校の創設時からいるから、もうどこになにがあつて、なにがないか覚えていそうだ。

……漫画とかでしか見た事がない様な人だな……。

などと持っている、これから俺が日々通う事になる教室の前に付いた。

各教室を閉めると曇りガラスになる特殊なガラスで、廊下と教室が隔たせてあるらしいんだが……当然、曇りガラス状でも影は見えるので、ここに来るまでかなりの視線を感じた。しかも、通つた後、必ずがやつきがあり……どうやら、美羽さんの言つた通り、本当にもう俺の話は広がつてらしい。

目の前にある教室からも、視線を物凄く感じる上に、がやつきも一際大きく聞こえてくる。

高木先生が教室のドアを開けると、ぴたりとがやつきは消えたが……何だか入るのが物凄く躊躇われる。

……ああ、心臓が痛い。胃がきりきりする……帰りたくなつてきたな。

そんな事を思っている事を知らない高木先生（先生だから気付いてはいそつだが）は、教室のドアを開けてさつさと中に入る。

教室のドアが開かれた瞬間、曇りガラスが一瞬でクリアになつたので、向けられていた視線をダイレクトに感じ、つい生唾を飲んで

しまった。

……マジで帰りたい。

「黒樹君」

名前を呼ばれたので仕方なく教室に入る。

「ホームルームを始める前に、紹介するわね。ご両親の都合で星波学園に転校してきた黒樹夜衣斗君よ。名前を黒板に書いてくれる？」

そう言っつて高木先生は黒いチョークを俺に渡した……黒いチョーク？

よく見るとチョークではなく、チョーク型のデジタルペンだった。そして、黒板も液晶タッチパネルになっている様で……どこから資金を捻出してるんだらうか？

「黒樹君？」

高木先生の呼び掛けに促され、俺は液晶黒板に名前を書いた。汚い字なので恥ずかしくなる。

「……黒樹夜衣斗です……よろしくお願いします」

「はい。じゃあ、窓側の一番後ろにあなたの席を用意してあるはずだから、その席に座ってくれろ？」

視線を言われた場所に向けると、確かに席が一つ空いていた。ドキドキしながら空いている席に着く。

……窓側の一番後ろって……いや、まあ、どうでもいいか。

夜衣斗

ホームルームが終わり、高木先生が教室から出ると同時に、前の席に座っていた茶髪ネコ目の男が椅子を反転させた。

……この学校ってかなり校則が緩いみたいだな。さっき教卓から教室全体を見た時、この男みたいに茶髪もいれば、ピアスをしている者もいたし、女性は薄く化粧もしている様だった。

「俺、村雲^{むらくも} 勇人^{ゆうと}ってんだ」

と茶髪ネコ目の男・村雲は親しげに声を掛けてきた。

こういうタイプは苦手なので（まあ、得意なタイプなんかいないかもしれないが）、ちよつと戸惑いながら俺は頷いた。

「聞いたぜ。この町に来て直に武霊使いになった上に、あの剛鬼丸とか、高神姉弟を倒したんだってな」

その村雲の問いに、教室中の視線が俺に集まる。

っう！？勘弁してくれ……………。

「いや、俺もこの間まで武霊使いだったからよ。あの連中の強さは半端じゃねえの知ってんからよ。マジすげえな」

？……………武霊使いだった？はぐれ化が起こる程の怪我を負ったって事か？

「……………実を言うとよ。俺、春休みの時に武霊を奪われててよ。先週まで意識不明で病院に入院してたんだよ。つま、だから、黒樹と一緒にこのクラスに慣れてなくてよ。同じ状況の奴が出来てほっとしてんのよ……………まあ、そんな訳で、慣れてねえもん同士、仲良くやろっや」

まあ、仲良くする事はやぶさかじゃないから、とりあえず頷く。

……………それにしても……………どうやら、高神麗香以外にも武霊を奪い取れる武霊使いがいる様だ。しかも、こっちは無傷で奪えるタイプ……………か。んゝ関わりたくないが……………この町にいる限り、関わらないっ

て事はないだろうな……ため息が出る。

間章その一『星波学園の人々』9

夜衣斗

………つてか、普通、転校生が転校してきた初日は、質問攻めにあうのが通例なんじゃないのか？………何だかクラスメイト達は、こちらの様子をちらちらと見ては、こそそと会話を交わしてはいるが、こっちに来る気配はちつとも無い………まあ、期待してはいたわけじゃないし、来られてもまともに会話が出来るわけじゃないから、助かる事は助かるが………警戒されているのか？………それともこんな暗い奴とは会話をしたくないとか？

クラスメイトに視線を向けている俺の視界の隅で、村雲が苦笑した。

その苦笑の意味が分からず、視線を村雲に向けると、村雲は俺の机に頬杖を突きながらクラスメイトを見る。

「こいつら、互いに牽制し合ってるから、下手に黒樹に近付けないのさ」

牽制し合ってる？

「それに、条約もあるからな」

条約？

「まあ、明日になったら嫌でも関わり合いになるさ」

………意味が分からない。

「………ところで………黒樹は何部に入るつもりなんだ？」

そう言っつて意味深な笑みを浮かべてクラスメイトを見る村雲。

なんだかより注目が集まったような………。

と言うか、なんかみんな押し黙ってないか？まるで俺の次の言葉を一字一句聞き逃さない様に………。

よく分からない緊張感の中………とりあえず質問に答える事にした。

「帰宅部」

その俺の一言に教室全体が一気に騒がしくなった。

わけも分からず教室をきよるきよる見回すと、中にはガッツポーズをしている奴とか、ハイタッチを交わしている奴、慌てて教室から出て行くやつ、携帯を使ってどこかに何かを報告している奴とか
がいた。

本当に訳が分からない。……もしかして、本当に帰宅部があるとか？……いや、そんな雰囲気じゃないな。

唐突に村雲に肩を叩かれた。

「つま、がんばれや」

……何をがんばれと？

分けが分からな過ぎて……再びため息が漏れる。

その時、ふつと気付いたのだが……教室の中に一人だけこの騒ぎに交じってない女子がいた。

前側の席にいたので背中しか見えないが、腰の所まである三つ編みが印象的だった。

じっと見ていると、視線でも感じたのか、不意にその三つ編みの子が振り返り、目が合った。

一瞬の間の後、ついつと正面に顔を戻した。

その一瞬の間、俺には彼女の瞳に怒りと恐怖が入り混じった感情があつたような気がした。

……まあ、気のせいかもしれないが……キリツとした美人だったな……美羽さんが動の美しさなら、彼女は静の美しさと言うか……何考えてんだか……

美羽

「あら赤井さん？どこに行こうとしているのかしら？」

昼休み。私が夜衣斗さんの所に行こうと教室から出ると、隣のクラス・一年D組からツインテールのハーフ女・琴野がほとんど同時に出て来て私を呼び止めた。

「私がどこに行こうと、どうでもいいでしょ？」

「ええ、普段ならそうですが……今は駄目ですわ。あなたの事です。校内案内にかこつけて、あのお方の所に行くのでしょ？」

そう琴野が言うと同時に、私達の会話に聴き耳を立てていた全員が殺気立つのを感じる。

……も〜この殊更女が、余計な事を……。

「私の確認と宣言無しに、各部活所属者が、未所属の武霊使いの方に不用意に近づく事は条約で禁止されていますわ。いくらあなたでもご存知でしょ？」

「知ってるに決まってるでしょ！……でも、夜衣斗さんは今日、初登校なんだから、学食とかの場所だって知らないだろうし、案内が必要でしょ！？」

「あなたが案内しなくても、クラスメイトの方が案内してくれますわ」

「そうかな？夜衣斗さんって、結構人見知りな人だから、難しいと思うけど？」

「高々一日二日で、何を分かるとおっしゃるの？それに、あのお方のクラスには、村雲様がいますわ。ですから、あなたの心配は無用です」

……も〜……本当に

「殊更は殊更うるさいなあ」

ぼそっとそうつぶやくと、聞えたのか琴野の口の端がひくつと動

いた。

「あ・か・い・さ・ん」

ゆらっと琴野の背後から半透明のフェニックスの様な武霊・ヒノカが出てくる。

それを見た外野達が一斉に逃げ出す気配がした。

多分、私の背後からもコウリュウが出ていると思う。

「何度……何度言ったら、分かります？わ・た・く・し・を・そ・う・よ・ぶ・の・を・や・め・な・さ・っ・て！」

威嚇の声を上げる琴野と私の武霊達。

「んゝさあ？」

ブチっと言う音が聞こえた気がした。

「ヒノカ!!」

「コウリュウ!!」

夜衣斗

朝のホームルーム後、午前の授業はつつがなく終了した。

……俺が通ってた前の学校は、結構バカな学校だったから……授業内容が全然違うな……まあ、ついていけないほどじゃないか？……うん。頑張ろう。

まあ、そんなこんなで昼休み。

各授業間の中休みの時もそうだったが、村雲以外のクラスメートは一切俺に近付かなかった。

……ん〜無視されているわけではない様だけど……なんなんだろう？

「黒樹。昼はどうすんだ？」

そう村雲に問われて、どうするか考えようとした時、下の階からとてつもない爆発音と振動が来た。

ぎょつとして外を見ると、俺の視界を下から上に何かが一瞬飛び通った。

上空を見ると、コウリュウとフェニックスみたいな武霊が威嚇しながら対峙している。

コウリュウの背中には当然美羽さんが、フェニックスの背中にはツインテールの少女……ハーフかな？……が乗って、上空でなんだか言い争いをしていた。空じゃなかったら今にも取っ組み合いになりそうな感じだ。

「お？またやってんなあの二人」

また？

村雲に疑問の視線を向けると、村雲は苦笑した。

「あのフェニックスに乗ってる子はな。琴野沙羅って言ってこの星波学園の理事長の孫であり、統合生徒会の生徒会長もしてる子だよ」

……随分濃いキャラです事で。

「あの二人、事ある毎に喧嘩しててな。まあ、あいつら根本的に似てる所があるから、同類嫌悪ってやつだな」

……同類嫌悪ね……。

再び爆発と衝撃が起こったので、発生源である上空を見ると、二体の武霊が空中戦を繰り広げていた。

「つま、いつもの事だから気にしないで食堂にでも行こうぜ。それとも購買がいいか？料理部ってのもありだな」

などと言いながら村雲は教室から出ようと歩き出した。

……確かに、俺以外のクラスメイトは最初ちよつと注目して、すぐに気にしなくなっている……これがいつもの事って……ほんと、すごい学校だな。

二人の空中戦が気になったが、とつと村雲が教室から出てしまった為、俺は村雲の後を付いて行こうとした。

その時、視界の隅に再びあの三つ編みのクラスメイトが入り……窓の外にあの怒りと恐怖が入り混じった目を向けている事に気付いた。

俺の視線に気付いたのか、ふいつと彼女は自分の弁当を食べる事に戻ったが……どうしてだろう……何故か彼女が気になる。

「おゝい。早く行こうぜ」

既に教室から出ていた村雲の声に、俺はやや慌てて教室を出た。

間章その一 『星波学園の人々』 12

夜衣斗

「あの二人が仲が悪いのには、生徒会と自警団が仲が微妙に悪い事も関係しているみたいなんだよなあ」

食堂で昼ご飯（俺がみそラーメンで村雲が激辛カレー）を食べ終わった後、村雲がそんな事を言い出した。

「生徒会は子供、自警団は大人って事もあるんだろうけど、何より大きいのは星波学園の生徒が、まあ、学園の武霊使いのほとんどが町の外の人間だからさ。武霊関連のトラブルを町で起こすのは大体が星波学園の生徒なんだよ」

……なるほど、確かに武霊使いが生活に常に組み込まれている星波町住人に比べ、外から、町にいる時だけ武霊使いになっている生徒達からすると、その意識は段違いなんだろう。なにより、子供と言うのもいけない。一般的に子供の方が自制心が低いつて言われているし、犯罪の低年齢化も、ここに無縁つてわけにもいかないんだろう。

「自警団としては生徒会が上手くそう言う連中を押さえていないからトラブルは起きるって思ってるようだし、生徒会としては武装風紀委員の町への介入が許されていないのがそう言う連中を抑えられない原因だと思ってるみたいだからな」

随分と平行線をたどりそうな話だな……。

「ついで、赤井はよく自警団の応援要請を受けてるから、生徒会長である琴野としては面白くないつてわけだ」

などと言いながらチラツと窓から上空を見上げた。

つられて見ると、三十分ぐらいは経ってるつて言うのに、二人はまだ空中戦を繰り返していた。

「あの二人。この学園で一・二を争うほどの実力者な上に、互いに相手を傷付けない様に武霊に命令してんから、決着がなかなか着

かねえんだよなあ……まあ、いつもの事だから、みんな気にしてないだろ？」

……確かに、廊下にいる他の生徒は一切空を見ていない……なんだかなあ……ってか、妙に親しげだよな……。

俺の懐疑の視線に気付いたのか、村雲は苦笑して、

「春休みまで赤井とは同じ部活に所属してたからな。つで、琴野も生徒会に入るまで、その部活に所属してたんだよ」

……部活ね……

夜衣斗

その高木先生の言葉は、俺にとっても、クラス全体にとっても意外な言葉だったらしく、教室全体がざわついた。

帰りのホームルームの終わり、高木先生が去り際に思い出したように、

「そうそう、飛矢折さん。あなた条約とは関係ない部活に所属してたわよね。黒樹君の学校案内を頼んでいい？」

その問いに答えたのは、あの三つ編みのクラスメイトだった。

「……構いませんよ」

一瞬の沈黙の後、飛矢折は頷く。

俺が戸惑った視線を村雲に向けると、村雲はとつと帰る準備をしていた。

「わりいな黒樹。俺、これからバイトなんだ」

「マジですか。……ってか、こっつてバイトOKなんだな……」

「本当は学校案内を俺がしてやりてえんだけどよ。高木先生も俺の事情を知ってんからな……飛矢折に話がいったんだろうが……俺以外で条約に関係ないのって、飛矢折しかいねえし」

「……条約？」

「まあ、頑張れや」

そう言うつと、村雲がダツシュで帰ろうとし、急停止して、俺に顔を近付け、小声で、

「言つとくが、飛矢折の前で武霊を具現化させるなよ」

「？……そんな事するかよ。意味分からん。」

「あいつ……一週間前に連続婦女暴行魔の犯罪武霊使いに、暴行されかかったばかりだからよ」

「飛矢折 巴よ。……よろしく」

そう挨拶されたので、俺は頷いて答えた。

「じゃあ、行きましようか」

そう言つて、飛矢折さんはさっさと教室を出て行つた。
やや慌てて後に続く俺。

……対面して分かつたが、結構巨にゅ……… 煩惱滅却。 煩惱滅却。
飛矢折さんが案内してくれた場所は、音楽室やら、パソコン室など授業に必要な場所で……… 淡々と案内された。

やたらと喧しかった昨日の美羽さんの案内とは大違いだな……… まあ、問題はないな。 うん。

……… それにしても、微妙な距離だな……… 何と言つるか、常に一定の距離を正確に離れてて……… ん〜嫌われてんのかな？……… まあ、嫌われる事には慣れてるからいいんだけど……… ってか、自分が女性と仲良くしているイメージがわからないな……… 美羽さんは例外っぽいし………

などと考えながら飛矢折さんの後を付いて行っていると、不意に飛矢折さんが窓の外を見て、立ち止まった。

その瞳は、あの恐怖と怒りが入り混じつたような……… ああ、そうか。 ようやく分かつた。 さっきから何で飛矢折さんが気になっていたのかを。 それは……… 見た事がある目をしていたからだ。

抑えきれない恐怖を感じている自分。 その自分に対して怒りを抱いている目。

……… 一年ほど前、中学時代の俺がよくしていた目。

恐怖の対象が違えど、恐怖を抱いている自分を許せないのは同じ。そして、それを自分ではどうしようも出来ないのも……… 多分同じなんじゃないだろうか？

飛矢折さんは俺がみている前で、窓の外に視線を向けながら、一歩二歩と小さく窓から離れ、その自分の行動に気付いた飛矢折さんは、恥じる様に少しだけ下唇を噛んでいた。 それでも視線は窓の外に向けられており………。

それは無意識の行動だった。

気付いたら、俺は飛矢折さんの視線を遮る様に窓の前に移動していた。

移動してから、自分の行動に驚き……しまったと思った。

どう考えても彼女のプライドを傷付ける行為だと思ったからだが

……。

後ろを振り向けず、振り向く理由もないので、顔を飛矢折さんの見ていた方向に向けた。

上空でまた『あの二人』が空中戦を繰り広げているのが視界に入った。

…… 本当にいつもの事なんだな……

俺は呆れが含んだため息を吐いた。

美羽

帰りのホームルームの後、ちょっと焦げている廊下でまた殊更に絡まれて、また武霊でのけんかになった。

どうしよう、殊更は私によくつかかってくるんだらう？

彼女、他の人には一切こんな風に接しないんだけどなあ……………。

部活の元先輩は、同類嫌悪だつてよく言うけど……………同類？……………まさかあ……………

などと考えなら回避飛行をしているコウリユウにしがみ付いている私。

琴野とその武霊ヒノカはコウリユウを追尾しながら狂った様に火球とか火の羽根とかを飛ばしてきている。

……………殊更殊更つて言い過ぎたかな……………物凄い剣幕なんですけど……………。

流石に言い過ぎたかな？と考え出した時、何となく見た星波高校校舎の廊下に、夜衣斗さんがいるのが見えた。

元々夜衣斗さんに校舎の案内をしようとして、琴野と喧嘩になったんだけど……………誰だらう？あの微妙に離れた距離で前を歩いている人……………あ！あの人つて確か……………。

「ストップ！ストップ琴野！」

私の大声にピタリとヒノカの攻撃が止まり、コウリユウと共にホバリング。

「……………一体なんですか？……………今さら謝っても許しませんわよ」とか言いながら、私の声に素直に従ってるし……………まあでも、

「別に許さなくてもいいし」

「何ですって！」

「だからストップだつて！校舎の三階！」

再び攻撃しようとしてきた琴野に、私は慌てて夜衣斗さん達がい

る廊下を指差した。

「なんですか？……あら？……まあ！」

不審そうに私が指差した方を見た琴野が、驚いて反射的に私を見たので、私も見返す。

「……………」

「……………」

互いに無言。

そのまま暗黙の了解で喧嘩は終了……………それにしても、何である人が夜衣斗さんの学校案内をしてるんだろう？……………あの事件以来、武霊使いが嫌いになって、親友だった黄道先輩……………そんな人が何で武霊使いの夜衣斗さんの案内を……………何で？

飛矢折

それまであたしの後を微妙な距離で付いて来ていた彼が、不意にあたしの前を移動し、視界を遮った。

それで気付いた。

また、自分の感情が外に漏れている事に……………。

……………これで三度目、彼に感情が漏れている瞬間を見られたのは。

あたしは湧き上がる自分自身では理解出来ない、制御出来ない感情の渦に、身体が震えた。

このままじゃ、また……………傷付けてしまう。美幸みゆきの様に……………今度はあつたばかりの彼を……………美幸の様に優しい武霊使いを……………。

あたしは自分を抑える為に、少し早歩きでこの場を後にした。

彼は無言で、それに文句を言わず、付いてきてくれる。

後は……………生徒会室に彼を連れて行くだけ……………それで、もう、関わらずに済む。

そんな風に、同じクラスなのだからありえない考えが反射的に浮かび、あたしはその逃げの思考に、あたし自身をまた恥じた。

……………どンドン駄目になって行く。あの事件から、あたしは……………あたしは……………

夜衣斗

なんだかよく分からないが、不意に美羽さん達は喧嘩を止め、飛矢折さんは無言で歩き出した。

俺は黙って少し早歩きになった飛矢折さんの後を付いて行く。

……………考えてみれば、あの二人は、一昨日引越してきたばかりの俺より彼女の事を知っているはず……………それを考えれば……………こっちを見ていたような気もするし、あの二人が不意に喧嘩を止めたのには頷ける。

……それにしても、犯罪武霊使用による犯罪に巻き込まれた彼女の心は、少ししか彼女に触れていない俺にでも分かるぐらいに傷ついている様だ。全く関係無い武霊を見ても、恐怖を覚える程に……。他人事ではあるが、彼女はこれからどうするのだろうか？ここは武霊が最もいる星波学園……て事らしいから、今の彼女にとって、ここにいるだけで非常に強いストレスを感じる場所になつてははず。……もし、俺が彼女と同じ状況になつたら……俺は学校に来ることなんてできないだろう。

彼女の何がそうさせるのか……高いプライドを持つてるのか、俺なんかとは比べ物にならないぐらい強い心を持つてるのか……まあ、少なくとも、彼女は俺より強い女性なのだろう……だからこそ、強く苦しんでいる……そう思えた。

夜衣斗

飛矢折さんが最後に案内してくれた場所は、星波学園高等部生徒会室だった。

最後にここを案内された理由が分からず、飛矢折さんを見ると、飛矢折さんは生徒会室の扉をノックした。

……？

「どうぞ」

無感情で平淡な声が生徒会室からした。

「失礼します」

飛矢折さんが一礼して生徒会室に入ったので、俺もやや慌てて後続く。

生徒会室には、無表情なメガネ娘がいるだけで……その人は淡々とノートパソコンを操作していた。

無表情なメガネ娘は、クイツとメガネを上げ、俺を見る。

「転校生の黒樹 夜衣斗さんですね。話は窺ってます……私は高等部生徒会副会長・村崎 好美このみです……空いている適当な椅子に座ってくださいませか？」

促されて俺は村崎さんの対面の椅子に座った。

すると村崎さんはまたクイツとメガネを上げ、飛矢折さんを見る。「案内の人は、ここまで結構ですので、お帰り下さい。ご苦労様でした」

そう言われた飛矢折さんは一礼して生徒会室から出て行ってしまった。

……ちよつと心細いんですけど……。

「本日、黒樹さんに来ていただいたのは、生徒側からの校則説明の為です」

……校則ね……。

「この星波学園は、大人の敷いた校則以外に、生徒が独自に作ったいくつかの校則があります。細かい校則は生徒手帳や学校各所にある端末から確認できますので、時間がある時に必ず確認してください」

「……時間がある時ね……てか端末？……本当に金が掛ってる学校だな……」。

「それ以外の重要な校則を、これから説明したいのですが……」
それまでそれほど感情を表に出していなかった村崎さんが、そこで初めて顔を曇らした。

「……ですが、見ての通り、現在生徒会室には私以外いません……今から説明する校則は、生徒会長が説明しなくてはいけない校則になってますので、少々待っていただけますか？」

よく分からないが、そう言うことなら仕方がないので、俺は頷いた。

「……それにしても、女性と二人っきりで待つのか……物凄く気まずいんですけど……他の生徒会役員さん早く来てくれ……」。

飛矢折

生徒会室を出る時、彼は何だか別れ際の……子犬の様な雰囲気を出していた気がする。

……いえ、気のせいかな？前髪で目を隠してるから、ちょっと表情が読み難いし……そこまで思われるほど、優しくも、親しくも接していない。

それにしても……彼、本当に武霊使いなのかな？……とても、噂で聞くほど、強い人には見えない。体格も、筋肉の付き方も、歩き方も、気配も、驚くほど普通だったし……

そんな事を考えながら教室に戻っていると、前方から言い争いながらこつちに向かってくる二人の女の子がいる事に気付いた。

さつき見た生徒会長と赤井美羽の二人だった。

無言でじっと見ていると、二人は私の視線に気付き、驚いた顔をして……少し間を置いて一礼して早歩きで通り過ぎる。

あの事件後……いえ、『事件の後にしてしまった私の失敗』を知っている武霊使い達は、こうやってみんな、私を避けてる。

武霊に恐怖を感じている私に配慮してのことだろうけど……恐怖を感じると共に『条件反射的に技を掛けてしまう』のが……避けられている最大の原因かもしれない。

……本当に……私は修行不足だ。

夜衣斗

生徒会室に琴野生徒会長と何故か美羽さんが入ってきた時、俺はやや限界だった。

いや、何と言うか、何も無かったんだけど、何もなかったからこそ耐えられなかったと言うか……何にせよ助かった。

「お待たせいたしましたわ。黒樹夜衣斗様。わたくしが、星波学

園高等部生徒会会長兼、星波学園統合生徒会統合会長の、琴野沙羅ですわ。以後お見知り置きを」

そう言っただけに方向が違って一礼し、ほほ笑む生徒会長。

俺も立ち上がったで一礼し返す。

「相変わらず長い名乗りね……舌かまない？」

そう言っただけ美羽さんに、一瞬、頬を引き攣らせる生徒会長。

……何か、俺といた時と雰囲気の違いが美羽さん？

「噛みませんわ……そんな事より……赤井さん。さきほどから何度も言ってますが、何であなたがここにいますの？部外者は出ててくれませんか？」

「嫌よ」

「……で・て・い・き・な・さ・い！」

「い・や・よー！」

「……………」

「……………」

睨みあったまま沈黙する二人。

あゝなるほど、確かにこの二人相性が良くないみたいだ……何と
言うか、どうしようも出来なくて、おろおろしてしまうな。

そんな二人の背後に不意に、二人の武霊が現れる。

ゲっと思うと同時に、それまで黙っていた村崎さんがバンっと思
いっきりテーブルを両手で叩いて立ち上がった。

ビクッとして、まるで錆びついてでもいるかの様にゆっくりと
村崎さんを見る二人。

村崎さんの顔を見ると、さっきまで無表情だったのが嘘かのような
笑顔になっていて、その背後には雪女のような武霊が、村崎さんに薄
ら笑いを浮かべながら枝垂れ掛かっていた。

具現化をしていないと言うのに、何だか部屋の空気が寒くなった
ような気が……。

「二人とも……喧嘩はよくありませんよ？」

そう村崎さんに言われた美羽さんと生徒会長は、慌てた様にブン

ブンとそろって頷いた。

後で村雲に聞いた話なのだが、村崎さんはキレると部屋ごと彼女は度々凍らされ、トラウマになってるらしい。美羽さんと生徒会長

……なんだかな……。

夜衣斗

「既にご存じだと思いますが、我が星波学園は星波町内で最も武霊使いが多い場所ですわ」

そう説明し出す生徒会長は、チラチラと村崎さんを気にしている。俺の隣に座っている美羽さんも、村崎さんを気にしている様でチラチラ。

見られている村崎はとくに気にしている様子も無く、無表情にノートパソコンを打っている。

……… なんだかなあ………。

「その為、武霊使いによる事件・事故を未然に防ぐ為に、武霊使いの管理は町以上にしなくてはいけないのですわ。ですが……… 学園の武霊使いは、ほとんどが未成年。教師、大人が管理をしようとするれば、反発は確実。そう考えた初代の統合生徒会長により、『生徒による生徒の為の武霊使い管理』を、『生徒校則』が作られあのですわ」

……… なるほど………。

「そして、ここからが肝心なのですが、生徒校則により、『武霊使いは一部の例外を除いて、必ず部活並びに同好会に所属しなくてはいけない』事になっているのですわ」

……… なんじゃそりゃ。

俺は反射的に美羽さんを見ると、困った顔をした。

「武霊使いと言っても、私達は学生です。勉強は勿論、人生を豊かにする為にも、所謂青春と呼べる物は必要ですわ」

……… 青春って……… 言つてて恥ずかしくないんだらうか？……… お？ちよつと顔が赤くなつてる様な………。

「ですので、ただ武霊使いを管理する組織を作るのではなく、所属する部活並びに同行会に管理の義務と責任を委譲する事で、武霊

使いの管理並びにその武霊使いの学業を両立させる事を可能にさせているのですわ」

………そりゃ、まあ、部活は青春の近道だろうけど………そうじゃない奴だっっているぞ？俺みたいに………。

今の話からすると、武霊使いは必ずどこかの部活並びに同好会に所属しなくちゃいけないなら、所属したくないのに所属している武霊使いも必ずいるはずだ………だとしたら、大人に管理させるより反発は少ないかもしれないが、反発がないって事はないんじゃないか？なにより、一昨日、昨日で実験しているから余計に感じるが、武霊は『凶器』だ。所属させる部活・同好会側に、リスクも高いし、メリットも無い様に感じる。そんな武霊使いを自部活・自同好会に入れるだろうか？いくら生徒校則と言っても生徒が自分達で作った校則だ。大人が作った校則より、反発は強くなりそうだし、しやすそうだと思うんだが………。

夜衣斗

気が付くと、三人が俺を見ていた。

驚くと、美羽さんと会長は苦笑し、村崎さんはノートパソコンの打ち込みに戻る。

どうやら俺があまりにも無反応だった為に、無用な注目を集めてしまったようだ。

……………反省。

「黒樹様が何を疑問に思っているかは、言って頂かなくとも分かりますわ。どうして武霊使いも、所属させている方々も、素直に生徒校則に従っているか? ……ですわよね?」

的確に問われたので、俺は素直に頷いた。

心を読まれたと言うより、同じ疑問を何度も聞かれているのだから。まあ、普通に疑問に思う事か。

「実は、武霊使いを所属させている部活並びに同好会には大きなメリットを得られる権利が与えられるのですわ」

大きなメリットを得られる権利? ……ちよつと回りくどい。

「はぐれ武霊の存在はご存じですね?」

そりゃ、まあ、一昨日襲われたから、重々承知してる。ので、頷く俺。

「はぐれは、その具現化を少しでも長く維持する為に、人を襲いますわ。ですから、必然的に、人の密集度の高い場所に、はぐれは必然的に集まってくるのです。その為、我が星波学園は……発生タイミングにもよりますが、町以上にはぐれの脅威に晒されているのですわ。それ故に、星波学園に所属している武霊使いには、『星波学園にやってくるはぐれを倒す義務』が課せられていますの」

……って事は……何と言うか、ここってある意味、町以上に危険な場所って気がしてきたな……はあ。勘弁してくれ。

「そして、はぐれを倒した武霊使いが所属している部活・同好会には、その数や力に応じて部費を増やせる権利が与えられているのですわ」

なるほど、確かにそれなら厄介な武霊使いを、進んで自分達の部活・同好会に入れたくなるだろうが……それはあくまで部活・同好会側のメリットで、武霊使いにはメリットはない様に感じるんだが……。

「このメリットは部活・同好会のみのもので、武霊使いにはなんのメリットもありませんわ。その為、武霊使いの方々の中には不満を口にして部活に所属しないと云う方もいますわ。ですから、そんな方々には、一つのチャンスを、同時に、部活・同好会にはより多くの権利を得る機会を与える生徒校則がありますの……それらを踏まえて、お聞きしますわ。黒樹様は、入りたい部活、もしくは同好会はありますか？」

……困った。どうも、帰宅部って言うと、話からして『なんかしなくちゃいけないみたいだ……』どちらもめんどくさい話だな……同じめんどくさいなら、最初っから決めていた事をすればいいか……。

首を横に振る俺。

妙な沈黙が生徒会室を支配した。

？

「そうですか………でわ。黒樹様には、『逆鬼ごっこ』をしていただきますわ」

……はあ？……逆…鬼ごっこ？

夜衣斗

「黒樹様にして頂く逆鬼ごっこは、黒樹様を自分達の部活・同好会に所属させたい全ての方々が、捕まえる側に回る攻守の数が逆転した鬼ごっこです」

……それって……滅茶苦茶武霊使い側に不利なんじゃ？
困惑のあまり再び美羽さんを見ると、困った顔をされた。

「期間は私の宣言から一週間、星波学園内で、登校から朝のホームルーム・帰りのホームルームから下校まで、各部活・各同好会に黒樹様が捕まり、その部活・同好会の拠点に連れて行かれますと、黒樹様はその部活・同好会に強制的に所属させられる事になりますわ。そして、その一週間で、どの部活・同好会に捕まらないと、黒樹様は帰宅部になる事が許可されますわ」

……なるほど、これはある意味、理に適っている。武霊使いを管理するには、その所属する部活・同好会に、その武霊使いを制御する力がなくてはいけない。そうでなければ、部活・同好会に管理させる意味がないし、反発する武霊使いへの牽制にもなる。何だって最初が肝心だしな……待てよ？だったら、適当な部活に入って、幽霊部員になれば……って、そんな甘い考えは通じないだろうな……。

「なお、適当な部活・同好会に入って、幽霊部員になった方には、それ相応の罰が待ってますので」

そう言うてにっこりと笑う生徒会長。

……まあ、予想通りか……そもそも、思い出して見れば、統合生徒会には武装風紀委員会って言う実働部隊がいるらしいし、個人で逆らえば、数の暴力で実力行使されそうだよなあ……まあ、流石にそれは、よっぽどの事がない限りないか？

「それでは、明日、星波大門の前で、再び確認を取りますわ。そ

の確認後、どこかの部活・同好会に所属する気になったのでしたら、一ヶ月の猶予期間が与えられますので、その期間中にどの部活・同好会に所属するか決めて下さい……もし、気が変わらなないのでしたら、そのまま逆鬼ごっこのスタートを宣言させていただきますね。よろしくって？」

……あんまりよろしくないが……俺は頷いた。

美羽

夜衣斗さんの逆鬼ごっこがほぼ決まっちゃった……夜衣斗さんのあの感じだと、今日明日で考えが変わると思えないしなあ。部活・同好会間条約で琴野の再確認まで、部活・同好会所属を本人が望まない限り勧誘はししちやいけなし……出し抜いて勧誘しようにも、多分、武装風紀委員会の密動部隊が今朝みたいに私を監視しているだろうから、出来ないし……。

本当は、昨日にでも私が所属する部活に誘うつもりだったんだけど……高神兄弟の襲撃のせいですっかり忘れちゃたんだよね……うーどうしよう……って、私が、夜衣斗さんをつままえればいいんだ……でも、それって、私に出来るのかな？……夜衣斗さんって、武霊使いになってまだ三日だけど、あの高神麗香を撃退するほど強力な武霊使いだし……んーうん……仕方ない。気が進まないけど、ダメ元で部長を説得してみよう。

そう思った私は、夜衣斗さんに先に帰って貰い、部室に向かった。小中高校門の反対側に、小中高大の部活・同好会の部屋が集まっている棟群があつて、私が所属する部活の部室は其中でも最も古い棟の隅にある。

『武霊研究部』。

それが私の所属する部活。

名前の通りに武霊を研究している部活で、武装守護霊発生当時、星波学園創設時からある部活でもあるんだけど……今、部活認定人数ギリギリの四人しか所属していない（最低三人）。しかも、一人は不登校でもう一人は停学中……更に現部長は一切やる気なし……まともに部活をしているのは、私だけになつてる。

だから、夜衣斗さんには絶対に武霊研究部に入って欲しくて……部室の前に来ただけ……ううーやっぱり入りたくないかも……

美羽

「あらあら？……そう、そんなに強い武霊使いなのね？」

愛部長の趣味で埋め尽くされている、表に看板がなければ黒魔術研究会とかそんな部室とかに勘違いしそうな部室の中で、私は夜衣斗さんを捕まえる為の相談を愛部長にした。

反応は……やっぱり、興味なさそうだった。

「強だけじゃないんです！十年間の武霊の歴史の中で、初めて町に来た日に武霊使いになってますし！夜衣斗さんが来た日に前回の発生から一週間も経ってないのにはぐれが発生しましたし！それに」

「あらあら？はいはい。わかったわかった。凄い子ね夜衣斗君って」

「もう！真面目に聞いて下さい愛部長！」

「あらあら？聞いてますよぉ」

とか言って部室にあるDVDプレーヤーを起動させようとしたので、無言で私はリモコンを取り上げた。

流石にこの部屋で愛部長の趣味の映画を見る気にはなれない。

一度、愛部長のお勧め映画を見て（強制）、一週間以上悪夢にうなされた事がある……うう。思い出しただけで鳥肌が！

「でもね。部活に入りたくない人を無理やり入れる事には、私は反対だなあ」

とにこにこ笑いながら、リモコンを奪い取ろうとする愛部長。

「それは分かってますけど……他の部活だってやってる事じゃないですか」

と言いながら、必死にリモコンを死守する私。

「あらあら？よそはよそ。うちはうちです。だから、私は協力しませんよ？」

「うーそこをなんとか。はうあ！」

一瞬の油断でリモコンを持つ腕が愛部長に掴まれた。

「駄目なものは駄目です。美羽ちゃんだって分かっているでしょ？
ここは自由意思をなにより尊重している部活なのですよ？」

と言いながら、思いつきリモコンを握っている私の手の指を一本一本がし始める愛部長。

「……………それに、あなただって経験してるでしょ？武霊の秘密を追う者には」

「それは！……………偶然です」

唐突に声のトーンを落とした愛部長の言葉を遮って、私は否定の言葉を口にしたけど……………言葉が段々と弱くなるのを止められなかった。

「美羽ちゃん……………隙あり！」

「あ！」

人が若干落ち込んだ瞬間に、愛部長にリモコンを奪われた。

ヤバイ！

「あらあら？そんな事より……………とっってもお勧めの新作入ったのよ？ね？ね？見よ？見よ？美羽ちゃん」

「あ！私、これから大事な用があるんで」

そう言っ私は愛部長に背を向けダッシュで逃げようとするけど

……………部室の入り口の所で、ガシッと何かに両肩を掴まれた。

恐る恐る振り返ると……………ローブを纏った骸骨がいた。

サーッと血の気が引くのを感じる。

何度見ても、今回は物凄く近くだから特に、怖い武霊なんですけど……………。

これは愛部長の武霊で、死神の様な姿をした武霊『ハクシ』……………つまり……………

「さあ、さあ、楽しい、楽しい観賞会の始まりよ」

必死に抵抗する私をずるずると愛部長の隣まで引き摺るハクシ。

「た、助けて夜衣斗さーん！！！」

夜衣斗

……どこからか美羽さんの声が聞えた様な気が……。

周りを見回すがちらほら他の学生がいるだけで、美羽さんらしい姿は確認出来ない。

……気のせいか……さつき部室によつてから帰るつて言つてたし……まあ、空耳つてやつだろう。

俺が今いる場所は、学園庭園内学園大門前。

下校時間からややずれている為、人はまばらだが、この場にいるほぼ全員が『獲物を狙う獣の様にキラキラした視線を俺に向けている』。

……なんでも、生徒会長の宣言があるまで、無所属の武霊使いへの勧誘は禁止されているらしい。それを破ると、武装風紀委員会が出張してくるとか……まあ、確かに、学園大門の前にいる武装風紀が、牽制する様に周囲の一般生徒を見ている。

思わずため息が出た。

転校する前とは天と地の差より大きくかけ離れている様な気がする。

基本的に、俺は他人と深く関わりたくない。

だから、こういう状況は、非常によろしくない。

慣れてないせいもあるけど、何だか胃がキリキリする様な……胃潰瘍にでもなりそうだ。

……何と云うか、この町に来てから、逃れようのない事ばかり起きる。

それが俺の変えられた運命だと言つたら、変えてしまえとも思つが……難しいだろうなあ……そもそも、俺は自分の運命を良く分かつていない。

あの自称最後の敵は、『人の宿命の悪意、もしくはその結果と相

対しなくてはいけない運命』とか言ってたが……漠然的には分かる。だが、いや、しかし……。

などと頭を悩ませながら大門をくぐると、大門の前・バス停広場にちよつとした人だかりが出来ているのに気付いた。

夜衣斗

なんとなしに立ち止まり、その人ばかりを見てみると……その中心に穏やかな笑みを浮かべながら、周りを取り囲んでいる学生と話しているポニーテールの女性がいた。

………どっかで見たことある様な………そう言えば、昨日助けてくれた自警団団長もポニーテールだったような………って、あの団長さんか？昨日と全然雰囲気が違うんですけど！昨日は、何だか男らしい雰囲気を出していたのに、今日は………何と云うか、つても大人の女性って感じだ………まあ、眼帯とかギブスとかが取れている事も雰囲気の違いに影響を与えているんだらうけど………ってか、昨日は男物のシャツとズボンを着てた気がするが、今日はワンピースを着ているし………腕章もしてないし。

などと思いつつ昨日と雰囲気が違う団長を見てみると、視線を感じたのか団長がこちらに気付いた。

すると、団長がまわりの学生に何事かを言いつて解散させ、こちらに向かつて歩いてくる。

周りを見回すが、俺以外この方向には誰もいないので、多分、俺に用があるのだらう。

俺はかなり戸惑いながら団長の下へ歩く。

その時に気付いたのだが、団長の足元に、ちよろちよると小さな白い子犬がいた。

なんだろう？普通の犬って感じがしないな………もしかして………あれ、団長の武霊のコロ丸か？………だとすると、昨日、美羽さんが見せてくれたレベル0.5化つてやつだらうか？………レベル0.5ね………ふと思つたが、武霊の大きさを抑えて具現化出来るなら………ふむ………帰ったら試してみるか………。

などと思っていると、団長と会話出来る距離に近付けたので、会

積する。

夜衣斗

「こんにちは夜衣斗君」

俺の無言の会釈に、ほほ笑む団長。

あれ？なんか口調が柔らかくないか？

「昨日麗華に絞められた首は大丈夫？……ああ、少し痕が付いているね」

そう言つて、不意に手を伸ばし、優しく少しだけ俺の顎を上げて俺の首を見た。

すつと顎から手を引き、

「痛くはない？」

優しくそう問われたので、ぶんぶんと頷いてしまう。

昨日は男言葉だったのに、今日はなんでか女言葉……何でだろ？……つてか、美羽さんもそうだけど、不意に俺に近付かないでくれ……美人だから余計にドキッとして心臓に悪い……まあ、こういう行動を取られると言う事は、男として見られていないかもしれないな……それはそれでシヨックだな……

「……もしかして、口調が気になる？」

俺の沈黙をそう解釈したらしく、くすりと笑う団長。

いや、まあ、気になつてはいるけど……。

「ほら、私で、女性なのに自警団の団長をしているでしょ？だから、少しでも威厳を出す為に、仕事中は男言葉を使う様にしているの」

……へえそうなんだ。

「……えつとね」

微妙な俺の空気に、ちよつと困った団長は、肩にかけていたショルダーバッグから小さな箱を取り出して、俺に差し出した。

その箱には星波町限定携帯電話と書かれていた。

「あなたの星電よ……これを渡したくてあなたを待ってたの」と言われて団長から箱を渡された。

星電？随分早くない？……確か、昨日、市役所で、在庫がないから時間が掛かるかもって言われてたようなの……

「その星電ね。田村さんの星電だったの」

夜衣斗

田村さん？…………… ああ！一昨日の剛鬼丸の武霊使い…………… はぐれ化を起こして、武霊使いじゃなくなったから取り上げられたって事か？

「田村さんの奥さんから、これを君に使って貰いたいって言われて貰って来たの」

奥さん？…………… 田村さん、結婚してたんだ…………… ってか、奥さんから？どうして？

「奥さん。夜衣斗君にとても感謝してたわよ。夫を助けてくれてありがとうって。だから、今度、周りが落ち着いたら、ちゃんとしたお礼をしに行くって」

お…お礼？…………… 困る。自分が助かる為に田村さんの治療をした…………… だから、礼を言われる筋合いは…………… ない。だから、困る。

「本当は一昨日渡されてただけど、夜衣斗君用に再設定するのにちよつと時間がかかつちゃってね。昨日渡せなくて、市役所への連絡も滞つてたみたいなの。だから、星電を管理している自警団私が直接持つてきたわけ」

…………… いや、まあ、それでも、団長自ら来る事はないんじゃないんだろつか？

「ん…本当はね。私以外の団員が持つてくはずだったんだけど…

…私、ちよつと夜衣斗君に興味があったから、替わって貰ったの」

…………… 興味っすか…………… 照れます。

「徒歩で帰るんでしょ？」

まあ、バスに乗って帰る距離でもないし、そのつもりだったので、
頷く俺。

「じゃあ、途中まででいいから一緒に帰りましょ？」

そう言われて、何だか照れ臭くなり、頬を掻く俺。

……考えてみれば、朝もそうだけど、女性と一緒に登下校するのは初めての経験だな……素直に喜んでいいのかな？……まあ、いいか。

「……美羽ちゃんから聞いてたけど、本当に夜衣斗君って喋らないのね？ちよつとは会話のキャッチボールをしましょうよ」

そう団長に言われて、俺は先ほどとは違う意味で頬を掻いた。

夜衣斗

「ところで夜衣斗君。君はどここの部活に入るつもりなの？」

学園大橋をゆつくりと歩きながら、団長がそんな質問をしてきた。俺は首を横に振って答える。

「あら？じゃあ、同好会？」

当然、これにも首を横に振る。

「……そっか、逆鬼ごっこに挑戦するんだ」

そう言つて、困った様に苦笑する団長。

「夜衣斗君は一昨日昨日で有名になつちやたからね……ほとんど部活・同好会に狙われるじゃないかな？」

「……でしょうね。」

「……だとすると大変だよ？四月だったら、まだ他にも逆鬼ごっこにチャレンジしている武霊使いはいただろうけど……今は夜衣斗君一人だものねえ……」

「……まあ、タイミングが悪いのは、いつもの事だが……ついため息が出てしまい、団長に苦笑された。」

「でも、逆にその状況を利用すれば、上手く逃げられるかもしれないよ？」

「……なるほど、確かに複数の部活・同好会が俺を狙うなら、当然そいつら同士の邪魔し合いも発生する。それに、競争密集度も高いとすれば……ふむふむ。思ったほど勝率ありそうだな……。」

「あ！でも、逆鬼ごっこ終了二日前は注意してね」
唐突に思い出したかの様にそう言われ、首を傾げる俺。

「多分、明日説明があると思うけど、逆鬼ごっこに武装風紀も参戦してくるから、気を付けてね」

「……。」

「彼ら、個々の武霊能力が高い上に、連携がどこの部活・同好会

よりも出来ているはずだから」

マジですか……………ってか、何だか団長、妙に詳しくないか？……………
そう思っただけ少し首を傾げると、それに気付いた団長は微笑んだ。

「私が作ったのよ生徒校則」

は？作った？……………おお！？って事は、団長が、初代統合生徒会長
？マジですか！？

「しかも、自警団もほとんど私が作ったようなものなのよ」

ちよつと自慢げに言う団長。

いや、まあ、凄いつちゃ凄いな……………なるほど、何でさっき人だ
かりが出来ていたか、その理由が分かった。そんだけの事をしたな
ら、自警団でも星波学園側に人気がある……………そう言えば、統合生
徒会と自警団って微妙に仲が悪いんじゃないか？

「……………まあ、でも、作った当時は、自警団と生徒会が微妙な関係
になるとは思いもしなかったんだけどねえ……………」

そう言っただけ、ため息を吐いた団長。

ん〜多分、団長は、自警団と生徒会の板挟み状態で、大変なんだ
ろっちなあ……………まあ、俺には関係なし、どうする事も出来ないから
なあ……………

夜衣斗

夕方。

春子さんの家の……もう自宅でもいいか？……自宅の庭で、俺は武霊の実験をしていた。

レベル0・5具現化だが、0・5とかいいながら、結構幅がある。手乗りサイズの大きさから、俺と同じ大きさまで、武霊使いの加減しだいで、様々な大きさに具現化出来る様だ。

……この感じからすると、レベル2もその延長線上にあるって事なんだろう……もしかして、出来るんじゃないか？レベル2……いや、まあ、美羽さんの話だと、レベル2の具現化を出来る武霊使いは少ないらしいし……どうなんだろうな……流石に、こんな住宅地でレベル2の具現化を試すのは近所迷惑だろうし、上空でしたとしても、何事かと警察とか自警団とかに通報されそうだな……。などと考えていると、庭から見える赤井家玄関に、デッカイ黒いローブ着た……大きさからして武霊だろうが……何かがいる事に気付いた。

人間サイズに具現化したオウキを連れ、何となく玄関がよく見える位置に動く……ギョツとした。

ローブの中は骸骨で、その骸骨、死神みたいな武霊の腕の中には意識を失ってるばい美羽さんが抱えられており、青い顔をしてうなされている。

「あらあら？もしかして、あなたが黒樹君？」

不意にそう声を掛けられ、声のした方、死神みたいな武霊の前、玄関前にどこぞの令嬢みたいな女性がいた。

多分、彼女がこの死神みたいな武霊の武霊使いなんだろうなあ……ふと思ったが、妙に綺麗な女性に出会う率が高いな最近……まあ、偶然だろうけど………良い偶然だな……。

「それがあなたの武霊？……………」

そう言っつてやや驚いた感じにオウキを見る女性。

「もしかして、レベル0.5化してるの？」

？よく分からないが、とりあえず頷いた。

「……………あなた、本当に凄いわ。武霊使いになってからまだ三日でしよ？それなのにレベル0.5までマスターしてるなんて、今まで聞いた事がないわ」

……………そうなのか？結構簡単に出来たんだが……………つてか、誰だろう？制服からして、星波学園高等部の同学年みたいだが……………見覚えがないから別クラスだろうな……………。

「あらあら？ごめんなさいね。一方的に喋っちゃって、私は美羽ちゃんが所属している部活の部長、青葉愛よ。よろしくね」

そう言っつて微笑んで自己紹介されたので、

「……………黒樹夜衣斗です」

と自己紹介して軽く頭を下げる。

……………それにしても、部活ね……………美羽さんってどんな部活に入ってるんだらう？

などと思っつていると、赤井家の玄関が開き、軽い悲鳴が聞こえる。美衣さんの声だな……………まあ、普通に驚くわな。あんなのが突然現れたら……………わざとやっつてるのだからこの人？いや、わざとか……………それにしても、別れた後、美羽さんは何してたんだらうか？……………謎だ。

夜衣斗

翌朝、美羽さんは青い顔をして、目下に熊を作っていた。流石にこれには心配になって、

「……………大丈夫ですか？美羽さん」

と声を掛けてしまった。

美羽さんは力ない笑みを浮かべて、

「大丈夫です……………うふふ、前より平気になってますから……………」

？……………意味が分からない……………本当に大丈夫なんだろうか？つか、本当に昨日何があったんだろうか？

多分寝不足の為か、多少ふらふらしながら歩く美羽さんと共に登校すると、学園大門の前にずらつと整列した武装風紀委員会とその中心に立っている琴野統合生徒会長がいた。

ずっと待ってたんだろうか？……………まあ、どうでもいいか。

「黒樹様。お待ちしておりましたわ。それでは、昨日言いました通りに、再びお聞きしますわ。どれかの部活もしくは同好会に所属する気になりましたか？」

その生徒会長の問いに、俺が応えようとした時、美羽さんに袖を引っ張られた。

生徒会長が眉を顰めたが、とりあえず気にしない様にして、美羽さんを見る。すると美羽さんは俺の耳元に近付き……………ドキッとするから勘弁して……………小声で、

「夜衣斗さん。ここはとりあえず、どこかの部活に所属するて言った方がいいですよ。武装風紀委員の監視が付くでしょうけど、一ヶ月間の猶予が得られますから」

……………監視ね……………やっぱりそうなるのか。

「夜衣斗さんの武霊は、とても強力な武霊ですけど……………夜衣斗さんは、武霊使いになってまだ四日目です。経験不足は勿論、数で不利

は否めないと思つてです。だから、今は逆鬼ごっこはしない方がいい
と思いますよ」

……まあ、美羽さんの言う事は分かるが……むく嘘を付くつ
て事なんだよなそれって……

「赤井さん！」

なかなか離れない美羽さんにいらいらして来たのか、大声を上げて美羽さんを睨む生徒会長。

「これは黒樹様自身でお決めになる事なのですわ。部外者は今すぐ引っ込みなさい！」

「うっさいわね！多少のアドバイスぐらいいいでしょうが！」

「あなたのアドバイスは、部活の勧誘行為と同意義ですよ！」

「条約範囲内の事しか言っていない！」

「どうだか！」

「言っていないたら言っていない！」

「耳打ちでの会話に信憑性なんてありませんわ」

「……………全く、殊更は本当に殊更うるさい」

言い争っていた美羽さんが不意に黙り、ぼそりと聞こえるか聞こえないかの小声でそんな事を言った。

「あ・か・い・さ・ん」

なんだかより怒気を含んだ声になったので生徒会長を見ると、彼女の背後でフェニックスの様な武霊が既に具現化していた。

今のが聞こえてたのか？マジで！滅茶苦茶耳がいい……………って、

何だが周りにいた武装風紀委員達が一斉に逃げ出してるんですけど

……………

「何よ！」

と声を荒げる美羽さんの背後にもコウリユウが具現化している。

うわぁ……………逃げよう。

ダッシュで武装風紀委員会が避難している所に避難。

と同時に、二人が器用に互いの武霊の背に乗り、人・武霊共に睨み合いながら飛び立った。

……………えっと、この場合……………どうすればいいんだ？

困った俺が隣にいる武装風紀委員を見ると、同様に困った顔をされた。

他の武装風紀委員も同様で……………困っていると、別の方向に避難していた武装風紀委員、私服を着ている事から大学部の学生なのだから、が近付いてくるのに気付いた。

「三島委員長」

近くにいた武装風紀委員がそう言ったので、よく見るとその武装風紀委員の腕章には武装風紀委員長と書かれている事に気付いた。

……………それにしても、随分と鋭い目付きの男だなメガネを掛けているから多少は緩和されている感じはあるが……………なんだか嫌な雰囲気がある……………まあ、俺の感覚なんて当てにならないから……………気のせいだろう。

「黒樹君。俺は星波学園大学部三年の三島みしま 忠人ただひとだ。武装風紀風紀委員長兼統合生徒会統合副会長をしている」

……………何だか、統合生徒会のメンバーって名乗りが長いな……………まあ、そう言う位置なんだろうが……………。

「琴野会長はあなくなってしまつと、しばらくは戻ってこない……………だから、ここからは私が会長の代理を務めたいと思うが……………いいか？」

そう統合副会長に言われたので、改めて空を見ると二人は激しい空中戦を繰り広げていた。どうもどっちが先に後ろを取るか争っている様だけど……………確かに直には戻ってこなさそうだ。

……………本当に微妙に嫌な感じがするが……………まあ、そんな理由で断るのもなんだな……………。

そう思った俺は、副会長の問いに頷いた。

「では会長の問いの返事を」

……まあ、何とかなるだろう。登校と下校の学園にいる間だけの逆鬼ごっこだ。その為の作戦もいくつか考えているし……。

「……俺は、どこにも所属する気はありません」

「……そうか」なんだか一瞬、面白そうに、興味深そうに副会長が笑った気がした。「では、逆鬼ごっこに関する説明を、参加者達の前で行う。付いて来てくれ」

そう言つて、副会長は武装風紀達を連れて学園大門に向つて歩き出したので、俺もその後が続いた。

その光景を見た時、俺は思わず一步身を引いてしまった。

……いや、何と言うか、一言で表すなら、人の壁つて奴が学園大門の先にあつたからだ。

いやいやいやちよつと待てつて、注目されているのは分かつていたが……想像力不足だった様だ。うゝむ……最悪。

「逆鬼ごっこに参加する部活・同好会は、各部活各同好会一つに付き三人までなんだが……まあ、それだけ君が注目されているって事だな」

……えつと、つまり、この学園には部活・同好会が少なくとも二百ぐらいはあるって事か？……本当に色々な面でおかしな学校だ。こじは……

「逆鬼ごっこの基本ルールは昨日聞いているな？」

……えつと確か、捕まつて拠点に連れて行かれるとその拠点の部活・同好会に所属させられる……だったか？……なんだかな……まあ、とりあえず頷く俺。

「ではここでは細かなルールを説明する。まず武霊だが、人を傷

付けなければ、それ以外は制限はない……つまり、この逆鬼ごっこは武霊を主体とした武霊鬼ごっこだと思ってくれてもいい」

……なるほど……まあ、それは予想通りか……じゃなきゃ、武霊使い……と言うか、男一人を捕まえて、どこにあるか知らないが、拠点にまで連れて行くなんて出来はしないし、逆に逃げきるのがかなり難しくなる。自慢じゃないが体力の無さには自信がある……どんな自信だ……

「だが、いくら武霊の使用が許されているからと言っても、過剰な使用は許されない。常識の範囲内の行動を心がける事。……なお、この逆鬼ごっこは、各武霊使いの資質・人格を見極める為に行われるものでもある事は置いてほしい」

……資質・人格ね……まあ、確かに極限状態の方がその人の本質は見やすいだろうが……なるほど、これは新しくなった武霊使いの『危険性を測る為でもある』のか……これで万が一どの部活に所属しなくていい許しが出ても、逆鬼ごっこ中の行動次第で、武装風紀から要注意人物にされる可能性があるって事だ。ふむふむ。そういう意味で逆鬼ごっこはよく考えられているなあ。流石、自警団団長を長年やる人が考えたって事か。

「また、逆鬼ごっこ終了二日前には、我々武装風紀も参戦する」
つで、部活・同好会所属の武霊使い達から逃げ回れるくらい力がある武霊使いなら、武装風紀の即戦力になるってわけだ。人材調査と確保も兼ねているってわけか……むむ！抜け目がない……はあ。

夜衣斗

「範囲だが、学園敷地内ならどこに逃げてもいい。ただし、登校時は学園の外に出ると我々からペナルティがある」

ペナルティ？

「ペナルティは学園内清掃や学園一周などだ」
「っげ！それはかなり辛い。」

「開始の合図は、理事長宅にある鐘楼の鐘で行う。今日は私の指示で鐘が鳴るが、明日からは、登校時は学園大門の生徒カードを使った瞬間、下校時は教室から君が出ると同時に鳴る様になる。そして、その鐘が確認されてから一分後に、もう一度鐘が鳴り、それが君を捕まえる側の開始の合図となる」

「なるほど、一分しか余裕はないのか……むく短いのか長いのか……よくわかんないな。」

「終了の条件は、君がどこかの拠点に連れて行かれるか、登校時はホームルームが始まる五分前か、君が教室に行くかで終了。下校時は君がこの学園の外に出る事により終了になる。なお、下校時のみ、逆鬼ごっこ期間中のみだが、学園大門で生徒カードを使わなくていい。つまり、学園のどこからでも出てもいい事になっている。ただし、学園の外に出たら、星電に基本登録されている統合生徒会事務局に電話をしてくれ。それにより、位置確認がされ、逆鬼ごっここの終了の鐘が鳴らされる」

「……なんだか色々と面倒になってきたな……」。

「以上で細かな説明は終わりだ。何か質問はあるか？」

んく特にない……か？……まあ、なる様になるしかないだろう。

そう思っつて、俺は首を横に振った。

「そうか……時間も無い事だし、そろそろ始めようか？……分かってると思うが、遅刻しない様に」

つち、遅刻しない様につて……いや、まあその通りなんだろうが……ん、待ち伏せされてたら難しくないか？……いや、捕まえ側も同じ条件なんだし、遅刻ギリギリの時間になれば待ち伏せは減るかギリギリまで粘れるのは、同じクラスの奴らか、近くのクラスの連中くらいだろうし……まあ、向こうだってその事を分かっているだろうから、そう言う連中を主体にしてるだろうな……む。

などと考えていると、何事かを携帯電話で話していた副会長が携帯を切り、俺を見た。

「今から三十秒後に鐘が鳴る。それを合図に、逆鬼ごっこはスタートだ……では、健闘を祈る」

そう言つて副会長は俺の近くから離れる。

……なんだか、先ほどから俺に向けられている無数の視線に、熱が込められ始めてるような気がする。

あゝ嫌だな……まあ、そんな事言つてらんないんだろうけど……ん、とりあえず、昨日から色々と考えてはみたが……上手くいくんだろうか？そもそも、俺は美羽さんが言った通り、経験不足は否めないし、知識としても圧倒的に不足している……まあ、そんな事を言い出したら限がないが……。

などと考えていると、だんだん緊張が強くなってきた。

そして、緊張のあまり生唾を飲んだ瞬間、逆鬼ごっここの合図の鐘が鳴った。

美羽

逆鬼ごっこ開始の鐘を聞いた時、私は後ろを取った琴野のヒノ力からの攻撃を必死に避けている最中だった。

驚きと共に後ろを見ると、琴野も驚いたのか攻撃を止めて学園大門の方を見ている。

私はコウリユウに心の中で指示を出して、ヒノ力の上に反転させて近付かせ、琴野の隣に飛び降りた。

「ちよつと、どう言う事！？何で逆鬼ごっこが始まってるの？」私の問いに、琴野は学園大門に向けたまま眉を顰めた。

「わたしくしが知るわけないでしょ？……………ですが、多分、副会長が代理をわたくしの代理を務めたのでしよう……………あの男、余計な事を……………」

最後の言葉はぼそつと、私に聞えるか聞こえないかの声でのつぶやきだった。

よく分からないんだけど、琴野と三島さんには微妙な距離がある。別にはつきり対立しているってわけじゃないみたいだけど……………つて！そんな事より、早く逆鬼ごっこに参加しないと、夜衣斗さんが！！

そう思つて学園大門の方向を見ると、予想以上に多い参加者の人垣と、『何故か動かない』夜衣斗さんの姿を確認して、私は目を瞬かせた。

普通は開始直後に逃げるんだけど……………夜衣斗さん。何を考えているんだろう？

????

星波学園名物の一つ『逆鬼ごっこ』は、鐘のなった瞬間、普通の武霊使いなら全速力で学園大門から離れる。

だが、黒樹夜衣斗は動かなかった。

それどころか、ぼーっと空を見ている。

その意図が分からず、逆鬼ごっこに参加している者達や、登校中の無関係の学生や見物の学生まで、ざわつき始める。

そして、二度目の鐘。

それでも動かない夜衣斗に、逆鬼ごっこ参加者は一瞬躊躇う様に動かなかったが、誰かが上空から接近する赤井美羽・コウリュウに気付き声を上げた瞬間、武霊研究部に取られてなるものかと一斉に夜衣斗に向かって殺到し始めた。

その時、ぼーっと立ってるだけの夜衣斗がにやりと笑った事に、一体どれだけの人数が気付いただろうか？

殺到した逆鬼ごっこ参加者の先頭の手が夜衣斗に触れ様とした瞬間、ポンつと音を立てて夜衣斗は『小さい円盤』になった。

夜衣斗に向かって殺到していた者達の先頭は、すぐさまそれに気付き止まろうとするが、気付いていない後ろの者達に押され、終にはぐちゃぐちゃになって集団で倒れてしまった。

美羽

慌ててコウリユウに乗り換えると、直に二度目の鐘が鳴った。

だけど、みんな夜衣斗さんが動かない事に疑念を持ったのか、誰も動かない。

……これは、チャンス？

急いで夜衣斗さんの下にコウリユウを向かわせると、私達の動きに気付いたみたいで、一気にみんなが夜衣斗さんの下に殺到し始め……それでも微動だにしなかった夜衣斗さんが唐突に消えちゃった！？

ええ！？と言う……って、夜衣斗さんが消えた場所に、小型の円盤が浮いているから……さっきまでいたのって、サーバント？……うわ……凄すぎ夜衣斗さん……それにしても、いつの間に代わってたんだろう？

そう思っていると、学園大門の上空に、別の小型円盤があるのに気付いた。

尖った角みたいなのが二つ付いていて、大きなレンズが一つ付いている小型円盤で……また新しいサーバントかな？

今度はどんなサーバントだろう？

なんて思いながらそのサーバントに近付き、ツンツンと突くと、困った様とジグザグに飛び出すサーバント。

……それにしても、夜衣斗さんって、どれだけの種類のサーバントを考えているんだろう？

夜衣斗

……どうやら上手くいったみたいだな。

目の前の空間に映し出される学園大門の映像に、俺は思わずにやりとしてしまった。

俺の前には無数のレンズが付いた小型円盤『リフレクションサーバント』がいて、そこから学園大門の映像が俺の眼前の空間に映し出されている。

その映像は、学園大門の上空で浮遊している『スカウトサーバント（尖った突起が二つ付き、大きなレンズが一つ付いた小型円盤）』からリフレクションサーバントに送られてくる映像で………なんだか今、映像が動いたな………誰かに悪戯されたか？………まあ、問題ないか。

そして、俺の頭の上にはステルスサーバントが浮遊しており、ゆつくりと歩いて高校棟に向かう俺の姿を隠していた。

実は、家を出る前からステルスサーバントを使って姿を消しており、俺の姿にしたドツペルサーバントの後ろを付いて登校していた。ついで、一回目の鐘が鳴ると同時に、俺は音を発てない様にそろりそろりとその場を離れ、普通に登校している。と言うわけだ。

ちなみにオウキは具現化していない。

昨日の夜。青葉さんが帰った後に、0.5化をヒントに思い付いた事を試した。

それが、今している『部分具現化』。

そして、オウキ本体の一部の具現化は上手くいかなかったが、今具現化している『サーバント』の様なオウキの装備なら具現化出来る事が分かった。しかも、俺が普通に使える大きさの0.5化の状態です具現化する事も出来た（だから、今、具現化中のサーバントは通常より一回り小さい）。

0.5化は、普通の具現化より具現化体積が少ないせいか、意志力の消費が低く感じられて、いくらでも具現化できそうだった。まあ、『今は』そんなに大量に出す意味はないが………。

それにしても………なんだか気分がいいな………。

………何と言うか、こう、俺が考えた通りに物事が運ぶ事って、この町に来る前まで俺の記憶の中にない。

だからか、妙に気分がいい。

……まあ、今回は、命の掛かった状況下でもないから、よりそう感じるんだろうが………ってなんだありゃ？

俺が気分の良さ浸りながら高校棟近くまで来ると、高校校門の前に……何故か、メイド二人と執事一人がいて………これまた何故か、睨み合っていた。

夜衣斗

……えつと……ここって学校だよな？……他の登校中の生徒は……特に気にもしてないし……って事は……。

「いい加減に消えてくれませんか？ここは私達メイド部が先に確保した場所ですよ？」

つと、にこやかに言うメイド。ただし、目が笑ってない。

「何を言いますか。ここはみんなの場所。故に私達執事部がここに居てもなんの問題も無いのです」

つと、にこやかに言う執事。もちろんこつちの目も笑ってない。

メイド部に執事部？……同好会ならまだしも、部活承認されるのか？……何考えてんだろ、この学校教師陣……まあ、何だか牽制し合ってるようだし……音を発てない様に気を付けて通れば……気付かれないよな……多分。

丁寧な口調で言い争っているメイドと執事の隣を、そろりそろりと通り過ぎようとした時、メイドの一人がぴくりつと動いて、こちらを見た。

視線がこつちとはやや違う方向に向いているので、気付かれてはいない様だが……思わずびくりとして立ち止まってしまった。

じーつとこちらとはやや違う方向を見るメイド。

なんか妙な緊張を感じ、こつちもじーつとメイドを見てしまう。

ちよつと間を置き、不意に、メイドの頭にひよこつと『柴犬っぽい耳』が頭部に生えた！？

っげ！このメイド、武霊！？

不意に犬耳が生えた武霊メイドは、すんすんと鼻を鳴らし、耳を少し動かすと、隣で執事と言い争っているメイドの袖をクイクイツと引っ張り出した。

「……どうしたの？」

そのメイドの問いに、犬耳武霊メイドはすつつと俺を正確に指差した。

ステルスサーバントは姿を光化学的に消すだけで、俺から発せられている匂いや音まで消していない。

つまり、嗅覚などの視覚以外が特化した武霊がいれば、あっさり位置がばれると言っわけで……………

とりあえずそりそりそりと校門に向かって歩くが、犬耳武霊メイドの指はしっかりと俺を指差し動く。

無言でその指の動きを見たメイド達と執事達は、無言で指が向けられている場所を見る。

「いるの？」

武霊使いメイドの問いに、こくりと頷く武霊メイド。

その瞬間、執事の一人が俺に向かって両手を広げた。

「拘束念動」

と両手を広げてない方の、言い争っていた執事が言つと、「つつ！」と思わず言ったしまうほど圧迫感が俺を襲った。

くそ！指一本動かせない！！

この執事も武霊だったのか！念動って執事武霊使いが言っていた事からすると、超能力者の武霊って事か？……………本当に色々いるな武霊……………。

「……………これは凄い。こんな能力まで持っているのですか……………」
感心した様に言い何度も頷く執事武霊使い。

「何をしているんです？彼を見つけたのは、私達が先ですよ？」
とにこやかに言うメイド武霊使い。何だが額に青筋が浮かんでいる様な気がしないでも……………。

そのメイド武霊使いの後ろでは、武霊メイドがううくと威嚇の声を上げている。……………犬獣人の武霊って事なのだろうか？

……………まあ、何の武霊かはさて置き、早く脱出しなくては……………。
オウキ！

口も動かせないので、心の中でオウキを呼ぶ。

それで俺の背後にオウキが具現化していない状態が出たのか、ぎよっ！とするメイド武霊使いと執事武霊使い。

セレクト！ソードサーバント！

と強く心の中でイメージし、『ソードサーバント』の姿を強くイメージする。

見えないから分からないが、多分、それで半透明状態のオウキの右肩が開き、西洋剣をデフォルメした様なサーバントが現れ、瞬時に具現化。……………しているはず。

「な！無言具現に、部分具現化！？」

「嘘でしょ！？」

うまく具現化した様で、驚きの声を上げる二人……………これもやっぱり大変な事らしい……………むゝそんなに難しくなかったんだが……………とりあえず。

ソードサーバント。セレクト。スタンブレイド。

と心の中で命令すると、ソードサーバントの刀身部分が開き、電撃を内包した力場が大きな刃の様に展開する。

「まずい！？避ける！」

と自身の武霊に命令する執事武霊使い。

だけど、遅い！

俺の背後から飛び出したソードサーバントは、一気に執事武霊に近付き、一閃。

一瞬、バツシんつと小さな音がし、身体を硬直させて執事武霊が倒れる。

……武霊でも、気絶するんだな……何事もやってみるもんだ。

執事武霊が倒れると同時に、俺の動きを封じていた圧迫感が消えた。なので、校門に向かってダツシュ。

音出るとか気にしてられないしな、この状況。

つで、ダツシュと共に、ソードサーバントに心の中で命令して、メイド武霊を一閃し、気絶させる。

執事とメイドが何事かを言ってる気がしたが、無視。

よし！このまま下駄箱まで行って……ってなんじゃありゃ！？

夜衣斗

下駄箱の前につかいてディベアが、あくびをしながらでんと座っているのが視界に入り、俺は思わず足を止めてしまった。

そのディベアの膝の上には、ゴスロリ女が座りながらこちら、と言つか俺の周囲を飛び回っているソードサーバントを見ている。………しまった！消すのを忘れてた………。

疑問符が浮かんでそうな表情をしているので、俺がここにいる事は気付いていない様だが………とりあえず、ソードサーバントをステルスサーバントの不可視化領域に入れる。

それにより、ゴスロリ女が、おお！って感じで驚き、ディベアの膝から飛び降りて、こっちに向かってダッシュしてくる。当然、その後ろをディベアがのし追っかけてくる。

そろりそろりとその場から離れ、下駄箱に向かおうとしたが………どうも下駄箱には他にも待ち伏せしている逆鬼ごっこ参加者がいる様だった。

弓道着を着ている女の子（身長からして小学生ぽい）。エプロンを着用した男女（制服からして、中学生と高校生）。黒いローブを着た不気味な人（不明）などがあるのが下駄箱にいるのが見えた。

………これは………流石に………まあ、何となくこうなる事は予想していたから、鞆の中を上履きは入ってるから、どこから入ってもいいんだが………どこから入ろう？………ってか、今の俺って、何だか泥棒みたいじゃね？………む。

飛矢折

なんだか外が騒がしい………。

登校時間だと言うのに、不自然に騒がしい外の音が気になり、あたしは思わず着替える手を止めてしまった。

あたしの動きに気付いた部活の先輩である朝日童子部長が、窓から顔を出して外の様子を確認する。

「逆鬼ごっこ見たいよ」

逆鬼ごっこ……………その言葉の意味に……………無意識の内に身体が強張っている事に……………気付いた。

あたしの様子を気付いたのだと思う。朝日部長は、優しく微笑んで、

「私ね。最近美味しい洋菓子屋を見つけたの。今度一緒に食べる行かない？」

「え？いえ……………その、あたし、甘い物はちょっと……………」

「じゃあ、ピザ食べに行こ？私、おいしいピザ屋も知ってるの」

「ピザですか……………そうですね。いいかもしれません」

「じゃあ決まりね。そことピザね。とっても美味しいのよぉ」

そこから朝日先輩はそのピザ屋の事・昨日のテレビの事……………他愛のない会話を一方的に続けてくれた。

……………きつと朝日部長は、逆鬼ごっこが落ち着くまでここにあらしを留めておくつもりなんだと思う。

後輩の為って事もあるだろうけど、逆鬼ごっこに参加している武霊使い達を気遣ってもあるんだろと思う。

……………部長に余計な気遣いをさせてしまった……………早く何とかしないと……………それにしても、この時期に逆鬼ごっこって……………一体誰が？

そう考えた時、昨日の転校生の事を思い出した。

……………まさか彼が？……………転校二日目に逆鬼ごっこをするなんて、前例、聞いた事がない……………でも、彼は武霊使いだって言うし……………彼以外に逆鬼ごっこをする必要性のある武霊使いはいないはず……………だとする……………大丈夫かな、彼。

いかにも軟弱そうな身体を思い出して、ふつとあたしは心配になった。

気が付くと、朝日部長の顔が近くにあった。

驚くと同時に、反射的に手が出てしまい、それを朝日部長はあつ

さり止めた。

「うふふ。恋慕の表情ねえ」

「つな！つち！」

「違います！」

誰があんな軟弱そうな男に！

「むきに否定する所が余計に怪しい」

な！な！……………でも、確かに、気になってるのは確かなのかも
しれない……………でも、それが恋心だとは思えない……………そもそも、
あたし、生まれてこのかた恋をしたことがない様な……………。

「お姉さんが恋愛のイロ八教えてあげようか？」

「結構です！」

美羽

うう〜どこですか夜衣斗さあ〜ん。

高校棟の上空を旋回しながら、私は必死に夜衣斗さんを探していた。

でも、高校棟校門で少し騒動があったのを見つけたぐらいで、夜衣斗さんの夜の字を見つからない。

……よくよく考えてみれば、夜衣斗さんのオウキには、姿を消せるステルスサーバントがある。つまり、上空から探しても見つからないんじゃない？

私の心の問いかけに、コウリュウは困った様に私をちらっと見た。そうだよな……私達つて、『広範囲戦闘型』だものね……人を探したりとか、細かい事に全然向かないものね……本当に、どうしよう？う〜ん。

そうやって悩んでいると、とうとう予鈴が鳴ってしまった。

終了の鐘の音が鳴ってないから、まだ夜衣斗さんは捕まっても、教室にも辿り着いていない様だけ……。

夜衣斗さん……どこにいるんだろ？

夜衣斗

足下に宮本武蔵がいた。

っで、その後ろに黒子がいる。

……まあ、多分、宮本武蔵が武霊で、黒子が武霊使いなんだろうけど……この人何部だ？演劇部？……まさか黒子部とか黒子同好会とかじゃないだろうな……この学園ならありえそつだ。

のしのしと歩く宮本武蔵と音を立てずに歩く黒子を、息を潜めてやり過ごし、俺は再び学校の『壁をよじ登り始めた』。

現在俺がいる場所は、高校棟二階……の壁。

昨日の案内で分かったんだが、小中高の校舎は、一階が教職員室などの学校関係者の部屋になっており、二階が一年、三階が二年、四階が三年、五階が図書室などの科目別教室になってる。

ので、三階まで登らなきゃいけないんだが……何と云うか、今日は今までに感じた事がない感覚をよく感じる日だ。

今、俺の服装は、今『着ている』サーバントのステルス機能で見えないが、学校の制服から、マントとタイツとスーツの様な物を組み合わせた黒い服装になっている。これは、保護対象の身体機能を高め、一定の攻撃から保護する『パワードスーツPSサーバント』で、本体はマントに隠れて見えないが、背中についている他のサーバントよりかなり小型な円盤。その円盤から出るナノマシンが制服を再構成させて今の服装を形作っている。また同時に小型円盤から出ている管により、身体機能を身体の内側から強化するナノマシンが心臓・首・手首・足首から注入されており……要は、外と内からあらゆる身体機能を強化する事により、俺は今、学校の壁を難なく登れる超人になっていると云うわけだ。

何と云うか、俺は今までこれほどまでに自分の体を自在に動かした事はない。

思った通り、いや、それ以上に身体がすいすいと動く。

昨日も試したが……これは、かなり気持ちがいい。

………だけど、同時になんとも言えない怖さを感じていた。

どう考えても、異常だからだろう。

武霊もそうだが、こんな事が平然と、あっさりと出来る事は、自分の、いや自分だけではない構成する世界をいとも容易く壊しかねない。

それが怖いんだと思う……使っんじゃなかったかな……でも、使わないとこんな登れないし……。

などと悩みながら登っていると、あっさり教室まで辿り着いた。

つで、問題が発生した。

どこも窓が開いていない上に、鍵が掛かっているのに今更ながら

気付いた。

……登る前に確認しておくべきだったな……最悪……ガラ
スを割るわけにもいかないし……。

と思っていると、窓際に飛矢折さんがいるのが見えた。

飛矢折

恋愛のイロハを教えようとする朝日部長から、あたしは逃げる様に教室に入った。

正直、あたしはこの年になっても、恋愛のれの字も経験した事がない。

それはあたしの家が、『飛矢折流武術』と言う武術を代々継承している武術家の家だと言う事が、大きく関係していると思う。

あたしは子供の頃から生活の全てが武術漬けで、それを当たり前だと思っていた。

だからか、誰かに恋い焦がれる事も、武術を習得しているから周困から怖がられ、誰かから思われる事も無かった。

別に恋愛が必要だとも思わなかったし、憧れも抱いていない。それは今も変わらないけど……恋か……仮にそんな思いを抱いたとしても……その対象が、彼になるかな？

彼、黒樹夜衣斗の事を思い出し、窓際にいたので、窓ガラスに薄ら映るあたしの顔は……。

その時、不意に窓ガラスが叩かれた。

反射的に叩かれた窓ガラスの下を見ると、黒い変な格好をした彼がいた！

瞬間的に顔が熱くなるのを私は感じ、反射的にカーテンを閉めてしまう。

な！なんで、なんて、タイミングで窓の外にいるのよ！！！！

夜衣斗

ステルス状態を切って、窓ガラスを叩くと、一瞬俺を見た飛矢折さんが……何故か、物凄い早さでカーテンを閉めた。

PSサーバントは見た目上は頭部に何も装備していない様に見える

る。だが、実際には常に透過しているナノマシンが頭部の全てに装甲を作っており、頭部を攻撃されても他の場所同様の防御力を発揮する。なので、誰だかは分かったはずだと思うんだが………やっぱり窓からつとと言うのが、不味かったのだろうか？………どうしよう………
…ってか、もしかしてこの恰好がまずかったのだろうか？………まあ、昨今のコスプレイヤーに比べれば大人しい方だと思うんだが………いや、どう見ても飛矢折さんはそっち系じゃないしな………
………などと考えていると、カーテンが開く。
だが、カーテンが開いた向こうには、何故か村雲がいて、軽く驚いていた。

飛矢折

お……落ち着きなさいあたし。

彼の事は何とも思っていないんでしょ？

……何とも思っていない？……それは違うかな？……少なくとも、
気には掛けている……。

そう思つて……気付いたら、あたしは自分の席に座つてた。

無意識の内に自分の席に着いていたみたいだけど……えっと……
周囲に意識を向けると、あたしの様子が明らかにおかしかったの
か、クラスのほとんどがあたしを見ている気配がした。

こ、ここは平常心、少なくとも感情を表に出さない様に……

そんな意味の分からない努力を反射的にしながら、あたしはさっ
きまでいた窓際を見ると、いつの間にか教室に来ていた村雲君が力
ーテンを開けていた。

「……なにやってんだ黒樹？つつつか、変な格好……なんかのこ
スプレか？」

と窓を開けて言ったので、クラスの注目が一斉に村雲君に向けら
れた。

彼は無言で村雲君が開けた窓から教室に入り、教室を騒然とさせ
る。

一瞬、彼は自分に向けられている視線に気圧された様な感じにな
つたけど、直に何かをつぶやき、瞬く間にコスプレ姿から制服姿に
なつて、背後から小さな円盤が飛び出し、すぐに消えた。

……これが彼の武霊？……一体何の意味が……そっか、あの服装
が彼の身体能力を強化して、どう見てもひ弱な身体付きでここまで
壁を登つてこれたんだ……あれ？でも、彼の武霊つて……『装備
型』だったかな？

そう疑問に思つた時、逆鬼ごつこの終了の鐘の音が鳴つた。

美羽

逆鬼ごっこ終了の鐘の音が聞えた時、私は自分の教室に急いで向かっていった。

と同時に、私の携帯電話にメールが送られてくる。

急いでみると、「「鬼逃走成功」」と書かれていた。

こつやって逆鬼ごっこ参加者に結果の知らせが来るようになってるんだけど……よかった……夜衣斗さん、朝は捕まらなかったんだ……って、これって、私にもまずい状況なんじゃない？姿を消せるステルスサーバントを使われちゃったら、私には追う手段が……どうしよう……。

そう思っていると、不意にコウリュウが具現化していない状態で現れ、自分の鼻を指差した。

「……そつか、コウリュウって鼻が良かったね……じゃあ、夜衣斗さんの匂いがあれば、鼻で追えるって事？」

そつ心の中で問うと、コウリュウは頷いてくれた。

よし。放課後、覚悟しておいてね夜衣斗さん。

と気合を入れてみると、担任の姿が見えてたので、慌てて教室に入った。

夜衣斗

「へえ？さっきの格好は、黒樹の武霊の機能の一つってわけか？」
頷く俺に、面白そうに頷く村雲。

「姿を消したり、遠くの映像を見る事が出来たり、色々できるんだな。黒樹の武霊って……つつか、そんな汎用性の高い武霊、聞いた事もねえなあ……って事は……逆鬼ごっこに参加する連中が増えるかもな……」

最後にぼそつと村雲が言った言葉に……まあ、そうなるよな……。

朝のホームルーム終了後、昨日と同じ様に俺に話し掛けてくるクラスメイトは村雲だけだった。

話によると、逆鬼ごっこ中は、逆鬼ごっこに参加している部活・同好会に所属している者は、鬼に近付いちゃいけないらしい。

何でも、部活・同好会間条約つてのがあって、そこで決められた約束事らしいが……。まあ、わつと人が俺に集中してもどうすればいいか分からないから、助かっていると言えば助かっているんだが……。って事は、しばらくは学校で美羽さんに会えないわけか……。いや、まあ、わざわざ会いに行く理由も……

と思つてなんとなしに廊下を見ると、何故か美羽さんがいて……。俺の視線に気付いて俺に向かって手を振ってきた。

ぎよっとしていると、ツカツカつと言った感じで琴野生徒会長が現れ、美羽さんの襟首を掴んでフェードアウト。

……。なんだっただ？

美羽

「何するのよ！」

「何するのよ！じゃありませんわ！」

琴野の手を振り払って、私が講義の声を上げると、青筋が浮かびそつなくらい怒った顔になる琴野。

「あなたは全部活・同好会を敵に回すつもりですか！？」

「そんな大げさな……私はただ、転校二日目の夜衣斗さんがクラスに馴染めているか様子を見に來ただけ」

「それがいけないって言ってますの！わかってますの？あなたは逆鬼ごつこの勝者に一番近い人物なのですわよ。例え逆鬼ごつこ中じゃなくても、どんな理由があろうと、学校で不用意に黒樹様に近づけば、余計な憶測を呼ぶのは当たり前ですよ！」

「そんなの他の人達の勝手でしょ！？」

「勝手だろうと、余計な憶測は、反感を買いますわ……これ以上、武霊研究部の立場を悪くさせる気ですか？」

不意に声のトーンを落として言ったその言葉に、私は言葉を詰まらせた。

確かに琴野の言う様に、今の武霊研究部の立場は、とても危機的な場所にある。

それは部員の人数は勿論だけど、『過去に起きた武霊に関する事件や事故の多く武霊研究部が関わっている』事が、部の立場を悪くしていた。

それは武霊を研究する上で回避できない事だったから、部員はその事を覚悟して行動している。

……でも、春休みに起きた大原亮の武霊強奪事件が……決定的に立場を悪くして、ちよつと前まで武霊研究部の廃部が統合生徒会で話し合われてた……それを元部員である琴野の助力で廃部は辛う

じて免れたんだけど……その影響で部員の大半が他の部活・同好会に移動する事になっちゃって……。

「例えあなたにそのつもりがなくても、あなたの行動を誰かが条約違反と言い出せば、武霊研究部を潰したいと思っている方々を、わたくしが抑えきれなくなりますわ……せめて一週間、もしくは誰かが、いえ、あなたが黒樹様を捕まえるまで、不用意な接触は我慢しなさい」

「……わかったわよ」

「……不本意……と言うか、不安だけど、ここは琴野に従うしかないか……大丈夫ですよ？夜衣斗さん。」

夜衣斗

放課後。

村雲の言った通り、逆鬼ごっここの参加者が増えているのか、校内の至る所に学生がいた。

……どうやら、捕まえられる人間はそれぞれの部活・同好会で三人までな様だが、捕まえさえしなければどれだけ人数が増えてもいいようだ。

それに気付いたのは、同じユニホームを着た集団が……やたらとぎらぎらした目で周囲を窺っているのを度々見かけたからなんだが……逆鬼ごっこ参加者は、所属している所の格好をしなくちゃいけないんだろうか？……って事は、着ぐるみとか、シスターの格好とか、ビルダーパンツ一丁とか、ヒーロー戦隊と怪人の格好とか……普通の学校には明らかになさそうな部活・同好会があるって事になるんだよな……今朝も思ったが、何を考えているんだろうこの学校の教師陣……いや、経営陣か？……まあ、そんな事より……さて、どうやって学園から出ようかな？

俺が今いる場所は、高校棟のやや上空。

背中のウイングブースターを広げて飛ぶオウキにお姫様抱っこをされながら、俺は逆鬼ごっこ参加者がうろろする学園を見下ろしていた。

当然、ステルスサーバントを使って姿を隠している。

……まあ、それでも、視覚以外が特化した武霊に見つかる可能性があるので、あまり同じ場所に止まっていると、見つかる可能性が高い……一応、匂いで俺の位置を特定できない様に、俺の服とか鞆とかを持たせたステルスサーバントを何機も学園内に飛ばしているんで、しばらくは俺の位置は分からないだろうが……かと言って、このまま空から学園の外に出ようとすると……。

俺は視線を学園上空に向けた。

学園の空には、美羽さんのコウリユウを始めとした空を飛べる様々な武霊が、それぞれの武霊使いを抱えたり、乗せたりして飛んでいる。

……まあ、予想通りと言えば予想通りなんだが……。

こうやって中途半端な位置で飛んでいるのは、上空の武霊達を警戒してで……よく見ると、上空の武霊達のほとんどは鼻などが利きそうな動物系が多く、中にはコウモリなどの超音波でこっちの位置を把握しそうなまでいる。

……今の状況で、学園を脱出するのは難しいか……まあ、それも予想通り。って事で、予定通りどっか隠れられそうな所を探るか……。

そう思っ、俺は降りても問題なさそうな場所を探して、オウキをゆっくりと飛行させる。

俺の考えでは、逆鬼ごっこ参加者は、日が沈むにつれて減る。はず。

まあ、いくら普通じゃない学校とは言え、夜まで学校が開かれてるわけではない。

だから、学校が閉鎖されるギリギリまで粘れば、自然と帰らざる得ない逆鬼ごっこ参加者が増えてくる。町外から来ている生徒も多いことからして、それは間違いないと思う。

……もっとも、これは参加者側も当然気付いていることだろうか。逆鬼ごっこ参加者に出る限り学校に残れる者を選抜しているはず。そう考えると、学校内に寮がある事からして、その連中が逆鬼ごっこに参加している確率は高いだろうな……まあ、そんなに多くはないはずだから、今よりは大きく隙が出来る可能性が高い。だから、それまで見つからなさそうな場所に隠れないと……お？あそこなら隠れるのに丁度いいかな？

上空から見つけたその場所は、『いかにも誰も使っていないなさそうなぼろい道場』だった。

飛矢折

あたしが所属する部活は、女性護身武術部と言って、女性のみで構成された護身の為の武術を習う部活何だけど……あたしみたいに、所属するほとんどのメンバーが、護身の域を超えた武術を身に付けてたりする。

それは部が始まった当初から続いている伝統みたいなもので……そうなると気軽に部活に所属しようとする生徒も少なくて、予算も他の部からすると極端に少ない。その上に、部の理念から武霊使いを部自ら進んで入れる事をしていないので、鍛錬に使っている道場を修繕する費用すら工面できないでいた。

……つまり、何が言いたいかと言うと……あたし達が使っている道場の外見は、誰も使っていないさそうに見えるほどぼろぼろになっていると言う事。

中は何とか綺麗にしているけど……。

「今回の逆鬼ごっこは随分と派手ねえ」

あたしとの組手中に、不意に朝日部長がそんな事を言ってきた。その言葉に、一瞬あたしの意識が朝日部長からそれてしまい、その一瞬で一気に間合いを詰められて、気が付いたら床に倒されて、腕を極められていた。

「鬼は一人だけでしょ？ 確か巴のクラスに転校してきた子だけ？」

極められていた腕を放し、直に距離を取る朝日部長。

私も直に立ち上がり、構える。

「……もしかして、巴の恋慕の相手？」

と言われ、わけのわからない感情が瞬間的にあたしの中から湧き出して……気が付いたらあたしは道場の出入り口まで投げられ、着地。

朝日部長！

っと、立ち上がって講義の声を上げようとした時、唐突に道場の出入り口が開いた。

唐突だった事と、組手中だった事と、背後だった事が重なって、

「巴、駄目！」

と制止する部長の声より早く、あたしは出入り口を開けた誰かに、振り返りざまにあごに掌ていを放っていた。

掌に感じる打撃の衝撃。

脳震盪を起こして仰向けに倒れる誰か。

っど、どうしよう……。

うつろたえるあたしの横を通り過ぎて、朝日部長が素早く倒れている誰かの状態を確認した。

「……気絶しているだけ見たいね……巴、反省は後でも出来るから、とりあえず彼を中に運びましょ」

「……はい」

反射的にやってしまった事とは言え……私は同じ失敗を何度繰り返すのだろう……あれ？

うそ！？

驚く私に、朝日部長は疑問の視線を倒れている……彼、黒樹夜衣斗君に向けた。

美羽

放課後になつてすぐ、私は夜衣斗さんの教室に行つて、朝のホームルーム後に確認した夜衣斗さんの席にから夜衣斗さんの匂いをコウリュウに覚えさせ、それを頼りに夜衣斗さんを探している……んだけど……見つかったのは、透過しているステルスサーバントと夜衣斗さんの鞆だけだった。

やられた……流石、夜衣斗さん。こつちの二手三手先まで考えて行動してるなあ……って、これじゃあ夜衣斗さんを探まえられないじゃない!!どーしょ?

と思つてしていると、暴れるステルスサーバントを掴んでいたコウリュウが、唐突に困惑した声を上げた。

「どうしたのコウリュウ?」

その問いに、コウリュウは自分の背中に乗っている私に空の両手を見せる。

「逃がしちゃつたの?」

首を横に振るコウリュウ。

具現化を止めたのかな……でも、鞆を放置したまま?……と言つ事は、誰かに気絶させられた?誰が?どうやって?

気絶させるほどの攻撃をオウキが防御しないなんて事はないと思うんだけどな……じゃあ、事故?……でも、もし、夜衣斗さんが気絶させられているなら、逆鬼ごつこの終了の鐘の音とメールが届くはず……?

鐘の音も、メールも、いくら待っても鳴らないし、来ない……普通は捕まえたらずぐに、他の参加者に邪魔されない様に拠点に連れて行くと思うんだけど……と言つ事は、まだ捕まってるない?やっぱり、事故?……これって、チャンス?……

「コウリュウ。急いで夜衣斗さんを探すよ」

私の命令に「ウリユウは」鳴きして答えた。

夜衣斗

気が付いた瞬間、顎と後ろ首に物凄い痛みが走った。

反射的に痛みのする部分を抑えながら、ヒーラーサーバントをイメージし、

「セレクト。ヒーラーサーバント」

ヒーラーサーバントだけ具現化。

すぐさま治療用ナノマシンを体内に注入させ、痛みが引いた所で、
気付く。

俺が今どこかの道場内にいる事と、道場内にいる道着姿の女の子達十数人がこっちに注目している事に……………？……………どうなってるの？

俺が固まっていると、女の子達は思い思いの人数で固まってヒソヒソ話をし始めた。

……………えっと、確か……………隠れるのに丁度好さそうなぼろぼろの道場に入ろうとして……………そこで物凄い衝撃を感じて……………。

治療が終わったヒーラーサーバントを消し、首の様子を確認する為に首を回し……………そこで俺のすぐ近くに飛矢折さんがいる事に気付いた。

驚いて反射的に身を反らすと、飛矢折さんは困った様に苦笑する。

……………えっと、どう言う状況？

俺が困って固まっていると、飛矢折さんが申し訳なさそうな、困った顔をして、俺から目をそらした。

妙な沈黙……………？何なんだろう？

疑問に思っていると、道場の出入り口が開き、道着姿の女の子と白衣を着て禁煙パイプを加えた女性が現れた。

つで、白衣の女性が、俺の顔を見て、眉を顰める。

「なんだ。飛矢折に殴られたって聞いたから、見事な流血をして

るかと思えば……………無傷じゃん。期待して損した」

物騒な事を言う白衣の女性。

ってか、俺、飛矢折さんに殴られたのか？

飛矢折さんに視線を向けると、申し訳なさそうに正座している。

「そう言う発言は、保健医として相応しくないんじゃないですか？池上先生」

つと、それほど真剣じゃない表情で言う後から来た道着服の女の子。

「はん！私は不良保健医だからね。いいんだよ」

……………不良保健医って……………

「んな事より、もう用はねえな？帰るぞ？」

「ええ。わざわざ来て貰って申し訳ありませんでした」

「はん！全くだよ」

そう言つて、池上先生は道場を去つて行つた。

……………なんだかな。

池上先生を見送つた後から来た道着服の女の子が俺に近付き、

「初めまして黒樹夜衣斗君。私は女性護身武術部の部長、高等部

三年の朝日童子よ。よろしくね」

と挨拶してきたので、俺は立ち上がつて頭を軽く下げた。

「ごめんね。うちの巴があなたをいきなり倒しちゃつて。でも、

ノックもせずに不意に入つてくる君もいけないんだよ？そこは反省してね？」

そう微笑んで朝日先輩に言われ、反射的に頷いてしまう俺。

……………あゝなるほど、ここつて、いかにも使われてなさそうだと思つたあのぼろい道場の中か……………内装は綺麗だな……………まあ、使われているなら当たり前か……………つてか、内装だけじゃなく、外装も何とかしてほしいものだな。紛らわしい。

と思つてしていると、不意に叩く様に扉を叩くの音が聞えた。そして、「すいませ〜ん！ちよつといいでしょうか！？」

となんだか怒鳴るような美羽さんの声が聞えた。

っげ！そう言えば、今、逆鬼ごっこ中だった！ヤバい！ここつてあそこの出入り口以外に出入り口は……………つて、あれ？今気付いたんだが、もしかして、俺つて既にここの部に捕まつてる？

急に慌ててきよるきよると道場内を見回し、固まる俺に、朝日先輩が面白そうに俺に手を差し出した。

「服脱いで」

へ？

美羽

コウリュウの鼻が示した夜衣斗さんの居場所は、ぼろぼろの道場だった。

「……………ここって、確か逆鬼ごっこに参加していない女性護身武術部が使っている道場だったような……………と言う事は……………あの飛矢折先輩がいる所?……………もしかして、夜衣斗さん、飛矢折さんに気絶させられたんじゃない……………」。

そう思った時、私の中に確かな怒りを感じ、気が付いたら私は道場の引き戸をドンドンと強く叩いていた。

「すいませ〜ん! ちょっといいでしょうか!？」

声も何だか怒鳴った感じになってしまった……………そうだ。コウリュウを具現化したままだった。

そう気付いた私が慌ててコウリュウの具現化を止めると同時に、道場の引き戸が開いて、思わずドキッとしてしまう。

出てきたのは……………確か、女性護身武術部部長の朝日先輩だった。前に愛部長の代わりに部長会合に出た時に、ちょっとだけ喋った事があるんだけど……………。

「あら? 赤井さんだっけ? こんな所に、どうしたの?」

何の縁の無い私が急に訪ねて来たので、不思議そうな顔をしている朝日先輩。

「えっと、今、逆鬼ごっこをしています」

「うん。そう見たいね。でも、私達は参加してないわよ」

「はい。それは知っています……………えっとですね。鬼である黒樹夜衣斗さんの匂いを、私の武霊で追ってきたんですけど……………」

「匂い……………う〜ん。もしかして、これの事?」

そう言っただ道場の中にちょっと入って、私に制服の上着を差し出した。

……………えっと、もしかして、この上着の匂いを追っつけてきちゃったの私達。

背後の不具現化のコウリユウに視線を向けると申し訳なさそうに頭を垂れていた。

……………つうつ。またやられた……………。

「これ、うちの道場の近くに落ちてたんだって」

「……………そうなんですか……………お騒がせしてすみません」

「別にいいのよ」

「……………えっと、夜衣斗さんとはお隣同士なので、上着、私から返しおきます」

「そう？……………じゃあ、お願いね」

「はい。失礼しました」

私は夜衣斗さんの上着を受け取って、朝日先輩に一礼してから道場から離れた。

早く夜衣斗さんを見つけないと……………

飛矢折

道場から誰かが去って行く気配を感じた。

「もう大丈夫みたい……………出ましようか？」

私は一緒に『更衣室で隠れていた』彼にそう言つと、とてつもなく居心地が悪そうにしていた彼は直に頷いた。

……………女の子しか使っていない場所だから……………結構男の子の目のやり場に困りそうなものが散乱して……………でも、他に隠れる場所がないからつと言つて、彼から上着を受け取った朝日部長が、何か私も一緒に、無理矢理彼をここに押し込めたんだけど……………あれは絶対に面白がつてた。

更衣室から出ると、部活のメンバーが集められ、座らされている所だった。

「……………朝日部長？」

私が疑問の声を朝日部長に掛けると、朝日部長はいかにも悪巧みをしていそうな笑顔を私に向けた。

「はいはい。巴も座つて。あ！君は、私の隣に来て」

そう言われて、座らないわけにもいかないのです、朝日部長の前に私は座り、彼は困惑しながら部長の隣に移動する。

「はい、では発表します」

その言葉に、この場にいる部活メンバーは、一斉に嫌な予感を覚えたと思う。

朝日部長のこういうパターンで何かを言う時、大体が迷惑な（本人だけが楽しい）厄介事を言い出す事が多く……………。

「巴が彼を気絶させちゃったお詫びとして、逆鬼ごっこ中、彼をここで匿います。以上」

……………え？

間章その一 『星波学園の人々』 終了

間章その一『星波学園の人々』49（後書き）

まだ夜衣斗の逆鬼ごっこは終わってませんが、これで間章その一『星波学園の人々』は終了です。

次の章は第二章『カウントする悪魔』です。
引き続きこちらも読んで頂けると幸いです。

第二章『カウントする悪魔』 1

???

せまい。

せまい。

全てがせまい！

何でこんなにせまい!？

何もかも、この世の全てが、せまい!!

どこもかしこもせまい。

ギチギチ音を立ててしまえば、そんなほどせまいのに、

何で、何で、平気でいられる。

ああ!せまい!

せまい。

..... どうしたらせまくなる?

どうしたら

..... あ

あ..... そうか。

叩き壊せばいいんだ。

『全て』

夜衣斗

歌が聞こえる。

聞いた事がない言葉によって紡がれる歌。

その歌を歌う声に、聞き覚えがあった。

..... 誰だったけ?

閉じていた瞳を、ゆっくりと開けると、どこかで見た事があの公

園の光景が見えた。

そして、その公園の中央に、空中に浮いている光り輝く球体と、その球体に向かって歌を歌っている……ああ、サヤだったのか……って事は、ここは夢の中……いや、俺の心の中か……ん？……サヤの対面に、同じ様に歌っている『見た事のない小学生ぐらいのショートカットの少女』がいた。

どこかサヤに似たその少女は、俺の視線に気付いて、歌いながら俺にっこりと笑い掛けてくる。

その少女の様子で気付いたのか、サヤも俺に視線を向け、歌いながら、こっちは「もう困った子」と言った感じの表情になった。

気が付くと、俺は自分の部屋のベットで寝ており、携帯の目覚まし機能が鳴っていた。

……え〜っつと？……今の何だったんだろうか？

オウキを俺に渡して以降、こっちが呼び掛けても、一切反応が無かったサヤ。……つと謎の光球とショートカットの少女。

……意味が分かんなかった……俺の中の住人が増えて、その中で謎の行動をされている？……どうなっちゃったんだろう、いや、どうなるんだろう俺。

一抹の不安が俺の中を過るが……今はその不安より、どちらかと言うと、眠さの方が勝つて……学校の準備をしている内に、どうしようもない事である事も重なり……どうでもよくなってしまう。

それにしても……何と言うか、あらゆる面で今までの俺とは百八十度……つと言うより、どっかにぶっ飛んでる感じで変わっている。

武霊に関する事だけでなく日常的にも……『昨日の放課後』なんて特にそうだった。

第二章『カウントする悪魔』 2

夜衣斗

朝日部長の俺を匿う宣言に、部員の中から非難の声が……上がらなかった。

なんだか、何を言っても駄目つと言った感じの諦めの雰囲気全員から出ていて……苦労させられているのをありありと感じさせる。

ふつと気になって飛矢折さんを見ると、飛矢折さんは目をつぶって、動揺の一つすら見せてない様に見えた。

……何と言うか、他の部員と別格に見える。

強い……んだろつな……不意打ちとは言え、気が付いたら気絶させられてたんだから……でも、だとすると、犯罪武霊使いに……暴行され掛けた事を、彼女はどう思っているんだろつか？

じつと見ていたせいかわ、不意に目を開けた飛矢折さんと、目が合った。

昨日の今朝一瞬だけ向けられた怒りと恐怖が入り混じった様な感情は、そこには一切なかった。

……どちらかと言うと、困惑の感情が強く見られたような……。そんな事を思っていると、隣から視線を感じ、視線の主である朝日先輩を見ると、物凄く面白そうな笑みを浮かべていた。

……物凄く嫌な予感がするんですけど……。

「でね。気絶させちゃったお詫びとしては、逆鬼ごっこ中、君を匿うのは……こつちとしてはちょっと割りに合わないと思うんだけど、君はどう思う？」

……どう思っつて言われても……。

「割に合わないわよね？」

……何だか有無を言わさぬ迫力だったので、思わず頷いてしまった。

その途端、部員の皆様方からため息が漏れた。

……もしかして、俺、不味い事をした？

「じゃあ、巴の登下校の送り迎えをお願いしていい？」

……は???

第二章『カウントする悪魔』 3

飛矢折

朝日部長が、あたしの事を心配して、何かと気に掛けてくれるのは……とても嬉しんだけど……どうしよう……いえ、別にどうって事は……ない。うん……うん。そう。どうってことない。

「飛矢折さん」

不意に横から名を呼ばれて、反射的に裏拳を放ってしまふ。

いけないって思った時には……何か見えない柔らかい壁に裏拳は止められていた。

恐る恐る隣を見て見ると、そこには彼・黒樹夜衣斗君がいて、固まっていた。

前髪で視線が分からないけど、多分、あたしの手の甲を見ていると思う。

「……念の為……だったんだけど」

「ごーごめんなさい」

ぼそつと言った彼の言葉は、ちよつと震えてて、あたしは平謝りするしかなかった。

……そう言えば、彼の声を聞いたのって、昨日の自己紹介以来な様な気がする……無口な人。

「あたしの家は、昔からの武術家の家なの……その、だから、私、幼い頃から武術の修行をして……でも、あたしはまだまだ未熟で、つい、驚いたり、不意を付かれたりすると、その相手に、反射的に技を掛けてしまふ癖があつて……」

部長の有無も言わさぬ依頼で、一緒に帰る彼に、あたしは自分の事情を説明していた。

今日の部活は日が暮れるまで行われたので、他に下校している学生はいない。

ある意味助かったけど、ある意味窮地に立たされている気がする。その意味を……あたしは敢えて考えない。……ええ、考えません。

「子供の頃に、隙が出来たら攻撃される修行をしてたのがいけな
いと思うけど……」

……あ。今、ちょっと引かれたかも……よくよく気を付けて見れば、彼、前髪で表情は見え難いけど、それ以上に行動や反応が素直で、分かり易かった。

「勿論、普段なら意識すれば抑えられるんだけど……今は……」
あたしはついその先を言い淀んでしまった。

その先の言葉は、今のあたしから言えば……更に自分を不安定にさせてしまいそうで……きっと、あたしの事は村雲君あたりから聞いて知っているはず。

一週間前、私は……。

第二章『カウントする悪魔』4

飛矢折

一週間とちよつと前、あたしは犯罪武霊使いに襲われ……………その圧倒的で、理不尽な力によって、暴行され掛けた。

その時、あたしは星波町に住んでいる親友の家に遊びに行っていた帰りで、偶々彼女の家に忘れ物をしていた。その忘れ物を届けに来てくれた彼女によって……………彼女は強力な武霊使いだったので、あたしは、暴行魔から助けられた。

でも、あたしはその時、自分自身を成り立たせている武術が暴行魔に利かなかつた事や、初めて経験する圧倒的で、一方的な暴力に晒された事で……………強烈な恐怖を感じて……………酷く混乱していた……………

そして、あたしは、助け起こそうとしてくれた彼女に、親友の黄道^{どうみち}美幸^{みゆき}に、条件反射で技を掛けてしまい……………気付いた時には、彼女は倒れていて……………病院で検査の結果、美幸は、腕の骨とろつ骨を折っていた……………その怪我は、治療系の武霊使いの人に治してもらったけど……………美幸は、次の日から学校に来なくなった。

何度も美幸の家を訪ねて、美幸にも謝ろうとしたけど……………会ってくれなかつた。

……………彼女はきつと許してくれない。

そう思った次の日から、いえ、多分、美幸に技を掛けてしまった時から、あたしは心の制御が難しくなつて……………武霊を具現化中の武霊使いに不意にあつたりすると、その武霊使いに反射的に技を掛けてしまう様になつていた。

どんなに意識しても、気が付くと技を出して……………。

「きつと」

不意に、それまで黙っていた彼が、口を開いた。

斜め上の星空を見ながら、

「時間が解決してくれます」

斜め上に向いていたのは、きつと恥ずかしかったんだと思う。

「……………そう……………かな？」

思わず彼の顔をずっと見てしまうと、彼もあたしを見て、あたしが自分を見ている事に彼は驚いて……………頷いた。

問い掛けの答え？

……………彼の言葉は、明らかに気休めだったけど……………どうしてか、心が少し、ほんの少しだけど、安らいだ気がした。

きつと、それは、彼が強力な武霊使いだって言うのに、あまりにも情けなくて、あまりにも弱そうで、あまりにも……………優しいから……………。

彼は、私が抱いている普通の武霊使いのイメージとあまりにもか
け離れていて……………いつもおどおどしている美幸と、何だか似てい
た。

だからか、込み上げてくるものを抑えられず、あたしは笑ってし
まった。

いきなり笑いだす私に、彼はきつと怪訝そうな顔をして、むっと
していたと思う。

第二章『カウントする悪魔』5

夜衣斗

思い出すだけでも恥ずかしい。

飛矢折さんがあまりにも落ち込んでいたから、つい、喋って……
笑われた。

……タイミング的に、俺の言葉に対して笑ったんじゃないんだろ
うけど……頭では分かっている、心が、恥ずかしく感じている
……それにしても、その時に初めて見た、飛矢折さんの笑顔。……
……美羽さんの笑顔とは違う魅力を感じて……困った。何をど
う困ったかは分からないけど、困った。

……それにしても……何で美羽さんが『ここにいる』んだらう？
昨日の登校時より早い早朝、俺は星波駅の改札近くにいた。

その俺の隣には、何故かやや眠そうな面持ちの美羽さんがいる。
……昨日の夜、飛矢折さんの登校時間（朝練の為に他の生徒よ
りかなり早い）に合わせて家を出なきゃいけなかったので、朝食を
断り、先に登校する事を美羽さんに伝えた。

一応、逆鬼ごっこ対策と言ったので、美羽さんはどこかしづしづ
と言った感じで納得した（何故か美衣さんも同様にしづしづと……
……）

……つで、今朝、家を出たら何故か、玄関先に美羽さんがいて……
現在に至る。

何で俺が駅に来たのか、何も聞かず、黙ってついてきて……俺
が困って視線を送ると、にっこりと笑うので……何も言えず。

どうしよう……どうしよう？別にやましい事をしているわ
けじゃないし……いい……のか？

何だらう……こう……妙な不安感が……そう言えば、こんな
シチュエーション、漫画とかで見たことある様な……まさか自
分で実体験する事になるとは……こういう場合って……どうな

るんだっただけ？

などと思っていると、美羽さんから着信メロディーが流れ出し、慌てて美羽さんは『星電を取り出した』。

第二章『カウントする悪魔』6

美羽

「女ね」

……………うちの母上は唐突に何を言い出すんだか……………。
昨日の夕食の後、母さんは目をキラッと輝かせてそんな事を言
った。

「男がああ言う風にもっともらしい言い訳をする時って、大体知
られちゃいけない事……………この場合は女ね。ねえ、お父さん？」

「……………何でその会話で俺に振る」

そんな話を聞いて、私は何となくざわざわした感じになって…………
気が付いたらいつもより大分早く起きてしまい。

しかも、台所には、「がんばって」「と書かれた紙と、紙
袋に入ったサンドイッチとコーヒーの入った水筒が置いてあった。

……………別に、夜衣斗さんが誰とどう関係を気付こうと……………
っと思っている内に、私は準備を整えて、春子さんの家の前に来て
いて……………。

ん〜。う〜ん……………だって、誰かが条約違反しているかもしれな
いし……………別に、夜衣斗さんが……………その……………。

っ、悶々と考えていると、夜衣斗さんが春子さんの家から出て
来て、私を見付けて驚いた。

そして、私は何も言わず（何も言えず）、チラチラと私を気にす
る夜衣斗さんに……………私、この時、どんな表情をしたんだろう？

……………夜衣斗さんは妙に困った雰囲気を出しつつ、何故か星波駅に
やって来た。

……………これって、明らかに逆鬼ごっこ対策じゃないような…………

……………どうしよう。物凄く気になる。聞くべき？聞かないべき？…………

……………本当に女の人……………そんな、だって、まだ転校して今日で三日目
だよ……………実は夜衣斗さんってこう見えて……………女ったらしいや、

でも、女性が苦手だった言ってたし？……そんな、ありえないでしょ。

なんて、頭の中がぐるぐるとなっていた時、私の星電が鳴り出した。私は慌てて星電に出た。

四日前のあり得ないはぐれの発生の事もあるし、またはぐれが発生したのかと思って急いで出ただけど……。

「朝早くから悪いねえ〜美羽ちゃん」

掛けてきた相手は、東山さんだった。

……掛けてきた相手を確認するんだった……。

「なんですか？学生の朝は忙しんですよ」

多分、物凄い仏頂面をしてたんだと思う。だって、隣で私を見ていた夜衣斗さんが困惑した雰囲気を出していたから。

ちよつと気になったけど、東山さんの次の言葉で、私はそれどころではなくなってしまう……。

「悪いね。緊急の用件でさ……ついさっき、留置場からあの男が脱走しちゃったんだ」

「え！？脱走？……あの男？……って……まさか！」

「つそ。一週間とちよつと前に捕まえた『連続婦女暴行魔の犯罪

武霊使い・五月雨 都雅』」

第二章『カウントする悪魔』 7

????

「一、二、三、四、五、六、七」

星波警察署にある留置場内で、その男は目を覚めるといつも数を数え始める。

それは男が寝るまで続く為、留置場にいた全ての者達をノイローゼしてしまい、今ではその男以外に留置場内で動くものと言えば、彼を見張る監視カメラぐらいだった。

ぶつぶつと数えるその男は、黒樹夜衣斗が来る前に星波町を騒がせていた連続婦女暴行魔の犯罪武霊使い。

名前は、五月雨 都雅。つと名乗っているが、偽名である可能性が高く、星波町に来るまでの男の素性は一切分かっていなかった。

本人も明らかに思い付きの名前を名乗った以外、ずっと数を数え続けており、素性に関する情報は一切聞き出せずにいた。

これほどの犯罪者なら、星波町に来る前から犯罪を犯している可能性は高いと考え、問い合わせをしているが、未だに返答は返ってきていない。

仕方が無しに、現在、星波警察は『星波町外で通じる証拠の偽装』を進めている。

星波町で起こる。特に、武霊に関する事件は、忘却現象の影響で、まともに立件する事が出来ない。仮に、そのままの状態で立件し、拘置場に連行する為に星波町外に出すと、下手をすれば『その罪その物が無かった事になる』可能性があった。

そうさせない為に、星波警察は、犯罪武霊使いを捕まえる度に、その犯した犯罪を外で立件出来る犯罪に偽装する必要がある、どうしても通常の犯罪以上に立件まで時間が掛かってしまう。また、場合によっては、実際に犯した犯罪より軽い犯罪で立件する事がある。その為、近年、凶悪さが増す犯罪武霊使いに対しては、星波町内で

独自に刑罰を行うべきと言う話が出始めている。そして、その動きは高神姉弟が捕まった事により、加速し始めているが、今はそれほど関係無い話ではある。

「五十六、五十七、五十八、五十九、六十」

そこまで数えて、都雅は数えるのを唐突に止めた。

そして、『武霊封印』と無数に書かれた壁を見詰める。

星波警察署の留置場には、『武霊の具現化を封印する特殊な文字』が壁や床などのあらゆる所に書かれている。

これは『書いた文字に力を込める事が出来る武霊』によるもので、星波町には何人かそう言う事が出来る武霊を持つ武霊使いがいる。

武霊は武霊使いが具現化を止めれば、消える。勿論、武霊によって構成されているあらゆる物は消えるが、その武霊によって起った現象は消えない。それを利用した文字なのだが、物理法則に沿わない現象は、武霊同様に消える運命にあるらしく、定期的に書き直さなくていけなかった。その為、ここ以外ではこの武霊封印は行われていない。

その文字の一つを都雅は凝視していた。

文字自体に何かが起こっているわけではない。

だが、都雅は何かを感じ、その文字を見ている様だった。

唐突に、『文字を縦に割る様に刃が飛び出した』。

都雅はそれに対して何の反応を示さず、ただただ凝視するだけ。

飛び出した刃は、壁をまるでバターの様に切り、人が通れるぐらいの大きさの穴を開け、壁が倒れると同時に射出され、監視カメラを破壊した。

そして、監視カメラの異変に気付いた警官が留置場に駆け付けた時には、既に都雅はいなくなっていた。

第二章『カウントする悪魔』 8

飛矢折

あたしが星波町に着き、改札口を出ると、一人でサンドイッチを黙々と食べている彼がいた。

彼一人で食べるにしては随分大きな紙袋な気が……見た目に反して大食い？

「黒樹君。おはよう」

「……………おはよう」

「……………それ、黒樹君が作ったの？」

ちよつと気になったので聞いてみたら、彼は首を横に振った。

「一人で全部食べるの？」

「……………」

彼は無言で紙袋の中身を見せてくれた。

中は袋の半分ぐらいしか入ってない。

……………袋が他に無かったのかな？……………とりあえず、

「ごめんね。朝日部長の思い付きに付き合わせちゃって」

首を横に振る彼。

「……………えつと……………じゃあ、行きましょうか？」

首を縦に振る彼。

……………しばらく互いに歩きだすのを待ってしまって……………このままじゃずつとこの場所に居そうだったので、私から歩き出した。

彼は無言で、サンドイッチを食べながら、少し離れて歩き出す。

……………そう言えば、男の子と一緒に登校するのって、いつ以来だろう？……………。

夜衣斗

「ごめんなさい夜衣斗さん」

星電を切った美羽さんは、そう謝って、持っていた紙袋から自分

の分のサンドイッチを取り出して、俺に渡した。

「私、これから星波警察署に行かなくちゃいけなくなりました。ついで、これ、お母さんが作ったサンドイッチです。食べて下さいね。じゃあ、そう言う事で」

余程急いでいたのか、そう一気にまくし立て、コウリュウを具現化し、あつと言う間に空へと消えてしまった。

……脱走って言ってたから、警察署の留置場から誰かが脱走したって事か？……まさか、高神姉弟？い……またあんな連中と戦う事に……ならないよな……うまそうなサンドイッチ……。

何だかお腹が空いたので、美羽さんから渡されたサンドイッチを頂く事にした。

……おお！かなり美味しい！！……帰ったらお礼を言わなきゃ……。

そう思っていると、飛矢折さんが現れたので、軽く挨拶と会話を交わして二人で登校。

……それにしても……何だろう……妙に『嫌な予感』がする。

正直に言えば、飛矢折さんの様な美人と一緒に登校するのは、かなり嬉しい。

タイミングよく美羽さんがいなくなったので、何だが、何でか、ほっとしたが……どうしてか嫌な予感がする。

……ふつと思っただが、サヤや最後の敵が言っただ様に、俺が『死ぬべき運命を変えられた』のなら、某映画の様に、俺には『常に死の運命が寄ってくる』んじゃないだろうか？……だから、美羽さんに町を案内された時、高神姉弟に襲われた。そして、その死の運命に『宿命の悪意』が常に関わっているとすると……。

視線が自然と先に行く飛矢折さんに向かった。

今、あの時の美羽さん同様に俺に深く関わっているのは飛矢折さんだが……飛矢折さんが、宿命の悪意そのものつと言うのは……

…考えにくいな……だとすると、美羽さん同様に、言い方が嫌な
感じだが、飛矢折さんは『宿命の悪意の呼び水』になるんじゃない
だろうか？……そうなるか……もしかして……いや、
思い出して見れば、飛矢折さんは、宿命の悪意に関わっている。

連続婦女暴行魔。

そして、犯罪武霊使い。

その犯罪者に襲われた飛矢折さん。

留置場から誰かが脱走。

ここまで揃えば……どう考えても……飛矢折さんに関わら
なければ済むと言う問題じゃないだろうし、そもそも、それは飛矢
折さんが『再び襲われる』って事なんじゃないだろうか？……
…それを予想出来て……飛矢折さんをほうっっておく事が、俺に出
来るのか？……。

……また、ふっと思っただが……もしかして、朝日先輩は、『
こうなる事を考えて俺に飛矢折さんの送り迎えを依頼した』……わ
けないか……考え過ぎだな……。

俺は自分の考え過ぎにため息を吐いて、苦笑した。

第二章『カウントする悪魔』9

???

微妙な距離感で一緒に登校する夜衣斗と巴を、武霊の遠見能力で見ている男がいた。

男は数日前に高神姉弟から武霊を奪った大原亮。

場所は彼が隠れ家として使っている恋人のアパート。

そして、その恋人は、亮の隣で、武霊ブルースターの腹部に映し出されている二人の映像を心配そうに見ている巴の所属する部活の部長・朝日竜子だった。

「これでよかったの？」

「ああ……………すまない……………嫌な事を頼んで」

「いいのよ……………私が、部員達に突拍子もない事を言い出すのは……………」

ちよつと照れた様に、だがどこか疲弊した表情で笑みを浮かべる。「いつもの事なんだし……………でも、どうやってあの子を巻き込もうかって悩んだただけ……………まさか向こうからやってくるなんて……………あの子……………とてつもなく運がないわね」

「……………そうだな」

妙に含みのある返事に、竜子は一瞬不安そうな顔になったが、直に打ち消して、台所に向かった。

「朝ご飯。何食べたい？」

美羽

私が星波町警察署に着いた時、警察署の周囲は警官・自警団・野次馬でごったがえしていた。

とりあえず、警察署の屋上に降りようとコウリュウに指示を出した時、星電が鳴り出す。

今度は誰が掛けてきたかをちゃんと確認して……………美春さんだっ

たので、直に出る。

「美羽。何で来た？」

「え！？……東山さんに呼ばれて来たんですけど」

私がそう言うと、星電越しに美春さんが誰かを怒鳴り始め……多分、東山さんに対して怒ってるのかな？

私はちよつと迷つて、警察署の屋上に降りて、多分東山さんと美春さんがいると思う会議室に向かった。

自警団によく協力している関係で、私は星波町警察署によく来ている。

だから、今では警察署内の内部構造を大体知っているんだけど……

……ん〜警察署内を知っている女子高生って……今更だけど……

どうなんだろう？

第二章『カウントする悪魔』 10

美羽

会議室に着くと、美春さんが東山さんを睨んでいて、東山さんはいつものへらへら顔を浮かべていた。

「美羽……」

「おはよお〜美羽ちゃん」

私が会議室に入った事に気付いた二人が、対照的な表情で私を迎えた（美春さんが厳しい表情で、東山さんが無駄に明るい表情）。

「美羽。東山との話し合いの結果、コウリユウの力だけを借りる事になった」

「コウリユウだけ？」

「ああ。コウリユウには警察犬の代わりをして貰う」

警察犬の代わり？……そう言えば、星波町警察には警察犬がいないんだっけ……確かにそれだけだったら私はいらんないかもしれないけど……。

「心配しなくても、都雅はレベル1の武霊使いだ。わたしが負けるわけがないだろ？」

……ん〜確かに私は必要ないかな……。

そう思って、私は頷いて、手乗りサイズのコウリユウを具現化させた。

コウリユウを美春さんに預けて、私は警察署から出た。

徒歩での登校になるけど、夜衣斗さんが朝早くから家を出てくれたので、時間的に余裕はある。だから、遅刻はしないだろうけど……朝の逆鬼ごっこには間に合わないかな？……昨日の夜衣斗さんの動きからしたら、学園の武霊使いに捕まるわけないと思うけど……それって、私も捕まえられないって事な様な……どうしようっ？

そう悩んでいると、都雅を探している自警団と警察の人を見かけた。

……………それにしても、どうやってあの留置場から脱走したんだろう？

あそこって、武霊が具現化出来ない様になってるって聞いた事があるけど……………ただの人間になった武霊使いが脱出出来る様な場所なのかな？……………んゝ普通に考えれば第三者の手引きなんだろうけど……………仲間がいたって事？……………そんなわけないか。単独犯だって話は目撃者・被害者からの話から確かみたいだし……………じゃあ、誰が、何の目的で？……………もしかして……………うんう。そんな事ない。いくらなんでも……………そんな事をしない。

私は頭の中に浮かんだその人の事を、直に否定した。

……………でも、じゃあ……………本当に誰が？何の目的で？

第二章『カウントする悪魔』 11

????

五月雨都雅は自分を脱走させた者の先導で、『地中の中を歩いていた』。

地中を掘って進んでいるわけではない。

まるで都雅の周囲の土が『無い』かの様に透過しており、透過されていらない足下の土を踏み締めて進んでいる。

地中なので明かりは先導する者の持つ懐中電灯のみ。

その光が映し出す者は二人。

そのどちらも『小学生ぐらいの女の子』だった。

その子達は、異様に赤黒い、まるで血で染めたかの様なゴシックロリータの服装をしており、小さな子供とは思えない異様な雰囲気纏っている。

もっとも、都雅にとってはそんな事はどうでもよかった。

ただ、ただ、ただ、『壊したかった』。

目の前を歩く、少女二人を。

ここが地中だと言う事や、その二人に助けられた事、勿論、今『地中を歩いているはその少女二人のどちらかの力』によるものだと言う事すら、気にもしない。

そして、襲い掛かるうと足に力をためた。

その瞬間、都雅の周囲に瞬時に『無数の刃』が出現した。

皮膚に触れるか触れないかのギリギリの所で空中に浮いているその無数の刃に、都雅は身動きが取れなくなる。

少女の一人が振り返り、その年齢にはとても似合わない、『狂喜の笑みを浮かべた』。

都雅は今まで感じた事のない、『恐怖』を、本能が警告する『恐怖』を感じていた。

『勝てない』。『殺される』。つと。

その思考に、都雅は『無意識の内』に『歓喜に近い笑み』を浮かべた。

少女は開いた掌を都雅に向け、その手を閉じようとした時、動きが固まった。

二人の少女の片耳には、イヤホンが入っており、そこから制止の命令でも来たのか、舌打ちをして少女は手を下した。

つと同時に、都雅の周囲を囲んでいた無数の刃が一瞬の内に消えた。

無言のまま再び歩き出す二人の少女に、都雅は素直に付いて行く。

都雅は二人の少女に付いて行きながら、先程の刃で僅かに切れた頬をまるでその傷を楽しむかの様に、愛おしむかの様に撫で、狂気の笑みを浮かべていた。

第二章『カウントする悪魔』 12

飛矢折

学園大門に到着し、私は大門の向こうに無数の人と武霊の気配を感じた。

思わず大門前で固まってしまおうあたしに、

「……先に行きますから、少ししてから学園に入ってください」と言っ
て学園大門に入って行った。

ほどなくして逆鬼ごっこ開始の鐘が鳴り、無数の人の気配が、何故かそれぞれ違う方向に散っていくのを感じる。

あたしはそれを疑問に思いながら学園大門を潜ると、何故か彼が学園大門の直前で待っていた。

気配から本物だと分かるけど……。

あたしが彼に驚いていると、

「……いきましようか」

と言っ
て、彼は歩き出す。

……何をしたんだろう彼。

夜衣斗

今朝の逆鬼ごっこ対策は、昨日とは『逆』の事をした。

要するに、俺本人はずつと姿を現したまま、複数のドッペンゲンガーサーバントとステルスサーバントを出現させて、逆鬼ごっこ開始と同時に四方に散らせた。

当然、各サーバントには俺の匂いが付いた何かしらの物を持たせている上に、ドッペルゲンガーサーバントの『再現度も上げている（昨日は映像のみだったが、今回はナノマシンにより全て再現させている……まあ、その分疲れたが……）』ので、視覚以外に特化した武霊対策も万全。

だから、昨日の俺の行動を知っている逆鬼ごっこ参加者は、姿を

現している俺を偽物と思い、偽物であるサーバント達のどれかを本物と考えて、そっちを追う。っと昨日考え、実行した。

……… 思惑通り、学園大門の前で張っていた逆鬼ごっこ参加者達は騙され、偽者の俺を追っていき、他の場所で俺を発見した参加者も、俺を見付けても捕まえようとせず、全く障害なく教室まで来れ、朝の逆鬼ごっこはあっさり終了。

……… 内心かなりどきどきだったので……… うまく行ってよかった。

それにしても……… 俺の後ろを歩く飛矢折さんを見た逆鬼ごっこ参加者の反応は……… 昨日の飛矢折さんの行動を考えれば、俺以外の『被害者もいる』って事なんだろうな……… 俺がどうこう考えなくても仕方がない……… か。

第二章『カウントする悪魔』 13

美羽

私が学園大門の前に着くと同時に、逆鬼ごっここの終了の鐘が鳴った。

え〜……………今朝は早過ぎです夜衣斗さん……………。
……………でも、丁度良かったかも。しばらくコウリュウが使えなくなっちゃったし……………う〜んでも……………そう言えば、今朝はなんで駅に行ったんだろっ？……………逆鬼ごっこ中は早く出るって言ってたから……………明日も駅に行くのかな？……………むー気になる。……………つま、明日になれば分かる事だよな。

夜衣斗

……………何と言うか、今朝は美羽さんと飛矢折さんの二人が鉢合わせしなかったけど……………何となく明日も付いてきそうな気がする……………っと言うか、それに何の問題があるんだ？……………別に二人があっても何の問題も無い様な……………いや、あるのか？……………いや、やっぱりない様な……………じゃあ、なんでこんなに……………嫌な感じが……………。

「黒樹君。それ、何？」

俺が正体不明の感覚に悩まされていると、休憩に入った朝日先輩が話し掛けてきた。

俺は今、女性護身武術部の道場で匿われている。

昨日と同様の方法で逆鬼ごっこ参加者をかく乱して、ここに来たのだが……………。

朝日先輩の視線の先を見ると、俺が思考に没頭する前に見ていた古惚けたノートに注がれていた。

……………まあ、別にいいか。

俺はそのノートを朝日先輩に渡した。

「……………『王継戦機』？」

ノートのタイトルを読み上げ、ちらつと俺を見る朝日先輩。

……まあ、言いたい事は分かる。……子供の頃から書いて

いるやつだから……無茶苦茶字が汚く、読み辛いんだと思う……

……まあ、今もそんなに字は上手くなってはいないが……。

「これって、もしかして、『君の武霊の基』になつたもの？」

その問いに俺は頷いた。

第二章『カウントする悪魔』 14

夜衣斗

王継戦機は、俺が昔からずっと作り続けている空想の物語。

王と契約し、その王が死ぬまで騎士として仕える機械・オウキを主人公に、時代時代でオウキが仕える王との物語。

もっとも、それをちゃんとした文章や絵にしているわけじゃない。ストーリーは言葉にせず、俺の中で作り、その設定だけを文字と絵にしている。

……だから、今では何十冊となっている王継戦機のノートは、特に今日持ってきた一番最初のノートは、俺以外には何が何だか分からなくなっていると思う。

……まあ、基本的に他人に見せるものではないし、自己満足の物語で、一生自分の内で終わる話だと思ってたんだけど……まさか、武霊つと言う形で、外に出るとは……世の中、何がどうなるかなんてわからないもんだ。

ちなみに、何でそんなノートを持ってきたかと言うと、オウキについての設定があまりにも多いため、所々の設定があやふやな所があるので、その確認。

「……あなたの武霊つて」

何故か熱心にノートを見ていた朝日先輩が、不意に、

「騎士なのね……と言う事は、『馬もいる』のよね？」

……とりあえず頷く俺。

「その馬、武霊として出てきた？」

……何で朝日先輩はこんな質問してくるんだろう？……まあ、答えて困る事でもないし、俺は首を『横に振った』。

実は王継戦機の中でオウキには、パートナーがいる。

『キバ』と言う名の、『機械の馬であり、騎士の馬であり、鬼の馬であるオウキと同系統のロボット』。

オウキに次ぐ王継戦機の主要キャラで、オウキには欠かせないキヤラなんだが……どうやら、サーバントとは違って、オウキの一部として俺に寄生した武霊は認識しなかったみたいで、『いくら呼んでも出てこなかった』。

……つまり、オウキは、王の騎士・王騎にはなれないって事になる。

……それについては、ちょっと、いや、かなり落ち込んで……なくもない。

それにしても……本当に、なんでこんなに熱心にノートを見ているんだろ。

俺に質問した後も、まだノートを見続けている朝日先輩に、俺は首を傾げた。

第二章 『カウントする悪魔』 15

????

「そうか……確かにそんなに前から考えているキャラなら、強くて当たり前だな」

「本人自体は普通の子みたいだから……まだ自身武霊の扱いに慣れていない今なら、簡単に奪えると思うわ」

「……言っただろ？彼には、『削り役』になって貰うと……何を心配しているんだ？」

「……心配……と言うより……嫌な予感がするわ」
「嫌な予感？」

「……ううん。何でもないわ……きつと気のせいだわ……だって、今のあなたに勝てる武霊使いなんて……きつといないもの」

「……」
「……どうしたの？」

「……いや……何でもない……何でも」

様々な機器から放たれる僅かな光によって薄暗く照らされる部屋。そこに備え付けられた拘束ベルトに、五月雨都雅は縛られ、寝かされていた。

手首に打たれている点滴の影響か、虚ろな目で、部屋の天井を見ている都雅。

その都雅を無機質な目で見詰める五対の瞳。

全員がそれぞれデザインが若干違う血の様な色のゴシックロリータの格好をしており、全員が小学生ぐらいの女の子だった。

足下まである長い袖の服を着たツインテールの女の子。

肘・膝まで袖を短くしてある服を着たショートカット女の子。

フリルが異様に多い服を着たロングヘアの女の子。

必要な場所以外無い簡素な服を着たメガネを掛けた三つ編みの女の子。

肩やお腹など所々に穴の開いた服を着たポニーテールの女の子。内二人が都雅を脱獄させた二人で、残りの三人も子供とは思えない異様な雰囲気纏っている。

「華衣お姉様？」

不意にメガネを掛けた三つ編みの女の子が、ポニーテールの女の子・華衣に声を掛けた。

「なあに呼衣？」

呼び掛けてきたメガネを掛けた三つ編みの女の子・呼衣に微笑みを向ける華衣。

「……………」『試薬』とは言え、こんな男に、これを使うのは危険な
のでは？」

「ちよつと！何言ってるのよ呼衣！『お父様』の命令を疑うのか
!?!」

呼衣の質問に、ショートカットの女の子が激怒する。

「結衣……………」

「芽衣は黙ってな！」

ショートカットの女の子・結衣を止めようと、名を呼んだツインテールの女の子・芽衣は、結衣に睨まれ、それで委縮してしまう。

その結衣を庇う様に、ロングヘアの女の子が動く。

「何だよ麗衣！」

「……………」

無言のロングヘアの女の子・麗衣に、激怒する結衣。

「止めなさい」

優しく制止の言葉を言う華衣。

だが、その言葉・表情は優しくても、そこには、一切の優しさが込められておらず、四人が戦慄を感じて、息を飲み、動きを止めた。

「危険であろうと、疑問に思おうと、私達は『武霊チルドレン』

……………お父様の言葉は絶対よ。そうよね？」

その華衣の問いに四人は頷くしかなかった。

第二章『カウントする悪魔』 16

夜衣斗

日が完全に沈み、星が瞬いている。

「……まあ、要するに下校時間が完全に夜になってしまったと言
う事。」

どうも昨日、俺が遅くまで隠れていた事が知れ渡ったらしく、結構な人数がずっと残っていて……朝日先輩の部長命令もあり、ずっと残ってたわけで……何と言うか、あの人は『何か起こる』事を期待しているのだろうか？……何も起きないから！ってか、何かしたら、殺されるって……殺されるは大げさにしても……少なくとも、俺がどうこう出来る相手だとは思えないな……昨日今日でそれを十分に思い知らされたと言うか……こんな人、漫画とか、架空の存在以外に、本当にいるとは思いつたつと云うか……まあ、そんな人でも、より思いもなかった存在・武霊には敵わなかったって事なんだよな……どれだけ理不尽な存在かって事だよな……。

「ごめんね」

不意に、飛矢折さんが俺に謝った。

飛矢折

申し訳ない気持ちで、いっぱいだった。

多分、あたしと一緒に帰る事にならなければ……今朝の事も含めて考えれば、彼はとっくに帰っている。

それをあの部長は……別に送り迎えなんていって言っても聞きやしない……完全に面白がつてる……あの人はあゝ……まあ、でも、朝日部長のこれは、今に始まった事じゃないし……今、ここで怒っても仕方がない……それより今するべきなのは、
「ごめんね」

つと後ろを歩く彼に、あたしは振り向きもせずにあやまった。

「朝日部長が、こんな事を言い出さなければ……あなたも、こんなに遅くに帰る事になんてならなかった……よね？……だから、ごめんね」

あたしがもう一回謝ると、後ろで首を横に振る気配がした。

「……それは……こつちのセリフ……謝るのは、きつと……こつちだと」

恥ずかしいのか、たどたどしく言葉を紡ぐ彼。

「……その、ごめん」

絞り出すように、謝る彼に……あたしは、何とも言えない気持ちになった。

こつと言う風に、私は男に謝られた事がない。

……謝らせた事はあるけど……。

なんだか、新鮮と言うか……。

「お互いに謝っちゃったら、落ち着き所がないじゃない」
私がそう言うと、彼が頬を掻く気配がした。

それが可笑しくって、私は昨日と同じ様に笑い出してしまった。
うん。深く考えるのは止めよう。

たった数日、彼とだったら、少なくとも……平気……うん。きつと平気……だから、

「……じゃあ、今更だけど……しばらく、送り迎えよろしくね」

第二章『カウントする悪魔』 17

美羽

放課後、私は逆鬼ごっこに参加しないで、すぐに星波町警察署に向かった。

コウリュウから伝わってくる感情から、都雅が見付からなかったのを感じていたから、私も何か手伝えることはないかと思っただけ……

……この町で、警察の追跡から逃げられる場所なんて……町の外に出たとか？……ありえないか……。

ほとんどの犯罪武霊使いは、自身の武霊に『執着』する。だから、犯罪武霊使いが自ら町の外に出る事はなんて、前例はない……はず。

町の外に出てないなら……どこに？……ん？今、考えても仕方がないか。

……でも、今日見つからないって事になると……しばらくコウリュウが使えないって事だね？……しかも、夜の身回りもしないといけないだろうし……そうなると朝早くから出る夜衣斗さんと一緒に出ると……かなりキツイ様な……それに、今日みたい逆鬼ごっこに参加できなし……う？どうしよう？

夜衣斗

逆鬼ごっこ三日目。

昨日と同じ時間に家を出ると、家の前で、何故か美衣さんが立っていた。

俺が固まっていると、美衣さんにはにっこりと笑って、昨日美羽さんがサンドイッチなどを入れていた袋を差し出す。

「ごめんね。美羽、昨日夜遅くまで見回りしてたから、流石に起きれなかった見たい。それ、食べてね」

……そう言えば、昨日の夕飯にそんな事を言っていた様な……
……とりあえず、

「……ありがとうございます」

「いいのよ……っで、どうなの？」

？……意味が分からない。

「やあねえ〜。送り迎えしている女の子の事よ」

……へ？な！なんで美衣さんが、飛矢折さんの事を知ってるんだ！？……もしかして、目撃された？

「もう。家の美羽ってものがお隣さんにいながら、転校してすぐに他の女の子に手を出すなんて……もう、そんな感じが全くしないから、おばさん油断しちゃったわ。やるわね夜衣斗君」

なにが面白いのか、親指を立てる美衣さん……ってか、手を出すっで……。

「っで、どっちが本命？」

ほ、本命って言われても……。

首を横に振る俺。

「まさか！まだ女の子にも手を出すつもりなの？
な！なんでそうなるう〜。

あらぬ誤解に思いつきり首を横に振るしかない。

「……なんだ。面白くない」

……勘弁して下さい美衣さん。

第二章『カウントする悪魔』 18

飛矢折

今日の彼の逆鬼ごっこ対策は……正直、とてもびっくりした。昨日と同じ様に逆鬼ごっこが始まってから少しして学園大門を通ると、その先には彼はいなかった。

代わりに、知らない女子高生が一人、学園大門の壁に寄り掛かって待っていて……あたしを確認すると、

「行きましようか？」

つと彼の声で言った。

あたしが、びっくりして固まっていると、女子高生は苦笑して、一瞬だけ彼になって、女子高生の姿になった。

教室に入るまでにポツリポツリと聞いた説明によると、学園大門を通る際に出来る学園側のからの一瞬の死角を付いて、彼の偽物を複数作って、半分をそのまま、残り半分の姿を消して四方に散し、隠れていた彼は私の着ている制服を参考に女子高生の姿に化けた。つとの事。顔は、話によると彼が今お世話になっている叔母の、偶々見付けた高校生時代の写真を使っただけらしい。

……昨日は武霊使いとしての力を見なかったけど……こんな事まで出来るなんて……今は、正直……少しだけ……怖いと思っしてしまい。

あたしは……そんな自分を恥じた。

夜衣斗

……失敗したかな……。

今朝、逆鬼ごっこの対策の為に、ステルスサーバントの機能の一つを使い、俺は写真で見た高校生時代の春子さんに化けた。……

つで、迂闊にも、その姿のまま、飛矢折さんと一緒に教室まで来てしまった。

途中、飛矢折さんの微妙な変化に、どこか緊張している雰囲気を感じ、俺はつい動揺してしまい、べらべらと今回の対策の説明をしてしまい……より微妙だが、飛矢折さんとの距離を遠ざけてしまった気がする。

……まあ、遠ざかったからと言って、何が問題あるわけでもないんだが……嫌われるってのは好きじゃない……まあ、誰だってそうか。

「もう三日目か……流石にネタが尽きてきただろ？」

ポーンと飛矢折さんの後姿を見ると、不意に村雲がそんな事を言ってきた。

……ネタ？……ああ、逆鬼ごつこの事が……。ふと気が付くと、周囲の視線がこっちに集まっていた。

……

「……そろそろ……逃げるだけってのも……あきたな」

とぼそつと言って、口の端を上げる俺。

それに周囲がざわつくのを感じて……よし、これでもう少しだけ逃げに徹せられる。

「……黒樹って、策士だなあ」

つと後で村雲に言われたので、村雲は俺の意図を見抜いている様だったが……。

……まあ、村雲は武霊使いじゃなくなっているらしいから、逆鬼ごつこに関係無いからいいんだが……ん、確かに村雲の言う様に、そろそろ逃げの策も……使えそうなのはそろそろ尽きそうだな……さて、どうしたもんかな……ってか、そろそろ参加者側も何らかの策を取ってくる可能性がある様な……そつちの対策も考えておかないと……ん、……めんどくさい。

「????」

「え〜本日はわたくし達の提案に賛同いただきましてありがとうございます
ごぞいます」

「うち。まさかまた、連盟を組む羽目になるとはな」

「まあまあ、仕方がないじゃないですか。各部の武霊使いは平均
して二・三人。万能型の武霊使いを相手にするには、少々心許無い」

「だな……………まあ、武風の連中に持つてかれるよりましって事で
「つで、いつ仕掛けるのです?」

「放課後は……………難しいでしょうね」

「そうですねえ〜。すぐに雲隠れしちゃってえ〜、こっちがい
られるう〜時間以上まで隠れてる見たいですかねえ〜」

「かと言つて、遅くまで残れる連中は少ないしな……………」

「まあ、やれるだけの事はやって置きましょう。場合によっては
放課後で捕まえるチャンスが訪れる可能性も……………」

「そんな僅かな可能性に賭けるより、朝のチャンスに力を注いだ
方がいいんじゃない?」

「そうですね……………では、放課後の逆鬼ごっこは不参加と言う事
で、よろしいですか?」

「異議なし」

「いいんじゃない?」

「ですね」

「了解ですう〜」

美羽

逆鬼ごっこ三日目の放課後。

聞いた話だと、今日の夜衣斗さんは女子高生の姿に化けて逆鬼ご
っこをクリアしたとの事……………変身まで出来るなんて……………ますます

捕まえにくくなるじゃないですか……………今は参加できないからいいんですけど……………それにしても、今日の放課後は……………随分と静かな様な……………。

下校途中、昨日まで逆鬼ごっこ参加者とその関係者達で騒がしかった学園内が、妙に静かだった。

……………これって……………朝の逆鬼ごっこに力を集中するつもり……………
……………って事だよな？

ん〜確かに、どこに隠れているか分からない放課後より、ゴールが限られている朝の方が捕まえられる確率は高くなるだろうけど……………みんな分かっているのかな？夜衣斗さんの武霊は、あの剛鬼丸や高神麗華の武霊を退ける程の力を持つてるんだよ……………まあ、でも、夜衣斗さんが進んで誰かを攻撃している姿は想像できないけれど……………武装風紀が参加するまで捕まりそうにないかな……………そう考えると、私が逆鬼ごっこで夜衣斗さんを捕まえられるチャンスって、武装風紀が参加する日かな……………だとすると、今日明日で都雅を見付けて捕まえないと……………。

よぉ〜し！がんばるぞお！！

第二章『カウントする悪魔』 20

夜衣斗

逆鬼ごっこ四日目。

昨日の放課後は、どう言うわけか……まあ、見当は付くが……
ほとんど逆鬼ごっこ参加者がいなかったたので、あっさり帰れた。
そして、美羽さんは昨日も見回り、っと言うより、脱走した犯罪
武霊使いの探索をしていたのか、今日も玄関前に美衣さんがいて、
朝食を渡してくれた。

……何だか毎朝玄関で待つて貰う、っと言うより、朝早くから
朝食を作つて貰うのも、かなり申し訳ないので、「明日からはコン
ビニで朝食を買います」って言おうとしたら、「主婦の朝は早い
よ」っつと微笑んで言われたので……どうやら、美羽さん同様に俺
の考えを見透かしている様で……流石親子。

などとちよつと困つた事を感じしながら、飛矢折さんを迎えに星
波駅に向かつている……っつと、不意に携帯だ震え出した。

朝早く、しかも親と春子さんぐらいしか……つい先日多少は増
えたが、俺の携帯の番号を知っている人間は少ない。

その知っている人達が、こんな時間帯に電話を掛けてくるとは思
えず……嫌な予感がした。

やや躊躇いつつ、携帯の画面を見ると……予想通り、画面には
『最後の敵』

つと出ていた。

……こんな登録した覚えはないんだけどな……何でもありが

……

「不味い事になった」

携帯に出ると、挨拶も無しにそんな言葉が携帯から聞えて来た。

まずい事？……今の状況以上にまずい事なんてあるのか？

「僕の予知が利き難しくなり始めている」

……………それって……………

「そうだ。君への手助けがより難しい状況になった」
「なんだよそれ……………そつちに何かあったって事か？」

「僕側にはそれほど大きな事は起こってない。変化が起こっているのは主に君側の方だろう……………予想だが、私と君同様に『運命を変えられた者』が君の運命に関わり始めているんだらう。でなければ、こんな事は起きない」

俺達以外に運命を変えられた者が？……………あんたが知っているって事は、全員同じ人物に変えられたって事か……………つで、運命を変えられた者が関わる運命は、本来の運命より多くの細かな分岐が起こり、大きな流れ以外は……………弱い予知では読み切れなくなるって事だよな？……………つで、そんな奴が、俺とあんたともう一人つで、計三人いるって事が……………

「僕の知る限りでは、運命を変えられた者は、後『六人』いる」
「六人も？……………まさか、その全員が関わっている……………のか？」

「その可能性はない……………だが、今回の場合は、その六人の内の誰かだらう」

……………誰か……………ね……………

「もちろん。見当は付いている。だが……………そいつだった場合……………やはり、僕が君の手助けをしたのが、大きく影響しているんだらう……………ある意味、予想通りではあるが」

予想通り？……………もしかして……………あんたが見当付いているって相手は……………あんたの『運命の敵』……………か？

「……………ああ、そうだ」

……………。

「……………君に関わる前までの予知では、君の『今回の敵』は、もう少し先に事を起こすはずだったんだがな……………その事を含めて、予想出来て然るべきだったのかもしれない……………すまない」

……………最後に敵になる奴に謝られてもな……………

「っふ……そうだったな……では、僕が知り得た限りの情報を教える」

……知り得た限りね……

「五月雨都雅。それが今回の敵の……まあ、今名乗っている偽名だな」

偽名って……本名は？

「知る必要ないだろ？それに、本名は奴にとって、捨てた名前。意味はない」

……まあ、どうでもいいが……っで、その都雅って奴は……なんなんだ？

「君が星波町に来る前に捕まり、先日脱走した連続婦女暴行魔の犯罪武霊使いだ」

やっぱり……そいつか……って、どうして、こう、嫌な予感・予測はよく当たるんだろうか？……はあ

第二章『カウントする悪魔』 21

飛矢折

……なんだろう？

今朝は随分と張り詰めた雰囲気を彼は出していた。

何があっただろう？

そう疑問に思っている内に、学園大門前までやってきて……彼はあたしを見た。

「……今日は、先に行ってください」

「先に？」

頷く彼に……あたしは特に断る理由もないで、

「じゃあ、先に言ってるね」

そう言つて先に学園大門を通ると、学園大門の向こうには、隠れてはいるけどあっちこつちに殺気立っている逆鬼ごっこ参加者の気配を感じた。

辺りに漂っている雰囲気から……多分、部活の垣根を越えて連盟を組んでる。

……昨日見たいに何か考えがあるんだろうけど……どうするつもりなんだろう彼。

少しだけ、昨日と違う彼に……よく分からない不安をあたしは感じていた。

美羽

結局、昨日も都雅を見付けられなくて、遅刻ギリギリまで寝ちゃってただけど……何この惨状？

少し慌てて学園大門をくぐると、学園庭園の至る所で意識を失っている……つと言つより寝ている人達が目に入った。

……えっと……普通に考えると……夜衣斗さんの仕業だよな？。

困惑しながら周囲を見回していると、クラスメイトの一人がいたので、何があつたか聞いてみた。

なんでも逆鬼ごっこが始まると、夜衣斗さんは初日の様に二度目の鐘が鳴るまで動かなかつた。

また偽物かと疑り、いくつかの部活がその場から動こうとすると、まるでこの場にいる自分が本物だという様に、夜衣斗さんはオウキを具現化。

逃げの一手だつた今までの夜衣斗さんのあまりにも違う行動に、逆鬼ごっこ参加者が戸惑う中二度目の鐘が鳴り、それと同時に夜衣斗さんはオウキから無数のサーバントを出して、逆鬼ごっこ参加者に突撃させて、サーバントからガス散布。

そのガスは吸うと寝てしまうガスで、慌てる逆鬼ごっこ参加者を次々と眠らせ、既に具現化していた武霊はオウキと攻撃用サーバントがあつさり倒し……………学園庭園にいた逆鬼ごっこ参加者全員を寝かしてしまった。つこの事。

……………ん……………何だろう?……………会つてまだそんなに経つてないけど……………夜衣斗さんらしくない様な……………何かあつたのかな?

第二章『カウントする悪魔』 22

夜衣斗

「どう言っ心変わりだ？」

村雲が面白そうにそんな事を聞いてきた。

どう言っって言われてもな……………説明出来ないよな……………まあ、村雲は俺が昨日は逃げる気でいたのを見抜いていたからな……………俺だって、昨日までは逃げるつもりでいたんだが……………あの最後の敵からの情報で、『また否応無しに戦う事になる事が確定した』ので、少しでも武霊の使い方を慣れる為に……………正確には、武霊使いをいかに『傷付けないで無力化』出来るかを試した。

オウキや攻撃系のサーバントで武霊を攻撃し、倒すかその行動を邪魔している間に、その武霊使いを無力化する。今回はあらゆるガスを作り出す事が出来る『GMサーバント』^{ガスメーカー}を使って、吸うと一気に寝てしまう睡眠ガスを使った。

それほど強力なものに設定していなかったので、そろそろ睡眠ガスを吸って眠った人達……………多分、起きているはず。

「……………ほんと策士だよなあ。武霊も強いし……………最強なんじゃね？」

……………最強……………ね……………。

その冗談交じりの言葉に、俺は苦笑した。

こう思ったからだ。

『この町限定の強さに、何の意味があるか？』
つと。

その時、俺は自覚できる程、『暗い感情』が心の底で動いたのが分かり……………眉を顰めた。

飛矢折

「ほんと策士だよなあ。武霊も強いし……………最強なんじゃね？」

その村雲君の冗談交じりの言葉に、一瞬だけ、彼の気配に不穏な気配が混じったような？……………いけないいけない……………何だか彼を自然と気に掛けてしまう……………彼がどこか頼りない雰囲気を出しているから……………だと思う。

……………それにしても……………どうも信じられない。彼が一人で百人近くいる武霊使いを無力化した…………………………やっぱり武霊って……………好きになれない。

???

五月雨都雅が目を覚ますと、そこは高神姉弟がいなくなった事により完全に無人となった廃校の保健室だった。

ややぼーとする頭で、上半身を起こすと、胸板に置かれていた何かが落ちる。

確認すると、それは自己注射型の注射器だった。

その注射器には何かが書かれた紙が張り付けられており、見るとその注射器の説明が書かれていた。

その内容を見て、都雅は、

「つくつくははははは！」

唐突に高笑いをし始めた。

第二章『カウントする悪魔』 23

夜衣斗

逆鬼ごっこ五日目。

いよいよ明日は武装風紀が逆鬼ごっこに参戦してくる。

だから、もう少しオウキの力を試したかったんだけど……………

…どうやら昨日やり過ぎたらしい。

「今日は逆鬼ごっこ参加者いない見たい」

つと飛矢折さんに学園大門前で言われた時、何でわかるのかって思ったが……………学園大門を潜ると……………本当に誰もいなかった。

多分、昨日、圧倒的に……………不意打ちと混乱を呼ぶ様に動き、一対集団だったからこそあんなにうまくいったのだと思うが……………無力化したの、影響しているんだろっけど……………俺を捕まえるのを諦めた……………わけないか。

学園大門から教室まで向かう途中、明らかに無数の視線を感じた。……………予想だが、多分、明日の逆鬼ごっこ……………武装風紀が参戦してくるのに合わせて捕まえようとしているんじゃないだろうか？

村雲の話では、武装風紀には、星波学園のトップクラスの武霊使いが集まっているらしく、その中の最強の三人が参加してくるのは間違いない。つとの事。しかも、直接参加しなくても、探知系の武霊使いがその三人をサポートする事は特にルール違反ではないらしく、今までやった様に隠れたり、逃げたりは難しい様で……………そんな三人とぶつかれば、互いが消耗するのは明らかだし……………最悪、捕まる可能性もある。そこを他の参加者は突くつもりなんじゃないだろうか？……………つと言うか、俺だったらそうする。だから、今日は意志力の温存の為に、逆鬼ごっこをパスしたのだろう。

……………そう言えば……………どう言うわけか、俺は意志力の回復が異常に速いらしい。

村雲の話によれば、慣れない武霊使いが武霊を具現化すると、半

日は意識がぼーっとするらしい。また、慣れた人間でも、武霊の能力や機能を多用すれば、同じ様な状態になるらしく……それをどう言っわけか、ここ数日、俺は経験した事がない。そもそも、剛鬼丸戦や高神麗華戦で、意識を失い・失いそうならい意志力を消費したのに、翌日にはけるっとしてる。普通なら、一日か二日、最悪、一か月近く意識を失っているとか……これは……何なんだろうか？武霊使いには個人差がかなりはつきり出るとも言ってたが……これも変えられた運命の一つなのだろうか？……

第二章『カウントする悪魔』 24

美羽

昨日も結局都雅の探索と見回りで徹夜になっちゃって……あま
り寝てない……だから、ちよつとふらふらで……。
そんな状態で教室の前まで来ると、偶然教室から出てきた琴野に
会ってしまった。

……タイミング悪い……

「あら赤井さん？……顔色が悪いですわね」

……そもそも、学園側が自警団に、少なくとも警察に協力して
くれれば……連日連夜私がこんなに苦労しなくてもよかつたんじ
ゃ？……

「なんですの？その目」

「……別に」

「……」

私の反応に文句を言おうとしたのかちよつと怒った顔になった琴
野が、不意に心配そうな顔になった。

「な！なによ」

「……あまり無理はよくありませんわ。何でしたら、保健室に
行きますか？先生には私から言っておきますから」

「……っだ、大丈夫よ」

琴野こう言う所が、私はちよつと苦手だ。

どんなにいがみ合ってる相手であろうと、不意に優しさを見せる。
高いプライドと強い優しさを持つって事なんだろうけど……
……

ちよつと琴野の対応に困っていると、予鈴が鳴ったので、教室に
戻ろうとすると、

「何だか……嫌な予感がしますの」

そう言って琴野は自分の教室に入った。

……嫌な予感……確かに私もそれを強く感じる。
武霊使いになった人の中には、時より感が鋭くなる人がいる。
私や琴野もそうで……って事は、今日、何かが起こる……
のかな？

第二章『カウントする悪魔』 25

飛矢折

……………どうしよう……………いや、でも、こうなる事はある意味予想出来たかもしれない事なただけ……………。

周囲から、途切れ途切れだけどあたしと彼の事を噂している声が聞こえる。

どうやら、昨日まで送り迎えを目撃した人がいて……………今朝一緒に教室まで来たのが決定的になっちゃったみたいで……………わざとか、無意識か、あたしの耳がいいのか知らないけれど、事実無根な事ばかりを話しているのが聞こえてくる。

「私、手をつないでる所を見たよ」

「えゝ嘘。あの飛子が!？」

繋ぐどころか、離れて歩いてたはずだけ……………。

「私なんてキ」

流石に聞くに堪えられなくなり、あたしは教室を出た。

教室を出る際に、一瞬だけ彼を見たけれど、自分が私とどんな噂話をされているかなんて気付いていなさそうだった。

……………何だろう? 妙な気分になった。

夜衣斗

帰りのホームルームの前。

不意に村雲が、

「そう言えば……………黒樹いゝ」

そう言ってニヤリと笑みを浮かべる。

……………?

「お前、飛矢折と一緒に登下校してるんだってな。大人しそうな奴だと思ったが、以外にやるじゃねえか」

……………なんだかな。不可抗力で、互いに望んで……………わけ

じゃない……んだよな？

「まあ、飛矢折は……反射的に技を掛けてこなければ……この学校でトップクラスにはいる美人だからな……密かに狙ってる連中は多いんだぜ？」

確かに……美人だよな……まあ、そうなんだろう。もっとも、本人は、恋愛とは縁遠そうな生活をしているみたいだけだな……。

「ついでに言うと、美羽も同じ様に狙ってる連中が多くてな……こっちは色々と事情があるから手を出す奴はいないが……」

……美羽さんも確かに美人だよな……この町に来てから、度々思うが、本当に妙に美人と関わりが多くなってるな……何だか漫画とか小説とかアニメとかの主人公になった気分だ。……それにしても、色々と事情がある？

その言葉に、俺はふと、数日前に見た無人の家を見詰めている美羽さんを思い出した。

「……でだ、武霊使いにもその二人に気がある連中がいてな……逆鬼ごっこ中、妙に殺気のある奴を見かけなかったか？」

……ああ……なるほど……妙に迫力がある……つとつか殺気立ってる奴が何人かいたな……そう言う理由か……

「速攻で帰る俺の耳に入るほどだから、黒樹が二人の近い所にいるって事を知った連中、結構多くなってるんじゃないか？……明日の逆鬼ごっこ大変だぞお」

……そう、面白そうに言われてもな……どうも俺自身とは関係ない所で事態が悪化している事が多いな……最近……それにしても……俺の様な冴えない男が……あの二人とどうにかなると……本気で思ってるんだろうか？……っは！……っふう……ありえないだろう？……普通。

第二章『カウントする悪魔』 26

飛矢折

放課後。

昨日と同じ様に、意志力の温存策に出たのか、逆鬼ごつこの参加者は零だった。

だからあたしと彼は、土曜日って事もあって、いつもより早く下校して、学園大橋を徒歩で渡っている。

もつともそのせいで、僅かだけれど他にも下校している生徒がいて……視線を集めていた。

……本当に余計な事してくれたよ……朝日部長。

……まあ、でも……これだけ離れてれば……。

少しだけ後ろを見ると、彼は、昨日よりやや離れて歩いてた。

……多分、あたしと彼に対して流れている噂を耳にしたんだと思う……申し訳ない事をしてしまったかもしれない……こんな暴力女と関係が噂されるなんて……きつと嫌な気分だ。

そう考えた時……妙な胸の痛みを……え？……これって……

……まさか！？……まさかね……？

ふっと気が付くと、他の下校中の生徒達が立ち止まって、不審そうな目を町側へ向けていた。

釣られて同じ方向に視線を向けると、そこに

『あの男』がいた。

夜衣斗

学園大橋の終わりに、まるで歩道を塞ぐかのように一人の男が立っていた。

不意にフラリと現れたその男に、進路塞がれた他の下校中の生徒が思わず立ち止まり、不審そうな目をその男に向ける。

俺はその男を見た瞬間、全身に『得体のしれない寒気』を……

いや、今まで感じた事がない『得体のしれない恐怖』を反射的に感じていた。

「あ…………あ…………」

前を歩いていた飛矢折さんが、言葉にならない小さな声を出す。

身体が震え、一歩二歩つと後ろに下がる飛矢折さん。

…………もう間違いない。

『その時』が来たのだ。

俺は緊張と恐怖で生唾を飲み、逃げたしたい気持ちを無理矢理押し込んで…………飛矢折さんの前に出た。

第二章『カウントする悪魔』 27

飛矢折

情けなかった。

あの男を見た瞬間、あたしの脳裏に、襲われた時の記憶と……美幸に誤って暴力を振るってしまった時の記憶がごちゃ混ぜに浮かび……言葉に鳴らない声を上げ、無意識の内に後ろに下がってしまっ

情けなかった。不甲斐無かった。

心が乱れ、呼吸が乱れ……苦し

不意に視界が塞がった。

彼が、後ろにいたはずの彼が、まるであたしを庇う様に、あたしの前に移動していた。

その背中は……震えていた。

彼は……気付いているんだ。

あたし達の前にいる男が、私を襲って捕まった犯罪武霊使いだって事を……。

……そう、あいつは捕まっただけ……じゃあ……なんでここに？

???

唐突に現れた不審な男に、対峙する黒樹夜衣斗と飛矢折巴。

その対峙を目撃した他の下校中の生徒は、その三人の間に流れる不穏な空気に、何人かが学園に戻り、何人かが不審な男から離れて通り抜けた。

不審な男の横を通り抜けた生徒の一人が、ほんの少しだけ視線を男に向けると、男はその視線を飛矢折に向け、何かをつぶやいているのがわかり、ぞっとした。

夜衣斗

周囲から他の下校中の生徒が逃げて行くが、多分都雅であろう不審な男は目もくれない。

ずっと、飛矢折さんを見続け、何事かをつぶやいている。

その目には明らかに狂気が宿っている……だが……高神麗華の様に心底狂った感じは……何故かしなかった。

狂気と正気が混じった男……っと言う事なのだろうか？

……そもそも、連続つと名の付く犯罪を犯している事から考えると、余程運がいいのか……まともな思考が出来るかのどちらかって事になる。……どうやら、都雅は後者の様だが……そうなると、高神麗華の様に、俺の策が通じるだろうか？……いや、状況的に考えて、こうまで接近されていると……策どころの距離じゃないか……となると、純粋な武霊同士の戦いになるのか？………それにしても……おかしい。なんでこいつ、直に襲いかかってこないんだ？

それなりの時間、睨み合っているのに、都雅は一切動かず、ずつとつぶやき続けている。

……このまま通り抜けたりして……。

などと思った瞬間、

『サイレンが鳴り出した』！？

第二章『カウントする悪魔』 28

美羽

はぐれの発生は、いくつかの方法で、ある程予測出来る

最近ちよつと崩れてきたみたいだけど、大体前回の発生から一週間以上間を開けて発生する。とか、武霊使いになって勘が異常に鋭くなった人が察知する。とか。予知能力のある武霊が予知に成功する。とか。色々。

……でも、そのどれもが不安定で、必ずしも予測が当たるとはわけじゃないけど、今回は……かなり当たっている確率が高いと思う。

今、私はコウリュウの背に乗って星波海岸の上空を旋回しているんだけど……眼下に見える星波海岸には、多くの武霊使いがいるのが見えた。

これが、今回の予想が当たっている根拠の一つ。これは星波海岸だけじゃなく、星波山には結構な数の武霊使いが、はぐれを待ち構えているって美春さんは言っていた……これだけ多くの武霊使いがいるって事は、それだけ私や琴野と同じ様に不安を感じた人が多かったって事。だから……これで今日、何も起こらないって事は……ないと思う。

……まあ、でも、前回ははぐれ発生の被害がいつもより大きかった事と、高神姉弟がいなく無かった事が重なって、『外』の武霊使いの人達も結構残ってるほいけど……。

実ははぐれを一匹でも倒すと町から謝礼金が出る。

町の財政はそれほど良くないから、そんなに高額ってわけじゃないけど、少なくとも学生やお小遣いの少ないお父さん方からすれば、かなり助かる金額は貰えるので、弱いはぐれ一匹だけ倒して、逃げたって人も結構いて……そんな人が多そうだなあ〜っと思いなながら、ふつと対岸の星波学園上空を見ると……珍しくヒノ力が飛ん

でいるのが見えた。

いつも、つと言つより、統合生徒会長になってから、琴野ははぐれ退治をしていない。

星波学園の武霊使いを指揮する立場にいるって言うのもあるけど……基本的に星波学園側の武霊使いは星波町に向かうはぐれに対して何もしない事が多いから、星波学園生徒代表である統合生徒会長が自ら進んではぐれ退治をするわけにもいかなかったんだと思う。別に、何か明確な決まり事があるってわけじゃないけど、心証が悪くなるんじゃないかな？……琴野、また立場を危うくするような事をして……もしかして……わたし

不意にコウリユウが唸り出した。

その唸り声に、私は慌ててコウリユウが見ている海面を見ると、

『巨大な何か』が海の底にいるのが見えた。

レベル2！

私は急いで星電を取り出し、自警団本部へ連絡。

その時、視界の隅に学園大橋が入り、夜衣斗さんが誰かを庇って誰かと対峙しているのが見えた。

けど、既に巨大な何かに向かってコウリユウが飛び始めていたので、直に見えない位置になって……何だが、とてつもない不安を感じたけど……うん。きっと大丈夫！だって、夜衣斗さんは強いもの。

第二章『カウントする悪魔』 29

夜衣斗

サイレンが鳴り出すと同時に、海の方で巨大な何かが浮上する音が聞える。

……聞えはしたが、正直、何が浮上したかを確認している余裕はなかった。

サイレンが鳴り出すと同時に、都雅の背後から武霊を飛び出し、具現化、そしてそのまま俺に向かって襲い掛かって来たからだ。

俺を守る為に、勝手にオウキが具現化し、都雅の武霊の拳を右手で受け止める。

オウキの右手の向こうに見える都雅の武霊。

それは、狼の頭に、羊の角を持ったどこか悪魔を連想させる獣人だった。

最後の敵の情報によると、名前は『クラッシュデビル』。

『拳が触れた物質を粉碎する能力』を持って……あ！やば！

その事に気付いた瞬間、拳を受け止めたオウキの左手が弾け飛ぶ。

「セレクト。シールドサーバント！」

俺の命令に、オウキの左肩からシールドサーバントが飛び出し、シールドを展開してクラッシュデビルに突撃。

クラッシュデビルは突撃してきたシールドサーバントをシールドごと受け止め、少しだけ後ろに押される。

その時、クラッシュデビルの両手の甲に、カウンターが付いているのが見え、オウキの左手を壊した手のカウンターがカシャンと1と示す。

……最後の敵から聞いた情報には、あんなのは無かったはずだが……？……とにかく……予想通り、シールドサーバントの力は破壊出来ないみたいだな……なら！

「セレクト。シールドサーバント五機！」

第二章『カウントする悪魔』 30

飛矢折

初めて見る彼の武霊は、どこか鋭角的な騎士を思わせる姿をしていた。

怖い。

彼の武霊でも……………怖かった。

怖くても、今のあたしは、恐怖で身体が硬直していて、二体の武霊の激突から、目を離す事が出来なかった。

彼の武霊から出た小さな円盤が、あいつの武霊を止めて、続けて出た同じ五つの円盤が、

「キューブゲージ！」

つと彼が命令すると、あいつの武霊の周りに取り囲むように移動して、その瞬間、あいつの武霊の動きが止まった。

逃れようと暴れようとするあいつの武霊。

でも、多少身体が動くだけで、身動きが取れない。

……………多分、あの小さな円盤から、見えない何かが出ていて、あいつの武霊を押さえ付けていると思うけど……………こんなに……………圧倒的だなんて……………

「セレクト。振動刀」

その彼の命令に、彼の武霊の壊されていない方の腕の内側が開き、一振りの刀が飛び出して、手に収まった。

彼の武霊が刀を上段に構えると同時に、

「シールド解除」

つと彼がいい、彼の武霊は、あたしの鍛えられた動体視力で何とか捉えられるスピードで、振り下ろした。

僅かに動いていたあいつの武霊が動きを止めて、霧散する。

……………美幸があたしを助けてくれた時でさえ、こんなに早くあいつの武霊を倒していない。美幸の武霊だって、強力な武霊なんだけ

ど……………？

あいつの武霊を簡単に倒したのに、彼は緊張を解いていなかった。勿論、武霊使いじゃないあたしだって、今ので武霊が完全に消えたわけではないのは、分かっているけど……………これだけ圧倒的に倒したのなら、戦意を……………え！？

視線をあいつの武霊が消えた先、あいつ自身に向けると、あいつは『笑っていた』

第二章『カウントする悪魔』 31

美羽

海面から浮かび上がって来たレベル2のはぐれは、一つ目の巨大魚人だった。

先手必勝！

「コウリュウ。ファイアーブレス！」

一つ目魚人の頭上斜め上からコウリュウのファイアーブレスを浴びせる。

叫び声を上げて海面に倒れる一つ目魚人……………あれ？弱！？

あまりのあっけなさにちよつと茫然としてみると、燃え上っている一つ目魚人の身体がなかなか消えない事に気付いた。

嫌な予感がして、コウリュウに次の攻撃命令を出そうとした瞬間、一つ目魚人の身体が崩れ、そこから小さな、つと云っても人ぐらいの大きさの一つ目魚人がわらわらと出てくる。

わらわらと出てきた一つ目魚人は、どんどん海に潜って火を消し、物凄い速さで海岸へと泳いで行く。

海岸には多くの武霊使いがいるけど……………そのほとんどが、あまり戦った事がない人達のはずだから……………急いで少しでも数を減らさなきゃ！

「コウリュウ。アイスブレス！」

夜衣斗

コウリュウから放たれた冷気のブレスによって、一瞬の内に凍る。凍った海に巻き込まれたはぐれはほぼ同時に消滅している様だが……………半分以上が凍ってない海の下に逃げていたみたいで、今度はコウリュウの攻撃を纏まって喰らわない様に四方に散らばって泳ぎ始めるのが見えた。

……………どうやらあのレベル2のはぐれは、攻撃を受けると分裂す

る様だが……それ以上の分裂はないみたいだな……分裂体はそんなに強くなさそうだし……美羽さんがいれば平気そう……か？……まあ、俺は向こうを気にしている余裕はあまりない。

都雅の武霊クラッシュデビルを倒したとは言え、都雅自身はまだ意識ははっきりしている様だし……これで終わりとは思えなかった。

油断無く、都雅が何をしても直に対応出来る様に、都雅を睨み付ける俺。

都雅は自分の武霊が倒されたと言うのに、笑みを浮かべており……不気味だった。

……無言の睨み合い。

このまま睨み合いを続ければ、多分、逃げた他の生徒が自警団が警察に連絡しているだろうから……いや、待てよ？はぐれが発生している今、こっちに人員を回せる余裕が向こうにあるのだろうか？……だとしたら、こっちで都雅を無力化するしかないか……

「セレクト」

GMサーバント。つと言おうとした時、不意に都雅が口を開いた。都雅の発したその言葉は、あまりにも予想外で、唐突な言葉であり……俺の動きを止めるのに十分な……

「お前、『いじめられていた』だろう？」

飛矢折

え？

あいつのその言葉に、あたしは思わず彼を見た。

彼はその言葉に、途中まで言い掛けていた武霊への命令を止め…

……全ての動きを止めていた。

それまで僅かに震えていた身体の震えが止まり、それまで分かり易かった感情が感じられなくなって……彼の武霊が戸惑った様子を
見ている。

「分かるんだよ」

あいつはにやにやと笑う。

「俺も、いじめられた事があるからな……雰囲気でわかんだよ。

お前はいじめられ、『死のうと思った、いや、死のうとした事がある』ってな」

彼は何も言わない……何の反応もしない。

「っは！お笑いだな。そんなお前が、なんで『そっち側』にいる？」

そっち側？

「お前だつて感じているはずだ。この世は『狭い』ってな」

この世が狭い？さっきからあいつは、何を言つて

不意に、彼が歩き出した。

あいつに向かって。

夜衣斗

いじめられていた。

その言葉を聞いた時、俺は消したくても消せない記憶の渦に呑まれた。

嘲笑・暴力・罵声・嘲りの言葉・無関心を装う他の生徒の視線・

外と内の痛み……そして、

ぐるぐると回る思い出さくない記憶に……『押し殺していた悪意』が溢れ出す。

溢れ出した悪意に、制御の利かない怒気が現れ、俺の心をどんどん冷たくさせる。

正直、俺は都雅の言葉を聞いていなかった。

……だが、何故か、都雅が鼻で俺を笑った事だけは……記憶の中にある『あいつらと同じ笑い方』に聞こえて……辛うじて残っていた理性が消し飛んだ。

足が勝手に前に進み、PSサーバントを具現化させ、装着。

俺は、

今、溢れ出す

『殺意』

支配されていた。

第二章『カウントする悪魔』 33

美羽

今回のはぐれは楽勝かもしれない。

私はそう思いながら、星波海岸での武霊使いとはぐれの戦いを見ている。

レベル1ぐらいになったはぐれの分裂体は、一体一体の力はそんなに強くないみたいで、ほとんどがレベル1の武霊使いである下のみんなでも簡単に倒せている。

「……これだったら、もう私達は必要ないかな？つね？コウリュウ」

私の問いに、コウリュウは肯定の一鳴き。

「じゃあ、夜衣斗さんの所にい！？？」

行こう。そう言おうとした時、大きな爆発音が聞こえて、反射的に音のした方向に視線を向けた。

さっき夜衣斗さんを見掛けた学園大橋が……『崩壊していた』！

何！何なの？私が見てない間に、何があつたの！？

「コウリュウ急いで橋にい！！？」

向かって。って言おうとした時、今度は海の方から何かが浮上する音が聞えた。

物凄い嫌な予感と共に音のした方向を見ると、一つ目の巨大魚人ははぐれがもう一体……え！？更にもう一体……ええ！！？うそ！

私の見ている前で、一つ目の巨大魚人がどんどん浮上してきて……

……終には九体にまでその数を増やした。

九体が一斉に吠える。

びりびりと空気が震え、最初の一体を倒し終わった海岸の武霊使いの何人かが逃げ出すのが見えた。

これじゃあ、夜衣斗さんの所に行ったら……誰よ！楽勝なん

て言った奴！？私か！

怒りで意味のない一人突っ込みをしつつ、コウリュウに方向転換の命令を出した。

………新たに現れたはぐれに向かって………大丈夫ですよ

………夜衣斗さん。

的中した不安に、私は下唇を噛み締めるしかなかった。

第二章『カウントする悪魔』 34

夜衣斗

己の殺意に促されるまま、都雅に近付く俺。

何事かを言っていた都雅がその俺を見て黙り、クラッシュデビルを再び具現化させ、俺に向かって殴り掛からせる。

クラッシュデビルの拳をシールドサーバントで防ぎ、俺の心の命令に反応したオウキが振動刀を振るうが、残った拳で防がれ、振動刀が壊された。だが、オウキは間髪入れずにクラッシュデビルの腹部に蹴りを放ち、クラッシュデビルを都雅から離す。

倒さずに抑えてる。

その心の命令に、一瞬、俺を見るオウキ。

俺はその視線を無視して、再び都雅へと歩き出す。

立ち上がり都雅を守ろうとクラッシュデビルが動き出す前に、オウキとシールドサーバントがクラッシュデビルの動きを抑える。

「っは、分かってんのか？そんな事やったら、お前も武霊を使えなくなるって事をよおお！」

そう言っただけ俺に殴り掛かる都雅。

都雅の拳が俺の頬に当たるが、PSサーバントから出ているナノマシンにより、俺の全身はスーツに保護されていない場所も守られており、ダメージを受ける直前で瞬時に硬化する様になっている。

つまり、

「つうつう！？」

都雅は俺を殴った手を押さえ飛び退く。

俺はその飛び退いた都雅に向かって同じ様に飛び、腹部に拳を打ち込む。

PSサーバントで強化された拳が、軽く力を込めただけだということに、都雅の身体を九の字に折れ曲がらせる。

吐き、咳き込む、前のめりに倒れる都雅。

倒れた都雅を俺は脚で仰向けにし、胸にその足を置き、徐々に体重を掛ける。

絶体絶命のその状況に……都雅は『笑っていた』。

その笑みに俺は足に力を入れるのを止めた。

不気味だったからとか、嫌な予感がしたとかではなく、ただ単に、こいつが『喜ぶ事をしたくなかった』だけ。

「っは！っお、お前は、やっぱりこつち側の人間だ。壊そうぜ？壊そうぜ！壊そうぜえ！！俺も、お前も、どいつもこいつも、この世の！全てを！」

……ああ、確かに、俺はこいつと同じかもしれない。

都雅の言葉に、俺はそう思った。

都雅の言う様に、俺は中学時代、手酷いいじめを受け……一時期不登校になり……死ぬうと思っただ事がある……だが、結局は死ぬ事への恐怖から、それは実行出来ず……そこから生じたどうしようもない負の感情は、矛先を迷走させ、自分を含めた全てに向けられようとしていた……もっとも、その直前か、直後に、僅かにいた周囲の人の助けによって、俺はいじめられる事から抜け出せる事になった……それでも、一度壊れた俺自身は治らず、今でも強く後を引いている……俺が喋らないもの、積極的に人と関わらないのも……自分を含めた人を信じられないのも……一歩間違えれば……俺は……こいつと同じ様になっていた……いや、それはないな……『この町に来る前の俺では』……そう、俺には今、『負の感情を暴力として開放する力』がある……そう、あるんだ……だから、俺は、俺はああああああ！

思考の果てに、唐突に感情が爆発した。

不快だった。とにかく不快だった。

目の前に、俺の『想像する最悪の未来の一つ』がある。

それが、俺の心を掻きむしり、思い出してしまった最悪の記憶とその感情も合わさって、思考が凍り、何とか踏みとどまっていた最後の一線を……

俺は俺が使うのに最適の大きさにした振動刀を具現化。
具現化した振動刀を逆手に持ち、
「死ね」

第二章『カウントする悪魔』 35

飛矢折

「死ね」

殺意と共にそう彼が口にした瞬間、それまで恐怖で固まっていたあたしの身体は、自然と動いて、

「駄目！」

と叫んでいた。

彼のあのスーツは、見ていた限り、衝撃を受けると身体の表面が硬化して、身体にダメージが来ない様にする。

だから、彼を止めるには……………。

一気に間合いを詰め、一気に振り下ろされ様としている刀を持った腕に掌ていを放つ。

「っ痛!？」

予想以上の固さに腕と肩に痛みが走るけど、振り下ろされそうになつていた腕の動きが一瞬だけ止まる。

その一瞬を逃さないで掌ていで丸めた指を解いて腕を捕まえた。だけど、筋肉が全く付いていなさそうな彼とは思えない凄いいかに刀を振り下ろす事を止められない!

「黒樹夜衣斗お！」

反射的に彼の名前を大声で言った瞬間……………彼の腕が止まった。

あいつに向けられていた刀は、少し額を切って止まっている。

ほんの少しでも彼が止めるのが遅かったら……………死んでいたと言っのに、あいつは『笑っていた』。

その異常性に、ほんの少し抑えられていた恐怖が、甦り、身体が硬直してしまう。

……………彼は無言で、あいつを見ている。

でも、その腕は、握っている私には、はっきりと『震えている』のが分かった。

夜衣斗

怖い。怖い……………自分が怖い。

「黒樹夜衣斗！」

飛矢折さんに大声で名を呼ばれるまで、俺は自分の殺意に身を任せ……………止められなかった。

そんな事をしてはいけないと頭では分かっているけど……………止められなかった。

……………いつもそうだ。俺は時として感情を爆発させて……………止まれなくなる。

簡単に言えばキレたつと言うやつなんだろうが……………言葉に出来たからと言って、どうこうなんて出来はしない。

もつとも、キレたからと言って、何かわけのわからない事をするわけではない。……………ただ、内に抑え込んでいた負の考え、誰かに向けた殺意を実行しようとするだけ……………だから、俺は、いつも心を抑制しようとする……………それが、より、抑え込まれた負を、殺意を増加させると分かっていながら……………もつとも、その殺意に俺の能力……………ありとあらゆるものが追いついていないから……………キレても、ただ単純な暴力を振るうしか出来ていなかった……………そう、殺意に、追いついていなかった。だから、俺は今まで……………でも、今、俺は、『殺意に追いついた事を自覚した』。

怖い……………そう思いながら、未だに燃え続ける負の感情に……………俺は殺意を消せないでいた……………都雅に向けている殺意が、元々別の奴らに向けられていた殺意だというのに……………。

恐怖から来る正の感情と、怒りから来る変質した負の感情との間に、身体が震える。

不意に、都雅の右手が動き……………手に『何か』が握られているのが視界に入った。

顔は都雅に向けられてはいるが、意識はその葛藤に向けられていたので、視界に入っているその光景を理解し、反応するのが遅れる。

PSサーバントに守られている。っと言つ油断があつたからかも
しれないが……都雅の次の行動を、俺は止められなかった。

都雅は、右手に持った『筒状の何か』を『自分の首に押し込んだ』
。

第二章『カウントする悪魔』 36

飛矢折

あいつが自分の首に押し込んだ筒状の物にから、何かが注入される音がする。

悪寒が走った。

ほとんど反射的に、彼を一瞬だけ抱き上げて、一緒に飛び退く。いきなり自分の身体が浮いて、後ろに飛んだとこに驚いて私を見る彼。

彼のスーツはダメージを受けると硬くなるだけで、重さは変わらないから、投げ技を応用すれば、こんな事はわけないんだけど………。
分からなかった。

これまで、あいつに恐怖は感じてても、それはあいつ自身と言うより、あいつが『武霊使いだからだと言う事が強かった』。だから、さっき、彼を止めに入る事が出来たと思う。それなのに、急にあいつ自身に強い恐怖を感じた。まるで、『あいつ自身が武霊』になつたみたいに……。

夜衣斗

いきなり浮遊感を感じたかと思つたら、飛矢折さんに抱かれる様に後ろにジャンプさせられた。

経験した事がない浮遊感に、思わず飛矢折さんを見てしまう。

………前の学校で柔道の授業があつて、段持ちの先生に投げられた事があるけど………技がまるつきり違うとは言え………レベルが違う。素人でも分かるくらい、飛矢折さんは凄かったが………なんで、下がったんだ？

俺はその疑問に、都雅へと視線を向ける。

首に押し込んだ筒をゆっくりと外し、それを投げ捨てた。

投げ捨てた筒を見ると、針が飛び出しており……液体……何らかの薬品が針の穴から滴り落ちてる。

何だ？ いったい何な……？

オウキからの『何か』を感じ、オウキのいる方を見ると、抑え付けていたクラッシュデビルがすうつと消えている所だった。

具現化を解いた？ 一回分の具現化を無駄にしてもいいほどの何か
が、今の注射器にあつたって事か？

ゆっくり立ち上がる都雅。

オウキが都雅を飛び越えるようにジャンプし、俺達の前に守る様に立つ。

……何か嫌な予感がする……キレていたせいもあるが……
今、気付いた。都雅から、『異様な気配』を感じるのを。

その気配の変化を敏感に感じて、飛矢折さんは後ろに引いたんだ
ろうが……間を与えず、眠らせるべきだった……いや、殺すべ……

……その発想は止める俺！ また殺意に引っ張られたのか……っ
くそ！ 二つの意思で、思考が鈍る。

殺意と理性の二つの意思に、一瞬の苦悩。

その隙に、都雅は……！

第二章『カウントする悪魔』 37

飛矢折

あいつが再び、自分の武霊を具現化させた。

でも、その姿は、『半透明で、何故かあいつが身に纏う様に具現化』していて……そう言えば、聞いた事がある。武霊の具現化には段階があつて、第一段階で普通に具現化。第二段階で巨大化して具現化。……第三段階で……身に纏つて具現化。

そして、こつとも聞いた。

第三段階と第二段階の武霊の具現化には、『大きな差』がある。つて。

あたしは、思わず、まだ握っていた彼の腕を強く握ってしまい。攻撃と判断されたのか、彼の腕が硬くなった。

夜衣斗

刀を持っている方の腕が不意に硬くなった。

……振り向かなくても分かる。飛矢折さんが俺の腕を強く握つたのだらう……飛矢折さんは、俺より長く星波町に関わっているのだ。『この危機』は、俺より強く実感しているのだらう……ただでさえ、余計な恐怖を抱えているんだ。PSサーバントが攻撃と判断してしまつほど強く握られるのは……仕方のない事だと思つ……もつとも、無意識に頼られている俺にしても……頼れる人がいるなら……俺も頼りたい。

何故なら、俺の武霊での戦闘経験は、『全てレベル1』。

なのに、レベル2の武霊と戦つた事すらないのに、いきなりレベル3を相手にしると？最悪以外の何物でもないが……都雅はレベル1の武霊使いじゃなかったのか？……考えられるのは、あの注射器か……そんな薬品があるなんて……なお、聞いてない……つとなると、この町の武霊使いはもちろん、最後の敵も知らないか

言えなかったって事になるが……今は、それを深く考えている余
裕はないな……

緊張が一気に高まる。

レベル3となった都雅が動き出したからだ。

飛矢折

彼に向かつて殴りかかるあいつに、彼の武霊から出た円盤が間に入り、拳を止めた。

円盤の直前で拳は止まっているけど………徐々に円盤に近付いてくる。

それと共に、機械的な音が、まるでカウントしているかの様に、聞え出す。

さつき、似た様な音がした時、あいつの武霊の拳にあったカウンターが回ったのからすると、同じ事が起きているんだろうけど………一体何の意味が？

そう思った時、あいつの拳が円盤に近づく速度が徐々に上がっている事に気付いた。

これって………もしかして！

夜衣斗

拳についているカウンターの意味が分かった。

あれは、攻撃する度にカウンターが回り、『次の攻撃にその攻撃の威力がプラスされる』って事なんだろう。

先ほどまで抑える事が出来たクラッシュデビルの拳を、カウンターが回る度に抑えられなくなってきた上、最初はシールドサーバント一機で抑えていたのに、今は出ている六機全機でやっと抑えている状態だった。

その状態になるまでがあつと言う間だったので、オウキに攻撃の命令を出す暇がない………いや、下手に『出せない』。

何故なら、今の都雅は武霊を『身に纏っている』………つまり、クラッシュデビルを止める為に、攻撃しようとする、都雅にもダメージを与えかねない上に、下手をすれば………殺しかねない。

……心のどこかに……いや、ありありと分かるほどに、「別にそれでもいいじゃないか？」っと言おう考えが浮かぶが……その一線を越えれば……俺は人でなくなる……俺の精神は、例え、殺しても誰にも非難されない相手・状況だったとしても……それに、きつと、耐えられない……そして、より、自分の中にある殺意に忠実に動くようになる……目の前にいる、都雅と何ら変わらない……もしかしたら、それより酷くなる。

そんな恐れも入り混じって……俺は攻撃命令を出せずにいた。攻撃以外に……この状況を気に抜ける方法が無いというのに……。

俺が躊躇っている間も、クラッシュデビルのカウンターが回り、六機のシールドサーバントのシールドが……破られた！

第二章『カウントする悪魔』 39

飛矢折

彼の武霊から出た円盤が不意に活動を停止して、地面に落ち、霧散した。

邪魔をするものがなくなったあいつは、そのままこちらを……攻撃しないで……余裕の笑みを浮かべて、拳を振るっていた手の甲をあたし達に向けた。

手の甲にあるカウンターは『61』となっており……その拳をゆっくりと振り被る。

逃げるべきだと頭では思っても、身体が動かない！

なのに骨身に染み付いた武術家の性分で、目を瞑る事も出来ず、その拳の行方を追ってしまふ。

死への恐怖が、心を支配し様とした時、

「飛矢折さん！技をかけないでくださいよ！！」

彼がそう言つて、不意にあたしを、

『抱き抱えた』。

その行動に、技を出すより……硬直してしまつた。

……あ、あたしは、抱き抱えられるより、抱き抱える方が多いので……。

夜衣斗

飛矢折さんを抱き抱えた時、飛矢折さんに殴られた時の恐怖が頭に過つたが……飛矢折さんは何故か頬を赤らめ、硬直していた。

あ……こっちも恥ずかしいから、我慢して欲しい。

「オーバードライブモード緊急解禁！！」

そう大声で命令して、飛矢折さんを抱えて海の方へ走り出す。

「っはっは！」

都雅が笑い声を上げて、飛びかかってくるのが『後部カメラ（P

Sサーバントの機能の一つ』の映像で分かり、ぞっとする。

もっとも、その拳が俺に当たる寸前でオーバードライブモード移行中のオウキの蹴りによって、その軌道が大きくずれ、当たらなかつた。当たらなかつたが、その拳は、学園大橋のコンクリートに当たり………一気に学園大橋が爆砕した!?

シールドサーバント六機のシールドを破ったぐらいだからとんでもない威力があるとは思っていたが………くそ!カウンターが回ると、ここまで………下手すればあの剛鬼丸の閃光以上の威力………オーバードライブモードのオウキでも………勝てるか? いや、勝つてしまつと………くそ!くそ!どうすればいいんだ!?

俺は心の中でどうする事も出来ない現状をどうやって打開するか考えながら、崩壊する学園大橋の瓦礫を足場に、空へとジャンプした。

「PSサーバント。飛行モード!」

第二章『カウントする悪魔』 40

飛矢折

彼の命令に、マントが翼の様な状態になり、同時に浮遊感を感じて、落下が止まった。

下を見ると海面が高速で流れている。

飛んで……るの？

……ここまで色々出来る武霊使いなんて……聞いた事がない。

……でも、それは、それだけ彼が『内側に重心を置いている』って事で……？

彼の呼吸がどんどん荒くなってくるのを感じた。

飛行もだんだん安定しなくなり始めて……何が起こってるの？

????

学園大橋を破壊した都雅は、そのまま夜衣斗達を追おうとした。

だが、その都雅をオウキが海に叩きこむ。

瓦礫と共に海に沈む都雅。

それを追って海に入るオウキ。

海中に入ったオウキは背中からオーバードライブで禍禍しくなったウイングブースターを出し、まるで空を飛んでるかの様に海中を進み、都雅に突撃する。

腹部に拳をめり込まされた都雅はくの時曲がり、海中を物凄い速さで吹き飛ばされた。

その際に、クラッシュデビルの両拳がウイングブースターにあたり、破壊される。

本来なら、この突撃に一撃必殺の威力があるのだが、オウキは夜衣斗から殺傷の許可を得ていなかったなので、ギリギリで手加減をした。

これにより、反撃の隙を与えてしまい、ウイングブースターを壊される結果になる。

機動力の落ちたオウキに、海中を蹴る様に泳ぎ、泳いでいるとは思えない速度で迫る都雅。

その速度に回避出来ないと判断したオウキは、オーバードライブのエネルギー装甲を厚くし、その体を一回り大きくした。

それは、より意志力の消費が激しくする行為で、その消費に逃げている夜衣斗がついていけなくなり始めているのをオウキは感じていたが、今さら止めるわけにもいかず、オウキは都雅の拳を差し出した突撃を受け止めた。

オーバードライブモードの装甲が、瞬く間に削られ、そして、都雅のクラッシュデビルの両腕はオウキの身体を『真つ二つ』にした。

第二章『カウントする悪魔』 41

美羽

九体まで増えたレベル2のはぐれに、私とコウリュウは攻撃出来ずにいた。

今回のはぐれの最大の特徴である『分裂』。

下手に攻撃して分裂されると……一匹が分裂しただけでも大変だったのに……対応しきれなくなっちゃう。

分裂体は、一匹一匹が弱くても、海の中を自在に動けるから厄介だし……空からの攻撃は海によって威力が弱くなっちゃうし、避けられちゃう……分裂した後、一カ所に纏めて一気に倒す事が出来れば……

今は、はぐれに直接攻撃しない様に攻撃して、海岸に近付けさせない様になっているけど……それも限界がある。

他の空を飛べる武霊を持っている人が何人か参戦してくれてるけど……ん？

空を飛んでいる他の武霊の様子を見る途中、星波学園の上空にヒノカがない事に気付いた。

……どこ行っただらう？

その疑問は直に晴れた。

後ろからヒノカが現れ、コウリュウに並行飛行始め、その背中には琴野と……何故か美春さんも乗っていた。

手振りでごつちに移る気であるのが分かったので、コウリュウをヒノカの上に移動させて、私が乗っていない方の手を二人に近付け、二人を乗せる。

「『あれ』やりますわよ」

声が聞こえるまで近付くと、琴野がそんな事を言った。

あれ？……。

「……もしかして、昔考えた連携攻撃？」

「そう。それですわ」

「……………確かに、あれなら今回のはぐれには有効だろうけど……………
…統合生徒会は自警団に協力しないんじゃないの？」

「……………統合生徒会は協力しませんわ。これは、わたくし個人の
協力ですよ？」

「ふん？」

「それに、美春姉様からどうしてもって頼まれましたし」

そう琴野が言うと、それまで黙っていた美春さんが声を押し殺して
笑い出した。

「美春さん？」

「あのね美羽ちゃん。じ」

「美春お姉様！」

何かを言おうとした美春さんをきつと睨んで言葉を止める琴野。

……………？……………まあ、いいけど……………。

「さつさと倒しますわよ！」

何故か顔が赤くなっている琴野。

なんだか釈然としないけど……………

「じゃあ……………行きますよ。美春さん！殊更！」

「誰が殊更です！ぶつ殺しますわよ！！」

「はいはい。喧嘩しない」

第二章『カウントする悪魔』 42

飛矢折

不意に彼の服が『普通の服に戻った』。

彼を見ると……意識を失っている！？

何があつたかは分からない……でも！このままだと、海に叩きつけられる！

彼の服が普通の服に戻った事で、急速に落下し始める私達。

かなりのスピードがあつたので、意識を失っている彼がそのまま海面に叩きつけられれば……。

あたしは、抱き抱えられている状態から、彼を守る様に抱き抱える状態に無理矢理し、海面に背中から叩き付けられた。

痛みに意識が飛びそうになるけど、気合いで意識を保ち、彼を抱えたまま泳いで直に海面に出る。

彼の顔が海の中に入らない様にしつつ……服を着たまま泳ぐ練習と、意識を失った人を抱えて泳ぐ練習が初めて役にたった……

何事も色々やっておくものね。

それにしても……海温がまだ泳ぐには冷た過ぎる。

早く海から出ないと……。

陸地を探して視線を巡らせると……ぼろぼろの倉庫が見えた。

嘘！ここって『あいつらの溜まり場の近くじゃない……どうしよう……って……まだ日が落ちてないから平気か……』とり

あえず早く陸地に上がらないと……。

私はそう判断して陸地に上がれそうな場所を探して泳ぎ出した。

美羽

「行くよ、コロ丸！」

美春さんの命令に反応して、星波海岸で状況を見守っていたコロ丸が海に向かって走り出す。

海まで僅かな距離だけど、コロ丸が海に入る頃にはレベル1だった姿がレベル2の巨体になっており、物凄いスピードで海の中を進み出した。

コロ丸の能力は、自身の体毛を自在に操れ、その硬さも柔らかさも自在に変化させる事が出来る。

その能力を利用して、コロ丸は水の中でも高速で移動出来るらしいけど……どんな風にしてるんだろ？ちよつと謎かな？

あつと言つ間に陸地から一番近くにいたはぐれ近付き、コロ丸の体毛が一斉に伸び、無数の鋭い刃になった。

コロ丸に気付いたはぐれはコロ丸に殴り掛かろうとするけど、コロ丸のスピードは体毛の刃を作った時点で更に加速していて、すれ違う。

少し間を置いて……はぐれの身体はばらばらになった。

擦れ違つた際に切り刻んだらうけど……全く見えない。

やっぱり美春さんのコロ丸は凄いなあ。

つて思わず感心していると、ばらばらになったはぐれの身体が次々とレベル1のはぐれになるのが見えた。

「琴野！早く！！」

「言われなくても分かってますわ！さあ！舞い踊りなさいヒノカ！！」

琴野の命令に分裂中のはぐれの上を飛んでいたヒノカが上空に止まり、垂直に回転し始める。

その回転スピードはあつと言つ間にヒノカの姿が分からなくなるほどになった。

それと共に、風の渦が生じ始め、瞬く間に巨大な竜巻になる。

巨大な竜巻は下にいたレベル1のはぐれ達を吸い込み、動きを封じた。

「赤井さん！早くしなさい！！」

「言わなくても分かっている！コウリユウ！ファイアーブレス！！」
私の命令に、コウリユウははぐれを呑み込んだ竜巻に向かってフ

アイアーブレスを放つ。

一瞬で、竜巻が炎の竜巻になり、次々とはぐれを消滅させていくのが見えた。

竜巻を起こしているヒノカは、フェニックスのイメージが基になっているから、熱によるダメージは一切受けない。

だから、こつこつ言う事も出来るんじゃないかって昔三人で話した事があって……… 本当にやる事になるなんて思いもしなかったなあ。

「なにぼつっとしてますの！？次行きますわよ！次！」

「うるさい！分かってる！」

「はいはい。二人とも喧嘩しない。喧嘩しない」

第二章『カウントする悪魔』 43

夜衣斗

オウキの具現化が強制的に解除される直前、今まで感じた事が無い強烈な意志力消費を感じ……気が付いたら俺は見知らぬどこかに寝かされていた。

穴が開いた天井が見える。

周りを見回すと、所々錆び付いたコンテナと……飛矢折さんがいて……濡れた制服を気持ち悪そうにしていた。

……何だか、濡れた髪が……いろっばな……何考えてんだか俺は……。

俺の視線に気が付いた飛矢折さんは心配そうに、

「大丈夫？」

……と聞いて来たので、俺は頷いて、上半身を動かそうとして……力が入らず、起き上がれなかった。

……多分、刹那的な激突だっただろうが……どんだけ意志力を消費してるんだ？……あの時の状況から考えて、オーバードライブもをフルに使ったんだろうが……俺が気を失ったら本末転倒だろうがオウキ……まあ、オウキもまだオウキに慣れていないって事なんだろうか？……ってか、よくこの状態で意識を取り戻したな……俺……そうだ！寝っ転がっている場合じゃない！

そう思った俺は動き難い腕を動かそうとして、

「まだ横になってた方がいいよ」

……と飛矢折さんに言われた。

……そうしたいのは山々だが……。

その俺の考えを察したのか、飛矢折さんは微笑んで、手に持っていた星電を見せた。……俺のだ。

「さっきあなたの星電で自警団に連絡したから、直に助けが来ると思うよ。だから、寝てても大丈夫だよ。きっと」

……確かに俺も星電を使って自警団に連絡しようとした……
だが……今、思ったんだが……これが死の運命なら……多分
……

第二章『カウントする悪魔』 44

美羽

三体目のはぐれを倒した時、美春さんの星電に連絡が入った。

コロ丸に指示を出しながら星電に出た美春さんの表情が、驚きに支配され……眉を顰めた。

「ああ……わかった。ここが終わったらすぐにそっちの応援に行く……分かってると思うが、レベル3に下手な攻撃は……」
レベル3？

「近付かずかず、遠距離からの武霊指示で時間を稼いで……ああ。頼む」

「……何かあったんですの？美春お姉様」

通話を止め、星電を仕舞う美春さんに、不安そうな表情で問い掛ける琴野。

美春さんは、少し考えて、

「五月雨都雅が現れて、襲われたって通報があったそうよ」

都雅？このタイミングで！？……あれ？でも、都雅って、確か、
「……しかも、何でか知らないけど……レベル2を飛び越して、
レベル3の具現化まで身に付けているそうよ」

あまりにもありえない話に、驚いて、つい琴野と顔を見合わせてしまった。

お互いに微妙な顔になる。

「それと美羽ちゃん。驚かないで聞いてね」

「はい？」

「襲われたのって、夜衣斗君と」

「夜衣斗さんが！」「黒樹様が！」

同時に声を上げて、再び互いの顔を見合わせる私と琴野。

また、お互い微妙な顔になる。

「……………何とか逃げる事が出来たらしいから、今は無事だそうよ。
一応待機中だった人達に救援に行くように指示はしてあるけど……
相手はレベル3。しかも間の悪い事に、私以外のレベル3の自警団
はまだ星波町に帰ってきていないの……………だから、早くここを片付
けて、助けにいくわよ」

「はい！「勿論ですわ！」」

……………何でまた重ねるかな……………直に助けに行きますから……………
無事でいて下さい夜衣斗さん！

第二章『カウントする悪魔』 45

飛矢折

気不味い空気が流れている。

ただ待つだけと言う状況だけど……ただ無言のままに二人つきりでいるのは……気不味かった。

……もっとも気不味いのはあたしだけで、彼はそれどころじゃないと思う。

彼を見ると、無言のままあおむけに倒れ、どこか苦しそうに息をしていた。

あたしは、どうする事も出来ない。

武霊使いの意志力の消費は、寝れば治る。でも、それを『無理して起きていると、どこか身体に無理が来る』。そう聞いている。

彼は少しの間、気を失っていたけど、直に目を覚ましてしまったから……ほとんど意志力を回復出来ていないんだと思う。

その証拠に、彼は立ち上がる事が出来ないし、息も上手く出来ないでいる。

……あたしの為にこんな事になってるのに……どうする事も出来ない自分に、あたしはぎゅっと拳を握った。

……あれ？ちょっと待って？……意志力って言うのは、要するに意志、つまり、心の指向。って事は、心が動く事を……何か話をすれば……起きていても、回復が早まるんじゃないかな？

……何もしないより、何かする方がいい。

彼にとっても……私にとっても……だって……何もしてないと、恐怖がぶり返してきそうだったから……

夜衣斗

どうするべきか、考えがまとまらない。

意識を失わない様に必死に集中しているせいもあるが……自分

の、一步間違えれば、取り返しのつかない事をしようとした『あの瞬間』を思い出し、酷い後悔と憤りを覚えていると言つのが……最大の原因だと思う。

自分が最も嫌悪している行為を自分がしようとした事。

自分が最も嫌悪している存在を殺せなかった事。

相反する二つの思いに、意識のぐらつきは加速し、何故か上手く息が出来ないでいた。

つと言うか、寒い。

季節的にまだ海に入るのは冷た過ぎる水温だっただろうし、服は濡れたままだ。

このままでは、下手すれば意志力の低下も合わさって……永眠って事にならないだろうか？

流石に、それはまずいし……同じ様に濡れている飛矢折さんだつて……何故か平気そうだった。

飛矢折

何を話せばいいか思索していると、彼があたしの事を見ている事に気付いた。

同時に、彼の身体が震えている事にも……。

気付くべきだった。

私は、寒さに強くなる様に修行を積んでいるから、この程度の寒さは何ともないけど、彼は普通の人。濡れた身体のままじゃ、今の時期でも辛いのは当たり前だと言つのに……どうしよう……ここには、身体を暖めるものも、拭くものもない……少しでも、これ以上身体を冷やさない様にしないと……。

私は覚悟を決めて、彼に身体を寄せようと、

第二章『カウントする悪魔』 46

夜衣斗

俺の視線に気付いた飛矢折さんが、少し考えて、不意に俺に身体を寄せようとしてきた。

心拍数が急激に跳ね上がるのを感じる。

このシチュエーションの先は、一つしかない。

雪山ですか!?

もう、わけのわからないぐらい、様々な妄想がばつと溢れ出す。

あかん!あかん!あかん!?!って、嬉しいけど!物凄く興味あるけど!精神が不安定な今そんな事されて、さっきとは別の意味で理性を保っている自身が俺には……………あれ?ふと気が付いたが、何故か意識のぐらつきが和らいだ気がする。

辛い事には変わりはないが……………これなら……………

飛矢折

彼の身体に触れるか触れないかぐらい近付いた時、彼が不意に上半身を起こした。

あたしが驚いて見ていると、彼自身もどこか釈然としていない雰囲気を出しながら、

「セレクト。PSサーバント」

つと言つて、

小さな円盤が彼の背後に現れ、彼の背中に張り付き、一瞬で彼の制服があの手付きのスーツになった。

そのスーツの影響か、彼の震えは止まったので……………何だか複雑な感じで、ほっとした。

何が複雑な感じなのか、よく分からない……………つと言つ事にしつ……………彼から少し距離を置いた。

夜衣斗

俺が大丈夫になったのを確認して、飛矢折さんは少し距離を置いて座ってしまった。

……………これでいいんだ。うん。これで……………あのシチュエーションは、俺には過ぎたものだった。

何とか自分を言い聞かせようと心の中で努力はするが……………まあ、男は野蛮な生き物って事だよ……………ため息が出る。

野蛮だから、こう、どうしても、飛矢折さんの……………の部分が気になって仕方がなくなってきた。

さっきまで、意識を失うか失わなかったって状況だったのに……………何なんだ…これは？

……………とりあえず、これならもう一機サーバントを具現化させても大丈夫そうだな。

まあ、問題があるとすれば……………これを着てくれるかって事だな……………俺だけってわけにもいかないだろう。

……………よし！

第二章『カウントする悪魔』 47

飛矢折

「まだ」

？。無口な彼が口を開いたので、ちょっと驚いて彼を見ると、

「まだ意志力に余裕があります……………そのままだと身体に悪いですから……………着ますか？」

……………着る？……………あたしがそれを？……………まあ、確かに、

彼の言う通り、このままの状態はあまり良くない。いくら寒さに強いからと言っても、限界はある。

……………ちょっと恥ずかしいけど……………

「お願い」

彼は頷いて、

「セレクト。PSサーバント」

つと言って、さっきと同じ小さな円盤を出して、あたしの背中に張り付く。

瞬間、あたしの全身に何かが張り廻る感じがして……………あたしの制服は、彼のスーツと同じスーツになった。

制服がスーツになると同時に、それまで感じていた不快感や寒さがなくなり、身体が軽くなる。

身体をよく見ると、マントとタイツとスーツを組み合わせた様なこれには、胸・首・手首・足首に痛みなく刺さっている管があつて、そこから体内に何かが入ってくる感じがした。

身体に何かが入る度に、何だか身体が楽になる。

……………考えて見れば、これって武霊なんだよね……………でも、不思議と恐怖感は感じなかった……………何でだろう？

自然と彼に視線が行く。

新しく具現化したせいか、ちょっと辛そうに彼は俯いている。

……………何となく、立ち上がって、軽く飛んで見た。

一瞬の急激な上昇感覚の後、あたしの身体は天井すれすれの高さまで飛んでいた。

あまりの高さに、未熟にも受け身が上手く取れないで床に落ちてしまい……痛くなかった。

それどころか、落ちた床が割れている。

……そう言えば、このスーッと、攻撃を受けると硬くなるんだっけ？

またしても何となく、正拳突きや回し蹴りを試してみる。

いつも以上の速度と、それに伴って聞いた事がない音がする。

……何となく……これ……楽しくない？

第二章『カウントする悪魔』 48

夜衣斗

……なんか気が付くと、飛矢折さんが楽しそうに………暴れてた。PSサーバントで強化された身体で暴れているので………元々のポテンシャルの高さもあって………俺自身も強化されているはずなのに、視界に捉えるのがギリギリな感じだった。

………とんでもものねえ………こんな人に、ちよつとでも手を出そうと考えたのか………手を出していたら、死んでいたな俺。

一通り暴れると、俺の視線に気付いた飛矢折さんは、ちよつと恥ずかしそうに戻って来た。

「つい」

………ついつて………。

思わずため息が漏れる。

まあ、いいけど………さ。

「………これって………凄いね」

そう言つて、俺の隣に座る飛矢折さん。

………気のせいか、さっきより近い位置に座ったような………まあ、気のせいだろう。

「こんなものも考えているなんて………黒樹君は凄いね」

………凄い？

その言葉に、思考がぐらりと揺れて、心が乱れた。

………俺は………

「凄くなんかない」

思わずそう口に出していた。

飛矢折

「え？」

あたしが何気なく言った言葉に、彼は過敏に反応した。

彼を見ると、彼は俯いて、何かに耐えている様だった。

「これは……あくまで武霊の力……俺の力じゃない」
今まで聞いた彼の声の中で、最も声の質が暗い。

「でも、武霊を具現化出来るのも、あんなに強い武霊が出来たのも、黒樹君自身によるものでしょ？」

あたしの言葉に、彼は首を横に振った。

「……それは、ただそれだけの事だし、偶々空想好きだっただけ……」

……それはそうかもしれないけど……それだけで、武霊使いになれるってわけでもないし……それに、あなたは……

「あたしを守ってくれたじゃない」

夜衣斗

……守ってくれた？

……どうなんだろうか？……状況に流されたとは言え……確かに守る気ではいたと思う……だが……守れていないだろう？

心を暴走させて、人殺しを仕掛けて……飛矢折さんに止めて貰って……逃げただけ……拳句、意志力の使い過ぎで意識を失って海に落ち、助けられてる……これは守ったと言えるのか？……
……言えないよな……。

「黒樹君？」

俺のあまりの無反応振りが心配になったのか、飛矢折さんが俺の顔を覗き込んできた。

固まる俺に、飛矢折さんは苦笑して、

「とにかく。あたしは黒樹君のおかげで助かったんだから、そんなに自分を卑下にする事はないと思うよ。……怖くても、立ち向かえたんだから……私なんかと違って……」

そう言って、暗くなった。

……うまい言葉が見付からない。

どうすればいいんだろうか？……俺は、励まされた事はあっても、励ました事なんてないんだけど……そんな心理状態じゃないし……そんな状況でもないかもしれないし……そう……そんな状況じゃない。今は、少しでもよい状況に持ち込むために、今の状況を確認しないと……。

「セレクト。スカウトサーバント」

飛矢折

不意に彼が新たな円盤を具現化させた。

尖った二つの突起物と大きなカメラが付いた小型円盤。

あたしが不思議そうにふわふわと浮いているそれを見ると、
「様子を見させに行かせます」

つと言つて、ちよつと間を開けて、

「……見ます？」

つと聞いて来たので、よく分からず頷いてしまつ。

その瞬間、あたしの視界に、『もう一つの視界』が現れ、あたし
は目を見開いて驚いた。

円盤を見ているあたしの本来の視界と、あたしを見ている円盤の
視界が『同時に見える』。

混乱して、彼を見ると、彼もちよつと困惑している様だった。

「……このスーツ。PSサーバントの機能の一つなんです……

…慣れが必要そうな機能見たいですね……」

……色々と考えているな………凄いけど………

「黒樹君」

「………なんです？」

「覗きに使つちや駄目だよ？」

「………するわけないでしょ」

「ちよつと間が開いた。あやし〜」

「………勘弁して下さい」

第二章『カウントする悪魔』 50

????

海岸を歩く五月雨都雅。

その歩みに迷いはなく、どこかに向かつて着実に歩を進めていた。その背後では、武霊使い達とレベル2のはぐれ達との激闘が続いているのだが、都雅は一向に気にしていない。

まるではぐれが自分を襲う事がないと確信している様に見えなくもない。

不意に、都雅がその歩みを止めた。

笑みを浮かべ、その拳を地面に叩き付ける。

拳が歩道のコンクリートに当たる瞬間、その拳を包むように都雅の武霊クラツシュデビルの腕が半透明の状態で現れ、歩道を一瞬の内に大きく陥没させた。

自分で開けた大穴に落ちた都雅は、人間とは思えないジャンプ力でその大穴から飛び出し、何も無い上空に拳を振るう。

その瞬間、何かが弾かれる凄まじい音が生じ、何かが地面に叩き付けられた。

何かが叩き付けられた場所に、唐突にカメレオンと鳥と人を融合させた様な武霊が現れ、霧散する。

大穴でも、モグラと忍者を融合させた様な武霊が這い出し、霧散した。

どう言うわけか、都雅は奇襲を掛けようとした二体の武霊の気配を察し、先に攻撃を仕掛けた様だった。

都雅は消えた武霊を鼻で笑い、再び歩きだそうとして、再び笑みを浮かべた。

十数体の武霊が音を立てて都雅の周りに着地したからか、それとも……………

飛矢折

背中に悪寒が走った。

彼の話によると、スカウトサーバントには、透過機能があつて、目で見える事が出来ない。実際に、あたしの眼の前で消えて見せたから、それは間違いないんだけど……二体の武霊を瞬く間に倒した都雅は……上空で都雅を見ていたスカウトサーバントに視線を向けて……笑みを浮かべた。

見えないはずのスカウトサーバントを、まるで見えているかの様に……。

「……見えているかもしれませんね」

「え!？」

不意に彼が口にした言葉に、思わずあたしは驚きの声を上げてしまった。

あまりにも頭の中で考えている事と合っている言葉だったからだけど……。

「スカウトサーバントに搭載されているステルス機能は、あくまで光化学的なステルスです。熱や音・匂いまでは隠せていない。レベル3がどんなものは分かりませんが、武霊を身に纏っていると言ふ事は、『武霊が感じている事をよりダイレクトに、確実に武霊使いが感じる事が出来る様になっている』って事じゃないでしょうか?……もし、そうだとすると、ステルスサーバントの位置のみならず、隠れていたあの二体の武霊の存在も察知するのは簡単だったのかも知れません」

……彼つて、この町に来てまだ一週間も経ってないよね……それなのに、長くこの町に通っている私より先にそんな予測が立てられるなんて……武霊使いだから?それとも、私が武霊使いじゃないから……それとも、

「言っておきますが、こんな予想。漫画好きとか、アニメ好きとか、ゲーム好きとか……そんな奴だったら誰でも出来ますから……

……」

「……そうなの？あだし、あまりそう言つての見ないから……」
「……まあ、あまり同好の知り合いがないですから、一概にそ
うだと……言いきれませんが……」

第二章『カウントする悪魔』 51

夜衣斗

スカウトサーバントから送られてくる映像。

クラッシュデビルのカウンターがどの時点でリセットされるのか分からないが、今のカウンターはとんでもない数字になっているのだろう。

何故なら、都雅を取り囲み捕えようとした武霊達が、クラッシュデビルの拳が少し触れただけで霧散するのが見えたからだ。

……最悪としか言いようがない。

多分、もはやあの拳を防げる手段は……ない。

「大丈夫だつて」

俺が不安そうな雰囲気でも出していたのか、不意にそんな事を飛矢折さんが言った。

「聞いた話だと、レベル3ってあまり長い時間持たないって話だから、直に捕まると思うよ」

そう言う飛矢折さんだが……明らかに、俺でも分かるぐらいに小さく震えているのが見える。

都雅を見た事による不安か……それとも……何にせよ。楽観視しない方がいい。

あれが通常のレベル3だったら、特に問題はなかったと思う。だが、あのレベル3は、『謎の液体』でなったレベル3だ。……果してその通りになるかどうか……仮に、あの謎の液体が、『使用者の意志力を増大させるもの』だとしたら……そして、まだ飛矢折さんを襲う事を諦めてない……執着しているのなら……

そう考えた時……俺の弱い心が……「こんな女ほっておいて、さっさと逃げるべきだ」と言った気がした。

すぐさま、「そんなこと出来るか!」と否定の心が生じるが、

弱い心はその誘惑をし続ける。

スカウトサーバントのカメラを海の方へ向けると、まだレベル2はぐれとの戦闘は続いていた。

美羽さんや、美春団長の助けは望めそうにない。

……… 仮に、飛矢折さんを守る為に戦うとしよう。

それは、つまり、都雅と『死闘』を演じるつと言う事になる。

しかも、圧倒的に俺に不利な死闘をだ。

今の俺はある程度意志力は回復しているが、オウキ自体を具現化させるほど回復していない。……… 多分、具現化した瞬間に、気を失ってしまう。そんな状態だ。

具現化出来るのは、後何体かのサーバントかオウキの武装………
そして、迂闊に都雅に近付けば、あの拳で一瞬の内に殺されてしまう。

勝つ為の手段は、一つしか思い付かない。

……… それは、遠距離からの『一撃必殺』。

『狙撃』だ。

飛矢折

彼から都雅を殺そうとした時と同じ殺気を感じ始めた。

多分、こう結論付けたんだと思う。

今のあいつからあたしを守るためには、あいつを『殺すしかない』
。つと。

確かに……それしか方法がない。

そう私も感じた。

でも、でも……嫌だった。

とてつもなく嫌だった。

彼が、あたしなんかの為に『人殺し』に……なるなんて……だ
から、あたしの口は、自然と、

「もういいよ」

つと言ってた。

多分、強張った笑みと共に、

夜衣斗

飛矢折さんのその言葉に、俺は一瞬、思考を止めた。

「あいつの狙いはあたし一人だろうから、あたしから離れれば黒
樹君は、きつと助かるよ」

「何馬鹿な事を」

言っているんだ。つと言いつつ前に、不意に感情を吐露した大声
で、

「あたしなんかの為に！黒樹君が人殺しになる必要なんて！無い
んだよ！」

つと飛矢折さんが言った。

その瞬間、都雅に向けた怒りとは違う『別種の怒り』が俺の中を
駆け巡った。

飛矢折

あたしは、彼に守られる価値は無い暴力女。

あたしは、彼に助けられる価値の無い臆病者。

あたしは、彼に優しさを向けられる価値のない酷い人間。

そんな言葉があたしの中を駆け巡る。

あいつへの恐怖が、彼の殺意が、あたしの弱さが、今まで抑えていた感情を吐露し始めているのが分かる。

「だってあたしは……助けてくれた親友の美幸も……傷付ける様な最低な女なんだよ！」

分かっではいても、それを止める術は、今のあたしにはない。

涙が自然とこぼれる。

情けない。

でも、止められない。

そんなあたしを、彼はじっと見つめる。

前髪から僅かに見える瞳。

その瞳には、さっきまで彼から放たれていた殺気は無く、はつきりと分かる激しい怒気があった。

こんな情けないあたしに怒っているの？

それとも、自分に対して怒っているの？

それとも、

「わかりました」

不意に、彼の瞳から激しい怒気が消えた。

でも、怒気が消えたわけでもなく、とても静かな怒気に変質したのをあたしは感じた。

「五月雨都雅を、殺さず、倒します」

その言葉と共に、彼の瞳に強固な決意が現れた。

「俺は……逃げません！」

その言葉に、あたしの流す涙の性質が変わったのを、はっきりと感じた。

第二章『カウントする悪魔』 53

夜衣斗

怒りが、殺意を誘発する先程までの怒りとは違う、怒りが俺の中を駆け巡る。

先程までの怒りを『負の怒り』とするなら、今の怒りは『正の怒り』だろう。

弱い自分に対する怒り。

恐怖に駆られながらも必死に向けられた飛矢折さんに対する怒り。安易に殺意に身を任せかけた事に対する怒り。

この理不尽な状況に対する怒り。

無数の怒りが、熱を帯びて駆け廻り………飛矢折さんの瞳から流れる涙を見て、冷たくなった。

怒りが消えたわけではない。

怒りで暴走していた思考が、落ち付き、冷静になり、今までになり速度で、思考を巡らし始める。

そして、『ある事』とそれを基にする『一つの作戦』を思い付き、決意と共に、俺は、それを言葉にしていた。

????

五月雨都雅は悠然と歩く。

向かう先は、自身の武霊クラッシュデビルが示す獲物の場所。

先程まで都雅を捕まえ様と立て続けに現れていた武霊達は、もう来ない。

背後ではレベル2のはぐれとの戦闘がまだ続いているのからして、もう武霊を都雅に回せる余裕がなくなったのだろう。

最早、都雅の歩みを止める者はおらず、正確に夜衣斗と巴の隠れる廃倉庫へと向かっている。

クラッシュデビルには、『一度狙った獲物を絶対に逃さない、ど

んな場所に居ても獲物の場所知る事が出来る能力』があり、それを使って、都雅は二人の場所を特定していた。

それはすなわち、『星波町内で二人が逃げ隠れ出来る場所は一切ない』事を意味し、例え星波町から出たとしても、忘却現象により『町を出なくてはいけない理由を忘れてしまい戻ってきてしまう』。

その上、都雅に唯一対抗出来る夜衣斗は自身の武霊を具現化出来るまで回復しておらず、都雅自身は未だにレベル3を維持出来る程高い意志力を維持していた。

夜衣斗と巴の二人は、完全に追い詰められていた。

その状態を逆転させるには、『命のやり取り』しかない。

それも夜衣斗側にとつともなく不利な。

それを理解している都雅は、笑みを浮かべていた。

とてつもなく嬉しそうな笑みを。

第二章『カウントする悪魔』 54

夜衣斗

廃倉庫の真ん中付近で、俺は都雅を待ち構えている。

都雅の位置はスカウトサーバントから送られてくる映像で確認しているから、今待ち構えていなくてもいいんだが、早めに行動を起こしていないと、不安でしようがなかった。

頭の中で『考えた作戦』を何度も思い返しながら、送られてくる映像に集中し……都雅が、笑みを浮かべているのに気付いた。

また不快感が俺を襲う。

……さつきから思っていたが……こいつ……壊すだの壊せだの言ってたが、その『壊す対象に自分も入ってる』んだろう……だから、自分の命の危機にも笑える……まあ、今はそんな事を気にしている場合じゃないな……。

後数分後には、俺だけじゃない、飛矢折さんの命も掛かった大勝負をしなくちゃいけない。

気合を今まで以上に入れないと……ヤバい。緊張と恐怖と不安で、頭の中がぐちゃぐちゃな上に、心臓の鼓動が痛いぐらい高まって、身体が震え出している。

落ち着け、落ち着け俺。こんなんじゃ、いざ都雅を目の前にした時、身体が動かないぞ。

そう思っただけで深呼吸をしたが、都雅が一步一步こちらに近づく度に、それが酷くなっていく。

剛鬼丸や高神麗華の時は、突然で、決着まで間が無かった。

だが、今回は間がある。

元々ヘタレである俺には、この間は非常に厄介だ。

つまり、この間で、剛鬼丸や高神麗華戦を乗り切った『キレた状態』から、『普通の状態』に戻りつつある。っと言う事だ。

俺には熱しやすく冷めやすい所もあるので、持続しにくい怒りの

維持とコントロールなんて出来るはずもない。

終にはさっきの発言を後悔しそうで……戦う前から自分に負けつつある。

こんな状態で……俺に出来るのか？……いや、しなきゃいけないんだ。

飛矢折さんを守る為に……そして、俺が俺として生き残る為に！
そう改めて決意した時、都雅が……廃倉庫の前に現れた。

美羽

「や、やつと、発生が終わった見たいですわね」
息も切れ切れにそう言う琴野。

その視線ははぐれの発生ポイントである海に向けられていて……
…確かにもうはぐれは出てくる気配はない。

連携攻撃で一体倒したその後、はぐれを一定数倒す度に、新たなはぐれが発生して……夜衣斗さんを助けに行く事がなかなか出来なかった。

……もう何体倒したか分からない。

私も琴野と同じ様に、意志力の使い過ぎでもうろうつとし始めていて、かなり辛い状態なんだけど……ここで止めるわけにもいかないし、この後、夜衣斗さんを助けに行かないとけないだ。……しつかりしろ私！。

もうろうとした意識をはっきりさせようと気合を入れた時、

まだ余裕のある美春さんの星電が鳴った。

美春さんは素早く星電に出て……眉を顰める。

「わかった。お前達はそのまま監視を続けていてくれ……すぐに私が行く」

そう言つて美春さんは星電を切り、私を見た。

「五月雨都雅を捕まえに行った武霊使いが全員意志力切れになつたぞうだ」

……それって……

「夜衣斗君が危ない。すまないが、後のはぐれを二人に頼めるか？」

さつきまで私達に対しては普段の言葉使いだった美春さんの口調が、仕事用の男言葉になっている。

これは、夜衣斗さんの身が本当に危険な事に……。

「私も」

行きます。そう言おうとした時、はぐれがまた発生した。
まだ出てくるの!? しかも、このタイミングで?

私は思わず唇を噛み締めた。

ここで美春さんだけでなく、私まで抜ければ、町に被害が出るのは間違いがない。

「美春さん。夜衣斗さんをお願いします」

「ああ」

第二章『カウントする悪魔』 56

???

五月雨都雅が廃倉庫に入ると、廃倉庫の中央で黒樹夜衣斗は二丁拳銃を都雅に向かって構えていた。

夜衣斗は既に呼吸が乱れており、明らかに意志力不足を起こしている様子だった。

飛矢折巴の姿は見当たらない。

だが、都雅はクラッシュデビルから送られてくる感覚で感じていた。

巴は、この廃倉庫の中に隠れている。っと。

その場所は……夜衣斗の背後にある錆び付いたコンテナの中。

都雅から笑みがこぼれた。

都雅が巴を最初に襲った時、都雅は武霊を出す前に『殺され掛けた』。

だが、殺人への躊躇いから、一瞬の隙が出来き、武霊を使って巴を拘束する事に成功した。

武霊の圧倒的な力に、そして、自分がこれからされるであろう事に、巴が恐怖し、それまで彼女を構成していた『柱』が崩れかけているのを、都雅はありありと感じ、狂気した。

都雅にとって、女性への暴行は、『手段であって、目的ではない』。

あと一步で、この女は『壊れる』。

そう思った瞬間、都雅はウサギと人を融合させた様な武霊に倒された。

後一步、後一步で、それである女は壊れたのに！壊れたのに！！その思いで、その思いを止められなくなり、都雅は都雅である為に、

「一、二、三、四、五、六、七、八……」
数え、数え出す。

数字が、都雅にとって、人格を形作っている最たるものであり、
根源たるもの。

幼い頃の最初の記憶。

赤子に数字を教える両親。

数える度に思い出し 数える度に苦しくなる。

狭い狭いと苦しくなる。

この世の全てが狭いと感じさせる。

だからこそ、都雅は都雅として、それ以上に、それ以下にならず
に済んでいる。

だからこそ、都雅は都雅として、狂気に身を委ね、本能のままに
壊す。

第二章『カウントする悪魔』 57

夜衣斗

俺と対峙し、俺の後ろのコンテナへと視線を向け笑みを浮かべる都雅。

どうやら、隠れる事は無駄らしい。

って事は……………。

不意に都雅が何も無い空間に拳を振るった。

破裂音つと共に、ステルスサーバントの機能で固定透過（移動させていない物体を透過させる機能。この場合は、ステルスサーバントのナノマシンを吹き付けるだけで、本体は近くにある必要はない）させたソードサーバントが消滅したのを、PSサーバントの機能の一つアイディスプレイ（目の中にもう一つの画面がある様に脳に直接情報を送る機能）で確認した。

スカウトサーバントで確認したカウンターの数は、右手が五百四十、左手が四百十一。

……………当たれば即死の攻撃……………だが、やるしかない。

俺は決意と共に二丁拳銃の引き金を引いた。

????

夜衣斗の二丁拳銃から連射される弾丸。

都雅はレベル3の具現化を通常に戻し、両手で頭を守りながら突進。

直撃する弾丸。

だが、手に当たる弾丸は一瞬で消滅し、身体に当たった弾丸は半透明のクラッシュデビルに少しめり込むだけで終わった。

一瞬で間合いの詰まる二人。

都雅が右フックを夜衣斗に放ち、夜衣斗はそれを後ろに倒れる様に避け、倒れながら拳銃を連射。

放たれた弾丸は、クラッシュデビルの腕や足にめり込む。

倒れる夜衣斗の身体が地面に着く前に、PSサーバントのマントを翼に変化させ地面すれすれを飛び、急上昇。

天井すれすれで上昇を止めた夜衣斗は、そのまま旋回しながら二丁拳銃のマガジンをそれぞれ無言具現化、マガジンを取り換え、都雅向かって二丁拳銃を連射。

都雅は弾丸を物ともせず夜衣斗に向かってジャンプ。

それを見た夜衣斗はPSサーバントの飛行モードを止め、落ちる様に都雅の攻撃をかわしつつ、都雅のジャンプが頂点に達したのを確認し、

「爆裂弾。ブレイク！」

っと叫んだ。

その瞬間、クラッシュデビルの身体にめり込んでいた弾丸が一斉に爆発した。

第二章『カウントする悪魔』 58

飛矢折

大きな爆発音がし、あたしが隠れているコンテナが震えた。始まった。

彼の作戦が……………

身体が震えるのが分かる。

自分自身の内から湧き上がる恐怖と、彼へと向けられている心配から来る恐怖。

二つの恐怖が合わさって、震えが止まらない。

…………… 黒樹君……………どうか無事で……………。

信じる神様はいないけど、自然と、あたしは祈る様に両手を合わせて額に付けていた。

?????

新たなマガジンを無言具現化し、多少もたつきながらマガジン交換をする夜衣斗。

そして、爆煙を纏いながら落ちてくる都雅に向かって銃弾を連射放たれた弾丸は着弾の瞬間に爆裂とは違う強烈な衝撃を発生させた。

交換したマガジンには、『衝撃弾』と夜衣斗が名付けている着弾と共に衝撃波を発生させる弾丸が込められている。

この弾丸は、殺傷能力が低く、対象を衝撃で気絶させる為のもの。だが、衝撃により煙から姿を現した都雅のクラッシュデビルは、所々挟れている所はあるものの本体である都雅は全くの無傷だった。その為、クラッシュデビルに衝撃を邪魔され、いくら弾丸が当たろうと都雅を気絶させられない。

それどころか、爆裂弾により挟れたクラッシュデビルの身体が急速に再生し始めた。

夜衣斗

クラツシュデビルの再生に俺は心の中で舌打ちをした。

殺さないレベルに加減したとは言え、あつと言う間にダメージが無かった事になる。

オウキを具現化させる事が出来ない俺に、それは決定的に不利な現実だった。

衝撃弾により俺に向かって降って来ていた都雅は軌道がずれ、廃倉庫の入り口に着地した。

最初の対峙と同じになり、俺も、都雅も、動きを止める。

俺は次の攻撃に迷った為だが、都雅は余裕から動きを止めたのか、ニヤニヤしていた。

「お前は何でそんな攻撃しかしてこない。壊したいんだろ？壊したいんだろ？壊そうぜ！壊そうぜ！壊そうぜ！！全てを壊そうぜえ！」

……また壊そうか……やたらと壊す事に執着している奴だな……
……まあ、だからこそ、連続婦女暴行事件を起こしたんだろう……一番、この世に壊した事を残しやすい。そう考えて……それを理解出来る自分が嫌だな……だが、この理解は、『武器』になる。

「っは！まだ壊す気がないって言うなら、俺が教えてやるよ！俺がお前を壊してやるよお！」

そう叫んで突進してくる都雅に、心の中で笑みを浮かべた。

予想通り。

そう思ったからだ。

???

突進してくる都雅に、夜衣斗は二丁拳銃を連射。だが、放たれた衝撃弾は都雅を少し揺らすだけで、その突撃を止める事は出来ず、直に弾切れを起こしてしまった。

夜衣斗に向かって振るわれる都雅の右拳。

拳が当たる直前で右に飛んで避ける夜衣斗。

その夜衣斗を追って都雅の左手が迫る。

クラッシュデビルの憑依具現によりそのリーチが伸びている左手に、強化された瞬発力。

その二つが合わさって、僅かに避け切れず、夜衣斗は左手を掴まれるその瞬間、

「左リセット」

そう都雅が言った。

夜衣斗

左手を掴まれた瞬間、一気に血の気が引いた。

だが、俺は死ぬ事も無く、都雅によって持ち上げられる。

天井に待機させているスカウトサーバントで確認すると、俺の手を掴んでいる手のカウンターが0になっていた。

……『思惑通り』とは言え、生きた心地がしないな……っと、思惑通りとは言え、ここで反撃しないと、怪しまれる。

そう思った俺は、すぐさま蹴りを放とうとして、蹴りを放てなかった。

脚の前に、まだカウンターがリセットされていない右手が、触れるか触れないかの距離に置かれていたからだ。

俺にはもう新たなサーバントを出す余裕はない。

気を抜けば意識を失いそうなほど、頭がくらくらし始めている。

天井に待機させているスカウトサーバントに攻撃機能がないわけでもないが、それほど攻撃力はないので、無駄だろう。

打つ手がなくなった。

そう、『今打てる手』がだ。

「見てる。見てるよ？今からお前の見ている前で、壊してやる」
そう言っつて、都雅は半透明のクラッシュデビルから落ちる様に出た。

その瞬間クラッシュデビルの身体が完全に具現化。

クラッシュデビルは、俺を正面に向かせ、ゆっくりと飛矢折さんが隠れているコンテナに近づく都雅の後を付いて行く。

戦闘とは違う緊張で、心臓が張り裂けそうなくらい高まる。

後は……

第二章『カウントする悪魔』 60

飛矢折

スカウトサーバントから送られてくる戦いの映像を見ながら、私は彼と直前まで交わっていた会話を思い出していた。

「偽物？」

あたしの言葉に、彼は頷いた。

「ええ。ドッペルゲンガーサーバントと名付けたサーバントを使って、飛矢折さんの偽物を作ります。そして、あの場所で」

彼の指差す先には、錆びたコンテナがあった。

「狭く避け難いあの場所で、電撃攻撃をします。ドッペルゲンガーサーバントには、そう言う機能もありますから」

「でも、武霊はどうするの？」

「俺が囷になって、レベル3からレベル1にさせて、引き付けます」

「どうやって！？下手すれば殺されちゃうよ」

「平気です。きっと都雅は、俺に『飛矢折さんが壊れる様を見せつけよう』とします」から」

妙に自信のあるその予想に、私は目瞬かせた。

その根拠が分からない。だから、

「……どう言う事？」

っと口にした。

あたしの問いに、彼はちょっと困った様な雰囲気になって、少し考えて、説明を始めた。

「……都雅の言動から、都雅の目的は『自分を構成するものを壊す』事なんだと思います」

「自分を構成するもの？」

「他人・記憶・イメージ・過去・現在・未来ありとあらゆるもの

……それら全て、自分を構成する全てを、壊したい。そう思っているじゃないかと……」

「どうしてそうだと思うわけ？」

「……俺と都雅は、同じ所があるからです」

何それ。

「そんな事……あるわけないじゃない！」

つと私が思わず声を荒げて言うと、彼はちよつと驚いた様な雰囲気になった。

「……勿論、全く同じつと言うわけではありません……でも、

近い所はあるんでしょう。だから、あいつは俺にあんな挑発し……

…俺はまんまとそれに乗ってしまったんです」

「……仮に、仮にそうだとしても、それで黒樹君が殺されない保証はないでしょ？」

「今までの都雅が起こした事件で、死者はいますか？」

？ ……確か、いなかったはず……

あたしは首を横に振ると、彼は頷いて、

「壊すつと言っても、方法は様々で、その考え方も様々です……

多分、都雅は、完全に破壊する事より、不完全に壊して、破壊の爪痕を残した方が、壊し易いつと考えていると思います」

「……意味が分からないんだけど……」

「都雅が今壊そうとしているものは……多分、『社会』なんだと思います」

「社会？」

「……それがなければ、『人は只の獣』です……都雅の起こした婦女暴行は、人が獣だって表す方法の『手段』なんでしょう。それを繰り返し起こせば、模倣犯だって出る。被害者が生存している分、被害者、その周りの人に、大きな傷跡が残り、社会を軋ませる……特に、ここは武霊つと言う、『個人に超常的な力を得られる町』です。その影響は、日本のどの場所より大きいでしょう」

「……あいつは、この町を無法地帯にしたいって事？……仮にそ

うだったとしても、随分回りくどく感じるんだけど……」

「人の社会は、ルールによって形作られています。その主な構成は、精神的な所で構築されている所が大きい……そう俺は考えています……です。もし仮に、直接的な、例えば警察などを襲うなどしても、多くの人はまともな精神を持っていますから、社会がすぐさま壊れる事はありませんし、直に代用がされるでしょう……そうさせない為に、まずは人の精神から壊す。……俺にはそう言う思惑で都雅が動いている様な気がします」

「……本当にそう言う思惑で動いているなら、あいつは理性的に動いているってことだよね？……とてもそうは思えないんだけど……」

襲われた時の事を思い出し、あたしは少し震えた。

「多分、都雅は、強い本能と強い理性。その両方が同居しているんじゃないんでしょうか？強い本能が働いているから、女性を襲っている。強い理性があるから、自分が殺されそうになる瞬間……笑うんでしょう」

「笑う？……どうしてそれが理性に繋がるわけ？」

「……普通の動物が自殺するって話を聞いた事がありますか？……ないかな？」

あたしは首を横に振った。

「……個人的な考えですが、自ら死ぬ行為は、理性によって行われる事だと思えます」

「……そうなのかな？」

「……少なくとも、俺はそうでした」

「え！？」

心臓の脈が跳ね上がった。

それってつまり、彼は自殺を考えた事があるって事で……

「自分が殺されそうになる瞬間、笑う。つまり、自分の死を喜んでいる。望んでいる。それは、要は自主性の無い自殺と言う事です」
「……じゃあ、何で都雅は自分自身で、死のうとしないわけ？」

「本能が邪魔をするんでしょう。多分、理性より本能の方が、僅かに上回っている。だから、自分では死ねない」

「何それ……」

「本能が強い証拠に、あいつはこう言ってたでしょ。この世は狭い。って」

「……うん。言ってた」

「人の本能にとって、この世。社会は、酷く狭く感じるとは思いませんか？」

「……そうなのかな？」

「人の社会は、『少なくとも表面上は』、理性的に作られています。ですか、その社会に住む人は、どちらかと言うと、理性よりまだ本能の方が勝っています。だからこそ、人は日々ストレスに苛まれ、そのストレスのはけ口を求め、いじめなどが起きる……まあ、一概にそうだとは言えない所もありますが、一端である事は間違いないと思いますよ」

「……そう思うのは、自分がそれに晒された事があるから？」

「そう言い掛けて止めた。聞いた所で意味がない問いだから……」

「……そして、都雅は、普通の人より本能が強い。だからこそ、この世が狭いとより感じ、耐えられず、自分を構成するこの世を壊そうとする。だけど、理性も強いから、直接的な破壊ではなく、間接的で効率がよく、本能も満足させる破壊、連続婦女暴行を起こした」

「……あいつが殺人を犯さない事は分かったけど……」

「それで、どうして、黒樹君に……あいつが私を壊す様を見せつけ様とするって思うわけ？」

その私の問いに、彼がちよっと困った雰囲気になり、ちよっと悩んで、

「それも俺を壊す手段つと言う事ですよ」

「黒樹君が壊れる？」

「都雅はこう感じたんでしょう。後一步押せば、俺が自分と同じ」

様に、もしくはそれ以上になるって」

「そんな事」

あるわけないでしょ。つと云うのを彼は遮って、

「ある。そう思いますよ？だって、さっき俺は怒りにまかせて殺そうとしたでしょ？」

……確かに……しそうになっただけど……

「あの時、飛矢折さんが止めてくれなかったら、俺は『無力化した人間』を殺していました……そんな事が出来る人間は……壊れた人間でしょ？」

「黒樹君……」

「それに、言ったでしょ？都雅は本能では死ねないけれど、理性では、自分が死ぬ事を望んでいるって……だから、俺は殺されない。壊れた俺に殺される事も望んでいる」

……

「……それを前提に、俺はギリギリまで都雅と戦い。捕まります。そうすれば、都雅は俺を拘束しながら飛矢折さんを襲う為にクラッシュデビルをレベル1し、飛矢折さんが隠れるコンテナに生身で入るはずです。そこを飛矢折さんに化けたドツペルゲンガーサーバントで気絶させる……これが、俺が考えた作戦です」

「……でも、あいつの武霊って、あたしの位置を分かるんじゃないの？いくらそっくりに作ったからって……」

「そうですね。だから、飛矢折さんには……もしわからないんですけど、偽者の近くで、隠れて貰います」

「隠れるっただって……そんな場所あるの？」

「無くても平気です。このPSサーバントにはこんな風に」
唐突に彼の姿が消えて、直に現れた。

「強くイメージすれば作動するステルス機能がありますから」

……消える？……

試しに自分が消えたイメージをしてみると……確かに見えなくなっただ。

……いたせりつくせりね。

「……都雅を殺さず、俺も、飛矢折さんが助かるには、今の俺の状態も考えて……これしかないと思います」

彼が捕まり、戦闘が終わった。

彼の予想通り、彼は拘束されるだけで済み、あいつはレベル3を止めて、あたしのいるコンテナへと近付いてくる。

怖い。怖い……怖い。

恐怖があたしの心を支配し始める。

コンテナの一番奥の壁に背を付け、両手を胸の前で組み合わせる様に震えている偽物。

あたしはそれをコンテナの角で見詰める。

まるであたしの心をそのまま映し出しているかの様に見えた。

コンテナの錆び付いた扉が……ゆっくりと開く。

第二章『カウントする悪魔』 61

夜衣斗

俺が見ている前で、都雅はゆっくりと、見せ付ける様に錆び付いたコンテナの扉を開ける。

そつだ。そのまま入れ！

俺はその背中を睨みつけながら、そう念じていた。

開いたコンテナの先に、壁に背を付け、両手を胸の前で組み合わせ、震えている飛矢折さんが目に入る。

……やり過ぎたオウキ……

俺の心の中の嘆息に、オウキの濟まなそうな感情を感じた。

「っは！強い人間ほど、心が折れれば……ってか。無様だな。え！
？無様だな」

挑発しながらコンテナの中に入る都雅。

一步。

まだだ。

二歩。

もう少し。

三歩。

……。

四歩。

コンテナの丁度コンテナの真ん中に、

今だオウキ！

サーバントが、都雅に飛び掛かり、片手を伸ばす。

後姿の為都雅の様子は見えないが、多分驚いて後ろに飛ぶ都雅だが、一步遅く、サーバントの片手が都雅の襟首を掴んだ。

その瞬間、電撃が……発生しなかった。

驚愕に俺の目が見開かれる。

都雅の肩越しに見えたサーバントが、襟首を掴んだと同時に、霧

散した。

何が起きたか意味が分からず、混乱していると、都雅が右手を上げて、手を振った。

反射的にその右手を見ると………人差し指にだけ、レベル3の具現化が起きていて……俺を拘束しているクラッシュデビルの右手人差し指を見ると、そこだけ消えていた。

最悪だ。考え付くべきだった。レベル1の具現化で部分具現化が出来るのなら、『他のレベルでも出来る可能性があった事を』。そして、実際に目の前でそれをやられ………。

偽物が消えた為か、ステルス機能で消えてコンテナの隅にいる飛矢折さんに顔を向ける都雅。

くそ！くそ！くそ！！

「飛矢折さん！」

第二章『カウントする悪魔』 62

????

レベル1のコロ丸に乗った美春は、報告のあった都雅の進路に向けて星波海岸を急いでいた。

崩壊した学園大橋を抜けて少しして、不意にコロ丸が横に飛び、止まった。

その瞬間、コロ丸が進むはずだった場所に巨大な剣が生えた。

「何だ！はぐれ？いや、武霊使いか！？」

その瞬時に判断し、コロ丸に臨戦態勢を取らせる。

美春がはぐれではなく、武霊使いだと判断したのは、殺意の質の違いを感じたからだ。

はぐれの殺意は、ほぼ動物の殺意と同じで、純粹。本能的な殺意。

武霊使いの殺意は、人間の殺意である為、不純。理性的な殺意。生えた剣から感じた殺意は、理性的な殺意。

（犯罪武霊使いか？このタイミングで？……いや、そもそも、こんな武霊を持った犯罪武霊使いなんていたか？）

剣を警戒しながら思考する美春。

また不意にコロ丸が後ろに飛び退いた。

そして、再び巨大な剣が生える。

だが、今度はそれだけでは終わらず、飛び退いたコロ丸の周囲に十数本もの巨大な剣が生え、動きを封じられた。

（何だ！？この剣。武霊の本体じゃなく、武霊の能力なのか？）

美春がそう考えると同時に、コロ丸の周囲を取り囲んだ剣達が、ゆっくりと動き出す。

（……まるで、私を五月雨都雅の下に行かせない様に足止めをしているみたいだな……）

「何の思惑があつてそんな事をしているか知らないが、邪魔をするなら、押し通るのみ！コロ丸！」

そう言った美春は、レベル1の具現化を止め、レベル3憑依具現化なり、飛び上る。

その美春を追隨する様に、生えた剣達が回転して飛び出した。

無数の巨大な剣と激闘を開始した美春。

その様子を遠く、商業ビルの屋上から見詰める少女がいた。

フリルが異様に多い服を着たロングヘアの女の子。

自身達を武霊チルドレンと言った五人の少女の一人・麗衣だった。都雅に何かをしていた時とは違い、無表情だった顔が今は嬉しそうに顔を歪めている。

その歪みは、剣がコロ丸の身体を切り裂くと共に強まり、終には声を出さずに笑い出していた。

第二章『カウントする悪魔』 63

飛矢折

あたしの偽物が霧散した。

あいつが見えないはずのあたしに顔を向け……………背筋が寒くなる
笑みを浮かべる。

「飛矢折さん！」

彼があたしの名を呼ぶ。

彼に目を向けると、前髪から僅かに見える目は、

偽物と共にコンテナに隠れる時、彼は躊躇いがちにあたしに、

「……………PSサーバントの両腕には、瞬時に銃と刀のどちらかを構築できる機能が付いています」

そう言った。

……………それって……………。

「構築させるには、PSサーバントつと言ってからどちらかの名前を言うだけです。その際に、非殺傷モードつと付け加える事で、非殺傷モードになります」

「黒樹君……………」

「口に出さなくても、同じ事を頭の中で考えるだけで、いいです」

「無理だよ……………あたしには……………」

あたしその言葉に、彼は苦笑した。

「無理なんかじゃないですよ」

「でも、今のあたしは……………あいつを目の前にすると……………」
首を横に振る彼。

「怖くても、俺の殺人を止めてくれたじゃないですか？」

「それは……………」

「飛矢折さんは、きっと、自分ではなく、他人の為に力を発揮できる人なんです」

「そんな事は……」

「ありますよ。ですから……もし、さっきの作戦が何らかの理由で失敗した場合……最後の切り札は、飛矢折さん……あなたです」

そう言っつて、彼は笑みを浮かべ。コンテナの扉を閉めた

諦めていなかった。

第二章『カウントする悪魔』 64

夜衣斗

最後の切り札は、飛矢折さん。

あなただ！

俺は全てをあなたに賭ける！！

「そう強い意志を込めて飛矢折さんを見詰め、

「PSサーバント！右手銃」

つと言つと同時に、持っていた拳銃を離し、瞬時に構成された拳銃を都雅に向けた。

間髪入れずに、都雅に向けて、撃つ。

それを察知していた都雅は振り向きざまに右手だけを憑依具現化し、撃ち出した銃弾を霧散させた。

笑う都雅。

憑依具現化した右手をよく見ると、小指だけ憑依具現が起きていない。

「死なねえ程度に壊してやるよ」

「やれるものならやってみろ！」

飛矢折

「PSサーバント！右手銃」

彼がPSサーバントの銃を使って発砲。

あいつは振り向き銃弾を防御した。
震える身体。

折れた心。

彼はそんなあたしなんか………命を掛けた。

何の為にあたしは武術をやっている！？

今、この時の為でしょ！？

言っ事を聞けあたしの身体！

なけなしの勇気を振り絞って、あたしの心を支える！！

飛矢折巴！！！！

「死なねえ程度に壊してやるよ」

あいつがそう言うと同時にあいつの武霊の右腕がゆっくりと動き出す。

あたしの心が静まるのを感じた。

「やれるものならやってみろ！」

そう言っつて、再び銃を撃つ彼。

今！PSサーバント！右手刀、非殺傷モード！！

右手首に刀の柄が現れるのを感じ、ほとんど反射的に柄を握り、無心になった。

第二章『カウントする悪魔』 65

夜衣斗

放った弾丸が都雅によって消滅、足に迫るクラッシュデビルの右小指。

そんな絶体絶命の状況の中。

視界の隅で、飛矢折さんがステルスを切り、現れるのが見えた。

その左手は右手首から出ている刀の柄に添えられており、その表情にまるで静かな水面の様に……………。

飛矢折さんの動きに気付いた都雅は、驚愕した表情になり、振り向き様に腕を振るおうとしたが、遅い！

飛矢折さんの姿が掻き消えると共に、電撃音。

気が付くと都雅の斜め前飛矢折さんは移動していて、刀を抜いていた。

そして、ゆっくりと刀を右手首に納刀。

その動きと共に、都雅はゆっくりと倒れ、俺を捕まえていたクラッシュデビルが掻き消えた。

ゆっくりと息を吐く飛矢折さんを見て……………俺も息を吐く。

どうやら今の一瞬、俺は息を吸う事を忘れていたみたいだった。

「飛矢」

折さん。って言おうとして、俺は言えなかった。

不意に飛矢折さんが俺に……………抱き付いてきたからだ。

固まる俺の耳元に、再び震え出した飛矢折さんは、

「ありがとう、黒樹君」

そう言った。

飛矢折

柄を握った瞬間、あたしは、ほとんど条件反射的に身体が動いていた。

頭ではなく、身体で覚えた居合の動き。

PSサーバントで強化されたあたしは一瞬で、あいつの脇を通り抜け、刀を振るっていた。

振り抜けた刀をゆっくりと右手首に戻す。

仕組みは分からないけど、ゆっくりと刀身が手首の中に入るのを感じつつ、あたしは彼を見ていた。

彼は無傷だった。

あいつが倒れる気配と、消えるあいつの武霊。

武霊が消える際、あたしと何故か目が合ったけど……もう、怖くはなかった。

今の一瞬が、荒治療になったのか、只単に心が麻痺しているか分からなかったけど……あたしの彼に対する思いでいっぱいだった。ゆっくりと息を吐きながら、あたしはこの思いに戸惑っていた。

色んな感情と思いが心の中を渦巻いていて、わけが分からなかったけど……ほとんどが、初めての感情と思いだったと思う。

だから、その感情と思いを制御する術をあたしは知らなくて、あたしの名前を呼ぼうとした彼に、思わず抱き付いてしまっていた。

そして、

「ありがとう、黒樹君」

って言って、気が付いた。

なんて恥ずかしい事しているのあたしは!?

恥ずかしくて、顔が赤くなるのを感じたけれど、彼から……黒樹君から離れたくなくて、顔を見られたくなくて、より強く抱き付いてしまった。

第二章『カウントする悪魔』 66

?????

襲い掛かってくる剣達に、苦戦を強いられる美春。

速度・攻撃力が飛躍的に上昇しているレベル3になっていると言
うのに、剣の包囲網から抜け出せず、その剣すらも破壊出来ずにい
た。

(なんなんだこの武霊………大きさを考えて、レベル1の具現
化だつて言うのに、この強さ………異常過ぎる)

驚愕と共に、美春は焦り始めていた。

時間を掛ければ掛ける程、二人の身が危険になる。

(この武霊といい、はぐれといい………夜衣斗君といい、大きな変
化が起きようと………いえ、既に起きているの?)

そう美春が思った時、不意に剣達が霧散した。

「な!………なんなんだ?」

何の脈絡も無しに具現化を止めた相手の武霊使いの意図が分から
ず、困惑する美春。そして、

「まさか!？」

最悪の事態を思い付き、レベル3のまま夜衣斗達の下へと急ぐ。

コロ丸の嗅覚を頼りに、廃工場地帯の廃倉庫に辿り着き、あまり
の静けさに、悪寒が走り、飛び込むように廃倉庫に入ると………そ
こで固まってる夜衣斗に抱き付く女の子がいて………

「パールツク?」

二人の格好に思わずそうつぶやくと、その声に気付いた二人が美
春を物凄い速さで見つめて、二人は同じ様な速度で離れた。

夜衣斗

「………まあ………二人が無事で、よかったが………」

なんだか気まずそうな団長に、俺は頬を掻いてそっぽを向くしか

出来なかった。

「レベル3の武霊使い……………五月雨都雅を倒したんだ……………君は本当に凄いな」

コンテナの中で倒れている都雅を確認したのか団長がそんな事を言ったので、俺は特に考えも無く首を横に振って、

「俺の力じゃありません」

俺がそう言つて飛矢折さんを見ると、飛矢折さんは目を瞬かせて、首を横に振った。

「……………まあ、どっちのおかげでもいいが……………夜衣斗君。何か拘束するものか、意識の回復を遅らせるものは具現化出来ないか？」

そう言いながら、倒れている都雅に近づく団長。

……………あるにはあるが……………。

「正直、限界なんです……………」

そう俺が素直に言つと、仕方がないつと言つた感じで、団長は廃倉庫の入り口に待機させていたコロ丸を呼んだ。

のしのしと歩くコロ丸に、何となく視線を向けていると、不意にコロ丸が立ち止まり、唸りだした。

嫌な予感を感じて、反射的にコロ丸が唸り声を上げている方向に視線を向け、後悔した。

うつ伏せに倒れている都雅の背中から『剣が生えてくる』瞬間を目撃したからだ。

ぞわつと悪寒が全身を走った。

血を付けて生えている剣はどう見ても、『都雅の心臓を貫いている』。

それはつまり……………

霧散する剣。

一気に地面に広がる血。

そして、

ゆっくりと都雅の背中から現れ始めるクラッシュデビル。

はぐれ化!!

第二章『カウントする悪魔』 67

????

廃倉庫の破れた天井からクラッシュデビルのはぐれ化を観察している人影があった。

美春を足止めしていた武霊チルドレン麗衣。

麗衣は中の様子を窺いながら、手に持つ携帯でメールを打っていた。

その内容は、

「はぐれ化完了だぴょん」

と無口無感情な彼女には不釣り合いな文法だった。

飛矢折

武霊使いが死亡すると、その身に宿る武霊ははぐれになる。

そんな話を聞いた事があった。

それをあたしは目の前で見ている。

「コロ丸！刃の嵐！」

あたし達を助けに来た自警団の団長がそう言って、自分も下がりながら、あたし達に下がる様に手で指示した。

あたしは、具現化のし過ぎでふらふらな黒樹君を技を掛けてお姫様抱っこにして、廃倉庫の出口へと駆け出す。

少しだけ後ろを確認すると、団長の武霊が全身の毛を伸ばし、無数の刃を形成している。

凄い能力だけど……あれであいつの武霊に勝てる？

そう思ったあたしは、一つの決意を固めた。

廃倉庫を出て、近くの建物の陰まで移動して、あたしはその陰に黒樹君を下ろす。

「黒樹君。この服にまだ他の機能ってある？」

「他の機能？……いくつもありますけど……」

あたしの行動と言動に戸惑った様子を見せる黒樹君。

「その中での武霊に有効なものはある？」

「流石にそこまでは……いや、そんな事より……戦う気ですか！？」

驚き、声を荒げる黒樹君に、私きつと微笑みかけた。

「今度はあたしが黒樹君を守る番だよ」

第二章『カウントする悪魔』 68

夜衣斗

「今度はあたしが黒樹君を守る番だよ」

そう言った飛矢折さんは、止める間もなく、俺の前から掻き消えた。

……もう俺よりPSサーバントを使いこなしているし……身体能力の差か？……いや、そんな事より、二人を支援する何かを具現化……！？

サーバントを具現化しようとして、不意に俺の視界が歪み、ふらつき、膝を地面に付けてしまった。

……一時意識を失ってた問いは言え、オーバードライブモードを限界近くまで使っている上に、都雅と戦う為にソードサーバント・二丁拳銃・そのマガジンの連続の具現化。いくら回復が他の武霊使いより早くても……無理し過ぎたか……このままじゃ、クラッシュデビルと戦いに行った飛矢折さんのPSサーバントも維持できないな……。

そう思った俺は、飛矢折さんのPSサーバント以外の具現化を止めた。

……お？……少し楽になった……かな？

だが、それでも立ち上がるほどに意志力が回復していないので、俺は物陰に座り込む。

戦いの音が廃倉庫から聞こえ出す。

……それにしても……何だったんだあの剣は……まあ、今考えても仕方がないか……どうせ何も分からない……なら、今できる事をしないと……

俺はそう思って、制服の内ポケットから星電を取り出そうとした時、近くに人の気配を感じ、反射的にその方向に視線を向けた。

知らない男がいつの間にか俺の近くに来ており、俺を見下ろして

いる。

……なんだ？誰だ？

「初めまして黒樹夜衣斗」

……またこのパターンか……

「俺は大原亮」

！！？大原！？確か美羽さんが見ていた家の表札の……？？？？
なんだ？何なんだ？このタイミングで？

その時、さつきまでいた廃倉庫の天井が破れ、そこから片腕を無くしたクラッシュデビル・所々毛が短くなったコロ丸・刀を持った飛矢折さんが飛び出してきた。

コロ丸の背中を足場に、飛矢折さんが止めを刺そうとした瞬間、何も無い空間に巨大な青い人型のドラゴンが現れ……クラッシュデビルを丸飲みにした！！？

状況から考えて、あの青い人形のドラゴンは大原亮の武霊なんだろうが……何なんだこいつ！ってか、助けに来るならもっと早くに来いよな！

怒りの視線を大原亮に向けると、大原は俺をしっかりと見て、こう言った。

「君の武霊を貰いに来た」

………な！！？

第二章『カウントする悪魔』 69

飛矢折

廃倉庫の急いで戻ると、団長の武霊・コロ丸は、大量に作った毛の刃の一部を同じ毛の刃で切り離していた。

切り離された毛は瞬時に四散して、霧散した。

多分、あいつの武霊・クラッシュデビルだっけ？……そう言えば、何で黒樹君はクラッシュデビルの名前を知ってたんだろう？……の拳を受け止めた毛の刃を破壊が全身に及ぶ前に切ったんだと思う。

……あの右拳を何とかしないと……

そう判断したあたしは、

「PSサーバント！左手銃」

と言つて左手に拳銃を出現させた。

……まさか生きている内に銃を使う事になるなんて……思いもしなかったな……

そう思いながら、クラッシュデビルに銃を向けると、あたしの目に、映画とかで見た事があるターゲットサイトが現れる。それ所か、あたしが狙いたい場所に、右腕が勝手に微調整し始めた。

PSサーバントが照準補正をしてくれるんだと思うんだけど……身体が勝手に動くのはちょっと気味が悪い。でも、今はそんな事を言っている場合じゃない。

トリガーを引くと、軽い反動と共に弾丸が射出され、クラッシュデビルの頭部に弾丸が……当たらなかった。

直前で、クラッシュデビルが右手で防御したからだ。

でも、その隙をコロ丸は逃がさず、残った毛の刃をクラッシュデビルに突き刺す。

無数の毛の刃を身体に突き刺されたクラッシュデビルが叫び声を上げ、コロ丸に向かって手刀を放つ。

コロ丸は自身の毛の刃で手刀を防御。

直に防御した毛の刃を切り、全身破壊を防ぎ、クラッシュデビルから離れる。

追い続けるクラッシュデビルは、コロ丸に手を伸ばす。

その間あたしは、拳銃をしまい、クラッシュデビルの横に移動し、「PSサーバント！右手刀」っと小声で命令し、右手手首に刀の柄を出現させていた。

後ろ向きに逃げるコロ丸より、追い続けるクラッシュデビルの方が僅かに早かった見たいで、その右手がコロ丸に迫る。

再び毛の刃でその右手を受け止め、斬るが、クラッシュデビルの勢いは殺せていない。

でも、それで一瞬だけ、動きが鈍った。

その一瞬だけで、今のあたしには、十分！

足に力を込め、人間の限界を超えた速度でクラッシュデビルの横を通り過ぎる。

クラッシュデビルとあたしが最も近付いた刹那、あたしは居合斬りを放っていた。

通り過ぎたあたしに反応して、右拳をあたしに向けて振ろうとするクラッシュデビルけど、身体だけが反転し、その勢いで根元から腕が取れ、地面に落ちる前に霧散する。

破壊の範囲は、手首から上に限定されているのを散々見てきた。だから、その範囲外である腕の付け根を狙って居合斬りを放っていた。

これで、クラッシュデビルの戦闘力は半分以下。

後は、

「団長さん！」

あたしの呼び掛けに、驚きの表情であたしを見ていた団長は最大の好機に気付き、

「コロ丸！」

攻撃の指示を出す。

攻撃指示を出されたコロ丸がクラッシュデビルに飛び掛かる。

その攻撃を高く飛び上がり、残った腕で天井を壊して逃げるクラッシュデビル。

あたしもコロ丸もクラッシュデビルを追って飛ぶ。

その際にあたしはコロ丸に視線を向けると、コロ丸は自分の背中に視線を向けた。

踏み台になるって事？

あたしはそのコロ丸の視線をそう判断した。

実際にコロ丸の跳躍はクラッシュデビルに襲い掛かるには少し足らなかった。

PSサーバントには飛ぶ機能もあるみたいだけど、そっちよりコロ丸を足場にして勢いを付けた方が良さそうだったので、遠慮なくコロ丸の背中に乗り、止めの居合斬りを放とうとした瞬間、不意にクラッシュデビルの背後に巨大な青い人型の竜が現れた。

悪寒を感じ、反射的に居合斬りを止めるのと同時に、クラッシュデビルがその竜に丸飲みされた。

……危なかった。あのまま斬りかかってたら、一緒に飲み込まれていたタイミングだった。

クラッシュデビルを倒したって事は、味方？

そう考えならあたしは、落下するコロ丸の背中に乗ったまま、廃倉庫中に着地する。

それと同時に、何かコロ丸に体当たりしてきた。

バランスを崩す前に、コロ丸の背中から飛び降りて、団長の近くに着地。

コロ丸に体当たりした何かを確認すると、『掛け軸とかに描いてありそうな龍』だった。

何！何なの！？

竜と龍の二体の武霊の唐突な出現に、戸惑うあたしを前に、コロ丸に牙を立てようとする龍。

「不味い！亮の奴、夜衣斗も狙ってるのか！？」

「え！？」

団長の言葉に驚いて団長を見ると、団長は戦つコロ丸に視線を向けていなくて、上空でどこかを見下ろしている竜に向けられていた。

「飛矢折だつたな！」

「え？あ！はい」

「早く夜衣斗の所へ！」

「え？え！？」

「夜衣斗の武霊が奪われる！」

第二章『カウントする悪魔』 70

夜衣斗

大原亮の言葉に、俺の目は見開かれたと思う。

美羽さんのあの表情。村雲の奪われた武霊。

その二つが頭の中で繋がり……こいつがもう一人の他人から武霊を奪える能力者で、少なくとも美羽さんがあんな表情をするほどの何かを……いや、発言からすると、村雲以外の武霊も……奪ったんだろう。だから、美羽さんはあんな表情をして、こいつの家を見ていた。

そして、そのターゲットが今、俺に……

そう思った俺は、反射的に上空を見上げた。

青い人型のドラゴンと目が合う。

大原亮が俺から離れる気配を感じる。

身体を動かせるほど意志力の回復はまだしていない。

武霊を奪われた村雲が無事だったことから、死ぬ事はないんだろうが……武霊を奪われたら、きつと、いや、絶対に俺は過酷な運命を、死の運命を乗り越えられなくなる。

間接的な絶体絶命。

間接的な死の運命。

連続でこれはないだろう……

そう思うと同時に、青い人型のドラゴンが俺目掛けて急降下し始めた。

迫る巨大なあぎとに俺は……

????

ほぼ同時に、二つの出来事が起きた。

一つは上空で、

もう一つは地上で、

その二つの出来事に大原亮は驚愕し、目を見開いた。

黒樹夜衣斗を喰らおうと降下したブルースターは猛スピードで突撃してきたコウリユウによって弾き飛ばされ、大原亮は不意に現れた飛矢折巴の斬撃を辛うじて避ける。

巴の第二撃を亮は、手で受け止めた。

刃から電流が走るが、亮には通じない。

驚く巴に、亮は刀を握り、人間とは思えない力で刀ごと巴を投げようとする。

持ち上げられた瞬間、巴は刀から手を放し、投げられる事を防いで、着地するが、亮の人間とは思えない耐久力と力に、動きが止まってしまう。

その巴をとくに気にする事も無く、亮は上空を見上げる。

空ではコウリユウとブルースターが互いの身体に牙を突き立てていた。

美羽

最後のはぐれを倒した時、私はまだ連絡のない美春さんを心配して、美春さんが向かった方向を見た。

その瞬間、私の背中がぞわつとした。

ブルースターがパッと現れて何かを丸飲みしたのを目撃したからで……私は考えるより先に琴野を引っ張ってコウリユウから飛び降りる。

私の突然の行動に困惑しながら、琴野はヒノカを呼んで落下する私達を受け止めさせた。

私達が飛び降りたコウリユウは、私が命令するより早く、人が乗ってる時には出来ない急加速で私の視界から消える。

「一体何のつもりですの!？」

「ブルースターがいたの!」

怒る琴野に私はそう怒鳴り返すと、琴乃は息を飲んだ。

ブルースターが一日に奪う事が出来る武霊の数は、二体まで。

それは、春休みの武霊強奪事件で分かった事なんだけど……それ
れって、美春さんか……夜衣斗さんが狙われているって事で……

…だから、間に合って！

その強い思いに促されて、コウリュウは更に加速して、ブルースタ
ーに体当たり。そのままブルースターに噛み付いた。

「私達も行きますわよ」

「うん」

………亮お兄ちゃん………

???

(分が悪いか……………)

そう思いながら亮は巴の攻撃を避けていた。

(龍王の加護の効果もそろそろ切れるしな……………)

今の亮の身体は夜衣斗のPSサーバントの様に超人化していた。

それは朝日竜子の武霊『龍王』の能力の一つである『龍王の加護(龍王の血を飲む事により発動する能力)』によるもので、その効果は身体能力の強化のみならず、あらゆる攻撃の無効化する。その為、巴の攻撃を受けても平然としていられる。だが、その効果時間は受けるダメージによって短くなる特徴がある為、巴の攻撃を避け切れない今の状況は非常に不味かった。

(竜子から聞いた通り、女の子とは思えない強さだな)

亮にも多少の武道の心得がある。だが、それはあくまでスポーツ化した武道である為、実戦を想定した巴の攻撃を避け切れず、何度か攻撃を受けざる得なかった。もっとも、武道だけでなく、元々の身体能力・実戦経験など、勝っている部分を亮はどこにも感じてはいないのだが……………。

(……………それに長くいれば……………)

亮がそう思って空を見た時、琴野沙羅の武霊ヒノカがこちらに向かってるのが見えた。

(頭上で戦っているコウリュウがいる事を考えれば、その背中に美羽が乗っているのは間違いないだろうな……………そろそろ『反動』が起きる状況で、美羽の指示を受けるコウリュウとブルースター単独で戦わせるのは無謀か……………)

そう考えた亮は、ブルースターに指示を出し、『自分に向かって』炎のブレスを吐かせた。

炎の気配を感じた巴は反射的に後ろに飛んで避けるが、亮は避け

ない。

まだ龍王の加護の効果時間内だからだが、何より、言うべき事があつたからだ。

炎に包まれながら、亮は意志力の消費し過ぎで未だに立ち上がれない夜衣斗を見た。

「出来る事なら、早くこの町から出る事だな」

亮のその言葉に、夜衣斗が何か言いたげな気配になる。

「忘却現象なら、その現象外の理由を作ればいい。……それくらい君なら既に思い付いていただろう？」

夜衣斗

大原亮のその言葉に、俺は心の中でも反論出来ないでいた。

……確かに、それは思い付いていた。

忘却現象はあくまで武霊に関する事のみを忘却させるのなら、武霊に関する理由で星波町を出る事は出来ない。

仮にその理由で出ると、町を出た途端に町を出る理由が自分の中から消える為、結局は戻ってきてしまう可能性が高い。

だが、その理由を、武霊以外のものにすれば？

そうすれば、その理由の動機が例え武霊であったとしても、その理由は残るので、町に戻ってくる事はないはず。

そう考え……俺はその考えを否定した。

この町にから俺が出て行くのに最も簡単な理由は、学園を退学になる事だからだ。

そんな両親や周りを悲しませる様な事を、例え自分の命が掛かっている事だとは言え……そんな事を俺には、自分には、出来ないと思っていた。

……それに、そんな事で、俺に降りかかる運命から逃れられる気がしないしな……。

「出て行く気がないのなら、いずれ、君の武霊を貰いに行く」

そう言いながら、大原亮は炎の中に消えた。

「だから、それまでこの最悪の町に殺されるなよ？」

………つは、殺されてたまるかよ………

心の中で俺はそう思うと同時に炎が消え、そこに大原亮の姿はどこにもなかった。

終わったんだよな………

思わず深いため息が出て………そこで気が抜けたのか、俺の視界は唐突にブラックアウトした。

第二章『カウントする悪魔』 72

飛矢折

何だったあの男……

炎が消えた後には、あの男の姿はどこにもなく、人型の竜も霧散して消えた。

実力的にはあたしの方が勝っていた。……でも、勝てなかった。何かの力に、武霊の力に守られていた事は間違いなかっただろうけど……だから、武霊って好きになれない。

あたしがそう思った時、不意にPSサーバントから乾いた制服姿に戻った。

驚いて黒樹君を見ると、黒樹君は横になって倒れていた。

慌てて駆け寄ろうとした時、あたしがいる向い側に、琴野統合生徒会長の武霊が降り立ち……

赤井美羽が降りてきて、あたしに気付き、立ち止まってあたしを見た。

なんだかどんな表情をしているのか分からない顔をしていたけど……きつとあたしも同じ顔をしている。
そんな気がした。

美羽

ヒノカが廃倉庫の上に来たと同時に、ブルースターが霧散した。

慌てて下を見ると、亮お兄ちゃんの姿はどこにもなくて、代わりに横になって倒れている夜衣斗さんが見つかり、

「降りして琴野！早く！！」

私の切羽詰まった声に、琴野は文句も言わずにヒノカを直に地面に着地させてくれた。

ヒノカの背中から飛び降りて、急いで夜衣斗さんの所に駆け寄ろうとして……気付いた。

飛矢折巴が私を見ている事に。
私と同じ様に夜衣斗さんの所に駆け寄ろうとして、私に気付いて
立ち止まっているみたいだった。
なんだかどんな表情をしているのか分からない顔をしているけど
………きっと私も同じ顔をしている。
そんな気がした。

第二章『カウントする悪魔』 73

夜衣斗

気が付くと、俺は自分のベットの上に寝かされていて……夜になつていた。

まだ頭がぼーつとする中、未だに段ボールで埋まっている部屋を……早く片付けないとな……なんとなしに見回すと、机の上に卵焼きとおにぎりとペットボトルのお茶と手作りぽいクッキーが置いてあった。

書置きもあつたので、ベットから出ないまま背を伸ばしてそれを取って見る。

「起きたら食べてね美衣&美羽」「
つと書いてあつた。

……普通に考えれば、卵焼きとおにぎりは美衣さんで、クッキーが美羽さん製か？……ありがたく頂きます。
起き抜けだと言うのに、物凄い空腹感を覚え……まあ、あんだけ動いたんだから、無理もないか……たので、いつも以上のスピードでおにぎり、卵焼きを食べてしまった。

つで、クッキーまで手を伸ばし、口にすると……と……
……？……美味くも無く、不味くも無く……明日コメン
トを求められたらどうしよう？……

物凄く微妙なクッキーの味に頭を悩ませていると、机の上に置いてあつた携帯が震えた。

なんとなく掛けてきた相手を予想しつつ、携帯のディスプレイを見ると……予想通り、最後の敵からだつた。

……もしかして、これから何かあつて解決する度に掛けてくるつもりなんだろうか？……なんだか、某ゲームみたいだな……
などと思いつながら、携帯に出る。

「こんばんは、黒樹夜衣斗。調子はどうだ？」

……まあ、よくはないな。

溜め息一つ。

「そうか。ぎりぎりの戦いをしたんだ。無理もないだろう」
「っで、何の用だ？只単に俺の調子を聞く為に電話したんじゃないんだろ？」

「その通り、前回同様に君には今回の宿命の悪意。五月雨都雅の事を知って置いて貰いたい」

……宿命の悪意ね……

「君だって何も知らないまま終わるのは不本意だろ？」
「そりゃ……そうだが……なんだかな……」

第二章 『カウントする悪魔』 74

???

ずっと見続けるのは表と裏。

ずっと傍に居るのは仮面と素顔。

ずっと自分の中に居るのは、

本能を抑え付けるようとする理性と、

理性を従わせようとする本能。

自分の、

両親の、

知人の、

友達の、

親友の、

恋人の、

先生の、

他人の、

年下の、

年上の、

世の中の全ての、

表を、

仮面を、

理性を、

それら全てを見るたびに、

裏が、

素顔が、

本能がささやく。

せまい。

せまい。

全てがせまい！

何でこんなにせまい!?

何もかも、この世の全てが、せまい!!

どこもかしこもせまい。

だから、こう思った。

ギチギチ音を立ててしまいそうなほどせまいのに、

何で、何で、平気でいられる。

ああ!せまい!

せまい。

そして、

それから逃れる為に、

本能が命じるままに理性が考えた。

どうしたらせまくなる?

どうしたら.....

.....
ああ.....そうか。

考えた末に、静かに至った。

叩き壊せばいいんだ。

全てを。

理性がそれは至ってはいけない領域だと言っても、

本能がそれに歓喜し、もう至ってしまった為、

もう、理性は本能の奴隷でしかなかった。

だが、それでも本能を抑え付け様とする理性は、

ほんの少しの抵抗をする。

自身の理性の象徴である数を数え出す。

一、二、三、四、五、六、七.....。

第二章 『カウントする悪魔』 75

夜衣斗

「五月雨都雅が五月雨都雅となる前より前。都雅が普通の良識的な人間だった頃」

良識的な人間だった？

「ああ、その頃の都雅はまるで人の模範とでも言えるほど、良識的な人間だったようだ。勿論、その両親も」

…………… それって、もしかして、『表向きは』って事か？

「その通り。都雅も、都雅の両親も、良識的だったのは、あくまで表のみ。特に両親は、互いを嫌悪し合うほど嫌い合っていた様だが、彼らは世間体を気にして、家の外では模範的な夫婦を演じ、それを子供にも強要した」

仮面家族って事か…………… 互いを嫌悪し合っていたのなら、当然、その子供に愛情が向けられる事はないよな……………。

「そう。都雅の両親に都雅を愛する気持ちなど欠片も無く、ただ世間体を保つ為の道具としてしか見ていなかった」

道具って……………

「外では偽りの愛情を向けられ、内では真実の無情を向けられ…………… それでも、ただただ両親に見て貰いたくて、両親に愛されたくて、両親の言うがままに、理想の子供を演じ続ける」

……………

「そんな環境にいた都雅だからこそ、都雅は人の表と裏、仮面と素顔、理性と本能、それらの違いを人より感じる事が出来、それらを感じる度に、自身の中のそれらを強く感じる様になっていた。そしてその度に、理想の子供を演じるのに邪魔な本能を理性で抑え付け、抑え付ける度により他人の理性と本能を感じるようになり、再び自身の本能を抑え付ける。その繰り返しで、都雅の本能は徐々に徐々に強くなり、やがて、本能を押さえ付けていたはずの理性が本

能に支配される様になる。抑えられなくなる本能を、理性は必死に抑え付ける為に、都雅自身の理性の象徴である数数えをし始めた」
数数え？

「都雅は何もしていないと数を数える癖がある。それにより、都雅は自身の精神を本能に支配されながら維持し、多少なりとも理性的に行動出来ていた。だが、その数えこそが最も都雅が壊したいものの象徴であり、破壊の対象だった。だからこそ、クラッシュデビルの両手にあのカウンターが付き、カウンターが進む度に破壊力が倍加する能力が付与されただろう」

そう、そのカウンターなんだが……

「そんなギリギリの状態の都雅にある時、事件が起きた」

おい！………また無視かよ………

「表向きは模範的な優等生である都雅を快く思わない者達による
いじめ」

………

第二章『カウントする悪魔』 76

?????

何が切っ掛けでそうなったのか、不意に、周囲の者の本能が漏れ出し、自分に向けられるようになった。

物理的ものから、精神的なものまで、それは明らかないじめだった。

その範囲は、いじめを受けている自分ですら分からないほど広く多かった。

それ故に、そのいじめが表面化するのにそれほど時間が掛からず、表面化したいじめに、両親は世間体を気にして自分を閉じ込めた。

優しい言葉も、気遣う言葉も、蔑む言葉も、怒りの言葉も、叱責の言葉も、一切無く、定期的に食事が自分の部屋の前に用意されるだけ。

強制的な引きこもりにされた。

外に出なくても両親が外でどんな両親を演じているか、どんな筋書きを用意しているか想像出来た。

いじめを受け、それが原因で引きこもりになった自分を心配する両親。

そして、何年かして両親の努力で引きこもりを止める自分。

そんな間違いのような想像に、自分を演じなくて済む誰もいない自室の中で、本能が達した結論が頭の中でちらつく。

だから、数を数え出す。

いつもならそれで本能はギリギリで抑えられた。

だけれども、外ではいじめ、内では両親に……………

もう、本能を止める理性の僅かな抵抗は無くなっていった。

完全に本能に支配された理性が、本能が望むままに行動を起こさせる。

そして、

夜衣斗

「そのいじめは苛烈を極め、直接的なものから、間接的なもので、世間で言われているあらゆるいじめを都雅は体験したと言っていないだろう」

自分の中で、また怒りの炎が燃え出すのを感じたが、一切の方向性のない怒りだったので、俺にはどうする事も出来ず、話の続きを黙って聞く。

「そんないじめがばれないわけもなく、それなりの騒動を起こして、表面上は解決される。だが、その結果、都雅は引きこもりになった。もつとも、その引きこもりは都雅の意思によってしているものではなく、世間体を気にした両親の指示によるものだった」

世間体を気にして？

「苛烈ないじめを受けた子供が、平然といじめを受けた現場に戻るのをおかしな話だろ？」

…………… そりゃそうかもしれないが……………

「実際、その時の都雅はいじめによるダメージはそれほど感じていなかった。それ以前に、都雅は壊れかけていたからな」

……………

「それでもぎりぎり所で人間としていられた都雅だったが、両親によって引きこもりにされた事により、自身の本能とより向き合う事になり…………… 完全に壊れた。そして、都雅は、本能の命じるままに、殺し始めた」

殺し始めただと？

「そう、都雅は殺人者だよ。それも、救いようのないほどの数を殺したね」

第二章『カウントする悪魔』 77

????

まず、母親を殴り殺した。

家に一人でいる時に、背後から。

その次に、父親を殴り殺した。

母親の死体を見て驚く瞬間に。

そして、次々と殺した。

隙をついて、誰にもばれないように、次々と殺した。

全てを壊さなくては気がすまない。

そんな衝動に駆られながら、日々を過ごす時、思った。

……だが、人の身である自分には、壊す限度がある。

それを、狂った思考の中でも冷静に理解していた。

だから、壊れた人間を増やせばいい。

そう結論が出たのは、幾度目かの殺人を終えた時だった。

夜衣斗

「まず母親を、次に父親を、その次に友人を、その次に親友を、その次に恋人を……次々と殺した」

ちよつと待て！そんなに人を殺しているなら、途中で捕まるか、騒動になるかして、連続殺人なんか起こせなくなるだろう……いや、ちよつと待てよ……

「そう君の考え付いた通り、都雅は本能に支配されながら理性的に行動し、殺人を犯しながら自分が犯人だと思われない、もしくは殺人が起こった事を分からせない偽装工作を行った」

……信じられない話だな。話からすると、それをしたのは、都雅が学生の頃だろ？……子供にそんな事が出来るか？

「勿論、それほどうまい偽装工作じゃなかった。だが、いくつかの偶然が重なって、偽装工作は結果的にうまくいき、都雅が犯人だ

と分かるのに数ヶ月の時間が掛かった」

数ヶ月……………

「その数ヶ月で、都雅は自分に関わる者のほとんどを殺し、その途中でやり方を変えた」

やり方を変えた？……………そうか、傷跡を残すやり方……………

「都雅は警察が動き出す前に、姿をくらました。そして、星波町に来るまで、色々と試していた。老若男女どれがいいか？その壊し方は？そのタイミングは？どの場所？被害者は直接・間接を合わせれば、高神麗華の比じゃない」

ちよつと待て、そんだけの事件を起こしているなら、普通ニユーアとかにされないか？

「警察のメンツや誤認逮捕で事件が隠蔽・偽装されると言う話によく聞くだろ？」

……………つは……………最悪じゃないか。

「そして、婦女暴行と言う結論に都雅が至った時、都雅は星波町にやってきてしまい……………一ヶ月後」

星波町で連続婦女暴行事件が起き始める……………か。

第二章『カウントする悪魔』 78

????

自分の本能に身を任せるだけでは、本能が満足する結果にはならない。

だが、理性に身を任せるだけでは、理性がそれを否定する。だから、本能が満足する理性的な過程を考える必要があった。

そして、警察が自分を疑い出す前に、家を出て、町から町へと転々としながら、色々と試した。

男を監禁しては、徐々に拷問。

子供を誘拐しては、部分部分を親に送り。

老人を痛めつけては、それをネットに公開。

いくつも試した。

ありとあらゆる犯罪を試した。

考え付く限りの犯罪を試した。

その中で最も本能が満足し、理性が否定しなかったのが、酷く安直な婦女暴行だった。

それ自体を理性は全否定しなかったが、完全な肯定と言うわけもなく、本能が完全に満足するには時間がかかり過ぎる手段だったが、それ以外の方法だと、何も壊す事が出来ずに終わる、最悪の結果になりかねなかった。

だから、それしかなかった。

そう決めて、実際にそれを行おうとした時、偶然結構場所として選んだ町で………武霊に出会った。

歓喜した！

歓喜した！

これこそが、求めても、望んでも、ありえないと想像していた世界の下地。

ここを壊せば、真に本能が満足する。

そう理性が歓喜した。
そして、手に入れた。
クラッシュデビルを。

だが、生じたばかりのクラッシュデビルはそれほど強くなく、それでも壊すのに支障はなかったので、行動を起こした。

そして、あの女をターゲットにしてしまい……捕まってしまった。

夜衣斗

「都雅の自宅を調べた警察の資料によると、都雅の自室には隠された状態で悪魔に関する本がいくつかあり、ネットの履歴を調べると同様の所へのアクセスが集中していた様だ」

……それで、あの武霊か……だが、そんなに強くなかったんだろ？最初は

「ああ、都雅自身もその事に気付いていたのか、暴行された被害者女性は全員、武霊使いじゃない。意図的に普通の人間を狙ったと考えるのは自然だろう」

つで、運悪く飛矢折さんをターゲットに選んでしまった。

「そう、彼女の親友の武霊によりあっさりと倒され、星波警察に捕まった。これで、都雅の犯罪は止まるはずだった」

だが、止まらなかった……星波警察署の留置所つてのは、捕まった犯罪武霊使いを簡単に逃すほど緩い警備なのか？

「いや、そう言うわけではない。留置所には、武霊の具現化を抑える武霊の力が働いている。普通の人間に戻った武霊使いが一人で逃げ出せる場所ではない」

だから、あんたの運命の敵が、都雅を脱獄させたわけか……つで、何かを都雅にあの注射器を渡し、その中に入ってた何かでレベル1の武霊使いをレベル3の武霊使いにし、異常な意志力を持たせたって事か。……どうせ見ていたんだろ？……あれはいつたい何なんだ？

第二章『カウントする悪魔』 79

?????

留置所の中で、果てる事も無く数を数え続ける。

ギチギチと音を立てて暴れようとする本能を、それで何とか止める。

それと共に反芻するのは、壊し切れなかったあの女の事。

それを思う度に、本能が暴れ、数を数えるのを止められなかった。

そして、本能を抑え切るのを限界に感じは閉めていた時、あいつらが現れた。

あいつらは見た目が子供だと言うのに……化け物だと感じた。

あの女も一種の化け物だと思ったが、あいつらは別格過ぎた。

本能が今まで感じた事がない恐怖を感じる程に。

そして、ある場所に連れて行かれ、何かをされた。

何をされたのかは分からない。だが、気が付くと廃校にいて、クラッシュデビルにカウンターが進む度に破壊力の増す能力が付与されていた。

それだけではなく、「打てば膨大な意志力を得られる。ただし、打った後のどうなるかは一切の保証は出来ない」と書かれたメモと注射器があり、そのメモには次のはぐれ発生日と時間と上に書いてある数字も書かれていた。

何のつもりか知らないが、どうやってはぐれの発生を正確に予測したか分からないが、これには都雅は笑うしかなかった。

夜衣斗

「あれは、簡単に言えば、強化処理をされた武霊を武霊使いがフルに使う為の武霊使い強化薬だな」

強化処理？武霊使い強化薬？なんだそりゃ……ってか、やっぱり知ってやがるか……本当に何者なんだ。あんた。

「言っただろ？それについては何も言えない。ただ、僕は君の最後の敵だって言うんだろ……………はあ……………」

「っで、そう言う物があるって事は、武霊を非合法かつ本格的に研究している連中がいるって事か？」

「……………今は何も教えられない」
「これもかよ……………」

「迂闊にこちらが知っている情報を君に教えると、僕の事が僕の運命の敵に伝わりかねない。今、それだけは絶対に回避しなくてはいけない」

「……………つまり、俺があんたから知った事を調べるのは危険なわけか……………今の段階では……………」

「そう言う事だ」
「まあ、正直、俺自身が積極的に関わる気はないから……………それは別にいいんだが……………結局は関わって行く事になるんだろ？あんたの運命の敵と。」

「未だに予知がしにくい事から考えると、直接的ではないだろうが、しばらくはそうなる可能性が高いな」

「……………胃が痛くなってきた……………これに終わりはあるのか？」

「最後の戦いで、どちらかが勝利すれば」

「どちらかが？……………もしかして、あんたにとっても俺は最後の敵なのか？」

「ああ、そうなるな」

「……………まあ、そうだよな。勝たせてくれるなんて虫のいい想ぞ……………？……………ってか、なんで俺のが最後の敵になるんだ？」

「その時になれば分かるさ」

「……………そりゃそうかもしれないが……………どうも想像出来ないんだけど……………進んで誰かを倒そうとする俺の姿を……………」

????

対峙して分かった。

あの女を庇う男は、自分に近い存在だと。

だから、再び負けそうになった時、挑発した。

思惑以上にその挑発に男が乗ったので、命を落とし掛け、それに理性が歓喜したが、結局はあの女に邪魔された。

馬鹿な女だと思いつつ、その瞬間を逃さないで、あの注射器を使った。

それが打てば膨大な意志力が手に入るとか、それ以外の効果・副作用があるとか、考えなくてもなかったが、どうでもよかった。

本能が、それを使えと言っていたからだ。

理性も、それを使わないとまた捕まると言っていた。

だから、迷わず使った。

そして……………

ブルースターの武霊強奪能力の反作用により見させられていた都雅の記憶が、唐突に歪み、大原亮は記憶の夢から叩き起こされた。

奪った武霊が一体だけなら多少の余裕があるので、恋人のアパートに戻り、ベットで反作用を起こさせたのだが……………。

都雅が注射器を使った瞬間から、まるで精神構造が別物にでもなったかの様になり、見る事が出来なくなった。

だが、十分過ぎるほど見させられたので、亮の服は汗でぐっしょりと濡れており、ベットに脇では心配そうに竜子が亮を見ている。

（くそ！『あいつら』、あんなものまで作っていたのか……………もつと早く、もつと力を集めない……………）

そう思いつつ、心配無いと朝子に向かって亮は笑みを浮かべていた。

夜衣斗

翌朝。日曜日だが、逆鬼ごっこは行われるとの事なので、俺は学園に行く準備をした。

休んでもいいと連絡があったが……何でも日曜日の逆鬼ごっこは、鬼側が自由に開始時間を決めていいらしい。だから、それを上手く利用しない手はないし、体調も万全じゃないが、オウキの具現化に支障がある程ではない……多分……。

……さて、いつ行こうかな？

……と考えていると、不意にドアがノックされた。

……美羽さんか？……春子さんはノックなんかせずに入ってくるし……。

とりあえず身なりをチェックして……まあ、平気かな……鏡があればいいんだが……ない物はしかたがないか……。

「どうぞ」

ドアが開き、美羽さんと……何故か飛矢折さんが入って来た。

へー！？……何で？

美羽

夜衣斗さんの部屋に入ると、夜衣斗さんが私の後ろ、飛矢折巴さんを見て驚いているみたいだった。

「……うん。まあ、そうだよ。普通は驚くよね……私も春子さんの家前で会った時、物凄く驚いた。

それは、「もう送り迎えをしなくてもよくなった」って、自分で言ってたからんだけど……」

昨日、夜衣斗さんの前ではったり会ってから、意志力の使い過ぎで倒れている夜衣斗さんを家に送るまで（飛矢折巴さんが夜衣斗さんをおんぶしてくれた。正直、私も意志力の消費し過ぎだったから助かったけど……）、何でいたのか理由を聞いたんだけど……あの部長……余計な事をしてくれて……愛部長といい勝負だよ……でも、いい事をしてくれたのかも？もし、夜衣斗さんが送り迎えをしなかったら、飛矢折さんはきつと……」。

「おはよう黒樹君」

そう言っただけはほほ笑む飛矢折巴さん。

「おはよう……」

ちよつと照れた様な、困った様な感じで挨拶を返す夜衣斗さん。

「……今気付いたんだけど……飛矢折さんって……凄く美人なんじゃ……プロポーションもいいし……？何で私、そんな事を気にしたんだろう……えっと、とりあえず。」

「おはようございます。夜衣斗さん」

飛矢折

「おはようございます」

赤井さんの挨拶をちよつと照れた様な、困ったような感じで挨拶を返す黒樹君。

昨日、意志力の使い過ぎで意識を失った黒樹君を自宅まで運んだ時、これまでの事情と一緒に少し赤井さんと話したんだけど………
…その時、黒樹君を名前で呼んでいたものだから、随分親しい感じがしたんだけど……… 黒樹君の方は、まだそんなに打ち解けてないのかな？ ……？ 何でそんな事を気にしているんだろう？ ……
…何だか妙な気分……。

「昨日、意志力の使い過ぎで意識を失ったみたいでしたから、今日は起きないんじゃないかと心配したんですけど……… やっぱ夜衣斗さんは凄いですね。普通に起きてますし」

その赤井さんの言葉に、困った様な感じになる黒樹君。

…… あたしも、それに少し違和感を感じただけ……… その違和感の正体が分からなかった。

「それで、起きて直にこう言う報告をするのも何なんですけど………」

そう言っつて、少しだけあたしを見る赤井さん。

視線の意味が分からなかったけど、次の言葉で理解した。気遣いの目線だった。

「五月雨都雅が行方不明になりました」

その言葉に、あたしは驚くしかなかった。

はぐれ化をあいっつが起こす時、あいっつは、多分、剣の武霊に胸を貫かれて、絶命していた。

仮に、死んでいなかったとしても、あの場所から動けるような状態じゃなかっただろうし……… っと言っつ事は、

「美春さんの話だと、夜衣斗さんを助けに向かった時に剣の武霊と龍の武霊が現れて、美春さんを邪魔したそうですから、その武霊使いは都雅と何らかの関わりを持っていて、助けだされたか……… それとも………」

言葉を濁す赤井さん。

とてもここが日本とは思えない話をしている。

……… でも、あいっつがあの時使った注射器。あれからあいっつはと

んでもなく強くなった。

あたしは長年星波町に通っているし、親友に武霊使いもいる。それでも……そんな薬品があるなんて聞いた事がない。

昨日の帰り際に、その事を赤井さんに伝えていたけど……

「それと、飛矢折巴さんから聞いたんですけど」

……何でフルネーム？

「都雅が武霊を強化する薬を使ったそうですね……でも、そんな薬があるなんて美春さんも、知らないそうなんです」

それってつまり、架空の話でよくある地下組織みたいなのがあって、武霊に付いての研究がされているって事？……町単位で？……

……ありえるの？

そう思って黒樹君を見た時、黒樹君は不思議なほど平然としていた。

………つきりかなりの動揺をしていると思っただけ………

これも予想済みって事？………。

「それに付いては、警察と一緒に調査を始めるそうなんです、都雅の件も含めて、後日話を聞きたいそうです。………勿論、飛矢折さんも」

黒樹君が頷くのを見ていたら、不意にこっちにも言われたので、ちよつと慌てて頷いた。

慌てたあたしに、少し不思議そうな顔をして………ちよつと考えて不意に赤井さんが、

「………ところで………何で今日、飛矢折巴さんはここに來ているんですか？」

そんな事を言ってきた。

………そう言えば、昨日、赤井さんが、あたしが黒樹君を運ぶのを不安そうにしていたので、もう平気になったって言ってたっけ……

………確かに、もう、黒樹君の送り迎えはいらない………でも、逆鬼ごっこ中うちの部で匿う約束はまだ響も含めて二日ある。それに………

「結局、昨日はお礼が出来なかったから」

夜衣斗

星波学園に向かいながら、俺は昨日の最後の敵との会話を思い出していた。

「最後にこれだけは教えておこう。明日、自警団から都雅が行方不明になったと話が来ると思うが、少なくとも、もう二度と君の前に姿を現す事はないから安心してくれ」

……………それって、死んでるって事か？

「いや……………とりあえず生きてはいるだろう」

……………サンプルとしてか？

「……………」

沈黙は肯定として受け取るからな？

「……………」

あの状況から考えて、都雅に剣を突き刺してはぐれ化を起こさせた武霊使いは、都雅を脱獄させて強化した連中なんだろう？口封じ兼実験体の回収って所か？

「……………」

……………まあ、何にせよ。はぐれ化も起こしたし、あれだけの効果を発揮する薬を使ったんだ。副作用とかで死なないにしても、それに近い状態になってるんじゃないのか？

「可能性はある」

……………まあ、いいけどさ……………だが、そうになると、疑問に思う事が一つある。

「大原亮の事か？」

……………まあ、そうだが……………これは答えてくれるわけか……………

「……………大原亮は、今回の件に直接関係はない」

関係は無い？都雅の武霊を奪っておいて？

「大原亮はある目的の為に、強力な武霊を奪い回っているに過ぎない。都雅もその過程の一つだっただけの話だ」

「って事は、俺と飛矢折さんは結果的に都雅の武霊を奪う為に利用されて、俺はついでに武霊を奪われ掛けた。って事か？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「言ったでしょ？これはお礼だから、気にしない」

「……………」

そう言っただけで微笑む飛矢折さんに、俺は溜め息を吐くしかなかった。きつと飛矢折さんは、一度言い出したならよっぽどの事がない限り止めない人なんだろう。

そう思ったからだ。

第二章『カウントする悪魔』 83 (終)

????

その日の学園庭園には、日曜日だと言うのに学生達がひしめいていた。

逆鬼ごっこ参加者は勿論、その参加者の部活メンバー。そして、逆鬼ごっこを観戦しようとしている一般生徒。

勿論、只の逆鬼ごっこならこれだけの人数は集まらない。

今回の鬼は、一人だと言うのに武装風紀委員会が参加するまで捕まらない上に、色々と非常識な武霊使いだと言う事と、昨日、夜衣斗が意識を失うほど武霊を具現化させたと言う情報が、もう出回っているからだった。

いくら非常識な武霊使いだからと言っても、そこまで意志力を消費した次の日には、本調子である事はまずないだろうし、何より、今日は武装風紀委員会のトップ3が参加する。

それら二つが重なれば、捕まえるチャンスが広がるのは間違いないく、その期待と予想がこれだけの人数を集めてしまった。もっともあれだけの事があつた次の日だから、休む事を統合生徒会長が許可しそうだったのだが、それも夜衣斗本人の意思で無くなっている。

だから、この場にいる全員が思っていた。

今日で黒樹夜衣斗はどこかの部活・同好会、もしくは武風に入る事になる。

つと。

そして、ゆっくりと学園大門を潜る人影が見えた。

それも、複数の。

それを目撃した者達の頭に一斉に？マークが浮かんだ。

現れたのは、黒いマントにスーツとタイツを組み合わせた様なコスプレをした女性の集団で………誰かが気付いた。

「女性護身武術部!？」

その言葉に、学園庭園が騒然となる。

女性護身武術部の一人・部長の朝日竜子が、困惑した様子で自分達を見ている琴野沙羅に近付き、

「この服ね。黒樹夜衣斗君の武霊なんだって」

そう全員に聞える大声で言った。

場が静まり帰った。

それは、つまり……………

全員の思考が追い付く前に、他のメンバーと同じ格好をした飛矢折巴と、その巴の後ろを付いて歩く黒樹夜衣斗が現れた。

「心配しないで……………痛くないから」

そう言って、竜子は掌をかざし、そこから一瞬電流を発生させた。この場にいる参加者のほとんどが一斉に青ざめる。

ほどなくして逆鬼ごっこ開始の鐘が鳴った。

夜衣斗

学園大門の前で、飛矢折さんのお礼・阿鼻叫喚の一機当千図を見ながら、俺は溜め息を吐いた。

流石に十数人分のPSサーバントを出すのは疲れたからだ。

逆鬼ごっこは、武霊の使用が制限されていない。

つまり、それは武霊だったら、例え逆鬼ごっこ参加者が武霊越しに攻撃をする事は可能って事になる。

それに気付いた飛矢折さんは、その許可を朝日部長に取る為に電話をした所、朝日部長はそれを面白がって全部活メンバーを招集して……………武霊を千切っては投げ、武霊使いに近付いては手から出る電撃で気絶させ……………ている光景になったわけだ。

飛矢折さんは、

「黒樹君を守る番だと言っておきながら、守れなかったから」

つとか言ってたけど……………まあ、正直、昨日の疲れが抜けきっていない状況で逆鬼ごっこをどうするか悩んでいたから……………良かったと言えば良かったが……………ふっと思っただが、ここまでどの

所にも所属しない事にこだわる必要はなかったような気がしないで
も……………まあ、今さらだな。

溜め息一つ。

ちなみに、美羽さんは飛矢折さんのお礼の内容を聞いて、即逆鬼
ごっこから辞退した。

……………まあ、それは正解でしたよ美羽さん。

喜々として武霊使いに挑みかかる女性護衛武術部のメンバーを見
ながら、俺はまた溜め息を吐いた。

……………なんだか……………女性に対してトラウマになりそう……………は
あ……………

第二章

『カウントする悪魔』終了

第二章『カウントする悪魔』83(終)(後書き)

これで第二章『カウントする悪魔』は終了です。

次の章は、間章その二で、タイトルは『うさぎと魔人』です。
引き続き見て頂けると幸いです。

間章その二『うさぎと魔人』 1

飛矢折

不安で心臓の高鳴りが痛いくらい高まる。

心細くて、誰かに頼りたくって……何故か彼の事が頭に浮かんで……あたしは苦笑した。

……何で彼なのよ……。
深く深呼吸。

駄目、これはあたしがしてしまった事の、代償。

何を言われてもいい覚悟を決めくちや。

そう心に決めながら、あたしは星波駅前の喫茶店で人を待っていた。

待ち人は……親友の……あたしが傷付けてしまった黄道美幸のお母さん。

今日は黒樹君の逆鬼ごっこの最終日で、ついさっきその逆鬼ごっこが終わって、何となく黒樹君と一緒に帰ろうとした時、あたしの携帯に美幸の携帯から電話が掛かって来た。

驚いて、思わず傍にいた黒樹君を見て……あたしの反応に誰から掛って来たか分かったのか、黒樹君が頷いたので……あたしは恐る恐る携帯に出ると……電話を掛けてきたのは、美幸のお母さんで……今から会えないかって聞かれたので、あたしは困惑しながらそれを了承した。

それからあたしは黒樹君と途中まで一緒に帰って、待ち合わせ場所の喫茶店まで来て、美幸のお母さんが来るのを待っている。

喫茶店のドアが開き、人が出入りする度に、心拍数が跳ね上がった、あたしがどれだけ動揺しているか分かった。

……こんなんだったら、おかしくても黒樹君に付いて来て貰った方が良かったかな？

そんな事を思ってしまった時、美幸のお母さんが現れた。

何を言われてもいい覚悟をしていたけれど……何を言われても仕方がない事をしたけれど……

心の中でそんな事を考える弱気なあたし。

そして、美幸のお母さんは、あたしに意外な言葉を口にした。責めるわけでも。

叱るわけでも。

罵るわけでもなく。

……考えて見れば、そんな事を言うなら、もっと前に言ってるか……そもそも美幸のお母さんって、美幸と同じ様なタイプの人だったけど……そんな事を言う訳ないのに……まだまだ駄目ねあたしは……。

美幸のお母さんは、

「巴ちゃん。うちの美幸を助けて」
と。

間章その二『うさぎと魔人』2

夜衣斗

「いっよ！ハーレム男」

つと村雲に、逆鬼ごっこが終わった翌日の朝の教室で言われた。

「……まあ、確かにある意味ではハーレムだったが……」

「……殴られたいのか……」

ぼそつとそう言っつて、ちょうど俺の方に近付いてきた飛矢折さんを見た。

俺の声が聞えたのか、手と首を横に振って、

「そんな事しないから」

つと言っつ飛矢折さん。

「……殴つちまえばよかったのに……」

つと疲れてダークな思考が出てくる。

「……もしかして疲れてる？やっぱり、全員分のサーバントは辛かった？」

その飛矢折さんの問いに俺は首を横に振った。

具現化した直後は辛かったが、翌日に残るほどじゃなかった。

「勧誘が多かったとか？」

その村雲の問いにも俺は首を横に振った。

話によると逆鬼ごっこが終了すると密かに勧誘してくる者達もいるらしく……だが、どうも俺に味方してくれた女性護身武术部の面々が怖いのか、予想に反して今朝は勧誘などが一切無かった。

「……まあ、もっとも、勧誘をしたくても……」。

「押忍！失礼します！押忍！」

不意に廊下の方からそう大声が発せられた。

「……来やがった……」

教室の入り口、俺の視線の先に、見るからに暑苦しそうな男がいて、こっちに向かって歩いてくる。

きつと今の俺はげんなりした感じになっているだろう。

その俺の様子に、何があったか理解したのか、飛矢折さんと村雲が納得したかの様に頷き、二人のみならず、クラス中から同情的な視線を俺に向けてくる。

……まあ、『あいつ』は、美羽さん曰く、有名人らしいからな

……悪い意味で……

間章その二『うさぎと魔人』3

美羽

一週間ぶりに夜衣斗さんと一緒に登校する。

そんなに経っていないのに、随分一緒に登校しないない気が……
……つて、考えて見れば、二日しか一緒に登校してない様な……
あれ？……っげ！？

夜衣斗さんとの関係性の薄さにちよつと悩みながら、見えてきた
学園大橋を何となく見ると

……そこに、仁王立ちで歩道の真ん中に立っている『馬鹿』を見
付けた。

そいつは、まだ冬服の時期だつて言うのに、夏服に既になつて
るんだけど、ちつとも寒そうじゃなく、むしろ見ているだけでこつち
まで暑苦しくなりそうなむきむきな身体つきをして……もう、見
るからに筋肉馬鹿で……。

その馬鹿は誰かが横を通る度にギロリと睨んでいるので、登校中
の他の学園生が迷惑そうに見ている。

……何や……

「つてんだあ……!!」

思わずダツシュで走り出し、飛び蹴りを馬鹿に放ってしまう私。

「うお！いきなり何するんっすか。美羽先輩」

つと言つて、飛び退いて蹴りを避ける馬鹿。

ツチ！避けるな。

思わず出たダークな私。

つで、はつと気付いて、夜衣斗さんを見ると、やや呆然とした雰
囲気で私を見ていた。

……え……とりあえず、

「通行の邪魔だから、こつち来なさい」

「え？あ！っす！」

馬鹿を引つ張つて、夜衣斗さんの所まで戻る私。

「美羽先輩。こいつ誰つすか？」

何だか値踏みするような視線を夜衣斗さんに向ける馬鹿。

……………この馬鹿があんな行動をする時つて……………大抵……………

この様子だと、夜衣斗さんが『探している相手』だと、まだ気付いていないみたいだし……………誤魔化さないと

「後で紹介して上げるから……………その前に、停学とけたの？」

「つす！昨日で終わつたつす」

「……………つで、また停学になりたいわけ？」

じろつと馬鹿を睨むと、馬鹿は一步身を引いて、両手と首をブンブンと横に振つた。

「とんでもないつす。もう、先輩方に迷惑を掛ける様な事はしないつす」

つと言つておきながら、

「自分は只、すげえ武霊使いが転校してきたつて聞いたから……………」

「つち・つとも・は・ん・せ・い・し・て・な・い」

「……………つす」

私の激怒にしょげる馬鹿。

でも、きつと反省していないだろうなあ〜だつてこいつ、武霊研

究部の後輩『緑川^{みどりかわ}響^{ひびき}』は、重度のバトルマニアだもの……………その

バトル好きが災いして、校内で禁止されている武霊使い同士の私闘をして、停学を受けていたわけだけど……………停学程度で、こい

つがバトルを止めるわけがない。その証拠に、今も、今話題の武霊使いである夜衣斗さんを探して待ち伏せしていたんだから……………。

……………それにしても……………その探している相手の顔を知らないなんて

……………本当に響は馬鹿ね……………でも、今はその馬鹿でた

助かつたつて思おうとした時、不意に視角外から今この場で言つてはいけない名前が聞えた。

「黒樹夜衣斗様。おはようございます」

響の顔がしょげた顔から、獰猛で嬉しそうな顔になった。

間章その二『うさぎと魔人』4

夜衣斗

不意に視角外から挨拶をされて、その方向に視線を向けると……
知らない女子高生がいた。

……どこかで見覚えがある様な……誰だっけ？

そう思っていると、またまた女子高生の後ろから男子高生が現れ、
「これはこれは、黒樹夜衣斗様ではございませんか。おはようござ
います」

つと挨拶された。

こつちも知らないが……やっぱりどこかで見覚えがある様な……
そう思つて、首を傾げる俺をほつておいて、挨拶をしてきた二人
は顔を向きあい、にこやかな笑みを浮かべる。

「あら？おはようございます」

「ええ、おはようございます」

……にこやかに朝の挨拶をしている様に見えるが、その目は笑つ
てなく……あ！思い出した。この二人、逆鬼こつこ中にあつたメ
イド部と執事部の二人だ。

……メイド服と執事服がインパクトありすぎて、直に顔が思
い出せなかつたみたいだが……ってか、何でメイドと執事がい
がみ合つてるんだ？普通、仲が良いとは言わなくても、職業柄一緒
に働く事が多い……って、部活だから、別にいいのか？……

……まあ……どうでもいいか。

そう思つて、睨み合っている二人を無視して美羽さんの方に視線
を向けようとして、気が付いた。

美羽さんを先輩と呼ぶ暑苦しい男子高生が、妙に俺に接近してい
る事にだ。

？……なんだ？

そう思つた直後、

「押忍！」

近距離でそう大声で言われ、耳がキーンつとする。

なんだ！なんなんだ！

「自分は、星波学園高等部一年、武霊研究部所属、緑川響つす！以後よろしくお願いしますっす！」

「……………黒樹夜衣斗です」

近距離で大声で自己紹介され、分けが分からなかったが、とりあえず名乗り返す。

何だか周囲の視線を集めている気が……………あんまり目立ちたくないから、勘弁してほしいな……………あれ？そう言えば、美羽さんも一年だよな？何で先輩。

そう思って美羽さんを見ると、美羽さんはちょっと困った顔をしつつ、

「一応、部活では私の方が長いですから……………名前だけでいいって言ってるんですけどね……………」

っと説明してくれた。

……………糞真面目な奴なのか？

「っで、早速で悪いんですけど、俺と武霊勝負してくださいっす！」

……………は？

間章その二『うさぎと魔人』5

美羽

響の言葉に、私は頭を抱えた。

やっぱり反省していない。

多分、唾然としている夜衣斗さんを無視して、響は背中から自分の武霊を出した。

炎で出来た人。炎の魔人。

それが響の武霊イフリート。

……なんでも子供の頃にしていた大好きなゲームに登場する炎の魔人が基になっているらしいけど……具現化すると、響同様に暑苦しい武霊で、特に夏場なんて、最悪で……って、そんな事を考えている場合じゃない。止めないと。

「ちよつと響!？」

「いくぞイフリへ？」

私が止める前、響がイフリートを具現化させるより前、不意に夜衣斗さんの背中からオウキが具現化して、響をがっしりと捕まえた。そしてそのままぱいっと……海の方へ響を投げて……響は悲鳴を上げながら海に落ちる。

この場にいる全員が夜衣斗さんを見ると、夜衣斗さんは片手と首を横に振り、オウキを見ると霧散して消えた。

今の、オウキが勝手にした事なの?……聞いた事がないんだけど、あんな事を武霊使いの命令無くする武霊なんて……でも、まあ、攻撃じゃない……のかな?今のは……から許可なく出来たんだろうけど……まあ、でも……いっか……響だし、死にはしないでしょ。

夜衣斗

なんだか何事も無かったかの様に、

「行きましようか」

つと美羽さんが言って歩き出したので、俺は仕方がなく後に続いた。

ちらつと落ちた場所を見ると、まだ浮かんでこない。

……大丈夫なんだろうか？

つと思つて直、物凄い水柱・水蒸気・炎が学園大橋の隣で起きた。驚きと共に、それに警戒したオウキがまた勝手に具現化する。

お前！勝手に具現化するなよな。しかも連続で、クラッと来たじゃないか！

心の中で文句を言うと、オウキのすまなそうな感情が伝わって来た。

……まあ、いいんだけどさ……それにしても……なんなんだ。

水煙が収まりつつある場所を見ると……巨大な炎の魔人の頭の上に乗った緑川がいた。

「さぼはあ」

何かを言おうとして海水を吐き、むせる緑川。

……。

「流石は今超絶話題の黒樹先輩っす。もうこれは何が何でも、しよう！？ぶうっうっうっぶうっう！？？」

勝負のつと言おうとした瞬間に、オウキがウイングブースターを使って一気に緑川に近付き、また海の方へぶん投げた。

結構遠くに水柱が立ち、残された緑川の武霊はちよっとおろおろしながら、慌てて緑川が落ちた場所に飛んで行く。

……あれって、攻撃じゃないわけね。オウキの中では……結構武霊の攻撃基準って曖昧なんだろうか？それとも、武霊の個体差とか？

そんな事を思いながら、これまた何事も無かったかの様に先を歩く美羽さんを追うと……。

また、物凄い水柱・水蒸気・炎が現れ、

「いきぼはあ」

また海水を吐いてむせる緑川が現れた。

………最初なので学習しろよ………ってか、海に落ちてから何やった
ら一言言う間もなく吐く海水を飲む？………こいつ、馬鹿な俺が言
うのもなんだが、馬鹿だ。それも真正の。

などと思っていると、いつの間にか再びオウキに投げられている緑
川。

………オウキは緑川みたいなのが嫌いなのか？………なんだかな………
その時は、緑川の事をやや同情的に見ていたが、直に俺はそれを
撤回する事になる。

何故なら、学園大門に付くまで十回近く、『同じパターン』を見
させられ、教室に付いた頃には精神的に疲れ切らされたからだ。

………なんて丈夫な奴………そして、うんざり………

間章その二『うさぎと魔人』6

美羽

うんざりしている夜衣斗さんに、私はどう言っているか困ってた。一様、あれでも部活仲間だし、でも、あいつは真面目に部活しないし……あいつがうちに入ったのは、当時最強の武霊使いがうちにいたからで……その人……大原亮がいなくなってからは、ああやって、強い武霊使いを探しては、勝負を挑んで……終には停学を貰ってしまったている。

あいつを止められるのは、大原亮ともう一人いるんだけど……その人は、今は不登校で……今のところ……今回みたいに……疲れ果てさせる（今回は学園大門近くで流石に投げられ過ぎたのか、伸びてる）しか止める手段はない。

何だか今回のターゲットにされた夜衣斗さんに、同情の視線が集まってる気がする。

響は日頃の行いで、悪い意味で有名だから……。それらの事を夜衣斗さんに言っと、夜衣斗さんは物凄く疲れた感じの深い溜め息を吐いた。

……まあ、でも、おかげで、密かに夜衣斗さんを勧誘しようとしている部活・同好会のメンバーが近付けなくなったのだけは……いい事かな？……プラスマイナスマイナスって感じがしないでもないけど……だって、少しずつ武霊研究部のいい所を見せて夜衣斗さんから入りたくさせる『密かな計画』がいきなり問題児の登場で、台無しにされかかって……ふっと思ったけど、一体誰が響に夜衣斗さんの事を教えただろう？響って星波町の外から通ってるから、昨日まで停学中だった響に夜衣斗さんの事を知る事が出来るとは思えな……あ！まさか！

私は慌てて星電を取り出して電話を掛けた。

間章その二『うさぎと魔人』7

????

薄暗い部室の中で、女性の引き裂くような悲鳴が聞こえる。

それも何度も何度も、テーブルに置かれた星電から。

「あらあら？はいはあくい。今出ますよお〜」

そう言つて携帯を取る青葉愛。

どんでもないセンスの持ち主だが、その美貌はどこか令嬢を思い起こさせる為、学園内でそれなりの人気がある。

学園内で密かに付けられているランキングなどにも上位へ常に入っているほどのだが、実際によって来る男はほぼいない。いたとしても、彼女のスプラッターホラーな趣味に付いていけず、顔面蒼白で泣きながら彼女から離れて行く。

誰が掛けてきたか確認すると愛は苦笑した。

そろそろ掛かってくるころだと思つてた相手からだつたからだ。

「あらあら？おはよう美羽ちゃん」

「おはよう美羽ちゃんじゃないです！」

星電から聞こえてくる怒つた美羽の声に、愛は苦笑した。

あまりにも予想通りの反応だからだ。

「愛部長でしょ！？響に夜衣斗さんの事を教えたのは！」

「あらあら？ピンポーン。大正」

「解じゃありません！」

「あらあら？いいじゃない。どうせいつかは知る事なんだし。だつたら早い方がいいでしょ？」

「何言つてるんですか！？夜衣斗さんは星波町に来てからずっと慌ただしい日々を過ごしてるんですよ！？それがようやく終わったと思つたら……今度はあの馬鹿ですよ！？」

「あらあら？別にいいじゃない。黒樹君つて、普通の武霊使いより意志力の回復が早いんですよ？」

「回復が早いからって……」

「それに美羽ちゃん。黒樹君に色々と伏せたまま内の部のいい所だけ見せようとしてたでしょ？」

「っう！どうしてそれを」

「ふっふっふ。美羽ちゃんの考えている事なら、何でも分かるわよ。駄目よぉ。真実の隠ぺいは嘘と同じなんだからぁ。嘘は泥棒の始まり。っめ！」

「……………」

ため息が星電から聞えた。

「それに、かわいそうでしょ？」

「もういいです……………失礼します」

「うん。またね」

笑顔で通話の終わった星電を制服にしまい、そして、不意に暗い表情になった。

「そう……………かわいそうでしょ？だって……………」

間章その二『うさぎと魔人』8

飛矢折

「押忍。黒樹先輩。今度こそ武霊勝負をお願いしたいです。押忍」
教室に入つて来た緑川響君は、座っている黒樹君に近付き、頭を下げた。

「……………」
黒樹君は……物凄く困つた雰囲気を醸し出している。

「そうだよね……………黒樹君は、基本的に暴力とか好きそうな感じがしないし……………」

「よう響。停学とけたんだな」

「押忍。村雲先輩」

黒樹君しか見てなかつたのか、村雲君に声を掛けられ、ちょっと驚いた感じで挨拶する緑川君。

「ここ、村雲先輩のクラスだった……………すね」

何だか微妙な空気になる。

「特に村雲君は何ともないみたいだけど……………」

「村雲先輩とは、一度戦つてみたかつたすけど……………残念です」

……………ああ、そう言う事か……………彼つて、重度のバトルマニアだつて話だし……………」

「まったく……………お前つてやつは……………」

緑川君の言動に呆れた感じで溜め息を吐く村雲君は、黒樹君に視線を移して、

「黒樹。こいつはこう言う奴だからよ。一度、本気で相手をしてやってくれないか？」

つと言つた。

「つてか、こいつ、戦つてくれるまでしつこいぞ」

「そう言われ、ますます困つた雰囲気になる黒樹君。

ん〜ここはあたしの出番かな？」

「緑川君。とりあえず、今は帰った方がいいと思うよ」

不意にあたしが声を掛けたせいか、それともあたしの存在に気付いていなかったのか、緑川君があたしを見て、びくつと身体を震わした。

……………？

「そろそろ朝のホームルームが始まるから」

「っそっそっそうっすね。つまつままた出直してくるっす」

妙に声を震わして、逃げる様に緑川君が教室から出て行った。

……………何なの？

唖然としていると、不意に村雲君が声を殺して笑いだした。

疑問の視線を渡ってる村雲君に向けると、村雲君は、

「まあ、忘れてるのも無理ねえかもしれねえけどよ。あいつ、飛矢折の最初の犠牲者だぜ？」

……………あ！そう言えば、事件の後に最初に反射で倒したのつて、偶然鉢合わせた武霊使い同士で喧嘩している武霊使いだった……パニックを起こして、気が付いたら全員気絶させていたから、全員の顔を見てなかったけど………そう言えば、あれで喧嘩していた事が発覚して、武霊使いが何人が停学になったって聞いたけど………まさか、その一人が彼だったなんて………妙な縁もあるものね……………

「よかったじゃねえか黒樹。いい緑川避けが出来たぜ？」

……………緑川避けって………まあ、いいけど………丁度、黒樹君に相談したい事があつたし……………。

間章その二『うさぎと魔人』9

美羽

昼休み。

私はお母さんに内緒で二人分用意して貰ったお弁当を持って夜衣斗さんの教室に向かっていた。

もう夜衣斗さんに近付いても、誰にも文句は言われない。

夜衣斗さん。このお弁当を見たら驚くかな？喜んでくれるかな？ちよつと気分がいいので軽く鼻歌を歌いつつ、夜衣斗さんの教室に近付くと、ちょうど村雲先輩と一緒に教室から出てくる夜衣斗さんを見付けた。

……よかった。村雲先輩と仲良くなっただんだ夜衣斗さん。ちよつと安心。

「夜」

衣斗さん。つて声を掛けようとした時、

「待つて黒樹君。ちよつと話があるんだけど」

つて言つて呼び止める飛矢折巴さんが現れた。

とつさに隣の教室に隠れる私。

その教室の人達に妙な目で見られるけど………それどころじゃないので、無視。

「……えつと、あの、出来れば、他の人がいない所で……」

………聞き間違えかな？

「おお！マジで！マジで！？飛矢折つて黒樹見たいのが」

「違うつて！そんなんじゃないから！」

村雲先輩の言葉を遮つて、真っ赤な顔になって否定の言葉を口にする飛矢折巴さん。

「相談したい事があるの。黒樹君に」

………相談？

夜衣斗

「助けてほしいの」

「……助けてほしい？」

村雲に先に食堂に行つて貰つて、俺と飛矢折さんはそれほど人がいない屋上出入り口に来ていた。

そこで、飛矢折さんはいきなりそんな言葉を口にしたので、俺は思わず聞き返し、飛矢折さんは頷いた。

「……その……覚えてる？ 廃倉庫で、あたしが助けてくれた親友を傷付けたつて言ったのを」

……忘れるわけがない……あんな色々あつた上に、異性の涙をあんなに間近で見たのは初めての事だつたし……思い出しただけで心拍数が跳ね上がる。

俺はその事を頭の中から追いやる為に直に頷いた。

「その親友の名前は、黄道美幸つて言つて……あたしの席の後ろの子なんだけど……」

飛矢折さんが言つた席を頭に思い出す。確か、俺が転校してからずっと空席のままになっている席だつた。

「美幸は、都雅からあたしを助けてくれたんだけど……その時、あたしは錯乱して、助け起こそうとしてくれた美幸に、反射的に技を掛けてしまつて……その日以来、美幸は登校拒否になつて、何度も謝りに行つたんだけど、会つてくれなくて……きつともう、許してくれないと思つてたんだけど……昨日、美幸のお母さんから、電話があつて……黒樹君と別れた後、会つて来たんだけど……」

？そこで困つた様に口籠る飛矢折さん。

「正直、あたしには黒樹君以外頼れる武霊使いがないの」

……なるほど、武霊がらみのトラブルが起きているわけだ……つで、飛矢折さんはほとんどの武霊使いから恐れられている……だから、俺に相談が来た訳だ。

「お願い。一緒に美幸を助けて」

……本当に俺しか頼れる人がいないのか、不安そうに懇願され……
……たら、断るなんて選択肢はなくなるでしょうが……。

俺は心の中で溜め息を吐いて、頷いた。

その頷きに飛矢折さん笑顔になったので、俺は照れ臭くなり、俺は思わずそっぽを向いて頬を掻いた。

………それにしても、最近出会う女性の名前に『み』が付く人が多いな……美衣さんとか、美春さんとか……美羽さんとか……

……まあ、これは本当にただの偶然だろうし………どうでもいい事か。

飛矢折

黒樹君の協力が確約出来て、あたしはほっとした。

黒樹君の性格からして……断る事はないと思ってたけど、それでも結構緊張してたみたいで、普段なら鋭敏に感じている周りの気配がそれまで鈍っていた事に気付いて……黒樹君に向かってあたしは自分の口に人差し指を当てた。

そして、気配を消して、屋上の扉に近付き、素早く扉を開けた。

「つきや！」

っと言って赤井さんが転がり出てきた。

……耳に手を当てて、座り込んで扉に体重を預けていたから……間違いなく盗み聞きをしていたんだろうと思うけど……緊張してたからって、こんなに近くで盗み聞きしている人の気配に気付かないなんて……あたしもまだまだ未熟ね……。

「……何をしてるんですか美羽さん？」

っと言って、ちょっと躊躇しながら手を差し伸べる黒樹君。

……名前で呼ぶのね……黒樹君っぽくないけど……赤井さんが言わせているのかな？

「えっと……お母さんに、夜衣斗さんの分のお弁当を作って貰ってて……それで……」

とか言いながら、黒樹君に助け起こされる赤井さん。

「……聞いてないんですけど、そんな話」

呆れて溜め息を吐く黒樹君。

「えっと、えへへ。ちょっと驚かせよと思って……」

再び溜め息を吐いた黒樹君は、

「……まあ、でも、ちょうど良かったです。美羽さんにも協力して貰おうと思ってましたから」
っと言ったので、

思わず、

「「え!?!」」

っと驚きの声を出していて、同じ様に驚きの声を出していた赤井さんと目を合わせてしまった。

美羽

……………なんだか妙な事になったなあ……………
そう思いながら、私は食堂でお弁当を突っついていた。
……………まあ、でも、黄道先輩の事は気になってた事だし……………丁度
いいかも。

今この場には、私や夜衣斗さん、飛矢折巴さんの二人以外に、村
雲先輩と何故か愛部長もいた。

「……………なんで愛部長がここにいるんですか？」

「あらあら？武霊事件がある所には武霊研究部がありよ？」

……………答えになってない。って言うか、

「愛部長は真面目に部活する気ないでしょ？」

「あらあら？失礼ね……………でも、ピンポーン。大正解」

……………じゃあ、何でここにいますか？……………まったく……………この
人は……………。

私は怒る気も失せたので、飛矢折巴さんを見た。

やたらとでつかいお弁当を、丁寧だけど、物凄い速さで食べて…

……………もうそろそろ食べ終わりそうだった。

……………夜衣斗さんもそうだけど、この人は別種の意味で規格外の
人だなあ……………あんな綺麗な顔でそんなに食べないでほしいんだけ
ど……………。

夜衣斗

俺は武霊使いになったが、それでも俺はこの町に来てまだ一ヶ月
も経っていない。

そんな俺だけで武霊関連のトラブルが解決出来る程、俺は自分自
身に自信なんてなかった。

だからこそ、美羽さん。そして、村雲にも飛矢折さんの話を聞い

てもらおうと思つて……飛矢折さんも、それに了承してくれた。

……つで、そこに何故か、そこに青葉部長が加わつて来たので、ちよつと戸惑つたが……何でも、美羽さんや村雲が元所属していた部活は、武霊研究部つと言つて、代々学園創立時から……つまり、武霊発生当時から、武霊の謎を追い続けている部活らしく……今回の話にはちよつと良かったので、俺は何も言わなかった。

……まあ、結局十年間の調べで何も分かつていないのが現状からすると……それほど心強い助っ人つて感じはしなくもないが……食事を終え、食堂でそのまま詳しい事情を聴く事になった。

……それにしても、女性とは思えない食分量だったな……武術をやつてるからつてレベルじゃないぞ。あの量は……まあ、今はどうでもいい話だが……。

「美幸のお母さんが言うには、今、美幸は中途半端なはぐれ化を起こしているらしいの」

飛矢折さんの言葉に、俺と飛矢折さん以外の全員が顔を見合わせる。

「中途半端なはぐれ化……ですか？……それつて、具体的な話は聞いてます？」

美羽さんの問い掛けに、飛矢折さんは頷いた。

「はぐれ化つて要は武霊使いの身体から離れて、その具現化を維持している意志力が無くなるまで暴れまわる事でしょ？」

「まあ、その認識で間違いはねえな」

つと頷く村雲。

「今の美幸の武霊は、美幸が起きてから眠りにつくまで、ずっと具現化してて、美幸に近付こうとするものを無差別に攻撃するらしいの」

……？それつて、武霊の防御反応が過剰に働いているだけじゃないのか？……ん？つて、普通の武霊は武霊使いの命令無しに攻撃出来ないんだっけ？

「具現化のコントロールや、美幸の命令を全く受け付けない上に、

攻撃命令も無く攻撃行動を取るって事？……………あらあら？聞いた事
ないわね。そんな話」

やや真剣な面持ちで、そうつぶやく青葉部長に視線が集まり、

「確かにそれは、はぐれ化に近いわね。差し詰め、『半はぐれ化』
って事かしら？」

つと美幸さんの身に起こっている事に対して命名した。

半はぐれ化……………ね。

「……………それにしても、ここ最近、今までなかった事が色々起き
るわね。町に来て初日で武霊使いになる人が現れたり」

俺の事だな。

「はぐれの発生サイクルの短縮化が起こり」

俺が町に来て直に起こったはぐれの発生的事だな。

「何年も捕まえる事が出来なかった犯罪武霊使いを捕まえる事が
出来たり」

高神姉妹の事か？

「脱走不可能とされた武霊封じが破られ」

都雅の事だよな？

「レベル1からいきなりレベル3になる薬品の存在が確認され」

？……………なんで知ってたんだ？

「単独で初の逆鬼ごっこ成功者が現れたり」

……………単独で初？……………マジで！？

「そして、今度は……………半はぐれ化……………ね」

不意に、俺の方へ視線を向けて微笑む青葉部長。

……………思わずドキツとしたが、次の言葉に俺は顔を引きつらせた。

「次はどんな事をしてくれるのかしら？」

……………どんな事って言われてもな……………

間章その二『うさぎと魔人』 12

飛矢折

「……みんな、妙に黒樹君に期待を寄せている気がする……
確かに、黒樹君の武霊は普通の武霊とは全然違ってみただけ……
でも、彼自身は普通の男の子だよ？」

「そんな思いを抱いたけど、口に出せなかった。」

「……現状で出来る事は限られているでしょう」

「それまで黙っていた黒樹君が、不意に口を開いたからだ。」

「……半はぐれ化について何も分かっていない今出来る事は、状況でその場で対応する事。ですから……飛矢折さん」

「また不意にあたしを見たので、あたしはちよつとびっくりした。」

「うん。なに？」

「何で黄道さんのお母さんは、なんで自警団に相談しなかったんですか？」

「……美幸が嫌がったんだって……その……半はぐれ化を起している事が知られたら……あたしへの非難が声が強くなるって」

「……そう言う事は、もっと早くに言ってくれませんか？」

「うん？」

「……まあ、ここにいるメンバーが話を広めるとは思いませんが……」

「そうぼそつと言う黒樹君の声に、この場にいる黒樹君以外が顔を
見合わせた。」

「……黒樹君も、美幸もそうだけど……あたしの事を心配し過ぎ
……例え、非難の音が強くなっても……あたしは平気なのに……
……でも、その心配は、嬉しいかな……あたしの周りに、あたしの
事を心配してくれる人ってあんまりいないから……。」

「……何にせよ。行動するなら早い方がいいでしょう。そんな
事を言っていた黄道さんの言葉を無視して、お母さんが飛矢折さん

に助けを求めたって事は、何らかの限界を迎えつつあるって事でしようから……………飛矢折さん。今日の放課後は大丈夫ですか？」

「え？……………あ、うん。大丈夫だけど……………」

ちらつと他の人達を見ると、

「俺はわりいが無理だな」

つと村雲君。

「私は平気ですよ」

つと赤井さん。

「あらあら？私は無理かな？」

つと妙な、何か企んでそうな笑みを浮かべる青葉さん。

……………なんか、嫌な予感がしないでも……………。

「……………それにしても」

不意に村雲君が面白そうな笑みを浮かべて、黒樹君を見た。

「普通に喋れるじゃん。黒樹」

そう言われた黒樹君は、やや困った雰囲気になった。

美羽

放課後、私と飛矢折巴さんは部活に行かず、夜衣斗さんを連れて黄道先輩の家に向かう事になった。

私の家は星波町で海寄りにあつて、丁度山寄り、線路を越えた先に黄道先輩の家はある。

だから、歩きで向かうとそれなりの時間が掛かって………なんだから微妙な雰囲気………。

夜衣斗さんは基本的に必要な事以外喋らないし、飛矢折巴さんは………話す事なんてない。

無言………。

うーん………この雰囲気やだな………。

何か喋る話題ないかな？

そう思案していた時、不意に飛矢折巴さんが夜衣斗さんにすつと近づいた。

何？何なの！？

驚いて、反射的に私も夜衣斗さんに近付いた時、

「黒樹君、気付いている？後を付けられているのに」

え！？

飛矢折

その気配は、学園大橋を越えた辺りからしていた。

おっかなびつくりの後を付けてくる気配に、あたしは覚えがあつた。

だから試しに、気配のする方向に振り向く振りをしてみると………その気配は少しの間だけこっちを追ってくるのを止めるのを感じた。

あたしに恐怖を感じて、あたし達の後を付ける理由がある人なん

て、一人しかない。

だから、あたしはそつと黒樹君に近付いて、後を付けられている事を教えた。

その際に、何を思ったのか、赤井さんも一緒に近付いて来たんだけど……あまり深く考えない。

「多分、緑川君よ……どうする？」

あたしの問いに、黒樹君は少し考えて、首を横に振った。

「……………そのまま後を付けさせましょう」
え？

その答えにあたしは思わず隣の赤井さんと顔を見合わせてしまった。

間章その二『うさぎと魔人』 14

????

「話が違っじゃないっすか部長」

緑川響の非難の声に、星電越しに青葉愛の笑い声が聞えて来た。

「あらあら？私は今日の黒樹君は放課後直に学園を出る予定よって教えただけでしょ？」

「そっそっすけど……あの人がいるなんて」

そっつと隠れている堀から、後を付けている三人の内の一、飛矢折巴の背中を見た。

その巴が不意に振り返ろうとしたので、思わず顔を引っ込め、思わず後を付けるのを止めてしまっ。

「あらあら？じゃ、がんばってね」

「え？あ！部長」

一歩的に通話を切られ、途方に暮れる響は、ちよっと考えて、再び後をつけ出した。

夜衣斗

緑川が俺の後を付けてくる可能性は考えていなかったわけじゃない。

むしろ、かなりの確率で後を付けてくるだろうっと思っ……

…ある思惑から、別にそれでもいいか……っと思っ……

もしかしたら、必要になる……かもっ。

………それにしても………武霊研究部ね………そんな『部活』があるとは、しかも、それが美羽さんの所属している部活だとは思わなかつたな………。

少々興味はなくてもないが………今の俺の状況で、武霊に関する事に近付くってのも危険な気がするよな………まあ、それを言っちゃあ、今やっっている事もしない方がいいんだが………今更止めるって

のも……な……

今回の事……あいつからの連絡がないって事は……宿命の悪意は関係ないってことなんだろうか？……まあ、でも、予知が利き難くなってるって話だしな……どうなんだろう？……あんまりこの二人が関わっている事に宿命の悪意が関わってて欲しくないな……。

????

暗く閉ざされた部屋の中で、黄道美幸は目を覚ました。

ぼんやりとする思考の中で、美幸は、

（起きちゃった）

っと思っていた。

半回転してベットの横を見ると、そこには既に美幸の武霊が具現化しており、鼻をひくひくさせている。

美幸の武霊は、人と兎を組み合わせた様な姿をしている。

その大本になった記憶は、海外に単身赴任ですっと会っていない父親と、その父親に昔買ってくれた兎のゆきちゃんが基になっている。その為、美幸は自身の武霊をゆきちゃんと名付けた。

ゆきちゃんは、基本的に武霊使いに従順な武霊の中でも更に従順で、常に美幸だけじゃなく、他の人間の心配をする様な優しい武霊だった。

だが、今は違う。

いや、基本的な所は変わっていない。

ただ、

不意に机の上に置いてあった携帯が鳴った。

あ！っ和美幸が思うと同時に、ゆきちゃんが拳を振り下ろした。

凄まじい音と共に、机ごと携帯が破壊されてしまう。

「ゆきちゃん……………」

鼻息を荒く、何度も何度も壊れた携帯に拳を叩き付けるゆきちゃんに、美幸はどうする事も出来なかった。

過剰なまでの武霊防衛反応。

少しの物音だけでも過剰に反応し、その発生源を破壊してしまう。

その対象は美幸の母親までにも及んでいる為、もう何日も美幸は母親の顔を見ていなかった。

本来の武霊なら武霊使いの命令無しに破壊行動を取る事はないが、今のゆきちゃんはその何を何故か出来ていて、主であるはずの美幸の命令さえ聞かない状態になっていた。

(……お腹空いた……)

そう思った美幸は壁掛け時計を見て時間を確認。

時間は夕方。

そろそろ母親がパートから帰ってくるまでには時間がある。

そう思って美幸はぼろぼろの自室から出た。

当然ゆきちゃんも付いて来ようとするので、美幸は意識を集中して、具現化レベルをレベル0・5に調整し、普通の兎のサイズにする。

今、唯一制御出来るのはこれぐらいしかなく、それも、ゆきちゃんが攻撃の意思を示せばあっさりコントロールから外れ、レベル1の具現化状態になってしまう。

自室のある二階から一階に降り、台所に行くと、テーブルの上におにぎりとおかずが用意されていたので、それを食べた。

食事はこうやって母親がいない時に、母親が用意してくれた物を食べてはいたが、寂しい食事に美幸はつい暗い表情になってしまう。その表情の変化に、ゆきちゃんが過剰に反応して、レベル1に戻り、用意された食事をテーブルごと破壊してしまった。

今のゆきちゃんとは、通常の武霊と武霊使いの間にあるはずの精神感応が全くなくなっており、互いの心の動きが全く分からず、誤解で度々家の中が壊されている。

(どうすればいいんだろう?……いつまでゆきちゃんはこままなんだろう?)

そう自問しても答えが出るわけも無く。

それでも、他人に答えを求めるわけにはいかなかった。

自警団に相談すれば、この事が公になり、多分原因であろう親友の飛矢折巴に迷惑が掛かる。

それに、

(今の状態で、もし、ゆきちゃんが倒されちゃったら……………)

はぐれと同じ様に消滅してしまうじゃないか？

そんな不安もあったから、誰にも相談出来ずにいた。

ゆきちゃんは、昔飼っていた兎のゆきちゃんじゃない。

だが、それでも、武霊のゆきちゃんは、美幸にとつて兎のゆきちゃんと同じ、生まれ変わりの様なものと美幸は考えていた。

だからこそ、こんな状態になったゆきちゃんを見捨てずにいるのだが……………

(このままじゃ……………私は……………)

ゆきちゃんが暴れるのを防ぐ為に、感情を表に出さず、心の中で美幸は嘆くしかない。

心も体も、限界が迫りつつあるのを美幸は感じていた。

間章その二『うさぎと魔人』 16

飛矢折

……美幸の家に来るのって、一週間ぶりかな？

……随分来ていない気がするけど……やっぱり……少し不安。

美幸のお母さんは、美幸があたしの事を嫌ってないって言うけど……あたしはあれだけの事をしている。それが本当に美幸の本心なのか……やっぱり……不安だった。

あたし達はまず、美幸のお母さんと家の近くで待ち合わせして、家に向かった。

「今の美幸の武霊は、ちょっとした物音でも暴れるから、音をたてないようにしてね」

つと美幸のお母さんが言ったので、あたし達はゆっくり、音を発てない様に家の中に入る。

玄関から美幸の部屋に向かう途中、廊下から台所が見えたんだけど……そこにぐちゃぐちゃに壊されたテーブルがあって、美幸のお母さんが嘆息した。

話によると、いつもどこかがちょっとした事で壊されているとか……次の日には源さんと言う変わったはぐれが直してくれるらしいけど……とても、あの美幸の武霊がした事とは思えない。だって、美幸の武霊ゆきちゃんは、とても優しい武霊だったから……

二階の美幸の部屋に辿り着いた時、外で、激しい爆音が起きる。それと同時に、美幸の部屋からガラスが割れる音がしたので、「黒樹君の迷惑通りに事が進んだ」事が分かった。

この場に『いない』黒樹君の事を心配しながら、あたしは美幸の部屋の扉をノックした。

「……美幸……あたし。巴」

間章その二『うさぎと魔人』 17

夜衣斗

黄道さんの家の近くにある空き地で、俺と緑川は対面していた。

……いや、対峙か？

「マジっすか！？本当にいいんすか！？」

そう言っつて喜ぶ緑川に、俺は頷いた。

「よっしやああああ！！！」

物凄い大声……近所迷惑を考えてほしいもんだ

……はあ……これから『自ら進んで武霊バトル』をしなくちゃ

いけないのか……ちよつとワクワクしないわけでもないが……

……そんな自分に気が重い。

黄道さんのお母さんと合流し、より詳しい話を聞いた俺は、一つの作戦を提案した。

飛矢折さん達の話の話を統合して考えた黄道美幸さんが今、『陥っている状況』から考えて提案した作戦なのだが……こう、なんで美羽さんも飛矢折さんも素直に従ってくれるかな？……俺の導き出した答えが、合っているとは言えないんだぜ……はあ……まあ、こっとなつた以上、やり遂げるだけだが……

作戦はこうだ。

まず、俺が後を付いてきた緑川と黄道さんの家の近くで武霊バトルし、黄道さんの武霊……ゆきちちゃんだっけ？……を誘き出し、黄道さんから引き離す。

俺と緑川で黄道さんの武霊を引き付けている間に、飛矢折さん達が黄道さんに会う。

たったそれだけの作戦。

……だが、俺の考えが正しければ、多分、『それだけで』この問題は解決する。

……はず……ああ、不安で、気が重い。頼むから……考え
た通りになりますように……はあ……

夜衣斗

「行くつすよ黒樹先輩！イフリート！」
自身の武霊を背中から具現化させる緑川。

「……分かつてると思うが、戦わせる場所は上空で、町に被害が
「勿論つす！よろしくお願ひしますつす！！」

……この野郎……人のセリフを遮りやがって……そんな
戦いたいんかい………つてか、分かつてんのかね？こいつ……町
中で武霊バトルするって事は、自警団に通報される確率が高いって
事を………まあ、今回は、自警団に事前に連絡を入れているから……

……
そう思っていると、空地に何かが着地する音がした。

着地音のした方向を見ると、団長がレベル1の具現化中のコロ丸
から飛び降りる所だった。

「相変わらず気の早い子ね。響君は」

具現化したイフリートを見た団長がそう言って微笑んだ。

口調が女ぽくなっているのと、ワンピースを着ているのからして
……オフだったんだろうが………つてか、対応してくれた人、団長
じゃなかったはずだけど………

………何でも、星波町で武霊による死闘はいくつかの条件を満たせ
ば、ある程度許可されているらしい。

その条件とは、

一、自警団の許可を得る事。

二、自警団の立ち会いの下に行われる事。

三、町に被害を出さない場所で行う事。

四、町に被害を出す様な攻撃は行わない。もしくは、出さない様
に攻撃する事

五、武霊使いへの直接攻撃は禁止。

六、以上の五つの条件を下に、町内放送で私闘の開始を宣言されてから戦いを始める。

の六つだとか。

多分、私闘を全面的に禁止すると、緑川みたいなのが、闇で戦う事が多いんだろう……自分に寄生した武霊の実力を試してみたいとか思う奴は……まあ、いない何って言うのは逆に不自然だよな……っで、条件付きの私闘を許したっつと。

それを美羽さんから聞いた俺は、町で武霊バトルをする為に、自警団に許可を取って……何故か立会人に団長が来た。

その疑問が顔に出ていたのか、

「夜衣斗君が武霊バトルをするって聞いてね。私、夜衣斗君の武霊が戦う姿を見ていないから、代わって貰ったの」

……っと言われた。

興味本位ですか……？

なんとなしに緑川を見ると、緑川はイフリートと一緒に固まっていた。

……どうも、飛矢折さんと同じ反応だな……って事は、団長と戦って、手酷く負けたんだろう……まあ、どうでもいいか……

「……団長。お願いします」

「はいはい。ちよつと待ってね……」

団長は星電を取り出し、自警団本部へメールを送った。

それにはつとした緑川は、イフリートを上空に飛ばし、俺は、

「オウキ」

オウキを具現化させた。

「セレクト。ウイングブースター。上空へ。それと同時に、セレクト。シールドサーバント十機。広範囲に力場を張り、町に僅かな被害をない様に防御」

俺の命令をオウキは忠実にこなし、イフリートと共に上空に上がり、シールドサーバントを出して、町を防御。

「あらあら。そんな事しなくてもよかったのに」

つと言つ団長の声を聞いたが、とりあえず無視。……まあ、性
分みたいなものだし、それに、防御だけが目的じゃない

「うつす！うつす！行くうつす！」

つな！まだ放送が

「エクスプロージョン！」

そう緑川が叫ぶと同時に、上空を飛んでいるイフリートの身体が
爆発した！？

夜衣斗

突如として起ったイフリートの爆発に吹き飛ばされるオウキ。
ウイングブースターをフルに使って姿勢を安定させたオウキは、
不意に地面に視線を向けた。

来たか！

俺はすぐさまオウキが向けた視線の先のシールドサーバントのシ
ールドを一時解除させる。

それとほぼ同時に、白い何かが下から現れ、オウキを蹴り飛ばし、
再び張ったシールドの上に着地した。

「あゝなるほど、ゆきちゃんのために用意したのね」

「黄道先輩の武霊！なんで!？」

感心する団長に、驚く緑川。

そのすぐ後に、町内放送が始まった。

「これより、自警団団長幸野美春立ち会いの、武霊バトルを始め
ます。対戦相手は、黒樹夜衣斗の武霊オウキ。緑川響の武霊イフリ
ート。横道美幸の武霊ゆきちゃんです」

「え！え？マジっすか!？」

更に驚いて俺を見る緑川を無視して、俺はオウキに二体から集中
攻撃を受ける様に逃げ回る様に命令した。

……………さつて、後は……………

美羽

飛矢折巴さんの呼び掛けに、黄道先輩……………実はちょっと苦手な
んだよね……………は、応えなかった。

「巴……………」

ノックした手のまま、飛矢折巴さんは固まっていた。
外では爆音が続いている。

……あんまりもたもたしていられないんと思うけど……い
くら夜衣斗さんだつて、『襲い掛かってくる武霊を守りながら、響
のイフリートと戦うのは難しい』……っと思う。

迂闊に黄道先輩の武霊を倒したら、武霊が消滅するって可能性が
あるなら、きつと夜衣斗さんは黄道先輩の武霊を絶対に倒さない。

だから、急がないと、夜衣斗さんはどんどん無理をし始める。

夜衣斗さんって結構無茶する人みたいだから……度々意識を失
うような武霊の使い方ってあんまり良くないって言うし……。

私は少し考えて、

「コウリュウ」

私と同じぐらいの大きさでコウリュウを具現化させた。

驚く飛矢折巴さんと黄道先輩のお母さんを無視して、

「その扉を壊して」

つと命令した。

二人が止める言葉を言う前に、コウリュウは扉をめくる様に壊す。
扉の無くなつたポロポロの部屋のベットの所で、毛布を頭から被
つて膝を抱えて呆然と私を見ている黄道先輩に、私は笑顔をコウリ
ユウ越しに向けた。

「おひさしぶりです黄道先輩」

間章その二『うさぎと魔人』 20

飛矢折

……………いくら武霊で壊した物は後で直るからって……………無茶苦茶やる子だな……………赤井さんって。

そう思いながら、あたしはコウリュウの具現化を解いて道を開けてくれた美幸の部屋に入った。

「美幸……………」

「……………巴……………」

泣きそうな顔をしてあたしを見る美幸。

ずっとずっと謝りたかった。

「あのね美幸」

謝る為に一步近づこうとした時、美幸の身体が僅かに硬直したのが分かった。

本人も気付かないような……………僅かな硬直だったけど……………やっぱり、黒樹君の言ったとおりだった。

黒樹君は、「黄道さんが口では嫌ってない、気にしてはいないって言っただけ……………一度芽生えた恐怖はなかなか消えないものです……………飛矢折さんだって経験があるでしょ……………そして、それを克服する大変さ、難しさも……………だから……………多分ですが、今の黄道さんは、自分を騙しているんですよ。飛矢折さんの対して恐怖を感じていないって……………飛矢折さんの為に……………自分の為に……………でも、それは……………結局……………逃げていただけ……………逃げるのも、一つの手でしょうが……………今回の場合は、それが最良じゃない。だからこそ、その原因である飛矢折さんが黄道さんに会えば……………きっとこの問題は解決します」

って言っただけ……………本当に……………解決するのかな……………ううん。解決しなくても、少なくとも、これだけは言っておかないと、

「ごめんね美幸」

あたしの謝罪の言葉に、それまで伏せがちにあたしを見ていた美幸が、はっとあたしを見た。

「あたしが未熟だったばかりに……………」

「違う！違うよ巴……………あれは私がいけないの……………知ってたのに、分かったなのに、あんな状態の巴に不用意に近づいた私が……………」

ぼろぼろと泣き出す美幸に、あたしの視界が歪んだ。

……………どうも最近のあたしは涙腺が緩んでる気がしないでも……………

…

間章その二『うさぎと魔人』 21

夜衣斗

急にゆきちゃんのお母さんの攻撃が止まった。

その視線は黄道さんの家に向けられており……黄道さんのお母さんは黄道さんとゆきちゃんとの繋がりが無くなっているって言うてたが、この反応からすると、少なくとも僅かな繋がりはあるんだろ。

って事は、上手く対面出来たって事か……っと！オウキ！

不意にゆきちゃんが足下のシールドを破壊しようと、連続蹴りを放ち始めたので、シールドの強度を上げさせる。

これで暫くは持つかな？……それにしても……。

俺は視線を周りに向けた。

……めっさギャラリーがいる……

どうも近所の方が放送を聞いて集まって来たらしく……お茶とお菓子まで持参して武霊達の戦いを観戦していた。

そのギャラリーは、イフリートの攻撃（火球や広範囲爆発など）をオウキが避ける度に歓声上がる

その事に、俺は深い溜め息を付くしかない。

……そろそろ攻撃に転じないと不自然かな？……ゆきちゃんの不自然な行動から注意も逸らした方がいいだろうしな……

そう思った俺は、イフリートの特徴を考えてみる。

まず人型・炎属性・だから炎……熱系攻撃は……多分効かないだろうな……って、空を飛べて、全身から発する事が出来る炎でその速度を上げる事が出来る。全身から出る炎はその性質を、色々と変えられ、火球・爆発などに出来る。

……まあ、クラッシュデビルより遥かに相手しやすい。

ちらっと視線を緑川に向ける。

「行けー」だの、「そこだああああ」とか叫んでた。

………しつこい相手は……一度完膚なきまでに叩き潰した方がいって言うよな……。

俺のその考えが外にでも漏れたのか、緑川がビクツとした。

???

緑川響は唐突に物凄く嫌な予感を感じた。

何となくその予感がした方向に視線を向けると、黒樹夜衣斗がこっちに顔を向けている。

武霊バトルの最中だと言うのに、あまりの余裕さに響はカチンときて、嫌な予感の原因を考えなかった。

(余裕かましているのも今の内っすよ)

「行くぞイフリート!」

気合いを入れる為に、響は大声を出し、イフリートを『レベル2』にさせた。

間章その二『うさぎと魔人』 22

夜衣斗

………うわ………馬鹿だこいつ。

レベル2になり巨大化したイフリートを見て、俺は思わずそう思った。

確かにレベル2は身体が巨大になった分、その攻撃力は上がるし、防御力は上がる。

だが、その反面、その行動は巨大になった分見切り易くなっているし、攻撃も当たり易くなっている。

例えば、戦う相手が遅い相手・レベル1だったらいいが、素早い相手・レベル1に対して有効とは思えない。

今のイフリートのレベル2化は、不利になる事さえあれば、有利になる事はないと思うんだがな………あ！そっか。

俺がある事に気付いた時、

「イフリート！エクスペロージョン！」

っと再び全身爆発を緑川がイフリートに命じた。

イフリートの巨体が爆発する寸前、俺はシールドサーバントに命令して、フォーメーション・キューブゲージにし、イフリートを取り囲む。同時にシールドの強度を限界まで上げる。

爆発が起こり、爆炎の巨大なキューブが出来た。

流石に上部まではシールドの展開が完全に間に合わず、シールドサーバントの一機が吹き飛ばされ、爆炎のキューブが柱になる。

今まで以上の歓声上がり、俺を見る緑川。

俺は緑川の視線を無視して、

「セレクト。SP冷凍弾。対戦車ライフル」

っと命令した。

その命令に、オウキの右脇の簡易格納庫から大経口ライフルが飛び出し、オウキはイフリートに向かって構える。

そして、撃つ。

炎が収まり、現れたイフリートから狙いを『外して』。
放たれた弾丸には、SP機能シールドトレイションを加えている。

これは、シールドサーバントの力場を貫通させる力場を弾丸に生じさせる機能。

他の武装にも付けることが出来る機能だが、余計な部分が付く為、武装そのままの威力が軽減する事が多い為、オウキの基になった王継戦機でもあまり使われていないが……よくよく考えて見れば、結構使えるな……。

放たれた弾丸は、イフリートの肩をかすり、かすった部分を少しだけ凍らせた。

「……まずは一回」

俺は緑川に向ってそう人差し指を上げて見せた。

それを見た緑川の顔が引きつる。

さて次は……

と思った時、普通の携帯電話が一回震えるのを俺は感じ、直に着信相手を確認した。

飛矢折さんからだった。

……どうやら上手く行ったみたいだ……

俺はほっと胸をなでおろし、ゆきちゃんの行く手を遮っていたシールドを『解除した』。

間章その二『うさぎと魔人』 23

飛矢折

抱き付き癖のあるいつもの美幸なら、きつとあたしに抱き付いて
いる。

でも、美幸は抱き付いてこない。

それは、美幸が心の奥底であたしに対して恐怖を覚えているから
で……………その事に美幸は気付いていなかった。

だけど、今、自分の行動を見て、美幸は……………

「……………あ！」

小さな声を上げ、僅かに震えている自分の手を見た。

黒樹君の予想だと、美幸が自分から自分の恐怖に気付く事が出来
れば……………

美幸は震える手を見詰め、あたしを見て、ゆっくりと手を近付け
……………怯えた様に手を引っ込めて……………また近付けて、今度は私の頬に
ゆっくりと手を触れた。

その手はまだ僅かに震えている。

それでも、美幸はゆっくりとあたしに抱き付いた。

「……………そっか……………ゆきちゃんも暴れているのって……………ゆきち
やんが、はぐれ化を起こし掛けているだけのせいじゃなかったんだ
ね……………私が……………怖がってたんだ……………だから……………でも、
どうしよう……………分かってても、恐怖に気付いても……………私……………ど
うしたら……………」

そうつぶやく美幸にあたしはゆっくり、優しく後頭部を撫でた。

「美幸が学校に来ない間ね」

「……………うん……………」

「転校生が来たんだ。黒樹夜衣斗君って言う男の子なんだけど」

「うん」

「彼が言うにはね。恐怖は誰もが持っているもので、その恐怖の

対応も人とそれぞれで……上手く対応すればその恐怖の質は変わる
って」

「う……ん？」

「だから、どうする事も出来ないんだったら、どうもしなくても
いいんだって」

「え！？だって……それだと」

「大丈夫。その彼が言うにはね。美幸とゆきちゃんはまだちゃん
と繋がっているんだって」

「繋がってる……そんなはずは」

「美幸。必死に止めようとした？」

「え！？」

「心の底からゆきちゃんを止めようとした？」

「……して……なかつたかも……」

「大丈夫。美幸がゆきちゃんを好きな様に、ゆきちゃんも美幸が
好きなはずだから……美幸の声はきつと届くよ」

「……うん……」

美春の頷きにあたしは、頷き返し、携帯電話を取り出して黒樹君
の携帯に掛けて直に切った。

これで、黒樹君はゆきちゃんの足止めを止める。

後は……

家の外で何かが着地する音がする。

壊れた窓から見ると、ゆきちゃんがいて、こっちに向かって飛び
上がって来た。

部屋に入って来たゆきちゃんの視線はあたしに向けられている。

威嚇の声を上げるゆきちゃんに、あたしはゆっくり美幸から離れ
た。

……もし、これで美幸がゆきちゃんを止められなかったら……

あたしはきつとゆきちゃんに殴り殺される。

……でも、あたしは、美幸と……そして、黒樹君を……信じる。

美羽

飛矢折巴さんが黄道先輩から離れた。

夜衣斗さん曰く、「黄道さんの武霊が黄道さんの命令を聞かないのは、黄道さんとその武霊の間にずれが生じていて、言葉が直接通じなくなっている……人と動物の関係に近くなっている可能性が考えられます……もしそれが合っているなら、人が飼っている動物を賤げる様にすれば……もしくは……」

要するに、

飛矢折巴さんに殴り掛かる黄道先輩の武霊。

反射的に具現化して止めようとするコウリユウを止める私の前で、

「ゆきちゃん駄目！」

自身の武霊の前に飛び出す黄道先輩。

振り下ろされた拳が……黄道先輩の顔の前でピタリと止まった。

「もういいんだよ……もう……私は大丈夫だから……」

そう言う黄道先輩の顔を、黄道先輩の武霊はじゅつと見詰め……

「……うん……まだ怖いよ……でも、大丈夫……大丈夫よ……」

……多分、黄道先輩は自分の武霊に微笑みかけたんだと思う。

黄道先輩の武霊……ゆきちゃんは、ちらつと飛矢折巴さんと私を見て……美幸先輩に頬擦り寄せ、ポンと音を発てて腕で抱えられるぐらいの大きさになった。

そして、美幸先輩の胸元に飛び込んで、抱かれる。

「……こんな簡単な事だったんだね……私……どうしたらいいかわかんなくって……きつとそれが私をどんどん駄目にしてちゃってたんだね」

美幸先輩はゆきちゃんを抱えたまま、振り返って私達に泣きそうだけど嬉しそうな微笑みを見せた。

「……ありがと……巴。美羽ちゃん」

間章その二『うさぎと魔人』 25

夜衣斗

飛矢折さんからメールが来た。

そのメールには、「こつちは無事に終わったよ」と書かれていたので、俺はほっと胸をなでおろした。

つで、緑川を見ると、肩で息をしながら力無く「行けー」だの「そこだー」など言っている。

……………とつと諦めれくないかな……………。

緑川のアマリのしつこさに、俺は深い溜め息を吐く。

今に至るまで、計五回ほど決着を付ける機会があった。

その度に、緑川に倒せたぞ？つと言う意味を込めて、指を立てて教えていたが……………逆効果だったのだろうか？……………どう考えても、イフリートにとってオウキは相性が悪過ぎる気がするし、実際にそうだった。だが……………緑川はそれを根性でどうにか出来る……………つと考えている様だった。

……………まあ、何にせよ……………このままだったら意志力の使い過ぎでぶっ倒れそうだな……………流石にそれは不味いか……………。

そう思った俺は、イフリートの連続火炎弾を避け続けているオウキに攻撃命令を出した。

オウキは瞬時に対戦車ライフルをイフリートの頭部に向け、装填された冷凍弾を放つ。

冷凍弾は狙いたがわずに頭部に当たり、一瞬の内に頭部を凍らせ、続け様に振り下ろす様に対戦車ライフルを下ろし連射。

連射された全ての弾丸は全弾命中し、イフリートは氷漬けなり、霧散した。

緑川を見ると、膝を付き頂垂れている。

「はい。勝負あり。夜衣斗君の勝ち」

そう言って団長は俺に微笑みかけてくれた。

っで、戦いを見ていたギャラリィから拍手と喝采を向けられ……
…俺はどうしていいか分からず………頬を掻くしかなかった。

間章その二『うさぎと魔人』 26

美羽

「……………えっと……………その……………は……………はうとう!」

もじもじして挨拶し掛けて、結局飛……………巴さんの背中に隠れる美幸先輩。

……………この人は……………これがあるから苦手なんだよね……………大体いつも頼れる誰かの後ろに隠れてて……………

「……………」

隠れてもじもじしている美幸先輩に、困惑の視線を向ける夜衣斗さん。

それですます巴さんの陰に隠れてしまう美幸先輩。

その腕の中にはレベル0.5になっているゆきちゃんがいて、じつと美幸先輩を見ている。

結局、どうやってもゆきちゃんの具現化は解けなくて……………結局、美幸先輩の腕の中で常に抑えなくちゃいけないみたい。

そうしないと、美幸先輩のちよつとした事に反応して暴れちゃうみたいで……………もう治らないのかな?……………。

いつまでも飛矢折さんの背中から頭を出しては引っ込んでを繰り返してた美幸先輩に、夜衣斗さんは痺れを切らしたのか溜め息を吐いて、

「……………黒樹夜衣斗です」

「お……………黄道……………み……………美幸です」

……………?……………なんか夜衣斗さんが妙な雰囲気を出している様な……………あゝもしかして……………

「夜衣斗さん。もしかして、美が付く人が多いなって思ってます?」

夜衣斗

……ごう、何で美羽さんは俺が考えている事があっさり分かるんだらうか？……武霊使いになると感がよくなるのか？……何だかね……。

「星波町には、星波神社って言う古い神社があるんですよ」と黄道さんの家からの帰り道にそんな話をし出す。

「その神社は隕石を神様にして祭っているんですけど」

ああ、なるほど……その神様が

「……その神様はあんまり関係なくって」
関係無いんかい！

「その神社に住んでいる不思議な猫がいるんですよ」

猫？

「美魅^{みみ}って言う雌猫なんですけど……不思議な猫で、可愛がったり、ご飯を上げたりすると、その人に幸運が訪れるらしいんですよ」

……実物の幸運の招き猫？……何だかね。

「つで、最も不思議なのが、その猫は何百年も生きている……とかな」

……
「いや、その、私もお母さんに聞いただけの話なんで本当かどうか知らないんですけど……でも、お祖母ちゃんとかが持っている古い写真とか見ると、全く同じ猫が写ってますから……もしかしたら……」

……所謂化け猫か……武装守護霊みたいなのが実際にあるんだ……そう言うのもいても……驚きは……するか？……まあ、何にせよ。よっぽど安定した遺伝子を持っている猫って可能性もあるだらうし……ってか、それと名前に何の関係が？

「その美魅様……様付けで呼びなさいってお母さんに言われているんです……って、物凄く綺麗な猫で、先も言った通り、関わった人に幸運をもたらすから、それにあやかっこの町で生まれた女の子には、美って文字を付けることが多いんです」

……なるほど……って事は、まだまだ美って付く人がこの町に

かなりいるって事なんだよな……………幸運をもたらす化け猫ね…

……………休みの日に行ってみようかな？

「ちなみに、そう簡単に出会えないみたいですよ？……………実は私も美魅様に会いたくて、子供の頃に星波神社によく行ってたんですけど……………一回も会った事がないんですよ……………話によると、武霊が現れるようになってから一度も目撃された事がないらしいですから……………もしかしたら、はぐれに……………食べられちゃったかもしれませんね……………」

……………何だかね……………

飛矢折

「……巴……」

「ん？」

久しぶりに二人でお喋りして、日が暮れたから帰ろうとした時、不意に美幸が意味深な笑みを浮かべてあたしを呼び止めた。

「黒樹君が気になってるでしょ？」

その言葉に心臓が跳ね上がった。

「……そ、そんなわけ」

「あるでしょ？……うふふ。そっか、巴もようやく女の子になってくれたかあ」

「あたしは最初っから女です！」

「あははは」

……話の内容は困ったものだけど、楽しそうに美幸が笑ってるから……つま、いいか……

「明日は学校に来るよね美幸」

「うん。勿論よ巴」

?????

武霊の私闘が行われた空き地で、日が暮れたと言うのに未だに膝を付いて頂垂れている緑川響。

ぴっくりとも動かず、背後からは心配そうに具現化していないイフリートが出ている。

その空き地に隣接する道路に源さんが通り、響に気付いて少しだけ立ち止まり、首を傾げて歩き出した。

その時、不意に響が顔を上げ、源さんがビクツとする。

「よおー！ー！ー！し！決めたっすううううう！ー！」

物凄い大声を上げたので、近所の犬が同調して吠えだし、近所迷

惑この上ない。

っす。っす大声で言っている響に源さんは再び首を傾げつつ、空き地を通り過ぎた。

「上手くいかないものね……………」

「相手が響だったからな……………まあ、しつこさだけで嫌になる人間じゃないだろ」

「でも……………」

「中途半端な意志じゃ関わりを断てない」

「……………私は……………」

「なるべくしてなるし、入るべくしてはいる……………結局、逃れられないってことだろう」

「……………でも……………」

「最悪は始まる前に俺が何とかする」

「あなただけに負担を掛けるわけには」

「……………それは、あきらめた人間のセリフじゃないな」

「……………ごめんなさい」

「いいさ。これが俺の運命なんだろうからな。逃れられないなら、立ち向かう。例え一人でも……………そう誓ってる」

「……………」

間章その二『うさぎと魔人』28（終）

夜衣斗

……………何これ？

翌日、教室に入ると頭を床に付けて土下座している緑川がいた。

「どうしたの黒樹……………君？」

「どうしたの巴……………あ！……………おはよう……………黒樹……………君？」

遅れて入って来た飛矢折さんと黄道さんが、立ち止まっている俺に気付いて挨拶し、途中で土下座している緑川に気付いて語尾が疑問形になった。

俺は溜め息一つ吐いて、

「……………そんな所でそんな事をやってると邪魔なんだが……………」

「すみませんっす！……………でも、俺、昨日の事を謝りたくって！」

謝る？……………昨日やり過ぎたか？

「昨日はしつこく戦いを挑んですいませんでしたっす」

……………別に土下座してまで謝らなくても……………」

「それと」

それと？

「……………俺を弟子にして欲しいんっす」

……………弟子？

その緑川の言葉に、唯でさえ土下座でざわついていた教室が、更にざわつき始める。

「駄目っすか！？……………駄目なら兄貴って方向でも……………つと言

うか、俺としては兄貴の方がいいっす。いや兄貴と言わせて下さい

先生！！」

……………何言ってるのこの人……………」

「見つけたあ！何やってるんだあ響い！！！！」

不意に窓の方からコウリュウに乗った美羽さんが現れて教室に飛び込んできた。

「うお！美羽先輩！」

振り返って驚く緑川の首根っこを掴み、同時に教室に入ってきた
防御鱗を使ってコウリュウの背に無理矢理乗せた。

「すみません。夜衣斗さん。こいつにはきつつく言っておきま
すから。失礼しましたあ！」

つと文字通り風の様に行く美羽さんと緑川。

……………何だったんだ……………。

不意に肩をポンと叩かれた。

振り向くと村雲がいて、

「よかったな。弟子と子分がいつぺんに出来て」

つとにやりと笑う。

「……………殴りたいのか……………」

ぼそつとそう言って、飛矢折さんを見た。

俺の視線に慌てて手と首を横に振る飛矢折さんに、それを見た黄
道さんは微笑んだ。

……………ちなみに、その腕の中にはレベル0・5のゆきちゃんが
いて、ぴすぴすと鼻を鳴らしている……………まあ、問題は無さそうだ
な……………

間章その二『うさぎと魔人』 28 (終) (後書き)

これで間章その二『うさぎと魔人』は終了です。

次の章は間章その三『守れ！男の?????』です。
引き続き見て頂けると幸いです。

間章その三『守れ！男の?????』 1

???

黒樹夜衣斗の現在の保護者・黒樹春子の朝は、大体仕事部屋の机の上で始まる。

要は漫画の執筆作業中に寝落ちしているわけで……そうなるので、大体顔のどこかに何らかの跡が付いている事が多い。

今回の跡は……

むくつと起きる春子。

その類にはくつきりと手とその手に持つタブレットペンの跡が付いていた。

顔の前にあるパソコンの画面には、漫画原稿が描かれており……

…どう見ても未完だった。

ぼーっとそれを見て、途端に顔を青くして、

「……………どうしよう……………」

つと言うが、直に、

「……………つま、いいか……………」

つと言って背伸び。

あんまりよくないはずなのだが……このままのペースだとどう考えても締切直前で担当編集に泣き付くのは目に見えている。……

まあ、それも含めて、いつも通りの朝。

ふらふらと立ち上がって、ふらふらと部屋を出て、洗面台に向い、とりあえず顔を洗う。

つで、そのまま甥の夜衣斗が寝ている部屋の前にふらふらと移動。鍵は付いていないので、そおつとドアを開け、部屋の中を確認。夜衣斗はまだ寝ていた。

寝ている夜衣斗を確認した春子は、そおつと部屋に侵入。

そろりそろりとベットに近付き、潜り込もうとして……ピタッとその動きを止める。

「…………えつと…………夜衣斗君？」

いつも潜り込む直前で、夜衣斗は飛び起きるのだが……………今日は一切反応せず……………困った春子は戸惑いながら、夜衣斗を見ると、夜衣斗は苦しそうに息をしている。

その異変に気付いた春子は慌てて額に手を置くと……………物凄く熱かった。

間章その三『守れ！男の?????』 2

美羽

「風邪？夜衣斗さんが？」

朝、朝食を食べに部屋から降りると、夜衣斗さんがいなくて……
「そうなの……んゝ多分なんだけど……夜衣斗、この町に来てからずっと気の休まる時間が無かったからねえゝ……落ち着いた今に、多分、どつと疲れが出たんじゃない？」

……確かにそうかも……町に来て直にはぐれの発生に巻き込まれ、続け様に剛鬼丸のはぐれ化、次の日は高神姉弟に襲われ、その次の日に転校初日、そのまた次の日に逆鬼ごっこ開始、その最中に五月雨都雅に襲われ、響に勝負を挑まれ、美幸先輩の半はぐれ化の解決……今さらだけど、物凄いハードスケジュール……今まで倒れなかった方が不思議なくらい……夜衣斗さんって、物凄く意志力の回復が早いみたいだけど……身体の方が全然見たいだし……大丈夫かな……そう言えば、

「春子さん。夜衣斗さんの部屋って、まだダンボールで埋まっちゃったよな？」

「え？……うん。片付ける暇……っと言うより、気力がなかった見ないね」

……ふゝん……そっか……そうだよな………そうだ！

「今日、お見舞いついでに夜衣斗さんの部屋の片づけに行ってもいいですか？」

飛矢折

「巴、どうするの？」

朝のホームルームの後、黒樹君が風邪で休むと聞いた後、美幸がそう話し掛けてきた。

「どうすのって……」

「お見舞いだよ、お見舞い。黒樹君の」

……見舞……。

「行かないの？」

確かに黒樹君の事は心配だけど……お見舞いに行くほどの

「行こうよ巴。お見舞い」

つと微笑む美幸。

「私、昨日のお礼ちゃんとしたいし」

……まあ……美幸がそう言うなら……行こうかな……

間章その三『守れ！男の?????』 3

????

ばったりと黒樹春子の借家の前で鉢合わせになる赤井美羽・飛矢折巴・黄道美幸。

「夜衣斗さんのお見舞いですか？」

「うん……そっちも？」

「……はい」

……何だか微妙な雰囲気の二人を見て、クスツと笑ってしまう美幸。

「……ところで、何で朝日さんがいるんです？」

「……そっちこそ、何で青葉さんと緑川君がいるわけ？」

互いに背後に視線を向けて、互いに困った顔をして、深い溜め息をほぼ同時に付く二人。

二人が夜衣斗の見舞いに行くところから聞き付けたらしい二人の部長ズが、それぞれの部員に面白がつて付いてきているのだ。ため息も吐きたくなるのは当たり前かもしれない。

「とにかく、緑川君。黒樹君は病人なんだからね。大人しくしているのよ」

つと巴が言うと、響はやや怯えたように何度も頷く。

「部長達ですよ」

つと美羽が言うと、意味深な微笑みを二人の部長が浮かべるので、不安にならざるえない。

「……それにしても……なんですかそれ？」

美羽はさつきから気になっていた物に視線を向けた。

美幸の隣で0.5具現化しているゆきちゃんが、軽々と持ち上げているメートルぐらいある紙包み。

大きな人形でも入ってそうな紙包みだが、男の、しかも、只の風邪の相手に持つて行くにしては、かなり大げさに見える。

美羽のその問いに、困った様に顔を見合わせる巴と美幸。

「商店街でお見舞いのフルーツとか買ったら、くじ引きの回数券を貰っちゃって……っで、これが当たっちゃったの」と美幸。

「……それって……二等の!？」

「え?あ!うん」

驚く美羽に、ちよつと戸惑った様に頷く美幸。

「それ狙ってたの!いいなあ!いいなあ!」

妙にテンションが上がってる美羽に、全員の困惑した視線が集まり、それにハツとした美羽は、ちよつと照れた様に頭を掻いた。

間章その三『守れ！男の?????』 4

飛矢折

この間来た時も思ったけど……………一人の荷物の割には随分段ボ
ルが多い様な……………。

そんな事を思いながら、あたしは赤井さんと二人で黒樹君の部屋
に来ていた。

他の人達は、あんまりぞろぞろと狭い部屋に入るのはなんなので、
つと言う理由で、今、家主の黒樹春子さんも含めて部屋の外にいる。
……………まあ、ほとんどの人が面白半分で付いてきた感じがするか
ら……………いいんだけど……………やっぱり、何だか赤井さんと二人でいる
のは……………妙な雰囲気になる様な……………。

「辛そうですね……………」

そう言う赤井さんは心配そうな顔で黒樹君を見ている。

黒樹君は、苦しそうに息を……………

「ん……………でも、ちょっと我慢してくださいね夜衣斗さん」

……………我慢？

妙な事を言つて、赤井さんは、黒樹君の寝ている蒲団の端を持っ
て、あたしを見た

「巴先輩も手伝ってくれませんか？」

……………あれ？呼び名が名前になつて……………つて、そんな事より、
「運ぶの？こんな状態の黒樹君を？どこに？なんで？」

「引越しの代理をしようと思つんです」

「代理つて……………何もこんな日にやらなくてもいいんじゃない？
黒樹君が元気な時に手伝うとか……………」

「ん……………それじゃあ、驚いてくれないじゃないですか」

「驚かせる必要なんてあるの？」

「喜んで貰いたいです」

「勝手にやつて、逆に怒られるんじゃない？」

「怒りませんよ」

「……………随分確信を持って言うな……………でも、私もまだ彼と出会って一週間ぐらいしか経ってないけど……………彼が起こる姿は想像できない……………かな?……………困った雰囲気にはなるだろうけど……………」

「手伝ってくれますよね?」

赤井さんのその問いに……………あたしは特に断る理由はなかった。

間章その三『守れ！男の?????』5

美羽

部屋の外にいた人達も呼んで、夜衣斗さんをちよつと散らかつて春子さんの寢室に移して、私達は引越し作業に取り掛かった。つと言つても、段ボールの中にある荷物を棚やタンスに入れるだけなんだけど……ほとんど漫画、小説、ゲームばかりだった。「ん〜そうかなつて思つてはいたけど……夜衣斗さんつてオタクなんですわね」

「この程度の量でオタクつて言うのはどうかと思うけど、予備軍じゃない?」

私のつぶやきを聞いた春子さんがそう苦笑した。

「……そうですよ。春子さんの蔵書なんて、これの比じゃないですものねえ〜」

「そうそう。私みたいなのをオタクつて言うのよ。つて誰がオタクよ！私は婦女子よ！」

「……違いがあるの?」

「……詳しく聞きたい?」

「……遠慮します」

飛矢折

……何だか随分あたしとは縁遠い話をしている赤井さんと黒樹春子さんでいいか……春子さん。

……でも、本当に多いな……あたしの家は兄二人に弟二人いるから、別に男の子が見る様な漫画とかを目にした事はあるけど……四人が持つている全部を合わせても、全然足りない……内容自体もなんか……全然違う気がする。見たことある様なものから、全然見た事ないようなものまで、果ては女の子が見るようなものまで……随分、多趣味ね黒樹君……?……緑川君?

何となく視線を黙々と段ボールを本棚の近くに移動させていた緑川君に向けると、緑川君はこの部屋にある段ボールの中で一番小さい段ボールを抱えてこっそり部屋から出て行った。

……………

「あらあら？これはこれは」

「いやいや。間違いありません」

不意にあたしの近くで一緒に本棚に漫画を入れていた青葉部長と朝日部長が、妙な笑みを浮かべた。

「……………何が間違いないんです？」

あたしの質問に、二人は顔を見合わせ、

「あらあら？そんなの決まってるわよ。ねー」

「ねー」

……………なんか妙に仲良くない？この二人……………そんなに接点がある様な気がしないんだけど……………波長でも合うのかな？……………お互い部員に迷惑を掛ける部長だし……………

間章その三『守れ！男の?????』6

?????

（弟子入りを認めて貰うためとは言え……とんでもない物を引き受けちゃったな……いや、でも……興味ないわけじゃないし……）

などと逡巡しつつ、緑川響は小さな段ボールをこそそと運んでいた。

黒樹夜衣斗をみんなで運んだ後、響はもたついた為、部屋から最後に出る事になった。

そもそも響は夜衣斗の見舞いに来るつもりはなく、愛に半ば騙される形でこの家にいる。

なので、状況に流されるだけ流されているのが現状で、唯一用があるとすれば、夜衣斗に自分を認めて貰う事だが……それも、夜衣斗の今の状態では無理そう……響がふと気が付くと夜衣斗が足をつかんでいた。その夜衣斗が目を開けて、響を見ており、苦しうに何事かをつぶやいていた。

「何すつか。水が飲みたいんすつか？」

つと言いながら顔を近付けると、

「たのみ……がある。俺の……部屋の……中で……一番小さい……箱を……

……お前の……家に……今日……だけ……で……いいから……置いて……置いてくれないか？」

つと苦しうにお願いされた。

（このタイミングで……って事は……この中には）

「エッチな本でも入ってるんじゃない？」

不意に背後からそう言われ、ビクツと響は硬直した。

まさに響もそう思ったわけだが……

恐る恐る背後を見ると、面白そうな笑みを浮かべている朝日竜子と青葉愛がいた。

「……何のことっすかね……これは、黒樹先輩から持って来て頼まれたいらぬ漫画っすよ」

と目をそらしながら言う響に、にまああつと言った感じに笑みを深める2人。

「……………」

ちよつとの沈黙の後、脱兎の如く逃げ出す響。

大慌てで玄関に到着して、靴を履き、玄関から外に出ると……

「はい残念賞」

コウリュウの背に乗った黒樹春子と赤井美羽がいた。

「春子さん。あんまりこう言うのはよくないと思うんですけど」

そう言う美羽だったが、その視線は興味深そうに響の持つ段ボールに向けられている。

ポンッと肩を叩かれ、脂汗を流す響だった。

間章その三『守れ！男の?????』7（終）

美羽

「ではでは、若者の迸る情熱の形を拝見させて貰いましょうか」
「あらあら？あの黒樹君ですからねえ。どんな物が入っているか」

「結構引くぐらいの物が入ってるんじゃない？」

などと会話をしながら、響を抑え、その手に持つ段ボールを奪い、
ガムテープをはがす三人。

「ん。止めるべきなんだろうけど……興味がないって言
えば……無いわけじゃないし……どうしよう？」

って逡巡している内に、段ボールが開けられちゃって……
？……怪訝そうな顔をして固まる三人。

その反応に意味が分からず、私も段ボールを覗き込むと、そこに
入っていた物は……。

飛矢折

「巴先輩。これもその本棚に入れておいて」

なんだか残念そうな、安堵した様な表情をして、赤井さんは私に
緑川君が持ってた段ボールを渡し、引越作業に戻った。

渡された箱の中には、色々な動物の写真集が入って……部屋を
見回すと、

「なんであれを隠せって言ったんだらう……」

釈然としない表情の緑川君や、

「探すのよー」

「おー」「おー」

引越作業と言うより、家探しをしている他三人。

……まんまと夜衣斗君の作戦に引越掛かってるし……。

あたしは思わずこぼれる苦笑を全員の死角である本棚の方に向けて隠した。

あの黒樹君だもの、巧妙に部長達が探している様な物が見付からない様になっているはず……………そう、例えば、この沢山ある本の中、表紙だけを変えて……………

などと思いながら、偶々取った漫画を開くと……………

「巴？……………どうしたの？なんだか顔が赤いよ？」

「ふえ？あ！ううん……………な、なんでもないよ美幸」

「……………ふくん？」

間章その三『守れ！男の？？？？』終了

間章その三『守れ！男の?????』7（終）（後書き）

これで間章その三『守れ！男の?????』は、終わりです。
次の章は間章その四……ではなく、間章その三の裏で起こっていた
話・間章その三裏『美魅様とメガネベア』となっております。
引き続き見て頂けると幸いです。

間章その三裏『美魅様とメガネベア』 1

星波町の一角にある古びた神社・星波神社。

その神社には、かつて星波町に墜ちた隕石の一つが祭られている。夏にはここを中心に星波祭りなどが行われ賑わうが、普段の星波神社は人っ子一人いない。

特に夜になると近隣付近まで誰もおらず、ある種の不気味さまで出ている。

そんな神社の隕石に、ある変化が起きた。

握り拳大の小さな隕石に、ぴよこんつと猫耳が生える。

その変化はそれだけでは止まらず、髭が、鼻が、前足がと次々と猫のパーツが現れ、終いには隕石から一匹の猫が出てきた。

白い、非常に美しい猫で、その猫は隕石から出て直にまるで人間の様に背伸びして、猫独特を顔洗いをする。

「あーよく寝ただわよ」

つと言葉まで発し、まるで人間の様に歩き、閉まっている扉をまるで何も無いかの様にすり抜ける。

「ん〜？ん〜？まだあるみたいだわねえ〜」

外に出た猫は空を見回し、溜め息を付いた。

「この町も住みにくくなつたもんだわよ」

そうつぶやきながら、猫は四足歩行になって、神社の敷地から出て行った。

星波神社には、いつの頃からか一匹の猫が住んでいた。

見た事がないほどの美しい白猫で、その美しさからいつしか美魅と名付けられ、近隣住民に可愛がられる。

すると不思議な事が起きた。

美魅を可愛がった者の身に、まるでお礼と言わんばかり小さな幸運が起き続け、何故かその猫はいつまで経っても死ぬ事がなかった。

もつとも、一時姿を消す事や、姿を現すのは普通の猫以上に気まぐれな為、その猫が同じ猫かを住民は判断しかねていたが………何にせよ。その猫の存在はやがて星波町全体にまで噂になり、終には美魅様と呼ばれるまでになる。

星波町の住人は知らない。

その美魅様と呼ばれる猫が、実は本当に何十年・何百年も生き、二足歩行が出来て人語も喋れる『化け猫』だと言う事を。

まあ、もつとも、普段は普通の猫として美魅も住民も接しているのだから、それは仕方がない事だと言えなくはない。

間章その三裏『美魅様とメガネベア』2

気ままに歩きながら美魅は、町の様子を見ていた。

なんせ町に出るのは随分と久しぶりだからだ。

武装守護霊が星波町に発生する様になって十年。

美魅の様な、人の言う妖怪などの様な存在は、星波町からほぼいなくなっている。

大体が自分達よりわけのわからない奇妙な存在・武装守護霊が発生した時に町から逃げ出し、逃げられない様なもの達は、はぐれ武装守護霊に喰われてしまったり、美魅の様に住処に引きこもっている為だ。

もつとも、そんな事が裏で起こっている事など、星波町の人間達は知る由も無い。

何故なら、美魅の様な存在は、世界の『外』の存在。

だから、普通の人間に美魅達の方が姿を見せる気にならない限り、認知する事が出来ない。

故に、今の美魅は気ままに町の中を移動している。

居間でテレビを見ている家族の前でそのテレビを見たり、一人寂しくビールを飲んでいるポニーテールの女性のビールをちよつと盗み飲んだり、空き地で頂垂れている少年の頭に乗って周りを見回したり、色々と好き勝手に町を見回っていた。

(やっぱり久しぶりの外はいいもんだわね)

などと思いつながら、美魅は商店街まで来ていた。

美魅が危険を冒して住処から外に出ている理由は、只単に暇だったからだ。

神社に時より参拝して来たる者達から多少は情報が得られるとはいえ、流石に十年近くも引きこもっていると、寝続けるのにも限度がある。

閉店している商店街の店の中を見て回る美魅は、おもちゃ屋に入

り、

(何か面白い物はな………何だわね。あれ?)

妙なものを見付けた。

無数のメガネを掛けた動物達の人形。

それはいい。

だが、問題なのは、その並べられている人形達の前に、まるで『人形の基となつたかのようなメガネを掛けたぬいぐるみのような小さい(っと言つてもメートルぐらいの)白い熊』が、まるで人間様に二足で立ち、人形達を見て小首を傾げていた。

その気配から、美魅はそのメガネの掛けた小さい白い熊が、自分と同質か、もしくは自分以上の『何か』である事を感じていたが………こんなものは見た事も、聞いた事もなかった。

(はぐれかしら)

つとも思つたが、その割には大人し過ぎるし、たた襲ってくるだけのはぐれとは違い、知性を感じられた。

だから、美魅は、

「あんた何もんだわよ？」

つと話し掛けた。

不意に話しかけられたメガネを掛けた小さい白い熊は、美魅の方へ振り向き、小首を傾げ、クイツとメガネを上げた。

間章その三裏 『美魅様とメガネベア』 3

「メガネベア？まんまの名前だわね」

美魅とメガネを掛けた小さい白い熊・メガネベアは、おもちゃ屋の外にいた。

どうも同じ様な姿の人形がある場所は居心地が悪い様で、メガネベアはちらちらとおもちゃ屋を見ている。

メガネベアは、どう言うわけか知性を持っていながら喋る事が出来ない様で、代わりにテレパシー能力を持っていた。

そのテレパシーで、美魅はメガネベアがメガネベアと名乗ったのを感じたわけだが……………。

「あんた何なのかわ？」

美魅のその問いに、メガネベアは小首を傾げた。

「そのまんま？……………言語を持たない種族とのやりとりは厄介だわね」

コミュニケーションの難しさに溜め息を吐く美魅。

（まあ、少なくとも完全にやりとり出来ないわけじゃないだわし……………）

っと思つた時、誰もいない商店街に誰かが入ってくる気配がした。その方向に視線を向けると、小学生くらいのポニーテールの女の子がこちらに向かって歩いて来ているのが見えた。その服装は肩やお腹などの所々に穴の開いたゴシッククロリータな服で、それに美魅は小首を傾げたが、それ以上に、

（こんな時間にあんな小さい子がどうして？）

そう疑問に思いながら美魅は隣のメガネベアを見ると、メガネベアはクイツとメガネを上げていた。

っで、気付いた。そのメガネベアの姿が、さっきからずっと『誰にでも見える状態』だと言う事に。

「ちよつとあんた。何でずつと姿を見せたままにしているんだわ

よ。早く見えないようにしなさいだわよ」

その美魅の言葉に、小首を傾げるメガネベア。

「え？そんな事出来ない？じゃああんた、今までどうやって過してきたんだわよ？」

その問いに再び小首を傾げるメガネベア。

「今まで必要な所にいた？よくわかんないだわね……何にせよだわね。今はじっとしているだわよ。幸い、あんたの見た目は、じっとしていればまんま人形だわね」

美魅のその指示に、メガネベアは素直に従い、動きを止めて、人形の振りをし出す。

近づく商店街に現れた女の子。

その手には何か水晶球の様なものを持っていて、そこから脈動する淡い光が発せられており、美魅はそれに違和感を覚えた

その違和感の正体を思案する前に、女の子がおもちゃ屋の前まで来る。

その瞬間、水晶球から強い光が照射され、美魅を照らした。

光が当たった瞬間、美魅は自分の身体が外から内へと引き摺り込まれたのを感じ、全身の毛が逆立つ。

「ああ、こちらに居られましたか美魅様」

（あたしが見えてる！？）

女の子の言葉に、美魅は瞬時に警戒態勢に入る。

「お迎えに上がりました。……そちらの方も」

つと言つて、につこり笑うその視線はメガネベアにも向けられており、ビクツとメガネベアは震えた。

間章その三裏『美魅様とメガネベア』 4

（なんなのだわこの子？）

ジリジリと身を引きながら、女の子の正体を思案する美魅。

（あの水晶球には、あたいと同質の力が込められているのは間違いないとして……でもだわよ、それを所有出来る人間は限られているはずだわね……しかも、油断していたとは言え、あたいの位置を調べ、あたいの姿を引きずり出すほどの力……これはもしかして物凄くヤバい状況だわね？）

「逃げようなどと思わないでくださいね？私の武霊は、『既に具現化中』ですのぞ」

その言葉に、美魅は周りの気配を探ったが、武霊の気配は一切しなかった。

代わりに言い様ない不気味な気配が、いつの間にか辺りに漂っているのを感じ、緊張の度合いが高まる。

人形の振りを止めたメガネベアは、どこか不安そうに辺りを見回し、やや緊張感欠けるのんびりとした歩きで美魅の隣に移動した。

「……………随分珍妙なお客様ですね」

（お客様？）

メガネベアの動きを見ていた女の子がそうつぶやくのを聞き、美魅はある可能性を思い出した。

（外来存在！？）

美魅が驚愕の視線を自分に向けている事に、メガネベアは小首を傾げ、

（目をつぶれ？）

つと美魅にテレパシーを送って来た。

よく分からない美魅だったが、すぐさま目を閉じる。

それを確認したメガネベアは素早く顔を女の子の方向に向け、両手でメガネを持った。

その行動の意味が分からず、反射的にメガネベアの顔を見てしま
う女の子。

瞬間、メガネから強烈な光が発生し、女の子の視力を奪う。

女の子の視力が回復する頃には、商店街のどこにも美魅・メガネ
ベアが居らず、女の子の手元から水晶球が無くなっていた。

間章その三裏『美魅様とメガネベア』5

「あんたやるだわね」

そう言いながら、美魅は屋根から屋根へと飛び移っていた。

メガネベアは、その後を付いて飛び移りながら、照れた様にメガネをクイツと上げる。

メガネベアは強烈な光を発生させると同時に、美魅を抱き抱え、その視線を女の子が持っている水晶球に向けた。

その瞬間、メガネから不可視の何かが生じ、水晶球が霧散。それと同紙に、メガネベアと美魅は、どこか別の場所に瞬間移動した。

「……………それにしても、どうしたもんだわね。ちよつと寝ている間に、あんなのが出てくる様になっちゃって……………」

溜め息を付く美魅。

「あの子の目的は、あたい達みたいだったけど……………あんた。何か目的があつてこの町に来たんだわよ？」

その美魅の問いに首を横に振るメガネベア。

「目的がない？ 当てのない気ままな旅をしている？……………奇特な奴だわねあんた」

照れる様に後頭部を掻くメガネベア。

「別にほめてないんだわね……………」

美魅の呆れた様な視線に、がくつとうなだれるメガネベア。

「つで、どうするだわね？」

その美魅の問いに、小首を傾げるメガネベア。

「あたいはこのまま住処……………は、多分無理だわね。あの感じだと……………まあ、兎に角だわね。このままどこかに隠れちまうつもりさわね……………あんたも、この町から出るにせよ、残るにせよ、しばらく身を隠した方がいいだわよ。あの探知系の道具がまだ無いとも限らないだわし」

美魅のその言葉に、メガネベアは腕を組み、考える様な仕草をし、

「は？あのおもちや屋に戻る？」
送られてきたテレパシーに、美魅は困惑の視線をメガネベアに向
けた。

間章その三裏『美魅様とメガネベア』6

ここそと商店街に戻って来たメガネベア。

美魅とは商店街の近くまで案内して貰い、そこで別れている。

商店街には……………誰もいない。

あの不気味な気配も無いので、ここにいないのは間違いなく、建物の蔭から陰にサツサツサと移動しながらおもちゃ屋の前まで移動。閉まっているおもちゃ屋のドアをすり抜け、メガネ動物達の人形があるコーナーにまで来て、クイツとメガネを上げた。

その視線の先には、メガネベアとそっくりな人形が展示されており、「この人形は明日行われる『週間商店街くじ引き』にて二等として提供されます。振るってくじにお参加ください。」と書かれた紙が近くに貼ってあったが、文字が読めないのか、メガネベアは小首を傾げた。

(メガネベア……………あれで本当に大丈夫だわね?……………まあ、他の気にかけている余裕はあたいにはないんだわよ。早く隠れる場所を見つけ……………あれは……………)

メガネベアと別れ、メガネベアを心配しつつ隠れる場所を思案していると、丁度コンビニから出てくる少年の姿が視界に入った。

(なんて……………これはこれは……………いい場所を見つけたわよ)

そう思いついニヤリとしてしまう美魅。

片手に漫画雑誌とプリンが入ったコンビニ袋を持って歩く少年を、美魅は無言で後を付ける。

しばらく後を付けると、不意に少年が振り返った。

前髪で目が隠されている為、どこに視線が向けられているかわからないが、僅かな首の動きからして、視線を巡らしているのは間違いないだろう。

星波町にいる人間の中に、自身の身に寄生した武霊を自在に操れ

る武霊使いと言う者達がいる。

そんな者達の中に、妙に感がよくなる者もあり、そんな者達にはどうやら美魅が姿を消していたとしても、見えないにしても、気配か何かを感じているのを美魅は何度か経験していた。

(……………このままいくより、普通の猫として近付いた方がいいかもしれないだわね？下手に姿を見せないまま近付いて、武霊で攻撃されたり、逃げられたりしたら、たたまったもんじゃないだわし) そう思った美魅は、物陰に移動して姿を現し、少年に近付いた。

「……………白い…猫?……………」

美魅を見て、ぼそつと少年がそうつぶやくのを美魅は聞き、接近。少年は近付いてきた美魅、しゃがみ込んで手を差し伸べ、美魅の頭や喉を撫でてくれる。

かなり気持ち良く、思わずごろごろしてしまう美魅だったが、

(今はそんな事をしている場合じゃないんだっただわ)

そう思った美魅は両足に力を込める。

(名も知らない少年。少しだけ、少年の『心の中に仮住まい』させて貰うだわよ)

そう思いつつ、少年の胸に向かって飛び込む美魅。

間章その三裏『美魅様とメガネベア』7

黒樹夜衣斗は、深夜はつと気が付いた。

(ヤバい。今週号買ってないじゃん)

いつも購読している週刊雑誌を買ってない事を思い出した夜衣斗は、寝ようとしていたベッドの上でうろたえる。

(別に明日買っても……いや……でも、この町の雑誌状況を知らないし……売り切れてたらどうしよう……)

などと逡巡しつつ、出掛ける為に寝巻きから外着に着替える夜衣斗。

心は迷ってても、身体は買いに行く気まんまのようで、後の問題は(春子さんは……起きているだろうか?)

時間は既に深夜近い。

そんな時間に出掛けるのは、まだ未成年の行動として、あまり褒められたものではない。

それを気にする現役高校生がどれほどいるかは分からないが、少なくとも夜衣斗は気にする部類の高校生の様だ。

そおつと部屋のドアを開けると、ぱったり丁度向いの仕事部屋から出てきた黒樹春子と鉢合わせ。

「お出かけ?」

にまあって感じに笑う春子に、夜衣斗は気不味い笑みを浮かべ、小さく頷いた。

「じゃあ……プリン買ってきて、でかいやつ」

(うわ……一様の保護者とは思えない言葉。ってか、どんだけプリンが好きやねん)

つと春子の言葉に、思わずそう思う夜衣斗だった。

春子に教えて貰った家から最も近いコンビニは、廃工場の近くにあり、見ようと思えば見える位置にあった。

夜衣斗は廃工場についてあまりいい情報（犯罪武霊使いの溜まり場になっている。とか）を聞いていないので、どうも嫌な予感を感じつつ、目当ての漫画雑誌とプリンを買ってコンビニから出る。

帰路に付く夜衣斗は、その途中で妙な気配を背後に感じた。

気のせいかと思えばしばらく歩き続けるが、その気配は一向に消えず、やや迷って振り返る。

視線を巡らすが、何も無い。

だが、妙な気配は確実にしている。

よく分からず、少々困惑していると、不意に暗がりから

「……白い…猫?……」

が出て来て、少し驚いた。

（妙な気配の正体は猫だったのか？）

つと首をひねりつつ、近付いてきた猫に、ほぼ条件反射の様にしやがみ、撫でた。

周りにはオープンにしていなが、夜衣斗は結構動物好きだったりする。

しばらく撫でてしていると、不意に猫が足に力を込めた。

それを疑問に思うより早く、いきなり猫が夜衣斗の胸に向けて飛び込んでくる。

夜衣斗はそのあまりの素早い動きについてこれず、一瞬だけ固まるが、その次の瞬間には慌てて自分の胸を見るが……そこには何も居らず、何の感触も無かった。

周りを見回すが、どこにも猫は見当たらない。

（なんだったんだ？はぐれ?……そんな感じじゃなかったが……

……もう……本当に何なんだよこの町）

町に来てから次々と自分の身に起きる異常な出来事に、夜衣斗はげんなりしつつ、猫の事はあまり深く考えない事にした。

（どうせ考えても分からない）

っと思っただからだ。

ただ一つ気になる事が、

(何だか急にだるく、熱くなった様な……気のせいかな?)

間章その三裏『美魅様とメガネベア』8

(……………何なんだわよ……………ここ……………)

美魅は辿り着いた場所の光景に絶句していた。

飛び込んだ少年（名前は心に入る際にちよつとだけ読んで、黒樹夜衣斗つと分かった）の心の中は、今まで入った事があるどの人間の心の中よりはつきりしている。

小さな夜の公園。

それが美魅の前に広がる光景。

普通の心の中は、不安定で常に変化している。

安定している場所もある事にはあるが、そう言う場所は大体がどこがおかしく、外の世界からするとどこか異常性を持っている。

なのに、夜衣斗の心の中。

特にこの場所は、異常なほどの安定性と、外の世界と見間違えるほどの正常性を持っていた。

興味深げに公園内を歩くと、公園の隅・街灯の下に置かれているベンチに、一人の女性と、その女性の太股に頭を載せて寝ている二人の少女がいるのに気付く。

(……………先客?……………いえ……………武霊?)

困惑した視線を女性に向けていると、女性は美魅の視線に気付き、につこりと笑った。

「ようこそ美魅様」

面識の内女性に名前を呼ばれ、美魅は驚いたが、その次の言葉に更に驚く事になった。

「あなたがここに来るのを、ずっと待っていました」

夜衣斗が目を覚ますと、異常なまでにだるく、声を上げられないほど熱く、意識がはつきりしなかった。

(風……………邪か?)

混濁した意識の中で、それでも夜衣斗は思考を止められなかった。
何故なら、

（なん…だろう…いつもの風邪とは…何か…違うような…
…何だろう？）

そう感じていたが、夜衣斗は知らない。

自分の心の中に美魅と言う化け猫が入り込んだ事を。

美魅が入り込んだ事によりある種の拒絶反応が生じた上に、連日の武霊に関する騒動で酷使されてきた心身に、気の緩みも重なって風邪に似た症状が生じた。だから、風邪と言う認識は間違っているのだが、それらの事情に気付いていない夜衣斗は知る由も無い。

段々意識を保つのもだるくなって来たので、夜衣斗は自然と再び眠りに落ちた。

その間に春子が入って夜衣斗は学校を休む事になり、その事が切っ掛けである種の男の危機に見舞われる事になるが、それはまた別の話。

間章その三裏『美魅様とメガネベア』9

カランカランっと煩い鐘の音に、黄道美幸は思わずビクッとしてしまったので、美幸は反射的に腕に抱えている武霊のゆきちゃんを強く抱いた。

その直後にゆきちゃんが暴れようとしたので、隣でその様子を見ていた飛矢折巴・朝日童子共々ほっと息を吐く。

「おめでとうございます。二等の大当たりです」

その商店街クジ引きの係員の言葉に、三人の視線が後の景品へと注がれる。

「二等 お楽しみ実寸大メガネ動物ぬいぐるみ 何が入ってるかな？」

つと書かれた紙と全長一メートルぐらいありそうな巨大な紙包み。

「運がいいのか悪いのか……でも、良かったわね。確か、巴の好きな人形だったでしょ？メガネ動物って」

そう言いながら童子が巴を見ると、くじを引いた巴は嬉しそうだけど、どこか困ったような顔をしていた。

「どうしたの？」

「……確かに、欲しかった……のですけど……」

巴のその表情に、美幸は苦笑した。

「巴の家って、あんまりかわいい物って駄目なんですよ。少しは許されるみたいですけど、あんまり大きい物とか、多くなると捨てられちゃうんです」

「……今時珍しい家ね」

美幸の説明に、同情の視線を巴に向ける童子。

その視線に、巴はますます困った顔になった。

とりあえず二等賞品を貰い、あまりにも大きいので、美幸の武霊ゆきちゃんに持って貰いつつ、黒樹夜衣斗の家に向かう三人。

中が気になるのかちらちらと紙包みを見ている巴。

「ん〜ちよっと思っただけどき。それ、黒樹君の家で預かって貰えば？」

「え？」

不意にそんな事を提案してきた竜子に、巴は驚いて思わずその視線を竜子に向けた。

丁度そのタイミングで、一瞬だけ紙包みが『背伸びした様に動き、ぴたっと止まる』。

その動きに、ゆきちゃんは立ち止まり、じーっとその視線を頭上の紙包みに向けるが、直に美幸に呼ばれたので三人の後を追いついて、気にしなくなった。

何かに持ち上げられながらどこかに運ばれるのを感じるメガネベア。

おもちゃ屋に戻った後、自分にそっくりな人形と入れ替わって隠れていたら、気が付いたらいつの間にか寝ていて、いつの間にか紙に包まれて視界を塞がれていた。しかも、どこかに運ばれている途中みたく、思わずした背伸びを慌てて止めざるえなかった。

背伸びを止めた直度に自分を運ぶ何かの動きが止まったので、メガネベアはヒヤリとしたが、女の子の声に呼ばれて直に動き出したので、ほっとする。

そして、揺られながら、どうしたものかと思案していると、女の子の会話が入ってくる。

「いや、ほら、その人形を黒樹君の家に置いておけばさ、彼の家に行く理由が出来るじゃない?」

「な! な! 何言ってるんですか朝日部長! ?」

「ぬふふ 分かっているんだからね? 黒樹君の事が気になってるんでしょう?」

「え! ? え、えっと その」

「隠したって無駄よお。だってそうなる様に仕組んだのは私なんですからねえ」

「 やぱり、そう言う意図もあつたんですか」

「あつたんですよ」

「」

「うわお! そんな怖い目で睨まない睨まない。 巴。女の子はね。恋を知って強くなるものなのよ」

「 彼氏なしの人にそんな事言われても説得力がありません」

「そうかしら?」

「そうです」

「まあ、そう言う事にしておくわ」

「？」

「っで？美幸ちゃんの見方はどうなの？」

「私ですか？そうですね……………私も黒樹君の家に置いて貰う事に賛成ですね」

「美幸い〜」

「いい機会だから、巴も少しは恋愛関係方面に興味を持った方がいいよ。それとも巴。女武術家になって一生独身を貫くつもり？」

「え？……………それは……………ちよつと……………」

「なら、強引でもいいから、黒樹君との絆を強めるべきだよ？ただでさえ、黒樹君の近くには美羽ちゃんがいるんだよ？……………あの子……………きつと今、誰かを頼りたくて仕方がないだろうし……………」

「頼りたくて仕方がない？……………どう言う事？」

「巴だつて知ってるでしょ？私の部活の大原先輩と美羽ちゃんの関係」

「うん？」

「美羽ちゃん。口には出してないけど、きつと大原先輩の事。」

好きだつたんだと思うんだよね」

「え！？じゃあ、そんな人と赤井さんは戦つたつて言うの？」

「あの時は大原先輩を止める為に仕方がなかった事だし……………だから、余計に心細くなつてる。そんな所に黒樹君みたいな人が現れたんだよ？……………まだ、恋とまでにはなつてない感じだけど、それがいつ恋に変化してもおかしくない様な見かたをしてたでしょ？」

「……………そうなの？」

「そうなの。だから、早めに関係を深めて、告白しちやいなよ」

「こ！告白！？」

「うん。ちよつとしか接してないらまだ何とも言えないけど、黒樹君つて自分から告白するタイプでも、告白されたら断れないタイプっぽいものね。先手必勝よ巴！」

「っちよ！ちよつと美幸！誰もあたしが黒樹君の事を、っす、好

きだなんて言っていないでしょ！」

「でも、ちよつとは気になるんでしょ？」

「っつ……その……」

「今まで巴がそんな風に思えた男はいなかったんだから、これを逃しちゃうと、本当に一生独身になっちゃうわよ？」

「……酷い言われようね……はあ……もう！分かったわよ！置いて貰える様に頼めばいいんでしょ！？頼めば！」

ちなみに言語の文化がメガネベアにないのか、会話の内容をほとんど分からなかったが、テレパシー能力を利用して会話から感じる断片的なイメージから、自分が目を前髪で隠した男の子の家に預けられる事になる事を理解した。

もつとも、理解したからと言って、結局はしばらく人形の振りをし続ける事以外の事を、今のメガネベアは出来ない事に気付き、密かに嘆息した。

ふつと夜衣斗が目を覚ますと部屋の光景が変わっていた。

うつすらと開けた目に知った顔が何人もいて夜衣斗は訳が分からず、頭の中に？を大量に浮かべる。

熱で頭がぼんやりとしているので、部屋にいる者達の会話は断片的にしか聞こえず、理解出来なかったが、かろうじて未だに終わっていない自分の引越しを代わりにやろうとしている事は理解出来た。

(なんで……みんなが？……お節介し過ぎだつて……ありが……つて！不味いじゃん)

ある事を思い出し、大いに慌てるが、思う様に声を出せず、動く事も出来なかった。

辛うじて誰かの足を掴むが、その掴んだ相手が、

(なんで緑川がここにいる？)

昨日、これでもかかってくらい叩き潰した相手がいる事に疑問に思ったが、ある意味では都合が良かった。

そう言う問題なのだ。

(……だが、すぎる相手がこれか……ストレートに頼むより……おとりに使うか……そうすれば、『見付かる可能性』は多少は減る)

そう思った夜衣斗は、足を掴まれて困惑している緑川響に、何とか声を振り絞つてある事を頼んだ。

(うまくいけばいいんだけど……？……なんだこれ？)

響に一抹の不安、どこかかなりの不安を感じつつ夜衣斗は視線を部屋の中に巡らすと、響のいた反対側に大きな紙包みがある事に気付いた。

気にはなつたが、その中身を確認するほどの力はなく、なんとなくにじーっと見ていると、不意にその紙袋ががさつと動く。

驚いて目を見開くと、更に驚く事が起きた。

「あんだ。こんな所で何してんだわよ」

声が聞えた、しかも女性の声が、何故か自分の中からし、固まる夜衣斗。

固まっている夜衣斗をよそにその声の主は夜衣斗の胸からぬっと出て来て、紙袋の前に移動した。

（昨日の猫！？しかも喋った！！？はぐれ……なわけないか……武霊は喋れないし……じゃあ……なんだこれ？……）

視線をその猫に向けていると、猫はその視線に気付き、くるっと夜衣斗の方に身体を向け、

「悪かっただわよ。まさかあんだの身体にそんなに疲労が蓄積していると思わなかったんだわよ」

そう謝る猫に、ふと赤井美羽が昨日語った名前の由来を思い出した。

「美魅……様？」

不意に夜衣斗に様付けで呼ばれ、美魅は頬を掻いた。

「あたいは、様付けで呼ばれる様なもんじゃないんだわよ」

その言葉に、夜衣斗は前髪の間隙から僅かに見える目を瞬かせた。

「あたいはそこらにいる只の化け猫だわよ」

「……只の……化け猫って……」

困惑した夜衣斗に、

「まあまあ、寝てるんだわよ。切っ掛けはあたいがあなたの中に入った事だったけど、いずれは同じ事になってたはずだわよ。今の内に、休める内に休んどくだわよ」

つと美魅は言ったので、夜衣斗はある予感を感じ、

「中に……って事は……サヤに……会いました？」

つと聞いた。

「会ったただわよ。あなたも大変だわね。幸運何だか不幸なんだか、あたいには分らないだわよ」

「つは……確かに……」

「まあ、兎に角だわよ。この子は運命を変えられる選択を与えられたものだわよ。だから、あなたが意図して接触しても何ら影響を得ない相手だわさ」

そう美魅が紙包みに向かって言うと、不意に紙包みがぱさりと床に落ち、まるで紙包みを透過したかの様にメガネを掛けた白熊が現れた。

よいしょつと言った感じで立ち上がり、背伸びをするその白熊はクイツとメガネを上げ、夜衣斗を見て小首を傾げる。

「メガネベアだわよ」

「……単純な……名前……」

「だわね。まあ、テレパシーをコミュニケーション手段にした、言語がない種族みたいだから仕方がないだわよ」

「…………濃い…………設定…………で…………つてか…………なんで…………ここに
いるわけ？」

「さあ？」

メガネベアに一人と一匹の視線が集まると、夜衣斗・美魅の頭に
映像とその時の感情が送られてきた。

それによる隠れたおもちゃ屋で、偶々入れ替わってぬいぐるみの
振りをしていたぬいぐるみがくじ引きの景品だったらしく、寝てい
る間に女の子達に当てられ、ここまで持ってこられてしまったとの
事。

「まあ、偶然ってもんはあるもんだわね。逃げ込んだ先でまたあ
んたに出会っただわなんて」

????

(逃げ込んだ?)

美魅の言葉に引つ掛かる夜衣斗。

だが、熱のせいで上手く思考出来ず、深く考えない事にした。

「つで、あんたはどうするんだわよ?」

そう美魅がメガネベアに問いかけると、メガネベアは小首を傾げた。

「あんなのが出てこられちゃいずらいだわよ?」

その美魅の問い掛けに、メガネベアは首を横に振った。

「まだここにいたい?..... 奇特なやつだわよあんた」

そう美魅が言うと共に、メガネベアから新たなイメージが美魅にのみ送られてくる。

巴・美幸・竜子の三人の会話で、その内容に美魅は目を瞬かせた。

(偶然か、何だか知らないんだけど、気がきくだわね)

「どうやらメガネベアは、人形としてこの家に預けて欲しいって頼まれるみたいだわ..... よ?.....」

気が付くと夜衣斗は目を瞑り寝ていた。

「..... まあ、あたい共々よろしく頼むだわよ」

夜衣斗

ふと気が付くと俺は心の中の公園にいて、ベンチに座っていた。

..... また心の中かよ..... ってなんか、肩と膝の上が重い様な.....
膝の上を見ると、白い猫..... 美魅..... 様付けは嫌がってたな.....
がいる。

つで、肩を見るとサヤが疲れた様に俺の肩に頭を預けていて、物凄くドキッとした。

っな！な！？何をしてらっしやるのかな？サヤさん。

「……………疲れてるの……………これくらいはいいでしょ？」

うつすら目を開けてそんな事を言うサヤ。

……………疲れてる？……………そう言えば小学生ぐらいの女の子となんかしてたな……………ってあのショートカットの女の子は？

この場にいない小さな女の子を探して視線を公園内へと巡らすと、公園の砂場で砂遊びをしているショートカットの女の子と……………口ングヘアの女の子がいた。

……………増えとる！？ど……………どう言う事？何なの俺の心。次から次にと小さな女の子を出現させるは、化け猫を住ませちゃうは……………わけわかんねえ……………にしても……………今の今まで気にもして無かったけど……………サヤも含めて、白いドレスっぽい服装してるよな……………何でドレスっぽい服……………てか、あんな服装で砂遊びするなよ……………

「後は」

俺が混乱しながら思考していると、不意にサヤが気だるげに口を開いた。

「夜衣斗次第だからね」

間章その三裏『美魅様とメガネベア』14(終)

またしてもふと気が付くと、自分の部屋のベットで目を覚ましていた。

つで、どう言うわけか、メガネベアが俺の隣で寝ている。

サヤのわけ分からないセリフに続き……これだよ……夢じゃなければ……これ、人形じゃないんだよ……。

そう思って、メガネベアのメガネに触ろうとすると、その直前でムニって感じで手を掴まれた。

触るな危険みたいなイメージが俺の頭の中に入ってくる。

……どうやらメガネベアのメガネは危ないらしい……なんだかね……ってか、やっぱり夢じゃなかったか……。

とりあえず俺はメガネをもう触らないって考えると、メガネベアは俺の手から手を離してくれた。

テレパシーって便利だな……俺も欲しい……まあ無理だろうけど……。

思わずため息がもれ、とりあえずベットから上半身だけ起こし、背伸びをして、何となく部屋に視線を向けると……血の気が引いた。

思わず大慌てでベットから出ようとしたので、その勢いでメガネベアが落ち、抗議のイメージが送られてきた。

ご、ごめんメガネベア……。

分からればよろしいって感じのイメージ。

このやりとりでちょっと思考がクールダウンして、昨日の事を思い出した。

……そう言えば、俺の代わりに引越し作業を終わらすって美羽さん達が言ってたな……ばれてないだろうか……緑川のが上手くいってればいいんだが……

俺はそう不安に思いつつ、本棚に収められている漫画をざっと見

て……ほっとする。

少なくともここを見た限りでは気付かれていない感じはしない。

……とりあえず……念には念を入れといてよかった……

などと思っていると、不意にドアがノックも無く開き、春子さんが入って来て、ちよっとびっくりした感じで俺を見た。

「熱下がった?」

って言うって俺の額に手を当てて来たので、思わず固まってしまう。その俺の様子に春子さんは苦笑して、

「うん。平気そうね……今日、学校行けそう?」

なんだか普通の保護者みたいな春子さんに戸惑いつつ、俺は頷いた。

「うん。じゃあ、準備して美衣さんの所に行こっか?」

そう言うって春子さんは俺の部屋から出ていき、俺はほっと一息吐いた。

……まともな春子さんって初めて見た……やべ……まだドキドキしてる……って、あんだけ熱を出しといて、何で翌日に俺はけろっとしてるんだ?

そう不思議に思うと、メガネベアがズボンのすそをクイクイとして、俺を見ながらメガネをクイツとした。

……なるほど……君が何かしたわけね……ってか……何なの

君?……はぐれでもなさそうだし……妖怪でもなさそうだし……

などと思っていると、また不意にドアが開いたので、メガネベアは慌てて動きを止めてコロロンと床に転がる。

俺もあまりにも不意打ちだったので、固まってしまい、顔だけ見せた春子さんは不思議そうな顔をした。

「……んつとね。言い忘れたけど、その人形、巴ちゃんが預かって欲しんだって……嫌なら取りくるって話だけ……その様子だと平気そうだね」

って言うって去って行った春子さんに、俺とメガネベアはほっと息を吐いた。

……… ってか、思わず緊張したけど……… ばれると不味いのか？

その疑問に、メガネベアからなんかのイメージが送られてきたが
……… よく分からなかった。

……… まあ、とりあえず俺以外にバレると不味いらしい。……… って
事は、飛矢折さん家に行くわけにはいかない訳だよな？

頷くメガネベア。

え〜……… って事は……… 同居人？が内と外に一匹ずつ、あの新たな
女の子を加えて、計二匹と一人増えました。

サヤといい武霊といい……… 何なの俺の周り……… はあ………

間章その三裏

『美魅様とメガネベア』終

間章その三裏 『美魅様とメガネベア』 14 (終) (後書き)

これで間章その三裏 『美魅様とメガネベア』 は終了です。

次の章は間章その四 『容疑者黒樹夜衣斗』 です。

引き続き見て頂けると幸いです。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 1

飛矢折

「……これは昨日の約束の奴」

そう言つて黒樹君は、教室にやつて来た緑川君に二つの紙袋を差し出した。

「えつと……いいつすよ。結局役に立てなかつたですし、それに……俺、かわいい系は苦手なんつすよ」

ちよつと困惑した様な緑川君に、黒樹君は口元を歪め、

「……一つは、見た事がある猫」

構わず続言葉を続ける黒樹君に、ますます困惑の表情を深める緑川君。

「……もう一つは、見た事がない猫……どっちがいい？」

……見た事がある猫に……見た事がない猫？……意味が分からないんだけど……

その疑問は緑川君も同じだったみたいで、言葉の意味が分からず、目を瞬かせていた。

それを見ていた村雲君が、不意に、緑川君をあたしから離れた所に連れて行き、あたしに聞えない様に内緒話をし始める。

？

……ほどなくして、

「見た事がない猫で」

つと緑川君が言つて、黒樹君から一つだけ紙袋を受け取り、一礼してそのまま教室からそそくさと出て行つた。

なんだかちよつとだけ拳動不審な緑川君に……あ！……もしかして……。

「巴？何だか顔が赤いけど……黒樹君から風邪でも貰つちやつたんじゃない？」

「え！？あ！うん。っそ、そうかも」

「……………」

夜衣斗

……………ん？なんか飛矢折さんの反応がおかしい……………バレたかな？
などと思いつつ、

「……………飛矢折さん。黄道さん。昨日は……………ありがとう」

「いえいえ。丁度お礼もしたかった所だったから。ね？巴」

「え！？あ！うん」

……………やっぱり反応がおかしい……………いや、深く考えない事にしよう。
うん。そうしよう。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』2

夜衣斗

(十年前に建築中の学園を見た事あったわけけど……ふん。こんな風になっただね)

つと言う美魅の音が頭の中に響く。

今、俺は放課後の星波学園の中を一人でぶらぶらしている。

いや、正確にはプラス二匹なのだが……一匹は俺の心の中で、もう一匹はステルスサーバントで姿を消さしているので、周囲からは実質一人でうろついているしか見えないだろう。

姿を消したメガネベアは俺に肩車されており、学園設備が興味深いのかきよるきよる動いている気配がして、その落ち着きのなさに俺は思わずため息を吐いた。

今朝の事だ。

登校の準備をしていると、不意に頭の中に、

(夜衣斗はあの学園に通ってるだわよ?)

つと美魅の音が聞こえてきた。

起きたのか……サヤは?

(寝てるだわよ)

寝てるって……

(何だか物凄く疲れてるだ見たいだわよ?これはしばらく起きないだわね)

……わけわからん……後は俺次第ね……どう言う意味だっただらうか?……。

(そんな事より夜衣斗。あの学園の生徒だわね?)

?……まあ、そうだけど……。

(じゃあ、あたい達を案内して欲しいだわ)

案内?俺より長くこの町に住んでるのに?……ってか、あたい達?

その疑問に、いつの間にか足下に来ていたメガネベアがズボンのすそをクイクイっとした。

……なるほど。

つで、今に至る。

今日一日メガネベアをステルスサーバントで隠しながら近くに待機させ、放課後になったら一人で見て回りたいと言う俺の言葉にみんなから不思議そうな顔をされつつ、学園内を見て回っている。

なんでも美魅は武霊が発生してからほとんど住処から出た事がなく、メガネベアはつい先日この町に来たばかりらしい。

個人的には勝手に回れば良いと思うんだが……まあ、ちょっと探索してみたいと思っていたから、丁度いいと言えば丁度いいか。

こう、何と言うか、知らない場所を手探りで見て歩いて行くって言うのは、時々やると非常に面白く感じるな……。

っと思っていると、その思考を読んだのか、メガネベアが頭上で頷く気配がする。

同意しているみたいだが……

部活・同好会の建物が乱立してる場所を探索中、ひと気のない場所に迷い込んでしまった。

……ちよつと不気味だな……

っと思つて元来た道に戻ろうとした時、耳に何か鈍い音が入った。近くだったのと、あんまり考えずに行動していた事も重なって、

俺は不用意にその音のした方向に行つてしまう。

そして、俺は直にそれを後悔する事になった。

明らかかな……『いじめ』の場面に……遭遇してしまったからだ。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 3

夜衣斗

倒れている見るからに気弱そうな男に、屈み込んで恫喝している男。

その二人を取り囲んでいる五人の男。

……一瞬、負の記憶がフラッシュバックを起こし、俺は眉をひそめた。

これと同じ状況を経験した事がある。

勿論、倒れている男と同じ状況を。

取り囲んでいる男の一人が、俺の気配に気づき、

「あん？んっだてめえ！？」

その言葉に倒れている男以外の視線が俺に集まった。

……不良はどこも同じ……か……。

向けられた視線が放たれている……腐った目は、俺の心をかき乱し、恐怖と怒りを併発させる。

「おい。こいつ。黒樹夜衣斗じゃね？」

「あ？こいつが？」

「ああ。間違いねえって」

と声が聞える。

……どうしたもんだろうか……。

そう考えていると、倒れている男と目が合った。

……数年前まで、いや、今でも時々鏡で見る目。

嫌いな目がこの場に二種類。

俺は思わず深い溜め息を吐いた。

それが癪に障ったのか、全員が「あ？」だの「んっだめえ？」とか一斉に言い出す。

もっとも一人だけ、そう言わない奴がいた。

倒れている男の前で屈み込んでいる男だ。

……こいつ。

俺はふと嫌な予感を覚え、念の為の『策』を密かに実行した。

その策の準備は直に済むと同時に、屈み込んでいた男が立ち上がり、

「困め」

つとほそつと命令した。

……感じからしてこいつがリーダーなんだろう。

「何？マジ言ってるの？」

取り巻きの一人が思わずと言った感じの言葉を言うと、リーダーの男は、小馬鹿にした様な笑みを浮かべ、

「馬鹿かてめえ。こいつがいくら化けもんみたいな武霊使いだとしても、俺らに武霊は使えねえ」

確かに星波長市役所で受けた武霊使いの義務でも、星波学園の武霊使いの規則でも、武霊使いが武霊を人間に攻撃させる事は禁止されている。

武霊は言うなれば、凶器だ。

それ相応の扱いを受けるの当たり前だし、また、それを利用しようとする輩も出てくるのは……まあ、当たり前だと思う。

「でもよお」

それでも躊躇する取り巻きに、リーダーの男は、楽しそうな笑みを浮かべ、

「分かってねえなあ？こいつにこの場を見られちまったんだぞ？チクくらせねえ様に、ボコつとかねえといけねえだろうが。あ？」

そのリーダーの言葉に、取り巻き達は顔を見合わせ、へらへらと笑い出し、俺をゆっくりと取り囲み始める。

俺はそれを見ても俺は動けなかった。

リーダーの男が、俺に見せ付ける様に倒れている男の頭を踏んだ。

……逃げれば……って事なんだろう。

「そいつの武霊は回復系も能力もあるって話だ。遠慮無しにボコれ」

……これだからクズは嫌なんだ……無駄な所に頭が回って……

リーダーの男の言葉に、俺は思わずそう思い、再び深い溜め息を付いた。

取り巻き達がそれに律儀に反応したが……まあ、どうでもいいか。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』4

夜衣斗

(夜衣斗。何考えてるだわよ?)

美魅が心配そうに問い質してきたが、それに俺が応える前に、俺は、肩車しているメガネベアにステルスサーバントに捕まって離れる様に心の中で言い、メガネベアはそれに素直に従ってくれた。

それとほぼ同時に、囲み終わった男達の一人が俺に不意打ちの様に飛び蹴りをしてきた為、吹き飛び、対面にいた男に捕まり、二人掛かりで羽交い絞めにされる。

痛い。物凄く痛い。

その痛みに、オウキが怒っているのを感じるが、俺はそれを抑えた。

その間に他の男が近付き、俺にボディーブロー。

続けざまに何発も何発も。

痛みに、怒りが沸き起こり、抑え込んでいる殺意が暴れ始める。

だが、まだ平気だ。

痛みだけなら……嫌な話だが、慣れている。

ボディーブローに何の反応も(見た目上は)示さない俺に、パンチを放っていた男は顔を歪ませ、俺の髪の毛を掴み、思いつきり引っ張って地面に顔を叩き付けやがった。

口の中に土が入り、中を切ったのか鉄の味がする。

地面に倒れる俺を躊躇なく踏み付け、蹴りを放つ取り巻き達。

……そろそろ限

限界つと思う寸前で、不意に蹴りが止まった。

やっと来た……か!?

安堵を感じた次の瞬間に、物凄いぞわつとする気配を感じた。

反射的にその気配をした方向を見ると、息を切らせた道着姿の飛矢折さんがいて、物凄く驚いた。

その表情には怒気が含んでいたので、次の行動を瞬時に予想した俺は、ほとんど反射的に、

「セレクト！シールドサーバント！」

シールドサーバントを具現化し、一気に間合いを取り巻き達に詰めた飛矢折さんの前に液体モードのシールドを展開。

的確に取り巻きの一人の顎を撃ち抜こうとしていた掌ていをギリギリで止めた。

「何で止めるの！？」

激怒している飛矢折さんに、俺は倒れたまま笑みを浮かべ、

「……………飛矢折さんにこんなくならない事で、『退学』されちゃ困りますから」

俺の言葉に、飛矢折さんははっとして空を見た。

「あ？なんだと」

リーダーの男は俺の言葉の意味が分からず、飛矢折さんが見た同じ方向を見る。

「おい！マジかよ！？」

空を見たリーダーの男は驚き声を上げた。

そりゃそうだろう。だってそこには……………。

俺も上空を見上げたが、そこには予想と違って、コウリュウに乗った美羽さんが視界に入っって、再び物凄く驚いてしまった。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』5

美羽

「あらあら？何をしているの美羽ちゃん？」

不意に背後から愛部長にそう言われ、私は思わずビクツとしてしまふ。

夜衣斗さんが一人で学園内を回りたいて言いだして、一人で帰るのも何だなぁ〜って思ってたろろろしていたら、気が付いたら部屋の前に来ていた。春休み前までは、放課後はいつも部室に来てたから、無意識の内に来てしまったんだろうけど……………今の部室には入るに入れなくて、躊躇している内にか愛部長が来てしまってたみたい。

……………えっと……………

「じゃあ、そう言う事で」

「まあまあ、待ちなさいな」

そう逃げ出そうとする私の腕を、愛部長は笑顔でがっしりと掴んだ。

腕を掴んでない方の手の中には……………どこそのレンタル屋の袋があつて……………サーっと青くなる。

「新作入ってたの」

「の　じゃありません！」

愛部長はハクシまで出して私を部室内に引き込もうとするので、

私はコウリユウを出して抵抗。

にこにこ顔の愛部長との必死の攻防に入ろうとした時、周囲がざわつくのを感じた。

愛部長との攻防はここ最近はしてなかったけど、それほど珍しい事じゃないし……………なんだろう？

取っ組み合いつつ、周囲の騒ぎに愛部長と一緒に周りを見回すと、視界に入った何人かが空を見ている事に気付いた。

つられて空を見ると、そこには夜衣斗さんが『リンチされている巨大な映像』が映し出され……………え！？……………ええええ！？何？何！？ど！どう言う事！？

「赤井さん！」

私が空に映し出されている映像に驚いていると、不意に物凄い勢いで巴先輩が現れた。

「あの映像の場所が分からないの！？お願い！コウリュウに乗せて！早く！！」

物凄く焦った巴先輩に、私は思わず何度も頷き、コウリュウを直に出した。

きつと、私より早くに空の映像に気付いて、直に夜衣斗さんの所に駆け付けようとしたけど、場所が分からなくて、私の所に来たんだろうけど……………なんか……………妙に必……………いえ。今はごちゃごちゃ考えている場合じゃない。

コウリュウをレベル2にして私は右手に、巴先輩は左手に乗り、一気に飛び立たせる。

映像に映る建物からして場所は部室棟群のどこかだろうけど……………長いんだよね。部室棟群って、小中高棟群から大学棟群まで長く細く作られているから、使われない所とか結構あつて……………しかも、大体似た様な形だから……………直には見付けら

焦りながらコウリュウを部室棟群の上空に飛ばし、確認の為に空に浮かぶ映像をもう一度見ると、夜衣斗さんは地面に倒されて……………どうして武霊を出して防御とか逃げるとかしないんですか！？そこまで禁止され

そこまで思ってた気付いた。映像の隅に、地面に倒れ、男に頭に踏み付けられている人がいる事に。

つと言う事は……………あの人を助ける為に……………でも、それでも、夜衣斗さんのオウキならそんな目に合わなくても……………何とかなるでしょ！？

色々な感情がわつとぐちゃぐちゃになって出て来て、涙が出てき

た。

「赤井さん！あれ！」

巴先輩の声にはっとして、私は先輩が指し示す場所を慌てて見る。そこには夜衣斗さんがスカウトサーバントって呼んでいた円盤が浮いていて、大きなレンズを下に向けて……そこなんですな夜衣斗さん！

急いでコウリュウ！

私の強い願いにコウリュウは直にスカウトサーバントの近くまで飛ぶけど、木や建物が密集してある場所で、レベル2のコウリュウが降りれそうな場所が近くになかった。

「巴先輩！コウリュウのレベルを……あれ！？」

レベルを落としますから、気を付けてください。って言おうとした時、巴先輩はすでにコウリュウの手の中からいなくて……コウリュウが下を見ているので、その視線の先を見ると、木の枝が揺れていて、空に浮かぶ映像に巴先輩が映っていた。

飛び降りた！？ここから！？

今のコウリュウは夜衣斗さんを探す為に低く飛ばせてはいたけど、少なくとも三階以上の高さがあったはず……もう、巴先輩の身体能力の高さに、私は啞然とするしかなかった。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』6

夜衣斗

失敗したな……もうちょっと他の人の事を考えて……心配する人がいる事を考えて策を練るべきだったかな……

などと思いつながら、俺はヒーラーサーバントに治療させられつつ、地面に正座させられていた。

俺の前には物凄く怒った表情の美羽さんと飛矢折さんがいて、無言で俺を見下ろしている。

どうも俺は昔から一人である事が多いせいとか、他の人がどう考え思つかを二の次にして考える質がある。まあ、考えようと思えば考えられなくはないんだが……短い時間や差し迫った状況下だと、どうしてもそうなってしまう……

「夜衣斗さん」

静かで穏やかな声に、俺は何故かビクツとしてしまった。

「何でされるがままだったんですか？」

美羽さんは笑顔になってそう聞いてきたが、背後にゴゴゴゴと擬音が付いてそんな雰囲気だった。

その隣で飛矢折さんは、溜め息を付き、

「何か思惑があつてのことだと思つけど……いくら受けた傷を治せるからつて、万が一つて事があるんだよ。特にあんな連中の暴力なら」

そう言つて、ちらつと武装風紀委員……武風つて訳語があるらしい……武風に連行される不良達を見た。

……まあ、確かにそうかもしれないが……でもな……

「……あの」

不意に俺の隣で何故か同じ様に正座しながら、ヒーラーサーバントの治療を受けているいじめられていた男が口を開いた。

「お、怒らないでくれませんが……その、彼は……僕を助ける」

「分かっています！」

「え？あ！はい」

美羽さんに言葉を遮られ、直に言葉を引つ込めるいじめられていた男。

「分かっているから怒ってるんです。夜衣斗さんならもっとうまくわざわざ暴行されなくても、助けられたでしょ！？」

また怒った顔になった美羽さんに、俺は心の中でため息を吐いた。
……どうやら説明しなくちゃいけないらしい。

「……必要だったんですよ」

「何が！？」

「無抵抗な人間が暴行されている証拠が」

飛矢折

黒樹君の言葉に、あたしは絶句した。

それってつまり、上空に映像を映し出したのは、助けを求める為にやったんじゃないかって、大勢の人に暴行を目撃させる為で………そう言えば、あたしの掌ていを止めた時に、退学って言ってたっけ………。

「だから、リフレクションサーバントとスカウトサーバントを使ってあんな事をしたんですが………心配させて仕舞ったみたいですね………すいません………考えが足りませんでした」

つと言って頭を下げる黒樹君に、赤井さんは戸惑った様な表情を見せ、

「えっと………その………」

顔を赤らめたしどろもどろ………可愛い………って何考えてるんだかあたしは………。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』7

夜衣斗

「この様な事態になるまで気付けなかった事を、我々統合生徒会、いえ、星波学園を代表して謝らさせて下さい……申し訳ありませんでした」

そう言っただけともう一人・いじめられていた男……名前は『楠木久思』^{くすのき}って言うらしい……に頭を下げる統合生徒会長・琴野沙羅さん。

「あの、その、えっと、いえ……」

全生徒のトップに頭を下げられた為か、それともそう言う質なのか物凄く動揺している楠木。

今いる場所は、高校の生徒会室。

よく分からないが、統合生徒会の部屋は、その代の統合生徒会の学年で決まるらしい。要は普通の生徒会長と兼任になり、その生徒会室も兼用となるみたいだ。

ちなみに美羽さんと飛矢折さんはいない。

統合生徒会長と顔を合わせて話が進まなくなるのを回避する為に、先に帰って貰った。やや不満を持った感じがしないでもなかったけど、まあ、こればかりは……っで、飛矢折さんは部活に戻ってる。ちょっと困った顔をしていたのからすると、朝日部長にからかわれるっつても思ってたのかもしれない。……まあ、あの人にとつては最高のネタ……か。

「いい訳をさせて貰えるのなら、私達や武装風紀はどんなに注意していても、武霊使いへの警戒と抑制にウエイトを置いている所がありますわ。それに、構成メンバーの問題点もあります」

……なるほど、そう言えば、統合生徒会は勿論、その手足である武装風紀委員会のメンバーは、ほとんどが武霊使いだと言う。そうなれば、武霊による普通の人間への攻撃が禁止されている武霊使

いは、意図的・無意識のどちらとも積極的に関わろうとしない。持っている力は使ってしまうのが人間だ。場合によっては望む望まざるとも武霊を使ってしまう。それで場合によっては犯罪武霊使い………：そんな背景がある上に、武霊使いの方が事が起こった場合に、被害や深刻度は高い。普通の生徒達が起こす問題の優先度がおのずと低くなるのは………仕方がない事かもしれない。………まあ、あの不良達は、そこを突いていた感じもするが………悪って言うのは………どうして………こう………

「ですので、無理は承知でお願いしますわ。今後、同じ様な目に遭った場合、先生方、もしくは私達に必ず相談してください」

「……………はい」

会長のお願いに、楠木は力なく頷いた。

……………この性格だと……………それは無理だろうな……………

「黒樹様も、今回の様な無茶をせず、まず、先生か私達に連絡したださいね……………あの映像は心臓に悪かったですわ」

「……………すみません」

……………どうも色んな人に心配を掛けてしまったみたいだな……………反省。

「……………まあ、でもですわ。これであの方々を退学に追い込む事が出来ますわ」

そう小さな声でつぶやくのが聞えた。

……………もしかしたら、統合生徒会もある程度の目を付けていた連中だったのかもしれない……………ん？退学に追い込む？……………統合生徒会ってそんな事にまで口出し出来るのか……………ん？思った以上に強権を持つって事か……………

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 8

????

「あの、その、助けてくれて……ありがとう」

生徒会室を出てしばらくして、不意に楠木久思は、黒樹夜衣斗に礼を言った。

夜衣斗は立ち止まり、久思に顔を向けるが、目が前髪で隠れている為、その顔に浮かぶ表情が分からない。

怒っているのか、呆れているのか、さげすんでいるのか、分からなくって、久思は怖かった。

何か言ってくれればいいが、夜衣斗は何も言わないので、うるたえてしまう。

その久思の様子に、夜衣斗は溜め息を吐いた。

「……降りかかった火の粉を、火元から消したただけ……礼を言われるほどの事はしてないし、するつもりもない」

「え?でも……」

「……ああ言う連中はどこにでもいる。そして、ああ言う連中が狙うのは……大体決まってる……後は君の問題だ」

「……うん。そうだね……僕も知ってるよ……転校してくる前、同じ様な目に遭ってたから……」

その突然の独白に、夜衣斗は再び溜め息を吐いた。

予想の範囲内の独白だったのだろう。

「僕も君と同じ様に転校してきたんだ。少し違って進級と同時で

……前の学校のいじめから逃れる為に……新しい学校なら……もしかしたら、大丈夫だと思ったんだけど……結局……どこ行っても、僕は何も変わらないや」

そう言っつて自傷めいた笑みを浮かべる久思に、夜衣斗は何かを言おうとしたが、その言葉は新たに現れた少年に遮られた。

「久思!」

「博君……」

夜衣斗

「わり、俺部室にこもってて気付かなくてよ。助けに行けなかった」

「いいよ。僕の……ミスみたいなものだし……それに彼が助けてくれたから」

不意にこちらに二人の視線が向けられ、黙って消えようとしていた俺は思わずピタリと動きを止めてしまった。

微妙な沈黙に支配されるが、博と呼ばれた男の視線に怒りとも憎しみとも切望とも取れる感情が込められているのに気付き……気付いたからって、どうなんだろうか？……まあ、理由はどうあれ、俺を快く思っていないのは、確かな様だ。

何故なら、

「何で武霊を使ってあいつらを倒さなかった！」
と激昂した声で、俺にそんな事を言ったからだ。

「博……」

楠木が戸惑った様に博を見る。

「……武霊で人を傷付けるのは禁止されている」

「ふざけんな！あれだけであいつらがいじめを止めると思ってるのか!？」

俺の正論に、博はある意味最もな事を言った。

「……止まらないだろうな」

「当たり前だ！ああ言う連中には、受けた暴力を何倍まで返さねえとまた同じ事を繰り返す！それでいいのかよ!？」

……何だかな……

博の言葉に、俺は思わずため息を吐いてしまった。

……なんで他人の為に、クズにクズのような行為をしなくちゃいけない？俺に犯罪武霊使いになれって言うのかよ？

そう思ったが口にはしなかった。

流石にどうかと思ったからだが……代わりに、

「……俺は正義の味方じゃない」
っと言って、この場を後にした。

博は何かを再び言おうとしたが、それを久思に止められていた。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』9

飛矢折

こう言うのって、あんまり好きじゃないんだけどな……………。
そう思いながら、あたしは黒樹君と二人の男の子との会話を通路の曲がり角で聞いていた。

朝日部長から、黒樹君を一人で帰らせない方が言いつて言われて、いつもより早く帰して貰い、ここにいる。

あたしも今の黒樹君を一人で帰すのは、黒樹君本人もだけど……………不安を感じていた。

五月雨都雅を黒樹君が殺そうとした瞬間が頭の中でチラついて、それを否定する気持ちもあったけど……………とにかく、彼の傍にいてあげたかった。

でも……………本当に彼を一人にしない方がいいのかな？

まるで拒絶する様に二人の下を去って行く黒樹君の後姿を見ながら、あたしの中にその懸念が出てきた。

……………どうしてこんな事を……………。

そう考えながら二人の男の子が去って行く気配を感じ、気付いた。あの二人って……………どこか黒樹君に似ている。

三人が三人とも表面上は違うけど、その内面は近い。
そんな気がした。

夜衣斗

(あの二人。夜衣斗に近い感じがするだわね)

下駄箱で靴を履き替えている時、不意に美魅がそんな事を言ってきた。

美羽さんの前で正座していた辺りから再び肩車しているメガネベアも、美魅の言葉を同意しているのか頷く気配を感じる。

俺は溜め息一つ吐き、

俺もそう思うよ。

つと同意。

片や消極的で、気弱。

片や積極的で、強気。

だが、その根本は、俺と同じ物を持っている。

そんな雰囲気をあの二人は醸し出している……そんな気がした。

それをあの二人も感じたのだろう。

だから、片方は俺に親しみを覚え、片方は俺に嫌悪感を覚えた。

（夜衣斗は、色々考える奴だわね）

その美魅の言葉に、俺は苦笑した。

なんだか不思議な感じだった。

いつもだったら、リンチされたり、暴言を吐かれたりしたら、感

情の負のスパイラルが起こり、思考がどんどん悪い方に進んで行き

……時には暴走していた。

だが、今は俺の傍に……人じゃないとは言え、言葉を交わせ、理解してくれる二匹がいる。その二匹がいるからか、俺の心は不思議と負のスパイラルにも陥らず、暴走の気配すら感じない。

迷惑な同居人になるかと思っただけだな……。

（出会いなんてそんなもんだわよ。どんな相手が、どんな関係になるかなんて、出会って直になんて分からないもんだわよ）

そんな事を美魅に言われた時、背後に誰かがやってくる気配がした。

振り返ると、制服姿に着替えた飛矢折さんで、

「黒樹君。一緒に帰らない？」

って言ってきた。

きつと、俺を心配して部活を早く切り上げてきたんだろう。

美羽さんと違って、彼女には弱いところばかり見られているから……。

……そう言えば、彼女と最初に出会った時、こんな風に心配してくる間柄になるとは思いもしなかったな……

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 10

美羽

翌日の朝。

夜衣斗さんはむすーっとする私の扱いに困りながら、一緒に登校していた。

昨日の事をまだ怒ってる……わけじゃない。そりやまだ納得していない所はあるけど……それ以上に、私を先に帰らせといて、飛矢折さんと帰ってくるのが気に喰わない。ええ、気に喰わないですとも……だったら、待っててもよかったじゃない。

って思ってたて、昨日から私はずっとむすーってしている。

それに夜衣斗さんはずーっと困ってたて、春子さんもうちの両親もその私達の様子を面白そうに見ていた。

……当事者としては、ちっとも面白くないんですけど……

そう思いながら私は思わず嘆息して、後ろを歩いている夜衣斗さんを見た。

夜衣斗さんは何故か周囲を気にしながら山の方を見ている。

？

私も同じ様に周りを見ると、登校中の他の生徒の何人かが山の方を気にしているのに気付いた。

そして、山の方を見ると、物凄く嫌な予感を感じる。

……この感じは……。

「夜衣斗さん。そろそろ……はぐれが星波山で発生するかもしれません」

夜衣斗

昨日の放課後から喋ってくれなかった美羽さんのその言葉に、俺は目を瞬かせた。

「ちょうど前回はぐれの発生から一週間ですし、何人かの武霊

使いも山の方を気にしていますから……今回のはぐれは星波山で発生する確率が高いみたいですね……私も嫌な予感を山から感じます。夜衣斗さんも感じませんか？」

……確かに今朝から山の方が気になって仕方がない……なるほど、これのはぐれ発生の予感が……

「でも……一週間の法則も最近例外が起きましたからね……」

……俺が来た時のはぐれ発生ね……はぐれの発生……
そうだ……ついだから、色々試してみようかな？

飛矢折

今日の黒樹君は妙に山の方を気にしていた。

それどころか……今は見た目上は普通の制服姿になっていてけど……PSサーバントを着ているのを目撃している。

多分、ステルス機能を利用して制服姿に見える様になっているんだけど……何でPSサーバントを着てるんだろう？

あたしの不思議そうな視線に美幸が気付いたのか、何だか温かい物でも見るかのような目を向けてくる。

……？……あ！……っち！違うからね！そんなんじゃないからね！？

って言いそうになったけど、そんな事を言ったら、ますます温かい物を見る様な目になりそうだったので……止めた。

何だか妙に恥ずかしい気分になって黒樹君から視線を外した時、連続した爆発音が聞え出す。

その音にクラス中が騒然とする中、黒樹君だけ何の反応も示さず、空中を凝視していた。

……もしかして……

そう思った時、はぐれ警報が鳴り出した。

そして、変なアナウンスが流れ、クラス全員の頭に疑問符が浮かぶ。

「星波山ではぐれが……え？あれ？ちよつと！どう言う事……あ！失礼しました。今の警報は無いです。お騒がせしました」

……何なの一体……

夜衣斗

俺の視界に小さな画面がいくつも映り、そのほとんどは星波山を様々角度から映した映像だが、一つだけ高校棟の屋上に具現化して

あるオウキを映している映像がある。

PSサーバントの機能で、いくつも飛ばしているスカウトサーバントからの映像を見ているんだが………やっぱり慣れないせいか、何となく星波山の方向を実際に見てしまう。

今の俺はPSサーバントを着ているが、ステルス機能を応用して見た目上は普通の制服を着ている様に見える。

だから、普通に授業を受けていても何も言われないんだが、PSサーバントって、あんまり服を着ている感じがしないんだよな………
…そう言う仕様だから仕方がないが………どうも………変な感じだ………早く出て来いはぐれ。

そう不謹慎な事を思った時、スカウトサーバントの一部が星波山の上空で空間の揺れを確認した。

その揺れはスカウトサーバントが見ている前で徐々に大きくなり、終には人の顔を持った鳥が現れる。

大きさからして、レベル1………さしずめ、人面鳥って所か………。次々と人面鳥が現れるが、はぐれ警報が鳴らない。

どうやら監視員より俺の方が先に見付けてしまったらしい。

まあ、それもある意味都合がいい。

オウキ、セレクト、ガトリングミサイルポット。

俺の心の命令に………よくよく考えてみると、これってテレパシィだよな………自身の武霊限定だけど………ちょっと嬉しいな………とにかく、俺の命令に、オウキは両腰の内蔵簡易格納庫を開き、円形の弾倉を持った大きなミサイルポットを取り出した。

そのミサイルポットの上に付いた持ち手をオウキが持つと、両肩の内蔵簡易格納庫が開き、小型ミサイルが連続して挟まっているベルトが出て来てミサイルポットの弾倉に入る。

スカウトサーバント、サポートロツクオン。

その言葉に、俺の視界に映る全ての映像にロツクオンゲージが現れ、次々と現れたはぐれをそのゲージ内に入れる。

撃て！

オウキがトリガーを引くと同時に、ガトリングミサイルポットが、その名の通り、連続でミサイルを発射する。

ミサイルが発射され、空となったベルトは弾倉から現れ、腰の内蔵簡易格納庫へ入った。

肩の格納庫からミサイルベルトが次から次へと出て、ガトリングミサイルポットで撃ち、腰の格納庫で空となったベルトを仕舞う。

これにより、ほぼ無尽蔵にミサイルを撃つ事が出来る飛んでもない武装だが、これを使っている間は新たなサーバントや腰の格納庫から出す武装が出せないの、接近戦には向かない。

だが、それでも、今の状況には最適で、出てきたはぐれを全て、瞬く間に倒す事が出来た。

おかげではぐれ警報のアナウンスが変な事になったが………まあ、町に何の被害も出てないから………まあ、許される………かな？

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 12

???

「何だよ！……何なんだよあれは！！」

その来塚くろくま 博ひろしの激昂に、楠木 久思はビクツと震えた。

今は昼休みで、二人がいる場所は漫画同好部の部室。

二人の他にも同好部メンバーはいるが、大体のメンバーが好き勝手やっているの、大きなイベントごとがない限り、部室には滅多に部員が来る事がない。その為、今、部室にいるのは二人のみとなっている。

「くそ！ムカつく！」

ドンと机を叩き、椅子を蹴り飛ばす。

「博。物に当たるのは………」

「久思はムカツかねえのかよ！？あいつは……あの黒樹夜衣斗って奴は、あんだだけ大量のはぐれを一瞬で倒せるくせして！倒せるくせして！あの糞供には何もしてねえんだぞ！？」

「仕方がないよ。何かしたら………」

「それがどうした！正しいのはこっちだぞ！」

博に何か言えば言うだけ怒鳴り返してくるので、久思は反論の言葉を飲み込んだ。代わりに心の中で、

（暴力に暴力で返せば、正しさなんて直に消えちゃうよ）

そう思ったが、やはり口に出す事は出来なかった。

今の博が自分に見せる『強さ』は、『弱い』自分だけに見せる強さだと知っているからだ。

博は『強い正義』に憧れている。

彼が見る漫画は全てヒーロー漫画で、ヒーローになると常に行動しているが、ヒーローになる為の努力は一切していない。

要するに口だけの男なのだ。

だから、久思の様にいじめられている者を見付けては、友達にな

り、俺が守ってやるなどと言いながら、結局は何のかんの理由を付けて守らない。

昨日の久思が受けていたいじめも、部室にいたなどと言っているが、ここからでも夜衣斗が上空に見せていた映像ははっきり見える。悪を許さず、正義に憧れる。

その気持ちは本物なのだろう。

だが、それが行動になって伴っていないければ、その思いで集まった友達は離れる。

久思は博と友達になってから、博と親しげに話す者を自分以外に見た事がなかった。

だからなのか、博の言動はどんどん危険な物になるばかりで……特に黒樹夜衣斗が転校してきてからは、より酷くなり、物にまで当たっている。

そんな彼に、もしここで、強く反論などすれば……どうなるか久思には分かっていたが、分からない事にしていた。

結局は、久思の味方になっているつもりのも、久思をいじめていた連中と何も変わらない。

まあ、金品を要求しないだけでましだし、今の所、久思にも博以外の友達がいないのが現状だ。

そう思えば、我慢も苦ではない。

……だが、ふっと夜衣斗の事を思い出す。

自分とは違うタイプに見えたが、本質的には近い感じがした。

そして、彼なら本当の友達になれそうだ……そう久思は思った。

だが、それを博は許さないだろう。

何故なら博は、武霊使いではないからだ。

???

博も久思も武霊使いではない。

だが、久思のそれは、星波町に来て日が浅いと言う事も起因している。

しかし、博は違う。

博は、小学生の頃から星波学園に通っている。

武霊使いになる確率と要素は久思より高い。

だからこそ、博は久思を友達にしているとも言える。

何故なら、博は自分自身の武霊が具現化するのを切望しているのだ。

正義の力を『安易に』手に入れる為に……。

そんな風に切望しているのに、明確なイメージがあるのに、なかなか具現化しない。

それは博が危険な目に遭ってない事も意味しているが、安易に力を手に入れようとしている男だ。そんな事をするはずもなく、するはずも無いくせに、危険な目に遭って武霊使いになった者に憎しみに近い妬みを抱く。

その妬みを抱く相手・夜衣斗が、武霊使いになり、それどころか、まるで博が憧れている正義の味方の様に活躍した。

活躍したのに、正義の為にその力を使わない。

あの不良達を懲らしめもしない。

そう博は思っていた。

だから、非常にいらついている。

もつとも、そのいらつく要因の一つに、昼休みの始まりに校内放送で統合生徒会から放送された、あの不良達の退学処分通達もあるだろう。

そんなんじゃ正義じゃない！

そんなんじや悪は滅びない！

だったら何の為の力だ！

だったら何故俺に力がない！？

何故？何故？何故っ！？

その思いで、机や椅子にやつあたりをしてみよう。

「……………博、そろそろ昼休みも終わるよ」

その言葉に、博ははっとした。

感情に身を任せて、随分と暴れてしまった。

だが、それでも壊れている机や椅子が無いのは、幸いなのか不幸なのか。

それが博をよりイラつかせた。

そんな時、

「力が欲しいんだ？」

そんな言葉が聞えた。

その言葉は、博の感情を逆なでしたが、今回は感情を抑える。何故ならその声はどう考えても幼い子供の声だったからだ。

声のした方向に視線を向ける。

部室の窓枠に腰を掛けるショートカットの少女がいた。

ブラブラと宙に浮く足を揺らし、肘や膝まで短くしているゴスロリな服を着ている少女は、向けられた視線に、獰猛な笑みを浮かべる。

「やるつか？力」

そう言いながら、少女は手の中にある『注射器』を片手お手玉していた。

夜衣斗

「プ～リ～ン～。プ～リ～ン～」

深夜に近い夜。寝ようかになって時に、不意に部屋のドアが開いて、何だかおどろおどろしく春子さんが入って来た。

「プ～リ～ン～。プ～リ～ン～」

……いや、何なのよ？プ～リ～ン～って……いや、まあ、プリンなんだからうけど……

「や～い～と～く～ん～。プ～リ～ン～た～べ～た～で～しよ～？。食べてないけど……」。

なので首を横に振ると、春子さんは、ゆら～って感じで机の横にあるごみ箱を持ってひっくり返した。

コロ～んとでっかいプリンの容器とプラスチックのスポーンが出てくる。

な～！？どう言う事～！？

全く身に覚えのないプリンのカラ容器に、俺が驚愕していると、春子さんは俺の顔をじい～っと見て、涙目になる。

「た～の～し～み～に～、し～て～た～の～に～」

うらみがましく俺にそろそろと近づく春子さんに、俺は後ずさりながら、

「っわ、わかりました。買ってきますから！」

っと言わざる得ず、その言葉を聞いた春子さんはあっさり涙を引っ込め、にっこり笑って、

「じゃ、でっかいプリンをよろしくね」

っと言ってそそくさと部屋から出て行った。

……。……。……。……。

思わず心の中で突っ込みを入れたが……それにしても……誰が、何で……って容疑者は二人……っと言うより二匹しかいないな。

美魅さん？

っと心の中で呼びかけると、

(あたいたいじゃないわよ?)

っと直に返事が返って来た。

つとなると、

じろつとベットで転がっているメガネベアを見た。

コロんつと背を向けるメガネベア。

.....

俺は無言でメガネベアの頭を鷲掴みにして、持ち上げて顔をこっちに向かせる。

.....プリンらしき黄色と茶色が口の周りに付いていた。

.....さて.....弁解の言葉はあるかな？

.....は？ちよつと小腹が空いたので.....ってか、何か食べる

んだあんたら？

(あたいは人間が食べる様な物は必要ないだわよ)

じゃあ美魅は何を食べるんだ？

(人の思いだわね)

人の思い？

(感謝、信仰、恐怖、喜び、人から発せられる思いなら何でもい

いだわよ)

.....本当に妖怪なんだな.....

(まあ、あたいたいみたいなタイプもいれば.....)

メガネベアみたいなタイプもいると.....

俺の視線に、目を反らすメガネベアに、俺は深い溜め息を吐いた。

「???」

「くそ！ムカつくぜ」

「ああ！なんだってんだあのくそ女！何様だってんだよ！」

「っは！統合生徒会長様だろよ！」

「っち！俺にも武霊があつたらよ！」

口々に勝手な事を言いながら、今日退学処分を言い渡された不良達はコンビ二の前でたむろしていた。

「なあ？どうするんだよ。これから」

その仲間の言葉に、リーダー格の男は笑みを浮かべた。

「……決まってるんだろ？あのくそ無口野郎をぶつ殺すんだよ」

リーダーのその言葉に、不良達は騒然となる。

「っで、でもよ。そんな事したら……ってか、無理じゃね？そんなの。俺ら武霊使いじゃねえし、武霊使いだったとしても……見ただろ？今日の」

「っは！誰が俺らがやるって言った？」

「っあ？」

「連中に頼むだよ。連中にな」

「……って、まさか！『鬼走人骸！？』きそうじんがい」

「ここで人殺しなんて出来る連中の中で、頼んで動いてくれる連中はあいつらしかいねえだろうが」

「確かに連中ならあの無口野郎を殺せるだろうけどよ………だけだよ。あいつらは……『外でも』やぐざとか平気で相手する奴らだぜ？……俺らが……逆にあぶねんじゃね？」

「っは！だからどう……ああ！何だてめえ！？」

不意にリーダーが顔を別の方向に向け、声を荒げたので、取り巻き達は視線をリーダーと同じ方向へと向けた。

そこにはコンビ二の光が届いていない闇があり、僅かに誰かの足

が見えている。

「てめえは………」

ゆっくりと姿を現すその男に、不良達は見覚えが、

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 16

美羽

土曜日の放課後。

私は夜衣斗さんのおごりで、駅前にある喫茶店のパフェをごちそうになっていた。

今の夜衣斗さんにはお金に余裕がある。

それは昨日、発生したはぐれを一人で倒したのとか、剛鬼丸・高神姉弟・五月雨都雅戦とかの報奨金が今日出てて、夜衣斗さんは言わば武霊成金状態ってわけ。

つで、夜衣斗さんからなんか言い辛そうに、一昨日のお詫びについておごって貰ってるわけなんだけど………なんで、彼女もここにいるんだらう？つて、私と同じ理由か………でも、部活は？

などと思いつながら、私はパフェをパクつき、私の隣に座っている巴先輩を見た。

彼女、どうも私や夜衣斗さんと違って甘い物が苦手みたいで……

大盛のスパゲティを食べている。

………相変わらずよく食べる人………その栄養が胸に言ってるのかしら………

ついつい視線が巴先輩の胸に行ってしまった、その視線に気付いた巴先輩は困った表情になった。

私も何だか恥ずかしくなって、視線を夜衣斗さんの方に逃がすと、夜衣斗さんは黙々と私が注文したパフェと同じ物を食べていた。

どうも夜衣斗さんは、私と同じ様に甘い物好きみたいなんだよね

………

つて、事は、

「夜衣斗さん。甘い物好きなんですか？」

私の問いに夜衣斗さんは頷いた。

「じゃあ、この間見たいにお菓子作ったら夜衣斗さんにも分けて

あげますね」

って言ったら、夜衣斗さんは何だか微妙な雰囲気になって……ちよつと間を開けて頷いた。

………なんでだろ？私のお菓子って、食べた人を微妙な雰囲気になるんだよね………本当に、なんでだろ？

そんな疑問を思っていると、喫茶店に東山さんが入ってくるのが見えた。

後ろに珍しく部下らしき人を引き連れて………どうしたんだろう？私の疑問の視線に、気付いた東山さんは、いつものへらへら顔をこつちに向け、手を振って来たので、眉をひそめた。

その嫌そうな私の顔を見ているだろうに、東山さんは気にせず私達の席に近付いたので、二人も東山さんの存在に気付いて視線を向ける。

夜衣斗さんは面識がないから不思議そうに私に視線を戻していたけど、飛矢折さんはあの事件で面識があるのか、小さく、

「刑事さん？」

つてつぶやいたのが聞えた。

「やあやあ美羽ちゃん」

「何ですか？私に何かあるなら、美春さんを通す様についてこの間言われたばかりじゃないですか」

五月雨都雅の事件の後に美春さんが言い出したことなんだけど……もう忘れたのかな？……東山さんならありえる。

「ん〜そうだね………だけど、今日は美羽ちゃんに用があつて来たんじゃないんだよ。残念」

「はあ？」

じゃあ誰に用が………つて、そう言えば、五月雨都雅の件で夜衣斗さんと飛矢折さんに話を聞くつて言つてたけ？

そう気付いた私に、東山さんの次の言葉に私は思わず目を見開いた。

「用があるのは、黒樹夜衣斗君。君だ。うん。まあ、初めまして

で何だけど、ちょっと署まで来てくれないかな？」

え？っど、どう言う事？

私はその言葉に動揺していると、

「どう言う事です？」

つと巴先輩が聞いてくれた。

「うん。昨日の深夜ね。廃工場の近くで殺人事件が起きたんだ。

つで、その近くのコンビニで、黒樹君が目撃されててね」

「はあ？なんでそれだけで、わざわざ夜衣斗さんが警察署に行かなくちゃいけないんですか？ここで」

すませばいい話じゃないですか。そう言おうとして、東山さんにとんでもない言葉で遮られた。

「だって、黒樹君がその殺人事件の容疑者だから」

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 17

飛矢折

サラッと云ったその言葉に、あたし達だけでなく、喫茶店内にいた全員の視線が黒樹君に集まった。

その黒樹君は、その視線を特に気にもせず、黙々とパフェを食べ
てて……って、黒樹君！そんな状況！？

「……えつと……今の聞いてたかな黒樹君？」

流石の刑事さんも困惑した表情を夜衣斗さんに向けていた。

「うん。まあ、勿体ないよね。まあ、食べ終わるまで待つよ」

軽い笑いを浮かべながら、黒樹君の隣に座る。

……何のこの人。

「一体どう言う事です！？夜衣斗さんが容疑者だなんて！」

赤井さんは感じた不快感を隠しもせず、あたしも思った事を聞いてくれた。

「木曜日、黒樹君はある不良グループといざこざを起こしたんだ
つてね？」

刑事さんの言葉に、あたしも赤井さんも眉をひそめた。

……まさか！？

「そう、殺されたのは、その連中。しかも、人間の仕業とは思えないほど無残な殺され方をしていたんだよ」

「でも！……だからって夜衣斗さんが容疑者にならなくちゃいけないんですか！？武霊使いは他にもいるでしょ？」

「彼らと接点がある武霊使いは、今の所黒樹君しかいないんだよねえ。連中、どうも武霊使いとは極力接触しないで不良行為をしてみたいだからねえ」

……確かにそれでは黒樹君が疑われても仕方がないと思うけど
……もし、仮に黒樹君が犯人だとしても……こんなに簡単に
見つかる様な犯行をするかな？きつと……いえ、絶対、分からない

い様にすると思うんだけどな………。そもそも、普段の彼が殺人を犯す様な人間だとは………。

ふっと、あの男を殺そうとした黒樹君の姿と、必死に殺さない方法で戦う黒樹君の姿が脳裏に浮かんだ。

矛盾した二つの行動。

それが意味するのは黒樹君が非常に不安定な精神を持つてるって事。

黒樹君に視線を移すと、もう少しでパフェを食べ終わりそうだった。

………今の様子から、今日の様子を思い出しても、いつもの彼で、とても殺人を犯した人間には見えない。

少なくとも、そんな事をした彼が、平然と日常生活を送れるのかな？

………ありえないでしょ？そんなの………。

そう思った時、黒樹君がパフェを食べ終わり、

「………行きましようか」

っと言って立ち上がった。

???

夜衣斗が任意同行で星波警察署に連れて行かれた話は、噂となつて星波町中に瞬く間に広まった。

しかも、

「東山！夜衣斗を逮捕とは、どう言う事だ!？」

激怒した美春が星波警察署の東山賢治が所属する少年課に乗り込んでいた。

どうやら曲解した噂を聞き付けて慌てて警察署に来たらしく、激しく息が上がっている。

星波警察署に武霊に関する専門の課はない。

それは武霊に関するあらゆる情報が忘却現象により外に出す事が出来ない為。

だから、賢治をはじめとする星波町警察の武霊使いは、表向きは普通の警官として活動している様にしなくてはいけない。

その為、賢治は星波警察最強の武霊使いと言われながら、少年課に所属している事になっており、いつもは大体少年課で待機している。

「やあ美春。元氣いゝ?」

「元氣じゃない!？ふざけるな!」

気軽に挨拶してくる賢治に、美春は近付き胸倉を掴んだ。

「わお！随分積極的なアプローチじゃない?」

「どう言う事だと聞いている!？」

「どうもこうもないよ。黒樹君は、昨日起きた殺人事件の最重要被疑者で、任意同行に依じて貰って今、取り調べを受けて貰っている所だよ」

「……………被疑者？犯人として逮捕されたわけじゃないのか?」

「今の所はねえ」

「そうか……………」

尊が真実を曲解していた事を知った美春はほっと一息吐き、賢治から手を離れた。

賢治は乱れた服装を正しながら、

「美春は、妙に黒樹君を気にかけているよなあ。何でだ？」

「……………」

「……………」ああ、そう言えば、『彼』も黒樹君と同じタ」

「黙れ！当時いなかった奴が……………知った風な口を利くな！」

思い付いた事を口にし美春を再び激昂させてしまい、賢治は肩を竦めた。

飛矢折

星波駅のホームで帰りの電車を待つ間、あたしはどうするべきか悩んでいた。

黒樹君は付いて行こうとするあたし達に、

「……一人で大丈夫ですから、二人は家に帰って下さい」
って言つて、一人で警察署に行ってしまった。

……黒樹君が殺人犯じゃないのは、あたしは確信出来る……

……でも、他の人はどうだろう？

この町に彼が来てからまだ一ヶ月も経ってない。

経ってないけど、彼の武霊の力は知れ渡っている。

今までの武霊の常識から外れた武霊だつて事を……。

よく知らない相手が、とつともない……危険な力を持っていて……

……その彼を暴行した不良達が、彼の目撃された近くで、武霊でしかありえない殺され方で殺された……しかも、その彼以外に不良達に接点がある武霊使いがいない。

……そんな状況の黒樹君を……疑わない人間はいない気がする……。

ホームに電車が入ってきて、ドアが開く。

待っていた他の人達が電車に入っていく中、あたしは電車に乗らなかつた。

ホームから出る為に歩きながら、あたしは携帯電話を取り出し、美幸に電話を掛ける。

「あ！美幸？……うん。そうなんだけど……あのね。突然で悪いんだけど、今日、美幸の内に泊めてくれない？」

美羽

自分の部屋の中で、私はぼーっとしていた。

付いて行こうとする私達に夜衣斗さんは、

「……………一人で大丈夫ですから、二人は家に帰って下さい」
って言うって一人で警察署に行ってしまった。

……………夜衣斗さんが人を殺すなんてとても思えない。

人を助ける為に、自分から傷付く様な人だよ？……………そんな人が

……………武霊を使って人殺しなんて……………段々ムカムカしてきた……………

あのヘボ刑事め……………こうなったら……………私一人でも真犯人を捕
まえてやる！

私はそう決意を固め、部屋から飛び出した。

飛矢折

「つで？当てはあるの巴？」

そう美幸に問われ、あたしは頷いた。

「一昨日の不良達が殺されたって事は、その不良達にいじめられていた人達が怪しいと思う」

「うん。まあ、そうだと思っけど……その人達が怪しいって言うのは、警察の人達も思うんじゃないの？それに、その人達の中に、武霊使いはいないんでしょ？」

「……うん。いない見たい……でも、武霊使いつて突然なるものでしょ？」

「……ん〜でも、ここ数日、誰かが死ぬ様な目にあつたとか、そんな話は聞いてないけど？はぐれだつて、黒樹君が発生直後に倒しちゃつたしね」

「……武霊使いになつたのを隠してたんじゃない？」

「だつたら、もっと早くに事件は起きてると思うんだけど……」

「……確かにそうかもしれないけど……そうじゃないって事は言いきれないでしょ？」

「……うん」

「とにかく、誰がいじめられていたか、調べてみる」

「それはいいけど……どうやって？」

「多分、一昨日の件で統合生徒会が調べていると思うんだ」

「そうかもしれないけど……教えてくれるかな？」

「やってみなくちゃ何事も分からないでしょ？」

美羽

「だから、ちょっと見せてくれるだけでいいんだって……言ってるでしょうが……！」

私の怒りに呼応して、背後に具現化したコウリユウが威嚇の声を上げる。

「だから、駄目ですわって言ってるでしょうが……！」

琴野の怒りに呼応して、背後に具現化したヒノカが威嚇の声を上げる。

「部屋の中で」

ぼそつとそれまで黙っていた好美さんが呟き、その背後に雪女の武霊・雪歌を具現化させる。

「武霊を具現化させるなって言ってるでしょ」

生徒会室の温度が一気に下がり、私と琴野は慌てて頷き、具現化を解いた。

それを確認した好美さんは、パソコンの入力に戻ったので、琴野と同時にほっとしてしまふ。

互いに顔を見合せて、同時に嫌な顔をする。

真犯人を探す為に、まずは殺された不良達がいじめていた人達の事を調べようと統合生徒会室に来ただけど………タイミング悪く、琴野と好美さんしかいなくて………いつものパターンになっちゃった。

「こんな事やってる場合じゃないんだけどな………」

「黒樹様の話はわたくしの耳にも入りましたわ。黒樹様が犯人だとはわたくしも思いませんが、だからと言って、学生であるわたくし達が犯人探しをするわけにはいきませんわ。よろしくて？」

「よろしくない！」

「聞き分けなさい！」

再び喧嘩になりそうな私達に、バンッとテーブルを叩く好美さん。雪歌はまだ具現化中で、にっこり笑ってる。

思わずビクツとしてしまった。しかも、琴野と同時に………。

そんな時、生徒会室のドアがノックされた。

「どうぞですわ」

ドアが開き、そこから巴先輩と美幸先輩が入って来た。

その二人の顔にピンときたのか、

「リストはお見せできませんわよ？ プライバシーの問題もありま
すし、警察にも止められてますので」

つと私に言った事と同じ事を言った。

だけど、巴先輩は首を横に振った。

「違うの。私達が用があるの赤井さんの方」

「え！？私？」

思わず自分を指差してしまう私に、巴先輩は頷いて、

「自警団の団長さんが私達に話があるって」

つと言った。

美春さんが？何だろう……。。

????

マジックミラー越しに美春は、取り調べ室にいる夜衣斗を見ていた。

今、夜衣斗がいる取り調べ室は、留置場と同じ様に武霊の具現化を封印する特殊な文字が書かれている部屋で、夜衣斗は部屋全体にびっちり書かれた武霊封印と言う文字を不気味そうに見ている。

「やあ。待った？」

取調室にのんき入って行く賢治に、夜衣斗は溜め息を吐いた。

「何その溜め息?……まあ、いいや。っで、黒樹君が言ってた話の証言は取れたよ。まあ、それだけじゃ容疑は晴れないけどね」

そんな事を言いながら、夜衣斗の対面に座る賢治。

「っで、君はどう思う?」

「……どうとは?」

「この事件に付いてだよ?」

「……… ついても何も、俺の目撃された廃工場の近くであの不良達が殺されたって情報しか入ってませんから………」

「ん。そうだったね」

夜衣斗の言葉に賢治はにっこりと笑って、手に持っていた資料を夜衣斗の前に置いた。

流石に賢治のその行為に、美春は驚くしかない。

警察資料を事件の容疑者に見せる事なんて、まずありえない事だ。つまり、

「……… やっぱり、初めっから俺の事を犯人だと思っていまませんね?」

今度は夜衣斗の言葉に驚かされる美春。

「へえ?何でそう思った?」

面白ろくに訊ねる賢治に、夜衣斗は溜め息を吐いた。

「……………簡単な話です。俺に任意同行を求めた時……………わざわざ、多くの人に見せ付ける様にしてみましたし、容疑者って言葉も使ってました……………普通は、そんな事を警察が人前で言わないでしょうし、被疑者って言うのが正式でしょ？」

その夜衣斗の説明に、賢治は笑い出した。

「あつはつはつは。いやいや、流石は今話題の黒樹君だ。つで？
どうして俺がそんな事をしたと思う？」

「……………実際、俺以外に犯行を起こす動機やアリバイのない武霊使いはいないんでしょう」

「それで？」

「……………同時に俺じゃない何か現場が死体に残されていた。では誰が？……………個人的な予想ですが、武霊使いが犯罪を犯した場合、登録された武霊使いや、その武霊が使われた瞬間を誰かが目撃していた・動機などがはっきりしているなどを抜かせば、犯人を見付ける事も、立件する事も難しい……………そうじゃありませんか？」

「うん。そうだよ。武霊使いの事件には、毎回毎回頭を痛ませているよ」

とか言いながら、全然頭を痛めてなさそうな呑気そうな賢治に、美春は溜め息を付き、マジックミラーのある部屋から、取り調べ室に移動した。

「あれ？ちよつと、駄目だよ？今、取り調べ中」

「夜衣斗君が被疑者でも何でもありませんなら、取り調べでも何でもないだろ？だったら、民間人の私がここにいても問題ないだろ？」

「まあ、そうだねえ〜いいよお〜」

あっさり許可した賢治に、美春はまたしても溜め息を吐いた。

夜衣斗

「……………簡単に言えば、俺を囮に使ったんでしょ？」

「囮だと？」

俺の言葉に、団長はじろりと東山刑事を睨み、肩を竦める東山刑事。

目の前の二人のやり取りを、俺はとりあえず無視して話を続ける。

「状況から考えて、殺された不良グループにいじめられていた者達の中の誰かが、武霊使いに覚醒して……………」

「ちよつと待て、武霊使いになるには、ある程度危機的な状況に陥らないと慣れないはずだぞ？そんな人間が……………そんな事が起きたと言っ話は聞いてないが？」

……………まあ、確かにそうかもしれないが……………

「全部が全部、危機的状況から自分の武霊を認識したって事じゃないでしょ？」

「……………確かに例外はなくても……………」

「……………それに、武霊使いの具現化レベルを上げる薬物があるんです」

「強制的に武霊使いとして覚醒させる薬物もあるって事か!？」

「……………まあ、可能性はあるって話です……………まだ、何も分かってないんでしょ？」

「……………ああ……………」

「……………まあ、今はその話はあまり重要じゃありません。重要なのは、『いじめられていた誰かが、犯行日かその前日近く出武霊使いになり、犯行を行った可能性が高い』って事です……………そして、その場合は、より犯人を見付けにくい。既に犯罪を犯した武霊使いが、自分の武霊を平然と登録しに行くわけがありませんし、人前で武霊を出す事もないでしょう……………」

「だったら、どうして夜衣斗君が囮にされる？」

団長の質問に、俺は東山刑事から渡された資料をめくった。

そこにある現場写真に、一瞬、クラッと来たが……多分、元々俺に見せる為に持ってきた資料なのだろう。死体の写真はなく、代わりに一面が血の海の写真が一枚貼ってあった。

その写真の中央には、血で書かれたであろう文字が、

『正義参上』

と書かれた血文字があった。

……その文字に、一昨日出会った二人の事をふっと思い出した。

……まさか……そんな偶然があるんだろうか……。

そんな事を思いつつ、俺はその写真を団長に見せた。

「……これが、あったから、俺が囮になると東山刑事は思ったんでしょ？」

「……どう言う事だ？」

「……自己顕示欲が強い奴って事です。……だから、別の人間が犯人として捕まったと言う噂を流せば、きっと激怒に駆られ、俺に襲い掛かってくる」か、『新たな犯行を犯す』はずですから……

……」

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 23

夜衣斗

俺の見解に、にやにやと笑う東山刑事と、驚いた顔をする団長。

「……………黒樹君は、こう言う何かがあると予想していたんだ……………」

「……………」
ん？……………何か団長の言葉が普通の言葉に戻ったよな……………まあ、とりあえず、

「……………ええ。俺が囮に使われているなって思った時、そうさせる何があるなって……………」

そう言いながら、資料を手元に戻し、そこに書かれている名前を見る。

……………おや？被害者は五人？……………確か連中、六人いたよな……………なるほど……………まあ、とりあえず……………えつと……………ああ、やっぱりそうか。

「……………俺が囮に使われたって思った理由は他にもあって……………」

「他つて？」

「……………行動が早すぎるんですよ。昨日の夜に事件が起こり、発覚したのは、今日の朝でしょう。それなのに、昼過ぎには、もう被疑者を決め、任意同行を求める」

「……………確かに早いわね」

「……………つまり、そこには理由がある……………つで、考えてみると、今日は土曜日です」

「土曜日？」

「ええ、明日の日曜日は、星波学園の生徒の半数以上が、容疑者となる生徒達の半数が、星波町からいなくなります」

団長に資料にある不良グループにいじめられていたとされているリストを見せる。

そのちよつと半分ぐらいの生徒が星波町以外の現住所。

「彼らの誰が犯人かは分かりません。全員が星波町にいる平日に、彼ら全員に張り込むのは、普通の人間なら平気でしょうが、相手が武霊使いとなると人員が足りないでしょう。……警察にそれだけの武霊使いがいれば、自警団が結成される必要性はありませんからね……だから、今日、少々不自然に見えても、俺を容疑者にする必要があつた。……もし、今日明日、星波町に住んでいる本当の被疑者達の誰かが動けば、それでよし。動かなければ、月曜日から残りの被疑者達に張り込めばいい。……そんな所でしよう？」

「おお！ 凄い凄い」

と言いながら、ぱちぱちと手を叩く東山刑事。

「まさしくその通りだよ。いやいや、噂以上だね、君は」

そう言つて、東山刑事はにやりと笑い。

「そこまで分かつてるなら手間が省けるよ。どう頼もつかちよつと悩んでた所だつたからね。うんうん。助かるねえ」

「頼む？ 何をだ東山」

…… 団長。また男言葉に戻つてる…… 忙しい人だ。

「決まつてるじゃない？ 函として、しばらく警察署に『泊まつて貰う』って事」

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 24

飛矢折

赤井さんの家で、団長さんから黒樹君の話聞いたあたし達。

あたしと美幸は、統合生徒会に不良達が誰をいじめていたか聞く為に星波学園に向かった。

その途中で、同じ様に誰がいじめられていたかを聞きに行った赤井さんを追って星波学園に向かっていた団長さんに会い、赤井さんと呼んでくる様に頼まれた。

間が悪い事に、赤井さんは星電を家に忘れていて、何かの事情があつて校内放送で呼ぶわけにもいかないわれ、首を傾げただと……黒樹君の話聞いた後だと、容疑者達に自分達が疑われていると少しでも思わせたくない為だと理解出来る。

それに、団長さんは星波学園卒業生だけど、もう学園の関係者じゃない。星波学園に学園関係者以外の人が入るには面倒な手続きが結構必要で、そんな事をやっているのなら、誰かが直接呼びに行つた方が早いつて考えた見たい。

話を聞いたあたしは、あの喫茶店の時点でそこまで黒樹君が考えていたのかと感心していたけど、赤井さんは別の事を思ったみたいで、急に立ち上がり、

「……………あのへボ刑事……………どこまで夜衣斗さんに迷惑を掛ければ気が済むのよ!……………ちょっと殴りに行つてきます」

「つちよつちよつと待った美羽ちゃん!」

物騒な事を言つて駈け出そうとした赤井さんを、団長さんは羽交い絞めにして止めた。

……………何と言うか……………赤井さんって時々過激になるみたいね……………。

「夜衣斗君も納得の上での事だからね。ね?落ちっこ?」

「落ち着いてますよ?……………落ち着いて殴りに行こうとしている

んです」

「なお悪いから！」

……何だかね……。

美羽

「でも、実際問題、真犯人は囷に喰い付くんではないか？」

そうぼそつと言う美幸先輩に、みんなの視線が集まる。

その視線に、美幸先輩はビクツとして、その腕の中にいたゆきちゃんの耳が動いたけど、暴れる事はなかった。

……何だかちよつと怖いんですけど……

「それに、真犯人の武霊が転位系の能力とかを持ってたら、いくら張り込んでても誰が犯人か知る事も、次の犯行を防ぐ事も、出来ないんじゃない？」

……確かに……そうなのかな？

ちらつと美春さんを見ると、美春さん特に困りもせず、

「黒樹君が言うには、あんな事をしておいて、現場に文字を残すような奴は、自分の正義に間違いなく酔ってるそうよ。そんな奴は次の犯行を抑えられない……って話」

……ん？何かおかしい様な……何か歯切れが悪いと言うか……。

私がじーつと美春さんを見ていると、ふいつと美春さんは視線を外した。

……長い付き合いだから分かるけど、美春さんって、何か隠した事があると目線話している相手に合わせないんだよねえ……

「実は次にターゲットになりそうな人がいるとか？」

ってカマを掛けて見ると、ちよつとだけ身体が反応した。

……。

全員の視線が美春に集まる。

ちよつとの間、沈黙。

そして、美春さんは溜め息を吐いて、

「殺人現場の死体がどんなに調べても五体分しかないそうよ」

って言った。

「……確か、あの時の不良達って六人だったような……って事は！」

「しかも、まるで死体が掻き消えた様な跡も残ってた……黒樹君も、東山も、不良の誰か一人が、『偽物を作れる武霊』を具現化出来る様になったんじゃないかって」

「じゃあ！犯人がその事を知ったら……」
美春さんは首を横に振る。

「可能性の話よ。もしかしたら、別の場所で殺されている可能性だってある。それに、もし生きてたとしても、しばらくは身を隠すでしょ？」

「でも！だったら、余計に保護（囿に）する為に探さないと。ね？美春さん」

「……保護……ね……」

私の言葉に、ジトおーっとした目を私に向けてくる。
本音が少し漏れてたかも……。

「……既に犯人に分からない様に密かに警察や自警団で探しているわ……」

「人員は多い方がいいでしょ？」

私が次に言い出す言葉を予測した言葉に、私はにつこりと笑う。
じーっと私の目を見て、美春さんは溜め息をまた吐いた。

「……何を言っても無駄そうね……」

そう言っつて美春さんは一枚の写真を取り出した。

不良達のリーダー格の写真だった。

夜衣斗

「ん〜高校生が泊まるには佻しい場所だけど我慢してなあ〜
？上手くいっいたらなんか奢るからさあ〜」

つと言って俺を東山刑事は留置場に連れてきた。

……まあ、表向きには被疑者だから……か？……

「断わっておくけど、俺は君が犯人だと思つてないよあ〜？」

俺の微妙な雰囲気を感じたのか、檻の中に入る俺にそんな事を言
った。

「……でも、他の連中は疑っている奴がいるからねえ〜。証明の
為にも、ここに居て貰いたいんだよあ〜」

……本心か？……

（どうだわね？こう言うタイプって、本心を隠す為にふざけた振
りをする事が多いだわね）

つと美魅。

……まあ、どうでもいいか……

俺の人生の中で、まさか留置場に泊まる事になるなんて……思
いもしなかったな……。

（いいじゃなだわね？きつと、よい人生のアクセントになるだわ
よ）

……そうだろうか？……今はとてもそうは思えないが……

なんか寒いし……まあ、置いてある布団は汚くないからいいけど
……よいアクセントね……そうならいいな……。

そんな事を思っていると、不意に俺の目の前の空間が歪んだ。

驚いて固まっていると、その歪みから、メガネベアがポンって感
じで現れた。

……瞬間移動？

(瞬間移動だわね)

こんななりして……………凄過ぎメガネベア。

そう思うと、メガネベアは照れた様に頭を掻き、片手に持っていたでっかいプリンをスプーンと一緒に差し出した。

……………差し入れ?……………ありがとう……………って、これ、どっから持ってきた?

その問いに、メガネベアは小首を傾げ、うちの冷蔵庫のイメージを送って来た。

……………あ……………まあ、いっか……………やっちゃったものは仕方がないし……………、

そう思った俺は、遠慮なくプリンを食べる事にした。

美羽

「うううう。プリンガー」

「いや、春子さん。なんか新しいロボットぽくなってから」

プリンが冷蔵庫からなくなってるぐらいで妙に落ち込んでる春子さんをなだめつつ、私は不良のリーダーの行方を追っていた。

春子さんはその付き添い。

危ないかもしれないからって付いてきたんだけど……思い出したかの様にプリンプリン言うから、何だかちつとも探す事に集中出来ない。……何だかわざと探させない様になっているみたい……まさか春子さんがそんな事するわけない……よね？それにそうする理由がないし……天然？

そう思った時、上空で匂いを追っていたコウリュウ（具現化レベル0.5・手乗りサイズ）が一声鳴いた。

見付けたの！？

コウリュウが少し離れた上空で旋回し始める。

「あそこね」

「え！？ちよ、ちよつと春子さん！」

不意に真面目になって走り出す春子さんに、私は慌てて後を追った。

星波町の至る所に空き家や空き地がある。

これは武霊が発生する様になってから、様々な理由で星波町を離れた人が多いから……武霊が発生する前から比べたら、星波町の総人口は減少し続けているみたい。

それでも町として維持出来ているのは、星波学園があるからで、学園からかなりのお金が町に入ってるのか……商店街とかも今では学生重視の販売展開をしているし……

って、そんな事より、

「春子さん」

空き家の玄関前で立ち止まっている春子さんにやっと追い付いて声を掛けると、春子さんは口に人差し指を当てた。

何故か目を瞑ってて……まるで空き家の中の気配を探ってるみたい……漫画家ってインドアな職業のくせして妙に足が速かったし……なんか今までのイメージの春子さんと全然違うんだけど……。

違和感を物凄く感じる春子さんは、少しして溜め息を吐いて、

「駄目ね。偽物だわ」

って言った。

「え？でも、コウリュウがここにいるって……」

「匂いまで再現する能力を持った武霊なんですよ？……まあ、信じられないか……」

戸惑う私に、春子さんは玄関を開けて中に入った。

鍵が壊されていたみたいだけど……春子さんのあまりの躊躇なさに啞然とするしかない私。

「美羽ちゃん？」

「え？あ！はい」

不良のリーダーは空き家の今の隅にいた。

……でも、何か変で、私達が姿を現しても何の反応も示さず、ぼーっとしている。

「……流石に魂までは再現出来ないって事かしら？」

そう言っただけで春子さんは不良のリーダーに近付いた。

その瞬間、不良のリーダーがいきなり春子さんに襲い掛かる！

「コ」

ウリュウを具現化させる前に、春子さんは不良のリーダーの腕を掴み、背負い投げ。

床に叩き付けられた不良のリーダーは、その姿を霧散させた。

「ほら、偽物だったでしょ？」

って私に笑顔を向けてくる春子さん。

確かに偽物だったけど……

「は、春子さんって強かったんですね……」

「ん？……まあ、私のお姉ちゃんに死ぬほど鍛えられたからね……」

そう言う春子さんは、何だか遠い目をした。

……そう言えば、妙に夜衣斗さんのお母さんの事を怖がってたっけ……なるほど、そう言う事が……

飛矢折

「また偽物見たいね……………これで五体目だっけ巴？」

「……………そうね」

襲い掛かって来た不良のリーダーの偽物を組みふせているあたしに、美幸は平然と話し掛けてきた。

……………もうちょっと心配してくれてもいい気がするんだけど……………

……………まあ……………いいけど……………。

何か釈然としない気分になった時、偽物は霧散してしまう。

不良のリーダーの偽物……………そう言えば、名前を聞いてなかったような……………どうでもいいか……………は、星波町の至る所にいた。

あたしと美幸と団長さんで不良のリーダーを探し始めて数時間。

その間に赤井さんや警察・自警団の人達が見付けた偽物は百近くで、一向に本物を見付けられないでいた。

厄介なのは、見た目上は普通の人間に見える上に、近付くと襲い掛かってくる事。

下手に武霊とかで攻撃して、万が一本物だったら大事になるから武霊を使えず、不良のリーダーの偽物だからか、それなりに強かったりして、警察。自警団の人達は苦戦している見たい。……………多分、犯人に気付かれない様に探さなくちゃいけないから、集団で対応出来ないのがより苦戦させているんだと思う。唯一助かっている点があるとするれば、偽物を大量に作っているせいなのか、偽物一体一体は脆いって事……………かな？今みたいに、組みふせただけの、ちよつとしたダメージでも霧散してしまうほど脆い。

あたしは団長は徒手空拳でも対して苦戦しないからいいけど……………赤井さん達の方は大丈夫なのかな？

……………「こう匂いまで再現されていると、私のコロ丸でも探すのは難しいな……………」

そう言う団長さんの足元には子犬サイズになった団長さんの武霊・
コロ丸がちょこんと座ってて……………なんだか可愛い……………うう。撫
でたい……………ああ、でも……………今はそんな事をしている場合じゃ…………
「……………別に撫でてもいいぞ？」
不意に団長がそんな事を言ってきた。

……………もしかして、心の中の葛藤が外に漏れてた？……………つつつ。
恥ずかしい。

思わず顔を赤らめるあたしに、何故か美幸は溜め息を吐いた。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 29

夜衣斗

（夜衣斗。お客様だわよ）

そんな美魅の声に、寝ようとしていた意識が叩き起こされた。

……客だつて？……せつかく人が気持ちよく眠りに就こうとした時に……誰だよ。たく！

眠りを邪魔されたせいで苛立った俺は、がばつと上半身を起こすと、鉄格子の向こうに美羽さんと飛矢折さんがいて、驚いていた。

……あ……何やってんだか俺は……
自分の心の狭さに、思わずため息が出る。

「えつと、夜衣斗さん。美春さんから話は聞きました」

……そう言えば、どうせ俺の為に動こうとするだろうから、二人を止めてくれませんか？つて団長に言ったけ……って、ここに
いるつて事は、止まっつてないじゃん……まあ……そりゃそうか……二人は言つて止まる様なタイプじゃない……そう考えると、
結構似た者同士なのかもしれない。この二人。

「今日中に夜衣斗さんをここから出したかつたんですけど……」

……しゅんとする美羽さん。

「隠れている不良のリーダーも見付からない上に、星波町にいる容疑者にも動きは今の所ないみたい」

つと現状を説明する飛矢折さん。

……まあ、予想の範囲内か……なら、

「……今日の夜に何も起こらなければ、犯人は星波町の外の人間つて事になりますね。その場合は、明日、二人は何もしなくていいですよ」

その俺の言葉に、二人は不思議そうな顔をした。

「……安易な力を持って、その力に酔っている奴は、我慢なんか出来ない。そして、正義をうたってるなら、きっと、不良のリーダーが生き残っていると知らなくても、他の悪を断罪するでしょうかね」

夜衣斗

「でもそれって……誰かが殺される可能性があるって事だよな？
……そんな可能性があるのに何もしないわけには……」

その飛矢折さんの言葉に、俺は眉を歪めた。

……別にクズが知らない所で死ぬならいいじゃん。
……とダークな考えが浮かんだからだ。

まあ、幸い、眉の方は前髪で隠れているから、眉の動きは分からないだろうが……さて、どうしたものか……まともな思考で考えれば、確かにそれは不味い。心のどこかでほっとけと言っているダークな俺がいるが……

「……不良のリーダーが見付からないのは何故です？いくら密かに探しているとは言え、星波町規模の町なら何とかかなると思っただけです……」

「偽物がいるの」

「……偽物？」

「しかも大量に」

……なるほど、偽物を作る能力もしくは機能を持った武霊だとは予想していたが……大量にね………だったら、

「……その偽物を囮に使いませんか？」

その俺の提案に、二人は難しそうな顔をして顔を見合わせた。

「その偽物、大量に具現化させられているせいなのか、あまり丈夫じゃないんですよ」

……と、今度は美羽さん。

「しかも、ちよつとでも視界に入ると、いきなり襲い掛かってきますし………多分、無理です」

……ちよつとでも視界に入るとね………つまり、視覚しか再現されていないって事かな？……なるほど……じゃあ、これな

らいけるんじゃないかな？

「……ちよっと試して欲しい事があるんですけど………」

飛矢折

黒樹君が言った試して欲しい事は……………見事に成功する。

でも、それを試す前に、まず偽物を探すのに苦労した。

黒樹君に話に行く前に、あらかた見付けて倒しちゃってたみたいで……………新たな偽物を見付けた時には、日が暮れてしまっていた。

黒樹君の作戦。それは、偽物が視覚に頼って行動しているなら、光学的な幻影で隠れている場所から釣れ出す事。

そして、今、幻影を使える武霊を使って、偽物は町の中をうろろらせているみたい。

……………これでうまくいけばいいんだけど……………。

そう思いながら、あたしは警察署に向かっていた。

日が暮れた後、団長さんにやや強引に帰らされてしまったから、仕方がなく黒樹君の所に向かっている。

手には美幸の家で作らせて貰ったおかずとかご飯と、前に美幸の家置いて行ったお泊りセット。

つまり、黒樹君を一人であんな留置所に泊まらせるのは忍びないと思って……………何やってるんだろ……………あたし。

美幸にちょっと強引に促されたからって……………ちょっと不味いんじゃない？……………。

そんな事を思いながらも、足は警察署に向い、辿り着いてしまう。

そして、同じタイミングで警察署に着いたであろう赤井さんと顔を合わせ……………微妙な雰囲気になった。

美羽

……………なんで巴先輩がここにいるんだろう？……………まさか……………夜

衣斗さんの事が？

何だか顔が赤くなってきた。

私のその反応に、巴先輩も顔を赤くして、

「うち！違うからね！っこ！これは……っそ！そう。お礼よ。
お礼」

……お礼って……

「それって……この間済んでません？」

「まだ、全然！全然よ」

「……」

「っほ！ほんとだからね！」

「……」

「違うからね！」

……何だか見た目はカッコいい巴先輩がこんなにつるたえるな
んて……結構可愛いかも。

夜衣斗

……………えっと……………

「……………お二人とも、何でここにいるんです……………こんな時間に……………
そんな大荷物で……………」

「と俺がもつともな疑問を口にするると、美羽さんと飛矢折さんは顔を見合わせた。」

「一人じゃ寂しいかな？つて思つて、来ちゃいました」

「あたしも同じ感じかな？」

……………美羽さんはある程度予想出来たから……………まあ、あまり驚か
なかつたけど……………飛矢折さんまでくるとは思わなかつたな……………
じーつと飛矢折さんを見ると、飛矢折さんは顔を赤らめそつぽを
向いた。

……………あまり深く考えない事にしよう……………変な希望は身を滅ぼ
す……………つと……………。

「夜衣斗さん。夜衣斗さん。じゃーん。こんなの持ってきちゃい
ました」

「つと言つて美羽さんは、持っていた大きな紙袋からゲーム機を取
り出した。」

……………？……………なんかあの箱の凹み……………見覚えある様な……………。

「夜衣斗さんの部屋から持ってきてきました」

あ……………やっぱり？……………つてか、もうちょっと配慮が欲しいな……………

……………一応異性の部屋なんですから……………。

「ソフトは……………一人でするものばかりだったので、春子さんが
借りてきましたよ」

……………まあ、前の学校では友達いませんでしたかね……………つと言
うか……………

「……………テレビは？」

俺の突っ込みに、美羽さんははっとしてうるたえ出した。

……………。

「えっと……………借りてきます」

つと言つて、脱兎の如く留置場から出て行った。

飛矢折さんと二人きりになり……………飛矢折さんはちょっと困った顔になって、

「えっと……………お腹空いてる黒樹君？」

つと言つて色々なおかずが入ったタツパーを差し出した。

……………そう言えば……………ちょっとお腹が減ったかな？

「……………いただきます」

鉄格子越しにタツパーを受け取り、一口……………！……………？……………

濃！

「それ……………あたしが作ったんだけど……………口に合うかな？」

つと不安そうな飛矢折さんの問いに俺は、

「おいしいですよ。とても」

反射的にそう答えていた。

「そう？」

俺の答えに、とってもいい顔に笑顔になる飛矢折さんを見て、俺は今日ほど前髪で自分の目を隠しているのに感謝した事はなかった。きつと今の俺の眉間は、あまりの味の濃さに物凄く深いしわを刻んでいただろうから……………いや、男なら普通はこうするだろ？……………
…多分。

星降り山の山中には、町の人にもあまり知られていない洞窟がいくつかあった。

これらは十年前の、正確には源さんがはぐれになる前に、はぐれによって掘られた穴である為で、更に妙な深さと長さがある。

その為、子供などが不用意に入り迷子にならない様に、存在そのものを秘密にし、折を見ては少しずつ穴を埋めていた。

だが、あまりにも深く長い為、その作業はなかなか完了せず、未だに洞窟は存在し、僅かに洞窟の存在を知っている者に利用されてしまっている。

「クソ！クソ！クソがあ！」

洞窟の奥の中で、不良のリーダーは絶叫していた。

その傍には全身が鏡の様な人型の武霊があり、洞窟の中を照らす光を発している。

この武霊は不良のリーダーが幼い頃から見ているミラーマンと言うCG特撮の主人公キャラが基になっており、その能力は全身の鏡に映った対象に何でも化け、偽物を作り出す事が出来る。その偽物は、ある程度行動パターンを決める事が出来るが、知能はなく、時間が経てば経つほど劣化し、簡単に壊れてしまう欠点を持っている。それでも、殺人現場から逃げ出すのには十分で、犯人は不良のリーダーも殺したと勘違いしているのは間違いない。

なぜなら、偽物を作り出した直後なら、例えばばらばらにされて暫くは形を保っていられるからだ。

だが、それも直に気付かれる。

だから彼はこの洞窟に隠れ、偽物を町中に放った。

その偽物も、今はほとんどが霧散してなくなっている。

恐怖が不良のリーダーの身を焦がし、怒りが湧き上がり、頭をかきむしった。

恐怖の矛先は仲間を殺した犯人に向けられ、怒りは……

「黒樹……夜衣斗……殺してやる！殺してやる！！」

飛矢折

黒樹君と赤井さんと一緒にレーシングゲームをやりながら、あたしはふと友達の家に泊まると言った時の、電話越しにやたらと心配していた兄達・弟達の事を思い出した。

たまに兄弟達がゲームをやっている所を見た事があるから、それで今の状況を連想したんだろうけど………そう言えば、

「黒樹君つてさ。妹さんがいるの？」

つとあまりしないゲーム中つて事もあつて、何も考えずに聞いていた。

引つ越しの手伝いをしていた時に、部屋の中に『お兄ちゃんへ』と書かれた手紙を見付けて、ちよつと気になつてたからなんだけど

………黒樹君から返事が返ってくる前に、

「夜衣斗さんに妹さんはいませんか？春子さんが姉の一人息子だつて言つてましたし」

つと言つたので、ちらつと黒樹君を見ると、黒樹君はあたしを見て頷いた。

………じゃあ、あの手紙はなんだつたんだろう？

そう思つたせいとか、黒樹君は頷いた後に、

「………手紙でも見たんですか？」

つと鋭い事を聞いてきた。

………まあ、ちよつと考えれば分かる事かな？読んだ後なのか、結構無造作に机に放置されていたから。

「手紙？どう言う事です夜衣斗さん」

つと赤井さんが聞いた時、ゲームの決着が丁度付いたので（一位赤井さん。二位あたし。三位黒樹君）、ゲームするのを自然と止めた。

私も赤井さんも興味津津な事か、ゲームに負けた事かで、黒樹君

は溜め息を吐き、

「……偶に両親が知り合いの女の子を預かってくる事があったんです」

知り合いの子？

「……よくは知りませんが、その女の子の両親は、うちの両親と同じく仕事でよく家を空けるそうなんです。っで、一人で留守番させるより、その子より年上である俺と一緒に居させた方がいいだろうって事になって、長期休みの際はよく一緒に過ごしてたんです……それで、何故か俺の事を入ったみたいで、俺の事をお兄ちゃんって言う様になつたんですよ……多分、飛矢折さんはその子からの手紙を見たんでしょう」

……両親が家をよく空けるね……なんか色々とおあるみたいね

……黒樹君って……

飛矢折

「つて事は、その子とは恋愛関係にはないんですね？」

つとあたしが聞いたかつたけど、聞けなかつた事をさらりと聞く赤井さん。

黒樹君はその質問に慌てると思ったけど………思いのほか無反応で、口元は苦笑していた。

「……… 本当の兄妹関係ってわけじゃありませんけど、小さい頃からよく一緒にいるんです。そんな事を思った事なんて一度だってありませんよ………それに、最近は直接あつてませんからね………向こうも中学生になって何かと忙しいみたいですから………」
つとちよつとさびしそうに言う黒樹君。

……… ちよつと分からない感覚かな？私の家は、祖父に、父に、母に、二人の兄、二人の弟がいるから、毎日騒がしくて、家族に対して寂しいって感じた事は……… 記憶にない……… かな？

???

「ええ……… そうよ。だから、大丈夫だって……… あのね。そうガミガミ怒られてもお姉ちゃん困っちゃうわ……… だからね。捕まったらわけじゃなくなつて……… はいはい。もう好きにしなさい。じやあ、切るね」

携帯電話を切つた春子は深い溜め息を吐いた。

(……… あの子の心配症にも困つたものね……… まあ……… でも、このままじゃお姉ちゃんだけじゃなく、あの子にも半殺しにされそうだし……… まつたく、何で夜衣斗ちゃんは次から次にトランプルに巻き込まれるのかしら………)

そう思いながら、春子は携帯をしまい、また深い溜め息を吐いた。
「春子さん？どこに電話していたの？」

隣で春子と一緒に町をうろつかせている不良のリーダーの偽物を見張っていた美春が不思議な顔をしていた。

春子はちよっと困った顔をして、

「夜衣斗ちゃんの……義妹かな？」

そのなんて言ったらいいか分からないと言った感じの表情に、美春は首を傾げた。

「まあ、夜衣斗ちゃんにも色々あるんです」

そう言って春子は苦笑するしかなかった。

夜衣斗

日曜日。

結局、昨日の夜はレーシングゲームを一回やって、多少話をしただけで二人は寝てしまった。

……まあ、俺の為に町中を奔走してくれていたのだから、そうなるのは当たり前だろうが……。いやあ、鉄格子がなかったらヤバかった。色々な意味で……。

(夜衣斗はエロエロだわね)

……と言った美魅の言葉が今でも脳裏を離れない……。ええ、どうせ俺はむっつり助平ですよ。って言うか、この二人ももう少し俺を男として警戒してほしい気がしないでも……。まあ、下手に飛矢折さんとかに手を出せば……。とつてもヤバい事になっていただろうが……。いや、てか、しないけどね。そんな事。

「昨日の夜は動きがなかったみたいですよ……」

昨日の結果を聞きに行った美羽さんは、顔を伏せた。

……まあ、予想の範囲内か……。今日もここから出られない事が確定した訳だが……。まあ、休みの日は大体ゲームしてるか、漫画読んでるか、王継戦機とかを書いているかしてないから、別に今の状態なら留置場においても、いつもの休日と大して変わらない。……だから、

「……そう気に病む必要はありませんよ」

……と言つと、美羽さんは、

「私は怒ってるんです！」

……と顔を上げて怒った表情を俺に見せた。

理由が分からず、思わず飛矢折さんと顔を見合わせていると、

「みんな、昨日の午前までは、夜衣斗さんの事を凄いだの、英雄

だの、言ったのに……………」

……………そんな事を言われてたのか……………勘弁してくれ……………。

「今じゃ、みんな夜衣斗さんの悪口ばかり言ってるですよ!？」

……………まあ、表向きは容疑者だし……………悪口を言われるのは当り前の気がするんだが……………これは、月曜日学校を公然と休めてラッキー。とか思ってるって言わない方がいいな……………怒りの矛先がこっちに向きそうだ。まあ、とりあえず、

「……………美羽さん。俺は知りもしない他人からどう思われていようと気にしませんよ。美羽さんや飛矢折さんが信じてくれるなら、俺は十分嬉しいですから……………」

……………なんか恥ずかしい事を言ってるな俺。

「夜衣斗さん……………」「黒樹君……………」

二人はちよつと恥ずかしそうな、嬉しそうな微笑みを浮かべる。

「……………それに、悪口だったら聞き慣れてますから」

「そんな事、聞き慣れちゃ駄目です!」「そんな事、聞き慣れない!」

二人同時に怒り、互いに顔を見合わせ、微妙な雰囲気になる美羽さんと飛矢折さん。

……………なんだかな……………まあ、何にせよ余計な事を言ってしまった様だ。

……………どうも俺は調子に乗ると直ぐにへまをするな……………

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 37

飛矢折

赤井さんと二人で朝食を買いに行つて留置所に戻ると、黒樹君は何故か熟睡していた。

「……寝てなかつたのかな？……考えて見れば、黒樹君なら同世代の女の子が近くで寝てれば酷く緊張するだろうし……余計な事も考えてただらうなあ」

「巴先輩。顔が赤いですけど……大丈夫ですか？」

「え！？うん。っへ、平気よ」

「？……そうですか？」

美羽

巴先輩つて、妙な所で顔を赤らめる事があるな……何でだろ？赤面症？

「……まあ、そんな事より……」

「今日はどうします？」

その私の問いに、巴先輩は困つた顔をした。

「昨日動きが無かつたつて事は、黒樹君の見解だとこの町の住人が犯人じゃないつて事だよね……」

「そう言つてましたよね……じゃあ、今日は何も出来ないつて事ですよね？」

「……そうなつちゃうよね……」

困つた視線を寝ている夜衣斗さんに向ける巴先輩。

静かに寝息を立てて寝ている夜衣斗さん。

「……さつき言つていた言葉が気になつて……早くこんな鉄格子の中から出してあげたいけど……私にはどうする事も出来なくて、ぎゅっと唇を噛み締めた。

???

震える手で、久思は注射器を握っていた。
ドアに鍵を掛け、雨戸さえ閉め切って、一切の光を排除した部屋の押し入れの中。

そこが久思の唯一安らげる場所だった。

その中で、手に伝わる注射器の感覚は、酷く異質なものに感じ、捨てたかったが、捨てられずにいる。

何故なら、それを渡された時、それを渡した女の子は言ったから、「別に使うかわらないかはあんたらの自由だけどよ。下手に捨てて、お前ら以外の誰かの手に渡ってみろ……食い殺してやるからな」

その際に出した女の子の武霊の恐ろしさに、身体が震える。

安らげる場所だと言うのに、安らげない。

どうする事も出来ない久思は、膝に顔を埋め、泣く事しか出来なかった。

そして、翌日の月曜日。

久思はそのまま学校を休み……

???

(くそ！くそ！何でだ！何でこんな事になってるんだ！)

博は心の中で絶叫しながら、学校の廊下を早足で進んでいた。

今朝、博が学校に登校すると、黒樹夜衣斗が不良グループ殺害容疑で逮捕されたと言う話で持ち切りだった。

その話を聞いた時、博は身体が震えるほどの衝撃を受けた。

何故なら、不良グループを殺したのは、

博だからだ。

金曜日。

博は部室で、謎の女の子から貰った注射器を躊躇いながら使った。女の子の正体とか、注射器の中身とか、注射器の針とか、色々な疑問や恐怖はあったが……

これを使えば、これを使えば、武霊使いになれる！正義の味方になれる！

その思いが、疑問や恐怖をあつさり押し退けた。

注射器を打った直後、強烈な意識のぐらつき、それに伴った吐き気と身体の震え、身体を這いまわる痒みと痛み、様々な不調が一気に押し寄せ、博は気絶。

目覚めた頃には、深夜になっていて……背後には、武霊がいた。博は驚喜した。

何故なら背後に現れたその武霊こそが、まさに博が待ち望んでいた武霊。

博が子供の頃から憧れているヒーロー。

影の中から現れ、悪を殺す。

絶対正義の復讐者。

全身黒色で黒いコートを羽織った顔のない男。

『シャドウリベンジャー』。

それが博の武霊の基となったヒーロー。

狂わんばかりに興奮した博は、そのままシャドウリベンジャーの能力を使って、影から影へ、星波町を自由に飛び回った。

そして、不良達を、久思をいじめ、かつあげしていた悪を見付け

.....

????

不良達全員をシャドウリベンジャーの能力を使って廃工場の近く、誰もいない場所に連れ去り……シャドウリベンジャーの刀で切り刻んだ。

少しづつ、少しづつ。

悪が、自分や久思に暴力を振るい、恐喝していた奴が、斬られる度に命乞いをする。

恐怖で、失禁し、涙と鼻水と涎と血でぐちゃぐちゃになる不良達の顔。

込み上げてくる感情に、博は驚喜し、満足する前に……殺してしまった。

だが、悪はまだだいる。

そう、例えば、力を持つてくるくせに、その力を正義の為に使わない黒樹夜衣斗。

あいつも殺そう。

惨めに、

無残に、

凄惨に、

殺そう。

シャドウリベンジャーなら、それが出来る。

そう思った時、博の視界が歪み、ふらついた。

初めての具現化だと言うのに、武霊の力を使い過ぎた為だったが、博はそれでもいいと思った。

何故なら、博が武霊使いになったと言う事は誰も知らない。

この殺人も、『謎の正義の武霊使い』によるものだと、言う事になる。

そう思った博は、不良達のバラバラ遺体が転がる場所に、その血

を使って、『正義参上』と書き、月曜日に膨れ上がった自分の話題を楽しみにしながら、博は町を出た。

（なのに！何で、あいつがやった事になってやがんだ！）

博が向かう先は、唯一の理解者だと、味方だと、仲間だと、『思っている』久思の教室。

深く考えての行動ではない、明確に何かを言おうと思っっているわけではないが、博はとにかく久思に会いたかった。

きつと、久思なら、理解して、認めてくる。

そうとでも思っていたのかもしれない。

だが、久思は教室に……………いなかった。

部室にも、いつも隠れている場所にも、いなかった。

探しても、探しても、いなかった。

（久思が学校にいない？どうして？久思を苦しめていた奴らはもういないのに？）

そう疑問に思った時……………理解した。

久思は……………違うのだと。

それに気付いた博の胸の内から込み上げてきたもの。

それは……………怒りだった。

方向性のない、どのにも向けられない。どこにも向けられる怒り。だからこそ、その怒りの方向は直ぐにある人物に向けられた。

黒樹夜衣斗へと。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 40

夜衣斗

「さてさて、今日はどうしようかねえ〜？ねえ？黒樹君」

とか言いながら、鉄格子の前でアイスクャンデーを食べている

東山刑事……………どうもこの人……………苦手だな。

「……………それを俺に聞きますか？そう言うのは、警察の仕事ですよ？」

「うん。まあ、そうだねえ〜……………めんどくさいから君が犯人って事で終わらしちゃおっか？」

……………
「っじよ、冗談だよ。そんな侮蔑を込めた目で見ないでくれよお」

……………何なんだろうなこの人は……………

「まあ、まあ、冗談は置いて、兇として使っていた不良君の偽物は日曜の明け方に消えて以降出てきてない。本物も未だに見つかっていないから、彼を兇にする事は出来ない」

やや真面目な感じになつた東山刑事に、俺は少々眉を顰めつつ、

「……………ですが、土日でも起こらなかった事が間違いないんです。それはつまり、町の外に住んでいる者が犯人だと言う事を示しています……………後は前にも言った通り、容疑者達を見張ればいいんじゃないんですか？星波町の容疑者達と違って、今回は犯人じゃない容疑者は、町の外に帰るんですから……………楽なんじゃないんですか？」

「まあ、その通りなんだけどさ……………」

やや溶け掛けた後ちよつとのアイスクャンデーを全部食べ、残った棒をフリフリと振り回す東山刑事。

「お兄さんとしてはもつと楽したいわけよ」

……………本格的にダメな人だな……………この人。

「ついで、君だったら、もっと楽な方法を考え付くんじゃないかなあ〜って思ったわけ？どうよ？」

「……もっと楽な方法ね……まあ、楽かどうかは分からないが……」

「……一つ、思い付いた事があります」

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 41

????

警察署がギリギリ見える道の曲がり角で、博はつろつろしていた。放課後、怒りに身を任せて警察署の近くまで来た博だったが、ふつとある事を思い出す。

警察署には、武霊の具現化を抑制する場所があると言う事をだ。

これでは黒樹夜衣斗が武霊を使えない絶好の機会であっても、こつちも武霊も使えないので連れ去る事が出来ない。

派がギチギチとなりそうなほどに強く噛む博。

殺す！殺す！殺す！黒樹夜衣斗を……………殺す！

そこに深い考えはない。

だから、このまま何もなければ、あるいはその怒りは別の対象に向けられていたのかもしれない。

そう、何も起きなければ……………。

ふつと博が警察署に目を向けると、丁度黒樹夜衣斗が警察署から出てくる所だった。

直ぐに人気がない所に連れ出そうとしたが、ここは人目がある。

だから思い留まり、博は自分の周りに人がいない事を確認すると、シャドウリベンジャーを具現化させた。

そして、自分を抱き抱えさせ、シャドウリベンジャーの能力を使って影の中に飛び込み、影から影へと渡り、黒樹夜衣斗を追跡し始めた。

博は黒樹夜衣斗の武霊には、偽物を作り出す能力があると噂で聞いていた。

だから、もしかしたらあれは偽物なんじゃないかと思ったが……………

…ほどなくして携帯を使い出し、誰かと会話している声が聞える。

博はそれに笑みを浮かべた。

武霊は喋れない……………これで、後はこいつが人気のない所に行け

ば…………。

そう博が思った時、まるで心でも読んでいるかの様な丁度いいタイミングで、人気のない道へと夜衣斗は入った。

あまりのタイミングの良さに、思わず警戒したが……………考えて見れば、夜衣斗はこの町に来て間もない。だから、人気のない道に迷い込んででも不思議じゃない。

だからこそ、博は自分を夜衣斗から隠れた影から出し、シャドウリベンジャー再び影の中に潜らせた。

夜衣斗の歩く前には、木の影がある。

そこを通り過ぎたそのタイミングで、シャドウリベンジャーに襲わせ、影の中に引き込む。

シャドウリベンジャーの能力では、シャドウリベンジャーを認識していない人間を影の中に引き込むと、その人間は瞬時に気絶してしまう。

それを利用すれば、夜衣斗に武霊を具現化させる暇さえ与えない。惨めに殺す！

夜衣斗の足が木の影に入る。

無残に殺す！

夜衣斗の身体が木の影に入る。

凄惨に殺す！

夜衣斗の身体が木の影から僅かに出る。

シャドウリベンジャー！

影からシャドウリベンジャーが飛び出し、夜衣斗の身体を掴み、

一気に引き摺り込む。

夜衣斗は予想通り武霊も出す暇もなく……………博はそれに黒い獰猛な笑みを浮かべた。

だが、次の瞬間、

その笑みは凍り付く。

「……………なるほど、そうやってあの不良達を廃工場に連れ去ったわけか」

背後から聞えて来た声は……………。

ゆっくりと振り返ると、前髪で目を隠した男。

シャドウリベンジャーに影の中へ連れ込まれたはずの黒樹夜衣斗が……………そこにいた。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』 42

夜衣斗

「……………当たって欲しくなかった予想が当たってしまったな……………。俺は思わず深い溜め息を吐いた。

それと同時に、驚愕して硬直している博の前に、俺の偽物を抱えた博の武霊が現れる。

「……………これって確か……………あれだったな。復讐を題材にしたダークヒーローアニメ『シャドウリベンジャー』の主人公シャドウリベンジャー……………だったか？武霊になってるせいかな、人間と同じ身長の設定なのに一二周り大きいな……………これ、面白いんだが……………俺はあんまり好きじゃないんだよな……………。」

俺の偽物を片手で抱え直したシャドウリベンジャーは、空いた手を影の中に入れ、影の中から刀を出し、俺に向ける。

俺は再び溜め息。

「……………サーバント。ショックブレイク」

俺の言葉と共に、軽い爆発と共に、俺の偽物は電流となり、抱えていたシャドウリベンジャーを襲う。

強烈な電流に、シャドウリベンジャーは硬直し、少し間を置いて霧散した。

「てめえ！」

自身の武霊が倒される光景に、驚愕から立ち直った博は、背後からシャドウリベンジャーを再具現化。

「セレクト、振動刀」

俺に襲い掛かってくるシャドウリベンジャーに、具現化したオウキは振動刀で、居合斬り。

シャドウリベンジャーの刀ごと斬り裂き、霧散させる。

「くそ！くそ！」

再々具現化をしようとする博を俺は敢えて放っておき、わざとシ

ヤドウリベンジャーを具現化させる。

そして、何もしない。

一撃で倒された為か、シャドウリベンジャーも警戒して動かない。

「なんなんだよお前！……………なんなんだよ！！」

……………っは、知るか。

間章その四 『容疑者黒樹夜衣斗』 43

美羽

「つまり、夜衣斗さんは、自分も犯人の対象になると考えていたんですね。つで、また自分から囮になった」

放課後、巴先輩と美幸先輩と一緒に警察署に行くと、物凄く怒った顔の美春さんと鉢合わせになり、夜衣斗さんが今、自ら囮になつてる事を聞かされた。

「いや、多分、東山に誘導されたんだろう」

囮になつて夜衣斗さんを追跡する為にレベル0・5のコロ丸を具現化しつつ、美春さんはそんな事を言った。

あの東山さんが

「誘導？」

あまりにも普通のイメージと違う言葉に、私は首を傾げた。

「あいつは、あんな感じだが、たまにそれを利用して自分の思った通りに動かそうとするからな……………」

…………それは、

「クズですね」

「クズだな」

「美羽ちゃん。美春ちゃん。そう言う事は、本人の前で言わないでくれるかなあ？」

つとか言い出す東山さんに、私と美春さんはほぼ同時に、

「本人の前だから言ってるんです」「本人の前だから言ってるんだ」

つと言って、東山さんから乾いた笑い声を出させた。

美春さんと一緒に警察署から出て来てただけ……………美春さんの怒りようから、絶対東山さんが関わつてると思つて、あえて無視してた。

まあ、でも、あんまり無視し続けられないし……………。

「そもそも、何で夜衣斗さんに誰も護衛を付けてないんですか？
遠見だつてしてないし」

その私の質問に、美春さんは困った顔をし、東山さんは面白そう
な顔をした。

「夜衣斗君が言い出したんだよ。万が一困だとはれると厄介だか
ら、何もしないでくれってさ」

夜衣斗さんが？……………まあ、あの夜衣斗さんだから護衛なんて
いらないだろうけど……………

「遠見もしちゃいけないと？」

「遠見だつて武霊の能力だからねえ。感の鋭い奴ならばれる事
だつてある。夜衣斗君は、それを警戒してるんじゃないかなあ」

……………ん？確かにそう言う人もいるって話だけ……………そこま
で考えているなんて、流石夜衣斗さん。

「まあ、だから、夜衣斗君が出てからしばらくして、コロ丸の嗅
覚で追跡しようって話になったわけ。分かったかい美羽ちゃん？」

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』44

飛矢折

……大丈夫なのかな？

東山刑事さん達の話聞きながら、あたしの脳裏に殺意に支配された黒樹君の姿が浮かんだ。

ああなったのは、あの男が黒樹君の酷い過去を刺激したからだけ…… 今回の犯人も、聞いた予想の限りだと…… 何だか黒樹君の酷い過去に近い雰囲気を持っている気がして…… 不安になった。もし…… もし、夜衣斗君が殺意に支配され始めていたら…… 遠見をさせなかったのって…… もしかして……
もつともなつて欲しくない想像をしそうになったので、あたしは慌てて首を横に振って、その考えを頭の中から追い出した。

その際に、隣にいた美幸があたし事を不思議そうな顔で見、ちよつと恥ずかしかつたけど…… それでより嫌な想像を頭の中から追い出せた。

黒樹君はそんな人じゃない。それに、昨日だって普通な感じだった。とても殺意に支配され始めている様には…… 見えなかった。だから、大丈夫、きっと。

そう思つて追跡に専念して、しばらくすると…… そこに信じられない光景が…… 思いもしなかつた最悪の光景が……

呆然と立ち尽くして下を見ている…… 確か、木曜日の放課後に黒樹君と話していた二人の内の一人がいた。

その彼の視線の先には……
道路に広がる血の海。

そこにうつ伏せに倒れている黒樹君。

そして、

「え？」

思わず驚きの声が漏れてしまう。

全員の視線があたしに集まり、血にまみれた包丁を持つ……あ
たしに再び視線が戻された。

????

こいつは何なんだ！こいつは一体何なんだ！

博は心の中で絶叫していた。

対峙している黒樹夜衣斗とその武霊オウキ。

夜衣斗自体は大した事はない。

博はそう思ったが、その後ろのオウキが圧倒的過ぎて……どうするべきか、どうしたらいいか、思考がぐるぐる回り、怒りや、恐怖や、後悔や、憎しみとか、溢れ出す様々な負の感情で視界が歪み、気持ちも悪くなる。

夜衣斗は何も言わない、何もしない。

それがより負の感情を煽り、一步、二歩と博は後ろに下がり始め、シャドウリベンジャーに背中をぶつけてしまう。

そこでハッと気付いた。

シャドウリベンジャーの能力なら……逃げられる！

その思考を読んだシャドウリベンジャーは、博を抱き抱え、影の中に入ろうとするが、その瞬間、

「セレクト。ライティングサーバント」

夜衣斗はオウキから白い球体のサーバントを出した。

そして、シャドウリベンジャーが影に入るより早く、白い球体が眩い光を発し、影を消し去ってしまう。

「……っで？次はどうする？」

その夜衣斗の言葉に……博は理解した。

夜衣斗は一つ一つ可能性を削ぎ、抵抗する気力さえなくす様に心を折ろうとしている事に。

何なんだよ……本当に、何なんだよこいつは……。

シャドウリベンジャーにゆっくりと地面に下ろされる博。

そこで博から具現化を維持する気力さえなくなったのか、シャド

ウリベンジャーはゆっくりと霧散して消えてしまっ。

「……………警察に行こうか……………」

そう言う夜衣斗に、博は抵抗すら出来るはずはなく……………ただ、
「俺は……………正義の味方だ……………正義の味方になっただんだ！」
そう絶叫するしかなかった。

その絶叫に、夜衣斗は特に嘲るでも、否定するでもなく、無反応のままオウキの具現化を止め、博から背を向けた。

そして、歩き出そうとした時、不意に足を止めた。

不審に思っただけで夜衣斗の視線の先に目を向けると、飛矢折巴が駆け寄ってくる所だった。

「……………どうしました飛」

矢折さん。っと夜衣斗は最後まで言えなかった。

何故なら、いきなり巴に抱き付かれたから……………そういう風に博には見え……………直ぐにそれが間違いだと気付く。

夜衣斗はゆっくりと倒れ……………地面に血の海を作ったからだ。

何だよ！何なんだよこれは！？

自分をおっさり無抵抗にした夜衣斗が、あっさり殺された。

その目の前の光景に、博はただただ呆然とするしかなかった……………そこに赤井美羽達と……………もう一人の飛矢折巴が現れた。

もう、わけが分からず、博は笑い出した。

笑い出すしかなかった。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』46

美羽

血の海に倒れている夜衣斗さんに、血まみれの包丁を握ってる巴先輩……………の偽物。

そして、壊れた様に笑ってる……………誰か。

さっきまで喋ってた巴先輩は隣にいるから、包丁を持った方は間違いなく偽物だろうけど……………倒れている夜衣斗さんは？……………偽物だよな？ね？

ふらつと倒れている夜衣斗さんに近付こうとした私を、美春さん肩を掴んで止め、自分が夜衣斗さんに近付き、首に手を当てて……………開いている目を閉じさせた。

「……………美羽さん？」

恐る恐る声を掛けると……………美春さんは首をゆっくり横に振った。

「あ、当り前だろ？」

それまで笑っていた誰かが、不意にそんな事を言った。

「そいつはさっきまで俺と喋ってたんだからな」

……………え？……………え！？……………嘘……………嘘でしょ？

だって、夜衣斗さんは……………夜衣斗さんは……………こんな簡単に……………

「連絡……………しないとね……………」

美春さんもやや呆然とした面持ちで、携帯を取り出した。

その時、不意に、巴先輩が自分の偽物にすつと近付き、目にも止まらない早さで……………何かし吹き飛ばした。

あまりの早さに反応しきれなかった偽物は、そのまま壁にぶつかって、霧散。

その手に持っていた言いた包丁が音を立てて道路に落ちる……………包丁は本物だった見たいね……………。

そして、溜め息を吐いて道の曲がり角まで歩き、誰もいない所で

立ち止まって、小声で何かをつぶやいた。

……あまりの事におかしくなっちゃったのかな？

そう思った時、何だか聞き覚えのある溜め息の聲がかすかに聞えた。

巴先輩の隣、誰もいない空間から……え！？

慌てて、倒れている夜衣斗さんを見ると、血と一緒に夜衣斗さんが霧散した。

って事は……ドッペルゲンガーサーバント！？え！？でも、喋ってたって……

驚く私達の前で、巴先輩の隣からすうっとPSサーバントを身に纏った夜衣斗さんが現れた。

飛矢折

不意に笑い出した多分犯人の男の子に、あたしは驚きから立ち直った。

……そして、冷静に状況を考えてみる。

まず、笑ってる男の子は……犯人。

私の偽物は……土曜日追っていた不良リーダーの武霊能力？

そして、倒れている黒樹君は……ふっと誰かの視線を感じた。

その気配を感じた場所を見ると、誰もいない道の曲がり角で……

感覚を研ぎ澄ませると人の気配を感じた。

……っと言う事は……もしかして……。

あたしはそう思いながら、自分の偽物との間合いを一気に詰め、

腹部に寸剄を叩き込んで吹き飛ばし……自分の偽物とは言え……

あんまり気分がいいものじゃないわね……倒して、人の気配のする

所に近付いて、

「やり過ぎでしょ黒樹君」

つとほそつと言うと……いつもの溜め息が聞こえ、P S サーバ

ントを着た黒樹君が現れ、血の海ごと倒れている黒樹君の偽物を消

した。

「……やり過ぎも何も……ここまでやられるのは、こっちも想

定外だったんですが……」

そう言いながらみんなの所に行き、頭を下げ、

「……すみません。ご心配をおかけしました」

謝ってくれたけど……

「どう言う事だ！？なんで！？なんで！？」

混乱した犯人の男の子の纏まってない疑問の言葉。

「だって、喋ってたじゃないか！？」

……確か、武霊って喋れないんじゃないか？

その疑問に、みんなの視線が集まる。

黒樹君は再び溜め息を吐き、小さなスピーカーの様なサーバントを具現化した。

「……………スピーカーサーバントです。武霊は喋れませんが、通信みたいな事は出来るでしょ？その応用です」……………スピーカーサーバントです。武霊は喋れませんが、通信みたいな事は出来るでしょ？その応用です」

黒樹君が言葉を発すると、その言葉を同じ声・言葉がスピーカーサーバントが発した。

「……………ドツペルゲンガーサーバントにも、本来ならこう言う風に姿を真似た相手の言葉を発せられるんですけど、それはオウキ自身が喋らせる機能だったせいかな、使えなかったのだから」

……………なんだかな……………

「黒樹君って、あまり武霊が好きじゃない割には色々試してるよねっ」

思わずそう言うと、黒樹君は苦笑して、

「……………性分です」

夜衣斗

あまりの衝撃の連続に、抵抗する気力さえなくしたのか、博は大
人しく東山刑事に手錠を掛けられた。

その手錠には留置場に書かれている武霊封じの文字が書かれてて
掛けられると武霊が出せなくなる仕様になってるみたいだった。

……………これからこいつはどうなんだろうな……………普通に考えれば、
普通の殺人事件として偽装するんだろうけど……………。

東山刑事が呼んだパトカーに博が乗り込む直前、不意に立ち止ま
り、俺を見た。

「黒樹夜衣斗……………お前はこんな力を持っていながら、なんで何
もしないんだ？……………同じ痛み、同じ恐怖、同じ悲しみ、同じ怒り
を持って……………何で正義の味方になろうとしない？」

淡々と、そんな事を言ってくる。

そこには何の感情もなく……………あるのは只の疑問って感じだった。

……………その疑問に応える答えは俺の中にある……………だが、それ
は複数で……………きつと博は納得しないだろう。

人は大体、一つの答えを求めたがるものだし、その結果が博の殺
人さえいとわない正義だったのだろうから……………。

優柔不断なのは分かっているが、一つの答えに纏める事が、いつ
も正しいとは限らない。

だから、俺の中の答えは、博の行動を肯定も否定も出来て……………
だが、まあ、少なくとも、

「……………決まってる……………俺は、お前じゃないからだ」
それだけは強く言える。

その答えを聞いた博は、どこか怒ったような、どこか寂しそうな
顔をして、パトカーに入った。

パトカーを見送りながら、俺は深い溜め息を吐いた。

自分が殺人者になる可能性をありありと見せ付けられたような気がする。

正直に言えば、博が殺した不良が殺された事実を知った時、殺人を否定する言葉はわかず、当然の報いだとか、俺が殺してやりたかったとか、浮かんで……ただ切り殺されただけと聞いても、なんて勿体ない殺し方をするんだっと思い、自分が知り得る拷問の方法さえ思い描き、オウキを使った無限拷問さえ考え……まあ、それはオウキの装備を色々と試していた時に考えたんだが……中学の時に俺をいじめた連中をネタに……考えた。

もっとも、その浮かんだ負の考えは、直ぐに否定出来たが……完全に否定出来たとは……言えないな。

（大丈夫だよ）

不意に美魅が心の中で語り掛けてきた。

（夜衣斗は、優しいんだよ。だから、大丈夫だよ）

……優しいね……まあ、確かに……悲しむ顔を見たくないかな？

俺の頭の中に、悲しい顔を見たくない人達の顔が浮かんだ。

最近はないが、負の感情に囚われた時、よく家族の顔が浮かんで、負の感情をギリギリの所で抑えていたが……今は……どうやらその顔が増えたらしい。

そう思って、ちらりと後ろを見ようとして……何だか恥ずかしいので……止めた。

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』49(終)

飛矢折

「これで容疑者黒樹夜衣斗は解決ですね夜衣斗さん」

「……………」
赤井さんのその言葉に、黒樹君は妙な雰囲気を出して沈黙。

……………多分、今回の事が、映画のタイトル見たいに言われたのが引っ掛かったんだろうけど……………。

黒樹君は深い溜め息を吐き、首を横に振った。

「……………まだ解決していない問題はありますよ」

「え!?!」

「……………飛矢折さんの偽物を作って、俺を殺そうとした不良のリーダーの事ですよ……………ドッペルの俺が殺された後、周囲をスカウトサーバントで調べたんですが……………それらしき姿はありませんでしたので、多分、転移系の能力か、遠隔操作系の能力を武霊が有している可能性が高いですね……………まあ、不良のリーダーを見付ける前に、飛矢折さんに発見された可能性もあるんですが……………」
……………ああ!だからあの時溜め息を吐いたのね……………

「ごめんなさい。そこまで考え付かなかった」

「……………いえ、あくまで可能性の話ですし……………正直、出て行くタイミングを見失ってしまいましたので……………」

……………まあ、確かにあの雰囲気の中に入って行くのは相当勇気がいるよね……………黒樹君ならなおさら。

「……………まあ、何にせよ。当分は何もしてこないとは思いますがどね……………」

?????

不良のリーダーのミラーマンには、基になったミラーマンにない二つの能力が付与されていた。

一つは、鏡から鏡へ瞬間移動出来る能力。

もう一つは、鏡の中からでも偽物を作り出せる能力。

この二つを作って、町を歩いている飛矢折巴をコピーし、包丁を持たせて、黒樹夜衣斗を殺した……はずだったが、何故か奴は生きていた。

これでこの手はもう使えない。

そう思った彼は、もう一つの手段に出る事にした。

だが、運が悪いのか良いのか、そのもう一つの手段である彼らはここ最近、星波町に来ていない。

だから、彼は待つ事にした。

彼らが、この町に来るのを。

そして、黒樹夜衣斗が油断する瞬間を……

間章その四『容疑者黒樹夜衣

斗』終

間章その四『容疑者黒樹夜衣斗』49(終)(後書き)

これで間章その四『容疑者黒機夜衣斗』は終了です。

次章は、第三章『奪われたオウキ』です。

引き続き読んでくれると幸いです。

第三章 『奪われたオウキ』 1

???

気持ちいい。

気持ちいい。

ああ、なんて気持ちいいんだ。

悲しみ、

憎しみ

怒り、

恐怖、

向けられる負の感情全てが、気持ちいい。

悲しみに沈む顔、

憎しみに歪む顔、

怒りに満ちた顔、

恐怖におののく顔、

ああ、どれも気持ちいい。

もつとだ！

もつとだ！

もつと気持ち良くさせる！

土砂降りの雨の中、次々と自警団の武霊を倒すオウキ。

高笑いを上げて幸野美春を踏み付けている大男。

頭から血を流し気絶している赤井美羽。

その美羽を背中に背負って走る飛矢折巴。

ぼろぼろでうつろな表情を見てる少女。

その少女の前で、少女に似た面持ちの女性が複数の男達に押さえ付けられ、ナイフで少しずつ服を切り裂かれる。

両手両足に手錠を掛けられ、身動きの取れない黒樹夜衣斗。
オウキを身に纏った大男。

その後ろに続く、何十体ものレベル2の武霊。
町を守る為に総力を挙げて対峙する自警団と武装風紀。
身動きの取れない夜衣斗を何度も何度も蹴り、踏み付ける少年。
抵抗すら出来ない夜衣斗は鈍い音を発し続け、床に血を

そこで彼は目を覚ました。

(なんてタイミングで予知夢を見るんだ……………)

あまりのタイミングの悪さに、彼は額に手を当て、深い溜め息を吐く。

(どれも決定的な場面ではなかったが……………どう見ても最悪な結末しか導き出せない)

彼はベットの隣に置いてある電動車椅子に腕力だけで乗り、備え付けているパソコンを起動させた。

(本当にどんどん予知が使えなくなっているな……………それほど彼が本来の運命をかき乱していると言う事なんだろうが……………それを喜ぶべきか、悲しむべきか……………)

起動させたパソコンをしばらく操作していた彼は、再び深い溜め息を吐いた。

(やはり監視が再開されているか……………これは誤魔化すのに時間がかかるな……………いや、そろそろ僕も、運命の選択をしなくちゃいけないと言う事なんだろうな……………)

そう思った彼は、とてつもない速度でパソコンを操り出した。

黒樹夜衣斗へ、最後の敵として、最後のヒントを送る為に……………

第三章『奪われたオウキ』2

夜衣斗

その人に会った時、俺は思わず立ち眩みでも起こしたかの様な錯覚を覚えた。

その光景はあまりにも、自分の中の現実からかけ離れていて……
……寒気すら覚えたと言ってもいい。

俺の目の前には、雨の中、傘も差さずにぼろぼろのワンピースを着て立っている同じぐらいの年頃の女の子がいる。

その首には、大型犬が付けるような首輪がされており、首輪に繋がっている鎖は、鍵を付けてガードレールに繋がられていた。

そう言うプレイっと言うにはあまりにも、彼女の姿がぼろぼろで雨でぬれた髪が張り付いているから顔は見えないが、見える手足には、打撲や切り傷が無数にあるのが見えて……。

今、俺がいる場所はいつも漫画雑誌と春子さんのプリンを買っている廃工場近くのコンビニ。

六月に入り、梅雨にも入った事もあって、長雨が続いていたので、傘を差しながらコンビニに行くと、そのコンビニの前で、彼女に遭遇した……っと言うわけだ。

(最近の日本は奴隷制度でも取り入れたのだわね?)
んなわけあるか!

(だわね)

だが、美魅が思わずそんな事を思いたくなるのは……領ける光景だった。

正直、時代と国が違い過ぎる。

……とりあえず警察か? いや、コンビニの前で堂々とこう言う事をして、それでもまだ警察が来て無い事からすると、コンビニの店員が通報に身の危険を感じる様な奴が関わってるのは間違いないな……っとなると、少し状況を確認してからじゃないと……何

かするには危険過ぎる。

そう結論付けた時、物凄い勢いでコンビニの駐車場に軽自動車が入ってきて止まった。

その車から、一人の女性が転げ落ちるように出て来て、繋がれている女の子に駆け寄った。

「ひより！あなた！ひよりでしょ！」

女性のその呼び掛けに女の子は無反応。

その無反応振りと、ぼろぼろな姿に戸惑い、困惑しつつ、女性は手で女の子の髪を上げ、恐る恐る顔を確認した。

そこに現れた顔は、女性とそっくりな顔で、二人が親子だと簡単に想像出来た。

「やっぱりひよりね！ああ、ひより、どうしてこんな姿に!？」

そう言っただけに抱き付く母親。

だが、娘のひよりは、それでも無反応。

よくよく見れば……………その目は死んでいた。

まるで、何らかの薬物でも使用されているかのように……………。

その娘の様子にショックを受けた母親は、

「つと、とにかく、病院に……………」

つとつぶやいて、鍵の付いた鎖を素手で外そうとし始めた。

かなり混乱しているのはありありと分かるが……………何と言っか

……………ここ、日本だよな？

(日本だよ)

俺の思わずの確認に、美魅が答えたその時、コンビニから二メートル以上はありそうな大男が現れた。

第三章『奪われたオウキ』3

夜衣斗

その大男は、まるで格闘選手かと思えるほどがっしりした身体付きをしていて、絶対に関わりたくない様な部類の傷跡を顔中に付けていた。

手にはコンビニのビニール袋があったので、思わず

こんな男でも普通に買い物するのか……

っと偏見ありありな事を考えたが、その偏見は……あながち間違っていないかった。

何故なら、その大男が鎖を外そうとしている……ひよりさんのお母さんを見た瞬間、

何の躊躇も、間もなく、その腹部に蹴りを放ったからだ。

吹き飛び、嫌な倒れ方をして、動かなくなる……ひよりさんのお母さん。

あまりの事に、驚いて固まっている俺を尻目に、大男はズボンのポケットから鍵を取り出し、鎖を外した。

その時、倒れている母親を見ていたひよりさんの瞳に、唐突に輝きが戻り、

「いやあああああ！お母さん！お母さん！」

っと叫び出し、母親に近付こうとするが、大男は無造作に鎖を引っ張り、ひよりさんを倒した。

そして、倒れているひよりさんの髪の毛を掴み、倒れている母親の方にむりやり顔を向けさせる。

言葉になつてない嗚咽とも悲鳴とも聞こえる声を上げ続けるひよりさんに……寒気が走るほどの残忍な笑みを見せ、大男は、武霊を具現化させた！

そこからは、ほとんど条件反射の様に、俺は行動してた。

大男が具現化させた武霊は、ガチャポン機に手足を付けた様なか

なりふざけた武霊だったが、その動きはどう見ても………ひよりさんのお母さんを踏み潰そうとしている。

よりひよりさんの声が強くなるが、止める気は一切ない。

大男の武霊がひよりさんのお母さんを踏み潰すより早く、

「オウキ！」

オウキが具現化し、ガチャポン機の武霊を蹴り飛ばす。

そこで初めて俺の存在に気付いたのか、大男が俺を見る。

そして、また寒気が走る残忍な笑みを浮かべ、

「黒樹夜衣斗か」

俺の名を口にした。

第三章『奪われたオウキ』4

夜衣斗

……こんな奴にまで俺の事が知れ渡ってるのか……最悪以外の何物でもない。

そんな事を思いながら、オウキでガチャポン機武霊を牽制しながら、ヒーラーサーバントを具現化。

倒れているひよりさんのお母さんの治療しつつ、俺は服を普段着から、PSサーバントに『戻した』。

五月の終わり頃に容疑者にされてから、俺は常に起きている時はPSサーバントを身に着ける事になっている。

まあ、要はその頃からより自分が死の運命と相対し易い事を自覚したと言っわけだ。

っで、その用心は、あつさりの中し……また、明らかに狂人と呼べるような奴と相対している。

……最後の敵からの連絡はないが……どう考えても、こいつが次の宿命の悪意……な気がしなくもない。

「てめえとは、まだ遊ぶ気はなかったんだがなあ？」
そう言いながら、大男はズボンのポケットから、小さなスプレー

缶を取り出し、悲鳴を上げ続けるひよりさんにそれを吹き掛けた。
その途端、ひよりさんの瞳から再び輝きが消え……ぼーっとし

出し、ふらふらと立ち上がる。
何だ？……噴霧式の麻薬？

その疑問が外に出てたのか、大男は俺にスプレー型を見せ付ける様に振る。

「こいつは『忘却剤』。嗅げば一瞬で全てを忘れる薬さ」
……そんな薬があるなんて聞いた事がない……あれは話題にな

ってるだろうし……っとなると武霊が作った薬って事か……
「嫌な事も、嫌なしがらみも、何もかも忘れられるからな。嫌な

事から逃れたい現代人には受けがいい。俺達の主力商品って奴さ。
どうだ？一つ買うか？安くしとくぜ？」

大男は、そんなふざけた事を言ってくる。

そんな時、ひよりさんのお母さんが呻き声を上げて目を覚ました。

第三章『奪われたオウキ』 5

夜衣斗

「何！何なこれ！」

オウキを見て驚くひよりさんのお母さん。

つと言う事は、少なくともひよりさんとそのお母さんも、この町の住人じゃないわけだ……

「おい。帰るぞ」

そう言つて大男はひよりさんの鎖を引っ張ると、ひよりさんは、

「おいで……アリス」

と呟き、背後から小さな女の子……あきらかに不思議の国のアリスが基となった女の子が出てくる。

それと共に、アリスが何も無い空間に手をかざすと、何も無い空間に扉が現れた。

「ひより！」

自分の母親の呼び掛けに、ひよりさんは無反応で、アリスが開けた扉の中にふらふらと入ろうとする。

どう見ても、瞬間移動系の能力！

つてか、させるかよ！

そう思つて、シールドサーバント具現化させようとした時、不意にガチャポン機の武霊が、自身のレバーを回し、カプセルを出した。そのカプセルに収まっていたのは、某特撮番組で敵として登場した怪獣……の人形で……確か……その能力は……。

出てきたカプセルが勝手に開く。それと同時に、ガチャポン機武霊の姿が、瞬時にそのカプセルの中にあつた怪獣の姿になった。

まずい！

そう思つと同時に、シールドサーバント六機の具現化が終わるが、ひよりさんを保護するより早く、怪獣となったガチャポン機武霊が吠え、その能力を発揮し、急激な重力増加に襲われる。

増加した重力に、シールドサーバントは落ちて地面にめり込み、オウキと俺は膝を付いた。

「くう……な、何？」

ひよりさんのお母さんにも増加した重力が掛かっているのか、苦しそうな声を上げる。

オウキが動けなくなるぐらいの重力だ。ヒーラーサーバントの力で保護しているから、その程度で済んでるんだろうが……。

「へえ？これで死なねえんだ。おもしれえな」

こいつ！やっぱり俺達を殺す気だったか。

「まあ、いいさ。薬。欲しくなったら廃工場に来いよ？俺らは暫くそこにいるからよ」

そう言っただ男はひよりさんを引っ張り、扉の中に入った。

扉が閉まると同時に、ガチャポン機武霊が霧散し、増加した重力も消える。

「ひより！？ひより！ひより！？」

状況に付いていけないのか、混乱した面持ちでひよりさんを探し、名前を呼ぶひよりさんのお母さん。

その姿に、俺は拳を握り締めるしかなかった。

何もかも……最悪だった。

第三章『奪われたオウキ』6

西島にしじまさゆりは、ぼーっと自分の車に腰かけながら、警察の事情聴取を見ていた。

「君はよくよく巻き込まれるよねえ〜何？何か呪われてるの？」

「……………」

刑事らしくないその刑事の問いに、さゆりを助けた男の子は、無反応。

あまり喋る事が得意ではないのか、さゆりは、彼に助けられてから今まで一度も声を聞いていない。

年頃から見ると、さゆりの娘と同年代ぐらいなのだろうが、娘の違つて随分落ち着いている。

そう、さゆりの娘・ひよりは、元気が良過ぎるぐらい女の子だった。

なのに、ほんのちょっと擦れ違いで家出し、行方不明になった娘とようやく再開した時、娘はまるで別人の様に……………壊されていた。そして、どうする事も出来ないまま、わけのわからないまま、娘は連れ去られてしまう。

それにさゆりは大人だと言うのにこれ以上ないくらいうるたえてしまい、助けってくれた男の子に怒鳴り付け、泣き付いてしまった。

彼は何を言うわけでもなく、ただただ黙って、コンビニ店員が呼んだ警察が到着するまで、さゆりにされるがまま。

冷静になった今思おうと、随分理不尽で、無茶苦茶な事を言っていた。

それなのに、彼は怒るわけでも、逃げるわけでもなく、ただただ黙ってそれを受け止めていてくれた。

これではどっちが大人だか分からない。

謝り、お礼を言うべきかな？

連日の搜索と、先程の出来事で疲れ切った心と体でそう考えたさ

ゆりは、彼に近付こうとした時、

「いや、でも、今回もヤバい事に巻き込まれたねえ〜」
と刑事が言い出した。

「あの大男は、鬼走人駭って言う暴走族……っと言うべきか……
…まあ、少年犯罪グループのリーダーをやってる男でねえ〜。名前は『頂嬉いたたき 武蔵むさし』。あれでも未成年なんだよお〜」
ちらつとこつちの方に顔を向ける男の子。

さゆりを心配しての動きだろうが、刑事はそれに気付いていないのか、気にせず話を続ける。

「何がヤバいかつて言うと、本物のヤクザと対等に渡り合い、こつちに尻尾を掴ませない様に犯罪行為を犯す連中だつて事なんだよねえ〜」

ヤクザと対等に？何でそんな連中に娘が！？

そう思ったさゆりは、気が遠くなり、倒れそうになる所を男の子に抱き支えられてしまう。

それを見た刑事は、

「君の周りにはよくよく美人が寄ってくるねえ〜」

そんな事を言ったので、思わず本気でこの刑事が本当に刑事か疑つてしまうさゆりだった。

第三章 『奪われたオウキ』 7

????

廃工場の最も町の外に近い場所に、彼ら・鬼走人骸のアジトはあった。

元々彼らは星波町近隣一帯を活動範囲とする只の暴走族だった。

だが、現リーダーの頂嬉武蔵がグループの中に入ってから、その凶悪性は増し、暴走行為より、犯罪行為が目立つ様になった。

殺傷・拉致・監禁・強盗・脅迫などの直接的な犯罪は勿論、最近では『入手経路不明の』違法薬物売買にまで手を出すようになり、警察のみならず、本業の犯罪組織にまで目を付けられる様にまでなっている。

そんな状況になってもなお、彼らが潰されずに済んでいるのは、彼らが自分達がどんな状況・立場・環境にいるかを理解し、それを最大限に利用しているからに他ならない。

まず、彼らは自分達が未成年だと言う事を利用し、様々な庇護下を利用して警察の手から逃れ、それが通用しない相手が現れた場合は、『星波町を利用する』。

星波町なら、例えばここで殺人を犯したとしても、武霊を使つての殺人行為なら、忘却現象により、それを町の外で立証するのは困難になる。

それどころか、武霊の能力を最大限利用すれば、それを完全犯罪にする事すら容易い。

だから、彼らは邪魔な勢力などが現れた場合は星波町にその勢力を誘い込み、武霊を使って壊滅させていた。

外にいる本業の犯罪組織達は、彼らがどうやって自分達を壊滅させているか分からず、彼らに恐れに近い感情を抱き、それを理解している鬼走人骸はより増長して本業の領分を侵し続ける。

その為、つい最近まで彼らが『外での抗争』を繰り返す事にな

り、黒樹夜衣斗が星波町に来てからずっと星波町に来なくなっていた。

外での抗争は鬼走人骸側の圧倒的な不利で進み、多くのメンバーは『警察に捕まる』か、『行方不明』になり、今いるメンバーは最盛期の十分の一、五十人ほどになっている。

だが、頂嬉武蔵はその事を特に気にしていなかった。

何故なら、違法薬物製造や完全犯罪を犯せるメンバー、つまり、武霊使いは誰一人として欠けていないからだ。

だから、頂嬉武蔵は、今回の事を大きくなり過ぎたグループの人員整理ぐらいにしか考えておらず、大して気にしていなかった。

今は『そんな事』より、『楽しめる事』がある。

外で手に入れたおもちゃに、新しく手に入れた薬物。

そして、黒樹夜衣斗。

頂嬉武蔵は、笑った。

子供の様に、それでいて、誰よりも邪悪に……………。

笑う頂嬉武蔵を見ながら、少女は溜め息を吐いた。

その少女は、メガネに、三つ編み、そして、必要な場所以外無い簡素なゴスロリ服を着た小学生ぐらいの女の子で、その手にはアタッシュケースが握られており、

「…………… 何で私がこんな奴の担当になるのかしら……………」
つと小声で愚痴を言っていた。

第三章 『奪われたオウキ』 8

美羽

鬼走人骸が星波町に帰って来た。

その連絡を美春さんから聞いた時、私は眉をひそめた。

前に彼らが来た時、犯罪率が急増して大変だったからだけど、それより私は、美春さんの次の連絡に驚いてしまった。

夜衣斗さんが鬼走人骸のリーダー頂嬉武蔵と接触して、女性を助けた……って、また事件に巻き込まれ、また女性ですか夜衣斗さん……。

「運が良いんだか、悪いんだか分からないわね？」

私ずてに鬼走人骸の事を聞いた春子さんが夕食の時にそんな事を言い……私も似たような事を考えたけど……言われた夜衣斗さんは、困った雰囲気になって頬を掻いた。

「それで夜衣斗さん。その助けた女性はどうするんですか？」

今度は私の問いに、困った雰囲気を出す夜衣斗さん？

？……私、何か困る事でも言ったかな？

「……今は警察で保護されています」

……あゝっそっか。私はてっきり夜衣斗さんが全部助けるんだろうつって思ってたから……ついついどうするんですか？って聞いちゃってたんだ。

考えて見れば、先月の事件が終わった後、美春さんが二度と夜衣斗さんを警察が関わる事件に故意に巻き込むなって、東山さん念を押してたっけ……しかも、物凄く怖い笑顔で、コロ丸を具現化させながら……あれじゃあ、流石の東山さんも夜衣斗さんを巻き込めないかな？……でも、じゃあ、夜衣斗さん自身はどうなんだろう？

じーつとご飯を食べている夜衣斗さんを見るけど……今思ってる事は大体雰囲気で分かってても、超能力者じゃないから、流石

にその考えまでは分からない。

……でも……夜衣斗さんなら……きっと……

第三章『奪われたオウキ』9

夜衣斗

夕食中、美羽さんが妙に俺の事を見ていた事に、俺は自分の部屋の中で溜め息を吐いていた。

……夕食中の会話の流れからすると……俺が鬼走人骸を何とかするんじゃないかとか……考えていそうな感じ経った。いや、しないからね。そんな危険な事……。

（とか思いながら、ひよりちゃんを助けたいって思ってるだよ。夜衣斗は）

美魅の突っ込みに、俺は深い溜め息を吐いた。

……まあ、そりゃ、助けたいさ。そう思ってるのも事実だが……巻き込まれるんじゃないかって、自ら巻き込まれに行くのは……

……流石に……そこまでの勇氣は……ないな……。

（でも、もう十分巻き込まれるだよ？）
……確かにそんな感じはしないではないが……仮に俺

が助けに行っただとして……どうしろと？

（どう言っ意味だわね？）

どこまでしろって事さ。ああ言う連中は、自分の快樂の為なら……何でもやる。下手に……例えばひよりさんを連中にばれない様に救出するとする。そうなると、連中は必ず報復、もしくはまたひよりさん捕えようとするだろうし、それ以上の事だつて間違いない。……それに、もし、ひよりさんがあの忘却剤に依存していた場合は……自ら奴らに接触する可能性だつてある。だから、ひよりさんを助けるって事は、彼らを完膚なきまでに叩きのめさなくちゃいけないって事になる。

（すればいいと思うだよ？今の夜衣斗にはその力があるだよ）
……それが問題なんだよ。

（何がだよ？）

俺はああ言う奴らが大好きだ……だから、自制がどこまで聞くか……下手すれば、殺してしまいかねない……っと思う。

(……それは問題だわね……)
……だから、正直、怖くて不安なんだ……それに、そもそも、完膚なきまでに叩きのめすって言っても……どこまで叩きのめせばいいか……暴力で叩きのめしても、それは連中にとって日常茶飯事だろうし、直ぐに元に戻るの間違いはない。じゃあ、それ以上の事をするとなると……例えば、二度と悪事を働きたくないぐらいに拷問するとか……

(拷問って……)
……痛みの伴った恐怖は、なかなか忘れられないものだから、それなら連中にだって有効だと思う……だから、やるんだったらそれくらいしないと……だけど、それには問題がある。

(忘却現象だわね?)
そう言う事……まあ、でも、俺自身が拷問をすれば忘却現象は起こらないだろうが……そんな事を俺が出来るか……もしくは殺さないでいられるか……正直、全然分からない……分かりたくもないが……。

(……じゃあ、結局、夜衣斗はどうしたいんだわね?)
……助きたいし、どうもしたくない。

(矛盾してるだわね)
……俺はいつだって矛盾してるさ……いや、優柔不断って言った方がいいか……自分で動けず……チャンスも切っ掛けも、何もかも得る事が出来ず、失ってしまう。

(じゃあ、今から変わればいいだわよ)
……変わろうと思って変われたら……俺は星波町に来ていないよ……。

そう思って苦笑した時、携帯電話にメールが入った。
見て見ると……最後の敵からのメールだった。

第三章 『奪われたオウキ』 10

????

君がこのメールを見ている事を祈りつつ、僕はこのメールを送っている。

喜ぶべきか、悲しむべきか、君が順調に生き残り、死の運命から逃れているおかげで、更に僕の予知が使えなくなった。

それと共に、僕の周りの状況も予想より早く展開し始めている。

だから、僕はこのメールを送った後、しばらく君と連絡が取れない状況になってしまう。

つまり、今回のヒントが最後のヒントになるのでそのつもりで見たい欲しい。

君はこれから五つの宿命の悪意に相對する事になる。

この予知だけは変化がない事から、その五つの宿命の悪意は、いや、高神姉弟と五月雨都雅を合わせれば七つの宿命の悪意は、君の死の運命に直結するものなのだろう。

だから、逃れようにも、逃れられない。そう考えて置いてくれ。

ただ、いつ相對するかまでは分からない。

僕の最初の予知では、五月雨都雅と君が相對するのはもっと後になるはずだったからだ。

つまり、相對するタイミングが、君と僕の行動で流動すると言う事なのだろう。

だからこそ、僕の予知は使い物にならなくなりつつあり、本当なら一つ一つの宿命の悪意に対して正確なヒントを上げるつもりだったが、それも出来なくなってしまった。

しかし、君なら僕の正確なヒントがなくても、運命を乗り越えられると信じている。

何故なら、君は僕にとっての最後の敵なのだから。

これから相対する五つの宿命の悪意だが、

『快樂』

『支配』

『恐怖』

『守護』

『選択』

の五つだ。

この内の快樂については既に相対していると思う。

そう、頂喜武蔵だ。

彼については後で書くとして、残りの四つについてだが、すまないが、それらについては正確には分からなかった。

いや、正確には、二つ守護と選択に付いては、ある程度予想は付く。

だが、現時点でそれを君に教えると、こちらの状況がかなり悪化する可能性があるので、教える事は出来ない。

ただ、これだけは言える。その二つは六番目と七番目である事は間違いなく、その一つ一つに、君は運命の分岐の選択を迫られる事になる。

僕は君がそこまで辿り着き、正しい選択をしてくれる事を祈ってる。

第三章『奪われたオウキ』 11

夜衣斗

……正しき選択ね……。

(このメール相手は予知能力者だわね?)

……まあ、多分そうじゃないか?

(ふ〜ん……この町にそんな奴がいたんだわね)

まあ、そうだが……どこまでいるんだろうな?

(どこまで?)

いや……架空の存在と言われている連中がさ……とりあえず、超能力者や化け猫とかいるのは分かったけど……武装守護霊やメガネベアみたいな知られていない存在がいるなら、知られている存在も結構実際にいるんじゃないかって思ってたさ。

(ん〜そうだわね……あたいはあんまり町の外に出た事がないからそんなに知らないんだけど……夜衣斗が見てい漫画とかに出てくる大体はいると思ってもいいだわよ)

大体って……例えば魔法使いとかもか?

(ああ、それは『いた』だわね)

過去形?どう言う事だ?

(ん〜よくは知らないんだけど……昔、魔法使いは、退魔士って呼ばれる者達に滅ぼされたらしいだわよ?)

退魔士?……って事は、その退魔士は今も存在しているわけだな?

(会った事がないから何とも言えないだわね)
妖怪の類なの?

(退魔士が呼ばれるような悪さなんかしたことないだわね)

まあ、そりゃそうか。

(だわね。失礼しちゃうだわね)

……悪かったよ。

(わかったならよろしいだわね)

まあ、つとと言う事はだ……町単位にいないほど退魔士の数はあまりいないって事か……もしかしたら、その退魔士がこの町の事を調べてないかと思っただが……考えて見れば、忘却現象は人外の存在にも起きるんだよな？

(起きるだわね)

って事は、そういう連中にも、この町の事は正確に知れ渡ってない可能性が高いって事だよな……やっぱり外部にどうにかして貰うって言うのはほとんど絶望的なのか……まあ、それほど期待はしてなかつたし、一つ可能性が消えたから良いとするか。

(可能性が消えた？)

魔法使いって言うのは、広い意味でのだろう？その中に、陰陽師とか、シャーマンとか含まれている。

(らしいだわよ)

つとと言う事は、少なくとも、この町で起っている事は魔法使いの類が起こしたものではないって事になる。

(まあ、そういう事だわね)

……だからと言って……人間が武装守護霊に関わってないって可能性が消えたわけじゃないが……まあ、幾分か気が楽になったよ。人間が関わってるなんて……最悪以外のなものでもないからな……。

(そうだわね……そう言えば、一つ面白い事を思い出しただわよ)

面白い事？

(聞いた話だと、日本の『五大退魔士家系』と呼ばれる家系の一つが『黒樹』って言うらしいだわよ)

……へえ、妙な偶然だな……家名だけじゃなくって、本当にそんな家系の生まれだった良かったよ……。

俺はそう思っと思って思わず深い溜め息を吐き、俺はメールの続きを読み始めた。

第三章 『奪われたオウキ』 12

????

頂喜武蔵についてだが、彼の素性については説明する必要性はないだろう。

彼には君の耳に届く事以外の裏も深さも無い。

だから、僕が教えるのは、頂喜武蔵の武霊に付いてだ。

彼の武霊は、見た目通りガチャポン機を基にしている。

これは、彼の快樂追及の発端がガチャポン機にある為だと思う。

彼は幼い頃に、ガチャポンをする為に友達から無理矢理、時には暴力を振るってお金を借り、ガチャポンを回していたそうだ。

そして、その時の記憶が基になつてゐる為か、頂喜武蔵の武霊『ガチャポンマン』は、具現化中に頂喜武蔵が『貸してくれ』と言ひ、『借りたい何か』を所有している相手が『貸す』つとつと、強制的に借りたい何かを借りる事が出来る能力を持っている。その能力で借りた対象は、ガチャポン内のカプセル内に人形として現れ、使う際にレバーを回してカプセルを取り出すと、借りた何かは本来の所有者の下から消え、頂喜武蔵の下に現れる。

勿論、その借りれる対象は、『武霊も含まれる』。

ただし、武霊を借りる対象にしていた場合は、借りている間、ガチャポンマンがその武霊の姿になる様だ。

だから、頂喜武蔵と相対するなら、言動に気を付けてくれ、借りる貸すと言う単語を迂闊に口にしない様に、幅広く解釈される様な事も言わない様にだ。

さて、最後に、私の見た予知夢を教えたいと思うが………一つ、懸念している事がある。

未来を知る・教える行為は、莫大なエネルギーと共に、非常に強い負荷が見た者や世界に掛かる。

だから、知り得た未来の情報があまり多くに拡散しない様な事象
が起きる事が多い。

勿論それを防ぐ手段はあるが、メールなどと言う間接的な物では
その手段は使い難い。

もし、何らかのその様な事情が起きた場合、ここから

夜衣斗

メールはそこから先、妙な文字化けになってて読む事が出来な
かった。

メールの内容の通りなら、予知拡散を防ぐ何らかの事象が起きた
って事なんだろうが……世界に拒絶される予知つと言う事は、確
実にそうなるであろう未来を見たって事……なんだろうな……普
通に考えて……それを分かっているながら、俺に伝えようとした……
……一体どんな予知夢を見たって言うんだ？

底知れぬ不安を感じながら、俺は携帯電話を閉じた。

第三章 『奪われたオウキ』 13

美羽

翌朝の夜衣斗さんは、会った時からずっと何かを考えている様だった。

私が呼び掛けても、上の空の返事だったり、返事がいつも以上に遅くて………何を考えているんだろう？やっぱり鬼走人骸の事を？

そんな事を思いながら一緒に学園大門の前まで行くと、大門の前に武装風紀委員長の三島さんがいた。

………私、この人の事、あんまり好きじゃないんだよね………表面上はいい人って感じで、誰からも頼られているけど………なんて言うか、私にはそこに薄っぺらい感情しか感じられないんだよね………まるでそうした方が効率がいいみたいな、機械的な感じがすると言つか………でも、この感覚は、あんまり共感を呼ばないんだよね………琴野を含めた僅かな武霊使い以外は………。

チラッと夜衣斗さんを見ると、歩きながら夜衣斗さんも三島さんを見ていた。

あまり好きそうな雰囲気は出していない。

………もしかしたら、夜衣斗さんも同じ事を感じているのかもしれない。

そう思った時、三島さんが軽くこつちに手を上げ、私達を呼び止めた。

「やあ、待ってたよ」

そう微笑みもせず鋭い目を夜衣斗さんに向けた。

飛矢折

朝練を終え、教室に戻ると、黒樹君が腕を組んで何事かを考えている様だった。

考え事をしてしているのはいつもの事だけど、今日の黒樹君は、何だかいつもと違う感じで……………村雲君も声を掛けずらそうにしている。「何かあったの？」

とりあえず席に座っている美幸に聞くと、美幸は困った顔をして、「何か、武装風紀に協力要請をされたみたい」

「武装風紀に？なんで？」

「うん。何かね。星波町に鬼走人骸がまた来たんだって……………巴も知ってるでしょ？鬼走人骸」

「そりゃ……………」

何人が下つ端を潰した事があるから、よく知ってる。って危うく言いそうになった。

不意に言い淀んだあたしに美幸は不思議そうな顔をしたけど、流石にそんな事を美幸に言えば心配されるに決まっている。

うちの家は、家族全員が武術をやってて、当然、上二人下二人の兄弟達も強い。

だから、よく近所の不良達に襲い掛かれる事があって、そのとばっちりがあたしにも向いていた事がある。

まあ、もつとも、そんな事があったのは、鬼走人骸が『ただの暴走族』だった時の話で、今のリーダーになってからは一切そんな事は無くなった……………つと言う事は、あんまり知らないって事になるのかな？……………まあ、美幸が言ってるのは噂レベルの知ってるかどうかだろうし、そのくらいだったらあたしも知っている。

「でね。鬼走人骸対策の一つとして、黒樹君のオウキを使いたいだって。ほら、オウキにはスカウトサーバントって言う便利なものがあるでしょ？」

……………そっか、確かにオウキの機能を使えば、登下校中の生徒を監視して鬼走人骸の接触を防ぐ事だって簡単に出来るかも知れない……………じゃあ、黒樹君はその事について考えているんだ……………でも、その割には……………妙に……………

どうもぬぐえない違和感に、首をひねっていると、教室に先生が

入ってきたので、その事を深く考えるのをあたしは止めた。

第三章『奪われたオウキ』 14

夜衣斗

少し不味い状況になったかもしれない。

(どうしてだわよ?)

状況から考えて、三島さんの要請は断れない。

(断わっちゃえばいいだわよ)

……………理由がないだろうが……………断る理由が……………それに、断る気も……………起きない。

(まあ、そうだわね)

正直、毎回毎回状況に流されて行動するのは嫌だが……………まあ、それが俺の『今の』運命なんだろう。……………っで、そうなると、朝昼晩、俺は大量の意志力を消費する事になる。いくら俺の意志力の回復が早いからと言って、はたしてあの男に勝てる力が残ってるかどうか……………。

(それは平気だと思うだわよ?)

?……………どう言う意味だ?

(更に回復力が上がってるって意味だわよ)

はあ?なんで?

(ん)上手く説明できないだわよ。あたいはそう言う事に詳しくないだわね)

……………まあ、それならそれでいいんだが……………少し思い当たる事もあるしな……………多分、サヤがやってた妙な事に関係あるんじゃないか?

(多分そうだわよ)

……………結局、あれはなんだったんだろう?

そう思った時、

「黒樹君。ちょっといい?」

飛矢折さんに呼ばれ、視線を向けると、飛矢折さんは教室の入り

口の方に顔を向け、

「黒樹君を呼んでる人がいるんだけど……」

飛矢折さんの視線の先には……見知らぬ女子が、制服からして同学年の様だが……とりあえず俺は飛矢折さんに頷き、その女子の所まで移動。

「いきなりごめんね。どうしても黒樹君にお願いしたい事があって、あ！断って置くけど、部活の勧誘とか、そう言うのじゃないからね」

……まあ、そりゃそうだろう。今まで部活の勧誘とかが飛矢折さん越しに行われた事はないし、頑なに勧誘を断るので、大体の部活が俺の勧誘を諦めている。

「私は春咲はるなつき茜あかね。隣のクラスのクラス委員をしてるんだけど……
…黒樹君。楠木君と面識あるよね？」

楠木？……ああ、あの楠木久思の事が……。

気弱そうな顔を思い出しながら、俺は頷いた。

隣のクラスだったのか……その割には、あれ以降姿を見ていない……。

「彼、来塚君が逮捕される前日から学校に来てないの」

……ん？前日に？

その疑問が頭の中に浮かんだが、春咲さんの次の言葉に、その疑問の事を考える事が出来なくなった。

「それで……黒樹君。私と一緒に彼の家に行ってくれない？」

第三章『奪われたオウキ』 15

飛矢折

「そう黒樹君はまた厄介事に巻き込まれているのね」

その朝日部長の言葉に、あたしは溜め息を吐いた。

「そうなんですよ……………先月末から特にこれと言って何もなかったんですけど……………」

「心配？」

そう問われ……………隠してもしょうがないので、

「……………はい」

と頷いた瞬間、朝日部長は瞬時に間合いを詰め、あたしが防御するより早く掌ていが放たれ、顎下で寸止めされた。

「まだまだだねえ」

「……………組手中に話をするのはやめませんか？」

「これも修行よ」

そう朝日部長は微笑んで、掌ていを顎下から離れた。

「っで？どうするの？」

「どうするも何も、手伝うつもりです。ですから、しばらく部活には」

「別にいいわよ。元々あなたはここで修行する必要性のない実力者だから……………まあ、私の組手相手がなくなるのはちょっと困るけどね」

「すみません」

「いいのよ。っで、どう言っつもりで手伝うの？」

「だから、クラスメイトとして？友達として？それとも……………好きな相手として？」

「っな！」

「直ぐに顔に出る。見た目に反して、可愛いわね巴は、でも、そ

んな素直じゃ 武術家としてどうなのかしらね？」

「大きなお世話です！」

夜衣斗

放課後、三島さんの依頼通り監視の為のスカウトサーバントを大量に飛ばしつつ、俺は春咲さんの案内で楠木久思の家へと向かっていた。

……………それにしても、今時珍しい人だよな……………春咲さんって……………。

前に行く春咲さんの後頭部を見ながら、俺は感心とも、呆れとも取れる感情を抱いていた。

引きこもっているクラスメイトの所に、わざわざ心配して家へに行ってるなんて……………少なくとも、俺の周りにはいなかった。だから、そう言うのは、漫画とかだけの存在だと思っていたが……………何だかね。

何だか複数の意味で溜め息が出た。

それが聞えたのか、春咲さんは少し振り返り、

「ごめんね。忙しい中付き合わせちゃって」

そう言わせてしまった。

俺はとりあえず首を横に振る。

「さっきも言ったけど、楠木君は黒樹君に会いたみたいなの。

だから、もしかしたら、黒樹君なら楠木君を部屋から出せるかもって思ってた……………本当にごめんね。うまくいっても、いかなくても、なんか奢るから」

そう言う春咲さんに、何を言ったらいいか迷っている内に、楠木の自宅があるマンションの前に到着してしまった。

……………美羽さんとかで多少は慣れたと思ったけれど……………やっぱり女性は苦手だな……………はぁ……………。

第三章『奪われたオウキ』 16

????

闇は今や久思にとって唯一の安らげる場所。

闇の中なら何もかもが無くなる。

その中に身を委ねていれば、その内に心の中まで無になって、何も考えなくても、何も思い出さなくても済む。

ただ、最近、お節介なクラス委員がよく久思の部屋の前に来る様になった。

その呼び掛けを聞く度に、久思の止まっていた思考と心が動き出して、久思を苦しめ……手の中にある注射器を嫌でも意識してしまふ。

これを渡されてから何日経ったか、今の久思には定かじやないが、未だに使っていない。

確かに、武霊は魅力的な存在だが、同時に久思は怖いとも思っていた。

自分以外の何かが、自分の中にいる。

一つの仮説によれば、星波町に人が入った時点で、武霊は人に寄生している。と言う話だが、誰もそれを証明出来ないなので、本当に武霊使えない自分の中に武霊がいるのか久思は懐疑的だった。

むしろ、自分なんかにはいないとすら思っている。

その証拠に、既に星波町に来てから一ヶ月以上経つてると言うのに、一向に武霊が発現しない。

まあ、危機的な状況に陥った事がないので、具現化する機会が無いと言う可能性も無くはないが、そもそも、久思の中に明確な自分を形作っているイメージがあるのか、そこに首を傾げる所がある。

漫画やアニメなどの空想の産物は好きだが、好きと言うだけで、それほどのめり込んでいるわけではない。

だから、久思は自分の中に武霊がいるか確認する術はない。

今、久思の手の中にある注射器以外にはだ。

これが本物なのは、博の事件で証明されている。

だから、それを使えば久思は武霊使いになれる。

だからと言って、とてもじゃないが使う気になれない。

武霊が怖いと言う事もあるが、そもそも、自分自身に得体の知れない薬物を注射するなど、気弱な久思には無理な話だった。

使えないのに、注射器を無理矢理くれた少女の武霊使いの脅しで捨てる事も出来ない。

だから、思考と心が動き出すと、どうしても誰かに頼りたくなつて、つい、お節介なクラス委員に言ってしまった。

黒樹君と話がしたい。

っと。

そもそも、黒樹夜衣斗とは、不良グループから助けしてくれた以降会っていない。

それでも、星波町の中で、星波町の中で、頼れそうな人物は、夜衣斗以外思い浮かばなかった。

まあ、もつとも、夜衣斗がわざわざ自分の為に来る事なんてない。つと久思は思っていた。

何故なら、夜衣斗とは僅かな関わりしかないし、そんな義理があるとは到底思ないからだ。

もし、自分が同じ立場に置かれたなら、きつと行かないだろう。

そういう予想が、より久思を追い詰めたが……その予想は裏切られる事になる。

何故なら、部屋のドアがノックされ、

「楠木君。黒樹君を連れて来たわよ」

そうお節介なクラス委員が言っただから……

第三章 『奪われたオウキ』 17

夜衣斗

……さて、何となく来てしまったが……どうするかな？

楠木久思の部屋の前で、俺は苦笑した。

ちなみに、二人っきりの方が話しやすいでしょう。って言って春咲はこの場にいない。

(何か考えがあつて来たんじゃないんだわよ?)

全然。……まあ、多少は気になる事があるが……普通に考えて、それを答えてくるとは思えないしな……。

(気になる事ってなんだわよ?)

来塚博は黙秘しているらしいから詳細は分からないが、多分、来塚は、前に俺が言った通り、強制的に武霊使いにする薬物を手に入れていたんだと思う。そして、その入手場所は、武霊に関する事なのだから、星波町内以外ありえない。つで、その場合、来塚と常に一緒に居たであろう楠木も、その薬物を持っている可能性が高い。その証拠と言うに少々根拠が弱い、来塚が事件を起こした翌週に楠木が不登校になった。

(どうしてそれが薬物を持つてる証拠になるだわよ?)

強制的に武霊使いを生み出す薬物だ。その開発には、『それなりの人体実験』が必要になると思う。武霊は人の精神に直結している存在の様だから、その実験で……まあ、表沙汰に出来ない事は間違いなく起きているだろうし、そうじゃなくても開発者の意図はその薬物の正体を隠す方向に向いている。じゃなきゃ、そんな画期的な薬物、とつくに公表しているだろうしな。

(つまり、脅されているって事だわね)

そう言う事。だから、楠木は外が怖くなり、引きこもった……つで、それが長引いているのは、手に入れた薬物は使っていないからだと思う。

(どうして使ってないって思うだわよ？)

…………… 武霊は、それが良い・悪い方向の関係無しに、武霊使いに自信を与える。来塚や

(夜衣斗みたいにだわね？)

…………… まあ…………… そうかもな…………… いや…………… 俺はどうなんだろう？自分の事だからな…………… まあ、とにかく、自身を手に入れた人間が引きこもるとは思えない。

(でも、だったら、どうして使わないだわね？)

…………… 怖いんじゃないか？武霊が。

(武霊が怖い？)

武霊が発生して十年経った今でも、正体が一切分かかってないだろ？そんな得体の知れない存在を、自分の中に入れるなんて…………… 怖いだろうが…………… 。

(夜衣斗も怖いだわよ？)

…………… 怖いよ…………… 正直に言えば、俺は完全に自分の武霊を信賴しているわけじゃない。常に懐疑的に使ってるって言うてもいい。

(それでよくあれだけの事が出来るだわね……………)

それが不思議なんだよ…………… 武霊使いになれる条件に、『自分の武霊を受け入れる』ってあったから…………… その内、俺の命令を聞かなくなるって思ってたんだが…………… 手に入れた経路といい…………… やっぱり、俺の武霊は…………… 特殊なんだろうか？…………… んゝ美魅は俺の中にいるから、何か分からないか？

(さあ？武霊使いの中に入ったのは夜衣斗が初めてだわね。だから、違いなんて分からないだわよ？)

…………… まあ、それじゃ仕方がないか…………… じゃあ、サヤは？

(相変わらず寝ているだわよ)

寝てるねっていつまで寝てるんだ。

(さあ？)

…………… そう言えば、心の中の公園に、サヤ以外に女の子が二人いただろ？

その問いに、美魅が何かを越えようとした時、

「黒樹君……まだ、そこにいる？」

とドアの向こうからようやく楠木の声が発せられた。

???

「これでいいんだわね？」

「はい。ありがとうございます美魅様」

「わからないだわね。なんで嘘を吐く必要があるだわね？」

「時期ではありませんし、それに、私達は何であるかは夜衣斗が自分自身で気付き、『思い出さなくてはいけない事』ですから」

「……………厄介だわね……………それで夜衣斗が死んだら元も子もないだわね」

「その時はその時です」

「あなたはそれでよくても、あたいはそれじゃ困るんだわよ」

何を言えばいいか、自分で呼んでおきながら、久思は言葉に詰まった。

そもそも来るとは思ってたから、仕方がないと言えば仕方がないが、散々迷った挙句、夜衣斗の方からも声を掛けてくれないので、いるかどうか不安になりながら、久思はドア越しに声を掛けた。

「……………いるよ」

つと夜衣斗の声がドア越しから聞え、ほつと一息吐く。

もつとも、やっぱり何を言えばいいか思い付かなかったから、久思は真つ先に浮かんだ疑問を聞く事にした。

「……………僕が呼んどいてなんだけど、どうして来てくれたの？」

その久思の質問に、夜衣斗がドア越しに溜め息を吐いたのを久思は聞いた。

「……………さあ？」

「さあ、つて……………」

「…………正直に言えば、俺は君がどうなるかと知ったこつちやない」

わざわざ来ておきながら、そんな身も蓋もない事を言う夜衣斗に久思は苦笑した。

「…………ただ、君がここにこもる事は勝手だが…………それで何が起こるかを考えるべきだと俺は思う…………少なくとも、心配してくる人がいる内は」

…………心配してくる人…………。

「…………まあ、好きにすればいいさ」

投げやりだけど、どこか心配している感じのある口調に、久思はまたしても苦笑してしまった。

夜衣斗の本当の真意は久思には分からないが、少なくとも言葉とは裏腹に多少の心配しているのは間違いない。

「…………つで？俺に何の用なんだ？」

その夜衣斗のもつともな質問に、久思は少し混乱し始めた。

夜衣斗に正直にあの薬物の事を話す事は出来ない。

もしかしたら夜衣斗なら何とかしてくれる気がしないでもないが、それほど関わりのない他人の為にわざわざ家に着てくるような優しい彼を自分のトラブルに巻き込むのは気が引けた。

かと言って、それ以外に彼を呼んでしまった理由はなく…………少々てんぱって、思わず、

「あの！僕と友達になつてくれませんか！？」

つと恥ずかしい言葉を、出会ってから心に秘めた事を口にしていった。

第三章 『奪われたオウキ』 19

夜衣斗

思いがけない言葉に……………俺は固まった。

言葉自体に驚いた事もあるが、友達になつてくれって言われたのは……………初めて経験だったからだ。

(夜衣斗は寂しい人生を送つて来たんだわね。泣けるだわね) 大きなお世話だ!……………まあ、何にせよ。

俺は溜め息を吐きつつ、

「俺は出不精で、積極的に誰かと関わろうとする人間じゃないが……………それでもいいなら……………構わない」

そう言つと、閉じていたドアがゆっくりと、少しだけ開き、楠木が顔を見せた。

「本当に?」

……………なんか……………いや、まあ、あまり気にしない事にしよう。

俺はまた溜め息を吐きつつ頷いた。

その頷きを見た楠木の顔が見る見る明るくなり、ちよつとうるたえた様に、

「えつと、その……………ありがとう」

つと笑顔で言った。

飛矢折

早めに部活を切り上げて教室に戻ると、教室の前に赤井さんがいる事に気付いた。

あたしの事に気付いた赤井さんは、早歩きで近付き、

「巴先輩。夜衣斗さんを知りませんか?」

つと言つてきた。

??。

「……武装風紀の手伝いに行ってるんじゃないの？」

あたしの問いに赤井さんは首を横に振った。

「スカウトサーバントが飛んでますから、手伝いをしている事は間違いないんですけど、夜衣斗さんがどこに行ったかまでは知らないみたいです」

「そうなの……あたしはてっきり武装風紀と一緒に行動しているとはばかり……」

「そうですか……」

あたしの答えに、赤井さんは明らかに落ち込んで……どこか不安そうだった。

「どうしたの？」

「え!？」

「何か不安そうにしているから、何かあったのかな?って」

「……何もないですよ……ただ」

「ただ？」

「何だか……嫌な予感がするんです」

嫌な予感?……武霊使いの勘はよく当たるって言うし……大

丈夫かな……黒樹君……

第三章『奪われたオウキ』 20

夜衣斗

(夜衣斗は根本的にお人よしだわね)

そうか？俺は自分の事を、結構冷たい人間だと思っっているが？

(そう思おうとしてるだけだわね。じゃなきゃ、お願いされたからと言って、わざわざ家まで行って、友達になんかならないだわよ)

.....

「黒樹君。今日はありがとね」

楠木家からの帰り、俺は家が星波町外にある春咲さんを駅まで送り、そこで微笑みと共にお礼を言われた。

「これで明日登校してくれば言う事ないんだけどね.....まあ、そこまでは難しいよね」

そう言っ困った顔をして微笑む春咲さん。

.....まあ、あれで直ぐに出てくるかは.....俺には分からない。俺の予想が正しければ、通常の引きこもりとは状況が違うだろうし

.....まあ、あくまで予想だし.....。

「.....おかしな奴に思ったよね？」

不意にそんな事を言う春咲さんに、俺は眉をひそめた。

「いくらクラス委員だからと言って、普通はここまでしないって」

.....まあ、確かにそう思っ事実は事実だが.....考えて見れば、普通なんて人それぞれだし、正しい事である事は間違いない。だから、俺は首を横に振った。

それを見た春咲さんはクスリと笑い。

「優しいよね黒樹君は」

.....優しいね.....。

「私、中学の時は別の学校に通っの.....その中学でもよくクラス委員とかしてて.....ある時、クラスで陰湿ないじめが発覚して.....」

……中学のいじめね……古傷が痛む話だな……。

「……その時の私はどうすればいいか分からないし、何かをすればこっちにいじめの対象が向くんじゃないかって思って……何も出来なかったの……そして、その子は自殺……しちゃって……」

ああ、なるほど……春咲さんはその時の自責の念で行動していたわけだ。

「だから、出来るのにしないで後悔する事はしたくないの」「出来るのにしないで公開する事はしたくない……ね……何だか……」

俺は溜め息を吐き、

「……また俺が必要になる事があつたら言ってください。出来る限りの事は協力しますから」

「ありがとう、黒樹君」

そう言って微笑む春咲さんに、俺は頬を掻いた。

(……やっぱり夜衣斗はお人よしだよ)

第三章 『奪われたオウキ』 21

????

警察署で保護されている西島さゆりは、用意された部屋の中で溜め息を吐いていた。

娘のひよりが行方不明になってから、警察に捜索願を出したが、只の家出として扱われ、まともに取り合ってくれなかった。

実際に最初はただのプチ家出だったのは、ひよりの友達からも確認できた。

でも、泊めて貰っていたその友達に、家に戻ると言って以降の足取りが全く掴めなかった。

それを警察に言っても、やっぱりまともに取り合ってくれず、仕方なく自分で心当たりを一つ一つ探し、それでも見付からなくて、近くの町を一つ一つ探し……ようやくひよりを見付け……恐れていた以上の事になって、さゆり個人ではどうにも出来ない状況になっていた。

助けたくても、あんな化け物を使える人間相手に、どうする事も出来ない。

幸い、この町の警察は他の警察より幾ばくか行動的だが、あのふざけた刑事に任せて大丈夫なのか？つとと言う心配があった。

もつとも、仮に助けに行つたとして、逆に捕まって、娘と共々最悪な目に遭うか……殺される可能性だつてある。

そんな危険な奴らの所に娘が……それを思うと、いてもたつてもいられなくなるが、大人としての冷静さか、我が身可愛さか、一人でも助けに行くに行けなかった。

そんな所が、娘と自分にすれ違いを呼び、こんな事になったのは？

つとと言う考えが浮かび、溜め息を吐くのを止められない。

何度目かの溜め息の後、ふと昨日自分を助けてくれた少年の事を

思い出す。

僅かな間だったが、その僅かな間で、少年はよくため息を吐いていた。

あの子なら……もしかしたら……助けてくれるかも……。

そんな思いが浮かんだが、さゆりは直ぐに首を横に振った。

どんなに凄い力を持っていても、あの子は子供。こんな危ない事に関わらせるわけには……。

そう思ったからだ。

だけど、本当にこの警察に任せるだけでいいのか？

そう疑問に思った時、部屋のドアがノックもせずに関き、そこから東山刑事が入って来た。

あまりの無遠慮に、少々眉を顰めつつ、

「何か御用ですか？」

そう声を掛けたが、東山刑事は何も答えず、さゆりに近付こうとし、

「はい。ちょっと待った」

つと言う声に動きを止めた。

さゆりはその声に、耳を疑った。

何故ならその声は、目の前にいる東山刑事の声で、声は東山刑事の後ろから発せられたからだ。

視線を目の前の東山刑事の後ろに向けると、そこには……もう一人の東山刑事がいた。

第三章『奪われたオウキ』 22

夜衣斗

(夜衣斗。そっちは家に帰る道じゃないだよ)

……………わかってる。

(ふふふ。ならいいんだわね)

……………何とでも思え……………。

駅からの帰り道。俺の足は視線と家に向かわず、警察署に向かつていた。

……………多分、春咲さんが言った事が、俺の中に引っ掛かり……………何の考えもなしに行動しちゃってるんだと思う。

実際、どうするかなんて全く考えていない。

今だって、助けたいし、どうもしたくない。

だけど、何もしないで後悔するのは……………やっぱり嫌だ。だけど……………これが直接巻き込まれているなら、こんな迷いなんてしないで次の行動を決められと思う。そういう時の精神状態は……………言わば、キレてる・キレかけている状態なので、通常と若干思考回路が違う。まあ、そもそも状況が、そうしなきゃいけない状況で、選択の余地がないと言え、ない状況だと言えるが……………考えしてみれば……………今回の事も宿命の悪意に関わる……………俺の死の運命なら……………どこかで本格的に巻き込まれるんじゃないだろうか？

そう思った時、爆発音が聞こえた。

音のした方向は……………警察署の方向!?

俺は慌てて制服に偽装させていたPSサーバントの偽装を解き、空を飛んで警察署を確認すると……………警察署から煙が上がっていてその周りにはバイクに乗った無数の男達と、様々な武霊がいた。

どういうことだ?いくら警察署が下校ルートから外れた場所にあるとは言え、スカウトサーバントの索敵に引っ掛からないなんて事が……………って、瞬間移動系の能力を持った武霊がいたな……………ひ

よりさんの………これだけの人数を運べるのか………もう少し考
慮に入れておくべきだったか………いや、今はそんな事より！
「オウキ！」

第三章 『奪われたオウキ』 23

????

夜衣斗が爆発音を聞くより数分前、警察署では大きく事態が動いていた。

まず、警察署の前に大きな扉が唐突に現れ、そこから時計を持つたうさぎと共にバイクに乗った少年達が次々と出てくる。

それを確認した星波警察は、すぐさま武霊使いを出勤させ、警察署の前でにらみ合い状態になった。

そんな中、東山賢治は、にらみ合いに違和感を覚えた。
らしくないからだ。

鬼走人骸が活動する時、そのほとんどが計算ずくの『速さ』を持っていた。

だから、警察などが対応の準備を終える頃には、全てが終わっている。

気になった賢治は、密かにこの場から離れ、現在唯一警察の中で鬼走人骸と関わりがある西島さゆりの所に向かった。

そして、その場所で、賢治は『自分の偽者』を目撃する事になり、声を掛けて呼び止めた。

同時に、手に自身の武霊十字架と拳銃を融合させたような拳銃『十字銃』を具現化させ、偽者に向ける。

賢治の武霊は、武霊使いの中でも珍しい『装備型』と呼ばれる武霊で、それは『普通の武霊の様に動ける身体を持たず、武霊使い自身に使わせる』武霊。

武霊使い自身に使わせる為か、その通常具現の大きさは普通の武霊なら基となったイメージの倍の大きさになるが、装備型の場合、基のイメージの大きさのまま具現化する。

その為か、その攻撃力は通常の武霊より何倍も高いが、その反面レベル1以上の具現化が出来ないと言う欠点と、武霊使いが常に危

険に身を晒さなくては使えないと言う欠点があった。

だから、自警団と、特に美春と一緒にいる時は、賢治は武霊を使わせてくれなかったりする。

その事を思い出して、賢治は苦笑しつつ、

「さて、呼び止めが利くってことは、武霊使い自身が化けているのかなあ？ だったから、正体を現してくれると助かるんだけど？ じゃないと撃っちゃうよ？」

と若干ふざけた勧告を口にした。

その勧告に偽者は手を上げゆっくり振り返り、偽装を解いた。

「これはこれは……！？」

現れたその顔に賢治が驚いた次の瞬間、不意に部屋で爆発が起きた。

第三章 『奪われたオウキ』 24

????

生じた爆発により、部屋の壁が壊れ、夕闇に包まれようとしている外が見える。

爆炎により燃え始める部屋に、炎の怪鳥の様な武霊を身に纏った頂喜武蔵が空いた穴から入ってきた。

爆発で壁まで吹き飛ばされた賢治は、朦朧とする意識の中で、部屋の中を確認するが、そこには頂喜武蔵以外いない。

爆発が起きる直前、賢治に化けていた男が、さゆりに向かって飛びかかったのは見えた。

つまり、

(何らかの武霊の能力で連れ去られてしまったわけだ。まったく

……いやいや、ホント……)

そう賢治は心の中で呟き、へらっと笑い。

「どうもおいたがし過ぎる様だな？え？ガキが！」

いつもの賢治ではありえないほど激情にかられた顔になって、どすの利いた声を発した。

間髪入れずに、頂喜武蔵に向けて躊躇なく十字銃のトリガーを引く。

頂喜武蔵はそれを腕の羽から出る炎で防御しようとするが、その炎ごと部屋の外へと吹き飛ばされる。

十字銃から撃ち出されたのは、実弾ではなく、強力な衝撃波だった。

「安心しろ。全身打撲程度ですませてやるよ」

そう言つて、空中で何とか体勢を整えた頂喜武蔵に銃口を向ける。が、銃口を向けた頂喜武蔵が、笑っているのに気付いた賢治は勘に任せて横に跳ぶ。

それとほぼ同時に、部屋の炎が狼の姿に変化し、賢治が直前まで

いた場所に飛び掛かってきた。

反射的に炎の狼に十字銃を撃つが、炎の狼は一瞬だけ飛散して、周囲に炎を撒き散らして狼の姿に戻ってしまう。

「それどころか、撒き散らされた炎も狼に変化し始めた。

「……………なるほど、これは俺の武霊では相性が悪いな」

十字銃が撃てる弾丸の種類は、実弾・炸裂弾・衝撃波・レーザーの四種類で、十字部分を回転させる事によりそれを選べる。他にも十字部分から剣の様にレーザーを出す事が出来るが、そのどれもが炎の狼とは相性が悪かった。

頂喜武蔵は、それを計算して炎の怪鳥の武霊を借りているのだから。

「ツチ。仕方がない」

賢治は空を飛んでいる頂喜武蔵に衝撃波を連射し、それをあつさり避けた頂喜武蔵が再び賢治を視界に収めようとしたが、見えたのは脱兎の如くその場から逃げている賢治の後姿だった。

第三章 『奪われたオウキ』 25

夜衣斗

警察署の上空まで来た時、星電が鳴り出した。

「……………ふと思ったが、PSサーバントを着ている時って、携帯とか財布とかどうなってるんだらうか？……………設定上は、ナノマシンによって分解されてて、その構成情報のみが保存されている。って言う設定だった……………って事は、

「……………右掌に星電再構成」

そうつぶやくと、星電が右掌に再構成された。

……………何だかね……………。

星電の着信相手は……………東山刑事からだった。

ちらつと下で練り広げられている警察の武霊使いとバイクに乗った男達の武霊との戦いを見ると、そこには東山刑事らしき姿はない……………それにしても……………警察の人達の武霊は、警察関連のが多いな……………

そんな事を思いながら、俺は星電に出た。

「黒樹君。君、今どこにいる？」

……………？なんだか若干いつもの雰囲気と違うような……………

「……………警察署の上空にいますか？」

「君はタイミングがいいな。君の武霊に炎で構成された敵に最適な武装はあるか？」

その問いに俺は再び警察署に視線を向けた。

警察署の至る所から炎と煙が上がり始めている。

……………なるほど、炎系の武霊がいるわけか。

「……………今、送ります」

「助かる」

よほどピンチなのか、それで東山刑事は通話を切った。

「セレクト。レスキューサーバント、十機」

俺の命令に、オウキの方から円盤に二本の筒と腕が付いた円盤が十機現れる。

名前の通りレスキューを目的にしたサーバントで、シールドサーバントの様な力場発生装置以外に、限定的に強力で精密なコントロールが可能な力場を発生できる二本の腕や、二本の筒からは消火剤などの様々なレスキューに必要な液体などを出す事が出来る仕様になっている。

まあ、炎系の武霊なら、炎を消してしまえばいい……と。

「行け、サーバント」

俺の命令に、サーバント達は一斉に警察署の中への飛んで行った。さてと……もう一度下の戦いの様子を見る。

どうやら拮抗している様だが……状況から考えて、こいつらが鬼走人骸なんだろうが……聞いていた武霊使いの数と大分違う様な……十人ぐらいと昨日東山刑事が言っていたが……どうみても三十人以上いる様に見える……それってつまり、例の謎の薬物か？……まあ、何にせよ。警察に加勢にしようか……。

そう思った時、オウキが俺の下に移動し、その瞬間、炎が襲い掛ってきた。

第三章 『奪われたオウキ』 26

????

さゆりが目を覚ますと、そこは荒れた部屋の中だった。

意識を失う前までいた部屋より大きく、また、起きた爆発で荒れたと言うより、長い時間放置された事による荒れさ具合だったので、全く違う場所なのはわかるが、なぜここにいるのかがさゆりには分からない。

分からないまま、さゆりは立ち上がろうとした時、自分の背後に誰かが倒れている事に気付いた。

振り返って確認すると……そこにいたのは、両手足に手錠を掛けられ、意識を失っている夜衣斗だった。

これには混乱するしかないさゆりだったが、とにかく夜衣斗を起こそうと夜衣斗の身体を強請ろうとした時、部屋のドアが開いた。開いたドアから頂喜武蔵が現れ、その後からはぞろぞろと人相・雰囲気が悪い少年達が入ってきた。

「黒樹夜衣斗を起こそうとしても無駄だぜ、しばらく目を覚まさない様に薬を嗅がせたからな」

さゆりの手が夜衣斗の肩に置かれているのを目にした頂喜武蔵は、そう言って笑った。

「……………ひよりはどこ？」

キツと笑う頂喜武蔵に視線を向けるさゆりに、頂喜武蔵は肩をすくめ、

「娘の心配より、自分の心配をしたらどうだ？」

そう言うと、周りの少年達が笑い出し、さゆりが逃げるより早く、数人がかりでさゆりを床に押さえ付けられ、無理矢理仰向けにされてしまう。

そして、さゆりの正面にいる少年が小型ナイフを取り出した。

あまりの事に悲鳴すら上げる事が出来ないさゆり。

その恐怖を楽しむかのようにゆっくりとナイフがさゆりの服の下
に入れられ、徐々に服を………

第三章 『奪われたオウキ』 27

美羽

「夜衣斗さんがさらわれた!?」

東山さんのその言葉に、私は信じられなくて、思わず大声を上げてしまった。

その大声に警察署の前で東山さんと同様に治療中の人達の視線がこっちに集まる。

……しまったかも…… こういう情報は隠しとくべきなんだよね

……ああ、東山さんと隣の巴先輩の視線が痛い。

夜衣斗さんの教室で巴先輩と合流した後、私達は夜衣斗さんを探して星波学園をうろろろしていた。

そうしている内に、爆発音が聞こえて……もしかしたら、また夜衣斗さんが厄介事に巻き込まれているんじゃないかと思って、煙の上で上がっている所にコウリュウで急いで向かうと……警察署でちょうど鬼走人骸達が見覚えのない扉に入って消えている所で……夜衣斗さんの姿はどこにもなかった。戸惑いながら警察署の前に降りると、警察署の中から所々焦げた東山さんが現れたので、話を聞くと……夜衣斗さんは、また新たなサーバントを出して警察署を燃やしていた炎の狼を倒したんだけど、その直後に炎のプレスを受けて、それをオウキが防ぐ隙に、どこからか大きな鏡が投げられて、夜衣斗さんがそれを避けた瞬間、その姿が消えてしまったらしくて……同時にサーバントもオウキも霧散し消えてしまった事からすると、何らかの武霊能力で気絶させられたんだらうけど……何でも、警察署に保護していた西島さゆりさんって人の部屋にも大きな鏡があつて、同じ様に消えたらしいから……そこから考えると鬼走人骸に『鏡を使った瞬間移動が出来る武霊使い』が加わったって事だよな？

「……あの夜衣斗さんがこんなに簡単にさらわれるなんて……」

…」

思わずそうつぶやくと、それを聞いた巴先輩が首を横に振った。

「黒樹君は強力な武霊を持つてるだけの普通の人よ。だから、とつさの事には弱い」

「そうかもしれませんが……」

……なんだか納得出来ない。つと言うより、連想し難い……どうも巴先輩と私とは夜衣斗さんに抱いているイメージが違う感じがする。

まあ、でも、今はそんな事より……

「大丈夫。わざわざさらったつて事は、少なくとも、直ぐに命に関わるような事はされないはずだから……」

そう巴先輩は自分に言い聞かせる様に言った。

その拳は強く握られていて……

「そうだねえ。確かに、命を取られる事はないだろうけども。もつと最悪な事になる可能性があるよねえ」

東山さんのその言葉を、私は直ぐに理解出来なかった。

でも、

「忘れた美羽ちゃん？頂喜武蔵の武霊の能力を」

「あ！」

頂喜武蔵の武霊の能力。それは、無理矢理でも貸すと相手に言わせれば、例えばそれが武霊でも借りる事が出来る能力で……つと言う事は、オウキを狙って？そんな！オウキがあんな男の手に渡ったら……

「あくまで借りる能力だから、黒樹君の命『だけ』は平気だろうけどねえ……仮に、もし『そう』なったら最悪だよねえ……あのオウキが敵になる。しかも、レベル3まで到達した頂喜武蔵が操る武霊としてね」

レベル3のオウキ！？

レベル1で高神麗華の武霊軍団を圧倒するほどの力があるのに……

……レベル3つて……

「……まあ、こっちも急いで救出の為の準備をしているから……
……それまで黒樹君が耐えてくれればいいんだけどねえ」

第三章 『奪われたオウキ』 28

夜衣斗

目を覚ますと、まず目の入ったのは数人の男達に押さえ付けられて服をナイフで切られている西島さんだった。

条件反射的にオウキを呼ぼうとするより早く、西島さんの上に乗っていた男が退き、ガチャポン機のような武霊が現れ、その拳を振りかぶる。

その拳の先は……西島さんに向けられている。

「オウキを具現化するなよ？具現化した瞬間、殺すからな？」

その声は……頂喜武蔵のもので、

「もう少し楽しめるかと思ったが、薬の量が足りなかったのか？随分早く目覚めやがって」

その言葉にさゆりさんを見ると、さゆりさんの服は上着が下着が見えるぐらい切り刻まれているだけで、それ以上されている様子はなかった。

ホツとすべきかどうかよく分からないが、まずは状況である事は変わらない。

なんでこういう状況になっているか全く思い出せず、最後の記憶はオウキが迫りくる炎を防いだ瞬間。

状況から考えて、その瞬間に別方向からの武霊能力で気絶させられて、この場所に連れて……両手足に手錠を掛けられている。

そして、俺をさらった目的は、

「要件は一つ。オウキを俺に貸してくれないか？」

やっぱりな……この状況を切り抜ける手段は……

そう思っただけで必死に考えをめぐらせようとした瞬間、武霊の拳が振り下ろ

り下ろす
「待て！」

反射的な言葉に……武霊の拳は止まらなかった！？

西島さんの腹部に突き刺さる武霊の拳に、胃の内容物を吐き出し、咳き込む。

直前で加減をしたみたいだが……この男。ひよりさんの時も思っただが……危険過ぎる。

「次は加減しない」

頂喜武蔵の顔は喜びに歪んでいて……どう見ても、考える余裕を与える気も、選択の余地も与える気がさらさらない。

かと言って、このままオウキを貸したとして、俺の命は貸すと言う能力制限があるから大丈夫だろうが、西島さんはもちろん、オウキを手に入れた頂喜武蔵が星波町の人達に何もしない保証は……いや、きつと……

ガチャポン武霊が再び拳を振り被る。

くそ！

「分かった！オウキを貸す！」

そう言った瞬間、強烈な虚脱感と共に身体の何かが引つ張られる感覚に襲われ、俺の背中から具現化していないオウキが現れ、ガチャポン武霊の中に吸い込まれ、小さな人形になったオウキがカプセルに入ってガチャポンの中に現れた。

……最悪だ。オウキを、借りられた。いや……奪われた……

……

第三章『奪われたオウキ』 29

飛矢折

警察・自警団……そして、事態の深刻さから、武装風紀までが加わった混合救出部隊。

赤井さんや統合生徒会長までいるその部隊をあたしは遠目に見ていた。

団長さんに、

「夜衣斗君の力を借りれない君を連れていく事は出来ない」

そう言われ、警察署の前の歩道橋の上で部隊の救出作戦の説明を見るしかなくなった。

……確かにあたしだけだと純粋な武霊戦では役に立たない……でも、それ以外なら……

あたしが悔しい思いをしている間も、拡声器を持った団長さんが作戦の説明は続けていて、気になるあたしはそれを全部聞いていた。

「作戦はシンプルだ。私を中心とした自警団メンバーが囷となって鬼走人骸と正面から戦っている間に、三島を中心とした武風は側面から強襲。それで連中を壊滅出来るならそれでいいが、最悪……

……黒樹夜衣斗のオウキと戦う事になる」

団長さんのその言葉に、この場にいる武霊使い達が騒然となる。

そうだよね……あのオウキを相手にしなくちゃいけないなんて……最悪以外の何物でもないよね……そうやってない事を祈るばかりだけど……そうやってないって事は、黒樹君の身の安全が確定出来ないってことになるし……

「不安なのは分かるが、遅かれ早かれ救出が間に合わなければ戦う事になる事は避けられない。なら戦力も事前周知も住んでいる今が戦うなら戦うべきだと私は思う」

その団長さんの言葉に、ざわめきが段々と収まった。

武霊なんて存在がいるせい、この町に住んでいる関わっている

人達の切り替えは普通の人達に比べて速い気がしていたけど……
いい事なのか、わる事なのか……

「では、話を続ける。自警団と警察が鬼走人骸を抑えている間に、東山を中心にした警察が廃工場を探索。黒樹夜衣斗・西島さゆり。可能なら西島ひよりの救出。特に夜衣斗君の救出は最優先とする。これはオウキが奪われている可能性を考慮しての事で、万が一、奪われていた場合は」

「あら？この気配は飛矢折さんね？」

不意に背後から声を掛けられた。

気配が全く感じられなかったから、驚いて反射的に距離をとって自然体の構えにをってしまう。

その反応に声を掛けてきた女性は……あたしのクラス担任の高木弥恵先生はクスリと笑った。

「飛矢折さんもまだまだね」

第三章 『奪われたオウキ』 30

夜衣斗

自身の武霊にオウキが入った事を確認した頂喜武蔵は……… 笑みを浮かべた。

背筋が寒くなる様な笑みを。

その笑みは簡単に次の行動を予見出来る笑みで……… だから、俺は反射的に、『命を掛けた』。

美魅！お願いだ。

俺の心の中の呼び掛けに、俺の胸から美魅が現れ、男達がそれにリアクションを取るより早く、俺がイメージした通りに……… 首筋に鋭い爪を置いてくれた。

「白い猫の武霊だと？二体以上武霊を持つ奴なんて聞いた事がねえが……… 何のつもりだ」

周囲が驚いているのにたいして、全く驚いていない頂喜武蔵のその問いに、俺は笑みを浮かべた。

「決まってる。俺や、西島さん。そして、ひよりさんを傷付ける様な行為をすれば、俺は今ここで、首を掻つ切り死ぬ」

俺のややぶつつん気味の覚悟の言葉に、周りが動揺する中、頂喜武蔵だけは笑みを浮かべた。

「なんで俺がそんな事に応じなきゃならね？」

「オウキの力が必要なんだろ？いくら他の武霊使いから武霊を借りれるからと言って、雑魚ばかり集めたんじゃ星波町の総力に勝てるわけがない。だが、オウキがあれば、話は別。だから、俺をさらい。『ついでの』人質として西島さんをさらった。違うか？」

「っは！」

俺の問いに、頂喜武蔵は鼻で笑い何かを言おうとした時、着信音が聞こえ始めた。

その着信音を聞いた頂喜武蔵は大きな舌打ちをし、

「いくぞ」

そう言って頂喜武蔵は部屋から出ていった。

男達も頂喜武蔵にぞろぞろと付いてつて、最後の一人がカギを閉める音が聞こえ……………俺はため息を吐く。

警察署を襲撃したんだ。そんな危険な連中を自警団や警察が放つて置くわけがない。

事が事だけに、場合によっては武装風紀も参戦しているかもしれないが……………何にせよ。星波町側が動いたってことだろう。多分、その合図がさっきの着信。

これで助かる可能性が飛躍的に上がったが……………それでも……………このままだと、オウキが多大な迷惑を……………いや、場合によっては最悪な事態も起こしかねない……………それだけは何とかしないと…………………………つてか、何とか出来るのか？今の俺に……………

武霊を奪われ、手錠を両手足に掛けられ床に転がされている自分を再確認し、俺は深いため息を吐かざる得なかった。

第三章『奪われたオウキ』 31

美羽

自警団・警察・武装風紀の三組織合同救出作戦。

今までこんなに早く三つの組織が一緒に集まって行動を起こした事はなかった……それは、夜衣斗さんのオウキの力が、とてつもないからで……もし、悪意を持って使われた場合、普通の武霊に比べて汎用性が高過ぎて、どれだけの被害が町に、学園に出るかかわらない。

それに、もう一つ懸念されている事があった。

それは、鬼走人骸の武霊使いの数。

前に奴らが町に来た時は、武霊使いは五・六人しかいなかった。

でも、警察署を襲った武霊使いの数は三十人以上。

これは先月の容疑者黒樹夜衣斗で使われた可能性があるって、夜衣斗さんが言っていた強制武霊使い覚醒薬を奴らが大量に保持している・使ってるって事になる。

だから、時間を掛ければより多くの、場合によっては五月雨都雅が使った武霊使い強化薬を使用されて……手の付けられない状況になりかねない。

そう美春さんが判断して、こんなに早く三つの組織を纏め上げた。

……いつも思う事だけど、美春さんって、とんでもない人だよね……自警団と微妙な対立関係にある武装風紀や、立場的に二つの組織と一定の距離を置いている警察を短時間で纏め上げる………どうやったら美春さんみたいになれるんだろう？………私なんかじゃ無理か。

そんな事を無理矢理考えつつ……夜衣斗さんへの心配と不安を抑えていた。

それでも、先行部隊である自警団の精鋭部隊と共に廃工場に近づくとつれ、否応なしにも心配と不安が強まってきて……嫌な予感

も強くなってきた。

廃工場の周囲の民家には、常駐していた警察（鬼走人骸対策のー環で）の指示で避難済みで……不気味な静けさが漂っている。

緊張が表に出ていたのか、美春さんが私に近付き、微笑み掛けてくれた時、突如として静寂の中にバイクの爆音が響き始めた。

来た！待っててくださいね夜衣斗さん。今、助けに行きますから

！

第三章 『奪われたオウキ』 32

夜衣斗

「夜衣斗君」

腹部のダメージが動けるまで回復したのか、切られた服を押さえながら、西島さんが近寄ってきた。

流石にその様子に声を掛けないわけにはいかず、

「……………大丈夫ですか？」

つと声を掛けると、西島さんは力なく微笑み、

「夜衣斗君のおかげで服以外は……………まだちょっとお腹が痛いぐらいかな？」

そう言いながら、西島さんは手錠のせいで身動きの取れない俺の上半身を起こしてくれた。

「……………ありがとうございます」

「ううん。私にはこんなことしか出来ないから」

そう言っただけほほ笑んだ西島さんは、少し躊躇って、

「……………ねえ？さっき、オウキを貸す……………とか言ってたけど……………もしかして」

武霊使いではない西島さんには、具現化していないオウキが頂喜武蔵の武霊に取り込まれた様子が見れていなかったのは間違いないだが、それでもそんな問いをしてきた所からすると、さっきのやり取りから、ある程度の予想は出来ると考えるのが、自然か……………まあ、ここで嘘を吐いても仕方がないか。

俺はため息一つ吐き、頷いた。

「……………ええ、今の俺にはオウキを具現化させる事が出来ません……………そう。じゃあ、自力での脱出は無理なのね……………」

分かっていた事とは言え、落胆の様子を隠す事が出来ない西島さん。

確かに、今の俺や、西島さんにここを脱出する手段はない。だが、

「……………どうでしょう？」

俺は目の前に座って毛繕いをしている美魅を見た。

頂喜武蔵は、美魅をあゝの状況であんな事しか出来なかつたことからして、大した存在じゃないと感じた様だが……………実際の所、美魅が『どこまで』出来るか、俺は知らない。だが、今は……………美魅に頼るしかない。

「……………美魅。美魅の力でここから俺達を脱出させる事は出来な
いか？」

その俺の問いに、美魅は毛繕いを止めて、

「今のあたいには難しいだわね」

「猫が喋つた!？」

俺の中から出てきた瞬間を見ていなかった西島さんの驚きをとりあえず無視して、

「……………今のつて事は、何とかする方法があるんだな？」

俺の確認に頷く美魅。

「……………つで、その方法は？」

その問いに、美魅はやや躊躇つた感じになり、俺が眉をひそめて
いると……………

「あたいと夜衣斗が『契約』する事だわよ」

……………契約？

第三章 『奪われたオウキ』 33

飛矢折

混合救出部隊と鬼走人骸の武霊達が廃工場近隣でぶつかり合う。

互いに様子見なのか、それとも鬼走人骸側がほぼ全員レベル1までしか到達していないのか、具現化レベル1同士での戦いになっている。

それでも、廃工場近隣は危険地帯である事は変わりなくて……そんな中を、あたしと高木先生は気配を消しながら進んでいた。

警察署の前で高木先生とあつた後、武装風紀の『建前上の』顧問として来ていたと言う高木先生は、あたしの事情を聞くや否や何故か、

「じゃあ、こつちはこつちで、黒樹君を助けに行きましょうか？」
つと言つて、とくに躊躇することなく廃工場に向かう高木先生を止めるに止められず……こんな所まで来てしまった。

確か高木先生も武霊使いじゃなかったはずだから、危険なのでは？つと思つてその事を聞くと、

「大丈夫。見付からなければいいのよ」
笑顔でそんな事を言われた。

……確かに、ここまで来るのに誰一人として遭つてない。

前々から思っていたけど、高木先生は普通の人。うんうん。武術家として鍛えられたあたしより気配に対して鋭い……それどころか、警察署の前であたしに気付かれる事なく接近した所からすると……何らかの武術を身に付けていて……もしかしたら……あたしより強い可能性だつてある。

前にお祖父ちゃんが、「障害者だからと言って弱いとは限らない。逆に障害者だからこそその強みを生かして健常者より強くなる者もいる」つて言つてたのを思い出した。

一定の距離を歩いては、止まって少しだけ持っている杖を突いて

再び歩き出す高木先生。

時よりあたしに手で止まれなどの合図などをすると、決まって近くを通り過ぎる人の気配を感じた。

見えていないのに障害物の位置を正確に把握しているかの如く、一切何処にもぶつからず、その歩みに迷いもない。

それどころか、あたしより何倍も早くに人の気配とその動きを把握する。

……もしかして、杖で発した音で周囲を認識しているとか？

……蝙蝠じゃあるまし……まさかね……いえ、出来るかしら？
何にせよ……

五感のどこかが失われればその他の器官が、それを補う為に強化されるみたいな話を聞いた事があるけど……それにしても、高木先生の能力は異常に感じられた。

……どれだけの修業をしたらこんなになれるんだろう……。疑問と憧れに近い視線を高木先生に向けると、高木先生は不意に立ち止まった。

既に廃工場内に入っていて……高木先生の進行方向を見ると落書きなど人為的により荒れている場所がある。

「中に何人かいるみたいだから、あそこじゃないかしら、黒樹君達が閉じ込められているのは」

そう小声で言う高木先生。

……確かに人の気配はするけど……。

「どうするんです？」

「どうするって？」

あたしの問いに、高木先生は首を傾げた。

「もし、中にいるのが武霊使이었다ら、あたし達だけで乗り込むのは、危険だと思っんですけど……」

「それはないと思うわよ。だって、自警団や武装風紀を相手に予備戦力を残せる様な状況じゃないでしょ？」

「それはそうですが……」

「仮に居たとしても、武霊を具現化される前に武霊使いを気絶させちゃえばいいのよ」

そう言った高木先生は微笑んで、躊躇なく歩き出した。

ここまで来ておいて、先生の行動を止めるのは……今更遅過ぎる気がしたあたしは、覚悟を決めた。

待っててね黒樹君。今、助けに行くから。

第三章『奪われたオウキ』 34

????

頂喜武蔵は歓喜していた。

手に入れたオウキの力が予想以上だったからだ。

頂喜武蔵の武装守護霊・ガチャポンマンは、貸すと発言させたものなら何でも強制的に借りる事が出来る。

その対象は武霊にまで及ぶが、武霊を借りた場合、他のものを借りる時とは違う現象が起きる様になっていた。

それは、頂喜武蔵の任意でその手元に借りた武霊のミニチュアが入っていたガチャポンのカプセルが現れる事。

そして、その中にその武霊の説明書が入っており、それを見て頂喜武蔵は借りた武霊の能力と特徴を知り、操っていた。

瞬時に様々な武器・兵器を構築する簡易格納庫システム。

様々な機能に特化した半自律小型飛行兵器サーバント。

全機能を一時的に限界以上まで高めるオーバードライブモード。

などなど、カプセルの中から出てきた説明書は、僅かな間では読み切れないほどの厚さになっていた。

(こいつがあれば)

視線を武霊達が激突している現場へと向ける。

今、頂喜武蔵がいる場所は、廃工場の中で最も高い建物の屋上。

そこから拮抗している戦況を見降ろしながら、頂喜武蔵は笑い、既に具現化していたガチャポンマンのレバーを回し、ガチャポンマンをオウキに変化させた。

「さあ、パーティータイムぜ！」

オウキから無数のサーバントを出し、頂喜武蔵はオウキに照明弾を撃たせた。

照明弾の光は夕闇に沈む空に輝く。

その空にどんよりとした雲が迫っており、梅雨の時期だと言う事

も重なって、これから土砂降りの雨が降るのを予感させるのに十分な空だった。

第三章『奪われたオウキ』 35

美羽

今日は今月に入って珍しく晴れの一日だった。

だけど、天気予報でも夕方には雨が降り、明日まで土砂降りになるって予報されていた通り、日が沈むに連れ空は曇り始め、ポタポタと空から雨粒が降ってきた。

さつき空に上がった映画とかで見る閃光弾の光は、まだ空にある。頂喜武蔵対策として私は前に出ていないけど、隣で一緒に待機している美春さんから入ってくる情報によると、閃光弾が放たれると同時に、鬼走人骸達は一齐に武霊を残して撤退を始めた……らしい。

その事に眉をひそめる美春さん。

……そう言えば、いつもの鬼走人骸なら、暴れるだけ暴れて、一人か二人を囿にして逃げていた様な……

そう思っていると、天候が悪化し続ける空に、無数の小型円盤が現れ始めた。

ぞわつと背筋に寒気が走る。

「美春さん………」

私の呼び掛けに、美春さんは無言でコロ丸を具現化させた。

それとほぼ同時に、円盤達の中にオウキが現れる。

このタイミングで現れたオウキ。

どう見ても……最悪の状況………だけど、これで夜衣斗さんの無事は確認出来た。後は………

「コウリユウ！」

私はコウリユウを具現化させて、背中に乗った。

「作戦通り、私は遠距離から支援します」

そう言っ、私はコウリユウを飛び立たせた。

こっちは何とかするから、しっかりやってよね東山さん！

???

「はくつしょん！」

そのあまりの緊張感のない上に、救出作戦中だと言うのに遠慮なくしたくしゃみに、この場にいる全員の白い目線が東山賢治に集まった。

「ん、誰か噂してるかもねえ」

などと言って集まる視線を気にせず、さっさと先へと進む賢治。

警察の武霊使いの人数は他二つの組織に比べて断然少ない上に、先程の襲撃でそのほとんどが意志力を消耗してしまっていた。

その為、今、この場にいるのは賢治も含めて、五人。

これだけの人数しか警察側では用意出来ず、故に救出担当になっただけだが……

「立場的には普通は逆なんだけどねえ」

とひとり言を言う賢治を咎める者はこの場にはいなかった。

賢治と違って口には出さないが、この場にいる全員が思っている事なのだろう。

廃工場の建物の間々で見える武霊達の戦いは徐々に激しさを増している。

その光景に、悔しさと憤りを感じない警官は、この場にはいない。その事に気付いた賢治は、密かに笑みを浮かべていた。

(少なくとも、ここには警察がある)

そう思い、そして、星波町に来る前の事を思い出し、苦笑した。

「まあ、今は、そんな事より、人命優先。作戦実行つと」

そう言って嫌な記憶を振り払った時、建物の間から見える戦場に、空を飛ぶオウキと無数のサーバントが現れるのが見えた。

(やっぱり間に合わなかったか……だが、これで黒樹君の無事は確認出来たわけだ)

最悪な状況だが、心の中ではほっとした時、目的の鬼走人骸のたまり場とされてる場所の近くまで来て、眉を顰めた。

何故なら、そのたまり場の前に、倒れている鬼走人骸のメンバーがいたからだ。

「……………どういう事なんだろうね？これは？」

思わず放った賢治の問い掛けに、他四人はそれぞれ困惑の表情を浮かべるしかなかった。

第三章 『奪われたオウキ』 36

飛矢折

入口付近に三人……………

建物の壁に張り付きながら気配を探るあたしに、隣の高木先生が気配なくあたしの耳元に顔を近付けてきたので……………ちよつと戦慄を覚えたけど、何とか平静を装いつつ（それすら見抜かれている可能性が高いけど……………）、高木先生の言葉に耳を傾けた。

「三人の内、一人は何かを、音からして刃物ね。を手の中で弄んでいるわ。気配からして、刃物を持った子以外は武霊使いかもしれないわね」

……………確かに、三人の内の二人は、妙な気配を感じる……………かな？

「じゃあ、丁度二人だし、私は右を、飛矢折さんは左の子をお願い出来る？」

「構いませんけど……………」

高木先生って……………本当に……………戦えるのかな？

そんな疑問を口にするより早く、高木先生は小石を持ち、投げた。な！もうちよつと心の準備って言うか、合図してください！

つと心の中で抗議しつつ、高木先生に合わせて動く。

高木先生は投げた小石が三人の男達を飛び越して、向かい側に音を出すと同時に、気配を消して三人に接近。

音に気を取られて後ろを向いている三人の内の右側の男の頭を杖で小突いた。

その瞬間、小突かれた男はそれで脳震盪でも起こしたのか、崩れ落ちる様に倒れる。

あたしが掌ていで左の男の顎を打ち抜いて気絶させるより少ない力で気絶させている。

見えないのにどうやってそんな事をしたのかは謎だけど、これでお祖父ちゃんの言っていたが……………本当だったって事だよね……………世

の中広いな……………まあ、今はそんな事より、
残された男を見ると、男は震え、手に持っていたナイフをあたし
に……………本当にナイフ持つてる……………向けた。
あたしはため息一つ吐き、瞬時に間合いを詰めて、ナイフを持つ
手の親指を握り、捻る。

男は激痛にナイフを放し、地面に落としたので、そのまま腕を背
中に回し、地面に組み伏せた。

……………本当に武霊を持ってないみたい……………うん。この気配、覚
えておこう。

そんな事を思っていると、高木先生が、地面に組み伏せている男
の頭近くに杖を……………思いつき振りおろした。

僅かに頭部にかすらせていたので、

「大人しく黒樹夜衣斗の場所に案内する?」

つと言う高木先生の妙に優しい問い掛けに、男は何度も頷いた。

……………。

「なあに?飛矢折さん?」

「な、何でもないです」

「そう?じゃあ、黒樹君を助けに行く前に、入口の前に気絶して
いる子達を運びましょうか」

「?。何です」

「時間稼ぎになるでしょ?」

「時間稼ぎ?」

「ほら、この二人が入口の前に倒れているのを目撃したら、この
子達の仲間はどう思うと思う?」

「……………警戒しますね」

「そう言う事。後は逃げるだけなんだから、向こうには警戒する
だけして貰いましょう」

そう言って、高木先生は気絶している男の一人を入口に引きずつ
て運び出したので、近くにあったひもを使って組み伏している男の
両腕を縛り、残りの男を入口に運んだ。

そして、残った男の案内で黒樹君が閉じ込められていると言う場所に行くと、そこには……………誰もいなかった!?

「これは自力で脱出したって事かしら?それとも……………」

高木先生が男に杖を向けると、首を横に振って本気で怯えて、困惑していたので、嘘は吐いていないみたいだけど……………自力で脱出したにしても……………オウキがないのにどうやって?……………それとも、別の『何か』があったの?

あたしは空っぽの部屋に、言い知れぬ不安を感じた。

第三章 『奪われたオウキ』 37

夜衣斗

「これは人の魂と、あたいの様な存在の魂を繋げ、互いの力を貸し合わせる道具だよ」

そう言っつて美魅は俺の中から一枚の洋紙を取り出ししてきた。

……………いつの間にそんなのを俺の中に入れていたんだが……………

「そうする事で、あたいは夜衣斗から意志力を貰え、普段のあた以上の力を出す事が出来る……………らしいだよ」

「……………らしいだよよっつて……………」

「しようがないだよ。これを貰っつてから、一度も試した事がないんだわから……………」

困った感じの美魅に俺はため息を吐き、目の前に置かれた洋紙を見た。

何語で書かれているかさっぱり分からないが……………普通の紙に見た目上は見える。

だが、よく見ると妙な違和感を覚える。

重くないのに重いと言うか……………まるで、この一枚に書かれている以上の膨大な情報が込められている……………そんな感じがした。

……………っつと言うか、

「……………誰から貰ったんだ？」

「……………サヤからだだよ」

サヤから……………あの女……………これも運命を変えられる選択って事か？

「……………美魅はそれでいいのか？」

「まあ、夜衣斗には迷惑をかけたかわし、これから厄介になるんだわから……………家賃代わりに、契約してもいいだよ」

家賃代わりっつて……………。

「どうするだよ？夜衣斗」

ちらつと部屋の中をうろろろ調べている西島さんを見る。

なんとか脱出出来ないか調べているのだが………やっぱり無理っ
ぽかった。

俺はため息一つ吐き、

「……………得体が知れないが……………方法はそれしかないか……………
頼む美魅」

「わかったただわよ、夜衣斗」

頷いた美魅は、地面に置かれた洋紙に何事かをつぶやいた。

すると、洋紙は勝手に浮かび上がり、俺の顔の前、微妙に中心が
下の方にずれて止まる。

……………これつてもしかして……………

洋紙に描かれている文字が輝き始め、縦書きの文字が移動し、洋
紙の中心を空白にした円を作り出す。

躊躇いや、止める間もなく、太股に重さを感じ、洋紙が俺の唇に

……………美魅にキスをされてしまった。

……………契約と言えば、そういう方法がって考えなくもなかったが

……………それ以外にもあるだろうが！……………まあ、相手は猫だし

……………カウントには入らないか……………。

そう思った時、

「うそ！？」

西島さんの驚く声と共に、太股に掛る荷重が一気に増え、洋紙が
すつつと消えた。

そして、俺は目を見開いて驚く事になった。

何故なら、俺の目の前には、見知らぬ目を瞑った女性がいて、俺
と……………唇を重ね合わせていたからだ。

第三章 『奪われたオウキ』 38

夜衣斗

え！？え？……………え！？

あまりの事に大混乱。

状況から考えて、目の前にいるのが美魅。

つで、美魅にファーストキスを……………奪われた。

あまりの突発的な事に、かなりの衝撃を受けて固まる俺。

茫然としている俺を尻目に、美魅は唇を放し、自分の手を見て、

近くに落ちていた鏡の破片で顔を確認する。

「おお！？何これ？凄いだわよ」

つと美魅。

顔は全体的に猫っぽいが……………美人で……………何故かメイド服ぽい

格好で、頭部に猫耳・お尻に尻尾がある。

……………いやいや、漫画過ぎるでしょ……………これは……………。

「夜衣斗君」

困惑した様子の西島さんが近付いてきた。

「……………まあ、この町は色々と非常識ですから……………」

いまだに混乱している頭では、それぐらいしか言えなかった。

……………なるべく別の事を考える事にしよう……………うん。そうしよ

う。……………つで、とりあえず、

「……………つで？どうなんだ？」

俺の問いに、美魅は身体の調子確かめる様に手を振ったり、ジ

ヤンプしたりした。

そして、右掌を上に向け……………いきなり爪が伸びる。

人間の爪がではなく、人間の身体の爪の上に別の、剣のような爪が

現れている。

それを出しては、引っ込めを数度繰り返し、ポンっと音を立てて

元の猫の姿に戻っては、ポンっと人間形態になった。

「いけそうだよ」

そう言って美魅は……どつきとする笑みを浮かべた。

……まあ、あれのせいなんだろうが……。

俺は堪らず、ふいっと視線を外してしまい……その為、西島さんには微笑まれ、美魅に不思議な顔をされてしまった……はぁ……

……。

第三章 『奪われたオウキ』 39

夜衣斗

「おかしいだわね……………見張りがいないだわよ」

扉に頭だけ透過させて部屋の外の様子を見た美魅の報告に、俺と西島さんは顔を見合わせた。

ちなみに手足に掛けられていた手錠は、美魅の剣の爪で切り外して貰っている。

美魅曰く、普通の美魅には鉄を切れるほどの力はなかったらしく、面白そうに外れた手錠を無意味にバラバラにしていた。

それにしても……………見張りがいない？……………頂喜武蔵は美魅を武霊と勘違いしていたはず。

なのに見張りがいない？……………千里眼系の能力が使える武霊に見張らせているのだろうか？……………それにしても……………

念の為、扉と同様に壁や床・天井（棚とかがあったのでそこに乗って）に頭を透過させて周りの部屋の様子を確認させるが、やはり見張りらしきものがないし、ない。

……………ふとある事を思い出した。

それは、俺が気絶する直前、背後から来た何かを後部カメラで確認して避けた事。

よくよく思い出してみると、それは大きな鏡だった。

……………もしかして、

「……………西島さん。もしかして、西島さんがいた部屋に姿鏡とかありませんでした？」

俺のその問いに、西島さんはちょっと驚いた様な顔をして、頷いた。

「確かにあったけど……………それがどうしたの？」

「……………いえ」

俺は眉をひそめつつ、部屋にある鏡の破片を見た。

来塚博の武霊シャドウリベンジャーの能力に、影から影へ移動する能力があった。

その能力によりシャドウリベンジャーを認識せずに影の中に引きずり込まれると、引きずり込まれた人間は意識を失う……らしい。まあ、認識していても、影の世界に空気があるかどうか疑問だから、それでも気絶しそのだが……とにかく、そういう能力が可能なら、鏡を媒体にした移動能力とかも可能……っと言うより、自然と言える。

何故なら、武霊の多くは、『子供の頃に見た何か』である事が多く、そして、俺の記憶の中には、鏡を媒介するキャラがいくつかある。

……っと言う事は……。

もう一度鏡を見るが、見た目上は普通の鏡だ。だが、この可能性は無視出来ない。

……まあ、だからと言って、このまま逃げないのは……ありえないな。

俺は深いため息を吐き、覚悟を決めた。

オウキがない状態でどこまで出来るか分からないが、時間が経てば経つほど……そのオウキが町の人達に迷惑をかける可能性が高まる。

それだけは……何とかしないとイケない。

「……逃げよう美魅」

俺の言葉に美魅は頷き、人差し指の剣の爪を出し、ドアと壁の間に差し込んでドアに掛けられた鍵やら鎖やらを切断した。

「それで、どこに逃げるだわよ？」

その美魅の問いに、俺は少し考えて、

「……まずは可能な限りひよりさんを探し……町の外へ行く」

「町の外？」

俺の言葉に美魅は小首を傾げた。

第三章 『奪われたオウキ』 40

美羽

奪われたオウキの初撃は、大量のソードサーバントの突撃だった。その刃に展開されているのは、いつも夜衣斗さんが使っている電撃ではなく……進行上に電柱とかあっても構わずに突撃し、切り裂いたので……触れた物を切り裂く何かを展開されている。

あんなのが人に当たったら……。

自分の想像にぞわつとした私は、反射的にコウリユウに命令していた。

「コウリユウ。拡散レーザープレス」

私の命令を受けたコウリユウは牙を閉じたままレーザープレスを吐く。

閉じている牙によってレーザープレスが無数の光線になり、ソードサーバントの上に降り注いだ。

ソードサーバントはこれで全部落とせたけど……そのせいで家とか道路とかあっちこちに穴が……とつさの事とは言え……美春さんに後で怒られるかも……まあ、でも、ほとんど強くなる雨のおかげで火は上がってないみたいだから、いつもみたいに消火作業はしなくていいみたい。

その雨は、私にはコウリユウの保護力場で届かないからそんなに影響ないけど、これ以上強くなると、視界とか色々状況が悪くなって、武霊の遠隔命令とか、手加減とかが難しくなる。

だから、雨が土砂降りになる前に決着を付けたいんだけど……それは難しそうだった。

私がレーザープレスの跡に気を取られている内に、いつの間にかオウキが地上の自警団の武霊達に接近して……コウリユウにブレスの命令をするより早く、乱戦になってしまう。

いくら武霊だからと言って、味方に当たる様な攻撃は出来ない。

それに、別のサーバントも接近し始めている。

どう見ても、遠距離攻撃系に対する困だろっけど、サーバントの攻撃能力を考えると無視出来なくて……私達はたった一体の武霊に翻弄され始めていた。

第三章 『奪われたオウキ』 41

???

鬱陶しい雨をシールドサーバントで防ぎながら、頂喜武蔵は小瓶から錠剤を流し込み、噛み砕いていた。

その錠剤は、忘却剤や強制武霊覚醒剤などと一緒に提供されたもので、服用すれば意志力が回復すると言う代物だった。

確かに頂喜武蔵は錠剤を飲み込む度に意志力の回復を実感していた。

だが、その回復すらオウキの具現化維持の意志力消費に追い付いていない。

頂喜武蔵は、夜衣斗が出したというサーバントの数以上に出していないと言うのにだ。

この薬剤を提供した少女の話によると、一錠で通常の武霊一体を具現化するぐらいの意志力が回復する。そう言う話だった。

そこから考えると、既に『二瓶空にしている』事も踏まえて、夜衣斗は、

「化け物か」

つと言う事なる。

頂喜武蔵は、夜衣斗をさほど重視していなかった。

ただ他の武霊使いから群を抜いて強力な武霊を所持しているだけの、カモ。

その程度の認識だった。

だが、こうなると、夜衣斗にも得体の知れなさと共に、興味が湧いてくる。が、その興味が夜衣斗自身に向けられる事はない事を知っていた。

何故なら、夜衣斗は後少しで、『殺される事を知っている』からだ。

だから、その少しの間、頂喜武蔵はオウキを楽しみ尽くそうと考

え、ズボンのポケットからある物を取り出した。

それは、五月雨都雅が使用した注射器と同じ物だった。

そして、頂喜武蔵の携帯が鳴り、頂喜武蔵は笑みを浮かべる。
手下達が武霊使い強化薬を打ち終わった。

携帯の着信はそれを知らせるものだったからだ。

頂喜武蔵は自分の首筋に注射器を打ち込み、空になった容器を投げ捨て、携帯を操作した。

一斉攻撃の合図を送る為に。

第三章『奪われたオウキ』 42

美羽

次々と自警団の武霊がオウキにより霧散される。

刀で切られ、銃で撃たれ、ハンマーで打ち砕かれ、自警団の攻撃は周りを漂うシルドサーバントによって防がれて、傷一つ付けられない。

このままじゃ自警団の人達がいる所まで突破される！

そう思った時、コロ丸を身に纏った美春さんが戦場に現れ、シルドサーバントごとオウキを体当たりで吹き飛ばした。

美春さんが私を見る。

今の美春さんの体当たりで、オウキが自警団の武霊達の中から出ていた。

「コウリュウ！アイスブレス！」

コウリュウに冷気のブレスを吐かせて、オウキとサーバントを雨水ごと凍らせる。

オウキ本体はそれでは動きは止められないけど、サーバントの動きは止められた。

それによって美春さんの刃の嵐が全てオウキに突き刺さり、オウキは一瞬ガチャポン機のような本来の姿になって霧散。

………とりあえず、退けたけど………廃工場の方を見ると、オウキが出ると同時に引いた鬼走人骸達がいるのが見えた。

それに、まだ夜衣斗さんが囚われ、オウキが貸されたままになっている。

………でも、そろそろ………。

美春さんの作戦は、保護した夜衣斗さんを星波町外まで連れて行く事。

そつする事で、貸し出されているだけのオウキは、具現化出来なくなる………はずなんだけど………。

廃工場の空にレベル3と化したオウキを身に纏う頂喜武蔵が現れた。

ぞっとするしかないその光景の後ろに、更にぞっとする光景が現れ……私は少しの間、茫然としてしまった。

頂喜武蔵の後ろに、無数のレベル2が現れ、立ち並んだ。

あんな数のレベル2に加えて、レベル3のオウキ。

一体何をやってるのよ東山さんは！

第三章『奪われたオウキ』 43

飛矢折

「……………君は何をしているのかなあ？」

黒樹君を探して建物の中をうろろろしていると、ばったりと刑事さん達に会った。

……………正確には事前に高木先生が気付いて、気配で誰かまでわかったから、こつちから近付いたんだけど……………向こうはそこまで気配に鋭くないから、ばったりって感じだった。

「先生も、なんでここにいますかあ？先生でしょ？」

刑事さんのやや呆れた感じの避難に、高木先生はにっこり笑って、「引率です」

「何のですか……………」

流石の刑事さんも呆れた顔になってた。

「外の連中は先生達がやったのは分かったが……………肝心の黒樹君は見付からなかった様だな」

？……………何故か刑事さんは高木先生から視線を外し、あたしに顔を向けた。

「はい。黒樹君が閉じ込められていたと言う部屋に行っただんですが……………誰もいませんでした」

あたしの報告に、刑事さんは眉をひそめる。

「いなかった？……………そこに黒樹君がいたと言うのは確かな情報？」

「少なくとも、嘘は言っただけじゃなかったわね」

と高木先生。

高木先生の話によると、心音とかで人の言葉の真偽が分かる……………らしい。

……………あたしのクラスの担任だけど、こんなにすごい人だとは思わなかった。

「鬼走人骸の誰かに聞いたわけですか……………まあ、先生がそう言

うなら、その情報は間違いないでしょうが……それで、場所を聞いた奴はどこにいるんだ？」

また、あたしの方に顔を向ける……どうやら高木先生が苦手みたい……そう言えば、さつきから口調が普通だ……。

「気絶させて、黒樹君がいた部屋の隣に閉じ込めてあります」

「隣に？」

「黒樹君がいた部屋の鍵は壊されてしまったから」

「つと言つ事は、黒樹君が自ら脱出した可能性が高いわけか……だが、どうやって？さつきここに来る途中に目撃したんだが、オウキは奪われていたんだが……」

刑事さんさんの疑問に、あたしは首を横に振った。

「わかりません……ただ、鍵の部分やドアの部分に掛けられていたと思われる鎖が、とてつもなく鋭い何かで切断されていましたから……」

「もう一人のさらわれた人が武霊使いになったんじゃないかしら？」

高木先生の口にした可能性に、刑事さんはやや躊躇ってから、首を横に振った。

「西島さゆりさんは、この町に来てからまだ一日とちょっとしかいません。それは」

「ありえるでしょ？前例があるんだし」

前例……黒樹君の事だろうけど……。

刑事さんが高木先生の指摘に言葉を詰まった時、地響きが起きた。それも、連続して……まるで巨大な何かが集団で歩いているかの様な……！？

条件反射的に振動のする方向、雨の降っている窓の外を見ると、そこにはレベル2の武霊が無数にいて、町の方へと歩いてた。

その先頭には、ウイングブースターを広げて空を飛ぶ半透明のオウキがいて、その中には大男が……状況から考えて、頂喜武蔵が入ってる。

あんな数のレベル2とレベル3のオウキを自警団と武装風紀だけで防げるの？

急がないと……せめて、オウキだけでも何とかしないと……

……黒樹君。あなた今、どこにいるの？

第三章『奪われたオウキ』 44

夜衣斗

その部屋には、よく嗅ぐ事がある匂いが充満していて……吐き
気と共に、抑えきれないほどの怒りが湧きだし、身体が震えた。

西島さんは、部屋のベットに腰かけ、茫然としているひよりさん
に声を掛けているが、ひよりさんの反応はない。

……忘却剤でもかがされているのかもしれない。

閉じ込められていた部屋から脱出した後、美魅の導きでひよりさ
んのいる部屋を突き止めた。

その部屋は、建物の一番奥にあったから、頂喜武蔵の部屋である
事は間違いなく……そこに置かれていた描写したくない様々な
道具が、ここでひよりさんに何をしていたか……容易に想像出来
るもので、怒りにより拍車を掛ける。

……今、オウキが俺のコントロール下になくてよかった……

……もし、あったのなら、俺はこの怒りに身を任せ……頂喜武蔵を
間違いなく……殺していた。考えられる限り残忍な方法で……

……
西島さんに頼まれて、美魅はひよりさんをベットの柵に繋いでい
る鎖を切り、自由になったひよりさんを西島さんと一緒に立ち上げ
らせた。

俺は暴れる感情を落ち着かせる為に先に部屋の外に出て、口に手
を当てて吐き気を抑える。

通路の窓を開けて深呼吸。

……多少は落ち着いたかな……。

そう思った時、連続した振動を感じた。

……まるで複数の巨大な何かが闊歩しているかのような……
……ってレベル2しかないよな……複数のレベル2って事は、五月雨
都雅が使ったあの薬品も連中に渡ってるってことなんだろうか？……

……ん？あれってレベルを二段階上げるものじゃなかったけ？……
……今回の劣化版？……いや、個人差があるのか？
そんな事を考えながら、部屋から出てきた二人と一匹？の前に移動して、近くにあった鉄パイプを持った。

……まあ、無手をよりはましだろう……。

「……じゃあ、さっき見付けた裏口から脱出しましょうか？」

第三章『奪われたオウキ』 45

美羽

レベル3になった美春さんは、その目にも止まらないスピードでサーバントの群れを抜け、同時に毛の刃でサーバント達を切り裂いていくけど、その数の多さとシールドを張れるサーバントの強固さで全然数が減らない。

夜衣斗さんが操るレベル1のオウキも物凄い数のサーバントを出せたけど……頂喜武蔵のレベル3のオウキはその比じゃなかった。まるでそれが一個の生き物かと思うほどのサーバントが現れ、迫る美春さんとコロ丸の行く手を遮ろうとしたけど、美春さん達は、それを物ともせず頂喜武蔵に迫る。

あつという間に近距離戦になって、オウキの刀とコロ丸の爪が激突。

その二人の周りにサーバントが集まって、上空の私から様子が見えなくなるけど……何と言うか、頂喜武蔵はオウキの力に酔っていると言うか……振り回されている感じがした。

だって、いくらサーバントをあんなに大量に出せるからって……それに何の意味があるの？見た感じ、その数の多さと密度で、サーバントの動きや攻撃がうまくいってない様に見えた。……きつと夜衣斗さんなら、サーバント一体一体が最大限に使えるような数しか出さないと思う。

……馬鹿なのかな？……馬鹿なんだよね。じゃなきゃ、こんな事も、犯罪も犯さない……でも、だからこそ、脅威になってるんだろうけど……それにしても……どうしたんだろう？

私はコウリユウのブレス連射でレベル2の群れを牽制しながら、私は武装風紀が待機しているはずの場所を見た。

隠れているのか、空からじゃその姿を確認出来ないけど……いつになったら挟撃してくれるんだろう？

どう考えても……遅い……まさか！？自警団が窮地に陥っているタイミングで仕掛けるつもりなのかな？いくら仲が悪いからって……第一、そんな事を琴野が許すかな？

そう思った私は、星電を取り出して、琴野に連絡を取ろうとしたけど……何故か琴野は出なかった。

今まで、こつちから掛けて琴野が出ないなんて事はないし、今の状況で無視をする理由が見当たらない。

だから……もしかして……学園で何かあった！？

そう思った私は慌てて学園の方を見るけど……見た目上は、特に変化はない。

……でも、何故か言い知れぬ不安を感じて、何度も何度も星電を掛けるけど、琴野は出なくて……その内、鬼走人骸の攻撃の激しさが増してそれどころじゃなくなってしまった。

第三章『奪われたオウキ』 46

飛矢折

裏口らしき場所を見付け、その扉を使えなくしていたであろう鎖やら柵やらが扉の周りに散らかつていのを確認して、あたしは少しほっとした。

この様子からすると無事に逃げてくれているのは間違いない……でも……。

散らかつている鎖や柵をよく見ると、とても人の業とは思えない鋭い切り口……黒樹君が閉じ込められていたと言う部屋の前に在った鎖とかと同じ切り口がある。

……高木先生は、さらわれたもう一人の女性が武霊使いに目覚めたんじゃないかって言うけど……そんな事が、続けて起こるものなのかな？……仮に起こったとして、それは星波町の武霊の仕組みに、何か大きな変化が起こってるってことなんじゃ……考えても仕方ないか、大人が考えても分からない、それも武霊使いでもないあたしが考えても、到底正解が分かるとは思えない。

そんな事を考えつつ、あたしは扉から濡れない程度に顔を出し、周りを確認する。

外は大雨になっていて、非常に視界が悪くなっているけど、隣の建物の様子が分からないほどじゃない。

……今いる建物は廃工場地帯の大体真ん中ぐらいにある。そんな場所を黒樹君が認識している可能性は低い。だからと言って、あの黒樹君が闇雲に逃げると思えない。じゃあ、黒樹君は何を指針にして……

爆発音や閃光・振動が立て続けに起こって、今も戦いは続いているのは見えなくても分かる。

どっちが優位になってるか……あまり考えたくはないけど、オウキを奪っている鬼走人骸側に分がある。これは、オウキの武霊

使いである黒樹君が承知していないなんて事は、まずないと思う。だとすると、黒樹君はその状況を何とかしようと思うはず。

団長さんの話によると、頂喜武蔵の武霊の能力は、なんであれ貸している対象が星波町の外に出てしまえば、無効化する……町の外には武霊の力が及ばないって事なのかな？……まあ、そうらしいから、武霊使いであるあの黒樹君が、その事に気付かないなんて事はないと思う。

……つまり、黒樹君は、戦闘に巻き込まれない、そして、鬼走人骸達に見付からないルートで町の外に向かっているはず。

そこまで考えて、その考えに重大な欠点がある事に気付いた。つて、あたしも、何より黒樹君はこの辺りの地理に詳しくないじゃない。これじゃ黒樹君がどっちに向かったなんて、分かり様が……

手詰まりな状況に少し硬直していると、別の場所を探していた高木先生が現れ、その手には何処からか傘を二つ持ってきていた。

第三章 『奪われたオウキ』 47

????

雪崩の様なサーバントの猛攻を伸縮硬軟化自在なコロ丸の体毛を組み合わせず避けて美春。

ソードサーバントの突撃を飛び跳ねて避けては、続くCAサーバントの突撃を体毛を伸ばし電信柱に縛り付け一気に縮めて避ける。

その際に、残りの体毛を無数の刃にして通り抜けるサーバント達を破壊。

それによつて出来た道を駆け抜け、半透明なオウキを身に纏った頂喜武蔵に接近し、刃の嵐を繰り出すが、レベル3により具現化密度が上がったオウキの装甲を僅かに傷付けるだけで終わり、その傷すら瞬時に修復されてしまう。

鉄すらあつさり切り裂くコロ丸の体毛の刃を防ぐ装甲の強度に、自己修復機能。

その光景に唖然としているわけにもいかず、頂喜武蔵の攻撃とサーバントの攻撃を避ける為に、一気にオウキから離れる。

再びサーバント達を避けつつ破壊し、次の攻撃チャンスを作ろうとするが、コロ丸の攻撃が効かないのなら、残された手段は一つしかない。

だがそれは、今回の場合に対して有効な手段か美春は疑問と不安を抱いていた。

通常厄介な相手を、特にレベル3の武霊使いを相手にする場合は、意志力切れを狙って戦う。

レベル3の具現化は具現化密度が高い為か、武霊使いの最も近くで具現化させる為か、意志力の消費が非常に高い。

レベル1なら一日中具現化出来る武霊使いだったとしても、どんなに抑えめに戦ったとしても一時間持つかどうか。

それぐらいの消費量なのだが………頂喜武蔵は通常のレベル3の

具現化をしているとは状況からして考えられない。

急に増えた鬼走人骸の武霊使いに、その全てがレベル2になっている。

これはどう考えても、先月の五月雨都雅や来塚博が使った謎の薬物を鬼走人骸が手に入れ、それを使用している。っと考えるのが自然だった。

そうになると、夜衣斗からの報告にあつた『どんなに意志力を消費しても枯渴する様子がない意志力』を、今の頂喜武蔵は手にしている可能性がある。

そんな可能性がある相手に持久戦を持ち込むのは、どう考えても危険だった。

だが、それ以外の攻め手が『今の』、自警団団長としての美春にはなかった。

第三章 『奪われたオウキ』 48

???

確かに今の美春には攻め手がなく、追い詰められつつあった。

しかし、オウキの装甲には『傷を付ける事』が出来た。

それは即ち、『力を抑えなければ、攻撃が頂喜武蔵まで通る』事を意味している。

だが、力を抑えていない攻撃は、手加減が効かず、まず間違いない、頂喜武蔵を殺してしまう。

例えばどんな状況であろうと、自警団が武霊を使って人を殺さない事。

それは、ある種の民間武装組織である星波町自警団の最大の禁則であり、武霊犯罪の抑止力になっっている事だった。

守ると称して人を殺す事を認めれば、それが前例になり、命が軽くなる。

それが今の星波町にとってどれだけ危険な事か………しかし、それ以外に攻め手がない。

だからと言って自警団団長が自ら禁を破れば、その影響は測り知れず、だからと言って、このまま避け続けるのにも限界がある。

誰かが、頂喜武蔵を止めなくてはならない。

だからこそ美春は逡巡した。

その逡巡は僅かな間だったが、その間に一つの変化が起き、美春を驚かせ、戸惑わせる。

唐突にサーバント達はその動きを止め、四方を見出した。

そのあまりの唐突ぶりと無防備な行動に、美春は思わず警戒し、サーバントの群れの中から抜け、間合いを取る。

そして、それにより今までサーバントの群れに塞がれ見えていなかった外の光景を目にする事になった。

何十体ものレベル2の武霊が、鬼走人骸側の武霊のみが、その動

きを『止めていた』。

もしかしたら、それも唐突だったのだろう。自警団の武霊達は警戒して攻撃を躊躇っている様だった。

困惑して止まっている武霊達を見ていると、更に困惑させる事が起きる。

鬼走人骸の武霊達が次々と霧散し始め、すぐさま廃工場地帯の近くでレベル2となって現れる。っと言う不可解な行動をし始めたからだ。

その行動の真意を理解出来ず、頂喜武蔵が居る方向を見るが、その姿はサーバントに囲まれて見る事が出来ない。

だが、サーバントの様子から、頂喜武蔵も困惑してる様だった。

訳が分からず再び鬼走人骸側の武霊を見て、美春はある事に気が付き、驚愕する事になる。

再び具現化して現れた鬼走人骸の武霊達は、確かにレベル2の様な巨体だった。

しかし、よく見なくても違う点があった。

それは、『半透明で、その中心に人がいる』と言う事。

そして、それが意味する事は、

「レベル4！」

あまりの驚愕から、美春は驚きを口にしてしまう。

今まで可能性のみ話され、誰もやった事がない段階。

それがレベル4。

つまり、武霊を身に纏ったままレベル2の様に巨大化させる具現化段階。

出来るのではと考えられていたが、その予想されるあまりの意志力の消費の多さに、実現不可能だと言われたその段階を、何十体も目にし、流石の美春も驚きで動きを止めてしまっていた。

それが、大きな隙になっっている事に気付いた時には、目の前に頂喜武蔵が迫っており、その片手に首を掴まれ、抵抗する間もなく地面に叩きつけられてしまう。

あまりの衝撃に美春の意識は一瞬飛び、コロ丸の具現化が消えてしまふ。

気付いた時には、レベル3を止めた頂喜武蔵に踏み付けられていた。

「無様だな！え！おい！」

そう言つて、頂喜武蔵は高笑いを上げた。

第三章 『奪われたオウキ』 49

飛矢折

「じゃあ、行きましようか？」

そう言つて高木先生は、持っていた傘をあたしに渡してくれたけど……

躊躇っているあたしに高木先生は少し笑つて、

「黒樹君は考える子よ。考え過ぎるぐらいにね。そんな子が地理を分からないぐらいで目的を遂げないと思う？」

……それは、

「思いません」

「じゃあ、少なくとも、ここからこつちも町の外へ向かえば必ず追い付けるはずよ」

高木先生はそう言つて、あたしに折り置まれた紙を渡した。

疑問に思つてそれを広げると、廃工場一帯の地図のコピーだった。しかも、今いる建物には赤丸がしてある。

「東山君から借りたのよ」

「そうですか……それでその刑事さん達は？」

そんなに広い建物じゃないから、手分けをすれば直ぐに探し終わると思つてたけど、今の所、こつちに来る人の気配はない。その事を疑問に思っていると、高木先生は困つた顔をして、

「自警団が不利な状況に追い込まれたみたい」

「不利な状況？」

「ええ、私は外の様子を見れないから詳しくは分からなかったけど……どうも武装風紀の子達がいつまで経つても参戦しないみたい」

あたしが調べていた場所は戦いの様子が死角になる所だったから様子はうかがえなかったけど、そんな事になつていたなんて……でも、どうして？

「そんな状況だから、自力で脱出している黒樹君の救援より、自警団の応援に行った方が良いつて判断したみたいね。少なくとも、私達が黒樹君の所に合流すれば、多少の武霊使いが追っついていても何とかなるでしょうし」

多少のつて……過大評価なんじゃ……。

武霊使いが誰も残らなかつた事に不満と不安を感じるあたしだけど……それだけ窮地に陥っているつて事なのかな？

「どうしてあの子達が参戦しないのか、私の方からも連絡を入れてみたんだけど……出なかつたわ」

「出ないつて……学園の方はどうですか？あそこにはまだ武霊使いが」

「学園の方もダメだったわ」

そんな……一体何が起こつていると言うの？

「何が起こつているか、今の私達には知り様ないわ。だから、今は黒樹君に追い付く事に集中しましょ？」

高木先生はそう言いながら、外に出て傘を差した。

「……そう……ですね」

あたしは頷いて外に出て傘を差す。

その時、空か物凄く大きな咆哮が起きた。

あたしは思わず駆け出す。

空にはコウリユウが……赤井さんが飛んでいた。

嫌な予感がする。

咆哮の聞こえた方向を見ると、そこには……

第三章 『奪われたオウキ』 50

美羽

突然消えたレベル2の武霊達が、廃工場近くに再び現れて……
レベル4になっていた。

誰もなつた事がない、あの美春さんも到達していない段階・レベル4が現れた。それも、大量に……

あまりの出来事に硬直していると、星電が鳴つたので、慌てて誰から掛つてきたか確認せずに出てしまう。

「やああ、美羽ちゃん」

星電から聞こえてきた東山さんの声に、状況を忘れて思わず星電を切ってしまう私。

間髪入れずに着信。

状況が状況なので……そもそも、夜衣斗さんの安否は、東山さん経由からしか知る事が出来ないから……仕方なく星電に出る。

「夜衣斗さんは救出出来たんですか？」

東山さんに余計な事を言わせる前に、こつちから聞きたい事を言つた。

「……まあ、いいんだけどねえ……黒樹君は多分無事だと思
うよぉ？」

「多分？」

救出出来なかつたって事？そんな！何やってるの東山さん！

文句が口から出る前に、東山さんが、

「自力で脱出したみたいだからねえ」

つと予想もしていなかった言葉を口にした。

………は？

言葉の意味を理解するのにちよつとかかつて、

「自力で脱出した！？どうやって！？」

「さあ？どうやってだろうねえ？まあ、とにかく、黒樹君の方は

大丈夫そうだから、今からそっちの応援に行くねえ」

「何ですか！まだ、夜衣斗さんを保護してないでしょ！？町の外に……」

連れ出してもいいない。

そう言いながら、オウキの姿を確認する為に、美春さんと頂喜武蔵が戦っている方向見て、私は再び固まってしまった。

何故なら、頂喜武蔵に踏み付けられている美春さんがそこにいたからで……。

嘘でしょ！？美春さんが……助けないと！

「東山さん！今どこですか！？」

「な！何だい？いきなり？」

「いいから早く！」

大丈夫ですよね……夜衣斗さんなら……。

言い知れぬ不安を感じながら、私は美春さんを助ける為に動き出しました。

第三章 『奪われたオウキ』 51

?????

何が起こっているか頂喜武蔵には全く分からなかった。

薬の説明にはなかったレベル4になった仲間達は、なかなか動く気配はないが、元々どうでもいいので、それほど気にしない。

だが、有利な状況になっているのだけは理解した。

なんであれ、快樂優先の頂喜武蔵としては、それで十分だった。

そう、頂喜武蔵は快樂優先で動く。

そして、目の前には自身が踏み付けて身動きを封じている幸野美春。

頂喜武蔵の快樂が疼く。

その快樂が促すままに、シールドサーバントに命令して美春の四肢を固定し、頂喜武蔵は美春の上から退いた。

美春は身動きを取れない状況でありながら、頂喜武蔵を睨み付ける。

その行為がより頂喜武蔵の快樂を刺激した。

誰もが嫌悪を抱く様な笑みを浮かべ、ソードサーバントに命令して、徐々に徐々に服を切り裂かせる。

下から上へ、ゆっくりゆっくりと切り裂かれるが、上着は雨に濡れているので、肌に着が張り付いていて、頂喜武蔵は切り裂いた場所に手を掛け、様とした瞬間。

周りを飛んでいたシールドサーバント達が上空に移動し、シールドを多重に張ると同時に、閃光が生じる。

立て続けに起こる閃光に頂喜武蔵が気を取られた瞬間、頂喜武蔵の背後から何かが迫る気配がし、その気配にオウキが迎え撃つが、頂喜武蔵が振り向きオウキの背中を視界に入れると同時に、オウキの姿が真つ二つになり霧散した。

頂喜武蔵の後ろから迫っていたのは、コウリュウの防御鱗に乗った東山賢治だった。

賢治は、自身の武霊・十字銃を剣モードにし、刀身を最大まで大きくしてオウキを切り裂き、実弾銃モードにして美春を拘束しているシールドサーバントを撃ち抜く。

自分を拘束していた物が消えた事により、美春は一気に飛び起き、「美春！」

通り抜けようとする防御鱗の上から手を差し出す賢治の手を取り、飛び乗った。

飛び乗ったタイミングと、賢治の引き上げた力で抱き付く様に防御鱗の上で倒れる二人。

暫く硬直している二人だが、賢治がまず先にはっと気づき、離れようとするが、美春がぎゅっと抱き付き、離れようとしなかった。

「み、美春？」

普段では考えられない動揺した表情を浮かべる賢治。

「少しだけ……少しだけ今のままで、直ぐに立ち直るから」

そうか細い声で言う美春のその身体は、震えていた。

賢治はやや困った表情のまま、固まる賢治はチラツと美春を見る。その視線は助けた時に、はだけてしまった服に向けられ、すぐにそらされてた。

第三章 『奪われたオウキ』 52

美羽

追ってくるサーバントに防御鱗を飛ばしてかく乱。

大量のサーバントには僅かな間しかかく乱できないけど、それでも少しの間だけ攻撃のチャンスが出来る。

「コウリユウ！拡散レーザーブレス！」

私の命令にコウリユウは牙を閉じたままレーザーブレスを放つ。

拡散したレーザーブレスが、シールドを展開したシールドサーバントごと貫き、その後ろのサーバントも貫通。

コウリユウはそのままレーザーブレスを放ちながら、首を動かして、斬る様にサーバントの群れのほとんどを霧散させた。

サーバント達が空中の私達を追ってきたから出来た事とは言え、何だか拍子抜けするほど簡単に倒せた様な……………。

そんな事を思いながら下を確認すると、美春さんを東山さんがうまく助ける事が出来たみたいで、頂喜武蔵とオウキしかない。

その一人と一体は、サーバントをほとんど私達に倒されたと言うのに、廃工場のレベル4達を見ていた。

……………何だろう？……………なんでさつきから『動かない』んだろう？
さつきから……………ずっと見てたわけじゃないけど……………現れた所から一切動いていない様に見える。

頂喜武蔵もそれを気にしている様だけど……………不気味だった。

とりあえず頂喜武蔵を警戒しながら、ポケットからいつも持っている折り畳み式オペラグラスを取り出して、レベル4の武霊を見てみた。

レベル4の身体は、半透明だから、中の武霊使いが見えて、何が起こっているか分かるかもって思ったんだけど……………見ない方が良かった。

だって……………レベル4の武霊の中心にいる武霊使いの……………手足

が『消えていた』から。

しかも、その消える部分は私が見ている前でどんどん拡大して
て……………その隣の、その隣の武霊使いも同様で……………それはさなが
ら、武霊に『喰われている』様に見えた。

?????

「……………薬の効果に耐え切れなかったみたいね」

メガネに、三つ編み、そして、必要な場所以外無い簡素なゴスロ
リ服を着た小学生ぐらいの女の子・呼衣は、廃工場の建物の一室で、
冷静に外の状況を見ていた。

「やはり薬の耐性には個人差があるのね」

そう言いながら、呼衣は部屋に置いてあるアタッシューケースを手
に取った。

そして、もう一度外の様子を見る。

すると、武霊に意志力だけでなく、存在自体まで喰らわれ始めて
いた鬼走人骸の武霊使いの一人が、こちらを見ている事に気付く。

憎悪と恐怖が入り混じった視線。

その視線に、呼衣は冷笑を浮かべ、その部屋を後にした。

第三章『奪われたオウキ』 53

美羽

レベル4の武霊の体内で喰われている武霊使い。

多分、消費される意志力があまりにも多過ぎて……武霊使いの身体まで消費しはじめた……って事なのかな？

それって、武霊が暴走してるって事だよ……って言う事は、いつも見ているのは全然違うけど、はぐれ化が起きているって事？……でも……こんな……はぐれ化なんて……どうして……もしかして！？夜衣斗さんが言っていた薬に副作用？……それともレベル4になると、武霊使いは自分の武霊に……。ぞわつと背筋に寒気が走った。

武霊は発生してから十年経ってるけど、その生態の全部が分かってるってわけじゃない。

だから、レベルが上がると言う事はどういう事なのか、私達はもちろん、当の武霊本人達もよく分かってなくて……

心配する様にコウリユウが私を見た。

大丈夫、あなたがそんな事をするなんて思わないから……だって、あなたはそんな事しないでしょ？

その思いに、当たり前だと言わんばかりに一鳴きした。

それに思わず微笑んだ時、不意にコウリユウが飛行速度を上げ始める。

「どうしたのコウリユウ!？」

私のその問いにコウリユウが答えるより早く、上空から閃光が走り、コウリユウの片翼が切り裂かれた。

反射的に閃光が生じた上空を見上げると、そこにはレベル3のオウキ、頂喜武蔵がこつちに銃を構えているのが見えて……地面を見るとこつちにも頂喜武蔵とオウキがいる………しまった!ドツペルゲンガー!

何が起こったか理解した時、片翼を切られてバランスを失ったコウリュウがきりもみ状態で落ち始めた。

飛矢折

目撃したのは、片翼を切られ、きりもみ状態で落ちるコウリュウ。それを見た瞬間、あたしは反射的に、

「先生！黒樹君をお願いします」

そう高木先生に言っつて、差していた傘を放り投げて駆け出した。

武霊使いではないあたしに何が出来るわけでもないのは分かっている。でも、目の前の事を無視して、黒樹君を探しになんて、あたしには出来なかった。

第三章『奪われたオウキ』 54

????

駆け出した生徒・飛矢折巴の気配が遠ざかるのを感じながら、高木弥恵は投げ捨てられた傘を回収し、微笑んでいた。

何が起こったか、聞こえた咆哮と、巴の焦り様から分かる。

そこから考えても、巴の行動はあきらかに無謀で無意味なものだったが、だからと言って何も行動しない子には先生としても、大人としてもなつて欲しくなかった。

だから、巴はまさしく弥恵が生徒に望む行動をしてくれたので、ついつい微笑んでしまったのだ。

もつとも、ただ無謀で無意味な行動で終わるとは思っていない。

少なくとも、巴には起こした行動に何らかの結果が残せる能力が備わっている。

そう弥恵は思っており、だからこそ、黒樹夜衣斗を助けたいと言うう巴に弥恵は手を貸した。

これが普通の生徒なら、当然渦中に飛び込む様な事はさせない。

何にせよ。弥恵の行動は教師として大人として問題な行動だとは言える。

言えるが、弥恵自身は特にそれを問題だとは思っていない。

子供は無茶を少しぐらいするのが丁度いい。

それが弥恵の教育方針の一つで、その為今回の様に無茶を誘ったりもする。

実はとんでもない教育者だった弥恵だが、そんな弥恵でも夜衣斗の事は心配だった。

あの生徒は、この町に来てから予想を上回る行動ばかりする。

それはある意味弥恵とって望ましい事だが、同時に不安にもさせていた。

予想を上回ると言う事は、決していい事ばかりではない。

それが良い方に転べばいいが、悪い方に転んだ場合、夜衣斗の『素地』ではそれを乗り切れるか疑問な所があった。

どう転んでいるかにせよ。早めに見付け、合流した方がいい。

そう思った弥恵は、携帯電話の様な視覚障害者用のGPSを取り出し耳に当てた。

音声で現在位置を知らせ、行きたい場所へ案内してくる代物。

流石に気配で周囲の様子が分かるとは言え、初めての所ではどこをどう進めばいいか分からずに取り出したのだが、GPSを起動させた時、弥恵が出てきた建物とは別の建物から、誰かが出てくる気配がした。

「音声ナビゲートを開始します」

そう耳元でGPSが言ったが、それに耳を傾けている状況ではなくなつた。

何故なら、現れたその気配に弥恵は覚えがあり、

「お母様？」

向こうにそう声を掛けられたからだ。

第三章 『奪われたオウキ』 55

美羽

「コウリュウ！ 防御鱗十一枚！」

防御鱗十枚を上空の頂喜武蔵に牽制の為に飛ばし、残り一枚の防御鱗に飛び移って（落っこち移って？）コウリュウを再具現化させようとした時、その防御鱗が霧散してしまう。

霧散した防御鱗の向こうから、見えない刃を展開したソードサーバントが現れた。

落下中のコウリュウの上ではまともな身動きが取れない私に向かってくるソードサーバント。

瞬間的に高まった恐怖に、コウリュウが反応して残った翼で無理矢理落ちる方向を変えた。

それでもソードサーバントの追跡は振り切れなくて、私には当たらなかったけど、コウリュウの背中に直撃してしまう。

片翼を切られた時以上の咆哮を上げるコウリュウ。

普通ならこれだけのダメージを与えられたら霧散してしまうはずなんだけど、コウリュウは無理をして具現化を維持している。

私には確認出来る余裕はないけど、きっともう再具現化するほど余裕がないんだと思う。

その証拠に、私の周りの保護力場が強くなった。

瞬間、凄い衝撃に襲われ、少し遅れてコウリュウが霧散。

下にコウリュウによって潰された建物の残骸が見える。

コウリュウが消えているから保護力場はもうない。

再具現化をしている暇もない。

どうする事も出来ないまま潰れた建物の上に私は落ちた。

なんとか受け身らしい受け身を取れて、転がって衝撃をぶ

飛矢折

コウリュウが落ちた場所に急いで向かうと、潰れた建物の上で、赤井さんが倒れていた。

一気に血の気が引く。

大慌てで近付いて、まずは触らずに赤井さんの様子を確認する。身体の方は何ともないようだ。ただ、気絶している。

しかも、頭のどこかを切っているみたいで、雨水と一緒に赤い血が地面に流れていた。

雨水を差し引いて、出血量は大した事がないから傷は浅いみたいだけど……頭部のダメージは見た目だけじゃ判断は出来ない。

だからと言って、このままここに置いて置くわけにはいかなかった。

上空に視線を向けると、無数のサーバントが集まり出している。

赤井さんの頭部のダメージが深刻でない事を祈りつつ、素早く、慎重に赤井さんの身体を動かす、背負う。

持てる技術を全て使って、赤井さんの頭がなるべく動かないようにしながら、あたしは走り出す。

それと同時に、サーバントの何機かがあたし達に向かって突撃してくる気配を感じ、何とか避けるけど、まるでいたぶる様……いえ、完全にあたし達をいたぶって……

抑え様のない本能的な恐怖があたしの中から湧き出してくる。

きつと後少し、後少しすれば、黒樹君が町を出て、オウキが使えなくなるはず。

そうあたしは自分に言い聞かせて、湧き上がる恐怖を抑え込んで走り続けた。

第三章 『奪われたオウキ』 56

夜衣斗

窓で外を確認すると、さつきより雨足が強くなっていた。

……傘らしきものは…… 当たり前だが、ないな…… 仕方がない。

ため息一つ吐き、手に持っていた鉄パイプを床に置き、近くに転がっていたロッカーのドアを持ち上げた。

…… ちよつと重いが、これを使えば、多少は濡れずに済む……

か？…… にしても、何の為に鉄パイプを持ってきたんだか……。再びため息を吐き、後ろを見た。

「…………… 美魅。確か、ここ道、分かるって言ったよな？」

「そうだよ」

俺の確認に、雨の降る外を嫌そうに見ていた美魅は頷いた。

何でも昔、ここが潰れる前に探検した事があるらしい…………… 流石、町に長年住んでる化け猫だけはある。

「…………… じゃあ、美魅が先頭になってこれを持って、西島さん達が真ん中に入ってください」

土砂降りに近い雨の中、俺達は外れたロッカードアを傘にしつつ、廃工場を出て、近くにあるらしい町境のトンネルに向かっていった。

だが、ひよりさんは西島さんが何度呼び掛けてもぼーっとするばかりで、西島さんが手を引いて何とか付いて来てくれる状態だった。そのせいで急ぐ事が出来ず、中々トンネルに辿り着けない。

時々振り返って戦況を確認すると、オウキのサーバントが大量に飛び回っているのが見え、意味が分からないが、自警団の武霊達と戦っていた鬼走人骸のレベル2武霊が消え、再び廃工場近くに現れたりしていた。

雨と距離のせいで詳細は分からないが、どんどん状況が悪化して

いるのは間違いない。

……俺だけでも先行して町を出た方がいいんだろっか？

そんな事を思った時、前方にトンネルらしきものが見えた。

思わずほっと一息吐いた時、そのトンネルの中から誰かが出てくるのに気付き、眉を顰めた。

携帯とかも奪われているので正確な時間が分からないが、街灯が点き始めた事からして、もう夜になっているのは間違いない。

そんな時間帯に、電車や車を使わず徒歩で町に入る人間がいるのか？

そう思い眉を顰めたのだが……トンネルから出てきた誰かがトンネルの前で濡れるにも関わらず立ち止まった事に俺は更に眉を顰めた。

……ロッカードアを傘代わりにしている集団を怪しんだとか……

……確かに怪しい集団だが……考えて見れば……滅茶苦茶恥ずかしいな……。

何だか顔が赤くなってきた。

だが、その赤面はかなりの的外れな赤面だった事に直ぐに気付く事になる。

何故なら、トンネルから出てきた誰かは、俺の知っている奴だったからだ。

しかも、まず間違いないく、俺を逆恨みしている奴で……

……そう言えば、名前なんて言う奴だっけ？

微妙に緊張感がない事を思った時、トンネルから出てきた奴は武霊を、全身が鏡の様な人型の………確か、昔の特撮の主人公のミラーマンだったか？を具現化させた。

第三章『奪われたオウキ』 57

夜衣斗

「夜衣斗君」

西島さんが困惑した様な、怯えた様な声で俺を呼んだ。

ミラーマンの武霊使いが、雰囲気から味方でない事を察したみただが……呼ばれてもこっちもどうすればいいか……いや、どうする？考える。考える俺……今の俺にはオウキは使えない。人化した美魅がいるが……果たして武霊に勝てるだろうか？

そう思った瞬間、ミラーマンの身体が分裂し始めた。

まずい！確かミラーマンの能力は、偽者を作り出す事。

「美魅！」

契約により魂が繋がっているせいか、名前を呼んだだけで美魅は俺の意図に気付き、ドアの傘から手を放し、一気にミラーマンに接近、剣の爪を一閃した。

だが、その一閃は美魅の姿になったミラーマンの剣の爪に防がれてしまう。

間に合わなかった。

心の中で舌打ちをしつつ、前にいる西島さんに聞こえるギリギリの音量で、

「トンネルまで走ります」

「え!？」

突然の俺の提案に驚いて後ろを振り向く西島さんだが、活路はそれしかない。

「ってか、俺の身体能力で……出来るか?……だが、やるしか! 何とか一人で支えていたドアの傘を投げ捨て、ぼうつとしているひよりさんをお姫様抱っこし、走り出す。」

それに慌てて並走する西島さんを確認しつつ……「やばい。物凄く重い……などと女性に対して失礼な事を思ったが、今はそれを

気にしている余裕はない。

頼む美魅！少しの間だけそいつらを抑えておいてくれ！

そう心の中で思うと、伝わったのか、俺達に襲い掛ろうとしたミラーマンから分裂したもう一体のミラー美魅を邪魔してくれた。

ミラーマンの武霊使いは、横を通り過ぎる俺達に視線を向けるだけで、何もしようとしてない。

それを不審に思った時、俺の身体がトンネルに差し掛かり、瞬間、足に何か引掛かり、前のめりに倒れそうになり、とっさにひよりさんを守る様に回転して、背中から地面に倒れる。

あまりの衝撃と激痛に一瞬息が出来なくなり、咳き込む俺の顔に、再び衝撃と激痛。

続く強烈な圧迫感。

何とか開く片目で確認すると、それは誰かの足だった。

トンネルの中には誰もいなかったはず……これはどういう事だ？

訳が分からず、視線を踏み付けられている足の上に向けると、そこには……何もなかった。

代わりにあるのは、ももの太さより大きな手鏡。

そこから足は生えていた。

引掛けたのは、この足なのは分かったが……つまり、これが俺をさらった武霊能力か？ミラーマンにそんな能力は無かったはずだが……ってか、なんで手鏡は浮いてるんだ？

その疑問は直ぐに分かった。

浮いている手鏡には、丁度手の形で消えている部分があり……多分、ミラーマンが周囲の風景に化けているんだろう。

……何にせよ。ミラーマンの武霊使いが仕掛けた罠にまんまと引っかかってしまったわけだ。

ぼーっとしているひよりさんは俺の上から全く動かない。

顔にはミラーマンの武霊使いの足。

この二つで身動きが全く取れない。

視線を巡らすと、西島さんは見えない何か、ミラーマンに羽交い

絞められている。

美魅は二体の偽者に苦戦しているはず。

……… 絶体絶命な状況に、俺はどうする事も出来なかった。

第三章 『奪われたオウキ』 58

????

唐突に消えた防御鱗に代わり、再具現化させたコロ丸に乗り美羽が落ちた場所に急ぐ美春と賢治。

「美羽ちゃん……………」

ぎゅっとコロ丸の毛を握る美春。

「大丈夫だつてえ、あの美羽ちゃんだよあ？」

極力いつも通りの口調と雰囲気を出そうとする賢治だが、動揺しているのか、微妙にいつもと違かった。

それに美春は少し苦笑して、動かないレベル4の群れを見る。

体内の武霊使いは、そのほとんどが既に頭部までしかなく、どう見ても手遅れの様に見えた。

「助けられるなら」

ぼそつと美春はそう口にしたが、途中で言葉を区切った。

言っても仕方がない事だからだが、心は止められない。

「急ごう美春。きつと武霊使いが全て喰われれば……………あれは動き出す」

賢治のその言葉は、美春も予想していた事だった。

だが、美春にはどうする事も出来ない。

何故なら、

背後を振り返る美春。

その空には誰の武霊もない。

さっきまで自警団の武霊が何体も飛んでいた。

それが気が付いたら居なくなっており、連絡すら取れなくなっていた。

武装風紀に続き自警団にも、これは明らかに星波町で『鬼走人骸以外の何か]が起きている』。

しかし、鬼走人骸を放って置けない以上、それを確認する術がな

い。

それを歯がゆく思いながら、美羽との合流を急ぐ二人だった。

夜衣斗

四体以上のミラーマンに四肢を無理矢理地面に押さえ付けられ、いよいよ身動きの取れなくなった。

手鏡から足を引っ込め、悠然と近付いてきたミラーマンの武霊使いは特に何も言わず、ひよりさんを俺の上から起き上がらせ、乱暴に地面に倒す。

そんな事をされてもひよりさんは何も言わず、倒れたままピクリとも動かない。

心配になる光景だが、

「他人を気にしている場合か？」

いきなり腹部を踏み付けられた。

胃液が逆流し、咳き込み、口の中が酸っぱくなる。

「無様だよな！」

今度はわき腹を蹴られ、嫌な音と共にとてつもない激痛に襲われ、意識が遠のきかけるが………息を吸った時の訪れた激痛、咳き込んだ時に口から吹き出した血で肋骨が折れ、片肺に骨が刺さったと思っ

た。実際の所は分からないが、絶え間なく続く強弱のある激痛に、意識が遠のく事すら許されず、更に続く容赦ない蹴りや踏み付けに

第三章『奪われたオウキ』 59

飛矢折

いたぶる様なサーバント達の攻撃を何とか避けていたあたしだけでなく、徐々に徐々に攻撃の速度と数が上がってきた為、かすり始めた。腕や頬に傷が付き、制服が千切れてぼろぼろになる。

身体を伝う雨に血が混じり、制服や地面に血を滲ませていた。

どうすればいいか必死に考えを巡らせているけど、あたしにいい考えなんて思い浮かぶはずもなく、その間にも、流れた血や赤井さんをなるべく揺らさない様にサーバントの攻撃を避けているせいで、徐々に徐々に呼吸が乱れ出す。

このままじゃ………もたない。

そう思った時、サーバントとは違う気配が、上空から降ってくるのを感じ、立ち止まって後ろに飛び退いた。

瞬間、直前までいた場所に、半透明のオウキが落ちてきて、地面に付く直前でウィングブラスターを広げ止まる。

半透明のオウキの中に、見た事がない大男が入ってた。

こいつが頂喜武蔵！？

突然現れた頂喜武蔵に警戒した視線を向けると、頂喜武蔵は残忍な笑みを浮かべ、

「飽きた。死ね」

そう言つて、腕の中から拳銃を取り出し、あたしに向けた。

?????

「夜衣斗君！」

血を吐き出し、うまく呼吸が出来なくなった夜衣斗を見たさゆりは悲鳴に近い声で夜衣斗の名を呼んだ。

その声に自分の偽者二体と戦っていた美魅は、強引に二体を通り抜けようとするが、同じ攻撃手段を取る偽者の攻撃は防ぐのに手一

杯で、抜け出ずに抜けられなかった。

戦いの合間合間に見えるトンネルの中で倒れている夜衣斗は、口から血を流している。

敵武霊使いの攻撃は、流れる血を見ても手を緩めるところか、まるで血を見て興奮したかの様に激しくなり、このままでは夜衣斗は

.....

(これじゃ何の契約した意味がないじゃない！)

自分の力の無さに憤りと焦りを美魅が覚えた時、どこからともなく声が聞こえ始めた。

「あなたは忘れてるわ」

その声に聞き覚えがあった。

夜衣斗の中で出会い、契約の紙を貰ったサヤと名乗る女。

どうやって美魅に語り掛けているのかは分からないが、少なくとも周囲にサヤの姿はない。

(忘れてる！？何を！？)

偽者の剣の爪を防ぎながら、心の中で絶叫した。

「あなたの魂は契約により夜衣斗に繋がっている」

(それがどうしたっていうのよ！)

「そして、あなたは何？」

そのサヤの言葉に、美魅ははっとした。

魂が繋がっているから、夜衣斗の中にいるサヤの言葉が自分に届く。

そして、美魅は『心を潜り込む猫』。

心渡りの化け猫・美魅。

瞬間、美魅は夜衣斗の心の中に渡った。

第三章『奪われたオウキ』 60

飛矢折

トリガーが引かれる瞬間、あたしが射線軸から避けると同時に、民家の屋根のコロ丸が飛び出し、鞭の様に放たれた体毛がオウキの拳銃を切断した。

あたし達と頂喜武蔵の間に着地したコロ丸の背中には、団長さんと刑事さんが乗ってて、刑事さんは十字架の様な拳銃を頂喜武蔵に向けてる。

「団長さん！赤井さんが！」

あたしの言葉に、あたしが背負っている赤井さんが意識を失い、血を頭から流している事を確認した団長さんは、

「私達が切り開く！君は美羽を病院に！」

そう言って、コロ丸の身体の中に沈み込んだ。

レベル3になった団長さんは、刑事さんを背負ったまま頂喜武蔵に突撃し、頂喜武蔵はウイングブースターで空に逃げる。

逃げた頂喜武蔵に向かって刑事さんは拳銃を連射し、頂喜武蔵を牽制。

あたしはその瞬間を見逃さずに駆け出そうとした時、耳をつんざく咆哮が聞こえ、思わず足を止めてしまう。

反射的に咆哮が聞こえた方向を見ると、そこには……………形が崩れ始め、暴れる巨大な武霊達がいた。

?????

高木弥恵が夜衣斗達の下へ追い付いた時、弥恵は唐突に気配の一つが消えた事を感じた。

その意味を深く考える暇もなく、残った二つの気配が弥恵に向かって襲い掛かってきたので、弥恵は仕方なく傘を投げ捨て杖に手を掛ける。

「ごめんなさい。武霊に掛ける情けは無いの」

気配の質から襲い掛かってくるのが武霊だと分かっていた弥恵はそう言つて、まるで透過したかの様にミラー美魅二体をすり抜け、トンネルに向かって歩き出した。

その後姿を追おうとするミラー美魅が振り返つた瞬間、ミラー美魅の身体が二体とも上下に僅かにずれ、霧散。

実は弥恵の杖には刀が仕込まれており、それをすり抜けた瞬間に抜刀し、目にも止まらぬ速さでミラー美魅を斬り、納刀したと言わけだ。

明らかな銃刀法違反だが、弥恵は人間には絶対に使わないと決めているので、杖に刀が仕込まれている事を知っているのは僅かしかない。もっとも、ばれたとしても星波町内なら誰も咎めはしないだろうが……。

ミラー美魅二体が消えた事に気付いたミラーマンの武霊使いは、意識を失つた夜衣斗の頭を踏みつけたまま、背後のミラーマン本体から弥恵の偽者を三体作り出し、襲わせようとするが、ミラー弥恵達はまともに動けず、一体はつまずき倒れ、一体は明後日の方向にヨタヨタと歩き、残りの一体はその場におろおろしてしまふ。

その様子にミラーマンの武霊使いは舌打ちした。
ミラーマンの偽者を作り出す能力は、あくまで見た目だけで、その中身はミラーマン自身ではない。

その為、盲目である弥恵の姿を真似た所で、その能力を真似るまで至っていないので、全く使い物にならない偽者を作り出してしまつたと言うわけだ。

仕方なく、ミラーマンの武霊使いは頭部だけミラーマンの姿に戻し、三体の偽者もどきで弥恵を取り囲ませる

その時、偽者もどき達が杖から仕込み刀を抜いたので、ミラーマンの武霊使いのみならず、見えないミラーマンに羽交い絞めされている西島さゆりも、目を丸くして驚いた。

「あんた先生だろ！法を犯していいのかよ！」

そのミラーマンの武霊使いに弥恵は微笑んで、

「生徒に見せないからいいのよ」

つとんでもない事を言っただけほほ笑み、ミラーマンの武霊使いと西島さゆりは、驚愕と呆れが混じった様な表情になった。

第三章『奪われたオウキ』 61

美羽

目を覚ますと、私は誰かに背負われていた。

「つう！」

頭に強い痛みを感じて反射的に手を当ててしまい、より強い痛みを感じてしまう。

「起きたの赤井さん！？よかった。頭へのダメージは見た目ほどじゃなかったみたいね」

頭へのダメージ？

触った時の痛みから引いた手を見ると、雨水に赤いものが混じっていた。

……………そつか、着地に失敗したんだ……………。

茫然と未だに振ってる雨に流れる血を見つつ、はっと気付いた。

「なんでここに巴先輩がいるの!？」

思わずそう声に出した時、人の様な、獣の様な咆哮が聞こえ、反射的にその聞こえた方向を見た。

そこにはグズグズに崩れた巨大で半透明な武霊達がいる、まるで崩れる痛みに苦しんでいるかのように暴れまわっている。

「何が起こっているの……………そうだ！美春さんと東山さんは!？」

私の問いに巴先輩は少し躊躇って、

「今、あたし達を逃がす為に戦ってるわ」

私達を？

視線を再び暴れる武霊達の方角に向けると……………確かにその合間に閃光やサーバントが見え隠れしている。

……………手伝いに行かないと……………

「巴先輩、降ろ」

して。つと言おうとして、くらっときた。

「無理をしないで」

無理をしないでって言われても……そう言えば……他のみんなは？

空を見回すけど、自警団の人達の武霊はどこにもいない。

……こんな状況で自警団の人達が武霊を出さないなんて事は……あるわけない。

つまり、何らかのトラブルが……状況から考えて、星波学園……琴野と連絡が付かない事と同じ事が起きてるんじゃない……何であれ、自警団の人達の戦力が当てにならないなら、私一人で何とかするしかない！

「巴先輩。このまま私の足をお願いします！」

「ちょ！ちよつと、何を」

私は止めようとする巴先輩の言葉を最後まで聞かずに、

「コウリユウ！」

を具現化させた。

夜衣斗

気が付くと……ってか、またこのパターンか……まあ、気が付くと、見知らぬ川の前に立っていた。

……川！？川って……えつと……確か、ミラーマンの武霊使いにぼこぼこにされて……気が付いたら……ここにいた。って事は……死んだ？俺。死んだ？……三途の川って本当にあるんだな……いや、死後の世界っていうのは、個々人で違うみたいだから、結局はこれが死の世界だって俺がイメージしてるって事なんだよな……まあ、花畑って、柄じゃないからいいが……ん？って事は、まだ死んでないのか？様は死ぬ間際の脳みそが見せている幻覚って事なんじゃ……まあ、結局死ぬって事か……

思わず深いため息を吐く俺。

そして、ふつと気になっていた事を思い出した。

……三途の川の源流ってどうなってるんだろ？

昔、三途の川の話を知った時、そんな事を思った。

どうでもいい、多分、答えのない疑問なんだろうが………まあ、このまま死ぬのなら、そんな疑問の答えぐらい知ろうとしてもいいだろう。

そう思った俺は、川が流れてくる方向・上流へと向かって歩き出した。

第三章『奪われたオウキ』 62

????

崩れ、暴れるレベル4の武霊達の間を、コロ丸を身に纏った美春が駆け抜ける。

その背に身体に伸びた体毛が巻き付き固定されている賢治が乗っており、賢治は十字銃の刃を最大限にし、通り抜けざまにレベル4を切り裂くが、身体が崩れ続けていると言うのに、切り裂かれた場所が瞬時に再生された。

驚異的な再生力を見た賢治はレベル4を攻撃する事を早々に止める。

暴れるレベル4は町に被害を出してはいるが、その範囲はまだ住民の避難が完了している廃工場近隣のみで、数日経てば源さんにより修復される。それならギリギリまで放置して、崩壊が更に進んだ状態で攻撃した方がいい。

そう賢治は判断した。

もつとも、今のレベル4達が、ただ暴れるだけではなく、その能力・機能を使っていたなら状況は違ってくる。

今の所、その兆候はないが、もし使われたなら……………。

最悪な状況を想像し、冷や汗が流れる。

だが、今はレベル4達ばかりをかまってる状況でもなかった。賢治が後ろを見ると、無数の様々なサーバント達が迫っている。

追ってきているサーバント達に向かってレーザーモードの十字銃を連射。

放たれたレーザーはサーバントを次々と霧散させるが、消えた数だけ直ぐに現れる為、焼け石に水状態だった。

「さて、どうする美春？」

そう賢治が美春に問い掛けた時、上空で閃光が走る。

反射的に見上げると、レベル2のコウリュウがレベル4達に向か

ってレーザーブレスを吐いていた。

「あの子は……………まったく、仕方のない」

賢治は思わず安堵の混じった苦笑を浮かべた。

「子供達が無理をしているのに、大人が無理をしないのはおかしいよな美春？」

「そうね」

賢治の問い掛けに、賢治からは見えないが美春は笑みを浮かべた。

夜衣斗

行けども行けども同じような風景が続く。

俺が今いる川は、一般的な三途の川とは違い、どこぞで見かけた様な川だった。

土やコンクリートで作られた土手に、所々にある木々。

岩や石に、緩やかな流れの川。

これに橋などが架かっていたら、普通の光景に思えただろうが……………いや、無理か。

視線を外に向ける。

川の外側には何故か様々な花が咲き乱れる花畑になっていた。

……………何というか……………節操がない死後の世界のイメージと言っか……………。

思わず苦笑し、視線を正面に戻した時、

不意にそれは現れた。

な！なんじゃこりゃ！？

っと思わず声を出さずに絶叫。

目の前に現れたのは……………空に浮かぶ巨大な穴と、それを塞ぐ巨大な……………手？

……………わけわかんねえ……………何なんだこの穴は……………。

手によって塞がれている巨大な穴から……………手で塞いでるせいか指と指の隙間から水……………そもそも水なのか疑問だが……………が出ていて、

川になっていた。

ここが源流なのは間違いない様だが……あまりにも巨大なせいで、上の方から出る水は霧になってて、周囲の光景が見えなくなっている。

だからか、気付くのに遅れた。

いつの間にか、隣に誰かが居り……霧のせいでその姿は確認出来ないが、巨大な穴を見上げているのは分かる。

一瞬、サヤかとも思ったが、体型の輪郭からして、男だった。

……男も俺の心の中に住んでるって事なんだろうか？

そんな事を思っていると、その男が、

「これが何の穴か、君は分かるかい？」

と言った。

その声は、明らかな老人の声で……聞いた事がないのに、聞いた事がある様な声だった。

第三章『奪われたオウキ』 63

飛矢折

上空で赤井さんが呼び出したコウリユウがブレスを放っている。背中では辛そうに息をしている赤井さん。

……… こういう状況は、武霊使いではないあたしには辛い状況だった。

なんであたしは武霊使いじゃないんだろう？

その思いが強くなるけど……… なれないものはなれないから仕方がない。

今は、赤井さんの治療が最優先。

そう僅かにそれた気持ちを立て直した時、人の気配を感じ、足を止めた。

向かっていた方向からして、自警団の人達だろうけど………。

「巴先輩？」

急に警戒し始めたあたしに不思議そうに呼び掛けてくる赤井さんに、

「……… 何だかおかしな気配がするわ」

足を止めた理由を言って、気配がする方に慎重に近付く。

あたしの警戒に、息を顰める赤井さん。

気配はほんの少し先にある空き地から感じたので、隣の家の塀を壁にして空き地を見る。

するとそこには雨合羽を着た人達が何をすることもなく、綺麗に整列して立っていた。

雨な上に、日が落ちていているから、光源が近くにある街灯や、自警団の人達がその手に持っている懐中電灯しかない。

だから、その様子は詳しく確認出来ないけど……… 鬼走人骸の武霊達が暴れているこの状況で、それはあまりにも不自然だった。

視線を巡らすと、並んでいる人達の中の一人が、雨に濡れない様

にビニール袋に包まれた拡声器を持っているのに気付いた。

「みんな片耳にイヤホン付けてますね……さっきは付けてなかったのに」

つと小声で赤井さんに言われ、僅かに見える顔に注目すると……

…確かにイヤホンらしきコードが見える。

「どうしちゃったんでしよう？みんな……」

「分からない……分からないけど……ここは見付からない様にした方がいいかも」

「……………そうですね……………」

そうしてあたし達は、見付からない様にこの場から離れた。

……………連絡の付かない星波学園といい……………こんな混乱の中、一体星波町に何が起こってるんだろう？

夜衣斗

隣にいつの間にか現れた老人らしき人に問い掛けられて、戸惑い、答えるべきか逡巡していると、

「そうか、分からないか。君は　　の　　の　　なのに、何も知らないんだね」

つと喋り出した。

どうも微妙にこつちを意識した喋り方をしていない様な気がした。

……………何としか……………小さな子供にでも話し掛けている様な喋り方な様な……………って言うか、なんか、所々不自然に聞こえない所があるな……………。

「　　だから仕方がないが、　　にも困ったものだ。高々

の　　を　　なかつたぐらいで」

……………聞こえない所が多過ぎて、何を言っているかさっぱりだな……………。

「これは、魔力孔。誰しもが魂の中に持つ世界樹の外へと繋がる穴だよ」

魔力孔？世界樹？

「魔力……正確には根源意志力だが……人は、ここから根源意志力を得て、己が魂を構築し、意志を持ち、意識を得て、意志力を生じさせる。そして、余剰となった根源意志力が魔力になる」

何だ？何を言ってるんだこの人は？

「これほど大きな魔力孔だ。君は莫大な量の魔力を得るだろうね」

……莫大な量の魔力ね……魔力つて事は、魔法とかを使う為の……精神物質か？……だよ……っで、この人が言う様に、それが意志力と同質だと言うなら……俺が普通の武霊使い以上に意志力を使え、意志力の回復が早い理由がこれつて事になるな……つてか、これほど大きくなって事は、普通の人はこれほど大きくないつて事だよな……なんでだ？

「を　してないおかげの大きさなのだろうが」

また聞こえないよ……何のおかげなんだ？

「……このままでは何の意味もない。だから、君に、与えようと思っ」

ん？

「運命を変える選択を」

……は！？

第三章『奪われたオウキ』 64

?????

見えない障壁を張っているシールドサーバントを足場に、空中を掛け上がるコロ丸を身に纏った美春。

その美春に攻撃を仕掛けてくる他サーバント達は、背に乗っている賢治とコロ丸の体毛の刃により次々と破壊。

瞬く間にサーバントの群れの中にいるオウキを身に纏った頂喜武蔵に接近。

二人が本気の攻撃を仕掛けてこないと分かっている頂喜武蔵は、悠然と構えていたが、賢治が十字銃を巨大な光剣に変えた事を見て、慌てて上昇。

その直前まで頂喜武蔵が居た場所に光の刃が走る。

「てめえ！ 刑事のくせして殺す気か！」

「っは！ くそガキ！ てめえが全力で避けりゃいいだけの話だろうが！」

一瞬の邂逅で、激しく火花を散らす頂喜武蔵と賢治。

コロ丸が落下を始めると同時に、賢治は十字銃を光線銃に戻し、連射。

その全てが頂喜武蔵が避けなければ当たっていた。

避けられる事を前提にした全力攻撃。

それが賢治と美春が出した『時間稼ぎの選択』。

無論、下手をすれば頂喜武蔵に攻撃が通り、殺してしまう可能性もあるが、その覚悟は決めている。

後は、夜衣斗が無事に町の外に出て、頂喜武蔵がオウキを使えなくなれば、捕まえる勝算はあるが………二人は知らない。夜衣斗が死の一手前まで来ている事を。

夜衣斗

運命を変える選択!?

って事は、こいつが俺に何かを与えたって奴か!?

そう思うと同時に、俺は条件反射的にその顔を確認しようと思っ
いた。

その瞬間。

俺の足が空を切った。

驚き、反射的に下を見ると、そこには何もない。

大穴……魔力孔から発せられる水……魔力の霧により気付けな
かったらしく、それは魔力孔から延びる亀裂だった。

その亀裂は大きく、また地面があるものだと思っただけ踏み入れた勢
により、俺は亀裂の先・何も見えない闇の中に落ち……ると思
ったが、誰かに腕を掴まれたので、落ちる事はなかった。

誰が掴んだか確認すると……心の公園で見たロングヘアの
女の子だった。

その女の子は必死な表情で俺を、子供とは思えない力で引き上げ
てくれた。

「……えっと、ありがとう」

お礼を言っと、女の子はにっこりとほほ笑んでくれたが……何
者なんだろう? 喋らないって事は……武霊か?

「ここは危険です」

喋った!?? って事は武霊じゃないのか? 本当に何なんだ?

「こちらへ」

そう言っ、女の子は俺の腕をやや強引に引っ張り、どこかへ導
こうとする。

あまりの力の強さに、元々抵抗する気がなかったのも加え、どん
どん引っ張られる。

訳が分からないが、少なくとも、この子に悪意は無さそうだし…

……

そう逡巡していると、後ろから、

「願わくば、君に与えた運命を変える選択が、あらゆる宿命の悪

意に打ち勝つ事を」

　　つと言つ老人らしき人の声が聞こえた。

　　振り返ると、魔力の水霧が濃くなっていて、もう人影すら見えず、魔力孔も見えなかった。

　　そして、気が付くと………いつもの公園に俺はいた。

第三章 『奪われたオウキ』 65

夜衣斗

いつもの心の公園。

だが、公園には、サヤもショートヘアの女の子も居らず、さつきまで俺の腕を引っ張っていたロングヘアの女の子さえいなかった。

…………… 声を出して呼ぶべきなんだろうか？

そんな事を考えた時、

「夜衣斗！」

美魅の声が後ろからし、振り返ると美魅人間形態にいきなり抱き付かれた。

抱き付かれた事に軽いパニックを起こす俺を無視して、

「よかつただわよ。このまま輪廻の輪か、黄泉の国へ行ってしまうかと思っただわよ」

輪廻の輪？黄泉の国？二種類あるのか？死後の世界って？

「川を渡ると輪廻の輪へ、川の源流にある穴に落ちると黄泉の国へに行ってしまうそうよ」

いつの間にかサヤが隣にいて、俺の疑問への説明をし始めた。

「川の向こう側が、人の集合無意識の世界。気脈とか言った方が分かりやすい？」

……………なるほど、人の心は無意識かでは繋がっているって話は聞いた事があったが……………死ぬとそっちに魂が吸収されてしまうわけか……………

「そう。普通の人は大体川、人によつては見え方が違うけど、意識と無意識の境を渡って、魂が分解されて次に生まれる魂の一部になる。だから、輪廻の輪」

つで、分解がうまくいかなかった魂は転生者になるって事か？

「そう言う事。そして、穴の向こう側が」

世界樹の外側か？

「……………その通りだけど……………どこで知ったの？」

さつき、その穴、魔力孔だけ？の前で、多分、老人らしき人から。

「……………そう……………そっか、夜衣斗が死に掛けているから、記憶の封印が弱くなつたのね」

記憶の封印！？なんだそりゃ！

「その内解けるから、気にしなくていいわよ」

気にするつうの！……………まあ、でも、聞いても答えないんだよな？

「御名答」

……………まあ、いいや……………つで、世界樹って何の事なんだ？

「この世界。夜衣斗が住んでいる世界の過去未来現在を含めた言

葉よ」

過去未来現在……………つまり、パラレルワールドも含むって事か？

「そう言う事」

……………まあ、今は深く問う事は止めとこ……………長い話になりそうだしな……………そんな事より、いつまで抱き付いているんだ美魅？つうか、頬をすりすりして、喉をゴロゴロするな！

「これくらいいいじゃないだわよ。こっちは夜衣斗を探して駆け回っただわよ？」

「そうよ。このままあの子が夜衣斗を見付けなかつたら、外の世界に魂が落ちて……………蘇る事の出来ない死を迎えていたのよ」

……………まあ、それは感謝しているが……………つとつうか、あの子は一体何なんだ？あの子だけじゃない。ショートカットの女の子といい……………サヤといい。

「それは……………その内、思い出すわ」

……………つまり、俺は知っているわけだ……………いや、教えられていくわけだ……………まあ、いい。思い出せないなら、思い出すまで、この話題は放置しよう。今はそんな事より……………つで？こっからどうするんだ？結局は、俺はまだ死に掛けているんだろ？

その俺の言葉に、美魅も抱き付きながら疑問の視線をサヤに向けて……………つつか、いい加減に離れるよ……………

「夜衣斗。私はあなたに言ったよね？後は夜衣斗次第だからねっ
て」

第三章 『奪われたオウキ』 66

夜衣斗

ウキは、頂喜武蔵に奪われているし……俺に何があるって言うんだ？……オ

訳も分からず考えていると、何かに俺のズボンを引っ張られた。確認すると、いつの間にか居なくなっていたロングヘアの女の子だった。

少女は俺に笑い掛け、

「早くお姉ちゃんを助けに行きましょうマイマスター」
つと言った。

お姉ちゃん……？……つか、マイマスター？……なんだかな……そう言えば、ショートカットの女の子が現れたのは、オウキが具現化してからだよ……まさか！？……いや、考えて見れば、『誰も武装守護霊の本体がどんなものか知らない』……つまり！？ショートカットの女の子が……オウキ！？……いやいや、全然違うじゃん……いや、そう言う事なのか……じゃあ、このロングヘアの女の子は？
視線をロングヘアの少女に向けると、ロングヘアの女の子が小首を傾げた。

……もしかして、本当に二体目！？何の！？いや、あれか？……つか、何で！？何で俺だけ？……いや、今はそんな事を考えている場合じゃないな……

ちらっと公園の外を見ると、いつの間にか川が出来ており、その水がこっちに迫っていた。

……要するに、そろそろ死ぬわけだ……何もしなければ……

もしこれで、これが間違っていたら、そんな思いも過ぎらなくもないが、俺は抱き付いている美魅を引き離し、ロングヘアの女の子

に向き合う。

ロングヘアの女の子は俺を見上げ、来ている白いドレスの裾を掴み、お嬢様みたいに微笑んで会釈した。

……………なんだかな……………

「機械の馬にして、騎士の馬……………キバ！」

????

頭部だけ鏡の様な高木弥恵の偽者達。

その偽者達を仕込み刀の居合斬りで次々と切り裂く本物。

だが、すぐさま同じ偽者が現れる為、ミラーマンの武霊使いに近付けないでいる。

その様子を遠くから見詰める物がいた。

武霊チルドレンの一人・呼衣。

彼女は弥恵の様子を見ながら、携帯電話で誰かに現状の報告をしていた。

「……………ええ、そうですね。お母様がこの場にいますの……………いえ、実験に直接関わってはいない様ですわ」

ちらつとミラーマンの武霊使いに視線を移し、弥恵に視線を戻す。

「明らかに全力は出していない様ですけど……………お父様への報告はどうします？お姉様？……………お母様は……………好きにしなさいって……………」

不安そうな、心配そうな、自身の武霊に喰われていた鬼走人骸の武霊使いに冷笑を浮かべた少女とは思えない、年相応の表情を浮かべていた。

そんな時、こう着状態に陥っている弥恵とミラーマンの戦いに変化が起きた。

「え！？……………これは……………どう言う事ですか？」

その変化に、呼衣は思わず驚きの声を上げてしまう。

呼衣視線の先は、自身の眼鏡に映る円グラフに向けられており、そのグラフは何かの数値を示しており、呼衣にとってはありえない

数値が出ていた。

その数値が出ると同時に、弥恵は後ろに飛び退き、その動きを警戒して偽者達は動きを止める。

そして、最大の変化が起きた。

「なんだと!？」

ミラーマンの武霊使いの驚きの声と共に、ミラーマンの武霊使いがトンネルの中から吹き飛ばされた。

反射的にトンネルへ視線を向けると呼衣の目に、倒れている夜衣斗と、その上を守る様に

機械で出来たユニコーンがいた。

第三章 『奪われたオウキ』 67

????

夜衣斗を守る様に具現化した機械のユニコーン。

その両肩両腰が開き、そこからソードサーバント二機とヒーラーサーバント四機が飛び出す。

ソードサーバントは飛び出した勢いそのまま西島さゆりを拘束しているミラーマンを切り裂き、ヒーラーサーバントはひよりを退かし、夜衣斗とひよりの治療を開始した。

ミラーマンから解放されたさゆりは、直ぐに夜衣斗に駆け寄り、機械のユニコーンは、二人を守る様に前に出る。

吹き飛ばされたミラーマンの武霊使いは、自身の武霊に助けられ地面に転がらずに済んでいた。

「三体目の武霊かよ！ どんだけ特別なんだよてめえは！」

激昂しながら、次々と機械のユニコーンの偽者をミラーマンから出すミラーマンの武霊使い。

治療を終えた夜衣斗は、さゆりの心配する前で立ち上がり、

「……………二体目だ」

つとぼそつと訂正したが、さゆりにしか聞こえず、聞いたさゆりは意味が分からないつと言った顔をしている。

夜衣斗はそれを特に気にせず、

「なぎ払えキバ。セレクト、ホーンブレイド」

夜衣斗の命令に、機械のユニコーン・キバは自分の額に付いている角を振り被る。

その動きに偽者のキバ達がシールドサーバントを出そうとするが、それより早くキバの角が開き、一閃。

一拍間を置いて、ミラーマンと偽者のキバ達は霧散。

開いた角に、シールドサーバントと同じ力場が刃状に展開されており、その見えない刃がミラーマンとキバの偽者達を、ミラーマン

の武霊使いを避けて、切り裂いた。

一瞬で自身武霊を倒されたミラーマンの武霊使いは、少しの間唖然としていたが、直ぐにはっとし慌てて武霊を再具現化しようとする。

その瞬間、

ミラーマンの武霊使いの地面から巨大なあぎとが現れた。

唐突な出現に、その場の全員が驚き、固まる中、巨大なあぎとはミラーマンの武霊使いを飲み込み、凄まじい早さで上空に飛び出し、その全身が露わになる。

それを見た夜衣斗は眉を顰めた

ミラーマンの武霊使いを飲み込んだその武霊に、夜衣斗は見覚えがあったからだ。

青い人型のドラゴン。

武霊を唯一無傷で武霊使いから奪える武霊・ブルースター。

夜衣斗

突然現れ、ミラーマンの武霊使いを飲み込んだブルースター。

このタイミングで出てくるかよ。

もっとも出てきて欲しくないタイミングで出てきたブルースターに、思わずそう思った時、ある事に気が付いた。

ブルースターの身体の至る所に、傷が付いている事にだ。

まるで激しい戦闘中に無理に抜け出してきたかのように見える。

何と戦っていたんだ？……いや、そもそも何処にいるんだ？大原亮。

辺りを見回すが、大原亮らしき姿はない。

その意味を考えるより早く、ブルースターはその姿を霧散させて消えた。

それにより、飲み込まれたミラーマンの武霊使いは空中に投げ出され、俺はシールドサーバントをキバから出し、受け止めさせる。

………一体、これは………どういうことなんだ？

????

「亮！」

朝日竜子の呼び掛けに、大原亮は薄れる意識を何とか維持させた。それと同時にブルースターを再具現化し、迫りくる巨大な剣をその爪で弾き返させる。

亮と竜子の視線を先には、フリルが異様に多い服を着たロングヘアの女の子が居り、その周りに巨大な剣がいくつも飛び回っていた。二人が自警団と鬼走人骸との戦いの成り行きを見守っていた時、不意に女の子が現れ、二人に襲い掛かってきた。

襲い掛かる巨大な剣達を、二人は自分の武霊を出して応戦するが、町の武霊使いとは次元の違う戦闘能力を持った少女の武霊に苦戦し、そうしている間に状況は悪化し、狙っていた武霊使いが黒樹夜衣斗の前に現れるのを確認。

亮は覚悟を決めて、かなりの無茶をしてブルースターを飛ばし、

ミラーマンの武霊使いをなんとか喰らったと言う訳だが……

「それにしても、何なのこの子？」

身体に至る所に切り傷を作っている竜子は、腕に巻き付く龍王を油断なく女の子に向けながら、亮を見た。

最初に襲われた時、亮の様子がおかしかったのを竜子は見逃さなかったのだ。

亮は眉を顰め、声を出さずに楽しそうに笑っている少女を見ている。

「……………くそ。どう考えても……………武霊チルドレンしかないか……………」

「武霊チルドレン？」

亮が悔しそうにつぶやいた言葉に、竜子は眉を顰めた。

その竜子を亮は見て、少し迷った様子を見せたが、それに竜子は

怒った表情を見せる。

亮は竜子の怒った顔にため息を吐き、苦笑した。

「今更な迷いだっただな。すまない」

「別にいいわ。それより……」

「ああ……多分、あの子は、星波町の武霊使い達を基にしたデザイナースチルドレンだと思う」

「デザイナースチルドレン？」

竜子にとって縁のない言葉に、再び眉を顰めたが、次の亮の言葉に、更に眉を顰める事になる。

「受精卵の段階で遺伝子操作を行って産まれた子供の事だよ」

第三章『奪われたオウキ』 69

夜衣斗

「よかった。無事そうね」

ミラーマンの武霊使いを受け止めたシールドサーバントをトンネル内に移動させた時、不意に背後から声を掛けられた。

あまりにも想像していなかった高木先生の声だったので、驚いて振り返ると高木先生がクスリと笑い、

「私がここにいる事がそんなに驚く事？」

「……………予想は出来ませんでしたので、来るなら美羽さんが、飛矢折さんかな？つと」

「そうね。途中までは飛矢折さんと一緒だったわよ」

…………… やっぱり無茶をしたか…………… 武霊使いじゃないのに飛矢折さんも大概無茶をする…………… つとと言うか、途中まで？

「コウリユウの叫び声が聞こえてから走り出したから、きつと赤井さんを助けに行ったと思うわ」

助けに行った？……………！？

キバ！セレクト。スカウトサーバント十機。ヒーラーサーバント。PSサーバント二機。

俺の心の命令に、キバは命令通りサーバントを出し、スカウトサーバントを四方に散らせ、残り三機のサーバントを見付けた二人の下に直ぐに向かわせる事が出来る様に町の中央に飛ばした。

これで二人はなんとか…………… つてしまった！これじゃ町の外に出れないじゃないか…………… 治療中のひよりさんも町の外に避難させられないし……………。

ちらつと、さゆりさんを見ると、さゆりさんはヒーラーサーバントの治療を受けているひよりさんを心配そうに見ていた。

俺はそのヒーラーサーバントに近付いて、治療状況を空間ディスプレイで表示させようとするが…………… 何度やっても文字化けを起

こして、治療状況がさっぱり分からない。

……ここにも武霊の制約が掛るのか？……一体何なんだか……。

俺は思わずため息を吐いてしまい、それを聞いたさゆりさんは心配そうな目線を俺に向けてきたしまった。

「大丈夫です。少なくとも身体の損傷は全部治せますから」

「そうなの？……ありがとう夜衣斗君」

さゆりさんにお礼を言われ……俺は正直、困った。何故なら、ヒーラーサーバントの治療はあくまで身体の治療……遣伝子情報に基づいた治療なので、もし、忘却剤が脳の、シナプスを破壊する様な代物であった場合……ひよりさんの人格・記憶は……修復出来ない。

治療状況を確認出来ない今、とてつもなく歯痒かったが……今は、この場にいる三人の安全と、美羽さん、飛矢折さんの安全を……

……いや、それだけではダメだ。

視線を町の方に向ける。

起きた時から轟き聞こえている破壊音。

その音の正体・崩れた身体で暴れ回る巨大な武霊達に、コウリュウが何故か一体で立ち向かっていた。

自警団の武霊達の姿が依然としてない事に、俺は眉を顰めたが……

……今は深く考えている場合じゃない。

このまま放置すれば……

俺は目を瞑り深いため息を吐いた。

「セレクト。PSサーバント」

PSサーバントを新たに出し、着る。

「行くの？」

何だか嬉しそうに高木先生が俺に問う。

何が嬉しいのか分からないが……

「……出来る事があるのに、しないのは嫌いですから……それ……」

ちらりとひよりさんに視線を向ける。
暗い炎が俺の中で再燃したのを感じた。
それを心の中に押し止めつつ、
「キバ！バイクモード！」

第三章 『奪われたオウキ』 70

????

夜衣斗の命令に、キバと呼ばれた機械のユニコーンの姿が變形し、瞬きもしない内に巨大なバイクの姿になった。

そのままでは乗れない為か、キバの姿が小さくなり、普通の大型バイクの姿になる。

「夜衣斗君。バイクの免許持つてるの？」

っとキババイクに乗り込もうとした夜衣斗に、さゆりは思わずそう聞いてしまう。

それは、どうみても夜衣斗がバイクに乗るタイプに見えなかったからだが、夜衣斗はちよつと困った雰囲気醸し出す。

「……………俺が運転するわけじゃありませんから……………大丈夫ですよね？」

思わず弥恵の方向に向いてしまう夜衣斗に、気配で自分に視線が向けられている事に気付いた弥恵は苦笑して、

「普通は大丈夫じゃないけど、武霊だからいいんじゃないかしら？」

っと、またしても教師らしくない事を言う弥恵に、何とも言えない顔をするさゆり。

「……………シールドサーバントをトンネルの入り口に設置しておきます。これで安全でしょうけど……………もし、シールドサーバントが消えた場合、直ぐに外に出てください。少なくとも、武霊に襲われる事はなくなりますから……………」

とりあえず弥恵の発言を気にしない様にしたのか、夜衣斗はそう言いながらキババイクに乗った。

それと同時に、キババイクの後部両端が開き、夜衣斗の言葉通りシールドサーバントが四機飛び出し、トンネル入り口にシールドを多重に張り出す。

「夜衣斗君」

さゆりの不安そうな呼び掛けに、夜衣斗はさゆりに視線を向け、ちよっと困った様な雰囲気になって沈黙し、結局何も言わずにキババイクが走り出した。

あつという間にトンネルから出る夜衣斗の後姿に、さゆりは苦笑し、

「男の子なんだから、もう少し気の利いたセリフを言わなきゃ駄目よ」

そう思わずつぶやいていた。

美羽

巴先輩に背負われながら、私はコウリユウに攻撃指示を出していた。

時々建物の影から見えるコウリユウと崩れ続けるレベル4武霊。

その武霊達にコウリユウは私の指示でフルパワーのブレスを放つけど、ほとんどダメージを受けている様子はなかった。

……いえ、ダメージを与えている事には与えているけど、直ぐに治っている様子だった。

身体が崩れているって言うのに……これ以上武霊達を進ませない様にするのが精一杯……。

自分の力の無さに悔しさを感じ始めた時、空に、レベル4武霊達の近くに、黒い何かがある事に気付いた。

コウリユウがブレスを放つ際に明るくなる空で見付けたそれが、一体何なのか私が考えるより早く、黒い何か達がレベル4武霊達に突撃し………武霊達が………爆発した!?

第三章 『奪われたオウキ』 71

????

全力攻撃を繰り返す美春と賢治だったが、そのどれもが決定打になる様な攻撃にならず、ただ消耗するだけの状態だった。

厄介なのは、暴れるレベル4武霊達。

いくら美春達や頂喜武蔵の攻撃が当たったとしても意に返さず暴れ回る。

レベル4武霊達の攻撃対象は美春達ではないが、確実に美春達の戦いの邪魔をしており……だからこそ戦いが続いていると言えた。

何故なら、初めこそ美春達の連携攻撃に押されていた頂喜武蔵だったが、オウキと言う圧倒的に手数が多い武霊を使う分、徐々に徐々に二人を圧倒し始め、もし、暴れるレベル4武霊達がいなければ、頂喜武蔵の圧勝と言う形で、既に決着は付いているはずだった。更にまずい事に、レベル3の具現化を維持し続けていた美春に限界が訪れようとしていた。

道路を疾走しながら降り注ぐサーバントを避ける美春。

賢治はその背中で避けられないサーバントを撃ち落としながら、コロ丸の背中から美春の限界を感じ取っていた。

さきほどまで同じ状況にあったのなら、サーバントを撃ち落とす合間に頂喜武蔵へ攻撃出来たが、今はサーバントを撃ち落とすだけで精一杯だった。

レベル3は強力な分、その消費意志力は激しく、短時間しか使えない。

だからと言って、レベル1・2で相手を出来るほど頂喜武蔵は、オウキは弱くなく、レベル3での戦いは危険な賭けだったがやるしかなく、対する頂喜武蔵も同じレベル3なはずだが、消費している様子は欠片もない。

(黒樹君の証言にあった薬を使ったと見るのが自然だが……)

そ！これはいくらなんでも反則だろう！？)

賢治が心の中で悪態を吐いた時、コロ丸具現化が唐突に解けた。

「な！つく！美春！」

空中に投げ出される形となった賢治は、慌てて空中で無理矢理体勢を変え、意志力の使い過ぎで意識を失った美春を抱き寄せ、自分が下敷きになる様に体勢を更に変えて着地。

全速力で走っていたコロ丸の勢いのまま道路を滑る二人。

水飛沫を上げながら何メートルも滑り、民家の塀にぶつかってようやく止まる。

土砂降りの雨が降っていなければ、背中に大怪我を負っていたであろう勢いだった。

しかし、雨水によりダメージが軽減されたとは言え、無事と言うわけではなく、意識を失っている美春を抱えていた事もあり、塀にぶつかった際、賢治は後頭部を強打、意識を失ってしまう。

賢治の手から十字銃が消え、意識を失った二人の側にオウキを身に纏った頂喜武蔵が降り立つ。

頂喜武蔵はにやにやとしながら、その拳を振り上げる。

その拳が振り下ろされる。

瞬間、頂喜武蔵はくの時になって横に吹き飛ばされた。

(くそが！一体何だっつんだ！)

何かに吹き飛ばされた頂喜武蔵は心の中で悪態を吐きながら、空中で体勢を整え、足から着地する。

そして、自分を吹き飛ばしたものの正体を確認した。

それは、一切音を出していない馬を模した白銀の大型バイク。

(エンジン音がしねえ………って事は武霊なんだろうが………)

問題はそのバイクに乗っている者だった。

そのバイクには、あの男に殺され掛けているはずの黒樹夜衣斗が乗っていた。

「てめえ、なんでここにいる。つつか、三体目か？どんだけ化け

物だよ。てめえは！」

頂喜武蔵はそう叫ぶと同時に、空を飛び回っていたソードサーバント達を強襲させ、自身は刀を取り出し、ウイングブースターも使って斬りかかった。

バイクは前進しか出来ない。

だから、夜衣斗に避ける手段はないはずだった。

だが、頂喜武蔵は失念していた。

自身がそのバイクを武霊だと認識していたはずなのにだ。

振り抜いた刀、強襲したソードサーバント達。

そのどれもが夜衣斗にも、夜衣斗が乗っていたバイクにも当たらなかった。

何故なら、夜衣斗の乗ってるバイクが、無音のまま『後進』したからだ。

第三章 『奪われたオウキ』 72

夜衣斗

オウキとキバの動力源であるライオンハートは、ガソリンエンジンと違って通常は音がしない。

だから、土砂降りの雨が降っている事も重なって、倒れている团长と東山刑事に拳を振り下ろそうとしている頂喜武蔵を強襲出来た。そして、前進だけでなく後進も出来る様になってるから、空と前の攻撃を後ろに下がって避ける事も出来た。

……まあ、問題はこつからなんだろうが……
そう思っていると、オウキを身に纏った頂喜武蔵は刀をふらふら持ちながら笑った。

「てめえ、状況分かってんのか？」
にまにまと笑う頂喜武蔵。

「今の俺はお前と違って意志力切れを起こす事はねえ上に、レベル3だ。力も違う上に、まともにダメージを与える事も出来ねえ。そうだろ？」

……確かにそうかもしれないが……
「ついでに言やあ、あいつらもいる」
刀で周りを指す頂喜武蔵。

周りには崩れ続ける半透明で巨大な武霊達。

「見た感じ、そいつはオウキのサポートメカって所だろ？そんなんで勝てるよ、この状況を変えられると思ってるのか？え？とつとと町を出た方が、まだチャンスはあったかもしれないってえのによ」
ちらりと俺は倒れている团长と東山刑事に視線を向けた。

頂喜武蔵を吹き飛ばすと同時に、シールドサーバントで二人を保護し、同時にヒーラーサーバントの治療を開始させているので……
……しばらくほつとも大丈夫だろう。

「無視すんじゃないねえ！」

……………俺はため息一つ吐き。

「……………お前は勘違いしている」

「んだと！」

「……………これは……………キバは、オウキのサポートメカじゃない」

俺はそう言いながら、右手を上げる。

「……………戦闘運搬特化型ロボット……………戦闘能力だけなら、オウキより断然上なんだよ」

上げた手を振り下ろす。

それが合図になり、上空で待機していたステルスサーバント達が、CAサーバント達のステルスを解き、CAサーバント達が武霊達に突撃を開始する。

「……………キバ。CAサーバントオーバードライブ」

俺の命令に、キバの角から一瞬黒い霧が生じ、消えた。

それと同時に、上空のCAサーバント達が黒い霧に包まれ、まがまがしい黒い装甲を纏い急加速。

そのまま武霊達に突撃し、武霊達の体内に侵入。

「……………ブレイク」

通常のCAサーバントの爆発以上の黒い爆発を起こし、武霊達を内部から粉々にして吹き飛ばす。

全ての半透明で巨大な武霊達は、流石に全身を粉々にされると再生出来ないのか、残った大きな部位が次々と霧散するのを俺はスカウトサーバントから送られている映像で確認した。

「てめえ……………どう言う事だ！？オウキの説明書には、サーバントにオーバードライブが使えるなんて書いてなかったぞ！」

武霊達が全て消えたと言うのに、笑みを浮かべる頂喜武蔵。

……………って言うか、説明書？……………まあ、そう言う能力があるって事なんだろう。あのガチャポンには……………。

「……………言っただろ？キバは、戦闘運搬特化型だって……………だから……………終わりだ」

キバから飛び降り、それと同時にキバの具現化レベルをレベル1

に戻して、バイクモードを解除。馬の姿に戻す。

「っは！俺も言わなかつたか？連中は、ついでってな！」

オウキ・キバ互いから大量のサーバントが飛び出し、互いの上空でにらみ合う形で停止。

俺も頂喜武蔵も地上でにらみ合い……………それにしても……………頂喜武蔵と対峙すれば、俺は自分がもう少しビビると思ってたんだがな……………意外なほど怖くない……………まあ、怒りが恐怖を上回っているんだろうが……………。

そんな事を思いながら、俺は王継戦機の一シーンを心に描く。

「今こそ！」

大声で、そのシーンでオウキが仕えていた王が言ったセリフを叫んだ。

「今こそ！」

ほぼ同時に頂喜武蔵も同じ言葉を叫ぶ。

「そのもう一つの名の意味を知らしめる時！！！」

俺と頂喜武蔵の言葉がハモリ、互いに不快に思ったのか、互いに眉を顰める。

「ライオンハート機関フルドライブ！」

その言葉と共に、キバ・オウキの装甲全体に黒い線が走る。

「シールアーマー解放！」

キバ・オウキの装甲が、黒い光線が走る場所から開き、そこから黒い光の霧の様な物が出てきて、一気にキバ・オウキを覆い隠す。

「キバは、機械の馬。キバは、騎士の馬」

オウキは、王の騎士

キバ・オウキを包んだ黒い光の霧が、徐々に形を変え始める。

「そして、キバは、鬼の馬」

「そして、オウキは、王の鬼」
黒い光の霧が完全に固着化し、キバ・オウキの姿を禍々しい姿に変える。

「オーバードライブモード解禁！！！」

第三章 『奪われたオウキ』 73

????

互いに禍々しい黒い鬼の姿になったキバとオウキ。

もつともオウキは頂喜武蔵が身に纏うレベル3である為、その姿は半透明ではある。

それでも禍々しさは変わらず、その様子を遠く離れた場所で武霊チルドレンの一人・呼衣は見ていた。

土砂降りの雨が降っているので、普通に視覚で見る事は出来ない。だから呼衣は、自身の武霊を使って、遠くの出来事を映す鏡を出していた。

その鏡は、亮達が頻繁に使っている鏡と全く同じ物だったが、こちらは複数出しており、それぞれ一つ一つにキバとオウキ・黒樹夜衣斗・東山賢治と幸野美春・西島さゆり、ひよりと高木弥恵・赤井美羽と飛矢折巴、そして、今、星波町で起こっている『もう一つの事件』達と『その元凶』を映していた。

「……………これは……………お父様が喜びそうね」
そう言って、呼衣は星波町の各地で起こっている混乱に、冷笑を浮かべた。

夜衣斗

「セレクト！ホーンブレード！」

俺の命令に、キバの黒い角が巨大な黒い刀身になり、同時にキバがオウキに対して突撃を開始する。

その突撃を、頂喜武蔵は右手の刀で上に弾き、空手の左手に拳銃を出し、弾かれた事により頭を上げていたキバの胸部に向かって連射する。

放たれた黒い弾丸がキバの胸部に当たるが、全て黒い装甲に弾かれ、弾かれた弾丸は地面や塀に当たり、爆発し、大きな穴を穿つ。

このままじゃいくら武霊で壊れた物が元に戻るとしても、被害がでかくなり過ぎる。

そう思った俺は、キバに弾かれた勢いを殺さずにそのまま飛び上がらせ、全身を回転、後ろ足で頂喜武蔵の顎を蹴り上げさせた。

馬がサマーソルトキックをするとは思わなかったのか、頂喜武蔵はもろに蹴りを喰らい、垂直に吹き飛ばすが、直ぐにウイングブースターを展開し、勢いを殺して空中に浮く。

俺はその隙を逃させず、キバの背中にウイングブースターを展開、同時に臀部に補助ブースターも展開させ、一気に飛び上がらせ、そのまま頂喜武蔵に突撃させる。

頂喜武蔵にホーンブレードが突き刺さる寸前、頂喜武蔵はウイングブースターを片翼だけ使い回転。

ホーンブレードをギリギリかわされると同時に、頂喜武蔵は刀でキバを斬り付ける。

キバは頂喜武蔵の剣撃をまともに受け吹き飛ばされるが、装甲に僅かな傷を付けただけで済み、直ぐに修復された。

更に追撃を掛けようとする頂喜武蔵に、俺はシールドサーバントの一機をオーバードライブさせ、黒いシールドを張らせながら突撃。よける暇もなく突撃され押し飛ばされる頂喜武蔵のその進行方向にも、オーバードライブさせたシールドサーバントを展開させ、挟み込む。

挟み込まれた頂喜武蔵は、身動きを封じられ、動く事が出来ない。オウキのサーバント達が、キバのシールドサーバントを破壊しようとしてシールドサーバント達に襲い掛かるが、オーバードライブ中のシールドサーバントはびくともせず、更に強い力で頂喜武蔵を封じ込める。

俺は頂喜武蔵が完全に動けなくなった事を確認し、オウキのサーバントをキバのサーバントで牽制しつつ、PSサーバントを飛行モードにして頂喜武蔵の前まで飛んだ。

一瞬、言葉に迷ったが、

「……………死にたくなければ……………降参しろ」

つとシンプルな事を俺が言つと、身動きが取れない不利な状況だと言つのに、頂喜武蔵は笑みを浮かべた。

「やっぱりそうか」

？

「てめえは連中と同じだ」

…………… やっぱり気付かれたか。まあ、当然と言えば当然だが……………

…これはヤバいな……………。

「俺を殺せねえ！」

そう頂喜武蔵が叫ぶと同時に、一体どこにいたのか、大量のシールドサーバントが下に現れ、ヘキサ型に、まるで蜂の巣の様に展開し、シールドを張って迫ってくる。

…………… フォーマーションウォールか…………… 説明書つて奴にはこんな事まで書かれているのか……………。

迫る不可視の壁に押され…………… いや、不可視の地面に押し上げられ、俺とキバと頂喜武蔵は土砂降りの雨を降らす雲の中へと入った。視界が完全に塞がれるのと同時に、PSサーバントの脳内ディスプレイに送られてくる情報が、頂喜武蔵を抑え込んでいたシールドサーバントが限界を迎え、消滅した事を示した。

キバはエネルギーを過剰に送る事により、サーバントをオーバードライブさせる事が出来るが、オウキやキバのオーバードライブ同様に、それは機体に強烈な負荷を掛ける。

自動修復機能があるオウキとキバなら、その負荷を常時修復する事により多少は和らげる事が出来るが、その機能がないサーバントは当然、その分だけ活動時間が短くなる。

どうもそれを見越されていた様だ。

そして、分厚い雨雲により視界が塞がれているこの状況は、いくらサーバントにより通常の視覚以外の情報を得られるとは言え……………

「殺せないお前には不利な状況だよな！」

そう言つて高笑いを上げる頂喜武蔵の声が聞こえた。

第三章『奪われたオウキ』 74

夜衣斗

キバの攻撃のほとんどは、オウキを貫通したとしても頂喜武蔵に届かない、もしくは直ぐに絶命しない様な位置への攻撃だった。

……まあ、ゴミみたいな……ゴミより劣る様な奴なんて死んでも特に気にしないんだが……誰かが、俺自身が奴を殺すとなると……それはつまり、奴と同等、もしくはそれ以下になる事を意味している。

例え、どんな理由があるにせよ。

人殺しは人殺し。

一生せずに済むならそれに越したことがない。

……しかし、本心から言えば……殺してやりたいと激情に駆られているのは確か。

ひよりさんや、団長さん達、未だに安否が分からない美羽さん達。俺の知っている人が、頂喜武蔵、こいつのせいでどれだけ傷付いているか……許せない！許す事が出来ない！殺してやる！

そんな激情に駆られているせいか、オーバードライブモードを使っていると言うのに、意識のぐらつきを全く感じず、辛くもなかった。

……いや、多分、それが原因じゃないな……もしかしたら、あの魔力孔って奴を認識した事が関わっているかもしれないが……まあ、余計な思考は今はずるべきじゃないな。

俺はゆっくりと息を吐き、静かに息を吸った。

それを数度繰り返し……少し激情が収まった所で、改めて周りを見渡す。

今、俺がいるのは雲の上。

頂喜武蔵により雲の中まで押し込まれた俺とキバは、すぐさま、雲の上に出た。

俺は、戦いのプロって訳じゃない。

喧嘩慣れしているって訳でもないの、視覚情報に頼った戦い方にどうしてもなってしまう。

そんな奴に、視界がほとんど塞がれている雲の中は、殺さずの条件を加えれば、非常に不利な場所だと思ったから雲の上に出たんだが…………。

PSサーバントによるもう一つの視覚では、雲の上を飛び回っているスカウトサーバント達から送られてくる情報が映し出されている。

…………困った事に、その情報は普通なら（王継戦機内での話）視覚映像の中に文字情報も含まれているはずなんだが、武霊の制限のせいで、その部分は文字化けしていてさっぱりわからない。

それでもそれ以外の情報だけでなんとか判断するなら…………どうやら頂喜武蔵はドッペルゲンガーサーバントを無数に出して、オウキの偽者を大量に作り出している様だった。

ドッペルゲンガーサーバントはオーバードライブまで再現できないから、オーバードライブモードを向こうは解いているって事なんだろうが…………まあ、そうする事により、こっちがより下手な攻撃が出来なくさせているだろうが…………他人の命を何とも思っていない上に、自分の命すらあっさり打算で使う…………だから嫌いなんだこういう連中は…………。

思わず舌打ちをしそうになったが…………止めて、代わりに深いため息を吐く。

…………まあ、とりあえず…………

「セレクト。ウェザーサーバント…………五十機！」

????

オーバードライブを解いたオウキを身に纏い、頂喜武蔵は雲の中に潜んでいた。

オーバードライブモードを解く事により、夜衣斗が下手に攻撃出

来なくさせたのだが………実際は、もう一つ理由があった。

それは、オーバードライブを使い続けていた時に頂喜武蔵が感じた意識の薄れ。

武霊使い強化薬により無限供給されているはずの頂喜武蔵の意志力。

つまり、オウキのオーバードライブは、その供給量を上回る意志力消費と言う事になる。

オウキのスカウトサーバントから送られてくる映像から、雲の上に逃げた夜衣斗は、未だにキバのオーバードライブを維持し、平然としていた。

（どれだけ化け物なんだよ）

思わずそう思いながら、頂喜武蔵は笑みを浮かべていた。

（例え化け物でも………良心を持った化け物ほど退治しやすいものはない）

そう思い、反撃に転じようとした時、突然強風が発生した。

それは不自然な風だった。

スカウトサーバントにより得られる情報から、町の上空の至る所で強風が吹き荒れ、そのどれもが違う方向に、町の中心から外に向かつて吹いている事を確認した頂喜武蔵は、ある事を思い出す。

説明書の後ろに書かれていたサーバント。

『ウィザーサーバント』

大気や水を操り、天候を操るプロペラ型のサーバント。

（そいつを使っているのは間違いないだろうが………一体いつそんなサーバントを出したんだ？）

頂喜武蔵は夜衣斗達が雲から出てからずっとスカウトサーバントを通して監視していた。

だから、そんな事をすれば直ぐに気付くはずで、戦闘中にそんなサーバントを出している様子もなかった。

（そもそも、スカウトサーバントから送られてくる情報の中に、そんなサーバントの反応がねえじゃねえか！………いや、待ってよ

?)

再びある事を思い出した。

ウィザーサーバント同様に、説明書の後ろに書かれていたサーバントの事を。

瞬く間に星波町の上空が星空となり、夜衣斗とキバの姿を視認出来るようになる。

そして、同時に頂喜武蔵は気付いた。

オウキの頭部にいつの間にかタコのようなサーバントが張り付いている事を。

『ハツカーサーバント』

取り付いた機械の電脳にハッキングを仕掛けるサーバント。

「てめえ……………いつこんなサーバントをくつつけやがった!」

近くにキバのスカウトサーバントが居る事を確認した頂喜武蔵は、そのスカウトサーバントに向かって叫び、頭部にくっ付いたハツカーサーバントもぎ取り、握り潰した。

第三章『奪われたオウキ』 75

夜衣斗

「てめえ……………いつこんなサーバントをくつつけやがった！」

その頂喜武蔵に俺は思わず苦笑した。

雲から出る際、俺はキバにハツカーサーバントを出させ、オウキに密かに取り付かせた。

頂喜武蔵も雲により視界が塞がれているから……………まあ、うまくいったらラツキーかな？つて程度に放つたんだが……………向こうも視覚に頼った戦いをしているつて事なんだろう……………考えて見れば、向こうはただたんに喧嘩慣れした不良だし……………もっとも取り付かせる事が出来たからと言って、ハツカーサーバントの機能はそれほど強力なものじゃない。普通は、人格のない機械に対してのみに使われる。だから、オウキにハツキング出来たとしても、せいぜいスカウトサーバントから送られてくる映像を入れ替えるぐらいしかできなかった。

まあ、おかげで、ウィザーサーバントを奴に気付かれずに使えたが……………本当に天候を操作出来るんだな……………何と云うか、それを自分がやってるつて言うのが信じられないと云うか……………

晴れた星波町を見回し、俺は何とも言えない感情に襲われていた。そして、町を見回した時、ある事に気付く。

晴れている範囲が、星波町の境で止まっている事をだ。

……………武装守護霊の力の範囲つて事なんだろうが……………これも忘却現象の一種か？……………考えて見れば、武霊によって大掛かりな大規模な現象とかが起こされれば、町の外からもそれが確認出来るはずだよな……………なのに騒ぎらしきものが起こっていない……………つと言う事は、忘却現象の影響範囲は、かなりの広範囲に及んでいるつて事になるよな……………一体何なんだか……………まあ、俺なんかに分かるはずはないか……………第一、考えている暇なんてない。

視線を下に向けると、頂喜武蔵がオウキをオーバードライブにして迫っていた。

俺はため息一つ吐き……視界が晴れて、向こうが不利になったって言うのに……まあ、それが分かってもって事か？……さて、

「……………そろそろ終わりにしようか？」

俺の問い掛けに、隣にいたキバが頂喜武蔵に向かって突撃を開始した。

???

「勝負あつたようね」

酷くつまらなそうに呼衣は頂喜武蔵の突撃を見ていた。

「でも、これでは十分な実験データが取れないわね……………」

仕方がない……………」

メガネを押し上げ、ため息一つ。

「現れなさい『無限万華鏡』」

その呼衣の呼び掛けに、巨大な万華鏡が背後に具現化し、宙に浮き、高速回転し始めた。

頂喜武蔵は自分が不利な状況に置かれている事を自覚していた。

だが、だからと言って、降参する様な男ではない。

突撃していたキバのホーンブレードを刀で受け止める。

空中で鏢迫り合い状態になる一人と一体。

（ツチ！こっちはレベル3だぞ！？なんで力が拮抗しやがる……………

……………それだけ向こうのパワーが強いつて事かよ！？）

通常、レベル1とレベル3の具現化には圧倒的な力の差がある。

それは、レベル3の方が具現化率が高い為で、それ故に、『本来の力に近い』レベル3は、よほど相性が悪くない限り、レベル1に負ける事は無い。

オウキとキバは、同じ武霊使いから生じた武霊だ。
人型と馬型の違いはあるが、同じ機能の武霊。

相性の良い悪いは無いと言ってもいいはずなのに、拮抗している。
つまり、夜衣斗が言っていた戦闘能力だけなら、オウキよりキバの方が圧倒的に上だと言う言葉は、真実だと言う事。

そして、キバにはオウキにないサーバントのオーバードライブ化があり、こっちはオウキのオーバードライブを長く維持出来ない。
圧倒的な不利。

しかし、頂喜武蔵にもキバにはないものがある。

もともと、オウキは『借りている武霊』。

本来の頂喜武蔵の武霊・ガチャポンマンには『切り札』がある。
それを使えば、この状況を覆せるが、

(クソ！『あいつら』が死んじまわなければ使えたっていうのに
よお！！)

そう心の中で絶叫しながら、頂喜武蔵はウイングブースターを上
に噴出させ、一気に落下して鏢迫り合いから逃れる。

同時に刀を収納し、両手に拳銃を取り出してレーザーモードで撃
つ。

黒い光線にキバが飲み込まれ、上にキバが吹き飛び、ある程度の
高さまで吹き飛んだ所で黒い光線が唐突に消滅し、キバも消滅した。

「死ねや黒樹夜衣斗！」

キバが武霊有効範囲外に出て消滅した事を確認した頂喜武蔵は、
続けざまに夜衣斗に向かって黒い光線を撃ち込んだ。

黒い光線を撃ち込まれた夜衣斗は特に慌てる事もなく、キバを再
具現化と共にシールドサーバントを光線の射線上に展開し、オーバ
ードライブさせて防ぐ。

その攻防により、頂喜武蔵と夜衣斗の互いの姿が見えなくなった
瞬間、頂喜武蔵の前に大きな鏡が現れた。

あまりの唐突ぶりに、反射的に攻撃しようとした頂喜武蔵の腕を、
その鏡から飛び出した怪獣が抑え込む。

その怪獣の出現に、頂喜武蔵は驚愕した。

何故なら、つい先ほど消滅したはずの手下の武霊だったからだ。

更に驚愕は続き、鏡から次々と現れる消滅したはずの手下の武霊達。

「な！なんなんだこれは！？」

その声を思わず上げた時、武霊達が出終わった鏡に一人の少女が映った。

自らを武霊チルドレンと名乗り、頂喜武蔵に忘却剤や武霊使い強化薬を提供した少女・呼衣。

その少女が鏡に映り、こう言った。

「貸してあげる。だから、もっと力を見せなさい」

その瞬間、周りの武霊達が頂喜武蔵に吸い込まれ、鏡は消えた。

後に残された頂喜武蔵は、シールドサーバントがオーバードライブにより消滅し、視界の晴れた夜衣斗に向け、邪悪な、楽しくて楽しくて仕方がないという笑みを向ける。

「てめえに見せてやるよ！俺の武霊の切り札を！」

そう叫んだ頂喜武蔵はオウキを、一時的に『借りる事を止めた』。

第三章 『奪われたオウキ』 76

夜衣斗

美羽さんと飛矢折さんが見付からない。

キバと頂喜武蔵が罅迫り合いを演じている最中、俺はPSサーバントのオート射撃機能を使って襲ってくるサーバント達を撃墜しつつ、ため息を吐いた。

トンネルの所から、ずっとスカウトサーバント達に二人を探させているが、一向に見付からない。

見付かるのは、妙に整列し、何もせずに突っ立っている雨合羽の一団ばかりで…… さっぱり意味が分からず、不安ばかりが募り…… そして、

…… やっぱり大原亮はこないか……。

そう思っただ俺は眉を顰めた。

あわよくば、大原亮のブルースターに頂喜武蔵を襲わせ、奴の武霊を喰わせて…… っと言う図式が頂喜武蔵と対峙する直前にあった。

…… だが、町境のトンネル前で見たぼろぼろのブルースターの様子を思い出し、一抹の不安があり…… そして、その不安は的中しつつある。

これだけ頂喜武蔵を追い詰めていると言うのに、一向に現れる様子は無い。

聞いた話だと、高神姉弟の時も、直接見た五月雨都雅の時も、奪う対象が弱ってから襲っていた。

美羽さんと飛矢折さんといい、謎の雨合羽の一団といい。

そして、さっきは現れたのに現れないブルースター。

…… 一体、今の事態以外に、この町で何が起こってるって言うんだ？

???

「くそ！このままではちがあかない。一気に突破するぞ竜子！」
亮達を邪魔する様に巨大な剣達を飛ばす武霊チルドレン。

そして、刻々と進む状況に焦った亮は、亮を守る様に動いていた竜子を下がらせる。

「来い！ブルースター！」

空中で剣達の相手をしていたブルースターを自身の前に着地させ、その身体に飛び込む亮。

同時にブルースターの身体が半透明になり、レベル3になる。

それを見た武霊チルドレンは、笑みを深め、

「武具王」

初めて口を開いた。

その瞬間、武霊チルドレンの背後に西洋甲冑の武霊が現れ、具現化する。

「これが彼女の武霊の本体！？亮！」

「分かってる」

警戒する二人を余所に、笑みを深めた武霊チルドレンは、声を出さずに笑い、それに合わせて武具王と呼ばれた武霊が亮に飛び掛かる。

亮は飛び掛かってくる武具王を迎え撃とうとした。

だが、その瞬間、亮・竜子共に悪寒を感じ、飛び退く。

二人が飛び退くと同時に、武具王の全身から巨大なあらゆる武器が生え、瞬時に武器の塊になった。

武器の塊は、直前まで二人が居た地面を削り、その動きを止める。そして、ぼろぼろと全身から武器を落とし、武具王を再びその姿を現した。

「その程度で！」

動きを止めた武具王に向けて、亮はブルースターの炎のブレスを放つ。

炎のブレスが武具王に当たる寸前で、直前に武具王の身体から落

とされた武器達が浮き上がり、武器の壁となつて防がれる。

ブルースターのプレスが防がれたのを確認した竜子は、直ぐに反対側から龍王にプレスを放たせるが、今度は武具王の身体から様々な防具が飛び出し、龍王のプレスも防がれた。

「……………まさに武具王ね」

様々な防具とあらゆる武器が浮き上がり、武具王と武霊チルドレンを守る様に浮遊する様子を見た竜子は思わずそつつぶやき、亮を見た。

半透明のブルースターを身に纏いながら、荒い息を吐いている。

意志力の消費によるものと言うより、ブルースターの能力の副作用による疲労に見えた。

片や武霊チルドレンの方は、未だに全力を出している様には見えない。

「亮！」

竜子の呼び掛けに、竜子と視線を合わす亮。

一瞬のアイコンタクトと同時に、武具王の武器達が二人に襲い掛かってくる。

亮はブルースターの能力を使い地面を瞬時に隆起させ、武器達を防ぐと同時に武霊チルドレンとの間に壁を作った。

その壁は直ぐに武器達により壊されるが、壁の向こう側には既に亮と竜子の二人は居らず、それを確認した武霊チルドレンは目を瞬かせて、首を傾げる。

ほんの少し逡巡して、逃げた二人を追おうとした時、

「もう十分です。戻ってきなさい麗衣」

つと何処からともなく声が聞こえ、やや不満そうに武霊チルドレン・麗衣は追うのを止め、八つ当たりか、周囲の建物を切り裂き破壊した後、どこへともなく去って行った。

誰もいない竜子の部屋に唐突に現れる巨大な鏡。

その中から互いに抱き付いた亮と竜子が飛び出し、部屋の中に転

がり、壁にぶつかって止まった。

抱き付いたまま竜子は亮の様子を見る。

亮は荒い息を吐きながら、小さな遠見の鏡を出し、何かを見て、焦っている様だった。

「……………竜子。直ぐにこの部屋から出るぞ」

「え！？どうして？休まないと」

「駄目だ！『あいつ』がこの混乱に乗じて動き出している。ここにいるのは危険だ」

「何？何？どう言う事？あいつって！？」

亮はよほど焦っているのか、竜子の質問に答えず、再び瞬間移動用の鏡を出し、訳の分からない竜子を抱き抱え、飛び込んだ。

飛矢折

ようやく町のはずれにある星波病院に辿り着いた。

背中には、暴れていた武霊達が全部消滅した途端、気が抜けたのか、コウリュウを無理に出してたせいか、意識を失った赤井さん。

これで赤井さんの怪我を見て貰えるって思った矢先、さっきまで土砂降りの雨だったのに急に空が晴れた。

……………あまりにも異常な晴れ方だったから……………多分、武霊の力なんだろうけど……………。

何が起こっているか、暗い星空を見回そうとした時、不意に背後に気配を感じた。

背後は病院の入口だったから、誰かが出てきたんだろうと思って振り返ると……………そこには……………どこかで見た事がある男性が、何か違和感を感じる笑みを浮かべて立っていた。何の違和感かまではよく分からないけど……………。

「やあ、君は確か、高等部二年。女性護身武術部所属の飛矢折巴君だったね」

その男性があたしの事を正確に言ったので、あたしは反射的に身構えた。

男性は面白そうにあたしを見て、

「そう警戒しなくていい。俺は大学部三年。三島忠人。見た事はなくても、名前ぐらいは知っているだろ？」

そう言われて、私はようやく思い出した。

確か、武装風紀風紀委員長兼統合生徒会統合副会長をしている人がそんな名前だったはず。

よくよく見て見れば、確かに生徒総会とかで見た事がある様な気がする。

あまり接点がないから直ぐに思い出せなかつたんだろうけど……

…この非常時に、何で武装風紀の人がここにいるんだろっ？

そう疑問に思った時、病院の中が妙に静かな事に気が付いた。

「『最後の場所』で君に出会えるとは……とっくに帰っている
とばかり思っていたからね」

最後の場所？

意味の分からない言葉を聞くと同時に、唐突に三島さんが背後に武霊を出した。

ぞわつと悪寒を感じたあたしは、何の武霊で、何で出したか確認せずに、反射的に上段蹴りを三島さんに放った。

「いい判断だ。だ

????

「いい判断だ」

三島忠人がそう言うと同時に、忠人が背後に具現化した武霊・まるでハーメルンの笛吹き男の様な武霊が笛を吹く。

笛から放たれる音。

「だが、遅い」

忠人の顎にクリーンヒットするはずだった飛矢折巴の蹴りが、顎の直前でピタリと止まる。

「足を下ろせ」

忠人のその命令に、巴は素直に従う。

その瞳は意志の輝きを失っており、虚ろな表情になっている。

「さて、後は……………あいつらの決着を待つだけか」

先ほどとは打って変わって無機質な表情になった忠人は、その視線を晴れた星空・黒樹夜衣斗と頂喜武蔵の二人が戦っている場所に向けた。

第三章 『奪われたオウキ』 77

夜衣斗

戦闘中だと言つのに、思わず別の事に気を取られていたせいで、頂喜武蔵に不意を突かれ、キバを星波町の更に上空まで吹き飛ばされてしまう。

上空にまで武靈活動限界範囲があるらしく、途中で唐突にキバを吹き飛ばした黒い光線と、キバが掻き消える。

まずい！

大慌てでキバを再具現化、同時に頂喜武蔵と自分の間にシールドサーバントを展開して、オーバードライブ。

ほぼ同時に、頂喜武蔵から黒い光線が撃ち出され、シールドサーバントの黒いシールドと相まって少しの間、視界が塞がれるが……
…今のはかなりヤバかった。

思わずため息を吐くと共に、黒い光線を防ぎ切ったシールドサーバントがオーバードライブの影響で霧散。

再び対峙する頂喜武蔵は………何故か笑っていた。

それも、再び悪寒が走る様な、何かがある笑みを。

「てめえに見せてやるよ！俺の武霊の切り札を！」

そう叫ぶと共に、頂喜武蔵は身に纏う武霊をオウキからガチャポマンに変えた。

意味が分からないが、その行為に嫌な予感を感じ、キバを突撃させる。

キバの突撃が届くより早く、頂喜武蔵は次の行動に、予想もしていなかった行動に移った。

頂喜武蔵は、自分が身に纏うガチャポマンの胴体に、無数の武霊のガチャポンが入った部分に思いつきパンチを入れ、破壊。

それにより、中に入っていたガチャポン達がぼろぼろと零れ落ち

………次々と勝手にひら………おいおい！まさか！？

目の前で起こっている事に、俺は瞬時にある可能性を思い付いた。複数の武霊を借りている状態のガチャポンマン。

だが、実際は一体一体しか取り出せない。

取り出せないが、今みたいに容器ごと壊して、中身を全て取り出したら……どうなる？

……答えは決まっている。

ガチャポンマンの姿が瞬時に変容し始める。

ぐにやぐにやと怪獣やロボットやヒーローやありとあらゆる架空の存在の粘土をこねくり回しているかの様な姿に……。

瞬間、突撃していたキバが急激に下降した！？

俺が何かを命令するより早く、キバは地面に激突し、大穴を開けた。

周囲に展開していたオウキ・キバのサーバント達も同様に急降下した事から考えて……俺が頂喜武蔵と最初に合った時に使われた重力増加の武霊の能力。

……つまり、『頂喜武蔵が借りた全ての武霊の能力を使える化け物』になる。

さて……どうしたもんかな？

俺はキバの具現化をいったん解き、再具現化しつつ、深いため息を吐いた。

一体何人ぐらいの武霊使いから武霊を強制的に借りているのかは知らないが、それら全てを使えるとなると……

頂喜武蔵の周りに炎の鳥やら、電撃の塊やら、これでもかって感じに様々なものが具現化する。

同時に、ウィングブースターの負荷が強まり、重力が増し始めるのを感じた。

くそ！広げられるのか！重力増加の範囲……ん？重力増加？ふっと思つて、下を見る。

頂喜武蔵の下の建物が、急激な部分重力増加で歪み、一部が壊れ始めているが見えた。

……このまま町の上はまずいか。どこに町の人達が避難しているか分からなし、調べる事を失念していた。このままじゃ知らず知らずの内に巻き込みかねないな………とりあえず、

「キバ！エアバイクモード！」
逃げよ。

????

頂喜武蔵が借りている武霊全ての能力で攻撃しようとした時、夜衣斗はキバをバイクにし、乗り込んで海の方へと逃げてしまう。

地上で見せたバイクモードと若干違い、ウイングブースターに、後部ブースターが複数現れている。

そのせいか、複数の武霊能力を同時に使って飛行速度が上がっているはずの頂喜武蔵は直ぐには追いつけず、結局は海の上へと戦いの場が移る事になった。

海の上で止まった夜衣斗は、直ぐにキバから降り、バイクモードを解除してオーバードライブ。

そして、頂喜武蔵が追いつくのを待つ。

その姿を目撃した頂喜武蔵は、獰猛な笑みを浮かべる。

（なめたまねをしやがって！）

「どこに移動しよう！俺を殺せねてめえに、勝ち目なんかねえんだよ！」

夜衣斗と再び対峙した頂喜武蔵はそう叫ぶと同時に、今まで以上に大量のサーバントをこちゃませ武霊から射出。

そのサーバントの姿は、こちゃませ武霊と同様にぐちゃぐちゃになっており、とてもサーバントだと思える様な姿ではなかった。

それに何を思ったか、夜衣斗がため息を吐き、こちらもキバから今まで以上のサーバントを射出。

同時に、

「サーバント。オーバードライブ」

そうつぶやき、射出されるサーバントを次々とオーバードライブ

化させ、頂喜武蔵に向けて突撃させる。

突撃してくるキバのサーバント達を、ごちゃまぜサーバント達が迎え撃つ。

「ごちゃまぜサーバントは通常のサーバントではありえない、炎や冷気・電撃などを同時に身に纏い、放出しながらキバのサーバントに突撃。」

キバのサーバント達の方が圧倒的に攻撃力が上がっているオーバードライブ状態だと言うのに、ごちゃまぜサーバントに一機一機その動きを止められ、相殺されて霧散してしまう。

互いのサーバント達が相殺合戦を繰り返している中、キバは両腰の簡易格納庫を開き、そこから巨大なガトリングガンを一丁銃身だけ出し、頂喜武蔵に銃口を向ける。

「……………方針を変える。てめえは……………死ぬ」

ぼそつと、頂喜武蔵に聞こえるか聞こえないかの声で、夜衣斗が言い、頂喜武蔵はその言葉を鼻で笑った。

夜衣斗は、自警団連中と同種。

だから、ただのはったりだと。

そう思ったからだ。

だが、次の瞬間、

ガトリングガンの銃身が高速回転し始め、銃口から黒いレーザー光線が連射される。

寸分変わらず、頂喜武蔵に向け。

銃身が回転し始めたのを確認した頂喜武蔵は、同時に悪寒を感じ、反射的に周囲に強力な重力場を形成させた。

それにより、レーザーは曲がり、頂喜武蔵に当たらなかつたが、直撃していれば確実に死んでいた。

「てめえ！」

殺す気か！

そう言うより早く、後ろで爆発音がする。

ただの爆発音ではなく、水上のだ。

町の方へレーザーがそれたと思っていた頂喜武蔵は思わず背後を確認すると、いつの間にか、オーバードライブしたシールドサーバント達がシールドを張って展開されており、それによってレーザーが海の方にそらされたのは一目瞭然だった。

しかも、それだけでは留まらず、レーザーにより生じた水蒸気が、不自然に上空にまで上昇し、視界を塞ぐ。

僅かに見える海面には、ウィザースーバントがいるのが見え、水蒸気の上昇はそれによるものだと分かるが、その真意が分からず困惑する頂喜武蔵。

だが、直ぐに、思い出す。

夜衣斗は、「方針を変える」。

そう言ったのをだ。

ぞわつと、体毛が逆立つ感覚。

恐怖ではない。

むしろ、歓喜。

頂喜武蔵にとってあらゆる負の感情は、本能を奮い立たせ、満足させる快樂。

特に殺意は、その最たるもの。

両手に大剣を生じさせ、勘に任せて上に構える。

その勘は的中し、両腕に強い衝撃。

キバのホーンブレードを受け止めた頂喜武蔵は強力な斥力を生じさせ、キバと同時に水蒸気を吹き飛ばす。

そして、水蒸気に視界が塞がれる前と同じ場所にいた夜衣斗に片手の剣を向ける。

「いいぜ！てめえがそうなら、やろうじゃねえか！殺し合いをよ
お！！！！！！」

そう叫び、歓喜の笑い声を上げながら、頂喜武蔵は夜衣斗に向かって突撃した。

第三章 『奪われたオウキ』 78

夜衣斗

やたらと喜んで襲い掛かってくる頂喜武蔵。

……… 一体何なんだこいつ？……… 訳が分からない。

まともに近付けば重力操作能力に捕まるので、逃げる。

キバと二手に分かれてだ。

当然、頂喜武蔵は俺を追ってくるが、その背後をキバに撃たせるので、こつちを追う事に集中出来ない。

その間に、俺は頭の中で中々纏まらない考えをまとめる。

「方針を変える」

……… まあ、確かにそう言った。

だが、後の「死ぬ」は……… ただのはつたり。

当然、頂喜武蔵を殺す気はさらさらない。

殺す気でないからないと、ああいう奴は、牽制する為の攻撃が牽制にすらならないし、今の頂喜武蔵なら、あの程度の攻撃を繰り返しても、防ぐか避けるかすると思いい、それに賭けた。

実際に、その賭けはうまくいき、頂喜武蔵はキバの攻撃を警戒している。

……… まあ、あれで死んでも……… つと思う心は無いわけではないが………

まあ、そうは思っても、大原亮が現れないなら、方針を変える必要はある。

俺が頂喜武蔵をどうにかする方向にだ。

取れる手段は二つ。

一つは身に纏った武霊を貫通する攻撃をし、気絶させる。

ただし、この場合は、殺さない手加減が必要になり、ある程度疲弊させるか、油断をさせないといけない。

もう一つは……… いったん殺し、ヒーラーサーバントで治療す

る。

これなら一様……人殺しにはならない。ならないが、いったんであろうと殺しは殺した。それが俺にどんな影響を与えるか……正直、悪い予想しか浮かばない。

あんなクズ野郎の為に、毎晩うなされるなんてごめんだ。

それに、この場合は、あのごちゃませの武霊のはぐれと相手をしなくちゃいけない事になる。

あれのはぐれ……まあ、何にせよ。こっちは最後の手段だ。

そもそも、あの状態の頂喜武蔵に攻撃を通すとすると、下手をしたらヒーラーサーバントが使えないほど肉体が破損する恐れが強い……どっちにしる難しいなら、何とか気絶させる手段を選ぶべきだろうが……。

後部カメラで追ってくる頂喜武蔵の姿を注視する。

……何度見ても気持ちの悪い姿だな……思わずため息が出る。あれがあいつの心を形作っているイメージの一つとなると……

頂喜武蔵の精神がどんなものか、想像知れる。

強引に他人を屈服させ、壊し、その様子を楽しむ。

……これが快樂の悪意だと言うのなら……。ふつと、子供が無邪気にアリの巣を潰す様子や、昆虫の羽をむしる話を思い出した。

ああいう事をする子供が、そのまま成長した姿って事か？

……ってか、今はそんな事を考えている場合じゃないな。早く手を打たないと、こっちの限界が……それにしても……全然意識のぐらつきが起きないな……さっきからオーバードライブとか、結構無茶しているはずなんだが……本当にどう言う事なんだ？これは？……まあ、それこそ今考えるべき事じゃないか。何であれ、こっちが有利な、奴が武霊使い強化薬を使っているなら、イーブンな条件だ。

さっきから終わりだ終わりだと言って置きながら、一向に終わらないのも何だし……本当に終わらせるぞキバ！

???

それまで逃げ回っていた夜衣斗が唐突に反転し、頂喜武蔵に向け二丁拳銃を連射しながら突撃してくる。

撃ち込まれた銃弾の弾道を重力操作で外し、突撃してくる夜衣斗に向け、電撃の塊を吐く。

高速で迫る電撃の塊を、シールドサーバントで防ぎ、更に接近する夜衣斗。

同時に、キバもホーンサーバントを伸ばして、接近し始める。

今までの戦い方から夜衣斗が無策で突っ込んでくるとは思えなかった頂喜武蔵は警戒して、一人と一体を近付けさせない為に、重力増加の能力を発動させた。

その瞬間、上空から何からが降り、頂喜武蔵が身に纏っている武霊を切り裂き、強烈な電流が生じる。

途端に激痛に襲われる頂喜武蔵。

レベル3は武霊を身に纏っている分、具現化率が高くなり、より武霊の本来の力を発揮出来るとされている。だが、反面、身に纏っていると言う最も近い具現化の仕方をしているせいか、その感覚まで武霊使いは共有する事になる。

更に今の頂喜武蔵は借りている全ての武霊を無理矢理具現化していた。

その為、通常の具現化よりその身体は脆くなっている。

切り裂かれた場所から更にひびが入り、頂喜武蔵その痛みまで感じ、絶叫した。

夜衣斗

俺が唐突に頂喜武蔵に接近して注意を惹き付けている間に、キバからソードサーバントを射出させ、気付かれない様に頂喜武蔵の上に展開。

そして、キバと一緒に更に接近して頂喜武蔵に重力増加の能力を

使わせる。

重力増加と同時に、増加した重力に身を任させてソードサーバントを急降下。

電撃を内包した刃を展開したソードサーバントは、狙い違わず、頂喜武蔵が身に纏っているごちゃませ武霊を切り裂き、電撃を放出するが、少し浅かったらしく、頂喜武蔵まで電撃が到達しておらず、気絶しない。

だが、レベル3であるせいか、切り裂かれたごちゃませ武霊の痛感を感じたらしく、絶叫。

一瞬、怯んだが、重力増加が解かれた瞬間を見逃さず、俺はそのまま突撃し、急速に再生する武霊の傷口に両手の拳銃を突っ込む。

場所は丁度、頂喜武蔵の胸の上。

「てめえ！」

痛みで顔を歪めている頂喜武蔵が俺に凄まじい表情を向ける。

三度目の正直！

「……………これで終わりだ頂喜武蔵！」

俺はトリガーを引いた。

第三章 『奪われたオウキ』 79

???

至近距離で撃ち込まれた弾丸は、僅かな武霊の装甲を貫通し、頂喜武蔵の身体に着弾。

瞬時に、弾丸から電流が発生し、頂喜武蔵の身体を駆け巡る。

「っが！」

駆け巡る電流により、意識が遠のく頂喜武蔵。

気が付くと、頂喜武蔵はどこか見覚えのある駄菓子屋の前にいた。

「んだこりゃ？」

そこは頂喜武蔵が頂喜武蔵が子供の頃に通っていた駄菓子屋。

そして、快樂の原点。

ここで頂喜武蔵は同世代の子供達を相手に、

暴力を

盗みを

脅しを

ありとあらゆる負の快樂を覚えた。

本能が快樂の奴隷となり、理性が快樂を更に求める様になった。

だからこそ、ここが頂喜武蔵の原点。

そして、武霊のイメージの基。

頂喜武蔵は周りを見回し、直ぐにここが現実の世界ではないと理解した。

何故なら周囲の光景が所々歪み、揺れているからだ。

「っは！さしずめ心の世界ってか？」

なんとなしにそう口にし、頂喜武蔵は視線を駄菓子屋の前に向けた。

そこには、幾つかのカプセルトイが置かれている。

頂喜武蔵はこれをやる為に、最初に暴力を振るい、返さない借金

を同世代の子供に強要した。

まさしく、頂喜武蔵が頂喜武蔵としてなる切っ掛けのカプセルトイ。

「……………ツチ！一体何だつてんだよ」

現状が訳が分からず過ぎる頂喜武蔵は、なんともなしにそのカプセルトイに手を乗せた。

瞬間、手の感覚が消える。

「あ？」

視線を自分の手に向けると、そこには何もなくなっていた。

そして、先程までカプセルトイがあつた場所に、自身の武霊ガチャポンマンがいつの間にかいる。

「こいつはど」

どう言う言う事だ？

そう言おうとした頂喜武蔵より早く、唐突にガチャポンマンが、

「あああああああああああああああああ！」

叫び出した。

耳をつんざく、叫び。

それは、まるで苦しみ、自身の主である頂喜武蔵に助けを求めているかの様な叫びだった。

実際、叫びながら、ガチャポンマンは、ゆっくりとその身体を頂喜武蔵に近付け、手を伸ばす。

「うぜえんだよ！」

ガチャポンマンから差し出されるその手を、頂喜武蔵は残った手で振り払おうとした。

だが、ガチャポンマンの手に頂喜武蔵の手が触れた瞬間、まるで吸収されるかの様にその手が消える。

「何だつてんだ？何だつてんだよ！？」

両手を失った頂喜武蔵はそこで初めて恐怖を感じた。

そして、思い出す。

手下達が、自身の武霊に喰われる姿を。

今消えた頂喜武蔵の両手は、まさしくそれと同じに見えた。じりじりと近づくガチャポンマン。

恐怖を感じながら、背を向けずに後ろにゆっくり下がる頂喜武蔵。背を向けた途端、一気に襲い掛かられる気がしたからだ。それにより頂喜武蔵はガチャポンマンの姿をよく見る事になり、その身に起きている異常を発見することになった。

ガチャポンマンの身体には所々にひびが入り、そこから水のようなものが絶えることなくあふれ出しており、その水が出る度にひびを増やしていた。

「なんなんだ！何が起きてるって言うんだ！？」

「やっぱりあいつの武霊も暴走し始めましたね」

複数ある遠見の鏡の一つで、精神世界の頂喜武蔵を見る呼衣。

「エネルギー源を強制的に魔力に切り替えさせたのがいけなかったのかしら？それとも急激に増えた供給量に耐えられなかったのかしら？」

冷たい目を相変わらずだが、どこか楽しそうに自問している。

「壊れた場所を修復しようとする本能的に本来のエネルギー源である意志力を求めている事と、壊れ始めた所から魔力が流れ出している事からして、そのどちらでもある可能性がありそうね……………問題は暴走する時間差とその具現化レベルかしら？最初のは、早々に耐え切れなくなつて、レベル4になり暴走。こっちはレベル3を維持し続け、意識を失った瞬間に暴走……………ふふ。面白いわ」

そう言つて、冷たい目のまま笑みを浮かべた呼衣は、別の鏡に視線を映す。

そこには夜衣斗と、気絶し、シールドサーバントに寝かされている現実世界の頂喜武蔵の姿が映っていた。

「実験データは十分。後は、回収か処分かだけでも……………どうやら、あなたが処分してくれる事になりそうよ」

呼衣が聞こえるはずのない言葉を夜衣斗に向けて言った時、頂喜

武蔵の身体に変化が起きた。
精神世界同様に両手が消え、そして、

第三章 『奪われたオウキ』 80

夜衣斗

重力操作を基点とした様々な攻撃。

電撃や炎・風に水。

ありとあらゆる攻撃が使える。

……… 確かにそれは厄介だが、それをうまく扱えなければ、それほど脅威ではない。

多分だが、あのごちゃませ状態を頂喜武蔵はそう頻繁にやってはいなかったのだろう。

だから、俺の反撃が思いのほかあっさり決まった。

ソードサーバントにより開いた場所に突っ込んで撃った両手の拳銃には、着弾の瞬間に人を気絶させる電流を流す『電撃弾』が装填されており、それによって頂喜武蔵は気絶。

電撃により短い悲鳴を上げ痙攣後、身に纏っていたごちゃませ武霊は消え、自然落下し始める頂喜武蔵。

シールドサーバントの柔らかい液体モードシールドで受け止めさせ……… 俺はほっと一息ついた。

終わった……… 終わったんだよな？……… いや、まだか

……… こいつに武霊封じの留置所に入れ……… ん？

何となく気絶している頂喜武蔵を流し見た時、妙な違和感を感じ、視線を頂喜武蔵に戻した。

最初、違和感の正体が分からず、眉をひそめていたが、だらりとシールドの上に置かれているその両腕の先……… その両手が……… 消えていた。

しかも、その消えている部分は、徐々に徐々に拡大している様だった。

何だこれ！？何なんだ……… これは？

訳が分からず、恐る恐る消えた手の場所に手を近付けると………

やっぱり何も無い。

初めて見る現象だが……やっぱりこれも武霊が原因だよな……
……だとしたら、ヒーラーサーバントじゃどうにもならないか……
……いや、流石にこのままはやばいよな……
そう思っただけでヒーラーサーバントをキバに出させようとした時、更なる変化が起きた。

じわっと半透明の何かが頂喜武蔵の身体から始まる。

それを見た時、ぞわっと背筋が寒くなると共に、ある現象を思い出した。

それは……はぐれ化。

死んでもいない、一辺に出てきてないなど、明らかに見た事があるはぐれ化と違うのに、何故かそれを思い出した。

ほぼ同時に、オーバードライブモードを解いたキバが俺の下から接近し、無理矢理俺を背負い、バイクモードになってこの場から離れる。

俺はそれに文句を言うより早く、PSサーバントの後部カメラに、頂喜武蔵が意識を失ったままレベル3になったのが映り……そのまま立ち上がり、身に纏う半透明のガチャポンマンにされるがままになっている……意識を失ったままの頂喜武蔵を見た。

……これは、どう見ても、武霊の暴走。別種のはぐれ化と考えるべきか……これを起こしている要因は、多分、勘だが、あの武霊使い強化薬なんじゃないか？……っと言うか、こんなはぐれ化があるなら美羽さんだって言うだろうし、前例がないなら、それ以外の要因は……多分、ない。

そう思った時、ガチャポンマンは、自らの身体をたたき割り、再びあのごちゃませ状態になろうとしていた。

まずい！

そう思って、反射的にキバのまだ収納していなかったガトリングガン使わせようとしたが、そこではっと気付いた。

今のガチャポンマンは、頂喜武蔵の命令で動いていない。

ガチャポンマンの意志で、暴走した武霊の、はぐれ武霊としての意志で動いているとするなら……牽制攻撃・気絶攻撃は無意味。そして、

???

レベル3の状態で、はぐれ化を起こし続けるごちゃませ状態のガチャポンマン。

その壊れた本能のまま逃げる夜衣斗を追い始める。

始まった追想劇を遠見の鏡越しに見た呼衣は、浮かべていた笑みを更に深める。

「さて、どうします黒樹夜衣斗？既に気絶している者を気絶させる事は出来ない。そして、そのままにしておけば、町に絶大な被害を出す」

キバに乗って逃げる夜衣斗の姿に、聞こえないと分かっているが問い掛ける呼衣。

「答えは決まっていますよね？」

逃げた先が町の上空になる事に気付いた夜衣斗が、その場で急停止し、反転。

呼衣はその夜衣斗が、拳を強く握り、うつむく姿を見た。

「そう。『殺すしかない』。そうでしょ？黒樹夜衣斗」

夜衣斗

ガチャポンマンを止めるには、頂喜武蔵を殺すしかない。

ぐらつと目の前が揺れた気がした。

ごちゃませ状態になったガチャポンマンがこっちを追い出したので、キバが急加速した影響かとも思ったが……いや、そんな思考で逃げるべきじゃないな……意味のない逃げでもあるし……正直に言えば、殺すと言う考えは、俺の中にあっても、実際にそれを実行に移す現実感は今までなかった。

何故なら、今の今まではあくまでそれは選択肢の一つであり、選

ばなければしないで済む話だったからだ。

だが、今は……………他に選択肢がない。

あまりの現実に、吐き気がして、くらくらしてきた。

はぐれ化を起こしているとはいえ、武霊の核はあの状態からするとまだ頂喜武蔵の中にある。

例え周りだけを削いだとしても、きっと直ぐに頂喜武蔵の中から新たに具現化する。

キバの進行方向に町が見えた。

このままだと町にレベル3のはぐれ化を起こしているガチャポンマンを誘導してしまう。

つく！止まれキバ！

キバは俺の命令に従い止まり、俺が何か命令するより早く反転した。

迫るごちゃませガチャポンマン。

その中にある頂喜武蔵の両腕の消滅が、更に進んでいるのがはっきりと見えた。

きっと、このまま何もなくても、頂喜武蔵は……………死ぬ……………

いや、もしかしたら、もう死んでいるのかもしれない。

……………くそ！くそ！本当に……………本当に頂喜武蔵を……………殺すしか手段は無いのか！？

うつむき、ぎゅっと拳を握りしめ、俺は心の中で絶叫していた。

そして、迫るガチャポンマンに向けて、攻撃命令を出そうとした時、

「あるだわよ！あるだわよ夜衣斗！殺さずに済む手段が！」
そう言う美魅の声が唐突に聞えた。

????

「あたいは何の為に夜衣斗の心の中に戻ったんだわね……………」
つと美魅は夜衣斗の心の中・公園のブランコに座りながらたそがれていた。

「自分の口調も忘れて焦ってたあたいがアホみたいだわね」
夜衣斗がキバを手に入れば、戦闘能力も特殊能力も劣る美魅の出番はない。

そもそも、戦いの場は空中戦に切り替わっている。
これでは飛行能力のない美魅はますます出番がない。
だからこの場に留まり、たそがれているわけだが……………」

美魅の隣のブランコには、サヤが座っており、美魅のつぶやきを面白そうに笑った。

その反応に、美魅が疑問の眼を向けると、サヤは、
「私は言わなかった？あなたの魂は契約により夜衣斗に繋がっている。そして、あなたは何？って？」

再びの問いに、意味が分からない美魅は首を傾げるしかない。
だが、その時、夜衣斗の心の叫びが公園に響き渡った。

「本当に頂喜武蔵を……………殺すしか手段は無いのか!？」

たそがれていたせいで、外の状況をよく見ていなかった美魅は、何故夜衣斗がそう絶叫したか分からなかったが、だが、その瞬間、美魅はサヤの問いの意味を理解した。

そして、大声で叫んだ。

「あるだわよ！あるだわよ夜衣斗！殺さずに済む手段が！」

夜衣斗

美魅の言葉を頭の中で理解した瞬間、俺はキバから飛び降り、
「頼むキバ！時間を稼いでくれ！オーバードライブモード緊急解

禁！」

俺の命令に、一気にオーバードライブモードになったキバは、突撃してくるガチャポンマンに突進。

激突する二体。

はぐれ化をしているからなのか、先程は脆かったはずのガチャポンマンが、オーバードライブ中のキバの体当たりを平然と受け止めた。

よく見ると、表面に何か力場の様なものが発生しているらしく、キバはガチャポンマンの身体に触れる直前で止まっている。

一瞬の拮抗の後、不意に二体が急降下し始めた。

キバが覆いかぶさる様にして落下にガチャポンマンを巻き込んでいる様からして、ガチャポンマンが重力増加を使ったのは間違いないだろうが………どれほどの重力が増加されているのか、瞬く間に海に落ち、大きな水柱を上げる。

………あんな速度で落下して、頂喜武蔵は大丈夫なのだろうか………正直、どうでもいいと言えばどうでもいいが………いや、よくないな………ああもう！何であんな奴の命をどうこう考えなくちゃいけないんだ！………とにかく、美魅！

「はいだわよ」

殺さずに済む手段って言うのは？

「説明するより、実際にやってみせるだわよ」
やってみせる？

その疑問の答えは………直ぐに出た。

何だか妙な、むずむずする感覚を頭と尻に感じ………条件反射的に頭に手をやった。

なんか頭にあった。

眉を顰めつつ、尻にも手をやると………。
こっちにもなんかあった。

………。
近くを飛んでいたスカウトサーバントに俺の姿を取らせ、映像を

送って貰い…………俺は、
「なんじゃこりゃあああああ!？」
と叫んでいた。

????

夜衣斗の様子をずっと見ていた呼衣は、夜衣斗の身に起きた唐突な変化に、啞然としていた。

そして、少しずつ肩を震わせ、終には堪え切れなくなったのか、大爆笑し始める。

どうやら今の夜衣斗の姿がっぼだったらしく、しばらくまともに夜衣斗の姿を目で追えなくなる呼衣。

呼衣の前にある鏡には、『白い猫耳としっぽを生やした夜衣斗』が映っていた。

夜衣斗

……………美魅さん？

「に…………つぷ…………似合ってるだわよ」

嘘つけ！何やってるんだあんたは！？直ぐに元に戻せ！今直ぐ戻せ！

「お、落ち付くだわよ。これはただの猫化じゃないだわよ」

はあ！？俺にはふざけている様にしが見えないが!？

「思い出すだわよ夜衣斗。あたいは何だわよ？」

それが何だつて言うんだ？そんなの化けね……………心に潜る化け

猫……………まさか!？

「そう。そのまさかだわよ。あの契約書は、互いの力を貸し合わせるものだっただわよ。つまりだわよ。夜衣斗に、あたいの力を貸す事も出来るんだわよ。そして、その証が、今、夜衣斗の頭とお尻にあるあたいの耳と尻尾だわよ」

……………つまり……………頂喜武蔵の心の中に潜って、武霊の核を『直接壊しに行ける』って事か!

???

重力増加により海の中に落とされたキバは、落下に巻き込んだガチャポンマンの頭部に噛み付き、振り回していた。

振り回されながらガチャポンマンは身体から強烈な電撃を発生させる。

だが、オーバードライブモード中のキバにはその電撃は大してダメージにはならない。

しかし、電撃により海水が分解され、水素と酸素が大量に生じ、そこにガチャポンマンは自らの身体に炎を生じさせた。

瞬間、生じる大爆発。

海上に二度目の大きな水柱が生じ、海中では強烈な爆発の影響で互いに違う方向へ吹き飛ばされるキバとガチャポンマン。

ガチャポンマンは吹き飛ばされながら、今度は周囲の温度を一気に下げ始め、周囲の海水を急激に凍らせる。

海水が凍る気配を感じたキバは、氷に閉じ込められる前に海から飛び出し、空に逃げた。

空にキバが逃げると同時に、既に出来ていた氷が割れ、無数の鋭い錐になってキバへと一斉に射出される。

キバは氷の錐を避ける事も防ぐ事も出来ず当たってしまうが、オーバードライブの装甲には傷一つ付かない。

だが、氷の錐の影響で飛行進路が変わり、その進路に向け、海中から飛び出したガチャポンマンが極大の光線をまるで剣の様に振るい吐く。

一瞬光線に巻き込まれ吹き飛ばすキバ。

光線により片翼が壊れたウィングブースターを何とか使い体勢を整えるキバ。

キバの全身の黒い装甲のほとんどが吹き飛ばされ、本来の装甲である白銀が見える状態になっていた。

そのキバに追い打ちを掛ける様に再度光線を放とうとガチャポン

マンがその口を大きく開けた時、その背後に唐突に夜衣斗が現れる。

ガチャポンマンの背後に夜衣斗が現れた事を目撃した呼衣は、驚きで目を見開いた。

今まで夜衣斗は空にいた。

いや、今でも空にいる。

つまり、空にいるのは偽者と言う事。

「いつの間に……………」

そうつぶやきながら、呼衣には心当たりがあり、いつもの自分らしくない先程の大爆笑を思い出していた。

「……………あれは卑怯よね」

などつぶやきながら、現れた夜衣斗が何をするか見ていた呼衣のその目が、再び大きく見開かれた。

何故なら、夜衣斗がガチャポンマンの背中に飛び込み、まるで水の中に入ったかの様にその『背中に入った』からだ。

第三章『奪われたオウキ』 82

夜衣斗

二度目の水柱が上がると同時に、俺は既に展開していたドッペルゲンガーサーバントで自分の偽者を作り、PSサーバントのステルス機能で姿を消しつつ二体の戦場に接近。

途中、とんでもない攻撃の連続に肝を冷やしつつ、何とか気付かれずにごちゃまぜガチャポンマンの背後に接近出来た。

キバ！俺が戻るまで、ガチャポンマンを引き付けて置いてくれ。

心の中でそう思うと、キバは応えてくれた気がした……………どうも向こうが言葉を使えないと不安と言うか、不便と言うか……………まあ、そんな事より、行くぞ！美魅！

（了解だわよ。夜衣斗）

美魅の了承と共に何だか身体が酷く軽くなった感じがした。

……………例えるなら、全ての物理現象のくびきから解放されたと言うか……………

（飛び込むだわよ！）

ステルス機能を解き、一気にごちゃまぜガチャポンマンの背中、頂喜武蔵の背中に向けて、飛び込んだ。

次の瞬間、

俺は異様にぐにゃぐにゃしている町中にいた。

?????

夜衣斗がガチャポンマンに入った瞬間、一瞬だけその動きが止まった。

その一瞬を逃さず、キバはシールドサーバント数機をガチャポンマンとの間に展開。

同時にシールドサーバントをオーバードライブさせる。

動きが止まっていたガチャポンマンが、動き出し、光線を吐き出す。

だが、今度の光線は黒い、オウキのオーバードライブの力も加わった光線で、オーバードライブしたシールドサーバントでも耐え切れず、貫通してしまう。

それでも貫通まで僅かな間が生じ、その間にキバはウイングブースターを再構成し、黒いシールドを影に光線の射線軸から逃れた。光線から逃れたキバを確認したガチャポンマンは、全身にオウキの簡易格納庫を作り、歪なサーバント達を放出する。

キバもサーバント達を放出し、オーバードライブさせた。

空と海上でサーバント達に囲まれ対峙する。

「あああああああああ！！！」

ガチャポンマンの叫びと共に、歪なサーバントがキバに向けて突撃を開始する。

それを迎え撃つキバのサーバント達。

次々と対消滅するサーバント達。

そして、ガチャポンマンの中で、意識を失った頂喜武蔵の身体に更なる異変が起き始めていた。

夜衣斗

異様にぐにやぐにやした町の中を俺は歩いていた。

ちなみに、今も俺は猫耳状態。

少し違うのは、俺ごと誰かの心の中に入るのはかなりの負担らしく、心の中に入って早々、

「これはちょっと辛いだわね。集中しないと維持出来そうにないだわよ」

そう言っつて、以降何を言っても返事しなくなった。

……まあ、何であれ手探りで進むしかない事は事前に話してたし……まあ、

……何と言うか………こつも俺の心の中と違うとは………いや、

考えて見れば、俺のあの場所は特殊な場所なんじゃないのか……きつとあそこ以外の俺の心は……こんな感じなんじゃないのか？歩いていると、次の瞬間には町の光景から、どこかの校舎らしき中になったり、山の中になったり……そして、また町に戻る。

どうやら町が基礎っぽい……ん？なんか……どの光景になっても、ちよろちよると水が地面に流れているんだよね……これって、もしかして……魔力か？……って事は、この水の流れの先に魔力孔が？……俺のと全然量が違うな……そう言えば、君は莫大な量の魔力を得るだろうねって謎の老人が言っていたな……って言うか、ガチャポンマンの本体は何処にあるんだ？それらしきものは辺りにないし……考えて見れば、頂喜武蔵の肉体が武霊に吸収されていると言う事は、頂喜武蔵も直接的な接触を自身の武霊にしている可能性が高い様な……って、あの様子からすると死にかけていると考えるのが自然だな……そして、さつき俺が死に掛けた時、三途の川らしき所に勝手に行っていた……だとすると、もしかしたら、この先に？視線をちよろちよると流れてくる水の先に向ける。

……流れの先は、『外』と考えると、この先は『内』か……行ってみるか……あまり長時間は、キバも美魅も、どっちも持ちそうにないしな……。

俺はそう思い、水が流れてくる方向へと歩みを向けた。

PSサーバントの機能は、この精神世界の中でも有効らしく、外の、キバ対ガチャポンマンの戦いの様子は脳内ディスプレイで見ることが出来た。

その映像から、キバが少しずつ押され始めているのが見て取れ……そして、頂喜武蔵に更なる変化が起きている事に気付き……俺は走り出した。

ガチャポンマンの体内で意識を失っている頂喜武蔵の『足が、手に引き続き消え始めていた』からだ。

第三章 『奪われたオウキ』 83

?????

手に引き続き、足先まで消滅し始めた頂喜武蔵を体内に入れながら、ガチャポンマンは次の攻撃に移った。

背に異様な形になったウイングブースターを生やして飛行し、サーバント達が突撃する空中に向かって突撃する。

キバはガチャポンマンが近づく間にオーバードライブの再構成を開始。

だが、ウイングブースターにより飛行速度が上がったガチャポンマンは、瞬く間にサーバント達の戦場を抜け、キバに近付いた。

オーバードライブの再構成が間に合わないキバは、黒いホーンブレードを展開し、接近したガチャポンマンに向けて振るう。

ガチャポンマンは、自分に向けられて振られたホーンブレードを避けようとせず、更にキバに接近。

ホーンブレードの刃が、ガチャポンマンの右腕を斬り落とす。

それでもガチャポンマンは接近を止めず、終にはキバにその左腕が届くところまで接近した。

キバは前足でガチャポンマンを蹴り飛ばそうとするが、その足をガチャポンマンに掴まれてしまう。

瞬間、ガチャポンマンの手から超振動が発せられ、まだオーバードライブの装甲に包まれていなかったキバの足を粉碎した。

更に、斬られた右腕が瞬時に生え、キバは避ける間もなく喉を掴まれてしまう。

そして、右手から超振動が発せられた。

夜衣斗

どうも精神世界と言うのは、非常に不安定な世界らしく………今の頂喜武蔵の精神が不安定になっていると言う可能性もあるが………

…ふつと注意を他にそらすと、魔力の小川を直ぐに見失ってしまふ。それは、常に精神世界の光景が変化するのが原因なんだが……更に言えば、その変わる光景の中に……多分、頂喜武蔵の過去の記憶なんだろうが……様々な頂喜武蔵が現れ……正直、眉を顰める様な事ばかりしていた。

小学生ぐらいの頂喜武蔵が女性教師に暴力。中学生ぐらいの頂喜武蔵がサラリーマンを恐喝。高校生ぐらいの頂喜武蔵が警察官を拷問……あらゆる年で、あらゆる犯罪をし、それ全てに快楽を感じている様に、笑みを浮かべている。楽しそうに……

どの年の頂喜武蔵も、体格が年齢に合わない馬鹿みたいなかさなので、一瞬どれくらいか迷うが、格好と周囲の状況から大体は推測出来るが……恵まれた体格のせいで、こんな奴になったんだろうか？……いや、恵まれた体格や才能を持って生まれたからと言って、全員が全員そうなるわけじゃない……まあ、今まで俺の周りにそうやからが居なかった（もしくは気にならなかった）から……それが真実かどうかは分からないが……一般論だろう。

唐突に、さきほどまでいた廃工場らしき光景になる。

思わず立ち止まり、周囲を見回すと、頂喜武蔵とその手下達に囲まれるひよりさんがいた。

ひよりさんの様子からして、頂喜武蔵に忘却剤を服用される前、つと言うより、捕まる前の様だった。

そこで俺は先ほどとは違う別の意味で眉を顰めた。

俺はてつきり星波町の外で捕まり、星波町に連れてこられたと思っていたんだが……

そんな事を思っていると、ひよりさんは更に驚く事をした。いや、なつた。

何をしたのか、ひよりさんの姿がすつつと消える。

武霊能力！？いや、武霊を出している様子はなかった様な……驚く手下達を尻目に、頂喜武蔵はガチャポンマンを具現化し、あの重力怪獣にし、周囲の重力を増加した。

部下達が重力増加に巻き込まれて倒れる中、小さな悲鳴が何も無い所から聞こえ、そこに倒れるひよりさんが現れる。

笑う頂喜武蔵に、青ざめるひよりさん。

そこで、光景が変わった。

……まあ、あそこで光景が変わらなくても……… 続きは容易に想像出来る。

また、頂喜武蔵に対する怒りが再燃し始めた。

ここで落ち付かせないと……… この場所で何をするか分からないな………。

俺は怒りを鎮める為に、深呼吸をする。

美魅にここに入る前に、

「心の中の何かを壊したり、触ったりする際は注意するだよ。

そこにあるものは全て、その者の心を構成するものだよ。だから何かをすれば、必ず潜った相手に影響が出るだよ。あたいは、それを利用して、星波町の人間の不安とかを取り除いたりしてたわけ……… まあ、今はそんな事は関係ないだね」

つと言われていた。

だから、迂闊に触ってないし……… 怒りにまかせて周囲を破壊する訳にはいかない。

ここに入った目的は、あくまで、ガチャポンマンの核を破壊する事……… つて、今気付いたが……… 武霊の核ってどんな形をしているんだ？

……… まあ、俺の心の中を照らし合わせれば……… 女の子の姿をしているとか？……… いや、そもそも、あの女の子は、喋っていた。武霊は喋れない事を大前提にすると、あの女の子達は武霊の核である可能性は低い気がする……… じゃあ何なのか？つて話になるが……… まあ、先に進めば分かる……… か？

そう思った俺は、魔力の小川を辿る事に集中。

そして、現実世界でキバが喉を掴まれ窮地に陥った時、俺の目の前に駄菓子屋が現れた。

第三章『奪われたオウキ』 84

????

ガチャポンマンの超振動により、オーバードライブの黒い装甲に覆われていたキバの喉は爆発した。

それにより、吹き飛ばされる二体。

互いがウイングブースターを広げ体勢を立て直した時、キバは喉のほとんどが壊れケーブルなどの内部が露わになり、ガチャポンマンの右半身は体内の頂喜武蔵に後もう少しで届く所まで消し飛んでいた。

キバの喉は応急処置で、白銀の液体が喉だった部分を覆い硬化。更にその部分をオーバードライブの装甲が出来ようとするが、途中で止まる。

これは今の喉の装甲があくまで応急処置の装甲である為で、常に本来の装甲にダメージを与えるオーバードライブの装甲には耐えられないが為、自己防衛システムが作動した。

喉と同様に、破壊された足にも同じ事が起きているが、足の場合には、破壊された部分を塞いだだけで、足の修復までは出来ていない。装甲同様に、いや、それ以上に修復には時間が掛る。

二つの個所にオーバードライブの装甲が展開出来なくなったキバに対して、ガチャポンマンの方は瞬く間に消失した部分が生え、元通りになってしまう。

ガチャポンマンの圧倒的優位で対峙する二体。

一瞬の間を置き、ガチャポンマンの全身から黒い霧が発生する。

オウキのオーバードライブの様だが、黒い霧は装甲にならず、ただガチャポンマンの周囲を漂うだけだった。

だが、キバが牽制の為に突撃させたソードサーバント達が黒い霧に触れた瞬間、大爆発が起きる。

爆風に一瞬体勢を崩されたキバ。

そのキバの周りに爆風に乗った赤い霧が纏わり付く。

次の瞬間、赤い霧はガチャポンマンになり、キバの背中から抱き付けて腕・足を使ってキバを締め上げる。

足の締め上げはオーバードライブの装甲で逆にガチャポンマンにダメージを与えていたが、腕はオーバードライブの装甲がない喉に掛っていた為、強烈な締め上げを受けてしまう。

キバは息をしているわけではないので窒息の問題はないが、このままでは首を押し折られかねなかった。

音を立てて喉の応急装甲が壊れ始めるが、キバは同時に腰の簡易格納庫を開き、そこからアームに繋がった剣が飛び出し、ガチャポンマン体内の頂喜武蔵に当たらない様に足・腕とウイングブースタを切り裂いた。

斬り飛ばされ、霧散するガチャポンマンの両腕両足・ウイングブースター。

キバはガチャポンマンの胴体により押さえ付けられていたウイングブースターをガチャポンマンへと無理矢理向け、最大出力で点火する。

吹き飛ばされるガチャポンマンは、吹き飛ばされながら、斬り飛ばされた両腕両足を再生。

同時にガチャポンマンは重力増加を使用し、キバに向けて急降下。避けようとするキバだったが、ガチャポンマンが斥力を発生させた為、意志に反してガチャポンマンに引き寄せられてしまう。

ガチャポンマンが両手を剣にし、迎え撃つキバの剣を受け止める。キバは肩の簡易格納庫から可動銃身を出し、ガチャポンマンの両肩を狙おうとするが、その両肩からもう一对の腕が生え、射線軸をずらされてしまう。

銃身から撃ち出された銃弾が、空を切ると同時に、キバを巻き込んだ更なる重力増加を開始するガチャポンマン。

一瞬拮抗するが、耐え切れず、急激に落下し出す二体。

落下する最中、ガチャポンマンは肩の両手から超振動を発し、持

ついていた銃身を破壊する。

それと共に、頭部・腹部に巨大な口を出現させ、光を収束させ始めた。

キバが壊れた可動銃身を破棄し、肩の簡易格納庫から新たな武装を出そうとした瞬間、二体が海に落ち、強烈な閃光と共に、巨大な水柱が上がった。

夜衣斗

目の前に現れたその駄菓子屋は、他のどの光景より若干安定していた。

……………そして、魔力の水が流れ出るガチャポン機が店の前に置かれている。

なるほど……………ここがガチャポンマンの基となったイメージって訳か……………。

何の変哲もない駄菓子屋だが、周囲を見回すと、かすれたりゆがんだりしながら幼い頃の頂喜武蔵が悪行を行うシーンが現れては消えていた。

……………何と言うか……………ここまで快樂に忠実に動く人間は初めてだ……………。

俺はため息を吐きながら、魔力の水が流れているガチャポン機を改めて見た。

どこから水が出ているのかとガチャポン機をよく見ると、その全体にひびが入っており、そのひびから水が出ている様だった。

……………これが武霊の本体って事なのだろうか？……………だとすると武霊は基となった武霊使いのイメージと同化してその姿になるって事か？……………待てよ？そうになると、やっぱりあの女の子達の正体が不明になるな……………マイマスターって言ってたから、俺を主人としている事は確かだろうが……………まあ、少なくとも、俺に与えられたって言う運命を変える選択と関係あるんだろうが……………とりあえずそれを考える事は後回しにしよう。思考するにはあまりにも情報が少

な過ぎる。……つで、ガチャポンマンのこの様子からすると、武
霊使い強化薬により、武霊の許容限界を超えた意志力……じゃな
いな、どう見ても魔力が漏れ出ている……人は、魔力孔から根源
意志力を得て、己が魂を構築し、意志を持ち、意識を得て、意志力
を生じさせる。そして、余剰となった根源意志力が魔力になる……
……つてあの謎の老人が言っていた事からすると、普通の人間は魔力
を得られるほど魔力孔が……何だか矛盾した名前だが……得られ
ないって事になる……つとなると、武霊使い強化薬は、魔力孔を
無理矢理広げ、武霊使いに魔力を得られさせるものって事か？そし
て、通常人の意志力を糧としている武霊は、急激に得た魔力により
壊れ……壊れた部分を治す為に、本来の糧である意志力を求め、
壊れているが故に加減が出来ず、もしくは意志力を得ても間に合わ
ないスピードで壊れている為、結果自身武霊使いを喰らってしまう
特殊なはぐれ化を起こす……そんな所だろうか？……もし、この
考えが正しければ、意志力と魔力は同じ物で出来ていながら、その
性質は違うって事になるな……そして、意志力の消費を感じな
い今の俺の武霊達も同じ様に魔力を糧にしている可能性が高い……
……それはつまり……俺にも同様のはぐれ化が？……まあ、
考えても仕方がないか……それが起こった時は起こった時だし……
……少なくとも、これを破壊すれば、今回の騒動は全て終わる。
……そう思った俺は、右手に意識を集中。
すると、美魅の人間形態の様に剣の爪が現れた。
今の俺ならこれも出せると美魅が言っていたので、試しにやつて
みたんだが……よくよく考えて見れば、これは武霊能力ってわけ
じゃないわけだから、これ単独で使つと、忘却現象に適應されず、
俺の記憶に残るんじゃないんだらうか？……まあ、武霊と関わら
ない事に美魅の力を借りる事態になる事はない……だらうから……
……まあ、問題はないかな？
……そう思つて、俺は剣の爪が出た右手を振り被り、ガチャポン機を
切り裂こうとした。

その瞬間、俺は何かと呼ばれ……この感じは……オウキ？
何だかひさしぶりの感覚は……目の前のガチャポン機から感じ
た。

俺は眉を顰め、ガチャポン機を再びよく見ると……ガチャポン
機に入っているカプセルの中に、オウキのミニチュアが入っている
事に気付く。

……考えて見れば、当然と言えば当然な話だ。今、オウキはガ
チャポンマンに奪われている訳なんだから……だが、ただたんに
奪われている訳じゃなく、『貸し』奪われているだ。だから、ガチ
ヤポンマンを破壊すれば返ってくるって思ったんだが……今のオ
ウキの呼び掛けは……まるで「止めて」と言っている様な感じ
だった。……まあ、言葉じゃないから何とも言えないが……ん？

なんとなしに視線をオウキの隣に向けると、そこに……頂喜
武蔵が入ったカプセルがあった。

????

海面にぶつかるると同時に、ガチャポンマンは頭部と腹部の口から光球を発射した。

ゼロ距離から放たれた光球。

だが、キバは光球が放たれる直前で、肩の簡易格納庫からアームの付いた盾を出し、自身とガチャポンマンの間に滑り込ませ、シールドサーバントより強力な力場シールドを展開。

放たれた光球はシールドに直撃し、二体が海に入ると共に大爆発を引き起こす。

その爆発により、ガチャポンマンは上空へ、キバは海中へと吹き飛ばされる。

海底に叩き付けられたキバの姿は、シールドで防いだと言うのに、ぼろぼろになっていた。

両肩・両腰から出したシールドアーム・ソードアームは壊れ、アームだけになり、ウイングブラスターは格納庫ごと壊れ、背中を中心にオーバードライブの装甲がなくなり、露わになった本来の装甲が溶けている。

満身創痍のキバだが、シールド・ソードのアームを破棄し、シールドサーバントを大量に出す。

そして、シールドサーバントを階段の様に展開し、三本の足で掛け上がり、海面に出る。

空では、キバと同様に至近距離から爆発を受けたガチャポンマンが吹き飛んだ四肢と体表を急速に再生していた。

そのガチャポンマンに、キバは一気に接近し、後回りに回転して後ろ足で蹴り落とす。

キバの蹴りを受けて落下するガチャポンマンだったが、海面直前で身体の再生が終わり、落下がピタリと止まり、追撃を掛けるキバ

に光線を吐き付ける。

迫る光線を、横に飛んでかわすが、かわした先に展開したシールドサーバントにガチャポンマンのサーバントが強襲、破壊されてしまっ。

着地する場所を失い、落下するキバ。

ガチャポンマンは全身から無数の銃身を出し、全て落下するキバに向ける。

キバは新たなシールドサーバントを出し、足場を作ろうとするが、その度にガチャポンマンのサーバントに破壊されてしまう。

避ける手段がないキバに向け、ガチャポンマンは全ての銃身から光線を撃ち出した。

夜衣斗

ガチャポン機のカプセルの中に頂喜武蔵を見付けた時、一瞬、俺の思考は停止した。

ここは頂喜武蔵の中だ。だから、記憶の中の過去の頂喜武蔵が現れる事があっても、頂喜武蔵が現れる事はないと決め付けていた様だった。

……まあ、考えて見れば、俺だって自分の中に自分として何度も行つた事が……どちらかと言うと連れてこられた感じだが……ある。なら、頂喜武蔵にも同じ事が起きていないとは言えないし、実際に起きている。

もしかしたら……俺の攻撃で意識を失つた際に、ガチャポンマンによりここに引きづり込まれてしまったのかもしれない。

まあ、何にせよ……どうしよう？

カプセルの中にいる頂喜武蔵は意識があるのか、何か喚き散らしている。

そして、その両手足は、脳内ディスプレイで見る現実世界の頂喜武蔵と同じ様に……消えていた。

喚き散らしているのは、徐々に消える範囲が拡大している為か……

……ざまあみろって感じもしないでもないが……このままガチャポンマンの本体を攻撃しても大丈夫だろうか？

そんな疑問が俺の中に生じた。

オウキなどの借りられている武霊は、あくまで本体は借りられている武霊使用の中にある可能性が高い。

じゃなければ、あの不良のリーダーが町境のトンネルで待ち伏せしていた理由がないんじゃないだろうか？

だから、ガチャポンマンの本体を破壊すれば、オウキは無事に戻ってくる。

……だが、頂喜武蔵の場合はどうだろうか？

ここは頂喜武蔵の中だ。

そして、カプセルの中にいる頂喜武蔵は、まず間違はなくリンクしているか、頂喜武蔵そのもの……この状態でガチャポンマンの本体を破壊すれば……最悪……殺してしまわないだろうか？

そう仮定すれば、オウキが俺を止めた理由は納得出来る。

……だが、そうとなれば……本当にどうすればいいのだろうか？

脳内ディスプレイで見るキバとガチャポンマンとの戦いは、ギリギリの所でキバが耐えてくれている様だった。

この様子だが、それほど時間は無い。

だが、どうすれば……ん？

逡巡していると、ぞわっと悪寒を感じた。

ほとんど条件反射的に、後ろに飛ぶと、目の前を何かが横切る。

更に連続して後ろに飛ぶと、何が横切ったか分かった。

それはガチャポン機から生えている腕。

俺が啞然としてみると、瞬く間にもう片方の腕が生え、両足が生え、その大きさが増した。

ただのガチャポン機が、ガチャポンマンになった……まあ、ガチャポンマンの本体だから当たり前と言えば当たり前だが……これはまずくないか？

下手に本体を破壊出来ない上に、こっちは今、武霊がない。
PSサーバントと美魅の能力で戦えなくもないだろうが、ベース
は一般人以下の俺だ。

………… ガチャポンマンに殺される想像しか………… 出来なかった。

第三章 『奪われたオウキ』 86

????

ガチャポンマンから撃ち出された光線がキバに当たる直前、両肩両腰の簡易格納庫からシールドアームを出し、多重にシールドを展開する。

無数の光線に当たり、吹き飛ばされるキバ。

しかし、シールドにより光線は防ぐ事は出来たが、飛行手段がないキバはそのまま一気に武靈活動限界域まで押し出され、消えてしまった。

キバが消えた事を確認したガチャポンマンは、ゆっくりと町の方へと身体を向ける。

そして、ガチャポンマン体内の頂喜武蔵の消滅は、胴体までに及び始めていた。

夜衣斗

「あああああああああああ！！！」

ガチャポンマンが叫びながら俺に飛び掛かってくる。

俺はウィングブースターを展開し、飛び上がって避けたが、瞬間、周囲の光景が変わり、空が地面になり、頭から地面にぶつかってしまった。

PSサーバントのおかげで痛みは無いが、空を飛ぶ勢いのままぶつかった為、地面に頭がめり込み視界が奪われる。

大慌てで頭を引き抜くと、頭上からガチャポンマンが落下してくるのを見て、更に大慌てで転がり、避けた。

そしてそのままウィングブースターを点火し、低空飛行でその場から離れる。

逃げる俺を追ってくるガチャポンマンだが、何故かそのままの姿で追ってくるので、あっさり引き離せた。

？……………ああ！そうか、考えて見れば、今、ガチャポンマンが借りている武霊は全て現実世界で使っている。だからこつちでは使えない……………つて事だよな？……………まあ、何にせよ。これでどうするか考える時間が稼げる。

そう思った時、キバがガチャポンマンが発した光線により武靈活動限界域まで押し出され、消滅してしまった。

ヤバイ！だが！これで！

飛行から浮遊に変え、追ってくるガチャポンマンと向き合った。

「キバ！」

俺の呼び掛けに、背後にキバが現れる。

ここは精神世界なので具現化する必要がない様で、そのまま俺の意識応えてガチャポンマンに飛び掛かり、踏み潰す様にガチャポンマンを押し込んだ。

?????

ウィングブースターを展開し、町に向けて飛び出すガチャポンマン。

その様子を鏡越しに見ていた呼衣は冷笑を浮かべる。

あまりにも予想通りの展開であり、十分過ぎるぐらいのデータが取れたからだ。

だが、二つ懸念があった。

一つは、今のままガチャポンマンを放置すると、星波町がお父様にとってよくない状態になりかねない事。

そして、もう一つは、夜衣斗が使った能力が、明らかに星波町土着の化け猫・美魅の力だった事。

美魅は、華衣がお父様から捕まえる様に言われていた化け猫だったが、予想外の存在により逃げられてしまっていた。

それがいつの間にか夜衣斗の中に逃げ込み、あまつさえ力を貸してさえる。

「このままでじゃ、華衣お姉様が……………」

冷笑から若干焦り憎しみに近い感情を浮かべた呼衣は、

「……………そうだ……………このままあいつごと消してしまおう」

呼衣の背後に無限万華鏡が具現化する。

「そうすれば、全て」

巨大な万華鏡の覗き込み口が、飛行するガチャポンマンへと向けられ、その中に光が溜められる。

「うまくいく」

無限万華鏡の中に溜められた光が撃ち出されようとした瞬間、

「止めなさい呼衣」

不意に背後から制止の声が現れた。

呼衣はその声に効き覚えがあった。

それは、

「お母様!？」

夜衣斗

キバがこっちに来れたおかげで俺は命拾いした、だが、このままだと……………。

まだ現実世界に残っているスカウトサーバントから送られてくる映像では、現実世界のごちゃませガチャポンマンが町の方へ飛ぼうとしている所だった。

やっぱりこっちを抑えているだけじゃ向こうを抑えられないか…

……………くそ！残ったサーバントを総動員したとしても……………いつまで持たせられる？

現実世界のキバのサーバント達にごちゃませガチャポンマンの進行を邪魔するように命令しつつ、キバに抑え込ませているこっちのガチャポンマンを見る。

……………やっぱり……………頂喜武蔵を殺すしか……………ん？

ガチャポンマンに何か違和感を感じた。

その違和感が何か、よくガチャポンマンを見ると……………ある事に気が付いた。

全身のひび割れから漏れ出ている魔力の水だが、その複数ある漏れ落ちている水の流れの一つが、逆流している事に………考えて見れば、魔力孔から魔力は供給されている。だとすると、武霊に魔力が流れ込む流れがなくちゃ不自然だ。武霊が武霊使いとは個別の存在であるならなおさら………よし！とにかく、今のガチャポンマンのデタラメな強さの大本は、この魔力のほずだ。だったら、その魔力孔を何とかすれば！

そう思った俺は、暴れるガチャポンマンを押え込んでいるキバの背に飛び乗り、ガチャポンマンへと流れ込んでいる魔力の小川を指差した。

「キバ！こいつを追って、魔力孔へ！」

第三章『奪われたオウキ』 87

夜衣斗

俺の言葉にキバは応え、ガチャポンマンを何度か踏み付けて走り出す。

PSサーバントの後部カメラで後ろを確認すると、ガチャポンマンが立ち上がり、猛然とこっちを追ってきていた。

まあ、あの速度ならこっちに追い付けそうになさそうだが……バイクと言い馬と言い、今日は初めての乗り物よく乗る日だな……

……まあ、武霊関連だから、町の外に出れば忘れる経験なんだが……ちよつと勿体無いよな……普段の俺からするとバイクとか、馬とか、自ら乗ろうとなんてしないだろうし……

などと思っていると、前方に宙に浮く大穴が現れた。

だが、俺の中にある魔力孔と違い、こぶしぐらいの大きさの穴が無数にある状態だった。

しかも、よく見るとその穴は収縮していて、いくつかの穴は俺が見ている前で完全に穴が埋まり、消えていた。

意味が分からず周りを見回すと、少し離れた場所に巨大なクラスみたいな……のが？……なんだありや！？

????

呼衣が後ろを振り返ると、そこには高木弥恵がおり、無限万華鏡に手を置いていた。

「待つてくださいお母様！」

呼衣の制止の言葉に弥恵は微笑んで、トンッと無限万華鏡を叩いた。

すると、その叩いた場所から霧散し始め、瞬く間に無限万華鏡の具現化が解けてしまう。

「お母様……どうして……」

呼衣が困惑した表情を弥恵に向けると、弥恵は呼衣に近付き優しく頭を撫でた。

「呼衣は実験データの収集係でしょ？実験対象を呼衣が消してしまつたら……『彼』が呼衣に何をするか分かつたものではないわ」

「でも……このままじゃ華衣お姉様がお父様に……」

「大丈夫。私が何とかします」

そう言つて微笑む弥恵に、少し困つた様な表情になる呼衣。

「……分かりました……華衣お姉様の件は、お母様を信じます……でも、このままあれを放置するわけには……」

視線を周囲に漂っている鏡の一つ・町に向かつて飛ぶガチャポマンを邪魔するサーバント達の戦いが映っている鏡を見た。

サーバント達はうまくガチャポマンを邪魔している様だったが、その数を確実に減らしており、突破されるのも時間の問題だった。

呼衣がその事を口にしようとした時、弥恵は別の鏡を指差す。

その鏡に視線を向けると、そこには頂喜武蔵の人工魔力孔の前に辿り着いた夜衣斗の姿が映っていた。

「このまま呼衣が何もなくてもきつとあの子が何とかしてくれるでしょう」

そう言つ弥恵の言葉に、呼衣はどこかむつとした様な感じになつた。

「確かに何とかかなりそうではありますが……でも、もし、黒樹夜衣斗が間に合わなかつたら？」

「もちろん、その時は私が」

少し躊躇して、辛く、悲しそうな表情になつた弥恵は、それでも強い意志を込めて、

「殺します」

そう口にした。

夜衣斗

巨大なカラスは、俺が見ている前で、そのくちばしを何も無い空

間に突き出した。

そして、くちばしを引き戻したその空間には、大きな魔力孔が出来ており……少し移動して再びくちばしを突き出す。そんな事をやって魔力孔を増やしている様だった。

……つまり、あれが武霊使い強化薬の精神世界バージョンって事か？

まあ、何にせよ。新しく出来た魔力孔も、直ぐに収縮が始まっている所からすると、やっぱり武霊使い強化薬は強引に魔力孔を開ける薬の様だ。じゃなきゃ、作っているそばから消える始めるなんて現象は起きやしないだろう。

……と言う事は、あのカラスを倒す事が出来れば！

「キバ！セレクト、ホーンブレード！」

俺の命令にキバがホーンブレードを展開した時、不意にキバが横に飛んだ。

その直後に空からガチャポンマンが降ってきた。

地響きを立てて着地するガチャポンマン。

俺はすぐさまキバから飛び降り、

「キバ！ガチャポンマンを抑えといてくれ！」

キバにガチャポンマンを任せ、俺はウィングブースターを展開し、両手に二丁拳銃を出して飛ぶ。

魔力孔を作り続ける巨大なカラスに向かって二丁拳銃を連射。

銃弾は全て命中したが……カラスは特に気にせず魔力孔を開ける作業を続ける。

……そもそも、あれは武霊使い強化薬の象徴みたいなものだから、こつちでいくらやっても無駄って事か？……いや、精神世界に影響を与えるものって事は、あの薬は、武霊と同じような精神的なものって事なんじゃないんだろつか？だとすると……単純にパワー不足か？

チラッとキバを見ると、さっきは簡単に抑えられたのに……苦戦している様だった。

まあ、さつきは不意打ちめいていたからな……こつちを何とかする余力はなさそうだが……早くしないと……脳内ディスプレイに表示されるサーバントの数は、物凄い早さで減っていた。

どうする？ どうすれば……くそ！ せめてオウキが使えるれば！……ん？ オウキ？……そう言えば……

???

「お母様。今、最後のサーバントが消えました」

呼衣の報告に、弥恵は、ぎゅっと杖を握り、片手で杖を空へと向ける。

「お母様。やっぱり私が」

どう見ても辛そうな弥恵に、呼衣はそう申し出るが、弥恵は首を横に振る。

「これは、私が背負わなくてはいけない罪よ。呼衣に、私なんかを母と呼んでくれる娘に背負わせていいものではないわ」

「……お母様。私達は既に」

「それでもよ」

弥恵の言葉に、呼衣は困惑と共にどこか嬉しそうな感情を見せた。

「……………ごめんなさい黒樹君」

そう小声で謝って、弥恵が何かをしようとした時、

「え！？……………うそ！」

唐突に呼衣が驚きの声を上げた。

呼衣の見ているのは、頂喜武蔵の精神世界が映る鏡。

そして、そこには、

第三章 『奪われたオウキ』 88

????

進行方向を邪魔する様に現れるサーバント達を、全身に目を生じさせ、そこからレーザー光線を出して破壊しようとするガチャポンマン。

だが、牽制のみに集中しているサーバント達は中々レーザー光線に当たらず、当たったとしても数機のみだった。

このままなら十分な時間稼ぎをする事が出来た。

しかし、ガチャポンマンは鬱陶しいサーバント達を破壊する為に、全身からオウキのサーバント達を射出。

オウキのサーバントにより次々と破壊されるキバのサーバント。

この場にキバがない為、新たなサーバントが追加されないキバのサーバント達は、破壊されればされるほど不利な状況になり、終には戦場から離れた場所で遠巻きに戦況を夜衣斗に見せていたスカウトサーバント一機を残して、全て破壊されてしまった。

その残されたスカウトサーバントも機体の一部が破壊されており、飛んでいるのがやつとの状態。

邪魔ものがいなくなった事を確認したガチャポンマンは町に向けて飛行を再開。

そして、星波海岸を越えようとしたその瞬間、動きが唐突に止まり、何かを苦しむ様な仕草をし、動きと同様に唐突にガチャポンマンは霧散した。

夜衣斗

……………そう言えば……………さっき、奪われてから感じなかったオウキの感情を感じたよな……………って事は、オウキとの繋がりが復活しているって事になる……………頂喜武蔵の精神世界と言う近い場所にいるからか?……………まあ、何にせよ繋がりが復活していると

うなら！

「オウキ！」

強く、強くオウキを意識する。

「オウキ！ 応えるオウキ！」

俺の呼び掛けに応えるオウキの感情を感じる。

それと共に、何か俺の中から大量に流れ出す感覚がした。

……もしかして、これが魔力か？

魔力の流失と共に、オウキの感情をより強く感じる様になる。

これなら！

「いい加減に帰ってこいオウキ！ ……」

若干今までのうつぷん晴らしも兼ねて俺が叫ぶと同時に、ガチャポンマンの腹部が唐突に砕け、そこからオウキのミニチュアが一個のガチャポンカプセルを掲げて飛び出してきた。

オウキのミニチュアが地面に着地すると共に、その大きさは通常のお大きさに戻り、その手にあるカプセルは砕け、胴体まで消滅が進んでいる頂喜武蔵が現れる。

「あああああああああ！ ……」

頂喜武蔵を奪われたガチャポンマンが再び叫び、オウキによって開けられ穴から更にひび割れが悪化する。

「終わりだ！ オウキ！ キバ！」

俺の呼び掛けと共に、オウキはガチャポンマンに拳を振り上げ、キバはカラスへと突撃。

オウキの拳を防ぐガチャポンマンの両腕を破壊し、ガチャポンマンを両断するように地面まで拳は振り下ろされ、

キバのホーンブレードが下から上へと振り上げられ、巨大なカラスを真つ二つにした。

????

「………ありえません。私達武霊チルドレンの武霊でもないのに、あの武霊能力から逃れる事が出来るなんて………」

ガチャポンマンの支配から逃れ、ガチャポンマンを倒したオウキを目撃した呼衣は、やや茫然自失と言った感じにそうつぶやいた。

その様子を感じていた弥恵は、少し考えて、

「呼衣。もう黒樹君の武霊は『コピー』した？」

弥恵の問いに、呼衣はその意図が分からず困惑の表情を浮かべつつ、頷いた。

「じゃあ、今ここにコピー武霊を出してくれる？」

「はい。お母様」

弥恵の指示も、問いと同じようにその意図が呼衣には分からなかったが、素直に従い、無限万華鏡を再具現化した。

そして、具現化した無限万華鏡は高速回転をし始め、ほどなくして覗き込み口から何かを二つ射出する。

射出されたものは始め粘土の様な物だったが、ぐにやぐにやと動き次第に形を成し始めた。

呼衣の武霊『無限万華鏡』は、『端末である鏡が映した武霊を完全にコピーする能力』がある。

そして、一度コピーした武霊なら、呼衣の意志力が尽きるまで何体でも何度でも複製する事が出来た。

頂喜武蔵に貸した既に消滅したはずの手下達の武霊が、まさにその武霊能力で出したコピー武霊であり、同じ様に呼衣はオウキとキバのコピー武霊を出そうとしていた。

だが、オウキとキバの形になり始めていたコピー武霊が唐突に、弾けた。

「つな！」

目の前で起こった現象に固まる呼衣。

「……………そう……………そう言う事なのね……………黒樹君。あなたは……………」

固まる呼衣とは違い、起きた現象に何か心当たりでもあったのか、辛く悲しそうな表情になった。

夜衣斗

二分されたガチャポンマンと巨大なカラスの二体は、分断された場所からさらさらと崩れ落ち、ほどなく完全に消滅した。

同時に現実世界のごちゃませガチャポンマンが消滅し、自然落下し始める頂喜武蔵。

その身体の両腕両足一部の胴体は消滅したままで………つて、自然落下！？まずい！

「オウキ、キバ戻れ！」

頂喜武蔵を地面にゆつくりと置いたオウキはキバと共に俺に飛び込み、俺の中に吸い込まれる様に消える。

大きな二体に迫られちよつと怖かったが、二体が無事に俺の中に戻った事を確認した俺はウィングブースターを最大出力にしてこの場から離れる。

現実世界の頂喜武蔵がどんどん海面へと近づく。

残っているサーバントの数を確認すると………今俺に現実世界の映像を送っているスカウトサーバント以外全て消滅していた。

しかも、そのスカウトサーバントも一部壊れている様で映像がかなり乱れ、安定していない。

これじゃあ落下している頂喜武蔵を受け止める事なんて出来そうにないな………くそ！多分、このまま頂喜武蔵が海面に激突すれば………間違いなく死ぬだろうな………そうだったら、その中にいる俺はどうなるんだろう？………一緒に死ぬのか？………何にせよ現実世界との接点が消える事は間違いない。つて事は、このままだと間違いなく帰れなくなる！

飛べば飛ぶほど、地面の光景が切り替わり、その切り替わる光景が進めば進むほど新しい記憶の光景になる様に飛ぶ。

美魅曰く、心の世界で最も外に近いのは、最も新しい記憶で構成されている所だとか………まあ、納得だな。

そして、もつとも新しいであろう俺に銃撃される光景になると共に、現実世界の頂喜武蔵が海面に激突寸前になる。

第三章 『奪われたオウキ』 89

夜衣斗

気が付くと目の前に、町と空が逆転した光景があった。

「夜衣斗！海！」

美魅の叫びに、自分とは思えない反射神経で反転し、隣で頭から落下している頂喜武蔵を抱き止め、ウィングブースターを逆向きに最大出力。

水柱を上げて海面から一気に離れる。

急激なGの変化で、一瞬ブラックアウトしかけるが、何とか耐え、僅かに海面から上がった所で、空中に静止し、ゆっくり上下を元に戻し、ほっと一息。

……………間に合ったか……………ヤバい。今更めちゃくちゃドキドキしてきた。

何だかふらふらになりながら、近くの星波海岸街灯下に降り、ゆっくりと頂喜武蔵を地面に寝かせる。

さつきまで土砂降りの雨だったから、頂喜武蔵を寝かした所はかなり濡れている気がするが……………まあ、そこまで配慮する必要も、義理もないな……………それに、そんな事より気にする事が他にあるし……………。

俺は頂喜武蔵の腕が在ったであろう場所に手を近付ける。

何の感触もなく、地面に手が付いた。

……………ん……………出血も無い様だし……………意識が戻る感じもない……………これって元に戻るんだろうか？……………とりあえず、ヒーラーサーバントだな。

部分具現化でヒーラーサーバントを二機出し、頂喜武蔵の治療を開始する。

……………ん……………何とか、徐々にではあるが、消滅した部分が元に戻っている様だが……………考えて見れば、武霊に内部（魂）から

喰われて、身体が消滅したって事は、その消滅した部分の魂が喰われたって事だよな？……………となると、例えば身体が元に戻っても、その消滅した部分は動かなくなるんじゃないだろうか？……………まあ、魂と肉体の関係が表裏一体であると考えたら……………時間を掛ければ魂も肉体に沿って失った部分が回復するんじゃないだろうか？……………確か、そんな漫画か小説の話があった気がするし……………さて……………どうなんだろう？……………まあ、何にせよ。いい気味か？……………じゃなくって、後は大人に任せた方がいいか……………。

そう思った俺は、星電を取り出し、団長に掛けるが……………出ない。困った。団長以外の自警団・警察関係者の人の電話番号知らないんだが……………いや、星波警察署と自警団本部の電話番号が登録されてあったか……………。

星波警察署・自警団本部に続けて掛けるが……………出ない。

戦闘中に見た町の様子を思い出し……………俺は何とも言えない不安を感じた。

やっぱり何かが起こっているのか……………とにかく、今は居場所が分かっている人と接触しよう。

俺は部分具現化でスカウト・リフレクション・スピーカーの三種のサーバントを二機ずつ出し、半分を東山刑事の所に飛ばした。

呼び掛けて起こそうと思ったんだが……………

ほどなくして東山刑事と団長が倒れている場所に三機が辿り着いた。

だが、そこには誰もいない上に、サーバントすらいない。

これは……………どういう事だ？……………って、思い出してみれば、さっきサーバント達の数を確認した時、壊れかけのスカウトサーバント以外……………ん！？スカウトサーバント以外？……………まさか！先生と西島さん達まで！？

????

頂喜武蔵が海面に激突する寸前で現実世界に戻った夜衣斗が、ギ

リギリの所で頂喜武蔵を抱き止め、激突を回避した。

その瞬間を目撃し終えた呼衣は、隣の弥恵を見る。

「お母様。一体黒樹夜衣斗は何者なのでしょう？無限万華鏡が武霊をコピー出来ないなんて……こんな事、今まで一度だって……」

動揺を隠しきれない呼衣の問いに、弥恵は少し困った様な表情を浮かべた。

そして、少し考えて、

「呼衣。お願いがあるんだけど……聞いてくれる？」

その唐突なお願いに、呼衣は目を瞬かせた。

「？……はい、何でしょう？」

「今の事を、忘れて欲しいの」

「え？」

弥恵のお願いの意味を少し考えた呼衣は、

「……もしかして、お父様に今の事を知られたくないんですか？」

その呼衣の問いに、弥恵は微笑み、

「そうよ……お願い出来る？」

「はい。お母様のお願いですから」

「ありがとう呼衣」

笑顔で頷いてくれる呼衣の頭を、弥恵は優しく撫でた。

夜衣斗

大慌てでキバを具現化し、バイクモードで町境のトンネルへと急ぐ。

ちなみに治療中の頂喜武蔵は、ヒーラーサーバントのシールドをひも状にしてキバの後ろに繋げて引っ張っている。

途中、町の様子を自分の目と、スカウトサーバント数機で確認したが………妙に静かな事以外、特に変わった所は無い様に見えた。

そもそも、さっきまで武霊同士の戦闘が続いていたのだから、妙

に静かな事は納得だが……そう言えば、戦闘終了の放送もないな

……

そんな事を思っていると、放送が入る音がした。

状況から考えて、普通の放送が入るとは思えなかったが、それでも眉を顰める様な放送が始まり……訳が分からなかった。

町に無駄なほど無数に備え付けられているスピーカーから、何故か笛の音が聞こえてくる。

……さっぱり意味が分からないが……今、町で起こっている何かと関係があるのは間違いない……か？

第三章 『奪われたオウキ』 90 (終)

???

「華衣お姉様。こちらは滞りなく終わりました」

「そう。ご苦労様、呼衣」

「後は実験体の回収ですが、それはもう一つの実験が終わり次第、芽衣に回収させてください」

「ええ、芽衣にそう伝えておくわ……………ところで呼衣」

「はい、華衣お姉様」

「今回も実験体を倒したのは黒樹夜衣だったようだけど、何か気付いた事はない？」

「気付いた事ですか？……………特にありません」

「……………そう」

「強いてあげるなら、あの化け猫が力を貸しているっと言う事でしょうか？」

「美魅ね……………あの時逃したのがこんな所で影響が出るなんて……………」

「お父様は嬉々として私を折檻するでしょうね」

「その点は大丈夫だと思いますよ。お母様が何とかしてくれるそうですから」

「お母様が？……………また、お母様に負担を掛けてしまったわね……………」

「……………」

「はい……………」

「とにかく戻ってきなさい。芽衣から報告では、そろそろ三島忠人が最後の行動に移ったそうよ」

「分かりました。直ぐに戻ります……………ところで華衣お姉様？」

「何？呼衣」

「華衣お姉様は、『どちらが』勝つと思います？」

「……………どっちが勝とうと、私達がやる事には変わりはないわ……………」

「……………ただ、お父様の命令に従うのみよ」

「……………そうですね」

夜衣斗

町境のトンネル前に到着した俺は、キバから降り、慎重にトンネルに近付いた。

未だに町内スピーカーからは笛の音が聞こえる。

一体何の意味があるんだか……………。

そんな事を再び思いながら、トンネルの中を確認すると……………やっぱり、トンネルに設置していたシールドサーバントが無くなっていた。

……………何が起こったか分からないが、先生と西島さん達……………町の外にうまく逃げてくれただろうか？

そう思いつつトンネルの中を見渡すと、トンネルの奥に人影があった。

「……………誰だ？」

声を掛けると、人影はゆっくりとこちらに近付き……………現れたのは、

????

「星波町全域への放送を開始しました」

三島忠人は、星波学園中央にある大講堂でその報告を受けていた。今の忠人は、武装風紀の委員長としての普段の姿とはかけ離れたイメージを、場合によっては別人と思えるほど無感情無表情だった。

「そうか……………追撃部隊はどうなった？」

「はい。先程、見失ったと報告がありました」

「そうか……………流石に不確定要素だけはある。『武霊が使えない』と言うのに、手強いな……………見失った場所は？」

「星降り山です」

「あの山か……………厄介な場所に逃げ込まれたな。仕方がない。追撃部隊をそのまま監視部隊に移行」

「分かりました」

「後は黒樹夜衣斗か……………どうなっている？」

「効果時間以上放送を聞いていますか……………」

「やはり不確定要素達と同様に効果なしか……………念の為、彼女を向かわせておいてよかったか……………」

そうつぶやいた忠人は、大講堂内を見回した。

大講堂内には、まるで人形のように一切身動きもせずじりじりと座った星波学園の生徒達があり、その異常な光景を見ても忠人は特に感情らしい感情を見せなかった。

夜衣斗

「黒樹君。無事だったんだね」

そう言っただけ現れたのは、飛矢折さんだった。

……………
（どうしたんだわよ夜衣斗？飛矢折が見付かって嬉しくないだわか？）

俺が眉を顰めていると、美魅が心の中から声を掛けてきた。

……………いや、不自然過ぎるだろ……………これ……………

（確かに不自然だわよ。じゃあだわよ？あの子は偽者って事だわか？）

……………偽者ね……………。

「黒樹君？」

無反応の俺に困った顔をしながら近づく飛矢折さん。

……………警戒はしていた。

だが、ようやく飛矢折さんが見付かったと言う安心がどこかにあり、俺は……………油断……………いや、そもそも『飛矢折さんの戦闘能力をまだ侮つといた』。

「彼女から離れて黒樹様！」

不意に背後から琴野統合生徒会長の声？

反射的に振り返ろうとした時、視線を飛矢折さんから僅かにそらしたその一瞬、俺の胸に何か触れた感じがした。

何が触れたか確認すると、それは飛矢折さんの手だった。

っな！？嘘だろ？ちよつと目を離れた僅かな時間で、ここまで近付ける距離じゃなかったぞ！？ってか、何で手を胸に？

驚きと疑問に固まっていると、疑問の答えは直ぐに出た。

「っは！」

飛矢折さんが小さな裂ぱくの声を上げると同時に、胸に強烈な衝撃。

PSサーバントの防御機能を貫通したその衝撃に、俺の意識が急速に薄れる。

寸……勁……か？……漫画じゃあるまし……嘘だろ？

前のめりに倒れながら、周囲の光景がスローモーションの様にゆっくりと流れる。

後ろで俺の名前を呼ぶ生徒会長の声。

瞳に意志の光がなく、虚ろな目で俺を見る飛矢折さん。

もう少し……注意深く……飛矢折さんを……見るんだ……った。

明らかに異常な飛矢折さんの様子をスローモーションの光景の中でようやく気付いた俺は、その事を強く後悔しながら、最後の力を振り絞って、飛矢折さんに手を伸ば

第三章 『奪われたオウキ』 90（終）（後書き）

これで第三章『奪われたオウキ』は終了です。

次章は、間章ではなく、このまま第四章に突入します。

タイトルは、第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』です。
引き続き第四章も読んでいただけると幸いです。

番外編 # 1

「はあ〜い、どうもお〜」

「……………誰だ？つてか、何だ？これ？」

「んもお〜連れないな夜衣斗君……………まあ、私を知らないのは無理もないよね。私は、第四章で登場予定の新キャラだもん」

「……………新キャラ？……………また増えんのか……………」

「じゃんじゃん増えるわよ。なんてつたつて、次章はそういう話だから」

「……………まあ、物語の設定上、キャラが多いのは仕方がないが……………つで、あんたは誰で、これは何なんだ？」

「私は、星波学園高等部三年マスメディア部長、早見芽印^{はやみ めいん}。つで、今回の話は、増えすぎたキャラの補完の為の……………番外編ね」

「……………番外編ね……………つで、具体的には何をするんだ？」

「今まで登場した基本的な設定と、登場したキャラの紹介？」

「……………なんで疑問形なんだよ？」

「だって、それだけじゃ面白くないでしょ？やるんだつたら面白くなくちゃつて思つて」

「……………要はテレビアニメとかで合間に入る総集編みたいな感じなんだろ？……………そんなんだつたら、この俺達のやりとりすらいらぬ気がするんだが……………大体、何で俺の相手があんたなんだ？美羽さんや飛矢折さんは？一様彼女達がヒロインだろ？」

「まあまあ、いいじゃない。今、彼女達は大変な目に遭つてこんな事やつてらんないだろうし」

「……………それを言うなら俺もだろうが……………はあ……………まあ、いいさ、なんだて……………めんどくさい」

「つむ！こんな美少女の相手をしているのにめんどくさいですと！？」

「……………どんな容姿かまだ分かんないのに美少女ね……………まあ、

頑張れば？」

「何を!？」

「……………さあ?」

「ああ! どんどん夜衣斗君がやる気をなくしてる! ……えっと、

じゃあ、ごうしましよう。簡単な説明の後に、私達の感想を入れる」

「……………めんどくさ」

「めんどくさくてもやるの! じゃあ始めるわよ……………あ! 言い
忘れましたが、今回の話は、あくまで補完的な話ですので、今まで
出てきた設定やキャラをちゃんと覚えていてる方は読まなくてもそん
なに問題はありませんで。ではでは」

「じゃあ、まずは物語のタイトルである『武装守護霊』から行き
ましょうか?」

「……………お好きに」

「もう! もっとやる気出す!」

『武装守護霊』

・星波町限定の精神寄生体。

・通称『武霊』

・十年前から星波町で発生する様になり、人に寄生してその者の
意志力を糧に生きる。また、同時に起きる様になった星波町から出
ると武霊に関するあらゆる事を忘れ、物証などが消失する『忘却現
象』により星波町外では星波町の現状は知られていない。

・経験則で得られた事以外何も分かっておらず、どこから来たの
か、何故星波町でしか発生しないのか、その正体全てが分かってい
ない。

・寄生している者の心を構築しているイメージを元に自らの姿を
変化させ、寄生者が危機に陥ると意志力を大量に消費して具現化す
る。そして、イメージを基にした能力・機能などを、例えばどんなに
非現実的なものでも行使出来る。

・ 武霊に限界以上の意志力を消費されると意識を失い、一日、人によつては一カ月、最悪は一年以上意識不明になる。

・ 寄生者が危機に陥つて具現化する以外に、武霊チルドレンがばら撒いている『強制武霊覚醒薬』などで具現化させる事も出来る。

・ 具現化する事が出来た武霊は、寄生者の指示に従つて再具現化出来る様になり、寄生者が武霊を操れる様になる。その者の事を『武霊使い』と呼ぶ。

・ 例え寄生している者の心を構築しているイメージの中に攻撃的な部分がなくても、武霊には何らかの攻撃手段が必ず現れる為、『武装』。寄生者の精神から外に出る時は大体背後から現れ、具現化していないと特定の間人（武霊使いなど）にしか見えない為、『守護霊』。まとめて武装守護霊と呼ばれる様になった。

・ 武霊の具現化には段階があり、段階ごとに具現化の仕方が違い、段階が上がるほど武霊使いに掛る負担や武霊の再現度・能力が上がる。

・ レベル1 『通常具現化』 〓 その基となつた記憶・イメージ通りの姿形で具現化。ただし、何もせずに具現化するとその多くがイメージより大きくなる事が多い。

・ レベル0・5 『制御具現化』 〓 通常具現化を加減し、その大きさを通常の以下にする具現化。これの応用で、部分具現化が出来る。

・ 『部分具現化』 〓 武霊の一部を具現化。

・ レベル2 『倍加具現化』 〓 通常具現化を何倍の大きさにしての具現化。

・ レベル3 『憑依具現化』 〓 武霊使いの身体に纏うように具現化。通常の具現化と違い、その姿は半透明になり、武霊と感覚が共有され、武霊使いの意志で動かす必要がある。

・ レベル4 『倍加憑依具現化』 〓 憑依具現化状態での倍加具現化。通常の倍加具現化と違い、その姿は半透明で武霊と感覚が共有され、武霊使いの意志で動かす必要がある。

・これ以上の段階もあると思われるが、自然に至った最大の段階がレベル3までで、レベル4は今の所はぐれ化のリスクがある『武霊使い強化薬』を使用する必要があるので、レベル4以降がどんなものかは不明。

・武霊の具現化は、別名『投影具現』と名付けられており、武霊の本体はあくまで武霊使いの中にある。その為、具現化中の武霊はあくまで投影体である為、具現化した武霊がいくら破壊されて消滅したとしても、再び武霊使いの意志力を消費して完全な形で再具現化する事が出来る。

・武霊個は独自の意志を持っているが、何故か喋れる姿でも喋る事が出来ず、文字も使えない。例えば文字を表示する能力があったとしても、文字化けを必ず起こす。ただし、武霊使いと武霊の間には精神の繋がりがある為、ある程度の意志のやり取りが出来る為、コミュニケーションにはそれほど困らない。

・極稀に『装備型武装守護霊』と言う特殊な武霊が誕生する事がある。その武霊には意志がない上に、武霊使いが使わないと使えない形になっている。その為か具現化もレベル1までしか出来ないが、その分攻撃能力が通常の武霊より高い。

・定期的に星波山と星波海岸にて『はぐれ武装守護霊』と言う人に寄生せずに具現化する武霊が現れる。通称『はぐれ』と呼ばれるその武霊達は、人に寄生していない為、時間が経てば消滅する運命にある。その為、己を維持する為にはぐれは意志力を求めて人を襲う。ただし、何故か意識を失っている人間や建物の中に入っている人間は襲わない習性がある。

・はぐれに対抗する為の避難設備や自警団などが星波町にはある。
・はぐれには自然発生以外にも一つの発生方法がある。それは武霊使いの死によってその武霊使いの武霊がはぐれになる『はぐれ化』。武霊使いが死ぬ事により意志力を得られなくなった武霊は、その生存本能から暴走し、武霊使いの身体から本体ごと離れ、具現化し、意志力を求めて人を襲う様になる。本体が武霊使いから離れ

ている為、通常のはぐれ同様に時間が経てば消滅する運命にあり、例えその武霊の武霊使いが蘇生したとしても武霊がはぐれ化から戻る事はない。また、武霊使い強化薬の使用で特殊なはぐれ化を起す事もあり、その場合は武霊の本体が壊れ起る為、まず武霊使いが喰われる。なお、普通のはぐれと発生プロセスが違う為か、はぐれの習性は適応されない上に、完全に具現化して暴走している為、はぐれ以上の厄介な存在として認識されている。

・通常は意志力を糧とするが、武霊使い強化薬で魔力を手に入れた者の武霊は魔力を糧としている為、通常の武霊以上の能力を持ち、本来ならその武霊使いに無理な具現化レベルまで可能とする。ただし、魔力は武霊にとって劇薬の様なものである為、投与からある程度時間が経つと武霊は壊れ、特殊なはぐれ化を起こす。

「……………長い。多い」

「ん〜これでも武霊設定の一部なんだけどね〜」

「……………まあ、作中では、予想はされていても、それを裏付ける決定的な証拠は一切ないから……………何も分かってないって言うても過言じゃないか……………」

「じゃあ、次は物語の舞台について行ってみましようか？」

『ほしなみ星波町』

・物語の舞台の町。

・二つの山と海に囲まれた町で、過去に何度か隕石が近くに落ちた事があり、それによる津波被害の記録から星波町と名付けられた町。

・星降り山には山が削れるほどの隕石落下跡のクレーターがあり、中腹には元高校の廃校。星波山の近くには廃工場。町の中央には町役場と隕石博物館。沖には人工島があり、そこには星波学園がある。

・十年前から武装守護霊が発生するようになっており、それによって通常ではありえない現象が簡単に起きる場所になっているが、

同時に町を出ると起きる様になった『忘却現象』によりその事は町の外に一切知られていない。

・星波山と星波海岸で発生するはぐれの対抗策の為に、独自の制度や避難所の設置・はぐれ発生を知らせるスピーカーの設置などの他に、大人の武霊使い達による『星波自警団』がある。

・大人達の組織である為か星波学園の統合生徒会・武装風紀委員会と微妙に仲が悪い。

「ちなみに全くの架空の町ですのであしからず」

「……………確かに日本に山が削れるほどの隕石落下跡はないよな……………日本の何県って話も一切上がってないし……………要は物語の舞台の世界はパラレルワールドって事か？」

「日本は日本なんだけどね」

『星波学園』

・関わった政治家の汚職事件により頓挫した空港建設予定地に建てられた小中高大学一貫の学園。

・かなりの資金を持っているらしく、学校の至る所に端末があったり、最新・独自の設備が充実している。

・来る者拒まず、去る者追わずが基本方針で、学園の生徒に関わる事のほとんどを生徒自身に任せている。その為の組織が小中高大の生徒会をまとめた『統合生徒会』で、一部の事柄に関して教員より強い権限も与えられている模様。

・人工島なので、星波町とは『学園大橋』と名付けられた上に道路、下に線路の大橋で繋がっており、その先に五つの大門で構成された学園大門。それをくぐると学園庭園。まっすぐ進むと学園大講堂・学園長宅・学園統合事務局・学園寮・学園警備局。右に進むと大学設備群。左に進むと小中高施設群。更に奥に進むと部活同好会棟群。そして海側には滑走路が一本唯一残されている。また、地下には部活などで使用する様々な設備がある。

・多くの部活・同好会があるが、全国大会がある様な部活などは武霊や忘却現象の影響でか、そのどれもが全国レベルに達していない。また、妙な部活・同好会もかなりの数ある。

・武霊使いはその力の監理監視の為にどこかの部活・同好会に所属しなくてはならず、どうしても帰宅部になりたい場合は、部活・同好会の者が鬼となる『逆鬼ごっこ』をし、逃げ切る必要がある。

なお、星波学園所属の武霊使いがぐれを倒すと、その武霊使いが所属している部活・同好会に特別部費が支給される為、各部活各同好会は逆鬼ごっこに躍起になる。また、逆鬼ごっこは一週間行われ、終了二日前からは武装風紀委員会も参戦する。その為、逆鬼ごっこは武装風紀委員会が優秀な人材を確保する為の場でもある。

・学校と言う性質上、武霊使いが最も多い場所である為、統合生徒会は武霊トラブルを対応・予防する為に優秀な子供の武霊使いで構成された『武装風紀委員会』を設置している。

・子供達の組織である為か統合生徒会・武装風紀委員会共に星波自警団と微妙に仲が悪い。

・統合生徒会長となる人物は小中高のどれかの生徒会長。統合副生徒会長と武装風紀委員長は兼任で大学生が務める事になっている。

・生徒は生徒カードと名付けられたICカードを持たされており、それを学園大門の改札で使用して登下校のチェックがされている。また、星波学園と星波町のみで使える電子マネー機能も付いており、生徒は基本的に現金を持つ事を禁止されている。

「こんな感じかな？」

「……まあ、現実ではありえない学校だよ……ICカードで登下校の管理とかは聞いた事ある気がするが……人工島の上に学校って……」

「確かにとんでもないよねえー。私としては政治家の汚職事件の方が気になるんだけどねえー」

「……………」

「じゃあ、次はキャラ紹介に行きましょうか？」

「……………やっとか……………一々会話するのがめんどくさいから一気にやってくれないか？」

「もう！女の子との会話をめんどくさいって！何それ！ぷんぷん！」

「……………」

「何……………その冷めた目線……………」

「……………別に」

『黒樹夜衣斗』

・ 武装守護霊主人公。本編メイン語り部。

・ 伸ばした前髪で目を隠した無口な高校生。ただし、必要と感じれば若干間を開けて喋り、思考が無駄に早い為、頭の中ではよく喋っている。伸ばした前髪の下には若干鋭い目と、人によってはかっこいいと思える顔が隠れている。

・ 何かあると直ぐにため息を吐く癖がある。

・ 自称平凡以下だが、星波町に来てから様々な前例のない事を起こし、起こされている為、本人の意思に反して『主人公』になっっていく。

・ 死の運命を背負い、それにあらがう運命の選択を何者かに与えられた者。

・ 過去に酷いいじめを受け、死のうとした事がある。その為、基本的に人間嫌いで他人などどうでもいいと言うスタンスでいようとしているが、根っからのお人好しで優しい性格である為、それがうまくいった事はない。

・ 積極的な人間や女性が若干苦手。

・ 漫画や小説・ゲームなどが好きで、そこから色々な知識を得て、独自の考えを持っている。その為、それに関した出来事や状況に強い。

・ 空想好きでもある為、王継戦機と言う物語を子供の頃から作っ

ており、それが武霊の基になっている。

『オウキ』

- ・ 夜衣斗の武装守護霊。
- ・ その姿は白銀の鋭角的な騎士甲冑。
- ・ 様々な武装・機能と、色々な種類のあるサーバントと名付けられた半自立型小型円盤兵器を操り戦う。
- ・ 本来なら一カ月以上星波町にいないと武霊は寄生しないとされているが、何故かこのオウキは夜衣斗が星波町に来て直ぐに具現化している上に、最初の具現化の仕方がサヤ経由になっているなど謎が多い。

・ 具現化到達レベル1（実際は夜衣斗が試していないのでそれ以上のレベルに達している可能性がある）。

『キバ』

- ・ 夜衣斗の二体目の武装守護霊。
- ・ その姿は白銀の機械的なユニコーン。
- ・ オウキと同系統である為、同じ武装・機能を使える。だが、戦闘運搬特化型である為、戦闘能力だけに関して言えば、オウキよりキバの方が戦闘能力は高い。
- ・ 今まで一人の武霊使いに一体の武霊が常識だったが、何故か夜衣斗のみ二体目が寄生し、具現化したのがこのキバ。
- ・ 具現化到達レベル1（実際は夜衣斗が試していないのでそれ以上のレベルに達している可能性がある）。

『サヤ』

- ・ 夜衣斗の心の中にある小さな公園にいる謎の美女。
- ・ 白いドレスっぽい服を着ている。
- ・ 夜衣斗の心の中で色々と暗躍したり、謎の行動を取ったりしている。

・多くの謎の答えを知っているようだが、それを夜衣斗に教える気はない。ただ、夜衣斗が窮地に陥った際には力を与えたり、助言を与えたりはする。

『シヨートカットの女の子』

- ・夜衣斗の心の中にある小さな公園にいる謎の少女。
- ・小学生ぐらいの女の子で、白いドレスっぽい服を着ている。
- ・サヤと共に謎の行動をしている。

『ロングヘアの女の子』

- ・夜衣斗の心の中にある小さな公園にいる謎の少女。
- ・小学生ぐらいの女の子で、白いドレスっぽい服を着ている。
- ・喋ったので武霊ではないと思われるが……

『美魅』

・夜衣斗の心の中に居候する舞台の町星波町土着の白い化け猫。
・心を潜り込む猫、心渡りの化け猫と呼ばれる妖怪で、人だけでなく物の心の中に入る事が出来る。

・武霊チルドレンに狙われ、逃げた先が夜衣斗だった縁で、夜衣斗の心の中に居候する事になった。

・古くからその能力を使って星波町住人の手助けをしたりしている為、美魅様と呼ばれ一部の星波町住人から幸運を呼ぶ猫として崇められている。また、どの猫よりも美しい為、美魅にあやかっで、星波町生まれの女性には「み」が名前に付けられる事が多い。

・真つ白な非常に美しい猫だが、主人公と契約した事により人間形態になる事が出来る様になった。

・人間形態になると、顔は全体的に猫っぽい美人で、何故かメイド服っぽい服になる。そして、頭部に猫耳・お尻に尻尾がある。

『メガネベア』

・夜衣斗の自室に居候しているメガネを掛けた白熊人形の様な謎の生物。

・武霊チルドレンに狙われ、逃げた先のおもちや屋で人形の振りをしていたら、商店街のくじ引きの景品にされ、その景品を当てた飛矢折巴經由で夜衣斗の所にやってきた。そして、先に夜衣斗の所にいた美魅が縁で、夜衣斗の部屋に居候する事になった。

・喋る事が出来ず、言語の概念もないらしく、テレパシーでイメージを送ってコミュニケーションを取る。

・メガネを媒介に破壊光線や瞬間移動などの様々な能力を発揮する。

・プリンが好きらしく、よく黒樹春子のプリンを盗み食いをしては、夜衣斗にその罪を擦り付けている。

『謎の老人』

・姿までは思い出していないが、夜衣斗が過去に接触し、そして夜衣斗に運命を変える選択を与えたと思われる謎の人物。

・夜衣斗にどんな選択を与えたのか、夜衣斗はその詳細はまだ思い出していないが、少なくとも夜衣斗は自身に起こっている全てを老人から教えられているとの事。ただ、それに関する記憶には封印処理が施されている為、例えある程度思い出したとしても、重要な部分が抜けてしまっている。状況から考えて、その記憶に封印処理を施したのもその老人らしき人物だと思われるが、何故記憶の封印を施したのか、その封印が解ける条件などまだまだ謎が多い。

・「願わくば、君に与えた運命を変える選択が、あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を」と言う言葉を夜衣斗に送っている。つまり、プロローグ冒頭はこの老人のセリフ。

・自称最後の敵もこの老人に運命を変えられたらしく、また、他にも同様に運命を変えられた者が六人いるとの事。

『黒樹春子』

- ・夜衣斗の叔母にして星波町での一様の保護者兼家主。
- ・そこそこ売れているらしい少女漫画家。
- ・生活能力が皆無らしく、その為、生活のほとんどをお隣である赤井家に世話して貰っている。なお、その事を夜衣斗の母であり春子の姉に知られると殺されるらしい。
- ・夜衣斗に度々セクハラをしては困らせている。
- ・プリン好きで、冷蔵庫にはプリンが常備されている。

『あかい みは赤井美羽』

- ・武装守護霊の『動』のヒロイン。本編のサブ語り部その一。
- ・ショートカット。活発さを絵に描いた様な顔付きでスレンダーな身体をしている。
- ・夜衣斗が星波町に来た直後に巻き込まれたはぐれ襲撃とはぐれ化で夜衣斗を助け、助けられた為、それ以降、夜衣斗に密かで若干過剰な期待を抱いている。
- ・夜衣斗の居候先のお隣さんであり、部屋も隣接している為、何かと世話している。
- ・武霊強奪犯の大原亮とは幼馴染の間柄で、お兄ちゃんとして慕っていた。
- ・星波自警団によく協力している為、団長の幸野美春や自警団員とは仲が良いが、反面統合生徒会とは、特に統合生徒会長の琴野沙羅とは仲が悪い。
- ・武霊を研究している武霊研究部に所属しており、現部長青葉愛のホラー趣味に戦々恐々している。

『コウリュウ』

- ・赤井美羽の武装守護霊。
- ・その姿は赤い西洋竜。
- ・様々なブレスを吐く事が出来る。

『赤井羽流』

- ・美羽の父親。
- ・春子の飲み友達。

『赤井美衣』

- ・美羽の母親。
- ・春子の漫画のファンであり、彼女の世話をよくしている。

『幸野美春』

- ・星波町自警団団長。
- ・スレンダーでグラマー。常にポニーテールで、かわいいよりかっこいい分類に入る美女。
- ・到達している者が少ない具現化段階レベル3が出来る為、最強の武霊使いの一人とされている武霊使い。

・仕事時は男言葉を喋り、それ以外の時は普通で喋り、雰囲気も仕事時はきつく、それ以外の時はマイペースでほんわかしているちよつと変わった人。

・仕事の関係上よく合う刑事の東山賢治とは、よく激突するが、仲が悪いわけではない。

『コロ丸』

- ・幸野美春の武装守護霊。
- ・その姿は白い犬。
- ・体毛を自在に操る事が出来、それにより刃を作り攻撃したり、羽の様に空を滑空するなど様々な事が出来る。

『東山賢治』

- ・星波町警察の武霊課刑事。ただし、町の外では忘却現象対策として少年課の刑事と言う事になっている。
- ・警察の中で最強の武霊使いと呼ばれている。

・基本的にふざけた言動で空気と読まない男だが、そのほとんどが場を和ませるなど何らかの目的が伴ったわざとの言動。

・星波町に来る前の警察関連で何かあったらしい。

『十字銃』

・東山賢治の装備型武装守護霊。

・銃身が十字型になっている拳銃で、実弾・炸裂弾・衝撃波・レーザーの四種類を撃つ事が出来る。そのどれを撃つかは十字銃身を回転させる事により選択する事が出来る。他にも十字部分から剣の様にレーザーを出す事が出来る。

『琴野沙羅』

・星波学園統合生徒会現統合生徒会長であり、星波学園理事長琴野優香の孫娘。

・父親がアメリカ人である為、ハーフ。髪型はツインテールで、妙なお嬢様言葉を喋る。

・赤井美羽とは犬猿の中で会う度に喧嘩になり、場合によっては武霊バトルまで発展するほど仲が悪い。ただし、幼い頃は仲が良かった。

『ヒノカ』

・琴野沙羅の武装守護霊。

・その姿はフェニックスの姿をしている。

・身に纏う炎の羽は燃やす対象を選ぶ事が出来、炎のプレスを吐いたり、炎の羽を飛ばす事も出来る。炎で出来ている為、炎や熱によるダメージは受けない。

『村崎好実』

・星波学園高等部生徒会副会長。

・真面目なメガネっ娘。

- ・赤井美羽と琴野沙羅の喧嘩を止められる数少ない生徒。

『雪歌』
ゆきうた

- ・村崎好美の武装守護霊。
- ・その姿は雪女。
- ・喧嘩している赤井美羽と琴野沙羅を部屋ごと凍らすなど冰雪系の能力を持っている模様。

『飛矢折巴』
とひやおりとせえ

- ・武装守護霊の『静』のヒロイン。本編のサブ語り部その二。
- ・可愛いよりカッコいい、静かさとやや鋭さのある顔立ち。
- ・夜衣斗のクラスメイト。
- ・家が飛矢折流武術を代々継承している為、巴自身も武術家で、その実力は武霊の防御反応を上回る為、生身で武霊使いを倒せる数少ない生徒の一人。

・無駄のない引き締まった体付きで、やや筋肉質だが、出る所は出て引つ込む所は引つ込んでいる。

・武霊を使った連続婦女暴行事件の最後の被害者で、ぎりぎりの所で親友の黄道美幸に助けられたが、襲われた混乱で助け起こそうとした美幸を攻撃してしまい、一時期それがトラウマになって武霊を見ると反射的に武霊使いを攻撃する様になってしまっていた。だが、事件を夜衣斗が解決した事や美幸との仲を取り持ってくれた事により、トラウマを克服する。そして、その二つの出来事により夜衣斗に好感を抱く様になる。ただし、美羽と違い、夜衣斗を等身大の個人として見ている為、周囲が夜衣斗に過剰な期待抱く事に違和感と不安を感じている。

・女性護身武術部に所属しており、その部長朝日竜子のからかいによく困らされている。

『黄道美幸』
おうだみしゆち

・飛矢折巴の親友。

・夜衣斗のクラスメイトであり、赤井美羽の部活の先輩でもある。

・巴により受けた攻撃により一時瀕死の重傷になり、その影響で半はぐれ化を起こしている。その為、起きている間は常に強制的に武霊が具現化してしまう。それによる意志力の消費と、過剰な武霊の防衛本能を抑える為に常に具現化レベルを0・5にして抱き抱えている。

『ゆきちゃん』

- ・黄道美幸の武装守護霊。
- ・その姿は人型のウサギ。
- ・戦闘能力はまだ不明。

『村雲勇人』

・夜衣斗のクラスメイトであり、クラスの中で最も親しい友人。

・茶髪猫目。

・くだけた感じで誰とでも親しく接する事が出来、面倒見がよい。

・春休みに大原亮に武霊を奪われた為、一カ月近く意識不明になつており、クラス替えも重なって親しい友人がクラスにいなかった為、同じ様に転校してきたばかりで友人がクラスにいない夜衣斗に声を掛けたい。が、性格からしてただの切っ掛けとしてそう言った可能性がある。

・春休み前まで武霊研究部に所属していたが、今は武霊を失った為、帰宅部になってバイトに精を出している。ので、学校が終わると直ぐに帰る。

『青葉愛』

・武霊研究部現部長。

・おっとりとした性格で、見た目はどこその令嬢に見えるが、嫌がる相手に無理矢理趣味のスプラッターホラー物を見せたりするの

で隠れどSと思われる。

・趣味はスプラッターホラー物で、武霊研究部の部室はその趣味のアイテムで溢れ返っている。その為、美羽は迂闊に部長にも部室に近付けないでいる。

『ハクシ』

- ・青葉愛の武装守護霊。
- ・その姿はローブを着た骸骨。
- ・その能力は不明。

『みどりしかむびき緑川響』

・赤井美羽が所属する武霊研究部の後輩。

・筋肉ムキムキの身体で、季節を問わずに夏服を着ている筋肉馬鹿。
鹿。

・強い人間と戦って自分を鍛える事を喜びにしているらしく、その為強いと聞く武霊使いに片っ端から武霊バトルを挑む重度のバトルマニア。

・学校内で禁じられている武霊を使った私闘で停学になっており、その停学の切っ掛けになった武霊バトルを終わらせたのが、偶然その場に鉢合わせしたトラウマで自身の戦闘反射を抑えられなくなっていた飛矢折巴。その為、飛矢折巴が苦手。また、同じ様に自分では絶対に敵わないと思う様な圧倒的な負け方をした相手に対しても苦手意識が出来る様で、他にも部長の青葉愛や先輩の黄道美幸など、幾人が苦手な人間がいる。

・自らが挑んだ武霊バトルで、夜衣斗に圧倒的な力の差を見せ付けられて負けた為か、夜衣斗を妙に慕う様になる。

『イフリート』

- ・緑川響の武装守護霊。
- ・その姿は炎を纏った魔人。

・ 炎系の能力を使う。
・ 攻撃能力は高いが、使い手が馬鹿なのでその力を出し切れ
ないのが現状。

『春咲茜』

・ 楠木久思のクラスメイトで、クラス委員。
・ 不登校になった久思を心配して、久思の家にまで行く様なお節
介をし、唯一会いたいと言った夜衣斗に久思と合う様をお願い
した。

・ 中学時代に別の中学でいじめを目撃しており、その時は自分も
いじめの対象になる事を恐れ助けなかった。だが、その目撃した
いじめの対象が自殺した事により、それがトラウマになり、それ以降
出来るのにしないで後悔する事を止めている。その為、久思の不登
校を何とかしようとしていた。

『楠木久思』

・ 夜衣斗の隣のクラス。
・ 前の学校でのいじめから逃れる為に進級と星波学園に転校して
きたが、転校しても新たないじめにあっていた。その新たないじめ
の場面に偶然遭遇した夜衣斗によりいじめから解放されるが、一様
仲がいい来塚博に巻き込まれて強制武霊覚醒薬を武霊チルドレン結
衣から渡されてしまう。そして、使うに使えず、脅されている為捨
てずに捨てられず、苦悩と恐怖から引き籠ってしまふ。だが、クラ
ス委員の春咲茜と夜衣斗により少なくとも引き籠りは止めそうにな
っている。

『西島ひより』

・ 頂嬉武蔵により捕えられ、忘却剤などにより意志を奪われて奴
隷の様に扱われていた女の子。
・ 母親に似ているらしいので美少女だと思われる。

・捕えられる前は元気が良過ぎる娘だったらしいが、現在はその見る影もなく常にぼーっとしている。
・ヒーラーサーバントによる治療を行ったが、忘却剤により失った記憶まで戻るかは今の所不明。

『アリス』

・西島ひよりの武装守護霊。
・不思議な国のアリスに登場するアリスその者の姿をしている。
・指定した場所に繋がる扉を出すなど、その能力は全て不思議の国のアリスに登場するものを基にしたものだと思われる。

『西島さゆり』

・西島ひよりの母親。
・行方不明になった娘を探して星波町までやってきた。
・シングルマザーで、最近は年頃の娘と僅かなすれ違いが起こり、度々プチ家出をされていた。
・東山賢治曰く、美人らしい。

『池上先生』

・星波学園の不良保険医。
・常に禁煙パイプを加え、白衣を着ている。
・流血が好きらしい。

『メイド部部长』

・メイド部部长。星波学園高等部。
・何故か執事部部长と犬猿の仲。

『犬耳メイド武霊』

・メイド部部长の武装守護霊。
・犬耳で犬の尻尾を生やしたメイド。

・能力は不明だが、少なくとも犬と同じ能力を持っている模様。

『執事部部长』

・執事部部长。星波学園高等部。

・何故かメイド部部长と犬猿の仲。

『超能力者執事武霊』

・執事部部长の武装守護霊。

・超能力者が基になっているらしく、念動を使っていた。

『ゴスロリ女』

・夜衣斗の逆鬼ごっこに参加していたゴシッククロリータの服を着た少女。

『テディベア武霊』

・ゴスロリ女の武装守護霊。

『黒子』

・夜衣斗の逆鬼ごっこに参加していた黒子。

『宮本武蔵の武霊』

・黒子の武装守護霊。

「とりあえず夜衣斗君とその周りの人達の簡単な紹介でした」

「……………なんか最後の方チヨイ役の連中まで紹介してないか？」

「んふふ。確かに今の所チヨイ役だけだねえ」

「……………意味深だな……………まあ、次章で出てくるって事なんだろう？」

「わくー」

「……………ぎくって……………まあ、次章をお楽しみみて所か……………」

「そうそう。じゃあ、次は敵役の紹介に行きましようか」

「……………敵役ね……………じゃあ、その前に『宿命の悪意』について少し説明した方がいいんじゃないか？」

「それもそうねえー」

『宿命の悪意』

・武装守護霊本編各章のバックテーマ。

・人が常に身に宿している逃れられない宿命の様に存在する悪意の事で、人は常にこの悪意と戦い打ち勝つ事により文明文化を作り、社会を構築し、国を気付き上げている。

・夜衣斗はこの宿命の悪意を、少なくとも七つ『渴望』『本能』

『快樂』『支配』『恐怖』『守護』『選択』の悪意と戦わなくてはいけないらしく、その全てに夜衣斗の死の運命が関わっている為、夜衣斗は宿命の悪意に関わる度に生と死の選択に迫られる事になる。

「……………七つの宿命の悪意ね……………」

「少なくとも夜衣斗君は後四回は死にそうな目に遭うって事だよなっ？」

「……………楽しそうだな」

「だって、夜衣斗君が大変になればなるほど、マスメディア部としてはネタに困らないって事じゃない」

「……………」

『田村さん』

・プロローグにて夜衣斗を助けた直後に不意打ちの攻撃を喰らい死亡し、はぐれ化を起こした星波町自警団員。

・短髪で、目付きの鋭い中肉中背の成人男性。

・オウキの力により一命は取り留めているが、はぐれ化により意識不明になっており、武霊使いではなくなっている。

・結婚しているらしく、プロローグ後、武霊使いではなくなった

彼の星電は、奥さんの許可を得て夜衣斗に提供されている。

『しじきまのたまご剛鬼丸』

- ・ 田村さんの武装守護霊。
- ・ その姿は戦国武将が着る様な鎧甲冑。
- ・ 岩すら簡単に破壊する力、瞬時に再生する鎧、鎧の下にある強固な外骨格、鎧の下にある目から発せられる周囲を消滅させる閃光その閃光を利用した直線的な急加速と飛行つと強力な能力を持つ。
- ・ はぐれ化を起こし、プロローグにての最大の敵になる。

『たかがみれいが高神麗華』

- ・ 第一章の敵。
- ・ 対応する宿命の悪意は、『渴望の悪意』。そして、そのものであり被害者。

・ その能力で欲した武霊を手に入れる為に武霊使いを何十人も殺している為、武霊使いを最も殺している犯罪武霊使いとして恐れられていた。

- ・ 星降り山の中腹にある廃校を不法占拠し、拠点としていた。
- ・ どこかの町にあった地下売春組織で産まれ、産まれた頃から売春を強要されていた女性。その為、不安定で常に狂気を孕んだ雰囲気を持ち、人としての価値観は皆無で、欲しいと思つた物は人を殺してでも手に入れる。

・ 客の一人をたぶらかし、地下売春組織が保有していた銃器などを使って壊滅し、警察などから逃げつつ町から町へ移り、三年前に星波町にやってきた。

・ 地下売春組織では様々な名前で呼ばれていた上に、名前を与えられていない為、高神麗華は自らで付けた。

・ 基本的な知識は地下売春組織で唯一与えられていたテレビからで、特にアニメを見ていたらしく、自ら付けた名前もアニメから取っている。また、その影響か、欲しがる武霊はテレビでやっていた

ものが基になったものが多い。

・地下売春組織で、客の余興の為に弟として宛がわれた礼治に触れる事により、人間らしさを一時期手に入れていたが、異常な環境でそれが持つ筈もなく、より壊れる切っ掛けになっている。

・夜衣斗の武霊オウキを目撃し、手に入れようと襲い掛かるが、返り討ちに遭い、手に入れていた全ての武霊を失い、逃げた所を大原亮に武霊を奪われている。

『高神麗華の武霊』

・高神麗華の武装守護霊。

・名前が付けられていない様で、自身の武霊を高神麗華が呼んだ姿を誰も見た事がない。

・その姿は血の様な赤色のスライム。だが、喰らった武霊の姿にもなる事が出来る。

・武霊使いごと喰らい、消化する事でその武霊使いの武霊を手と言える事が出来る能力がある。

・手に入れた武霊は、分裂体として本体から出す事が出来る。ただし、その分裂体の姿は全て血の様な赤色になる。

・分裂体は、手に入れた武霊の核を基にして造られている為、倒されると消滅する。いわば、制御出来るはぐれ化。

『たかがみ れいじ高神礼治』

・高神麗華の自称弟。

・対応する宿命の悪意は、『渴望の悪意』。そして、そのものであり被害者。

・高神麗華がいた地下売春組織に誘拐され、売春を強要させられていた少年。

・誘拐される前から人として枯れていた少年で、全てに興味を持っていなかった。だが、誘拐された先であてがわれた麗華の壊れた不器用な優しさに恋をし、決して報われない思いの為に彼女を弟と

して演じ続けていた。その裏では、壊れた姉を守る為に、姉とは違う罪を重ねていた。

・ 夜衣斗と戦い弱った姉を守る為に、襲い掛かる大原亮と朝日竜子と戦い、姉と共にブルースターに喰われて武霊を奪われた。

『キゾウ』

・ 高神礼治の武装守護霊。

・ その姿は機械で出来た象。

・ 耳を大きくして空を飛び、鼻から炎を吹き、口から小型のキゾウを出す事が出来る。

『五月雨都雅』
さみだれ とが

・ 第二章の敵。

・ 対応する宿命の悪意は、『本能の悪意』。そして、そのもの。

・ 本能に支配された理性を持ち、本能のおもむくまま様々なものを壊していた。その為、星波町に来る前から様々な事件を起こしていたが、本能に支配された理性により捕まらない様に動いていた為、星波町に来るまで一度も警察に捕まった事がなかった。

・ 僅かな理性の抵抗か、数を数える癖がある。

・ 手に入れた武霊の力で連続婦女暴行を犯した。そして、飛矢折巴を襲った事で黄道美幸に倒され捕まる。だが、武霊チルドレンにより脱走させられ、武霊強化技術と武霊使い強化薬の実験台にされ、再び飛矢折巴を襲った事で夜衣斗と対峙し、夜衣斗が何とか倒す事に成功するが、その直後に麗衣の武具王によりはぐれ化を起こすほどの致命傷を負われ、以降行方不明になる。死体も見付かっっていないので、実験のサンプルとして武霊チルドレンに回収されたと思われる。生死は今の所不明。

『クラツシュデビル』

・ 五月雨都雅の武装守護霊。

・その姿は、狼の頭に、羊の角を持ったどこか悪魔を連想させる
獣人。

・拳に触れた物を粉碎する能力を持っている。
・警察署の留置場から脱出後に武霊チルドレン達により武霊強化
処置をされていた様で、夜衣斗が事前に最後の敵から手に入れてい
た能力に加え、拳を振るう度に拳に付いたカウンターが周り、その
分だけ破壊力がプラスされる能力が付与されていた。

『不良のリーダー』

・楠木久思を密かにいじめていた不良グループのリーダー。
・自分自身の手は汚さず仲間に暴行させたり、人間には武霊を使
えない事を逆手に取ったりと、悪知恵は働く模様。
・偶然夜衣斗に久思をいじめていた場面を目撃され、口封じをし
ようとして逆にいじめの事を星波学園中に公にされてしまい、統合
生徒会により退学にされた。その後、武霊使いになって暴走した来
塚博により仲間を殺され、自身も殺されかけた時に武霊使いとして
覚醒し、逃げる事に成功する。そして、崩壊の切っ掛けとなった夜
衣斗に逆恨みし、夜衣斗を殺そうと二度襲い掛かり、二度撃退され、
最後は大原亮のブルースターに喰われ、武霊を失う。
・未だに本名が出てこないある意味不幸なキャラ。

『ミラーマン』

・不良のリーダーの武装守護霊。
・その姿は全身が鏡の人間。
・鏡から鏡へ移動する事が出来る能力の他に、鏡に映ったものに
化ける事が出来る。ただし、あくまで鏡に映ったもののみしか化け
る事が出来ない為、化けたとしてもそのものの能力や機能が鏡に映
ってなければ使う事が出来ない。映す鏡は武霊自身の身体でもいい。
その他にも、同じ能力の分裂体を造り出す事や、部分的に化ける事
も出来る。

『来塚博』
くわくじかひろし

・楠木久思の一樣の親友。

・独善的で強い正義感を持つているが、その正義を実行する為の努力をしようとしないうに、自身より弱い存在である楠木久思の前ではその正義感を振りかざし、強がって見せていた。

・武霊使いになる事を切望しているが、危険な目にあったりなど武霊使いになる為の条件を満たしていない為、武霊使いにはなれず、その為の危険を冒そうともしない。そのくせ、危険な目に遭って武霊使いになった者に対して憎しみに近い妬みを抱いていた。そこを付け込まれたのか、武霊チルドレン結衣に目を付けられ、強制武霊覚醒薬を渡され、その薬の実験体にされてしまう。

・強制武霊覚醒薬により武霊使いになった博は、正義感を暴走させ、親友だと思っている楠木久思をいじめていた不良グループを虐殺した。だが、その虐殺の犯人の容疑が表向き夜衣斗に掛ってしまった事に激怒し、夜衣斗に対する妬みも加わって襲い掛かるが、それそのものが夜衣斗の罠であつた為、捕まり逮捕された。

『シャドウリベンジャー』

・来塚博の武装守護霊。

・その姿は全身黒色で黒いコートを羽織つた顔のない男。

・影に潜り込み、影から影と移動出来る能力を持ち、その能力で人を影の中に引き込むと、シャドウリベンジャーを認識していない場合は、意識を失ってしまう。

『頂嬉武蔵』
いただきむさし

・第三章の敵。

・対応する宿命の悪意は、『快樂の悪意』。そして、そのもの。

・二メートルを超える大男。

・鬼走人骸と言う少年犯罪組織のリーダーで、元々はただの暴走

族だった鬼走人骸を犯罪組織に変えた。

・周囲の犯罪組織や警察にマークされるほど危険な人物で、武霊チルドレンから様々な違法薬物・危険薬物を手に入れていた様で、それを売り捌いていたと思われる。

・恵まれた体格の為か、子供の頃から快樂に支配された行動ばかりしている。

・他人に苦痛などの負の感情を与える事に喜びを感じている様で、普通なら躊躇する様な事でもあつさり実行に移す。

・西島ひよりを捕まえ、奴隷の様に扱った上に、その母親さゆりまで手を伸ばし、それを利用して夜衣斗の武霊オウキを借り奪った。

・不良のリーダーと接触していたらしく、さゆりを攫う際に協力させていた。

・奪ったオウキで美羽達を窮地に陥れるが、武霊チルドレンから提供された武霊使い強化薬で手下達が次々とレベル4のはぐれ化を起こし、孤立。その後、美春達を追い詰めるが、第二の武装守護霊キバを手に入れた夜衣斗により倒される。直後に自身が打った武霊使い強化薬の影響でレベル3のはぐれ化を起こし、夜衣斗は苦戦の末、美魅の能力を借りて武霊の核と武霊使い強化薬を破壊した。その後、レベル3のはぐれ化の影響で腕と足、胴の一部が消失したままになつていたが、夜衣斗の治療により身体は無事に治っている。ただし、レベル3のはぐれ化がどこまで影響を与えているか、まだ意識を回復していないので不明。

『ガチャポンマン』

・頂嬉武蔵の武装守護霊

・その姿は、カプセルトイに手足を付けた様な姿。

・頂嬉武蔵に対して借りる、もしくはそれに近い発言をした者の所有物（頂嬉武蔵が指定したものが対象）を強制的に借り、ボックスの中のカプセルの中に入れてしまう。そして、その借りたものをレバーを回して取り出す事により頂嬉武蔵もしくはガチャポンマン

が使う事が出来る能力を持つ。その借りる対象は武霊でも可能で、武霊だった場合は、ガチャポンマンがその借りた武霊の姿になり、その武霊の力を自在に使う事が出来るようになる。なお、借りた武霊が入っているカプセルには、その借りたもののミニチュアとその借りたものの説明書が入っており、頂嬉武蔵はそれを見て借りた武霊を扱う。

・一度借りると星波町の外に出ても、また星波町に戻れば有効になる。

・借りている武霊のほとんどは、鬼走人骸のメンバーの武霊。

・借りているものは、頂嬉武蔵の任意で所有者の手元に置く事も出来る。その為、自警団との戦いの最中は、オウキ以外の武霊を使えなかった。

・切り札として、ボックスを叩き割って全ての借りているものを使える様になるごちゃまぜ形体がある。

「……………何と云うか、色々な意味で濃い敵が多かったよな……………」

特に第一章のあの二人。いきなりあんなの出して……………どう考えても読む人がかなり引いたんじゃないのか？」

「ん〜この作品のバックテアである宿命の悪意を表すのにインパクトの強いキャラ設定をって考えてたら、あの二人が出来たみたいよ。ついでに言えば、ちょうど第一章の話を作っている時に、ああいうとんでもない事件がニュースに流れてたりしてたみたいだし……………」

その影響じゃない？」

「……………何にせよ……………あまりいい気分じゃないな……………」

「それに、まだあの二人の話は終わってないわよ？」

「？……………それはど」

「じゃあ、次行ってみましょうか」

「……………無視すんな」

『最後の敵』

- ・ 自称夜衣斗の最後の敵。
- ・ 名前も含めて謎が多い。
- ・ 四十代ぐらいの男性。
- ・ 歩く事が出来ないのか電動車椅子に乗っている。
- ・ 喉にはでたらめと言えるほどの手術跡があり、その影響で喋れないのか、乗っている電動車椅子に備え付けられているノートパソコンを使って喋る。
- ・ 自分に関した未来を見る事が出来るらしく、夜衣斗と自分を互いの最後の敵と言い、その未来に辿り着く為に夜衣斗に情報を提供しているとの事。

・ 夜衣斗同様運命を変えられた者の一人らしいが、その詳細はまだ語られていない。

・ 情報操作が施された事件の情報を知っていたり、外部から他人の携帯を操作出来たりと、高い情報収集能力や高度な情報処理技術を持っていると思われる。

『たかぎ やえ
高木弥恵』

- ・ 夜衣斗のクラスの担任。
- ・ 過去に目の周りにまで傷跡が残る怪我をしたらしく、全盲で傷を隠す為に大きめのサングラスを常に掛けている。
- ・ 全盲だが、視力を失った事により他の感覚が鋭敏になっている上に、抜刀術を基礎にした何らかの武術も会得しているらしく、慣れた場所なら健常者と同じ様に、慣れない場所でも杖などで発した音などを頼りに動く事が出来る。また、遠く離れた相手にも攻撃出来る手段があるらしいが、それがどんなものかは不明。武霊使いであるのかも不明。少なくとも武霊使いであるとは表向きは言っていない。

・ かなり寛容的な先生で、危険な場所に生徒が行くのを止めるところか一緒に行ったり、微妙に法律違反な事を見逃したりする。

・ 武霊チルドレンからお母様と呼ばれて慕われ、弥恵自身も娘の

様に扱っている。実際にどこまでお母様かは、まだ不明。

・武霊チルドレンからお父様と呼ばれている者との関係は今の所不明だが、少なくとも良い印象を持っていない様に思われる。

『大原亮』おおはらのひろし

・星波町で春先から続いている連続武霊強奪事件の犯人。

・赤井美羽とは幼馴染だが、春休みに武霊強奪犯だと判明した時に死闘を演じた。

・現在は、密かに付き合っていた朝日竜子に匿われつつ、星波町で起こる事件の裏で暗躍し、武霊強奪を繰り返している。その理由は今の所不明。

・星波町のいくつかの謎を知っている模様。

『ブルースター』

・大原亮の武装守護霊。

・その姿は青い人型のドラゴン。

・喰らった武霊・武霊使いの武霊を吸収し、その能力を使う事が出来る。

・武霊を奪い喰らうと、その反動でその武霊の基となったイメージの記憶や武霊使いの記憶を強制的に見せられてしまう為、一日に喰らえる武霊の数は最大二体。

『朝日竜子』あさひりゅうこ

・飛矢折巴が所属する部活女性護身武術部の部長。

・よく突拍子もない事を部員達に言い出し、巴達を困らせる。

・武術家としてもかなりの使い手であり、巴と同じもしくは上の実力を持つ。

・密かに武霊使いである上に、同じく密かに連続武霊強奪犯の大原亮と付き合っているだけでなく匿ってもいる。そして、亮と共に星波町で起こる事件の裏で暗躍している。

『龍王』
いおう

- ・朝日竜子の武装守護霊。
- ・その姿は東洋龍。
- ・この武霊を竜子が持っている事を知っている人間は少ない。
- ・竜子は基本的に龍王を具現化レベル0・5にして腕に巻き付けて使う。
- ・炎のブレス以外に、その血を飲むと一定時間無敵状態になれる能力がある。

「この四人の動向がこれからの先の物語に大きな影響を与えてくる訳だけど……………」

「……………つまり宿命の悪意のどれかに関わっている、もしくは、そのものつて可能性があるわけか……………」

「さあ？それはどうでしょう？」

「……………まあ、なる様になるだけさ」

「そうそう。じゃあ、この四人より更に更に物語に深く関与している子達『武霊チルドレン』の紹介に行きましょうか」

『武霊チルドレン』

・何者かにより収集された武霊使いのデータを基に造られたデザイナーズチルドレン。

・武霊使いとして高い能力と他の武霊を圧倒する能力を持った武霊を具現化する。

・今の所物語に登場している武霊チルドレンは五人。その全員が小学生ぐらいの女の子で、互いの事を姉妹として接している。本当に血の繋がりがあるかは不明。

・製造者であるとお父様と彼女達が呼ぶ存在の命令で星波町で暗躍しており、夜衣斗が遭遇する事件の裏にはかなりの確率で彼女達の影がある。

・夜衣斗のクラスの担任である高木弥恵をお母様と呼び、慕っている。

・夜衣斗とは今の所直接的な接触がない為、夜衣斗は彼女達の存在を知らないが、武霊チルドレン側は夜衣斗に注目している模様。

『華衣』

・星波町で暗躍する武霊チルドレンの長女。

・肩やお腹など所々に穴の開いた服を着たポニーテールの女の子。表面上は優しいが、本質的な優しさは一切ない。

・武霊チルドレンのリーダーである模様。

・星波町にいる妖怪などの存在を捕まえる役割も与えられている模様。

『華衣の武霊』

・どんな武霊かはまだ不明だが、少なくとも視覚出来る武霊でない可能性がある。

『呼衣』

・星波町で暗躍する武霊チルドレンの次女。

・必要な場所以外無い簡素な服を着たメガネを掛けた三つ編みの女の子。

・冷徹で、冷静な性格をしているが、予想外な事に弱く、気を許している相手には甘える。

・自身の武霊を使って、星波町の武霊を収集や、武霊チルドレン達が行っている実験のデータ収集などを担当している模様。

・鬼走人骸に武霊使い強化薬や忘却剤などを提供していた。

『無限万華鏡』

・呼衣の武装守護霊。

・万華鏡そのものの姿をしている。

・外装には端末である鏡があり、その鏡は遠くの場所を映す事が出来る上に、その鏡に映った武霊をコピーする事が出来る。そして、コピーした武霊は呼衣の意志力が尽きるまでコピー武霊として万華鏡の覗き込み口から出す事が出来る。その際に出てくるコピー武霊は、最初は粘土の様な姿で、呼衣の指定した武霊の姿になる。その能力はオリジナルと全く同じ。

・無限万華鏡の中に光を溜め、それを一気に放出する攻撃方法もある模様。

『結衣』

- ・星波町で暗躍する武霊チルドレンの三女。
- ・肘・膝まで袖を短くしてある服を着たショートカット女の子。
- ・口調が汚く、感情の起伏が激しい性格をしている。
- ・来塚博と楠木久思に接触し、彼らに強制武霊覚醒薬を渡した。

『結衣の武霊』

・結衣の武装守護霊。

・まだ登場していないので不明だが、喰い殺すと結衣が発言している為、少なくとも獣系だと思われる。

『麗衣』

- ・星波町で暗躍する武霊チルドレンの四女。
- ・フリルが異様に多い服を着たロングヘアの女の子。
- ・無口で、冷徹な性格をしているが、自身の武霊で何かを、誰かを切り刻む事に異様な喜びを感じている節がある。メールなどでのやり取りの際は、妙にテンションの高い文章になる。
- ・五女の芽衣とは仲が良く、芽衣をよくかばう。
- ・五月雨都雅を脱走させたり、実験が妨害されない様に幸野美春や大原亮を邪魔していた。

『武具王』

- ・麗衣の武装守護霊。
- ・西洋甲冑の様な姿をしている。
- ・全身からあらゆる武具を出す事が出来、それを自在に操る事が出来る。また、その操れる距離は視認範囲ならどんなに離れていても操る事が出来る。そして、武具達の強度は他の武具からの攻撃に一切ダメージを受けないほど高い。

『芽衣』

- ・星波町で暗躍する武霊チルドレンの末女。
- ・足下まである長い袖の服を着たツインテールの女の子。
- ・引つ込み事案な性格で、常にびくびくしており、かばってくれる麗衣が近くにいると常に麗衣の影に隠れる。
- ・五月雨都雅の脱出の手伝いをしていたので、他の姉妹のサポートを担当している可能性がある。また、三島忠人の監視もしている模様。

『芽衣の武霊』

- ・芽衣の武装守護霊。
- ・どんな武霊課は不明だが、地中を自在に移動できる能力を持っている模様。

『お父様』

- ・武霊チルドレンを造り、操っているであろう人物。
- ・どんな人物かは全て謎だが、武霊チルドレンから絶対の存在として恐れられている。

「……………今の所、俺に直接接触してきてはいないが……………やっぱり戦う事になるんだらうか……………はぁ」

「まあまあため息つかない。夜衣斗君は強いんだから」

「……………気楽に言ってくれ。武霊が強くて、俺自身が弱いんだからな……………はあ」

「もう！男でしょ。シャキツとしなさいな！次は次章の敵についてちよつとだけ紹介」

『みしまただひと
三島忠人』

・星波学園統合生徒会現統合副会長兼武装風紀委員会武装風紀委員長。

・目付きがかなり鋭く、その緩和の為か、常にメガネを掛けている。

・夜衣斗が初見から嫌な雰囲気を感じていた人物だが、夜衣斗の様な一部の人間を除いて周囲からは慕われ、頼りにされている。

・第四章の敵。

・対応する宿命の悪意は、『支配の悪意』。そして、そのもの。

・動機・目的共に不明だが、星波学園・星波町全体に何かをし、自身の武霊を使って飛矢折巴を操り、夜衣斗を襲わせた。

『ハーメルンの笛吹き男』

・名前は不明。

・その姿は民話ハーメルンの笛吹き男に登場する笛吹き男。

・笛の音で人間を操る能力。それ以外にも……………

「……………やっぱりこいつが敵になるわけか……………武装風紀委員長に選ばれるぐらいだから、強力な武霊使いなんだろうが……………

なんか、前の三人とはまた違ったタイプの様な感じがするな……………」

「そうだねえー前の三人は最初っから社会に所属していない犯罪者だったけど、今回は犯罪者じゃないもんね」

「……………むしろ全く逆の立場だと言えるな……………そんな人間が一体星波町に何をして、何をしようとしているんだか……………」

「それは次章でって事で」

「……まあ、そりゃそうだが……」
「ではでは、第四章『それぞれの裏、さまざまの真実』をお楽しみ
みに」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 1

????

人間は、

不合理だ。

不統一だ。

不等だ。

不易だ。

不可だ。

不直だ。

不会だ。

不知だ。

不測だ。

不学だ。

不足だ。

不断だ。

不束だ。

不軌だ。

不定だ。

不遜だ。

不快だ。

不堪だ。

不為だ。

不適だ。

だから、人間は、不全だ。

だからこそ、完全にならなくてはいけない。

だからこそ、完全にしなくてはならない。

その為に、必要な事をしよう。

例え何年かかっても、今の人間を完全にしよう。

例え今の人間がそれを望まなくても、やり遂げよう。
それこそが、違ってしまった俺の役割。
それこそが、先へ行き過ぎてしまった俺が生き残る術。
その為に全てを利用しよう。
他人も、社会も、自分自身さえ疑おう。
他人も、社会も、自分自身さえ利用しよう。
他人も、社会も、自分自身さえ偽ろう。
他人も、社会も、自分自身さえ捨て去ろう。
全ては人間を完全なるものにする為に。

夜衣斗

気が付くといつのも小さな公園のベンチに座っていた。
つで、俺の両隣にはショートカットとロングヘアの女の子がいて、俺によりかかって寝ている。

……………何だか妙に疲れた感じで寝ているな……………。
「今回、彼女達はどっちも大変な目にあってたから」
後ろからサヤの、若干気だるそうな声が聞こえてきて、同時に後ろから抱き付かれた。

……………いろんな意味で勘弁して……………
「しばらく我慢して夜衣斗。そうすれば、私も含めて直ぐに元気になると思うから」

元気になる？……………俺に触れる事で通常より意志力を得られるって事か？……………まあ、こういうのも悪くはないから……………それはいいんだが……………一体何なんだお前達って？喋れるから武霊じゃないと思うが……………。

「それもその内思い出すわ」
思い出すね……………そう言えば、この子達の名前はなんて言うんだ？

「まだないわよ」
は？まだない？何で？

「夜衣斗が付けてないからに決まってるでしょ？」

いや、決まってるでしょって言われても……… てつきり俺は、サヤと同じ様に……… 俺がサヤの名付けたんだだけ？

「そうよ」

全く覚えてないが……… まあ、その部分の記憶も封じられてるって事か……… まあ、その時に名前を付けているものだと思っただが……… 何でその時、俺はこの子達に名前を付けてあげなかったんだ？

「だって、あの時、この子達はいなかったもの」

いなかった？……… それはつまり、少なくともこの子達は運命を変える選択そのものじゃないって事か……… 一体運命を変える選択ってのは……… 俺は何を与えられたんだ？この子達が生じる何かとか？

俺の問いにサヤは何も答えない。

……… 答えられないのか、答えてはいけないのか……… 何にせよ。現時点で俺が知る必要のない……… もしくは、知るとまずい事なんだろうが……… なんかもんなのばっかだな………

「どうでもいいだわけど」

不意に下から美魅のけだるげな声が聞こえてきた。

姿は見えないな……… って、ベンチの下か。

「夜衣斗は随分呑気にしているだわね……… もしかして、どうしてここにるか覚えていないだわね？」

どうしてここに？……… あ！そう言えば、俺は飛矢折さんに！？
あの後どうなったんだ！？

「夜衣斗が意識を失って、外との繋がりが断たれてるだから、ここからだどうなったかは分からないだよ。あたいが外に出て確かめに行けば確認は出来るだわけど……… あたいも疲れてるだわね。今は勘弁してほしいだよ」

分かってるって……… あれだけの事を短時間にしたんだ……… 俺だって疲れてる……… まあ、俺がここにいられるのだから、少なくとも無事ではある事は間違いないだろう……… 最後の状況から考

えて、統合生徒会長が何とかしてくれたのかもしれない。まあ、起きたらまた捕まってるって可能性もなくはないが……。それにしても……。生徒会長、何である場所について……。飛矢折さんが危険だって知ってたんだ？そもそも、飛矢折さんは……。まあ、普通に考えれば武霊能力で操られてたんだろ？……。はぁ……。次から次に厄介な事が起きるな……。

思わずした大きなため息に、サヤは無言で俺の頭を撫でた……

……悪い気はしないが……。やっぱり、色々な意味で勘弁して……

……

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 2

飛矢折

ひんやりした感覚に、あたしは目を覚ました。

ぼんやりした頭を押さえながら、ゆっくりと上半身を起こして、
気付く。

誰かの手があたしの手首を強く握ってて……その手の先を見る
と、何故か意識を失っている黒樹君がいた。

意識を失っているのに、軽く外そうとしても外せないくらい強く
あたしの手首を握っている。

訳が分からず、周りを見回すと、妙に綺麗な、まるで巨大な錐で
穴を開けたかの様なトンネルの中だった。

壁をよく見ると、コンクリートじゃなくて……岩とか土とか……

……まるで山の中をそのままくり抜いた様な……こんな何にも支え
られていない状態でよく持つてるわね。普通は崩れる様な気がする
んだけど……もしかして!?!?ここって武霊能力で造られた場所
? …… あ! 武霊の事を思い出せる。と言う事は、少なくともここ
は星波町? でも、どうしてあたしはここに? …… 確か頭を怪我し
た赤井さんを病院に連れって……そこで……

一気に自分がした事を思い出した。

病院の中から現れた武装風紀委員長の武霊が笛を吹いた瞬間、あ
たしは彼の命令に逆らえなくなつた。

それはまるで、意識を保ったまま意志を奪われた様なそんな状態
だった。

多分、催眠術とかの一種だと思うけど……武霊が催眠術? ……
… 本当になんでもありね……とにかく、武霊の催眠術で意志
を奪われたあたしは、武装風紀委員長の命令のまま星波山のトンネ
ルに行き……そこで……そこであたしは……
身体が震えた。

自分の意志ではなかったとは言え、黒樹君に……黒樹君に、あたしは『禁じ手』を使ってしまった。

飛矢折流武術は、代々継承者が良いと思った他の武術を『何でも』吸収して自分達の技にしている。

だから、伝わっている技の中には冗談の様に『対人間用ではない技』があつて……その一つがあたしが黒樹君に放ってしまった……

……『内臓殺し』。

要は飛矢折流の漫画とかである浸透勁とか、鎧通しとか言われているもの。

そして、決して『人間相手に使つてはいけない禁じ手』と言われているもの。

最初、この技の存在を曾お祖父ちゃんから教えられた時、冗談かと思つてた……だけど、その時の曾お祖父ちゃんの真剣な様子と、実際にあたしが技を習得した事で……この技を使う事を想定した相手がこの世の中にはいる。そう確信してしまった……だって、練習用に使用したコンクリートブロックが粉々になる様な技だよ？ そんな技を実際に造らなくちゃいけない相手……曾お祖父ちゃんの話だと、『魔物』と呼ばれている化け物達がいなくちゃ、人間相手に過ぎた技過ぎる。だって、曾お祖父ちゃんの話だと普通の人間に対して使つと……即死……技？……何で黒樹君無事なんだろう？

見た所……黒樹君は何ともなさそうだった……いえ、よくよく口の周りを見て見たら、少し赤黒……血の様なものがふき取つた感じで付いている。

「黒樹君……」

不安になつて名前を呼ぶけど、黒樹君は僅かに胸を上下させるだけで、起きる気配はない。でも、呼吸が出来ているって事は、内臓は少なくとも無事って事になる……思つたより黒樹君は丈夫って事かな？

よくよく思い出してみれば、内臓殺しを放つた次の瞬間、黒樹君

はあたしの手首を掴み、PSサーバントの機能を使って電撃を放った。

それによってあたしは意識を失い……さつき目を覚ました。

PSサーバントの防御機能で威力が軽減されたのかな？……あれ？そう言えば、今、自分の意志で動けてる……何で解放されているんだろう？

そんな事を思っていると、不意に背後に気配が現れた。

条件反射的に裏拳を放つと、

「ぎゃあー!?」

と声が聞こえ、気配が消え、少し離れた正面に再び同じ気配が現れた。

?……瞬間移動の能力？

「いきなり何すんの!? 危ないじゃない!」

そう私を非難するいきなり現れた人物に視線を向けると……知った顔だった。

それもあまり会いたくない部類の。

「いきなり背後に現れるからでしょ?」

「む?確かにそれは言え……ないでしょうが!普通、いきなり裏拳をしてくる女の子なんていないから!怒るよ!ぶんぶん!」

……。

「何よ?」

「別に……」

むくれた様子の彼女に私は思わず苦笑した。

髪を後頭部でまとめたシニヨンヘアの彼女・マスメディア部長は早見芽印やみめいんは、どちらからと言うと可愛いよりカッコいい部類のきれいな顔付きをしてるんだけど……言動が見た目に会ってない上に……

「ん~それにしてもいい絵よね……いただきい」

いつの間にか手に持っていたデジカメであたしと黒樹君を撮る芽印。

「次の記事は、熱愛発覚！今話題の武霊使い黒樹夜衣斗と瞬殺女飛矢折巴！で決まりね」

とつぶやきながら写真を撮り続ける芽印。

芽印はマスメディア部の部長でありながら、条件反射的にゴシツプ系の記事に走る癖があつて、去年まで同じクラスだったあたしはよく記事にしようとしていた……。最近は大人しかつたから油断してたとも言えなくはないけど……。後で捕まえてデータを消去しなくちゃ……。でも、その前に、

「芽印。さつきまるで瞬間移動でもしたみたいに現れたけど……。もしかして、芽印が私達をここに？」

「せいかあ〜い」

何故かVサインをする芽印。

……。そっか、芽印がここに……。あれ？でも、

「芽印の武霊って、瞬間移動能力なんかあつただけ？」

「んふふ。ひ・み・つ」

……。

「……。まあ、でも、ともちゃんなら……。いいのかな？」

芽印の意味深なつぶやきが耳に入り、あたしは眉を顰めた。

ともちゃんと言われた事を含めての眉顰めだったけど……。それを問おうとした時、曲がって見えないトンネルの向こうから気配が二つ近付いてくるのを感じた。

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 3

飛矢折

二つの気配が走る速度で近付いて来る。

「どうしたの？」

あたしが誰もいない方向に顔を向けている事を不思議に思ったのか、芽印が話し掛けてきた。

「二人。こっちに向かってくる気配がするんだけど……ここに芽印以外の人がいるの？」

「ん？結構いるわよ……えっと、五十人くらい？
五十人！？」

「なんでそんなにこんな場所にいるの！？」

「そりゃ、ここが万が一の時の緊急避難所だからよ」

それはどういう意味？そう言おうとした時、二つの気配から声も聞こえてきた。

「待つて！駄目よひより」

「えー？なんでえー？芽印お姉ちゃんは行ってるんでしょお？ずるーい！」

「ずるくないの！まだあの子が大丈夫かどうか分からないんだから、近付いちゃいけないのよ。分かるでしょ？」

「わかんない」

「いい子だから待つて、ひより」

「やあー！私も夜衣斗お兄ちゃんの所に行くうー」

……何だろう？一人は成人女性の声なのは分かるけど、もう一人は……あたしと同年代ぐらいの声なのに、妙に幼い喋り方をしている様な……

そんな事を思っていると、三十代ぐらいの綺麗な女性と、その女性に似たあたしと同年代ぐらいの女性が現れた。

同年代ぐらいの女性……多分、ひよりさんは、外見に似合わない

幼い足取りであたし達に近付き、ちょこんとあたし……と言つより黒樹君の前に座った。

後ろから、三十代ぐらいの綺麗な女性……多分、ひよりさんのお母さんが息を切らしながら追い付き、あたしを見て、芽印に無言で問い掛ける。

その問い掛けに、芽印は頷き、

「大丈夫です。私達の予想通り、笛の音の届かない場所では催眠は持続されないみたいです」

笛の音？……あ！あの笛の音？……そう言えば、あたしが催眠状態になつている時、ずっとあの笛の音が聞こえていた様な……なるほど、あたしと黒樹君だけがここに寝かされていたのは、催眠状態がどこまで続くか確証がなかったからで、芽印はあたしが自分達の予想通り催眠状態から戻っているか確認する為に来たってわけね……

「夜衣斗お兄ちゃん。起きてえー」

唐突に意識を失っている黒樹君を揺するひよりさん。

その仕草は、本当に子供の様で……まるで幼稚園児までの記憶を残して記憶喪失になつた様な……

「起きてー」

「こら！止めなさいひより！」

「えーだつてー起きないんだもーん」

「だもんじゃありません。夜衣斗君は疲れているの……ゆっくり休ませてあげないと……」

やんわりと自分の娘を押さえ付けたひよりさんのお母さんは、あたしの方に顔を向け、

「ごめんなさい。この子、今……なんて言えばいいのかしら？

……幼稚園児ぐらいまでの記憶以外を失つて……」

「やっぱりそうなんだ……でも、

「どうしてそんな事に」

視線をひよりさんに向けると、ひよりさんは不思議そうな……

純真無垢な目をあたしに向け、黒樹君に握られているあたしの腕に視線を移し、小首を傾げ、再びあたしを見た。

「お姉さん。夜衣斗お兄ちゃんの恋人なの？」

「つな！」

「違うの？」

「え！？や、その、

「じゃあ、私が王子様やってもいいよね？」

「お？王子様？」

「うん」

意味が分からない言葉と、恋人と言ふ言葉に動揺していた事もあって、あたしはひよりさんの次の行動に直ぐに対応出来なかった。

「ちゅー」

夜衣斗

…………… 何だか騒がしい様な…………… だが、公園の中は相変わらずサヤ達以外誰もいない…………… 静かなもんな気がするんだが……………？

「そろそろ起きる時間みたいね」

そう言つて、サヤは俺から離れた。

同時に両隣の女の子達も起き、寝ぼけ眼の目をこすりながら俺の前に立つてドレスのすそを持ち、一礼。

何だか照れ臭くなり、頬を掻きつつ立ち上がる。

「今度この子達に会う時まで、この子達の名前を考えて置いてね」
そのサヤの言葉に思わず振り返ると、

「きつとその時が、再びの運命の選択の時だから」
「つな！？」

気が付くと、目の前に人の顔があった。
ん？……………なんか……………唇に柔らかい感……………触が？……………
ぎゃー！！！！

飛矢折

あたしも含めた三人が啞然とする中、ひよりさんは黒樹君と……………
唇を……………重ね合わせた！？
ぎゃー！！！！！！！！？

もう自分でもよく分かんない訳の分からない感覚に混乱しつつ、
物凄い早さでひよりさんを黒樹君から引っぺがした。

「しまった！シャッターチャンスだったのに！」
悔しがる芽印を睨みつつ、

「い！いきなり何をしているのかなひよりちゃん」

何とか自分の感情を抑えつつそう問うと、

「えー知らないのぉー。眠り姫は王子様のキスで目を覚ますんだ
よぉー」

とか言いだした。

逆でしょ！逆！……………と言うか、と言うか、落ち着くのよ巴。
相手は、記憶喪失で幼児化した人。言わば、幼稚園児の戯れ……………
って、身体は女子高生で、心は幼児って……………よりイケナイでしょ
うが！

もう、頭の中は大混乱。

っど、どうしよう。唯一の救い？は、黒樹君が起きて

「ほら、やっぱり起きたよお姉さん」
え？

ひよりちゃんの言葉に、反射的に黒樹君の方へ視線を向けると、
前髪から僅かに見える目が見開かれているのが見えた。

……………えっと……………この場合、なんて言ったら……………
「とりあえず」

それまで固まっていたひよりさんのお母さんが、唐突に口を開い

て、

「責任とつてね夜衣斗君」

とからかう様に言った。

その言葉に、驚きで固まっていた黒樹君は途端に動揺し出し、

「……………勘弁してください」

と言ったので、あたしは思わず笑ってしまった。

第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』 4

夜衣斗

え〜……………起きて早々……………何と言うか……………昨日と言いま今日と言いま……………いや、携帯で時間を見たらまだ今日だが……………今日はやけにキスされる日だ……………しかもそれが、ファーストで……………セカンドって……………まあ、相手が美人だからいいのか？……………って、よくないだろうが、一人目は人間じゃないし……………二人目はなんか幼児化しているし……………

(ショックを受けているのはいいんだけど、そろそろ手を話してあげないと、困ってるだわよ、巴が)
困る？

美魅の言葉に、自分の手を見ると、思いつきり飛矢折さんの手首を握っていた。

「……………つす、すみません。直ぐに離しま」
慌てて離そうとして……………何故か手がうまく動かない。

それでより慌てる俺に、飛矢折さんは

「大丈夫……………ゆっくり外しましょう」

そう言つて、俺の手に手を添えて、指を一本一本ゆっくり外し始めてくれた。

……………漫画とかドラマとかで、必死に握った手が硬直してうまく外せないシーンとか見た事があるけど……………まさか自分でそれを体験する事になるなんて……………思いもしなかったな……………と言つか、あの時どれだけ必死だったんだ俺は……………

恥ずかしいやら、申し訳ないやら、なんやら心がごにやごにやしている、俺と飛矢折さんの様子を見ていたひよりさんが、飛矢折さんの手首を握つてない方の腕を掴んで揺らした。

よく分らず視線を送ると、

「あのねあのね。お母さんから聞いたの。夜衣斗お兄ちゃんが私

を助けてくれたって。だからね。だから、夜衣斗お兄ちゃんは王子様で、お姫様なの」

「……………？……………えっと……………逆白雪姫？」

「妙に幼い口調と表情で俺に話しかけてくるひよりさんに困惑する俺。」

「黒樹君……………取れたよ」

飛矢折さんにそう言われ、握っていた手の方を見ると、半握りの状態になって……………何だか感覚が無い様な……………握られていた飛矢折さんの手首を見ると、くつきりと握った後が付いている。

「……………その……………本当にすみません」

くつきりと付いた後を見て、俺は申し訳ない気持ちになり、心のままにそれを言葉にしていた。

握られていた手の状態を確認していた飛矢折さんは、にっこりと笑って、俺の硬直した手を取ってマッサージをし始めた。

「また助けられたから……………ずっと腕を握られていた事なんて気にしないよ。だから、このマッサージも気にしないでいいからね」
「そう言いながらマッサージを続けてくれる飛矢折さん。」

……………気にしなくてもいいって言われてもな……………それにしても……………また助けられた……………ね……………そう言えば、今の飛矢折さんはあの時と違って、目に意志の光が戻っている……………一体、彼女は何を……………って、普通に考えれば、催眠術とかの武霊能力で操られてたんだろうが……………そんな事を誰にされたんだ？……………あの時の状況から考えて町内スピーカーから流れてきたあの笛の音が怪しんだが……………俺には影響なかったよな……………？……………何でだ？……………まあ、今はとりあえず……………

上半身を起こし、周囲を見回す。

まるで山の中をくり抜いたかの様な場所だった。

補強もなにもされていないのに、綺麗な断面のままなのからすると、武霊能力で造られたトンネル……………って考えるのが自然か……………そして、光源が近くに置かれている電気ランタンである事も合わ……………

せて考えれば……ここは普段は使われていない場所で、意識を失った俺や飛矢折さん、西島を、統合学園長がここに連れてきたのは分かるが……ここ……どこなんだろう？……まあ、武霊の事を思い出せる事からして、星波町のどこかなのは分かるが……

……いや、今はそんな分からない事より、ひよりさんの事だな

……

「……………」

西島さんに呼び掛けようとしたら、ひよりさんも反応しそうだったので、若干抵抗があるが、

「……………」

「なあに夜衣斗君？」

名前で呼ぶとさゆりさんは、少し意外そうな顔をした。

まあ、意外なのはわかるが……………」

「……………」ひよりさんは、起きた時からこうでしたか？」

俺の問いにさゆりさんは、困ったような、心配そうな顔になり、ひよりさんを見て、頭を優しく撫でた。

撫でられたひよりさんは、気持ち良さそうに撫でられるままになっている。

「記憶喪失……………」みたいなの……………」夜衣斗君があの時、身体の損傷だけはって言ったのは……………」こういうことだったのね」

「……………」はい……………」その……………」こうなる事は予想はしていましたが……………」俺の武霊の能力は、ほとんどが科学的なものですので……………」まあ、子供の頃から創っているものですから、かなり曖昧なところあるんですが……………」忘却剤の効果がどれくらいまであるのかは分かりませんが……………」もし、いえ、この場合は、ほぼ確定だと思いますが、脳細胞を、シナプスなどを死滅させるようなものであった場合、修復を出来ません。そうなると、非科学的な武霊能力に頼る必要がありますが……………」

チラッとさつきからパシパシとデジカメを撮っている知らない女の子を見た。

状況から考えて、彼女は統合生徒会長の仲間……なのだろう。そして、統合生徒会長に仲間がいるのなら、彼女一人だとは考え難い。だとすると、その中に治療系武霊使いがいる可能性が高い。何故なら、多分寸頸であろう飛矢折さんの攻撃を受けた胸に、全くの痛みを感じていないからだ。あんなPSサーバントを貫通する様な攻撃を受けて無事なはずはないから、誰かが治療をしてくれた……まあ、そう考えたんだが……

「ん？」

視線に気づいたデジカメの女の子は、一瞬首を傾げて、

「あ〜……えっと……非科学的な方面も無理だったよ」

……少し妙な間があった気がするが……まあ、なんにせよ……

「……非科学方面もだめだったとすると……魂レベルで傷を付けられている可能性があります。そうなると治る見込みは………時間回歸ぐらいしか思いつきませんが……果たしてそんな強力な事が出来る武霊がいるかどうか……仮にいたとしても、望む結果が得られかどうか……まあ、仮定の話をしてもしょうがないですが……」

「……そう……じゃあ、ひよりは……もう……」

ひよりさんに自分の顔を見せない様にする為か、辛く悲しい顔になったさゆりさんは、後ろからひよりさんに抱き付いた。

抱き付かれたひよりさんは、ん？という感じで、さゆりさんの腕を見ている。

「……本人を前にこんな事を言うのはなんです………考えようによっては、記憶が戻らない方がいいかもしれません………都合よく戻って欲しくない記憶だけが戻らないなんて事………起こる可能性も低いと思いますから………」

俺がひよりさんの着ているぼろぼろのワンピースを見て言った言葉に、

「……そう………かもね」

辛く悲しい顔のままさゆりさん微笑んだ。

その顔を見て、居た堪れなくなった俺は、視線をひよりさんへと向けた。

母親に抱き付かれているのが嬉しいのか、ニコニコ顔のひよりさん。

ふとある可能性が頭に浮かんだ。

忘却剤は嫌な事を忘れる薬だと頂嬉武蔵は言っていた。

それはつまり、武霊によって作られたものじゃないと言う事。

そして、自分達の主力商品だとも言っていた。

……だとすると……リピーターがいなくてはいけない……

……試してみるか……

「……ひよりさん」

「なあに夜衣斗お兄ちゃん？」

俺の問い掛けに、ひよりさんは純真無垢な笑顔を俺に向けてきた。

……この年齢でその笑顔は……色々な意味で勘弁してほしい

……とにかく、

「……君は今何歳？」

俺のその問いに、ひよりさん以外の三人が唐突に何を言ってるん

だと言う顔を俺に向けてきた。

「んつとね……十六歳！」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 5

飛矢折

十六歳？

ひよりさんが言った言葉に、あたしは思わず黒樹君の手のマッサージを止めてしまった。

直ぐに再開し様としたけど、

「……………飛矢折さん。もうマッサージはいいです……………その……………ありがとうございます大分楽になりました」

そう言ってく、黒樹君は硬直していた手を開いたり閉じたり見せてくれた。

……………これなら大丈夫そうね……………それにしても、黒樹君はひよりさんの言葉に驚いていないみたいね……………予想していたってこと？……………でもどうして？

あたしの視線に気付いた黒樹君は、少し考えて、

「……………鬼走人骸は忘却剤……………ひよりさんに使われた薬の事で、使うと一瞬で全てを忘れる薬だと頂喜武蔵は言っていました……………つで、それを主力商品にしていたようですから……………だとすると、売った相手がまた使いたくならないといけません」

「えっと……………それって、どういうこと？」

「……………多分、軽い使用なら少しの間の忘却で、例えば大量に使用したとしても、生活するのに支障が出る領域まで完全忘却しない様になっっているんでしょう。でなければ、リピーターが付きませんし……………依存性の強い危険薬物などはそう言う相手を商売相手にするそうですから……………要するに、思い出は消しても、知識は消さない薬だと言つことですよ……………まあ、それでも、ひよりさんはかなりの量を吸わされたみたいですから……………見た限り、思い出に関する記憶は幼稚園児ぐらいまで、知識に関する記憶も一部を忘却している可能性がありますね……………じゃないところなっている理由の説明が

出来ません」

そう言つて、黒樹君はひよりさんに幾つかの質問をした。

小中高校生が習う事を順に聞き、その全てにひよりさんは答え、
答えたひよりさん自身も驚いている様だった。

「すごいすごい。何で分かるんだろう。どうして?どうして?」
何だか楽しそうに周りに聞いているけど……どう答えたものだ
ろう?

正直に話す?あなたは思い出を失つて……でも、そんな
事を今の彼女に言つて理解出来るのかな?……そもそも、そんな事
を言つて大丈夫なのかな?

芽印とさゆりさんを見ると、あたしと同じ様に困つた表情をして
いた。

そして黒樹君を見ると、

「……………不思議だね」

え!?黒樹君!?

「うん!不思議い」

……………あ……………それでいいんだ。

若干困惑した様子のさゆりさんに「不思議い不思議い」と連呼す
るひよりさん。

「……………まあ、子供は単純ですから……………」

ぼそつとあたしに聞こえるか聞こえないかの声で黒樹君はそうつ
ぶやいた。

そりゃそうかもしれないけど……………でも、

「思い出と一部の知識が無くなっただけで幼児化するものなの?」

「……………さあ?」

さあ?つて……………

「さつき理由の説明が出来ないとか言つてなかった?」

「……………俺は専門家ではありませんし、さつき言ったのは、ひよ
りさんの様子と、俺の知り得る限りの知識から導き出した素人考え
です。ですから、本当にそうなのは正直言つて……………分かりませ

ん

「でも、素人だったとしても、少なくともあたしよりは正しい考えだと思っけど？」

「……………俺の知識はほとんどが漫画とかゲームとかから得られたものです。そんな知識から導き出された答えなんて……………信憑性に欠けるでしょ？」

「……………そうかな？」

あたしの心からの疑問に、黒樹君は力無く苦笑した。

……………この自信の無さ……………いつかどうにかなるのかな……………何だか心配になる。

「……………本来なら、すぐにでも精神科医見せるべきなんでしょうか……………」

芽印に視線を向ける黒樹君。

黒樹君の視線に、撮った写真をチェックしていた芽印は、黙る黒樹君に首を傾げる。

何だか躊躇しているように見えた……………何を？

「……………今……………町はどうなっていますか？」

その黒樹君の問いに、撮った写真のチェックをしていた芽印は、少し考えて、

「ん……………ここでその話をするより、とりあえず、みんなの所に行かない？」

芽印の案内で、無数に枝分かれしたトンネルの中を進む中、あたしは自分の身に起こった事を黒樹君に説明した。

赤井さんの頭の怪我の事や、病院に行く途中で見たおかしな様子の自警団の人達、そして、病院で武風委員長長の武霊により催眠術らしきものを掛けられた事を。

「……………笛の音を聞いた途端に意志が奪われた……………そう言う事ですよね？」

あたしのお話を聞き終わった黒樹君は、そう言って、先頭に行く芽

印を見た。

「……………雨合羽の集団が自警団員で、耳にはイヤホン……………俺が頂喜武蔵を倒した後に町内放送から流れ始めた笛の音……………そして、この場に笛の音は聞こえないから、飛矢折さんは催眠から解放された……………なるほど」

思考をまとめる為か、独り言をつぶやく黒樹君……………何がなるほどなんだろう？

「……………さゆりさん達は、どうしてここに？」

「黒樹君が行った後、芽印ちゃんが来て……………瞬間移動なのかな？で、ここに連れて来てくれたんだけど……………高木さんが」

言いよどむさゆりさん。

高木さんって事は、あの後黒樹君達と合流したんだ……………

「……………先生がどうしたんです？」

「急ぎの用があるからって、町の外に出てってしまったの」

？……………急ぎの用？あの状況で？ん？……………よっぽど大事な用だったのかな？

「……………まあ、町の外に出たのなら、先生は間違いなく無事なんでしょう……………」

そう言って、黒樹君は再び芽印を見た。

……………なんか妙に芽印を気にしている様な……………なんでだろ？……………

……………まあ、芽印は本性を隠していれば、見た目だけは美人さんだし、気になるのは無理も……………ないかな？……………何だか……………

……………えっと……………ん……………。

しばらくして、たどり着いた先は、広いドーム状になった場所だった。

その場所には、芽印がさっき言った通り、五十人ぐらいの星波学園生徒と一部の教師が思い思いに座っていて……………なんなんだろうこの人達？ざっと見た限り、この場にいる人達の間にも何の関連性もないように見える。小学生・中学生・高校生・大学生・教師。全く違

う部活・委員会の面々。普段そんなに接点がなさそうな人達がこの場に集まってて……………何だかものすごく不自然に見える。

そして、その不自然な集団の中心に琴野統合生徒会長がいた。

「やつほお〜沙羅ちゃん。やつぱり催眠は解けてたよお〜。でもって、二人連れてきたから」

「ご苦労様ですわ。芽印さん。黒樹様。飛矢折様。お二人だけでも御無事だったのは、本当に何よりですわ」

統合生徒会長は、座っていた折り畳み椅子から立ち上がり、あたし達に若干疲れが見える微笑みを向けた。

「起きて早々に申し訳ないですけど、お二人には現状の説明をしますので、ここにお座りになってください」

そう言っつて、他の生徒が用意してくれた折り畳み椅子に座る事を促す統合生徒会長。

あたしが促されるまま座ろうとすると、黒樹君が一步前に出て、手で座る事を制した。

「黒樹君？」

「……………その前に、いくつか確認したい事があります」

明らかに警戒した様子の黒樹君。

……………もしかして……………さっき芽印を気にしてたのって……………

「何でしょうか？」

黒樹君の警戒する様子に、戸惑った微笑みを浮かべる統合生徒会長。

「……………あんだ達は一体何者なんだ？」

その黒樹君の問いに、あきらかにこの場の空気が変わったのをあたしは感じた。

第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』6

飛矢折

黒樹君の問いと共に、この場の空気が一気に張り詰めた。

そして、統合生徒会長だけでなく、周囲にいる全ての人が、黒樹君を……いえ、黒樹君の背後に視線を向けていた。

明らかに何も無い場所だけど……きつと武霊使いにはオウキが見えている……それは黒樹君が、それだけ警戒しているんだろうけど……どうして？……あれ？そう言えば、黒樹君はオウキを取り戻してるんだよね……それってつまり、あの男を倒したって事？……確かにさっきそうつぶやいているのを聞いたけど……でも……どうやって？

「何者とは……一体どう言う意味ですか？」

統合生徒会長は、片手だけの静さで何かをしようとしていた周囲の動きを止めつつ、黒樹君に問い返した。

あたしは浮かんだ疑問をとりあえず頭の隅に置いて、周囲の動きを、特に瞬間移動が出来る芽印の動きを警戒する。

黒樹君が統合委員長達をあやしく思っているのは間違いなくて、その根拠があたしには全く分からないけど、信頼出来るのはどっちかって言ったら……あたしは迷わず黒樹君を選ぶ。

少なくとも、黒樹君は余程の確信がない限り、わざわざ一触即発になる様な事を言うはずがない。

そう思い、同じ思いなのか、西島親子が、周囲の緊張に合わせて黒樹君の背後に寄る。

あたしはいつ何が起きてても、対応出来る様に身体の力を抜く。

そして、黒樹君と統合委員長との会話は続く。

「……飛矢折さんや西島さん達の話から、今、星波町は武風紀委員長……三島忠人の武霊によって町全体が洗脳による支配下にある。そう予想しましたが……違いますか？」

「はい。その通りですわ」

？

「……………三島忠人の武霊の能力は、『笛の音を聞かせ続けている相手の意志を奪い、洗脳状態にする能力』。そしてその能力の範囲は、町内放送などの間接的な音や、録音した音でも可能……………違いますか？」

「録音した音で可能かまではまだ確認できていませんが……………はい。その通りだと思いますわ」

「……………町内放送で笛の音が聞こえる前に、飛矢折さんも俺も、耳にイヤホンを付け、微動だにしていない自警団の人達を確認していますから、多分、録音した音でも可能なのは間違いないでしょう」互いに問われた問いに答えず、何故か情報交換をし始める黒樹君と統合生徒会長に、この場のほとんどから疑問の視線が集まる。

二人はその視線を特に気にすることなく、会話を続けるんだけど……………どう言う事？

「……………能力の対象は、人のみなのですか？」

「いいえ。わたくし達が聞いていたのは、はぐれのみを操れると言う事でしたけど……………実際は武霊・人などの意識あるものなら何でも操れるようですわ。ただし、武霊使いの場合は、効果が現れるまで若干時間が掛る様ですわ」

「……………つまり、騙されていたわけですね……………それで、三島忠人がこんな事をする訳は分かりますか？」

「いいえ」

「……………そうですね……………」

そうつぶやくと、黒樹君は目を瞑り、思考にふけり始めた。

沈黙がこの場を支配し、唯一雰囲気を見殺した芽印のシャッター音のみが聞こえ……………とりあえず芽印を睨んでおく。

少しして、

「……………俺が何者かとあなた達に聞いたのは」

ぼつりと口にし始めた黒樹君の言葉に、この場の全員の注目が集

まる。

「……………あなた達が三島忠人の武霊能力に支配されていないからです」

「……………支配されていない？……………え？だって、ここは笛の音が無いから、それは当たり前なんじゃ？」

「それは……………ここは音が届かない場所ですから」

あたしも思った事を統合生徒会長は言っただけど、それで黒樹君が納得する様子は……………全く無い。

「……………状況や知り得た情報から考えて、三島忠人が支配を始めたのは、星波学園から……………違いますか？」

「確かに……………その通りですわ」

「……………なら、あなた達がここにいるのは不自然になる」
そう言つて、周りを見回す黒樹君。

……………確かに、武装風紀委員長が星波学園から支配を始めたのなら、学園にいたであろう統合生徒会長とか、周りにいる学生や教師の人間がここにいるのはおかしい。

視線を統合生徒会長に向けると……………困った顔をしていた。

「では、黒樹様は、わたくし達の事を何者だと予想なさっているのですか？」

統合生徒会長の問いに、黒樹君は驚くべき予想を口にした

「……………端的に言えば、あなた達を、どこまでの、とは断定できませんが……………『黒幕』ではないかと疑っています」

夜衣斗

俺の黒幕発言に、周囲にざわめきが起こり、統合生徒会長は、困った顔を更に困った顔にした。

いや、どちらかと言うと、悩んでいる顔だろうか？

……………まあ、人と中々コミュニケーションを取らない俺だから、人の表情をうまく読み取れていない可能性はあるが……………とにかく、疑っている理由を話すか……………しかし、この反応からすると……………

…まあ、少しでも可能性があるなら、警戒は解かない方がいいだろうな……………

背後にいる非具現化状態のオウキと、出してもいないキバをいつでも具現化出来る様に二体を軽くイメージしつつ、

「…………… 武霊能力が効かない。しかも、武霊そのものまでに効果を及ぼす武霊能力が効かない。そんな事が出来るとなると、それだけでも黒幕、もしくはそれに近い…………… そう疑うのに十分だと思いますが？」

「違いますわ！わたくし達は断じてその様な者ではございません！」

「…………… では、何故、無事だったんですか？」

「それは……………」

□ごもる統合生徒会長。

…………… なんであれ、何かが彼女達にはあり、それを隠している事は間違いない…………… か。

「…………… 助けてくれた事には感謝をしますが…………… 正直、今の段階ではそれに裏がある様にしか思えません」

「そんな！わたくし達がそんな人間に見えるのですか？」

「…………… 見えるも何も、俺はあなた達の事をたいして知りません」
「今、わたくし達がここに追い詰められていると言う現状だとしてもですか？」

「…………… 仲間割れ。実験の失敗…………… 現状ではどうとでも疑えます」

「確かにそうかもしれませんが…………… それをおっしゃるのなら、黒樹様。あなたにだって言える事ですよ」

「…………… 俺にも武霊能力が効かなかった事を言っているんですか？」

「ええ」

…………… まあ、そりゃそうだが…………… 思い当たる事はいくつかあるが、そのどれが正解だが、あるいはその全てが正解か、もしくは全

く違う要因か……今の俺に分かりようもない……ん……予測はたてられるが、それを口にしてもいいものか……

「ですが、それだけではありません……黒樹様。あなたはあまりにも他の武霊使いと違い過ぎますわ」

……なるほど、統合生徒会長側も、『俺を疑っていた』わけか……まあ、それも当然と言えば当然か。統合生徒会長の言う様に、俺はあまりにも今までの武霊使いと違い過ぎる……俺が統合生徒会長と同じ立場だったら、同じ様に疑うのは間違いない。

「星波町に来て初日で武霊使いになり、常人を遥に超える意志力を持ち、二体目の武霊まで寄生し、具現化させた」

……どうやら、頂喜武蔵戦は何らかの方法で見られていたみたいだな……まあ、いつかはばれる事だし、それはいいが……

「……正直に言いますわ。わたくし達も、黒樹様を疑っているのですわ」

若干の逡巡の後、何かを決意した統合生徒会長は、俺に向かってはっきりとそう言った。

まあ、お互い様か……

「……俺が黒幕、もしくはそれに近いと？」

「いえ、違いますわ」

ん？違う？

「わたくし達は、黒樹様が『魔法使いと接触した』。そう疑っているのですわ」

はあ！？魔法使い！？

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 7

夜衣斗

魔法使い。

美魅から聞いた話によると、魔法使いは昔、退魔士によって滅ぼされた。

そして、世間一般では、魔法使いと言う言葉は、全くのファンタジー。

なのに、その言葉が出てくる……と言う事は、つまり、ここにいる統合生徒会長達は……

「……………退魔士の可能性が高い……………か」

魔法使いと言う予想外の言葉に、俺は思わずそっぽそつとつぶやいていた。

瞬時に、このタイミングでそれはまずいだろ！と気が付き、聞こえない事を祈りつつ、視線を統合生徒会長に向けると……………驚愕の表情になっていた。

「どこでその言葉を!？」

「……………漫画やゲーム」

「違いますわ!今のタイミングは、どう考えても、退魔士の事を知っているタイミングですわ。一体、誰から!それともやはり魔法使いと接触してしまわれたのですか!？」

急にヒートアップした統合生徒会長に、俺は困惑するしかないが……………さて、どうしたものか……………と言うか、接触してしまわれた?……………まるで、俺が魔法使いと言う輩に接触される環境・状況にいて、接触してはいけない……………みたいな言い方だな……………ん……………もしかして、俺の、俺自身の知らない何かを、統合生徒会長達は知ってるって事なんだろうか?ふむ……………頃合いを見て鎌を掛けて見るか……………

「お答えください黒樹様!」

詰め寄ってくる統合生徒会長の前に、それまで黙って俺の斜め後ろにいた飛矢折さんが前に出て、進路を塞いだ。

チラツと見た飛矢折さんの顔を見ると……………全くの無だった。

うわ……………完全な戦闘モード……………

飛矢折さんのその様子に、統合生徒会長は少しクールダウンした様で、

「黒樹様。このままわたくし達同士が疑い合っている意味がありませんわ」

そう言っつて、目を瞑り、深く息を吐いて、目を開け俺を見た。

「黒樹様は、退魔士が実在する事をご存じなのですね。どこまでご存知なのですか？」

……………まあ、ここで嘘を吐いても意味がないな……………

ため息を軽く吐き。

「……………詳しい事は知りませんが、退魔士が実在し……………魔法使い達はその退魔士達に滅ぼされた。そう聞いています」

俺の返答に、統合生徒会長は少し驚いて、小首を傾げた。

「……………確かに魔法使いは退魔士に滅ぼされていますが……………随分古い情報ですわね」

古い情報？

「魔法使いは、いえ、魔法技術は、三十年前に『ある人物』の手により、現代の解釈と技術によって復元されています」

「はあ？復元された！？……………おい、美魅、これはどう言う事だ？てかホントか？」

（さあ？どうだか分からないだよ）

なんだそりゃ？

（あの時も言っただけけど、あたいは町からあまり出た事がないだよ。それに、大体あたいは普段どこかの物や人の心の中に入っ
て寝てるだよ？そんなあたいが情報通なわけないだよ）

……………お前は引き籠りか……………

（引き猫だわね）

……なんか嫌なネーミングだな。

(そうだね?)

などと心の中でやり取りをしていると、ふっと何かを感じ、その感じた方向に視線を向けると……そこには、逆鬼ごっここの時に見たゴスロリ女がいた。

……? ……なんか、ぞわぞわするな……

妙な違和感を感じた時、

(夜衣斗!見られているだよ!)

はあ?そりや見られているだろ?

(違うだよ!あのゴスロリっ子に、心の中を見られているだよ!)

っな!

飛矢折

話が魔法使いとか、退魔士とか……武霊よりとんでもない話になってる。

しかも、その話になった途端、急に統合生徒会長が黒樹君に近付いたので、思わず邪魔をしてしまった……余計な事をしたかと思つて、統合生徒会長に注意を払いながら、黒樹君を見ていたら……不意に視線をたまに学校で見かけるゴスロリ同好会の人を見て……どこか焦つた、困つた雰囲気になった。

視線に気付いたゴスロリ同好会の方は、少し驚いた様子になって、「沙羅お姉様。黒樹様は本当に魔法使いに会った事がないようですが、心の中に、武霊以外の何かがあります」

「優癒!?!」

唐突な報告に驚きの声を上げる統合生徒会長。………と言つかお姉様?………どう見ても姉妹じゃなさそうだけど………あたしには分からない世界?

「お姉様。今更隠しても意味がありませんわ………それに、わたしの『心読み』はばれてしまっている様ですし」

心読み？

その優癒さんの言葉に、黒樹君はため息を吐き、

「……………美魅。出てきてくれ」

そう言った後、少しして黒樹君の胸から……………白い猫が現れ、黒樹君の腕に抱き抱えられた。

その現れた綺麗な白猫を見た統合生徒会長達が、一斉に驚き、ざわつく。

？……………武霊なのかな？……………さっき、統合生徒会長が二体目の武霊とかつて言ってたし……………三体目？

「心渡りの化け猫……………まだ生き残っていたなんて」

そう茫然とつぶやく統合生徒会長。

心渡りの……………化け猫？え？武霊じゃないの？

そう疑問に思った時、

「人の心を読むなんて、デリカシーの無い子だわね」

と猫が口を開いて、優癒さんを見た。

……………猫が喋った！？あ！喋ったって事は、本当に武霊じゃない

って事だよな！？……………もしかして、曾お祖父ちゃんが言っていた

魔物の一種？

「黒樹様……………もしかして、この化け猫が情報源なんですか？」

「化け猫とは失礼だわね」

「え？」

統合生徒会長の問いに黒樹君が答えるより早く、猫が化け猫と言われた事に文句を言い、驚く統合生徒会長。

「あたいには美魅ってちゃんとした名前があるだわね」

「すいません。えっと……………美魅さんが情報源なんですか？」

「そうだわね。あたいが退魔士の事と魔法使いの事を夜衣斗に言っただわね」

改めて言い直した問いを、美魅さんに答えられ、統合生徒会長は何とも言えない顔になった。

「……………少なくとも」

勝手に喋る美魅さんを黙らせる為か、美魅さんの頭を撫でながら口を開く黒樹君。

「……………俺は魔法使いを自称する人とは会った事はありません。そして、俺が特殊な武霊使いになっている理由は……………心当たりはなくはないですが……………それが何なのか、また、それが合っているのか、俺自身も分かってはいませんが……………ですが、琴野さん達はそれに何か心当たりがあるんじゃないんですか？」

その黒樹君の問いに、統合生徒会長が固まった。

……………何だか冷や汗をかいている人もいる様な……………でも、どう言う事？何で黒樹君は統合生徒会長側に心当たりがあるって思ったんだろう？しかも、この反応からして、本当に心当たりがありそうだし……………

押し黙る周囲の様子に、黒樹君は深いため息を吐き、

「……………話せないなら、それはそれで結構です。ですが、とりあえずこれは答えてください……………あなた達は、退魔士の何なんですか？」

その問いに、統合生徒会長は迷う表情を見せ、一瞬だけ、視線を誰もいないトンネルの方へと向けた。

……………いえ、誰か隠れてる……………凄く気配の消し方が上手い誰かが……………

「わたくし達は」

統合生徒会長が若干躊躇しながら黒樹君の問いの答えを口にした。

「わたくし達は、若手退魔士の集まり……………『鯉の会』……………ですわ」

第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』 8

夜衣斗

鯉の会？

……………若手退魔士って事は……………ことわざの鯉の滝登りを掛けてるんだろうか？

……………まあ、どうでもいいか……………そんな事……………さて、いよいよもって信頼出来なくなってきたな……………何らかの信頼できる情報でも聞ければと思っ言葉を重ねたが、その思惑は外れるばかりだな……………

本当は、心情的にも、状況的にも、統合生徒会長達は黒幕ではなく、味方であって欲しいんだが……………それを裏付ける証拠と信頼がない。

チラツと、優癒と呼ばれたゴスロリ女を見る。

俺を見ていた優癒さんは、それでびくっとし、テイベアの武霊を具現化して、その後ろに隠れた。

その瞬間、妙な違和感が消える。

心を見る事を止めたんだろうか……………なんだかな……………それにしても……………心読みか……………心の中にある美魅の存在を見付け、俺の話の真偽を見極めていたんだろうか……………心読みと言っている割には、その程度しか見れないんだろうか？

(それは違うだよ)

俺の思考を聞いていたのか、美魅が念話……………でいいんだよね？この場合……………で、否定の言葉を口にした。

……………何が違うんだ？

(あの感じからして、本当は思考とか、記憶とかも読めるんだわよ。だけれど、今の夜衣斗の心の中は、膨大な魔力で満たされていたり、何だかごちゃごちゃしているかわから、とっっても見難いんだわね)

……ごちゃごちゃしているね……まあ、何にせよ。思考が読まれていないのは幸いだな……そう言えば、飛矢折さんの話だと、芽印さんは武霊を出さずに瞬間移動出来るって言ったな……優癒さんも武霊を出している様子はないし……両方とも武霊を出さずにそれを行使出来たとすると……なるほど……つまり……退魔士は『何らかの超能力』を有しているって事か？……いや、そもそも超能力であるのかも疑問の余地があるか……ん……何にせよ。それに近い何かを一般人に隠している事は間違いない事か……人は異物・異端を嫌うものだしな……まあ、隠す理由ならいくらでもあるだろうが……ん〜だが、そうなること……疑惑の幅が広がるな……。

俺がそう思考を巡らして黙っていると、不安そうな表情で俺を見ていた統合生徒会長は頭を下げた。

「申し訳ありません黒樹様。わたくし達退魔士は、世間一般に対して秘密でなくてはいけないのですわ……ですので、出来ればこの事をお話したくありませんでしたの」

……その割には……まあ、それは別にいいが……ん………とりあえず、確認するべき事を確認しておくか……

「……つまり、退魔士であるから、三島忠人の武霊能力が効かなかったと？」

俺の問いに、統合生徒会長は頷いた。

「わたくし達退魔士は、その多くが先祖から『魔法能力』を受け継いでいますの」

「……魔法能力？いや、そもそも、魔法とは？」

「魔力と呼ばれるこの世界の外の力によって構築された、この世界では本来起こりえない現象・法則。それが魔法ですわ」

……なるほど……本来起こりえない法則……要は理の外の現象・法則って事か……まあ、大体漫画やゲームで描かれている通りか……

「そして、退魔士は、その魔法を遺伝子レベルで取り込んでいる

者達により構成されています。ですので、厳密に言えば魔法能力と言う名称ですが、わたくし達は自らの魔法能力を『退魔士能力』と呼んでいますの」

「……退魔士能力ね……ん？」

「……超能力とは違うと？」

「いえ、名称と使う対象に違いはありますが、基本的にそれも同じ魔法能力ですわ」

なるほどね……しかし、

「……今の話からすると、まるで退魔士は、今の人類とは違う人類……分岐した人類と言っている様に聞こえるんですが？」

その疑問に、びっくりした様子を見せる統合生徒会長。

「その通りです。その通りですわ黒樹様」

その通り？

「わたくし達は、自分達の事を『分岐人類』と呼んでいますの」
分岐人類？……

「……つまり、魔法を取り込んでしまった事により、現人類から分岐した者達だと？」

「はい。そして、超能力・超能力者と言う言葉は、魔法を取り込んでいたとしても次世代に受け継がない方々か、初代の方々に対して、わたくし達は使いますの」

ん……面白い話だな……まあ、面白がってる場合じゃないが……とりあえず、話を進めないと……

「……つまり、身体の仕組みが普通の人間と少し違うから、武霊能力が効かなかったと言う事ですか？」

「いえ、正確には違うと思いますわ」

違う？

「わたくし達の調べで、武霊は魔法生命体である事が確認されていますの」

魔法生命体！？……いや、そうか、魔法が実在するとなると、
そう考えるが自然か。

「ですから、武霊の能力も魔法によるものですので、あの笛の催眠も魔法の一種なのですわ」

「……………つまり、体内に魔法が既にあるから、別の魔法は入りにくいと？」

「はい。その通りですわ」

……………なるほど……………そうになると、俺も三島忠人の武霊能力が効かない理由も同様の理由だと説明出来るか……………まあ、俺の場合は魔法と言うより、その魔法の基である魔力があり過ぎるから効かなく、オウキ・キバも同様の理由なんだろう。通常の武霊は意志力で活動しているって話だからな……………しかし……………武霊が魔法生命体ね……………と言う事は、武霊は意志力を喰らって、体内で魔力しているって事か……………ん？だが、そうになると、魔法生命体である武霊に武霊能力が効くのはそもそもおかしくないか？……………ん……………いや、おかしくないか……………武霊が個々に違う容姿能力を有しているとしても、結局は同じ武霊なわけだし、互いの能力が通じてても不思議じゃないか……………実際に、ガチャポンマンの武霊能力はオウキに効いていた訳だしな……………まあ、今は効かないだろうが……………って、全く別物の魔法は反発・阻害してしまうか……………って、それだと、何で統合生徒会長達は武霊に寄生されているんだ？そっちの反発は起きなかったと？……………いや、実際に起きていないんだから……………そうなると、武霊本体自体はより『高度な魔法』って事になるな……………まあ、生命体、しかも、自分の意志を持つほどの高度な生命体なわけだから、ただだんに能力として発現している魔法より高度なのは当たり前か……………まあ、どんなに思考した所で、確実に信頼出来る情報がない現状で、それが正解かどうか……………少なくとも、今はそれに対して思考を巡らしている時じゃないだろうし……………さてさて、本当にどうしたものか……………今までの会話の流れからすると、まだ何かを、しかも『俺に関する何かを隠している』のは間違いなさそうだが……………どうもそれに関しては言いたくない様だし……………例え、その内容を聞いたとしても、信頼できる

かどうか……そもそも、隠している事がよりあやしさを増させている……ふむ………だったら、とれる行動は………

俺は深いため息を吐き、

「………分かりました。退魔士の存在、魔法の存在、あなたが武霊能力に掛らなかつた理由………それはとりあえず認めましょう」

その俺の言葉に、統合生徒会長は顔をぱあつと明るくして、

「ありがとうございますわ黒樹様。こちらまあぬ疑いを抱いてしまい、申し訳ありませんでしたわ」

「………ですが」

頭を下げる統合生徒会長の言葉を無視して、俺は次の言葉を口にし、統合生徒会長は驚いた様に顔を上げる。

「俺達は別行動をとらせて貰います」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 9

飛矢折

黒樹君と統合生徒会長との会話に、何となく場違いな気がして、黒樹君や統合生徒会長に気付かれない様に西島親子の隣に移動。

「……何だかとんでもない話になってきたわね」

ぼそつとそうあたしにつぶやくさゆりさん

「はい……あたし、武霊とかでこういう話に慣れているつもりだったんですけど……」

そう言つてさゆりさんと困惑の笑みを交わし、ひよりさんは話が退屈だったのか、さゆりさん寄り掛る様にして眠そうにしていた。

……本当に子供みたい……いや、年齢的にはまだ未成年だろうから……問題ない？……わけないか……

などと考えていた時、

「ですが、俺達は別行動をとらせて貰います」

黒樹君がそんな事を言い出した。

「つな！何故ですか!？」

黒樹君の言葉に、驚く統合生徒会長。

あたしも驚いて黒樹君を見ると、黒樹君はさっきより警戒を強めている様だった。

「……端的に言えば、信頼出来ないからです」

「信頼出来ない!？」

衝撃を受ける統合生徒会長。

……はつきり言うな……黒樹君……

「……あなた達が、退魔士……まあ、それは認めましょう。ですが、だからと言って、あなた達が黒幕ではないと言つ可能性はな
くならない。それどころか、むしろ高まっている」

「そんな……わたくし達は」

何かを言おうとした統合生徒会長を手で制する黒樹君。

「……………俺にとつてすれば魔法使いであろうと、退魔士であろうと、未知に技術を持っている者達である事に変わりはありません。だとしたら、あなた達がこの星波町を舞台に武装守護霊と言う魔法生命体の開発実験をしている……………そう最悪な疑いを抱かずにはいられません」

その黒樹君の最悪の疑いに、この場が騒然となる。

「それはありえませんか！わたくし達も、武霊が何なのか分かっていませんの！」

「……………例え、この後どんなに言葉を積み重ねても、俺が信頼出来る言葉をあなた達が語れるとは思えませんが？」

拒絶する黒樹君に、統合生徒会長は次の言葉を発せられなくなつた。

黒樹君が言う様に、そう言う疑いを抱けば、統合生徒会長達の言葉は信頼出来なくなるけど……………そうなると、そうでないと言う証拠を、この場合は示すのが難しいだろうし……………そもそも、黒樹君はもちろん、あたしとも、統合生徒会長達を証拠なしに信頼出来る関係じゃない……………でも、それって、あたしや西島親子にも言える事なんじゃ？

そう思っていると、統合生徒会長も同じ事を思ったのか、

「確かにわたくし達と黒樹君の間に、言葉だけで信頼して貰えるほどの関係はありませんわ……………ですけど、それは飛矢折さん達三人様にも言える事なのでは？」

と言った。

少し不安を覚え、黒樹君の背を見ると、黒樹君は首を横に振つた。

「……………飛矢折さんや西島さん達とは、危ない目を一緒に遭っています。そんな人達が黒幕側の人間だとは……………俺には思えません」

「それは……………そうかもしれませんが……………今の町の状態で、黒樹様達を別行動にさせるなんて、とても容認出来る事ではありませんわ。危険過ぎます」

「……………少なくとも、未知の能力を持った人達の側より安全でし

よう？」

「そんな！わたくし達は……」

何だか泣きそうな表情と声になっている統合生徒会長。

信頼されないどころか、危険人物の様に言われている事が衝撃だったのかもしれない……でも、普通、こつという状況になったら、男の人って動揺しないかな……

視線を再び黒樹君の背に視線を移すけど、特に動揺した様子はない。

……まあ、黒樹君の性格からして内心はかなり動揺しているとは思っけど……。

夜衣斗

急に泣きそうな顔と声になった統合生徒会長に、俺は……かなり動揺したが……今、それを表に出すのは得策じゃないのは分かり切っているので、必死に表に出さないようにした。

……それにしても……女の涙はずるいとよく漫画とかで見るが……本当にずるいな……まあ、だからと言って、そんなので統合生徒会長達を信頼できるほど……状況は良くない。

一回深いため息を吐き、

「……個人的に言えば、あなた達が味方で合って欲しいとは思いますが……何度も言いますが、俺はあなた達を信頼出来ません」「どうすれば、どうすれば信用していただけますの？」

そう泣きそうな顔で言う統合生徒会長。

……勘弁して……なんか周りの視線が痛い気がしないでも……だが、ここで妥協するわけには……

「……では、何故、俺が魔法使いに接触したと思ったのか、どうして接触してはいけないのか……答えてください」

「それは……」

口ごもる統合生徒会長に、俺は畳み掛ける。

「……では、俺が特殊な武霊使いになっている理由に、何か心

当たりがあるのは間違いありませんか？」

泣きそうな顔に困った顔がプラスされた。

……だが、答えない……

「………一体、あなた達は、俺の何を知って、何を隠しているんです？」

夜衣斗

俺の問いに押し黙り続ける統合生徒会長。

「……………知っている事に対する否定はしない……………と言う事は、本当に俺に関する何かを知っている訳か……………」

周りを見ると、一様に困った顔をしていた。

「……………何なんだろうか？……………本当に、一体、俺の何を知って、隠しているって言うんだろうか？……………答えられないと言う事は……………」

「……………統合生徒会長達を黒幕として仮定した場合……………俺が何らかの実験対象になっている……………と言う事なのだろうか？……………そう考えると、俺が特殊な武霊使いになった事の説明が付くが……………だが、そうだった場合、いくつか納得出来ない事が出てくる……………サヤはもちろん、魔力孔の前であった記憶の中の老人とか……………んぐだとすると、これは違う可能性が高いと考えるべきか……………まあ、なんであれ……………これはもう無理だな……………何を隠しているか興味はあるが、味方が敵かどちらであろうと、どうせろくなことじゃないだろうし……………あの様子からすると、根本的な疑問の解決に繋がる答えを持っていない様な気がする……………第一、お互いによく知らない間柄だと言うのに、隠し事……………それでどうやって信頼しろって言うんだろうか？……………まあ、それはこっちにも言えることだが……………」

俺は再び深いため息一つ吐き。

「……………何も答えられないなら、あなた達を信用するかしないかは、今後のあなた達の行動次第で決める事にします」

俺の宣言に、光明でも見出したかの様に顔をぱあつと明るくして、

「でしたら、わたくし達のそばで見極めてくださいませ」

と提案してくるが、俺はその提案を首を横に振って拒否。

「……………言ったでしょ？あなた達を信用出来ないと。疑惑を持つ

たまま、あなた達の側にいられるほど、俺は肝が据わってません」

正直に言っと、統合生徒会長は再び泣きそうな顔になり、

「ですが、このまま外に出てしまわれますと、操られている人達に襲われてしまいますし、黒樹様以外の方が操られてしまいますわ」

そう指摘してくるが……外ね……まあ、何であれ、

「……対抗策は考えてありますので、問題はありません」

その俺の返しに、統合生徒会長はびっくりした顔になり……何だかコロコロ表情が変わる人だな……まあ、俺がそうさせていると言えばそうなんだろうが……

「お一人で、星波町にいる武霊使い達を相手にするつもりなのですか？」

「……必要とあれば」

「黒樹様。それは無茶ですわ」

……まあ、確かにそれは無茶かもしれないが……

「……本当にあなた達が黒幕でないのなら、今回の事態を自分達の力のみで対応して見せてください」

「……」

物凄く困った顔になる統合生徒会長。

……俺を戦力に入れていたのか？……んーまあ、

「……ご健闘を祈ってます」

と言うしかないな……

何となく顔が見れず、俺は振り返って、

「……行きましようか」

そう後ろの三人に呼び掛け、俺は統合生徒会長の横を通り抜け様とした。

「黒樹様……」

泣きそうな声の呼び掛けを俺は無視。

……正直に言えば、かなり心が痛んだが……疑惑が消えない限り、これが演技ではないと言いきれない……何ともめんどくさくて、厄介な状況なんだか……そもそも俺は他人の真偽とか、敵

味方とか、もうそう言う心理戦とか、情報戦とかやった事が無いし、だから、きつと苦手なんだろう。上手い奴ならきつと、上手く相手から情報を聞き出して、判断材料に出来るだろうが……………まあ、ないものねだりをしてもしようがないが……………ここ最近、と言うか、星波町に来てから、俺にないもので対処しなくちゃいけない事はばかり起きる。

深いため息を吐きつつ、後ろを見ると、飛矢折さん達は、戸惑いながら俺の後ろに付いて来てくれていた。

誰が止めるわけでもなく、俺が適当に選んだ穴に入ろうとした時、

「分かりましたわ。黒樹様」

何かを決意したかの様な統合生徒会長の声が聞こえ、思わず振り返ると、さきほどまで泣きそうな顔だったその顔も決意の顔になっていた。

「黒樹様がわたくし達を信頼出来る証拠をお教えしますわ」

飛矢折

信頼出来る証拠を教える。

そう言った統合生徒会長に、大慌てで芽印が近付き、こっちに聞こえないくらいの声で何事かを話し始めた。

「ただ、統合生徒会長は首を横に振り、

「ここまで明かしてしまったのですわ……………そうならば、いずれ黒樹様なら自らの力で辿り着きますわ」

「そうかもしれないけど、今、このタイミング、この状況で明かす事じゃないでしょ？」

統合生徒会長の言葉に更に慌てたのか、声のトーンがこっちに聞こえるまでになる芽印。

ん……………どうも黒樹君が言う様に、黒樹君に関する何かを統合生徒会長達が知っているのは間違いなさそうだけど……………あの芽印がこんなに慌てるなんて……………一体どんな事なんだろう？

黒樹君を見ると、黒樹君は特に反応らしい反応はしていない。

……………「こつなる事も予想済みって事? …………… 黒樹君なら予想して
そうね……………」

「だからと言って、このまま黒樹様達を外に出すわけにはいきま
せんわ」

「それは大丈夫だって、彼は外に出るなんて一言も言ってないで
しょ?」

その芽印の指摘に、頭に疑問符を浮かべて黒樹君を見る統合生徒
会長。

……………「そう言えば、黒樹君は別行動を取るとは言ってたけど、外
に出るとは一言も言ってないっけ……………」

何となく黒樹君を見ると、黒樹君は頷いた。

芽印の言う様に外に出る気はなかったみたいね……………」

黒樹君の頷きに少し安堵の表情を見せる統合生徒会長だったけど、
芽印を見て首を横に振り、

「芽印さん……………あなたは今回の件、わたくし達だけで解決出来る
と思いますか?」

その統合生徒会長の問いに、芽印さんはちよつと困った顔をして、
「……………無理……………かな?……………でも……………許可は取つたの?」

視線を一瞬だけ誰かが隠れているトンネルに向ける芽印。

許可?……………もしかして、あそこに隠れている人って、統合生徒
会長より偉い人?……………でも、だったら、何で隠れているんだらう?

そう疑問に思った時、
「……………許可は、今から取りますわ」

そう言つて、統合生徒会長は誰かが隠れているトンネルへと身体
を向ける。

「もう隠し続ける意味も、状況でもありませんわ。黒樹様に……………
黒樹夜衣斗様に真実を語る許可を……………いえ、語ってくださいませ」
その呼び掛けに、隠れていた人の僅かな気配が動くのをあたしは
感じた。

そして、ほどなくしてトンネルから現れた人物に、あたしは驚愕

で固まり、黒樹君が振り向かなくても分かるぐらいに驚いている気配を感じた。

若干力無く

「にやはは……………え〜つと……………驚いた？夜衣斗ちゃん？」
そう言ったのは……………

「……………春子……………さん？」

背後から、茫然とその人の名を呼ぶ黒樹君の声が聞こえた。

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 11

夜衣斗

統合生徒会長の呼び掛けで現れた人物は……黒樹春子。

俺の母親の妹……叔母さん……？……はぁあ！？

妄想は出来ても、全く想像出来なかった事態に、頭が上手く思考出来ない。

混乱……とまではいかなかったが……停止に違い思考に、春子さんが近くに来るまで、俺は迂闊にも何もしなかった。

大慌てで制止の手を出し、春子さんはびっくりした様子で立ち止まる。

「なに？どうしたの？」

「……どうしたもこうしたも……」

「……あなたは本当に俺の知っている春子さんですか？」

その俺の問いに、春子さんは苦笑した。

「うん。この状況でそれを疑うのは正しい事だよ。でも、こんな

美人なお姉さんを偽者って疑うのは酷いなあ」

と言って……人差し指を頬に当てて、ん〜と考える仕草。

……なんか嫌な予感。

そう思った瞬間、にまりと嫌な笑みを浮かべ、

「じゃあ、その証拠に夜衣斗ちゃんの本棚後ろの方にある漫画のラインナップを一つ。えつと、あ」

ぎゃー……！？

自分でも信じられない速度で春子さんに近付き口を塞いだ。

「……っは、春子さん！」

口を塞がれながらもごもごもまだ続きを喋っている春子さんを睨む。

そして、見回すと……ほぼ全員がキョトンとした顔をしているが……飛矢折さんだけ、何故か苦笑していた。

……そう言えば上と下に兄弟が二人ずついるって話だったから……ピンときたのかもしれない。

……まあ、その辺りは深く突っ込まず、考えずにいる方が賢明だな……とにかく、

「……部屋に既にあるもので、春子さんを春子さんだと証明する事は出来ません……調べれば直ぐに分かる事ですから。と言うか、本物だったとしても、勝手に人の部屋を漁るな！」

そう言っつて、俺は春子さんの口から手を離した。

「いいじゃない。し」

また何かを言おうとした春子さんの頭にチョップをお見舞いする。ちよつとでもヒントになる様な事を言わせるわけにはいかないだつつうの！

「もう！私にだけ直ぐにチョップするんだから」

「……あなたがろくでもないからでしょうが！」

「ぶー。私は一回りもお姉さんなんだからね。敬いなさい」

「……敬われたかったら、敬われられる態度と行動をしてください」

「えー」

いかにもめんどくさそうなその反応に、俺は思わず深いため息を吐いた。

「こら！いい若い者がため息ばっか吐いちゃダメ！彼女出来ないわよ」

……余計なお世話だ……と言うか、

「……他人の心配より、自分の心配をしたらどうです？」

「ど！どういう意味かな？」

「……そのままの意味ですよ。まだ一カ月ぐらいしか一緒にいませんけど、浮いた話や仕草を一切見た事ありませんから……」

……まあ、分からないでもないですが」

「ほつんとーに、どう言う意味かな！？」

頬を引きつりながら言う春子さんのその問いに、俺はそっぽを向

いて置く。

つで、気付く、周囲が俺達に呆れた視線を向けている事を……
あゝ……どう見ても本物っぽい……状況が状況だし……
それを認めると……

「……何にせよ。本物だと言う証拠がない限り、あなたを黒樹春子だと認める訳にはいきません」

そう言っただけ俺は、春子さんから数歩後ろに下がった。

その俺の対応に、春さんは苦笑し、

「疑り深いわね……じゃあ」

ちよつと小走りで隠れていた穴に戻り、そこからちよつと大きめのリュックサックを持ってきた。

「はい」

と言っただけ俺にリュックサックを投げ渡した。

反射的にオウキを具現化して受け止めさせる。

「うん。その対応も間違っただけじゃないわよ……ちよつと傷付いたけどね」

……なんだかな……

オウキのセンサーで中身を調べさせると……何やってんだ？てか、なんで？

リュックサックをオウキから受け取り、開けるとそこには、メガネベアがいた。

しかも、何故か『黒い植物らしき枝』……なんだこれ？……で簧巻きにされて……

身動きもせず、心の呼び掛けにも反応が無い所を見ると……気を失っているんだろうか？……と言うか、口の周りにプリンらしき黄色い汚れが……

意味が分からず春子さんを見ると、

「その子が私のプリン強奪犯でしょ？」

うわ……ばれてたのかよ……

「……ふふふ。さつき町で起こったごたごたに乗じて、またプ

リンを盗み食いしようとしていたから、捕まえたの」

と言って若干陰湿な笑みを浮かべる春子さん。

「……そう言えば、ここ最近、春子さん冷蔵庫の前で見張ってたな……たく！近付くなつて言つといたのに……何やってんだかはあ……」

飛矢折

春子さんが黒樹君に投げ渡したリュックサックには、あたしが星波商店街で当てたメガネベアのぬいぐるみが入っていた。

「……しかも、何故か黒い植物に簞巻きにされて……えっと、あれが、春子さんが春子さんだつて証明する証拠？……さっぱり分からない。」

でも、黒樹君は、ある程度納得しているみたいだし……どう言う事？

「その子の証言なら、信用できるでしょ？」

と自信満々と言った感じで言う春子さんに、黒樹君は呆れて、

「……信用出来るも何も……意識を失っているみたいなんです……」

そう言った。

えっと……あれ、ぬいぐるみだよね？……なんだか、二人のやり取りを見てみると、まるであのぬいぐるみが自分の意志を持つて動くみたいに見えるんだけど……

「……強く締め過ぎたかしら？……ん……じゃあ、最終手段！」

若干焦った様子の春子さんは、着ていた服のポケットから携帯電話と……透明なリングの中に基盤が入ったものを取り出し、そこに携帯電話をはめ込んだ。

そして、どこかにリダイヤルして、地面に投げる。

携帯電話をはめ込んだリングにスピーカーが入っているのか、呼び出し音が聞こえ始めた。

「これはね。知り合いの魔法使いから貰ったものなの」

「……………知り合い？魔法使いと？」

「昔は確かに滅ぼし合った仲だけど、今はそこまで関係は悪化してないの……………まあ、でも、お互いに警戒はし合っているから、仲は良くないけどね……………だから、彼は変わり者なのかな？」

そう言っつて春子さんが首を傾げると、携帯電話が繋がり、その瞬間、携帯電話の上に女の子の姿が現れた。

心配がないから、多分、立体映像なんだろうけど……………その女の子を見た黒樹君は、あきらかに驚き、動揺した気配になり、

「……………てつきり、父さんと母さんが出てくるんじゃないかと……………」

そう若干うろたえ気味につぶやき、その黒樹君を見た女の子は、嬉しそうな笑顔を見せ、

「久し振り、夜衣斗兄ちゃん」

そう言った。

第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』 12

夜衣斗

魔法具……でいいんだよな？……を装着した携帯電話から出てきたのは、子供の頃から大きな休みになると家に預けられる両親の知人の娘……夜衣花よいかだった。

そして、この状況で彼女が出てきたという事は……

「……夜衣花……君も退魔士だったのか？」

その俺の問いに、夜衣花は悲しくも辛くもありそんな顔になって、「うん……出来れば……出来れば、夜衣斗お兄ちゃんには退魔士の存在を一生知って欲しくなかったよ……」

そう言った。

夜衣花は、何故か、俺の名前から名前を付けられたらしく……そのせいか、俺みたいな奴でも兄として慕ってくれている。

俺は自分が一人っ子と言う事もあり……最初は照れ臭かったが……俺も夜衣花の事を段々妹の様に感じてきて……今では、何でも話していた。もちろん、何でもって言っても、俺がいじめられていた事とか、暗くなる様な話はしていない……だが、それでも、お互いしか知らない事はいくらかもある。だからこそ、ある意味、両親より俺の事を知っていると見えるし、この状況なら逆に両親でなくてよかったと言えた。

まあ、正直に言えば……夜衣花の事を疑うなんて事はしたくないが……

「……夜衣花」

「なあに？夜衣斗お兄ちゃん」

小首を傾げた夜衣花を見て……ふと思い出した。

忘却現象の事だ。

……もし、仮に春子さん達が全ての黒幕であったのなら、武霊の話が向こうにストレートに伝わる……はず？まあ、とにかく確認

の為に、具現化中のオウキを指差し、

「……………武装守護霊の事を知っているか？」

俺の問いに、夜衣花は小首を傾げた。

……………これが演技などである、と言う可能性もなくはないだろうが……………昔から知っている彼女がそんな事を俺に対してするのか……………いや、そもそも、黒幕側の人間が……………昔から俺の側にいるのだろうか……………まあ、何にせよ……………確かめよう。彼女が本物の夜衣花であるかどうかを。

「……………王継戦機の舞台は？」

「え？何で今その事を？」

唐突な俺の質問に、少し困惑する夜衣花。

……………まあ、確かに、普通に考えれば今聞く問いじゃないが……………

「……………答えて」

「……………変な夜衣斗お兄ちゃん……………えっと、確か、一度リセットされた地球」

「……………オウキ・キバの正体は？」

「リセットされる前の地球で要人警護に使われていた守護騎機しゅごきシリーズの生き残り」

「……………それぞれのタイプは？」

「オウキは汎用防衛型。キバは戦闘運搬特化型」

……………ここまでは、俺が家から持て来たノートにも書かれている事。

だから、調べようと思えば調べられる。

周囲を見ると、俺の質問の意図が分からないのか、全員が困惑の表情を俺に向けていたが……………気にせず、

「……………王継戦機宇宙期にてのオウキ・キバのそれぞれの王は？」

「オウキはリテイシアⅡマークⅡ野村。キバはリテイシアの双子の妹レテイシア」

「……………敵は？」

「月に眠っていた守護騎機シリーズの最上位監理コンピューター」

「……………名前は？」

「え？聞いてないけど？」

だよな……………まだ頭の中でも思い付いていない事だし……………今の質問の答え全ては、まだノートにも書いていない、星波町に来る前に、電話で夜衣花と考えた事……………

大きいため息を吐く。

「一体何なの？こんな時に」

若干不満そうに口を尖らせる夜衣花に、俺は苦笑した。

まあ、もつともな話だが……………これで、少なくとも目の前の

……………どこにいるかは分からないが……………夜衣花は信頼出来る。

「……………夜衣花。春子さんや、琴野沙羅さん達は……………夜衣花の仲間なのか？」

「うん」

その一言と頷きに、俺は息を吐いた。

思いのほか夜衣花の言葉が信頼できたのか、一気に緊張が解け、身体から力が抜けてしまう。

……………そのせいで、ふら付き倒れかけた……………所を、オウキが支えるより早く、飛矢折さんが俺を支えてくれた。

俺が礼を言うより早く、夜衣花が

「誰？」

ぞわつとするぐらい敵意むき出しの声と、半眼の視線を飛矢折さんに向けた。

飛矢折

前に黒樹君の部屋で見付けた手紙の主であろう中学生ぐらいの女の子・夜衣花ちゃんが、あたしを敵意と共に半眼で睨み付ける。

その態度が初めて見る態度だったのか、黒樹君は思いつきり引いていた。

黒樹君のその反応に気付いた夜衣花ちゃんは、笑みになり、

「この人だーれ？夜衣斗お兄ちゃん？」

と額に青筋でも浮かんでそんな笑顔で黒樹君に改めて問い。その迫力に、思わずあたしと黒樹君は直ぐに離れてしまう。

「……………今まで可愛らしい雰囲気だった子だったんだけど……………血は繋がってなくてもお兄ちゃん子って事？……………ってそれって、黒樹君に恋愛感情がなくても、あつちには恋愛感情があるって事なんじや……………えっと、とにかく、」

「あたしは黒樹君のクラスメイトで、飛矢折巴って言うの。よろしくね」

精一杯の笑顔で挨拶すると、夜衣花ちゃんは再び半眼になって、

「クラスメイト？……………え？飛矢折？」

？

何故かあたしの名字に引つ掛かった夜衣花ちゃんは、春子さんに視線を向け……………あの魔法の道具って、もしかして立体映像と通話者の感覚を繋げている……………とか？……………この様子からだそうだよね……………どこにいるかは分からないけど、凄い道具ね……………

「……………春子お姉ちゃん。飛矢折ってあの飛矢折？射眼家の」

……………射眼家？……………どこかで聞いた事がある様な……………どこで

だっけ？

「そう。その飛矢折の子よ」

……………？……………どう言う意味だろう？……………そう言えば、お祖父ちゃんの話が本当だとすると、お祖父ちゃんの代まで……………家は退魔士だったって事！？……………あれ？でも、退魔士の人達って、何らかの退魔士能力を持つって話じゃなかったけ……………家に……………あたしにそんな能力は無い様な……………？

「……………まあ、誰であれ、今は、私と夜衣斗お兄ちゃんが大事な話をしているんです。部外者は視界に入らないでくれますか？」

……………視界について……………何だか強烈な子なんだけど……………

思わず黒樹君を見ると、夜衣花ちゃんの豹変に戸惑っている様だったけど、あたしの視線に気付いて、苦笑とため息一つ。

「……………分かりました。夜衣花の仲間だと言うなら……………統合生

徒会長。あなた達の事を信頼しよう」

「黒樹様……………」

黒樹君からようやく出た言葉に、統合生徒会長は歓喜の笑みを浮かべるけど…………その統合生徒会長に、夜衣花ちゃんは半眼を向け始めた。

夜衣花ちゃんの視線に気付いた統合生徒会長は、笑顔が引きつり、すすつと夜衣花ちゃんの視界から消える。

どう見ても中学生ぐらいの子にこの反応って……………もしかして……………この場にいる誰よりも立場が上だったり？

そんな事を思っていると、春子さんが苦笑して、

「あのね。夜衣花ちゃん。誰も、あなたのお兄さんを取ろうなんて思うそんな度胸のある人は……………少なくとも退魔士の中にはいないわよ？」

そう言つと、夜衣花ちゃんはなんだかむすーつとした顔になって、あたしを睨んだ。

……………ある意味可愛い子だけど……………

思わず苦笑を浮かべ、黒樹君を見ると……………黒樹君は何かを考えている様だった。

そして、

「……………あなたのお兄さん？」

そう黒樹君がつぶやくと、何故か春子さんと夜衣花ちゃんが同時にぎくりとした。

？

第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』 13

夜衣斗

「……とりあえず、一番ショックを受ける可能性がある疑問は置いておいて……頭の中で整理しながら疑問を一つ一つ聞いていくか……」

えくまず、退魔士は存在し、今なお社会の裏で活動を続けている。そして、その退魔士達の中で、若手の身が集まったのが、鯉の会。ついで

「……春子さんは……鯉の会ではどう言う立場なんですか？」
問いの矛先が別方向に向いた為か、春子さんはあからさまにほつとした様子を見せ、

「私は鯉の会星波町支部の代表をしているの。……まあ、そうは言っても、実質的に代表をしているのは、沙羅ちゃんただけだね」
……微妙に情けない事を言う……まあ、そうだろうとは思ったが
……まあ要するに

「……年齢だけで形だけのリーダーになっていると？」
「酷い言われ様だけど……にはは、その通り」
……この人は……まあ、何であれ、リーダーである事には間違いないわけだ。

俺は周りを見回し、
「……ここにいる人達は、全員退魔士と考えていいわけですね」
「そうよ……でも」
でも？

「ん〜厳密に言うとな……退魔士として認められている人間は
いないわ」

はあ？いない？

「……どう言う意味です？」
「退魔士はね。さっき沙羅ちゃんが言ったと思うけど、そのほと

んどが分岐人類。つまり、それなりの数がそれぞれの家にいるわけ。ついで、その全員が退魔士を名乗れば、当然仕事の取り合いになる。だから、退魔の仕事に依頼するそれぞれの国や団体が、正式な退魔士の数をそれぞれの家で限定させているの」

……随分世知辛い話だな……にしても

「……退魔士は国からも退魔の依頼を受けているんですか……

……」

……まあ、退魔士も人である以上、人間社会で食べて行く為にはお金が必要になるのは仕方が無いが……国ね……

「で、ここに居る子達は、私も含めて、さまざまな理由であぶれた退魔士の家系の者達なわけ」

あぶれた。その春子さんの言葉に、周囲に何人かが苦々しい顔になった。

「でも、あくまでそれは国が定めた退魔士の基準だし、あぶれた退魔士なんてかつこ悪いでしょ？だから、私達は若手退魔士の集まりって名乗っているわけ。あ！でも、この場にいないだけで、鯉の会には正式に退魔士として認められている子達もいるわよ」

「……つまり、ただたんにあぶれた人間を集めた組織ではないと？」

「鋭い夜衣斗ちゃん。その通りよ！実はね。私達は若手って名乗っている通り、退魔士の家系の中で若い人間だけで集まっているの。まあ、私より上の年代であぶれた人達は、大体一般社会に身も心も染まっちゃってるから、こういうのに参加しない……出来ない？って理由もあるけどね。ついで、何で集まっているかって言うと」

「春子お姉ちゃん！喋り過ぎ！」

嬉しそうに話す春子さんを、怒り気味に制止する夜衣花。

……喋り過ぎね……

「いいじゃない。ここまでばれちゃったんだから」

「よくない！私達の事を話すのは、私も父さん母さんも認めただけと、今起こっている事まで話す事は、私達の事情に巻き込む事は認

めないの！」

……父さん母さんね……

「ん〜夜衣斗ちゃんなら結構戦力になると思っただけどな〜」

「そつちで何が起きているか、夜衣斗お兄ちゃんが何をしたのかは分からないけど！夜衣斗お兄ちゃんは、『普通の人』なんだよ！だから、余計な事は教えないで！」

「分かったわよ……でも、」

二人の言い合いを聞きながら、俺は思考をフル回転させる。

普通の人間ね……ふむ？確かに俺は星波町の外では何の取り柄もない人間だが……そうなると、かなりの疑問が浮かぶが……ふむ……まあ、とりあえずそれは置いておこう……ん〜鯉の会は若い退魔士で構成されている……そして、春子さんより上の年代は参加しない……だとすると、

「……退魔士達の上層部が、何か不審な事でもしているわけだ」「え？」

「ほら、ここまで言っちゃうと自分で辿り着くんだから」

俺の予想に驚く夜衣花に、何故か自慢げの春子さん。

……この反応からすると、本当に不審な事があるわけか……まあ、上に不審を抱き、下がまとまるなんて話はよくある話だし……で、そうなると

「……そして、この星波町に」

と、その前に確認しないと、

「……退魔士の家系の人間が一つの町にこんなにいるって事は……普通はある事なんですか？」

俺が唐突に質問を変えた事にちよつと驚く春子さん。

「うんん。ないわよ」

ふむ……だとすると

「……個人的な予想ですが、退魔士が分岐人類であり、一般人にその存在を秘密にしているなら……各家系ごとにまとまって暮らしている。違いますか」

「うん。その通り。まあ、でも、それは漫画とかでよくある話だよね」

「……まあ、確かにその通りだろうが……当事者からその言葉は……なんかな……まあ、とにかく、」

「……だとすると、この星波町にその上層部の不審な何かがあり、鯉の会はそれを調べるか、何とかする為に来ている……で、その何とかしようとしているのが……」

「ん？……退魔士達が武霊の黒幕出ないと信用した今、改めて考えて見ると、退魔士達も武霊の情報を外に持ち出せていないと言う事になる……だとすると、外の退魔士達は武霊の事を知らないと言う事になり……なら、武霊以外の何かが、しかも……確か、春子さんがこの町にやってきたのは……九年前って言ってたけど……それくらい古いとなると、忘却現象によって起こる記憶の異常か……いや、異常と言っても、世間で騒がれるほどになっていない事から考えると、異常は僅かか……だとすると、同じ頃に起きた何か……いや、退魔士達の上層部が不審な動きをしたとしても、それが直ぐに表面化するのはおかしい話だ……だとすると、ある程度のずれが……ん!？」

「そこまで考えて、俺はある事を思い出した。」

「それは、」

「……二十年前の空港建設に関する政治家の汚職事件。そして、十年前の星波学園建設。そのどちらか、もしくは両方に、全部ではないでしょうが、何らかの関わりがある。違いますか？」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 14

夜衣斗

その俺の問いに、周りが騒然となり、春子さんは笑みを浮かべ、夜衣花が深いため息を吐いた。

「夜衣斗お兄ちゃん。今の夜衣斗お兄ちゃんに何が起きているのか……その町にある『謎の魔法力場』のせいで、私には分からない」

そう言っ て目を瞑り、うつむく夜衣花。

……なるほど、外の退魔士達は忘却現象の事を謎の魔法力場として認識しているのか……ん〜そう言う系統の専門家である人達が謎ね……どれだけ厄介な事になってるんだこの町は……

「……でも、でもね。今は、うん。今までのも、興味本位で知っていい範囲を超えているんだよ？分かってる？」

興味本位ね……確かに、外の俺なら、興味本位で聞いている……か？……いや……聞かない気がするんだが……

「……夜衣花。俺が興味本位でこんな事な厄介そうな事を聞くと思うか？」

その俺の問いに、夜衣花はうつむいたまま首を横に振る。

……まあ……だよな……俺、基本ヘタレだし。

そう思った俺は、思わず苦笑しつつ

「……それに、今、それを知ったとしても、現状の俺が何とかする……しようと思う事柄じゃないのは明らかだよ」

「そう……かな？」

「……ああ……だから、夜衣花が心配している、俺が退魔士の事情に巻き込まれる様な事は……知るだけならはないはず」

今の俺は武霊の力によつて、この場にいる。

それ以外の力もあるにはあるが、その全ての基点が武霊なら、町の外にまで繋がっているであろう退魔士上層部の問題は、どうあが

いても、俺に何とか出来るものじゃない。

そもそも、俺は正義の味方でもないし、特殊な能力を持った退魔士でもない。ただの人間。それも平均以下の………ま　今はそんな事はどうでもいいか………今重要なのは情報だ。

例えば、現状に直接関係ない事であったとしても………はあ………
…本当は、積極的に関わりたく何だがな………だが、この町に来てから新たに知る情報で、無駄になった情報はほとんどない。

………つまり、この町にいる限り、俺はそう言う運命………主人公の様な運命なんだろう………いや、死の運命か？

まあ、なんであれ、そうであるなら、知る機会がある時に、知ろうとしないのは、非常に危険な気がする。

再び大きなため息を吐き、俺はとりあえず確実であろう予想を口にすることにした。

「………少なくとも、星波学園の理事長の孫である統合生徒会長が退魔士であるなら、星波学園は『退魔士達が創立に関わった、もしくは、造った学園』である可能性が高く………だとすると、その目的は、『若手退魔士養成』と考えるのが自然でしょうが………だが、そうなるとこの人数は不自然で………まあ、そこから連想すれば、『武霊発生により若手退魔士の育成が不可能になり、それを理由に退魔士の上層部は星波町への退魔士の接近を禁止し、その現象の追求・解決をしようとしなさい。そして、それを不審に思った鯉の会は謎の現象の調査・解決を独断・独自に開始した』………そう予想出来ますが………違いますか？」

その俺の予想に、周囲がざわつき、統合生徒会長は驚きの顔になる。

「はい。大体その通りですわ」

頷き、うつむいている夜衣花を気にしながら言葉を続ける。

「黒樹様の言う様に、星波学園は退魔士である琴野家が、次世代の退魔士を育成する為に造った学園でしたわ」

でしたわ………ね。

「ここに居る者達のほとんどは、星波学園での退魔士育成先行メンバーなのですが……御存じの様に、星波学園は創立直前に武霊発生に巻き込まれましたわ。そして、星波町内でわたくし達が混乱に陥っている間に、退魔士達はこの星波町への接近を禁止されてしまいましたの。なのに、その理由の詳細は詳しく説明されていませんの。琴野家はその直前まで忘却現象……外の退魔士の認識では、一般人が一切気付かず、退魔士能力を持つ者達でも僅かな違和感しか残らない完璧な記憶欠落認識阻害魔法力場として認識されていますわ……その調査と対抗策を他の退魔士の方々に依頼していたのですが……」

「……琴野家のトップが接近禁止を容認し、依頼を取り下げた？」

「はい。その通りですわ……ですから、わたくし達はそれに疑問に思い、十年近く掛けて色々調べた結果。『ある組織』が国を動かして、退魔士上層部に働きかけている事が分かり、更にその組織が二十年前の空港建設の『汚職事件をねつ造して』空港建設を中止に追い込み、その尻拭いと称して琴野家に既に建設済みだった人工島を買い取らせ、星波学園を建造する様に働きかけていた様ですの……何だか更にとんでもない話になってきた様な……ある組織？しかも、国？ねつ造？尻拭いで買い取らせて、学園を造る様に働きかけた？……それって、

「……そのある組織が武装守護霊を造り、実験しているの？」

「違いますわ」

俺の最悪な予想をあつさり否定する統合生徒会長。

「……しかし、今の話の流れで否定ね……と言う事は、

「……それに何か根拠があるんですか？」

その俺の問いに頷く統合生徒会長。

「現在の技術で、退魔士・魔法使い共に武装守護霊の様な存在は創れませんし、忘却現象の様な事も起こせませんの」

「……造れないに、起こせないね……」

「そもそも、退魔士の技術はそれぞれの退魔士が持つ退魔士能力を基礎にしていますの。ですので、発展・応用性に乏しく、新たな存在を創り出す事に向いていませんの」

「なるほど……確かにそんな技術しか持たないなら、武装守護霊の様な自分の意志を持ち、寄生者のイメージから戦闘能力を持った自身の身体を構築する様な高度な存在は創れそうにないな……」

「そして、個人ならまだしも町単位の人の限定した記憶の操作や、限定物証の消去が出来る退魔士はいませんの」

「それって、個人だったり、限定しなければ出来るって事か？……まあ、退魔士の事やその退魔対象が世間にはばれていない所を考えると、認識阻害とか人払いとか出来ないと逆に不自然だよな……」

「つで、そんな事を出来る人達でも、忘却現象の様な事は出来ない」とふむ……

「……退魔士側が出来ない事は分かりましたが、魔法使い側はどうなんですか？」

「その俺の問いに統合生徒会長は来ていた制服のポケットから、一枚のカードを出し、俺に渡した。」

「そのカードには、ICチップが付いていて、『隔離』と書かれているが……なんなんだこれ？」

「それは、わたくし達と懇意にしてくださっている魔法使いの方が造ってくれた物ですわ」

「これが魔法具ね……ん、見た目は普通のICカードにしか見えないな……」

「……それで、これはどんな魔法が使えるんですか？」

「わたくし達が人払いの結界と呼んでいる物の一種・隔離結界を発生させますの」

「隔離……結界ね……」

「隔離結界は、隔離したい対象を今いる空間とは少しずれた空間に隔離するものです。これによって、わたくし達は誰に見られる事

も、被害を出す事もなく魔物と戦えるのですが……残念ながら、星波町では使えませんの」

……使えないね。ん〜これが空間に働き掛ける魔法だとすると……

……

「……武霊が忘却現象の影響で使えない……とか？」

「はい。そうだと思いますわ」

「……だとすると、他の人払いの結界も同様に使えないんじゃないですか？」

「ええ、理由はそれぞれ違いますが、ほぼ使えませんわ」

……なるほど……つまり、星波町内では、下手に退魔士能力を使うと、退魔士の存在が世間にはれてしまう可能性があるわけだ……それはまた厄介だが……その割には飛矢折さんや西島親子には不用意に見せている様な……いや、多分、俺の予想が正しければ彼女達は……ん〜まあ、今はその事について考えている時じゃないな……

「……これらのカードは退魔士側でも作れるんですよね？」

隔離境界カードを統合生徒会長に返しながらそう問うと、統合生徒会長は頷き、

「はい、書いた文字をある程度具現化出来る退魔士などがいますので、その方が作った物を普通は使いますの……ですが、わたたくし達には……その……あまり予算がありませんので」

？……ああ……なるほど、金取られるんだ……そう言えばさっき正式な退魔士はほとんどいないって言ってたもんな……だとすると、報酬がある退魔の仕事なんて回ってこないだろうし……鯉の会は万年金欠っぽそうだな……っで、

「……そのどこに、魔法使いが武霊や忘却現象と関係ない理由に繋がるんですか？」

そう問うと、統合生徒会長は、返したカードを俺に見せ、ICチップの場所を指差した。

「現在の魔法技術は、魔法を起こす際にその全てに現代の技術。

特にこのカードに着いているICチップの様に、電子技術が使われていますの」

魔法に電子技術？……………漫画とかではよくある話だが……………ん、実際の魔法にも使われているのか……………面白いと思ってしまうのは、この状況では不謹慎だろうか？……………いや、まあ、とりあえず面白がつている場合じゃないのは当たり前だが……………

「聞いた話ですと、魔法使いが魔法を起こす為には、魔術式と呼ばれる魔法の型を魔術で創り、その魔術式に魔力を流し込んで、魔力を魔法に変換するそうですわ。そして、古来の魔法使いはその魔術式を自身の脳で構築していたそうですけど、それは非常に脳に負担が掛るものだったそうです。ですから、その負担を軽減する為に、現代魔法使いは、電子機器に脳の代用をさせているそうですわ」……………つまり、

「……………現代魔法使いの魔法発現には、どこかに何らかの電子機器が必要だから、その電子機器が全くない武霊は現代魔法使いが創った物ではないと？」

その問いに、統合生徒会長は頷く。

「はい。その可能性が高いと思われますわ。もちろん、町の様々な場所を調べた結果、大規模魔法を展開している様な高性能コンピュータなどは確認されませんでしたわ」

「……………大規模な魔法を使う場合は、電子機器にそれなりの性能が求められるわけですか……………」

「そうですね。ですから、もし仮に武霊や忘却現象が現代魔法使用によるものなら、星波町のどこかに高性能コンピュータがかなりの数の設置され、常に稼働していなくてはおかしいんです……………もっとも、それで魔法使いが武霊や忘却現象を発現させられるかは……………疑問ですわ」

疑問ね……………要するに、

「……………武霊と忘却現象は、現代魔法と比べて、系統が違い過ぎる上に、現代魔法でも同じことが出来ないぐらい高度な物だと？」

「その通りですわ。黒樹様」

ん〜……………

「……………それで、鯉の会は、武霊や忘却現象は何だと思っているんですか？」

その俺の問いに、統合生徒会長は若干躊躇する様な様子を見せ、その様子に春子さんは苦笑した。

視線を春子さんに向けると、

「夜衣斗ちゃん。それは私達でも確証がない話なの。でも、そうじゃないかって見当はついているわ。と言うか、そのどっちかしかないかなあ〜って」

「……………どっちか？」

「うん。『宇宙』か『異世界』のどっちか」

……………

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 15

夜衣斗

「あゝ……宇宙に……異世界ね……何と云うか……規模が……ん？……そう言えば、美羽さんも隕石説とか言ってたな……まあ、退魔士達がそう見当を付けているなら……」

「……そう云うて事は、星波町とは別件で宇宙・異世界に関する事例があるって事ですよね」

その俺の確認に、春子さんは頷く。

「私達退魔士が退魔する魔物にはね。幾つかのパターンがあるの、幾つかね……」

「一つは、『動植物に私達のように魔法を身体に取り込んでしまったパターン』。この場合は、大体その動植物は本能のままにその魔法を利用し出すから、早めに退治しないとイケないわけ」

本能……捕食や繁殖か？……まあ、なんであれ、確かに武霊はこのパターンじゃないな。

「二つは、『意志を持たない物体や法則に魔法が入り込んだパターン』。この場合は、大体その物体や法則の特性・特徴が増幅されたり、反転したり、意志を持ち出したり、ろくな事が起こらないのよね……」

精霊とか付喪神とかそういうのか？……ぼいといえばぼいが……これだったら退魔士でも対処が出来そうだし……確かにこれも違いそうだ。

「三つは、『人工的に魔法を組み込まれるパターン』。魔法使いはそういう研究を良くしてたみたいでさ。そういうのが野生化しちやったりする場合もあるわけ。魔法使いが使い魔とかにして使うってのもあるかな？」

式神とかゴーレムとかそういうのか？……まあ、魔法使いっぽいよな。現在の魔法使いでは武霊とかを創れないなら、このパターン

でもない。

「つで、主にこの三つが私達の相手なんだけど………たまにこれ以外のパターンが出てくるわけ」

「……………それが宇宙と異世界？」

「そう。四つと五つが、『宇宙から飛来してくるパターン』と『異世界が侵入してくるパターン』」

飛来と侵入ね……………

「まあ、宇宙から飛来してくるパターンは、魔法ばかりとは限らないんだけど……………それも私達が退治したりしているわ。もつともその頻繁には飛来してこないから、もつぱら既に飛来していたのが多いかな？……………でね。ほら、この町の周辺って、やたらと隕石とか落ちてるじゃない。だから、その中の一つに武霊か忘却現象の大元があるんじゃないかって調べてはいるんだけど……………」

「……………今の所それらしき物は見つかってない？」

「そうなのよ。探知系の退魔士能力者って少ない上に、落ちている隕石の数が大きいの中から小さいのまで多くてね……………しかも、鯉の会は常に人員不足だし……………」

そう言っつて、具現化中のオウキを見て、俺に視線を戻した。

「どこかにこっちの事情を知ってて、便利な武霊能力を持った子はいないかなあ。って。ねえ？夜衣斗ちゃん」

……………あざと過ぎ……………まあ、ここまで知っておいて……………だよな……………

俺は大きなため息を吐き、

「……………分かりました。今回の件が片付いたら、鯉の会に協力しますよ」

「え？そう？やった。これで調査がぐつと楽になるわね。沙羅ちゃん」

「そ、そうですね」

俺の了承に、喜ぶ春子さんだが、春子さん以外は若干不安そうにしながら、さっきから黙っている夜衣花を気にしていた。

……. どんだけ怖がられてるんだか……. と言つか、俺の中にある夜衣花のイメージからは……. どうもギャップがあり過ぎるんだよな……. それだけ強力な退魔士能力を持っているって事か？……. まあ、それはとりあえず置いて、

「……. つで、もう一つの可能性の方は？」

「異世界からの侵入パターン？ん〜こっちの方は、異世界からつて言っても色々侵入経路が違うんだよねえ〜。魔物自身が自力で来たり、こっちの世界の何かを利用して来たり…….」

「……. 魔法使いが召喚したり？」

「そうそう。漫画とかでよくある話よね？」

……. なるほど、つまりだ。

「……. 春子さん達は、汚職事件と星波学園建設に絡んだある組織……. まあ、話の流れからその組織は『魔法使いの組織』なんでしようが……. その組織が、『宇宙か異世界のどちらから武霊を呼び出し』、星波町を『武霊の実験場にしようとした』……. そう疑っているんですね？」

飛矢折

何と言つか……. あまりにも話がごちゃごちゃと深過ぎて、あたしは全く付いていけていなかった。

ひよりさんなんか、さゆりさんによりかかって寝ちゃっているし

…….

そもそも……. あたし達はこの場に居ていいのかな？

そう思った時、黒樹君がとんでもない事を口にした。

「……. その組織が、『宇宙か異世界のどちらから武霊を呼び出し』、星波町を『武霊の実験場にしようとした』……. そう疑っているんですね？」

武霊の実験場？星波町が？

あたしがその言葉に啞然としてしていると、春子さんは少し笑って、「どうしてそう思うの？」

その問いに、黒樹君は少し考えて、自分の考えを口にし出す。

「……………まず、武装守護霊と言う存在は、基本的に戦闘……………どちらかと言うと『戦争を主体に考えて創られた魔法生命体』に見えます……………まあ、寄生者のイメージを武装して具現化する基本能力からして、それはまず間違いありません……………そして、その魔法使いの組織が、国を通して退魔士を利用した。退魔士が国と昔から深い繋がりがあっても関わらずにです……………だとすると、その組織は、『魔法を使った次世代兵器の開発』をしていると考えられます。そうでなければ、国は動かないでしょうし、退魔士達の行動を制限する事もないでしょう」

次世代兵器！？……………い、いくらなんでも突拍子過ぎるんじゃない？

……………ここ……………日本だよ？

「仮にそうだったとしても、どうして一つの町を対象にし、新たな学園を創る必要があるわけ？随分、大掛かりよね？」

「……………様々なサンプルが欲しかったんでしょう。町はもちろん、新たに学園を新設すれば、しかも入るのにかなり緩く、寮まである巨大な学園を創れば、日本全国から様々な年代のサンプルが集まる。更に言えば、退魔士と言う貴重なサンプルも」

「じゃあ、忘却現象は？さっきも言ったけど、現代の魔法使いはこんな、私達退魔士まで完璧に効果ある大規模魔法は使えないわよね？」

「……………個人的予想ですが……………多分、忘却現象は誤算だったんじゃないでしょう」

「誤算？」

「……………どう誤算になったかは……………まあ、多分、コントロール出来るかと踏んでいたが、結局コントロール出来なかった……………とかではないかな？……………ついで、俺が誤算だと考える理由は二つ。まず、武霊発生から十年も経っているのに、未だに世界の勢力図は十年前から変わらず、使用される兵器も変わっていない……………武霊と言う『強力な兵器』が手に入ったのなら、使われていないのは不自然です」

「隠ぺい工作をされているのかもしれないわよ？」

「……………その可能性は否定しきれませんが、強力な兵器の隠ぺいはそれほど意味がありません」

「どうして？」

「……………核兵器しかり、強力な兵器は抑止力……………と言うより威圧？……………の意味が付きます。武霊は、寄生者のイメージによつては、それこそ核兵器すら無効に出来るでしょ。そんな兵器をそれ目的に使わないのは、意味が無さ過ぎます……………まあ、他の国も同様に武霊を兵器にしようとしているなら別の話ですが……………それらしき情報が入ってないでしょ？」

「そうね。『世界各国が魔法兵器の開発に躍起になつてる』って情報は入つてるけど、武霊みたいな強力な魔法兵器の話は聞かないわね」

……………なんか、頭がくらくらしてきた。世界各国が魔法兵器を開発しているつて……………そんなの事……………

黒樹君を見ると、特に動揺している様子はない……………かな？……………これも予想済みつて事？

「……………なら、武霊が星波町の外に持ち出されていない可能性が上がりますね……………つで、もう一つの理由ですが、それは武霊使い強化薬と忘却剤の存在です」

？

「ん？どうしてそれが理由に繋がるの？」

あたしも思つた疑問を春子さんが口にする。

「……………武霊使い強化薬は、俺の聞いた限りでは五月雨都雅が初めて使つた……………そうですね？」

「確かにそれまでそんな薬物が使われたつて事例は……………確認されていないわね」

「……………そして、同じ薬物を使つたであろう頂喜武蔵が売り捌いていた忘却剤も……………多分ですが、ここ最近売り始めたんじゃないんですか？」

「そうね。確かにそう報告は上がっているわ」

「……………だとすると、忘却剤も武霊使い強化薬を作った者達と同じ者達と考えるのが自然でしょ？」

確かにそう考えるのが自然だろうけど……………

「それはそうかもしれないけど、それと誤算だと言う理由にどう繋がるわけ？」

「……………現れた時期から考えて、武霊使い強化薬・忘却剤は、魔法使いの組織が、『武霊と忘却現象を解析・研究の末に作り出した試作品』だと考えています……………つまり、もし、仮に忘却現象がコントロール出来るものだったとするなら、忘却剤を作る必要性がない……………と言うわけです」

その黒樹君の予想に、周囲が騒然となる。

その理由がいまいち分からず、春子さんを見ると、春子さんも驚いていて、

「ちょっと待って！忘却剤は『町の外でも売られていた』んだよ！？」

「……………えっと？……………驚いているって事は、春子さん達も同じ様に武霊使い強化薬と忘却剤を作っている人達と同じって考えているんだよね……………」

「……………なら、事態は最悪な方向に進みつつあるってことでしょう」

「最悪な方向？」

「……………魔法使いの組織が、武霊・忘却現象の解析をかなりの段階まで……………少なくとも、『ある程度コントロール出来る』まで解析・研究が終わってる事です」

第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』 16

夜衣斗

俺の予想に、周りは騒然となり、春子さんは少しの間難しい顔になった。

「……………確かに私達も、夜衣斗ちゃんの言う様に考えているわ……………魔法使いの組織が、私達退魔士をはめて星波学園を作り、武霊を宇宙か異世界のどちらかから召喚し、次世代兵器にしようとして失敗。何らかの理由で忘却現象がコントロール出来なくなつて、星波町から武霊を出せなくなり、仕方なく星波町のどこかで研究・開発を続けている……………そう考えているけど……………夜衣斗ちゃん。そこまで武霊・忘却現象の解析が進んでいる根拠は？」

根拠ね……………

「……………まず、武霊使い強化薬。これはある程度武霊の解析が進んでいないと作れない物だと思います。そして、その武霊使い強化薬を作った連中が、ただたんに忘却するだけの薬をばら撒くとは思えないからです。第一、そんな事をしての意味がない。だとすると同じ忘却繋がりで忘却現象を連想するのは自然な事です」

「そうかもしれないけど……………」

「……………そもそも、春子さん達だつて分かっているんじゃないんですか？」

俺の問いに、春子さん達は疑問符を浮かべる。

「……………ひよりさんの忘却を治療できなかつたんでしょ？」

視線をひよりさんに向けると……………ひよりさんはいつの間にか、さゆりさんに寄り掛つて寝ていた。

……………どうりで静かな訳だ……………

「確かに治療は出来なかつたけど……………」

……………まあ、この二つだと根拠としては弱いか……………退魔士達の世界でも忘却剤の様な薬はあるだろうし……………ふむ。だつたら……………

……いや、まあ、さて……どうしようか？……正直、自分から切り出したくない予想……話題なんだが……まあ、状況が状況だしな……躊躇をしている場合じゃないか……

俺は深いため息を吐き、

「……春子さん」

「ん？何？改まって？」

「……美魅が言っていましたけど、もしかして、俺の家は……黒樹家は日本五大退魔士家系の一つだったりしますか？」

その俺の問い掛けに、それまで黙っていた夜衣花が反応し、俺の腕の中の美魅を睨んだ。

美魅は何かを感じたのか、震えて逃げ込むように俺の中に入って消える。

「そうよ。私も、あなたのお母さんも、その黒樹家の人間」

あつさり肯定する春子さんに、俺はため息を吐き、夜衣花は春子さんを睨んだが、春子さんは特に気にせず、

「言葉だけじゃ信じられないだろうし……退魔士能力見る？」

そう言ってきた。

まあ、正直、春子さんが言う様に、言葉だけじゃ信じられなかったので、頷く。

すると、春子さんは片手を水平に上げ、

その瞬間、春子さんの手から黒い枝が生え、その先端から黒い小太刀ぐらいの木刀が現れた。

……この枝って、メガネベアを簞巻きにしているのと同じ物だよな……

「これが黒樹家の退魔士能力『黒き大樹』とその黒き大樹から作られる『黒樹刀』。そして、この樹は魔法を喰らう魔法の寄生樹。

私達はこれを自在に操って、退魔を行うわけ……ちなみに、私の黒き大樹は一族の中で『最弱』だから、黒き大樹はこれぐらいしか出せないし、黒樹刀もこんなにちっちゃいの……本当の黒き大樹使いは、大樹の名前の通りに出せるし、黒樹刀も普通の木刀ぐらいの長

さなただけどね……………」

そう言う春子さんはどこか自嘲気味に笑った。

…………… 最弱ね…………… まあ、その事で春子さんがどんな目に遭ってきた…………… 今の表情で想像するのは簡単か…………… 何にせよ。春子さんの感じからして、母さんの実家はあまりいい所ではなさそうだ…………… にしても…………… 魔法を喰らう樹？…………… それって、魔物とか魔法使いにとつて天敵なんじゃ…………… と言うか、

「…………… そんな能力を持つてるのに、忘却現象の影響を受けるんですか？」

「だから、言ってるでしょ？現代の魔法使いじゃ出来ないって…………… なるほど…………… それが最大の根拠になってるわけか…………… 「まあ、でも、流石に武霊は寄生出来ないみたいなのよねえ。」それだけは、すっごく残念かな？」

そう残念がる春子さん。

確かに、春子さんの様な人物が武霊を具現化出来ないのは…………… 少し不自然か…………… 同じ退魔士である統合生徒会長とか優癒さんとかは武霊を使えるのに…………… 武霊と忘却現象はそれだけ性質が違つて事なんだろうか？…………… ふむ、何にせよ。春子さんが武霊に寄生されないと言う事は……………

「…………… やっぱり俺には退魔士能力はないわけだ」

ぼそつとそうつぶやくと、春子さんはもちろん、夜衣花もぎくりとした。

その様子をちらりと見ながら、

「…………… 考えられるパターンは二つ。俺が『養子』か『能力を受け継げなかった』…………… そして、養子であった場合、俺の両親、

『黒樹 夏子』と『夜』の本当の子供は……………」

視線を夜衣花に向ける。

明らかに動揺する夜衣花。

「…………… 夜衣花だと仮定出来る」

???

木々が生い茂る森の中に、夜衣花がいる小屋があった。

周囲に生える植物は、あきらかに日本のものではなく、そこが海外、それも熱帯・赤道付近である事を示している。

彼女が今いる国はインド。

六月のモンスーンに入っている事もあり、小屋の外はバケツを引つ繰り返した様な酷い雨で、小屋の中は異常な雨音に支配されている。

そんな中に夜衣花を含む四人の男女がいた。

その内の二人の女は、椅子に座り、辛そうに目をつぶっている夜衣花を心配そうに見ている。

夜衣花の手元には、魔法具を付けた携帯電話。

携帯電話に付けた魔法具は、携帯電話を介して意識の一部を掛けている携帯電話に送り、その携帯電話に付けている魔法具が再現したホログラムに送った意識を宿す魔法具。

「……これ……本当に大丈夫なんでしょうね？」

そう疑惑の声を上げるのは、金髪ポニーテールの白人女性。

その格好は何故かメイド服で、その手にはショットガンと現実的にはおかしい組み合わせだった。

そして、疑惑の声を向けられた女性は黒髪ロングヘアの日本人女性だったが、その格好は異様なほどの蒸し暑さだと言うのに、ライダースーツを着て平然としている。

「大丈夫ですよ。今までだって不良品を渡された事はなかったじゃないですか？」

「……じゃあ、どうして夜衣花お嬢様は苦しそうにしているのよ！」

「え？だって、それは……いよいよ『あの事』を話すんじゃないんですか？」

「そんな事、あんたに言われなくたって分かってるわよ！」

「そ、そうですか……」

何だか理不尽に怒鳴られ、ライダースーツの女性は困った様子にこっそりため息を吐いた。

メイド服の女は基本夜衣花限定の心配性で、今の二人のやり取りは大体いつも通り。

だからか、そんな二人のやり取りを特に気にせず、この場で唯一の男性である執事服の男は、ずっと窓の外の様子を窺っていた。

男性は黒色の肌に、銀色の髪、赤い瞳と容姿上ではこの場の誰よりも特徴的な男性で、どこか人でない雰囲気醸し出しており、事実、彼は人間ではない。

その証拠に、唐突に彼の眼前にリーダーサイトの様な物が現れ、それと同時に両手を機械的な姿に変化させて肥大化、窓から飛び出した。

「つちよ！ちよつと待ちなさい。単独行動は夜衣花お嬢様に禁止されていてしょうが！」

唐突な執事服の男の行動に驚きながら、メイド服の女はライダースーツの女を睨み、

「とつとと援護に行きなさい！」

そう言うと同時に、手を横に外に向けて振った。

ほぼ同時に、土砂降りの雨が降る外の何も無い空間から大型バイクが飛び出し、停車。

大型バイクの出現を確認したライダースーツの女は、

「夜衣花ちゃんを頼みます」

と言つて駆け出し、大型バイクに飛び乗る。

「あんたに言われるまでもないわ」

メイド服の女はそう言つてムスツとし、それを見たライダースーツの女は苦笑しつつ、大型バイクを走らせ、森の中へと消えた。

その際に、大型バイクは一切音を発せず、まるで馬の様に機体を動かし飛び、木々の幹を走ったので、このバイクも普通のバイクではなく、魔法仕様のバイクの様だった。

ライダースーツの女を見送ったメイド服の女は、ショットガンを

油断なく構えながら、夜衣花を見て、うろたえた。

「よ、夜衣花お嬢様!？」

何故なら、夜衣花はメイド服の女の前で、目を瞑りながら涙をぼろぼろと流していたからだ。

飛矢折

黒樹君のとんでもない仮定に、唐突に夜衣花ちゃんがぼろぼろと泣き出した。

いきなりの涙に、黒樹君は見るからに動揺し、助けを求める様に顔を周囲に向けるけど、向けられたほとんどの人も黒樹君と同じ様に動揺していて、どうする事も出来ない。

「違うの。違うの……夜衣斗お兄ちゃんは……私の……」

涙で言葉にならない夜衣花ちゃんに、春子さんは微笑みかけ、黒樹君にはちよつと怒った表情を向けた。

「もう！どうしてそんな仮説を立てるかな！？夜衣斗ちゃんわ」
そう怒る春子さんに、黒樹君は戸惑った様子を見せ、

「……………どうしてって……………前から少し……………ありえないとは思いつつも……………少し思ってた事なんです。夜衣花の両親は、うちの両親の知り合いと言う割には一度も家に来た事がありませんし、会った事がありませんし、写真で見た事ありません。普通なら両親なり、夜衣花なりが自然に見せるぐらいはするんじゃないか？……………そう少し疑問に思うと、いくつか不自然な所が……………今まで気にもしなかつた事が気になってきて……………例えば、夜衣花の名字を知らないとか……………夜衣花がうちの両親に似ているとか……………」

夜衣花ちゃんが黒樹君のご両親に似ている？……………言われてみれば……………夜衣花ちゃんと春子さんはどこか似ている所がある様な気がする……………夜衣花ちゃんの方は、目付きが若干鋭いみたいだけど……………

……………
そんな事を思いながら、春子さんを見ると、春子さんは黒樹君を呆れた顔で見ている。

「夜衣斗ちゃん……………あんまり自分の顔を見た事ないでしょ？」

「……………まあ、ここ数年はまともに見た事がない……………かな？」

確かに黒樹君って、いつも前髪で目を隠してるし……そう言えば、あたしも黒樹君の顔を見た事ないな……

春子さんはため息をついて……あ！なんか黒樹君のため息した感じと似てる……黒樹君に近付いて、黒樹君の前髪を、樹を出していない方の片手……いつになったらしまっただろう？……で上げた。

現れたのは……夜衣花ちゃんとそっくりの鋭い目付きで……結構……いい顔……

「ほら、やっぱり夜さんにそっくりじゃない。あなた達二人は、ホント……目元が向こうの家系寄りよね」

そう言って、春子さんは微笑んで、黒樹君から手を離れた。

「……つまり、夜衣花と俺は本当の血の繋がった……本当の兄妹？」

そう言って、夜衣花ちゃんを見る黒樹君。

黒樹君を受けて、夜衣花ちゃんは涙を流しながら、辛く悲しそうな、それでもどこか嬉しそうな表情になって、頷いた。

黒樹君は、夜衣花ちゃんの事を両親の知人の娘って言っていた。

なのに、本当は黒樹君の実の妹で……どうしてそんな事になったのかは分からないけど……きっと、夜衣花ちゃんは自分は本当の妹だって、ずっと言いたかったんだと思う。

だから、そんな表情になって……それを見た黒樹君は、少し困った雰囲気になり、少し間を置いて、春子さんに顔を向ける。

「……春子さん。退魔士能力は、必ずしも子供に受け継がれないんですね？」

「そうよ。ん〜と、確か、同じ一族なら、九十パーセント以上。違う一族同士なら七十から八十の間でどちらかの退魔士能力が、両方となると十パーセントを下回って。片方が一般人だった場合は、大体六十から七十ぐらいが平均かしら？夜さんは……あなたのお父さんは、黒樹家とは違う退魔士家系・操形家の出身だから……夜衣斗ちゃんは七十から八十の確立に入らなかつたって言えるけど……でも、黒き大樹の方は、少し事情が違うのよねえ〜」

夜衣斗

夜衣花と俺が実の兄妹……かなりショッキングな話で……まあ、予想通りと言えば予想通りだが……予想通りでも、やっぱりかなりダメーシが……はあ……一体なんでそんな事になったんだか……まあ、ある程度は予想は付くが、現時点では可能性が多過ぎる……まあ、何にせよ。予想出来ていても、その先の事を一切考えていなかったのはまずかったな……どこかで……そんな事はないって思ってたんだろうが……考えとくべきだったよな……夜衣花の今の顔を見ると……何を言うべきか、何にも浮かばない……まあ、だから、話を進める事にしたんだが……事情が違うね……ん。

一瞬だけ視線を芽印さんと優癒さんに向け、まだ出している春子さんの黒き大樹を見た。

なるほどね。

「……要するに、黒樹家の退魔士能力は、他の退魔士能力と違って……どちらかと言うと、武霊に近い魔法生命体なわけですね」

「おお！さすが夜衣斗ちゃん。鋭いわねえ」

俺の予想に感嘆の声を上げる春子さんが……俺はため息を吐き、

「……能力を見れば誰でも分かりますよ……つで、植物だとするなら、継承率は他の退魔士能力に比べて高い……種か何かで受け継がれるものなんじゃないんですか？」

「そうよ。黒き大樹は、『胎児の段階で親の黒き大樹から種として、その子供の魂に植え付けられる』の。だから、ほぼ百パーセントの継承率なんだけど、」

「私が悪いの！」

不意に夜衣花が春子さんの言葉を遮り、そんな事を言った。

私が悪い??

「あのね夜衣花ちゃん。この事は、誰が悪いなんて事はないの。」

しいて悪いとすれば、黒樹家の掟ぐらいよ」

掟ね……古臭い言葉が出てきたな……

「でも……私さえ、私さえ夜衣斗お兄ちゃんの種を継承しなければ！夜衣斗お兄ちゃんは！」

泣きながら叫ぶように言う夜衣花。

……何だか、ずつと言いたくて仕方がなかったって感じに見えるな……それにしても、俺の種をね……つまり、俺に継承されるはずだった黒き大樹の種は、夜衣花に受け継がれたわけだ……ん？だったら、何で私が悪いって思うんだ？俺が種を受け継げなかった原因に、産まれてもいない夜衣花が関われるわけがない。春子さんだって否定しているわけだし……ん？誰かにそう思わせる様な何かを吹き込まれた……とか？何にせよ。

俺はため息一つ吐き、

「……つまり、何らかの理由で、俺は黒き大樹の種に拒絶されたわけだ……だとすると、それは俺が悪いんであって、後から生まれた夜衣花が、気にする事じゃないんじゃないか？」

そう俺が問い掛けると、夜衣花は首を横に振り、

「違うの……違うの。夜衣斗お兄ちゃんは悪くないの……私が『主人公』だから……だから、私さえ生まれなければ、夜衣斗お兄ちゃんは『黒き大樹を失う運命にならなかった』の！」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 18

夜衣斗

……また主人公って言葉が出てきたな……しかも、夜衣花も主人公？……ん？

何となく意味は分からなくもくはないが、それがあって自信も確証もないので、春子さんに視線を向ける。

俺の視線に気付いたのか、春子さんは苦笑して、

「主人公って言葉にはね。魔法使いの間では、普通に使われている以外の別の意味があるそうなの」

そう言って、春子さんはまだ出している黒樹刀を使って地面に絵を描き始めた。

それは樹の絵で、地面に現在。地中に過去。空に未来と書いた。

……これって……世界樹？

「これは魔法使い達の間で認知されている可能性を含めた世界の形……世界樹って呼ばれているそうよ。っで、魔法使い達は、この世界樹を生き物の様に考えているの」

生き物ね……確かに、こう図にすれば、樹として見えるが……

……と言うか、魔法使いね……ふむ……

「夜衣斗ちゃん。世界樹はどうなった時に成長すると思う？」

どうって……

「……歴史が進んだ時？」

「そうね。じゃあ、どうやって枝分かれると思う？」

「……そりゃ、大きな分岐点・変換点がある時？」

「大きな分岐点・変換点って？」

……何なんだ？

「……歴史的な大事件や……世界の危機とか？」

……世界の危機ね……自分で言っつて陳腐に聞えるな……

ん？待てよ？陳腐に聞えるのは、魔法とかそういう空想の産物が……

現実には存在しない』と言う常識があつたからで………だけど、今、その空想の産物が実際に存在するって、知ってしまった………つまり、

「………もしかして、魔法使い達が使う主人公と言う言葉には、『魔法が関わる世界の危機に相對する運命にある人物。もしくは中核になる運命を持った人物』と言う意味がある………とか？」

「ピンポン。せいはい。まあ、とは言つても、股聞きの股聞きだから、ちよつと違う所があるかもしれないけどな」

………ん？………もし、最後の敵が、同様の意味で主人公と言う言葉を使ったのなら、大原亮も………偽者らしいが、俺や最後の敵も、世界の危機に関わっているって事になるな………って事は、この町で起こっている事は………『世界の危機に繋がる事』だと？………いや、そうか、考えて見れば、魔法使いの組織が武霊を次世代兵器にしようとしている可能性が非常に高いんだから………もし、武霊が世界中に広まれば………

自分の想像に、ぞわつと背筋が寒くなった。

………つちよ、ちよつと待てよ………今までもかなり大事だとは思っていたが………どう考えても、普通以下の俺にどうこう出来る事か？今までだって、自分の命を守る事でギリギリだったって言うのに………世界の危機だって？………とりあえず………とりあえず………それについては考えない様にしよう………第一、今、この場で一番重要な事は………

夜衣花を見ると、まだ泣いて、

「力を持たなくちゃいけない主人公は、『力を得る・集まる宿命』を背負つて………だから、夜衣斗お兄ちゃんが黒き大樹を受け継げなかったのは………私のせいなの」

………確かにそう言う意味の主人公であるなら………夜衣花が相對する世界の危機がどんなものかは知らないが………それに対応したものを夜衣花が持っていないと、主人公として成り立たなくなるな………ん？どうしたもんだらうか？俺の持っている知識のほとんどは、

確かな根拠があるわけじゃない。今までフィクションだと思っていたものばかりだし、作ってる側だってフィクションだと思って作っているだろうし……だから、夜衣花が言っている事を否定出来る材料は、俺の中にはないな……ただたんに否定しただけで、どうこうなるもんじゃないだろうし……

困った俺は春子さんに再び視線を向けると、春子さんは困った顔をして

「夜衣花ちゃんはね。この間戦った魔法使いから、この主人公の話聞いたらしくてね。しかも、知り合いの魔法使いにもその可能性があるって言われちゃったらしくて……」

……なんだその馬鹿正直な魔法使いは！

「私はそんな事はないって言ってるんだけどね。だって、夜衣斗ちゃんが黒き大樹を受け継げなかったのは、夜衣斗ちゃんが黒き大樹と『相性が良過ぎるせい』だもの」

……相性が良過ぎるせい？

「……なんで相性が良過ぎると、黒き大樹を受け継げないんですか？普通、逆でしょ？」

「ん〜そうね。普通の退魔士能力なら、確かに逆なんだけど、でも、黒き大樹の場合、あまり相性が良過ぎると……」

ストリートに言葉にすると意味が伝わらなくなると思ったのが、春子さんは少し考えて、

「退魔士能力が魔法だって言うのはさっき言ったよね？で、魔法の維持の為に、魔力が必要なんだけど、その魔力をどうやって手に入れると思う？」

その問いに、俺は返答に困った。

何故なら、既に世界樹の外に繋がる魂の中にある穴・魔力孔の存在を知って、実際に見ているからだ。

春子さん達が味方なのはもう疑うつもりはないが、下手に知った知識を披露すると、今度はこっちが疑われかねない。統合生徒会長に、退魔士の事を知っていただけで、あれほど過剰に反応されたん

だ……だとすると、色々と分かっていない今の段階で……素直に答えるべき……言うべきじゃないな……そして、魔力孔の知識以外にも……サヤ達の存在とか、心の中で知り得た他の情報とか……俺が悩んで黙っていると、春子さん少し面白そうにニヤリと笑って、

「これは私達以外の普通の人達にも言える事なんだけど……全ての魂の中にね、世界の外に繋がっている魔力孔って穴があるの。普通は、自分の存在を維持する程度の魔力……この場合は根源意志力だったかな？この世の存在は、その根源意志力で存在を維持……魂とか意志力とかを作り上げて、余ったのが魔力になるんだって。だから、普通の人は魔力を持ってない……らしいわ」

らしいわって……まあ、退魔士はそう言う系統の専門家じゃないだろうから、他から……多分、知り合いの魔法使いに聞いたのか？……まあ、何にせよ……なんか、一度聞いた話を……まあ、若干端折った感はあるが……もう一度聞くのは……なんかな……「っで、魔法を取り込んでいる人は、その魔法の影響で魔力孔が開く？と言うより、その魔法によって開かされるらしいの」

……なるほど、開かされるなら、魔力孔の大きさは、あくまでその魔法を維持する為の大きさしか開かないだろうな……だからこそ、退魔士達の武霊は通常の武霊と同じわけだ……俺や武霊使い強化薬を使った連中と違って……

「だから、黒き大樹も同様に、種が胎児に着床すると自分が成長・維持するだけの魔力孔を広げるんだけど……黒き大樹と相性が良過ぎると、魔力孔が開き過ぎちゃって……そこから吹き出した黒き大樹の許容以上魔力で、芽吹いたばかりの種が母親の方へ流されちゃうわけ」

……魔力孔が開き過ぎる？……なるほど……俺の魔力孔は常人以上に開いている。そう魔力孔の前で謎の老人は言っていた。つまり、それは黒き大樹を受け継げなかったのが原因なわけだ……と言う事は、統合生徒会長が隠していた俺が通常の武霊使いじゃない理由

はこれっぽいな……と言つか、実際は、多分一因だろうな……あきらかに、それだけじゃなさそうだし……憶えの無い公園とか、謎の老人とか、サヤとか、そもそも、これだけじゃ説明出来ない事が多過ぎる……やっぱり、退魔士達だけでは全ての答えが分かるわけじゃなさそうだ……魔法使い。それも、武霊に関わっている魔法使いにも話を聞く必要があるんだろうか？……まあ、俺に掛けられているって言う記憶の封印が完全に解ければそんな必要はないんだろうが……

「そして、母親へと流された種は、普通の人なら魔力不足で……成人した人の魂に魔力孔を開けるのは難しいみたい……退魔士だったら、所有している退魔士能力に阻害されて、着床も、それ以上の成長もしないで休眠状態になり……その人に次の子供が産まれたら、その子にその種は受け継がれるの。だから、その次の子は本来受け継ぐ種と合わせて二つの種を持つ事になって……」

少し、気遣う様に夜衣花に視線を向け、続きを言う事を躊躇う春子さん。

……普通に考えれば、二つの種を持っているって事は、夜衣花は通常の黒き大樹使いの二乗の力を持っているって考えられる……そして、退魔士と言う仕事が、魔物と呼ばれる存在と戦う事なら、夜衣花は黒樹家にとつて『重要な戦力』って事になる……まあ、周りの反応からすると、それだけってわけではなさそうだが……だとすると、両親が出張でよく家を開けている事・夜衣花と一緒に住んでいない事・他人の子だと偽ってまで俺に会いに来ていた事・俺が退魔士とは無縁な場所で育てられている事……掟……そして、接近が禁止されている場所へ俺を引っ越させた……その直後の前例のないはぐれの発生……ん〜やっぱり、この結論しか浮ばないな……何にせよ。

「……どうやら本当に俺のせいで夜衣花にずっと大変な思いをさせていたみたいだな……」

そう俺が言うと、夜衣花は驚いた様な顔をして、

「……………どうして……………どうしてそんな事を言うの？夜衣斗お兄ちゃんは、私のせいで……………私のせいで……………」

続きを言うに言えない……………そんな感じの夜衣花。

……………あまり自分から言うべき言葉じゃないだろうが、ここは俺が言うべきだろうな……………」

そう思った俺は、夜衣花の言葉の続きを口にする事にした。

「……………殺されそうになった？」

飛矢折

殺されそうになった？

黒樹君のその問いに、周りがざわつき、驚く顔になる春子さん。夜衣花ちゃんに至っては、顔面蒼白になって、茫然と黒樹君を見ている。

そもそも、な！なんで今のやりとりでそんな言葉が出てくるわけ！？

「……………さつき春子さんは黒樹家の掟が悪いと言いましたね？」

周囲の反応を確認した黒樹君は、春子さんにそう問い掛ける。

「ええ……………言ったわ」

「……………掟と言う言葉が、悪いと言う言葉と共に使われたんです……………普通に考えればその掟は、誰かの不利益になる物なのでしょう。だったら、使われたタイミング的に、その対象は俺や夜衣花……………そして、両親が対象になる可能性が高い……………そう考えると、両親がよく出張で家を開けていた事……………まあ、これは出張と称して夜衣花に会いに行っていた可能性も無くはないが……………そうじゃないだろ？」

黒樹君の問い掛けに、夜衣花ちゃんは頷いた。

「……………だとすると、両親は退魔の仕事をし、しかもかなり頻繁だった事から考えると、かなりきつい退魔をしよっちゅう押し付けられていた……………出張明けの二人はいつも異様に疲れていましたから、辛い仕事なのは間違いないでしょう……………後は、夜衣花と一緒に住んでいない事や、他人の子だと偽ってまで俺に会いに来ていた事、俺が退魔士とは無縁な場所で育てられている事などを合わせて、掟と黒き大樹のほぼ百パーセントの継承率の事を考えれば……………俺その者が黒樹家にとって『禁忌な存在』だと連想できる」

……………えっと……………どう連想したらそうなるんだらう？……………それに禁忌の存在？

「……………なんでもそうでしょうが、例外と言うのは、吉兆か凶兆のどちらかに受け取られるのがほとんどでしょう……………そして、俺達にとって不利益な掟が存在するなら、俺と言う例外は、間違いない凶兆として受け取られ……………退魔士のような古くから闇に存在する様な者達なら……………日々命のやり取りをしている様な人達なら……………そう言う例外を排除する事をいとわないんじゃないか？……………そう考えると、さっき言った事の全ては……………『俺を守る為に、両親が黒樹家と取引した結果』と考えられます」

黒樹君はそこまで言っただけで春子さんに向けていた顔を、夜衣花ちゃんに向けてる。

「……………だから、俺のせいで、夜衣花は父さん母さんから引き離され……………俺から離れた種を受け継いだせいで、黒樹家に退魔士として強要されているんじゃないか？」

黒樹君の夜衣花ちゃんへの問いを……………夜衣花ちゃんは否定しかけ……………否定しなかった。

「夜衣花ちゃんは何も」

黙ってしまった夜衣花ちゃんの代わりに、春子さんが黒樹君の問いに答え始め、一瞬、夜衣花ちゃんがそれを止めようと仕掛けるけど……………止めなかった。

「確かに夜衣斗ちゃんが言う様に、黒樹家に退魔士である事を強要されているわ。しかも、黒樹家次期当主としてね」

次期当主？夜衣花ちゃんが……………まだどう見ても中学生ぐらいの子なのに……………退魔士ってだけでも苦労しそうなのに、そんな役目まで負わされて……………

「……………やっぱり俺のせいで？」

その黒樹君の問いに、春子さんは少し困った顔をして……………

「そつよ」

「春子お姉ちゃん！」

頷いた春子さんに、夜衣花ちゃんが怒るけど、春子さんは首を横に振り、

「夜衣花ちゃん。夜衣斗ちゃんは真実が聞きたいの……それに、この場で嘘を吐いても意味はもうないわ。この話は私達の間では有名な話だし、退魔士に関わった夜衣斗ちゃんなら、直ぐに辿り着いちゃうわ……だったら、他人から聞かされるより、私達が話すべきよ」

春子さんのその言葉に、夜衣花ちゃんは顔を伏せて沈黙。

そして、春子さんは衝撃的な黒樹君の過去を話し始めた。

「夜衣斗ちゃん。あなたの言う様にあなたは黒樹家にとって……

…『種無し』と呼ばれる禁忌の存在よ」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 20

夜衣斗

……微妙に春子さんは俺を勘違いしているな……こんな状況じゃなきゃ、自分の事を他人になんか聞き出そうとなんかしないって……まあ、何にせよ……種無しね……

微妙に嫌な感じの言葉に、俺は密かに眉を顰めつつ、春子さんの話を黙って聞く。

「大昔、種無しと呼ばれる子は吉兆として大事に扱われていたそうよ……だって、次に産まれる子が、必ず強力な退魔士になるんだからね……でも、ある時、当時敵対していた古来魔法使い達がある種無しの子に目を付けたの……種無しの子は、種が開けた大きな魔力孔を持っている。だから、退魔士の血筋でありながら、『最も魔法使いに適している』の……そして、退魔士の家に生まれながら、退魔士として生きられない事をほんの少しだけ妬んでいたその子の心を誘導して、その魔法使い達はその子を黒樹家にあだなす最悪の魔法使いにしてしまい……黒樹家は多大な被害を受けたそうよ」

……なるほど、だから統合生徒会長が、魔法使いに接触したかどうかにかかわらず反応したわけだ……俺が退魔士の敵として魔法使いにさせられているんじゃないかって……

「……だから、黒樹家はその後、種無しが産まると直ぐに殺す掟を作ってしまったの」

……まあ、そうなるか……なんであれ、どんな理由があろうと……俺は母の実家を、黒樹家を好きになれそうにないな……

「……だから、夏子お姉ちゃんと夜さんは、産まれてくる子供を守る為に、あなたを守る為に……駆け落ちしたのよ」

?……はあ!? 駆け落ち!? え?……さ、流石にそれは予想外だったな……

「二人は、それぞれ立場があつたからね。夏子お姉ちゃんは黒樹家の次期当主。夜さんも操形家の次期当主。本来なら次期当主同士が結婚するなんてありえないし、認められない。だから、それも含めて駆け落ちって手段に出ただけ……」

「……まあ、現状から考えて、

「……直ぐに捕まつたんですね」

「そう。そして二人はその事が切っ掛けで、次期当主の資格をはく奪されて、一応は二人の結婚は認められた。でも、そのせいで二人は……特に夏子お姉ちゃんは黒樹家での力を失って……だから、二人は、既に産まれていた夜衣斗ちゃんを殺さない為に、黒樹家現当主と取引をするしかなかったの……二人にとって不利で、とても酷い条件の取引を」

酷い取引……何と言うか……心臓が痛い……こんな俺の為に、両親が、夜衣花が、辛い目に遭つていたのに、俺はのうのうと日々を過ごし……普通以下に育ってしまった。これじゃ何一つ三人に返せない……だったら、せめて俺は全てを知り、それを受け止めなくちゃいけない……それが最低でも俺がすべき事……そんな気がした。

「……それで、その条件とは？」

「提示された条件は四つ。一つは、産まれた子に魔力孔封印処理を施し、黒樹家とは無縁の場所で普通の人として育てる事。まあ、そうは言つても、夜衣斗ちゃん封印……開いた魔力孔を黒き大樹の枝で塞ぐ方法だったけど……それはとれちゃつたみたいね……武霊の影響かしら？最初に会った時から、既に少し魔力を感じていたし……しかも、今じゃ全部取れちゃつてるみたいね……さっきの戦い、私達は全部見れたわけじゃないから、何かあつたの？」

「……何かつて……死にかけ……いや、そんな事は流石にこの場所じゃ言えないよな。」

ちらつと夜衣花を見ると、泣き止んではいる様だが……
それにしても……ん……なるほど……あの時魔力孔にはそ

れらしき物はなかったから、既に魔力孔の封印が壊れていたわけだ……確かに武霊の影響でその封印が解け始めていた可能性はなくもないだろうが……まあ、そうじゃなきゃ通常の武霊使い以上に武霊を具現化出来る『退魔士側の考え』が肯定されないよな……だが、他の、俺しか知らない要因らしきものはいくつもある。だとすると、それは一因って事か？……まあ、何にせよ。

「……つまり、それが退魔士側が考える、俺が通常の武霊使いではない理由なんですな」

「そうよ。ね？沙羅ちゃんだと話せないでしょ？」

まあ……確かに統合生徒会長が勝手に話して良いない様じゃないな。立場的にも、常識的にも。

「ついで、二つが、夏子お姉ちゃんと夜さんの黒樹家本家接近禁止。三つは、黒樹家に回されるA級以上の退魔を二人が優先的に担当する事。そして、最後の四つが、次に産まれてくる子供が女子であった場合、その子供を黒樹家本家に差し出す事。……黒樹家は代々女性が当主になる決まりなの……だから、夜衣花ちゃんは黒樹家本家に引き取られ、夏子お姉ちゃんと夜さんは、夜衣斗ちゃんに出張って偽って、過酷な退魔の仕事に行って、家をしょっちゅう開けていたの」

……何とも複雑な心境だ。幼い頃は両親が家にいない事に寂しさを感じ、多少は両親の事を恨んだりした。まあ、今でも家族としての信頼はあるが、好きか？つと聞かれたら首を傾げる。そんなんじゃない……他人じゃないが、普通の家族より俺は親を思っているだろうか？……今度会った時、俺は両親になんて言えば……そして、夜衣花に今、なんて言えばいいんだろうか？……分かるはずもないか……だったら、分からない事は全て後回しにして、今は知るべき事を知ろう。

「……じゃあ、今回の出張も？」

そう問うと、春子さんは若干引きつった笑みを浮かべ、

「ええ、そうよ」

と言った。

「……やっぱりか……」

春子さんの反応に、俺は深いため息を吐き、

「……春子さん。俺が殺されそうになっただけじゃないんですよ」
も黒樹家の掟の内容を予想してだけじゃないんですよ」

その俺の言葉に、春子さんはキョトンとした顔になる。

「違うの？」

「……さっき言いましたよね。魔法使いの組織がある程度武霊の研究を終わらせていると」

「……言っただけど、それは……」

「……さっき言った事も根拠の一つですけど、あれ以外にもそう考える根拠はあります」

「夜衣斗ちゃん。話が見えないんだけど？」

「……不自然な時期での俺の引越。両親の海外への長期出張と言う理由ですが……まあ、他にも理由は色々説明されて見れば、今までだって出張でよく家を開けていたんです。だから、俺が一人でもある程度やっていける事を両親も知っているはず。なのに、今まで会わせた事も、教えた事もない親類に俺を預けた」

「……それは」

何か言おうとする春子さんの言葉を遮り、

「……だとしたら、こう考えられます。俺が狙われる様な事が、『退魔士側の事情』で起き、あのままでは守りきれない事態が……」

例えば……お家騒動？」

その予想に、周囲がざわめいた。

「……どうしてそう思うわけ？魔法使いに狙われているのかもしれないじゃない」

あきらかに動揺している春子さんに、俺はため息を吐き、

「……確かに魔法使いに狙われる可能性はなくもないでしょうが……多分ですが、今の魔法使いは源である魔力より、技術を重

視する傾向にあるんじゃないんでしょうか？魔術媒体に電子技術を取り入れ、魔法兵器を次世代兵器にしようと躍起になっている事から、その傾向は読み取れます……………そもそも、兵器は、誰でも使えないという意味がありませんからね。魔力を持った人間しか使えない兵器は、軍としても、国としても良く思わないでしょう……………なら、わざわざ退魔士を敵に回してまで、俺を狙おうとする理由が魔法使い側にはない事になります……………だとすると、俺が狙われる理由は、退魔士関連しか考えられません。そもそも俺は、何の取り柄もない、家も資産家じゃない、普通以下の人間です……………まあ、普通の社会から見たらですが……………なのに、狙われているとなると、あきらかに退魔士側の事情。なら、関わるのは黒樹家の可能性が一番高い。そして、黒樹家が日本五大退魔士家系と呼ばれる大きな家であるなら……………まあ、単純にお家騒動でも起きたんじゃないか？と連想したわけです。まあ、そこだけ適当に言っただんですが……………この反応からすると、間違いなさそうですね……………」

「……………夜衣斗ちゃん……………確かに、今、黒樹家ではお家騒動が起きているわ……………理由は……………」

チラツと夜衣花を見る。

……………まあ、夜衣花が次期当主なら、夜衣花はお家騒動の中心人物だと言えるが……………なんか微妙に……………心配している様な、困った様な感じがあるな……………何かがあるのか？

「とにかく。今、夏子お姉ちゃんと夜さんは、そのお家騒動の火消しで色々な所に飛び回っているの」

「……………色々な所？」

「ほら、黒樹家の退魔士能力は継承率がほぼ百パーセントって言ったでしょ？だから、他の退魔士家系以上に分家が沢山あって、世界中に分家があるのよ。つで、その家一つ一つに行つて、こつちの味方に付く様をお願いに行つてるんだけど……………相手は六大分家だから、味方に付いてくれる分家は……………」

最後の方はつぶやく様に言つた為、聞えなかったが……………まあ、

多分、良くない状況なのだろう……俺が心配してもしょうがないが……

「……夜衣花は何をしているんです？」

「え？……あゝ夜衣花ちゃんはね」

チラツとまた夜衣花を見る春子さん。

「ちよつと別件の退魔でインドに行ってるの」

インド！？……俺は国外に出た事も、一生出る事もないと思
っているのに……妹は随分グローバルワイドだな……何をし
ているのかは知らないが……

「……あまり無理をするなよ」

そう俺が夜衣花に言つと、

「うん……」

少し微笑んで頷いてくれた。

……さてと……

俺は春子さんに顔を向け、

「……つで、お家騒動で、俺が六分家でしたっけ？のカード
として使われる事を恐れた両親は、何が起きているか不明だが、味
方が多く、退魔士が接近する事を禁じられている星波町に引越さ
せた……俺の引越しの真相はそんな所でしょう」

「確かに夜衣斗ちゃんがこの町に……私の所に預けられたのはそ
う言っ事だけど……何が言いたいの？夜衣斗ちゃん？」

何がって……俺はため息を吐き、

「……さつきから言ってる通り、魔法使いの組織が武霊の研究
をある程度終わらせていると、俺が考える根拠の事です」

そう言つと春子さんは眉を顰め、少しして目を見開いて驚きの表
情になった。

「まさか！あの時の！夜衣斗ちゃんが町に初めて来た時起きたは
ぐれは、魔法使い達が起こしたって事！？」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 21

飛矢折

はぐれが魔法使い達の手によって起こされた！？もしそれが本当なら……………最悪なんじゃ……………

あまりの予想に周囲のざわめきが強くなり、視線が黒樹君に集まる。

その視線に一瞬気圧された感じを見える黒樹君だけど、一息吐いて、

「……………そもそも、あまりにもタイミングが良過ぎるんです。俺が町に来て直ぐにはぐれが起き……………二度目のはぐれも五月雨都雅が俺達の前に現れてから発生した。仮にそのはぐれの発生タイミングが偶然だったとしても、俺が遭遇した最初のはぐれだけが例外、と言うのが引つ掛かってました……………あれ以降、一週間以内に発生したはぐれはありませんでしたよね？」

確かに、そう言われて見れば……………五月に起きた連日はぐれ発生以降、立て続けにはぐれが発生したって聞いた事がないような……………

「……………だとすると、武霊発生から十年の歴史の中で、ただ一つの例外のはぐれ発生になる……………これはあまりにも不自然で……………だとすると、人の手によって起こされたと考えるのが自然です。ですが、そうなると、何の目的で、誰が……………そこまで考えて、俺は思考を止めていました……………まあ、あまり深く関わりたくありませんでしたから、詳しく調べてはいませんが……………あの日、何か特別な事があったと言うわけでもなかった様ですし、誰がと言っても、それらしき話は噂程度にしかない……………ですが、武霊と忘却現象を召喚したと言う魔法使いの組織の話と、俺が黒樹家六分家に狙われていると言う話が出てくれば……………自ずと導き出される答えは……………一つしかありません。『黒樹家六分家が、魔法使いの組織と取引をして、俺を殺す様に頼んだ』って」

黒樹君の推論に、一瞬、場が静まり、再びざわめき出す。

「そんな事あり得るか？」

「第一、捕まえるならまだしも、殺してしまつては意味が無いだろう？」

「いや、『あの女』ならやりかねない」

「確かに、前々から連中と繋がっていると云つ噂はあつたしな…

…」

そんな会話がこちらから聞こえてくる。

黒樹君も同じ会話を聞いたのか、

「……………まあ、お家騒動のカードに俺を使つつもりなら、殺そうとするのは不自然だとは思いましたが……………どうやら、そう云つ取引をしそうな人がいるみたいですね……………本来なら捕まえると言つ話だったのが、その誰かによつて殺す内容に変えられたつて事でしようかね？……………まあ、俺が殺されたとしても、それはそれで両親や夜衣花を誘き出せるでしょうから、一様の目的は達せられるでしょうね……………個人的には酷く効率が悪く、逆効果な気がします……………」

そう黒樹君が妙に他人事つて感じて納得していると、春子さんは少し慌てて、

「ちよ、ちよつと待つて！いくらなんでもそれはありえないと思つわ。だって、さつきも言つたけど、今の魔法使いと退魔士は、敵対関係じゃないにしても、お互いを警戒し合つている間柄なのよ！？」

春子さんのその疑問に黒樹君はため息を吐き、

「……………鯉の会に魔法使いとの繋がりがあるなら、他の退魔士達にも繋がりがあつても不思議ではないでしょ？……………第一、正規の退魔士達には『政府と言つ仲介』がある。同じ政府に魔法使いが仕えているなら、連絡を取る気になれば、連絡を取るのも簡単な話じゃないですか？」

「それはそうかもしれないけど……………」

「……………以上が、俺が魔法使いの組織が、武霊並びに忘却現象の

解析研究がある程度終わっていると云う根拠です……まあ、ですが……」

黒樹君は携帯を取り出して、画面を少し見て、仕舞った。
時間でも見たのかな？……そう言えば……今、何時だろう？……
……後で家に……って、ここだと普通の携帯電話は使えなさそうだし……あの携帯貸してくれるかな？

などと思いながら、夜衣花ちゃんを映し出している携帯電話を見ていると、

「……まだ時間も十分ある事ですし……一つ、聞いてもいいですか？」

時間がある？……いまいち意味が分からなかったの、あたしも自分の携帯を取り出して時間を見て見ると、後もう少しで九時になる所だった。まあ、時間を見ても意味が分からなかったけど……この時間だと、父さん……心配し過ぎて母さんに締められてるかも……

「何？夜衣斗ちゃん？」

問われた春子さんは、首を傾げながら黒樹君に問い返した。

……今更だけど、この人、結構いい年よね……ん……
「……聞きたい事と言つより、どちらかと言つと、確認したい事かもしれないが……俺を殺したいと思ってる人は、その六分家の女性ですか？……まあ、その人以外にもいるんじゃないんですか？……例えば、黒樹家現当主とか？」

黒樹君の問いに、春子さんの顔が引きつった。

え？……黒樹家当主とは、黒樹君のご両親との取引で、黒樹君を殺さないって事になってるんじゃないか？

「夜衣斗ちゃん……もしかして……」

困った視線を黒樹君に向け、心配そうな視線を夜衣花ちゃんに向ける春子さん。

視線を向けられた夜衣花ちゃんは……固まっている。

「……まあ、俺が黒樹家にとって禁忌の存在であるなら……」

そう教えられても、理解は出来ても、いまいち実感が湧きませんが……もし、仮に俺が黒樹家現当主だったら、娘夫婦との取引程度で俺を殺す事をあきらめはしません。もちろん、取引は取引ですから、直接殺す様な行動を取れば、娘夫婦はもちろん、次期当主として育てている夜衣花の激しい反発があるのは間違いない……ならば、やるんだったら、ばれない形で、かつ、意図的に殺した様に見せない方がいい……っで、そこまで考えると、ある事が、今まで気にも……と言うより、気にする余裕も、気にしたくもなかった出来事の不自然な部分が気になって……」

何か苦しいのか、黒樹君は辛そうに自分の胸を掴み、大きく深呼吸して、

「……中学の頃に俺が受けたいじめは……黒樹家現当主が陰で糸を引いてたんじゃないですか？」

第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』 22

夜衣斗

正直…………… 中学の頃に受けたいじめは、三年たった今でも…………… 現在進行形で俺を苦しめている。

周りに誰もいない時や、ふとした瞬間、フラッシュバックの様に受けていたいじめを思い出し、恐怖と共に、身を焦がす様な怒りに襲われてしまう。

それだけならまだいいが…………… いや、よくはないが…………… 今は武霊と
言う力を手に入れてしまっている。

それが新たな恐怖を…………… 自分が武霊の力を使って、しては絶対にいけない間違いをしてしまうんじゃないか…………… そんな恐怖が…………… 現実として体感してしまっていた。

だから、出来れば、どんな事態であろうと、あの時の事は…………… 思い出したくない。

…………… だが、一度可能性を見出してしまえば、考えないわけにも問わないわけにもいかない…………… それに、これは俺の今後の行動に
関わる大事な事だ。

避けて通るわけにはいかない。

そう思い、胸に強い痛みを感じながら、深呼吸して、無理矢理問いを口にした。

そして、その俺の問いに、場が静まり返る。

…………… もしかして…………… 実は全く関係なかったとか？…………… それは
それで新たなトラウマになりそうだな……………

周囲の反応に思わずそう思って、恥ずかしくなる直前に、

「そうよ夜衣斗ちゃん。あなたが中学の頃に受けたいじめは……………

…………… 全て黒樹家現当主四姫の指示の下に、六分家の次期当主達が密
かに行った事よ」

そう言った。

……やっぱりそうか……

俺は深いため息を吐き、思わず後ろにいるオウキに寄り掛ろうとして……止めた。

武霊に関わるあらゆる情報が外に出ないのなら、今、俺がオウキに寄り掛れば、武霊に身体を支えられる形になり、俺の姿は、多分、夜衣花から見えなくなる。

今の状況で流石にそれはまずいので、何とか自分の足で踏ん張ろうとするが……やっぱり少しふらついた為、再び飛矢折さんに支えられてしまう。

一瞬まずいと思ったが、今度の夜衣花は、飛矢折さんに殺気を放つ事はなかった……何か迷っている様に見えるが……まだ話していない事が……あのいじめに関して、何か言い辛い事があるって事か？

……それにしても……急に来たな……まあ、今までの話は、衝撃的な話だが……どうしてもどこか実感が無いと言うか……他人事感があった。自分が知っていた常識や、過ごしていた日常とあまりにもかけ離れているからかもしれないが……まあ、それでも後々、色々と思いついたり、苦しんだりするか？……するだろうな……だが、いじめの話は現在進行形で俺を苦しめている問題だ……その問題が、母親の実家によって起こされた……しかも、俺を『間接的に殺す為』にだ。

だから、今までの話の中でもっとも実感が持てて、衝撃的だったんだと思う。

……にしても、あの連中の中に黒樹家六分家の次期当主達……親戚が知らぬ間に居たとはいね……って事は、次期当主の連中は俺と同じ歳か、近い歳なわけだ……ん……

俺をいじめていた連中は、男と女の二つのグループだった。

女のグループは、同じクラスの女子の半数で、授業中や教室の中にいる時に、間接的な暴力。

男のグループは、違うクラスの男子が殆どで、授業外や教室の外

にいる時に、直接的な暴力。

二系統の暴力で、俺は徐々に徐々に追い詰められていった。

そして、引き籠り、死のうと思つて、自殺を考え、自分の手首に包丁を押し付けたりもした。

……まあ、そこでその包丁を引けなかったのは、ある意味情けない話だが……痛みへの恐怖、死への恐怖、家族が悲しむ事への恐怖、様々な恐怖が、俺の自殺を押し止め……後に生じたのは、激しい憎悪……どういじめた連中を殺すか、ずっと考え……その自分に恐怖し……嫌悪した。

根本的にヘタレだからこそ、自殺が出来なかったし、復讐も出来なくて……

でも、今はそれでよかつたと考えている。

例え、その時の負の記憶と負の感情に今でも苛まれているとしてもだ。

もつとも、後から考えて見れば、リストカットで死ぬのはかなり難しいらしいし……あの時考えていた復讐方法は、どれも実現可能なものばかりだったし、殺した後の……殺した相手の家族の事とかも考えていた……要は、心底死ぬ気ではなく、復讐もする気はなかったのかもしれない……いや、本気だったと言えば本気だったが……実行していなければ本気じゃなかったって事になるのか？ん〜こうやって改めて考えて見ると、あの時の俺は……まあ、本質的には今も変わらないが……いじめられ易い奴だったと思うし、それを自覚して、必要以上に怯えていた記憶がある。

いじめの問題が解決した後、それがいけなかったと反省して、今は必要以上に怯えない様に、負の感情を表に出さない様に気を付けているが……なんであれ、どう足掻いても俺はいじめられる運命にあつたと言っわけだ。

……何と言うか……どんだけ俺を殺したいんだろうか？

後から聞いた話によると、俺をいじめていたメンバーの中の何人かが、俺のいじめが始まる直前に、ほぼ同時に転校してきて、いじ

めが解決した後に、ほぼ同時に転校してつたと言っ話だった。

さつきまでは、特に疑問を抱く……いや、抱く余裕がなかったが……改めて思い出してみれば、思いつきり不自然な話で……これではまるで『わざわざ俺をいじめる為に転校してきた』様に見える。

まあ、だからこそ、俺が黒樹家にとつて禁忌の存在である事を知つた後に、これに黒樹家が一枚噛んでるんじゃないか？と疑惑の念が生まれたわけだが……んゝ話からすると、その転校してきて、転校してつた奴らが、黒樹家の六大家の次期当主達だったわけだ……で、多分だが、俺が完全に追い詰められる前に、両親か、夜衣花が黒樹家現当主の企みを知り、止めてくれたんだろうな……そう言えば、この話題になつてから、夜衣花の様子が更におかしくなつてるんだよな……固まったり、青ざめたり、拳動が不審だったり……ふむ……だとすると、この件に夜衣花が深く関わつていて……もしかして……

そんな事を考えていると、

いつの間にか出していた黒き大樹を消し、優癒さんの隣に移動していた春子さんが、深いため息を吐いた。

……もしかして、今の思考……読まれてた？……まあ、魔力のおかげで完全には読まれていないだろうが……

「夜衣花ちゃん。夜衣斗ちゃんは、あの時の事がある程度予想しちゃったみたいよ。しかも、かなり近い感じで……」

そう春子さんに言われ、夜衣花は青ざめた顔を俺に向ける。

……何をやらかしたんだ？……と言っか、勝手に人の思考を読むなよな……

顔を優癒さんに向けると、一瞬ビクッとして頭をペコペコ下げた。

……まあ、どうせ春子さんにやれと言われたんだらうが……人の部屋も勝手に漁ってたみたいだし……どうも春子さんはプライベートと言っ言葉を知らんらしいな……叔母さんと言っのは、こういうものなのだらうか？……何にせよ、備え付けの鍵以外に

も部屋に鍵を付ける必要があるな……

などと考えていると、夜衣花が震え出し、

「ごめんなさい夜衣斗お兄ちゃん……ごめんなさい」

……また謝る……

俺はため息一つ吐き、

「……別に謝らなくてもいい」

「でも……私のせいで……」

「……何をしたかは知らないが……それは全部、俺の為にしてくれた事なんだろう？俺が感謝する事はあっても、夜衣花に謝られる理由はないよ」

俺がそう言つと、夜衣花は首を横に何度も振り、

「でも……だって、だって、私が……私が『あんな事』をしな

けば……夜衣斗お兄ちゃんはそんな訳の分からない町に行かなく

てよかったの！」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 23

夜衣斗

行かなくてよかったの！……ね……

…… やっぱり、あのいじめの件に夜衣花が関わり、事態をよりこじらせ、今起きていると言う黒樹家の『お家騒動の切っ掛け』になつたって事なんだろうが…… 夜衣花の様子からして…… 一体、何をやらかしたんだ？

俺が困惑していると、それを見た春子さんはちよつと困つた顔を
して、

「夜衣花ちゃんが現当主の企みを知つて、夜衣斗ちゃんの無事を確認した時…… タイミング悪く、あなたの自殺未遂を目撃したら
しいの」

な！？…… あれを見られていた？…… 嘘だろ！？あの時、周りに誰もいなかったのは間違いないし、外から見えない場所ですていたはずだ…… いや、と言う事は、何らかの退魔士道具を使つたって事か？

「夜衣花ちゃんには…… 黒樹家としてはかなり珍しいんだけど……
…… もう一つの退魔士能力を持つているの」

もう一つ？しかも珍しい？

「ほら、さつき、夜さんが日本五大退魔士家系の一つ・操形家の出身だつて言つたでしょ？夜衣花ちゃんはその操形家の、人形を自らの身体のように操る退魔士能力『人形の王』も受け継いでて、時々、その力を使って夜衣斗ちゃんの様子を見ていたそうよ」

…… なるほど、黒き大樹は魔力を喰らう樹なら、本来なら他の魔法をも喰らつてしまうよな…… なのに、喰らつてないって事は……

…… やっぱり、それも主人公だからか？…… ん、なんにせよ……
…… 人形を自らの身体の様だね…… そう言えば、大分前に夜衣花から送られた某ロボットアニメのプラモデルから…… たまに視線の

様な物を感じていた様な……あれか？……何と言うか……ん
（……と言う事は……他にも色々やバい物とか……行為とか
……見られていたんじゃない……何だか色んな意味で冷や汗が出てき
て、夜衣花の方を見れないな……

「つで、その退魔士能力で夜衣斗ちゃんの自殺未遂を目撃した夜
衣花ちゃんは……キレちゃってね……その六大分家次期当主達を……
……半殺しにして、偶々親族会議で本家に集まっていた分家当主達
と現当主まで、半殺しにしてしまったわけ……まあ、あの時の夜
衣花ちゃんは、黒き大樹を暴走させていたみたいだから、初代当主
に止められなければ……あいつらを殺していたかもね」

一瞬、夜衣花を気遣う様に話していた春子さんが、負の感情をこ
もった言葉を口にした。

……そう言えば、春子さんも黒樹家にはあまり良い感情を持っ
てなさそうだったな……夜衣花を気遣っても、他の親類を気遣う
つもりも……いや、むしろ、夜衣花に殺されもよかった。とでも、
心の奥底で思っていそうだな……って言うか、今、さらっと初代
当主が生きているみたいなき事を言わなかったか？……話からして
かなりの親族が居るみたいだし、初代当主が普通に生きていられる
ほど浅い歴史だとは思えないんだが……どう言う事だろう？

「とにかくね」

自分が負の感情を吐露した事に気付いたのか、はっとした春子さ
んは、少し動揺しつつ、

「その時の出来事で、夜衣花ちゃんは黒樹家の中で孤立化してし
まって、次期当主に相応しくなくて分家達に思われてしまったわ
け……実際にそれを当主に直談判する人達もいたらしいけど……で
も、その一件で、夜衣花ちゃんの圧倒的な潜在能力を体感した現当
主は、分家達の意見を押し切って夜衣花ちゃんを次期当主のままに
し続け……それを特に不満に思っていた六大分家がつい最近、お
家騒動を起こしちゃったわけ」

……なるほどね……道理で春子さんがお家騒動が起きた理由

を言つのを躊躇つたわけだ……何と言うか、俺が今まで抱いていた夜衣花に対するイメージとは大分違う出来事だな……まあ、どう考えても、例外的な出来事なんだろうが……

「……ごめんなさい夜衣斗お兄ちゃん」

再び謝る夜衣花。

……
俺はため息を吐き、

「……だから、謝らなくていいって……正直、驚きはしたし、あまりほめられた行為じゃないのは間違いないだろうが」

俺の言葉に、身体をびくつくとさせる夜衣花。

「……それでも、俺は夜衣花が俺の為に怒ってくれた事を嬉しく思うし、よくはない事だと思うが、分家達とか現当主が半殺しになつたつて聞いた時は、正直少しすつきりして、ざまあみろとも思つた」

「お兄ちゃん……」

どこか困惑した様な、それでも困つた人つて感じて笑う夜衣花。

「……それに、俺はこうして無事にこの町で過ごしているし……まあ、死に掛けたり、とんでもない目に遭つたりはするが、どちらかと言うと、前より充実した学生生活を送っているし……引つ越す前は考えられない様な……友人関係も出来つつある」

そう言いながら飛矢折さんを見ると、飛矢折さんは照れたように顔を赤らめて……

「……近い」

それで飛矢折さんに俺が支えられている事にようやく気が付いたのか、思いつきり飛矢折さんを睨み、殺気のコもった声を出す。

それに飛矢折さんは瞬時に俺から離れ、その速さについていけないかつた俺は、少しよろけてしまうが……何と言つか……なんだろうね……

(あの子、怖いだよ)

と美魅が震えた声で言うのが聞こえ、なんとも言えず苦笑。

……………要するに、猫を被ってたわけだ……………まあ、俺も多少は無
理をして夜衣花が望む兄を演じていた所も……………無くはないだろうか
ら、おあいこか？……………んゝだが、隠している度合いがあきらかに夜
衣花の方が高いか……………それにしても、主人公ね……………
ふと思っただが……………もし、仮に、最初のはぐれで俺が死んでいた場
合……………もしかしたら、夜衣花がこの町で起きている武装守護霊に
関わっていたんじゃないだろうか？……………っで、自称最後の敵は、
俺の事を紛い物の主人公と言った。つまり、『誰かが俺を主人公に
しなければ、夜衣花が武装守護霊の主人公になっていた』って事か
？……………いや、まだ、夜衣花が武装守護霊の主人公になる可能性
がある。何故なら、まだ、俺は自称最後の敵から教えられた七つの
宿命の悪意と……………全ての死の運命と相對していない。だとすると、
残り四つの宿命の悪意に俺が殺されれば……………俺のいじめの時に
した夜衣花の行動を考えれば、きっと夜衣花はその原因を調べに、
復讐する為に、星波町にやってくる……………夜衣花が普段どんな事に
直面しているかは知らないが、俺と同じ意味の主人公であるなら、
俺と同じ様に宿命の悪意と相對しているって事なんだろう。しかも、
つい最近相對し始めた俺と違い、きつと大分前から……………そんな彼
女に……………妹にこれ以上負担を増やさせて良いものだろうか？……………
まあ、前提的に、そうなるのは俺が死んだ時なのだから、それも含
めて夜衣花をこの町に来させるわけにはいかないな……………

再びため息吐き、

「……………夜衣花は俺に対して、大きな負い目を感じている様だが
……………俺からしてみれば、それら全ては全部俺のせいだ」

「違う！違う！全部、全部、私のせい！」

そう俺が言うと、首を横に振り、俺の言葉を否定する夜衣花。

まあ、そう言っつわな……………何と言っつか……………本当に兄妹だつて実
感するな……………頑固と言っつか、根本的に似たネガティブを感じると
言っつか……………

俺は苦笑と共にため息を吐き、

「……………夜衣花。夜衣花が自分のせいだと思つ事を止めない様に、俺も自分のせいだと思つ事を止めるつもりはない。いや、理由がないか？」

「そんな！だって、夜衣斗お兄ちゃんは、私のせいで」

まだ言う夜衣花に、俺は首を横に振り、

「……………夜衣花。これは、今、この場で直ぐに解決出来る……………納得出来る事じゃない。それは夜衣花だって分かってるだろ？」

「……………うん」

頷く夜衣花に、俺は微笑み……………掛けようとして、前髪で顔の半分が隠れている状態で意味があるんだろうか？と疑問が浮かんだが……………微笑み掛け、

「……………だから、それぞれが抱えている『今』の問題が終わったら……………家族で話し合おう」

「うん……………うん」

俺の提案に何度も頷く夜衣花。

なんか、ちよつと泣きそうな顔だな……………まあ、何も知らなかった俺と違い、夜衣花はずつと抱え、話したくても話せなかった事を話し、それがほんの少しでも事態が進んだ事への……………嬉し泣きだろうか？……………何となくそんな感じがした。

「あのね夜衣斗お兄ちゃん。私ね。本当の兄妹だって打ち明けたら、お兄ちゃんにして欲しいと思つてた事があるの」

して欲しい事？……………兄妹だつて明かしたら、ね……………漫画とかテレビとかで得られる知識では、世間一般の普通の兄妹はそんなにコミュニケーションを取っている様に思えないが……………少なくとも今まで会っていた時は、世間一般の兄妹並みにはコミュニケーションを取っていたつもりだったんだが……………それ以外に何をせよと言うんだ？

「いまいち夜衣花がどうして欲しいか分からないが、俺は頷き、……………分かった」

了承すると、夜衣花はぱあつと顔を明るくした。

「……っで、何をして欲しいんだ？」

「え？えつとね……」

そう問うと、照れたように顔を赤らめる夜衣花。

「色々して欲しいけど……一番して欲しい事は……一緒にお風呂に入って欲しい事かな？」

……？……はぁ！？

第四章『それぞれの裏、さまざまな真実』 24

飛矢折

夜衣花ちゃんの飛んでも発言に場が静まり返り、

「ちょ！な！お前！何言ってるんだ！？」

流星に慌てたのか、黒樹君がいつもの間も忘れて、大きく慌て、慌てさせた当の本人は、不思議そうな顔で慌てている黒樹君に小首を傾げ、

「何かいけない事なの？」

などと分かってない感じで言った。

……確かにあたしだって兄弟達と一緒に風呂に入った事があるけど……それは小学校高学年になるかならない時に止めている。他の家がどれくらいの時期に止めるかは知らないけれど、少なくとも、中学生・高校生の年の間柄で一緒には入らないでしょ？………多分………

「……あ……夜衣花ぐらいの年で、俺と入るのは色々とま……ずいだろ？例え本当の兄妹だったとしてもだ」

と黒樹君が一般的っぽい事を言うと、

「でも、昔は一度も入ってくれなかったし………」

と言って落ち込む夜衣花ちゃん。

「……それは、他人と一緒に入るのが恥ずかしかったらで」

「もう他人じゃないもん！」

「いや、だから、俺はあんまり人と一緒に入るのが苦手で………」

……まあ、確かに黒樹君の性格なら、温泉とか集団で肌を見せる様な場所は不得意だろうけど………」

「じゃあ、一緒に寝よ、夜衣斗お兄ちゃん」

………どうも夜衣花ちゃんは、普通の女の子と感覚がずれてい……ると言うか……家族限定で甘えん坊になるみたいね………考えて見れば、夜衣花ちゃんは普段、家族と離れ離れに暮らしている上に、

厳しい環境で置かれている……こうなるのは仕方が無い事……かな？

「……………あのな……………」

若干呆れた雰囲気になる黒樹君に、

「だめ？」

と潤んだ瞳を向ける夜衣花ちゃん。

その表情に困った雰囲気になる黒樹君は、困った様に春子さんを見るけど、春子さんは二人の甥姪を面白そうに見ているだけで、黒樹君は深いため息を吐き、

「……………わ」

折れた返事をしようとした瞬間、不意に夜衣花ちゃんの立体映像が消えた。

「な！春子さん！」

驚いた黒樹君が春子さんを見ると、春子さんも驚いた表情をしていて、慌てて近付こうとするけど、途中でその足を止めて未だに出していた黒き大樹を見て、出していない手で、黒き大樹が出ていない部分の腕を強く掴み、

「ふっ……………くっ！」

辛そうな声と表情になると共に、ゆっくりと黒き大樹が春子さんの腕の中へと引きずり込まれ、なくなった。

荒い息を吐いてふら付く春子さんは、自分に注目しているあたしと黒樹君に苦笑して、

「私の黒き大樹って、一度外に出るとなかなか戻ってくれないのよ……………だから、これも含めて私は黒樹家最弱なんだけどね」

そう力無く言って、携帯電話を拾った。

「ん……………こっちに問題はなさそうね」

携帯電話と魔法具を調べた春子さんはそうつぶやいて、

「夜衣花ちゃん、大丈夫？」

そう携帯電話に話しかけると、

「ごめん春子お姉ちゃん。ちょっとピンチになっちゃった」

そう魔法具のスピーカーから夜衣花ちゃんの声が聞こえてきた。

「そうなの？じゃあ、気を付けてね」
と軽く言う春子さん。

そのあまりの軽さに、思わず、

「あの、ピンチって言っつてませんでしたか？」

と言っつてしまうと、春子さんは軽く笑っつて、

「ピンチはいつもの事だから平気平気」

平気っつて……………

「そうよ。だから、あなたに心配される必要はない」

あたしが心配したのが不快なのか、そうはつきりと夜衣花ちゃんに言われてしまった。

……………なんか、本格的に敵認識されちゃったみたいね……………ひよ
りちゃんは寝ているし、この場に赤井さんがいなくて、ある意味良
かったかも……………赤井さん無事だといいいんだけど……………

「……………夜衣花」

心配そうに声を掛ける黒樹君の声に、携帯電話向こうで夜衣花ち
ゃんが少しうるたえた様に感じ、

「夜衣斗お兄ちゃん……………大丈夫。夜衣花は強いんだよ……………そ
れに、一人じゃない。ほら、エレアなんか喋っつて」

「え！？な、何か喋れと唐突に言われましても……………」

夜衣花ちゃんに携帯電話を押し付けられたのか、戸惑っつた女性の
声が聞こえてきた。

「ほら、一人じゃないでしょ？他にも二人、今は近くにいないけ
ど、いるし、現地の退魔士にも協力して貰っつてるから全然心配ない
んだよ」

黒樹君を安心させようと説明する夜衣花ちゃんだけど……………黒樹
君の心配する気配は消えない。

だけど、黒樹君は携帯電話に音を拾われなくらいの小さなため
息を吐き、

「……………分かった……………夜衣花、代われる余裕があるなら、少し

だけエレアさんって人に代わってくれないか？」

????

小屋の半分がまるで削り取られる様になくなっていて、メイド服の女・エレアは夜衣花を小脇に抱えつつ、ショットガンを森へと向けていた。

不意な攻撃、小屋の壊れ方からして、丁度夜衣花の上に降る雨粒に何らかの力を加え、弾丸の様にしたのだろう。

その証拠に、原形をある程度留めている小屋の一部に、無数の穴が開いていた。

一応小屋には強度を上げる退魔士道具を使っていたので、屋根が壊れる気配を感じたエレア間一髪所で夜衣花を抱え、その場から飛び退く事が出来たのだが、雨を攻撃手段に変えてくるとなると、非常に今の環境は非常に敵に有利な環境だと言える。

なのに、エレアの主である夜衣花は、平然と通常通話に切り替え、電話を続けていた。

肝が据わっているのか、仲間を信頼しているのか、はたまた何を置いても兄と話したいのか。

幸い、こちらが攻撃された事に気付いた仲間の一人が、防御結界を空に張った様なので、これではらくは持つだろうが………何であれ、エレアはため息を吐かざるを得なかった。

そんなエレアに、

「え？うん。エレア。夜衣斗お兄ちゃんが代われだつて」

そう言つて、魔法具付きの携帯電話を差し出す夜衣花。

「あの、夜衣花お嬢様。状況分かってます？」

思わずそう言つたエレアに、夜衣花はにっこりと笑つて、

「代われ」

と、にべもない言葉。

どうも夜衣花は、自分の兄の事になると、見境がなくなると言うか、暴走気味になると言うか、冷静な判断が出来なくなる。

これは逆らっても無駄なので、エレアは夜衣花を下ろし、開いた片手で携帯電話を受け取り、

「代わりました。夜衣斗御坊ちゃま」

そう言っていると、御坊ちゃまと言われた事に違和感を感じたのか、向こうは沈黙。

エレアは彼が普通に育った事を承知しているので、若干苦笑しつつ、

「エレアは、お二人のご両親から夜衣花お嬢様のお世話並びに護衛を依頼された武装メイドです」

「……………武装メイド？」

聞きなれない言葉を聞いた夜衣斗の疑問の声に、エレアは少し困った。

説明をするのは簡単だが、現状が説明する暇があるのか疑問な状況だったからだ。

だからと言って、主の兄の疑問に答えないわけにはいかないのだから、答え様とした時、エレアの間に状況を察したのか、

「……………エレアさん。夜衣花を頼みます」

そうさつさと自分の用件を言い、若干唐突だったので、エレアは思わず、

「あ」

あなたに言われなくても。と言いそうになり、無理矢理言葉を飲んで、

「もちろんです。お任せください夜衣斗御坊ちゃま」

「……………夜衣花に代わってください」

「はい。夜衣花お嬢様」

エレアから携帯電話を受け取った夜衣花は、自分の耳に携帯電話を当てようとした。

その瞬間、夜衣花・エレアはその場を飛び退く。

直後、大量の雨が上空に張られた防御結界を破壊して、直前まで夜衣花・エレアが居た場所を破壊した。

「夜衣花お嬢様！ご無事ですか！？」

一緒に飛び退いた事を確認はしてはいたが、それでも心配だったエレアが夜衣花を見ると、夜衣花は平然と電話を続けており、

「……………うん。もちろんだよ。やっと紹介出来るから、私、嬉しいよ……………うん。そうだよ……………夜衣斗お兄ちゃんも、どうか無事で……………」

そう言って、名残惜しそうに通話を切った。

少し沈んだ顔になる夜衣花に、エレアは心配になって声を掛けようとすが、夜衣花は携帯電話をエレアに放り投げた後、両手で頬を思いつきり叩いた。

「いったあ〜」

強く叩き過ぎたのか、ちよつと涙目になる夜衣花。

「よし！気合入った！エレア！ちゃっちゃんとあいつらを倒して、

夜衣斗お兄ちゃんを助けに、日本に帰るよ！」

「え！？お、待つてください！夜様、夏子様から、しばらく日本に帰るなって指示が」

「知らないわよ！お家騒動がなんぼのもんじゃ！！！」

どうも変なスイッチが入ったらしく、絶叫しながら両手に黒樹刀を出して森に突っ込んでしまう。

「お、お待ちください夜衣花お嬢様あ！！！」

夜衣花の突然の特攻に、エレアは大慌てで携帯電話を虚空に消し、夜衣花の後を追った。

なお、夜衣花の思いとは裏腹に、このインドの退魔は予想外の方向に派生し、日本に帰るに帰れなくなるのだが……………それはまた別の話。

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 25

飛矢折

「……………今度会う時は、エレアさんも含めて、夜衣花の仲間を紹介してくれよ……………そうか……………夜衣花。どうか無事で……………」

夜衣花ちゃんとの通話が切れ、黒樹君はしばらく目をつぶったまま微動だにしなかった。

「夜衣斗ちゃん？」

流石に心配になったのか、春子さんが黒樹君に声を掛けると、黒樹君は目を開け、携帯電話を春子さんに差し出した。

「……………色々と思う事、言いたい事はありますが……………正直、自分の中で上手くまとまってません。混乱していると言うか、考えたくないと言うか……………ですが、とりあえず、俺が済ますべき今の用件は済みました。後は、飛矢折さんと西島さん達の用件を済ませて、星波町奪還の話に移りましょう」

え？あたしと西島さん達に？

黒樹君の言葉に、何の心当たりもない私は、思わずさゆりさんの方に顔を向けると、同じく心当たりがなさそうなさゆりさんと目があつた。

「夜衣斗君。一体どういう事？私、いえ、私達には心当たりがないんだけど？」

さゆりさんが代表して疑問を口にしてくれた。

「……………さゆりさん達になくても、退魔士側にはあるんでしょう。じゃなきゃ、世間一般に対して秘密であるはずの退魔士の話を、さゆりさん達に聞かせる理由がありません」

そう言つて、春子さんを見る黒樹君。

見られた春子さんは、頷いて、

「夜衣斗ちゃんの言う通り、私達は飛矢折巴ちゃん・西島さゆりさん・西島ひよりさんの三人に、『こちら側の事情』で用がありま

す。ですから、こちらの正体・事情の説明を省く為にも、あえて何も言わず、この場に残って貰っていたんです」

なるほど……

「つで、夜衣斗ちゃんは、私達がこの三人にどんな用件があると思ってる？」

もう話が振られる事はないと思って油断していたのか、ちよつと驚いた雰囲気になる黒樹君。

「んふふ。油断してたでしょ？」

「……………意味が分かりません……………」

呆れた様のため息を吐く黒樹君。

「だって、夜衣斗ちゃんならもう何も言わなくても分かってるかな？つて興味本位？」

興味本位つて……………どうしようもないなこの人……………

黒樹君も同じ事を思ったのか、深いため息を吐き、

「……………多分ですが、飛矢折さんと西島さん達への用件は、それぞれ別だと思えます。飛矢折さんは、飛矢折家に関する……………さつきちらつと夜衣花が言った射眼家に関係ある内容なのでしょう」

確かに、射眼家と言う名前……………どこかで聞いた事がある様な気がしていたのよね……………

「それで？」

「……………黒樹・操形・早見などの退魔士の名字が退魔士能力を表している事から考えて、射眼家は退魔士で、その退魔士能力は目に関する射撃系。そして、飛矢折さんが退魔士の実在を知らないのに、寸頸の様などんでもない武術を使える事を含めて考えると……………飛矢折家は何代か前まで射眼家の退魔士の護衛を引き受けていた……………と予想出来ます。射撃系なら接近戦に弱いでしょうからね」

あたしの家が……………退魔士の護衛をしていた？……………んゝ曾お祖父ちゃんの話だと、飛矢折家に伝わる技の中には、対魔物の用の技がいくつかあって、実際にあたしはそれを習得している……………けど、退魔士の護衛をしていたなんて話は聞いた事がない……………第一、

射眼家と言つ名字をどこで聞いたか未だに思い出せ……………？

ふと気付くと、黒樹君に視線が集中している中、一つだけ、あたしに向けられている視線がある事に気付いた。

反射的にその視線の感じた方に目を向けると、土の中だと言うのに帽子を被つて、竹刀袋を両手に持つて壁に背を預けている……………制服からして、中学三年生の女の子と目が合った。

目が合った女の子は、ぺこりと頭を下げ、春子さんの方を見る。

女の子の視線に気付いた春さんは、

「可憐ちゃんおいで」

と名前を呼んで手を振った。

可憐ちゃんと呼ばれた女の子は、小走りで春さんの隣に移動し、軽く頭をあたし達に下げた。

「んふふ。見て驚けえ」

などと言いながら、可憐ちゃんの帽子に手を掛ける春子さん。

可憐ちゃんは何か言いたそうだったけど、黙ってされるままに春子さんに帽子を取られた。

「じゃあ〜ん。どうだこの野郎」

などと言っている春さんを尻目に、可憐ちゃんの素顔を見ると……………物凄くかわいい女の子だったけど、驚くほどじゃ……………あれ

?この顔って……………

「あなた、乙さんの妹さん？」

気付いた事をあたしが口にした瞬間、春子さんだけでなく、可憐ちゃんまで顔が引きつった。

?……………顔が引きつった意味は分からないけど……………乙さんは、

うちの双子の弟の片割れ・朱雀の恋人で、何度か家に来た事が……………

……………あ！思い出した。確か、乙さんの名字、射眼だった。

「乙さん……………退魔士だったんだ」

そうつぶやくと、可憐ちゃんは何故か若干傷付いた感じで頷き、

「射眼乙女は私の姉です……………いつも朱雀さんには乙女姉様がお世話になっていきます……………あの、本当に、私の顔に憶えが、他にあ

りませんか？」

「……………他にって言われても……………」

意味が分からず首を傾げていると、ますます落ち込んだ感じになる可憐さん。

えっと……………どうしよう……………何でかわらないけど、私のせいで落ち込ませてるみたいだし……………」。

何だか申し訳ない感じになり、思わず助けを求めて黒樹君を見ると、黒樹君は可憐ちゃんの顔を凝視して驚いている様だった。

「黒樹君？」

あたしが声を掛けると、黒樹君は困った様な感じになってあたしの方に顔を向け、

「……………飛矢折さん。あまりテレビとか見ない方ですか？」

「うん。全然見ない」

そうあたしが正直に言っていると、黒樹君は春子さんの方に顔を向け、

「……………さっきの携帯、ワンセグとか使えますか？」

「使えるけど？」

「……………なら、実際に見せた方が早いでしょう。確か今頃の時間にレギュラー番組があったはずですよ」

「それもそうね。ちよつと待ってね」

しまった携帯電話を出し、操作してあたしにその画面を見せる春子さん。

そこに映るテレビ番組の司会の隣に……………可憐ちゃんがいた。

「……………可憐ちゃんて芸能人なんだ」

「反応薄！もうちよつと驚こうよ。芸能人よ。瞳可憐ひとみかれんよ？今一番

売れているアイドルよ？」

「……………そう言われましても……………」

正直興味ない。

「もういいですよ春子さん。私が売れ出したのは最近の話ですし、それに、今、私はアイドルの瞳可憐としてではなく、五体退魔士家系が一つ射眼家次期当主射眼乙女の代理でここに居るんですから」

そう言つて、可憐ちゃんは微笑むが、若干元氣ない。

……………悪い事したかな？でも、知らないものは知らないし……………
ん

「巴さん。今言つた通り、私は乙女姉様の代理で、これを巴さんの曾御爺様・小次郎様から預かっています」

可憐ちゃんはそう言つて、両手で持っていた竹刀袋の袋を開け、中に入っていた一振りの刀を取り出した。

あれ？この刀つて……………もしかして！

またたままる
「瞬輝丸！？」

「はい。飛矢折家家宝にして、退魔十本刀と呼ばれる最強の退魔刀の一振りです」

「退魔刀！？うちの家宝が！……………え？じゃあ、黒樹君が言う様に、あたしの家は、護衛をしていたの？」

あたしの問いに、可憐ちゃんは頷き、

「正確には相棒です。飛矢折家は小次郎様の代まで、退魔士だったんですよ」

「曾お祖父ちゃんが退魔士！？」

百歳近いのに化け物みたいに強いから、ただものじゃないと思つてたけど……………退魔士？……………あれ？

「でも、さつき、退魔士は退魔士能力を持っている人になるって言つてなかった？」

「数は少ないですが、小次郎様の様に、退魔士道具を使って退魔士になつている方々もいますよ」

曾お祖父ちゃんが退魔士……………黒樹君の話ほどじゃない気がしないでもないけど、あたし的にはかなり衝撃的な話ね……………でも、その退魔士道具がどうしてここにあるわけ？曾お祖父ちゃんから預かつたつて言つてたけど……………

「……………それで、どうして可憐ちゃんが、うちの曾お祖父ちゃんから瞬輝丸を預かつたわけ？」

「そいつはあたいが説明するぜ」

不意に可憐ちゃんとは別の女性の声。

反射的に声が発せられた方向に視線を向けると………可憐ちゃんが持つ瞬輝丸の柄に、小さな着物姿の女性が座っていた。

夜衣斗

飛矢折さんが最近やたらとテレビとか、雑誌とかに出ているアイドル・瞳可憐を知らない事には驚きだったが……まさか、その瞳可憐が星波学園の生徒だったとは……まあ、退魔士の家系の生まれだったのならおかしくはないだろうが……んゝもしかして、他にも芸能人が星波学園にいるとか？……いや、もしかしたら、芸能界だけじゃなく、様々な業界に退魔士達がいる可能性が高いよな……そもそも、汚職事件の尻拭いと言う理由で人工島を買い取らせたって事は、少なくとも、政治家・建設業・そして、教育業にも退魔士がいるって事だな……んゝ……まあ、今は、そんな事より、飛矢折さんの家が退魔士の家系ね……しかも、普通の人でありながら……普通の人って言うのには、若干の疑問が無くはないが……

「えつと……瞬輝丸？」

飛矢折さんがおっかなびっくりと言った感じで、瞬輝丸と呼ぶ刀の柄に腰かける小さな着物姿の女性に声を掛けた。

「おうさ。あたいは瞬輝丸さ。まあ、とは言っても、本体はこいつだけだよ」

そう言っつて小人型瞬輝丸は、刀の瞬輝丸を指差した。

……つまり、あの小人はコミュニケーションツールって事か？
……よく見ると、若干透けてるしな……映像……と言っつより、幻影か？

「いやあゝやつと、お前としゃべれるぜ。こっちは早くお前を新しい主にしてえつてのに、小次郎の野郎がまだはえつて止めるからよ。話すに話せなくてよお」

「……えつと……」

せきを切ったかのように喋り出す瞬輝丸に、思いつき戸惑う飛矢

折さん。

……しかし、口が悪いな瞬輝丸……

「わりわり、説明するって言ってるのに、ちっとも説明してねえよな……まあ、つまりだ。飛矢折家は、代々あたいを使って退魔士をしていたわけなんだが、小次郎以降、俺の主になれる様な奴が現れなくてよ」

「現れていない？……と言う事は、瞬輝丸を使うには何らかの条件が必要な訳か……ありがちな……」

「お祖父ちゃん・お母さんも駄目だったって事？どうして？」

「んなの決まってるんだろ？弱いからだよ」

「弱いつて……お祖父ちゃんも、お母さんも結構強いと思うけど？……と言うか、うちの家に弱いと言える人はいない気が……」

「飛矢折さんが弱くないって思う家族？……飛矢折さんと付き合う事になる男は大変だろうな……場合によっては、死の覚悟が必要かも……」

「そりゃ確かに、普通の人間から比べりゃ強いさ……だけだよ。」

「閃も、陽子も、小次郎ほどじゃねえだろ？第一、誰一人お前に勝てねえだろうが、小次郎以外によ」

「それはそうだけど……」

「それはそうだけどって……飛矢折さんもそうだけど、飛矢折さん曾祖父って、どれだけ強いんだ？っていうか、そもそも何才なんだろうか？曾孫がいるくらいだから……んゝあの飛矢折さんにガチで勝てる曾じいさんか……会って見たい様な、見たくない様な……」

「っで、退魔士としての飛矢折家は小次郎の代で終わりかと思ってた時に、巴。お前が生まれたわけさ」

「えつと……曾お祖父ちゃんは……あたしを退魔士に？」

「そうだぜ。だから、曾孫達の中でお前だけに、魔物の事を少しずつ教えてたのさ。っで、時が来たらお前に全てを話して、あたいが渡されるはずだったんだけどさ……ほら、お前、この町の特殊

な魔物にやられたんだろ？」

特殊な魔物？……武霊の事か？……つまり、五月雨都雅の事件の事を言っているわけだ……

チラツと飛矢折さんを見ると、何故か飛矢折さんもこっちを見ていた為、目を合わせる形になってしまい……固まってしまった。

「ん？なんだ巴。お前、こいつに惚れてんのか？」

「な！」

「へ？」

瞬輝丸の唐突な問いに、思わず間抜けな声を二人で上げてしまう
と、

「へえ〜そうなんだ」

「まあ、怪しかったですわよね」

「よろしんじゃないんですか？」

などと、周りが口々に言い出したので、飛矢折さんの顔が思いつきり赤くなり、大慌てで、

「違います！絶対に違いますから！」

全力否定………まあ、そうだよな………誰も好き好んで俺みたいな奴に惚れただの、惚れられただの言われたくない………か………

「もう。そんな全力否定………ますます怪しいじゃない」

あくまで面白そうに飛矢折さんをからかう春子さん。

………まあ、下手な期待………どちらかと言うと、希望か………は抱かない方がいいよな………

「待ちな！よってたかって巴をからかうんじゃないよ」

困り切った飛矢折さんを見かねてか、瞬輝丸が制止の声を上げ、助かったと言った感じで安堵の表情になる飛矢折さん。

「巴をからかっているのはあたいだけだよ」

見るからにがつくりくる飛矢折さん。

「っで、どうなんだい？」

「話し先に進めてくれない？」

若干キレ気味に言う飛矢折さんに、瞬輝丸は手を振り、

「まあまあ、そう怒るなって、お前がこいつに惚れているか惚れていないかも、あたいを継承するのに結構重要な事なんだからよ」

「……………どう言う意味だ？……………ん？……………退魔刀って言っても、要は魔法の刀……………だとすると、その動源力は魔力だよ……………待てよ？だとすると……………いや、流石にそれを飛躍し過ぎで、都合が良過ぎるだろ……………」

俺が良からぬ想像をしてしまっている間も話は続いており、

「まあ、とにかくだ……………お前がこの町の……………武霊だったか？……………に襲われ、弱った姿を見て……………小次郎は場合によっては、あたいの継承を早める事にしたのさ」

「場合によつては？」

飛矢折さんの疑問の声に、瞬輝丸は頷き、

「おうさ。一つ、やもえない場合による退魔士の存在の露見。二つ、パートナーとなり得る人物が巴の側にいる事。三つ、再び武霊による危機に陥っている。の三つの条件が揃えば、お前にあたいを継承させるって事になってよ。だから、あたいは射眼家の次期当主・乙女に預けられ、星波町に近付けない乙女の代理として可憐があたりを預かつてるってわけさ。もちろん、あたいを受け継ぐか、受け継がないかは、巴。お前が決めていい」

「決めていいって……………もし、仮にあたしが受け継がないって言った場合……………瞬輝丸はどうなるの？」

その飛矢折さんの問いに、瞬輝丸はちよつと苦笑して、

「んゝそれは気にしなくていいさ」

「気にしなくていいって……………」

判断に困る飛矢折さんは、俺に顔を向けてくる。

何でもかんでも考えて、思い付いているってわけじゃないんだけど……………まあ、でも……………んゝ考えられるのは……………

「……………瞬輝丸がどんな力を持っているかは……………まあ、名前からある程度想像が付きますが……………どんな力であろうと、退魔十本刀と

呼ばれるぐらい強力な力を持って、自らの意志を持っているんです……だとすると、考えようによっては、瞬輝丸も魔物つて事になります」

俺の魔物発言に、瞬輝丸は、言ってくれるじゃないって感じで笑みを浮かべた。

……若干気になる笑みだが……まあ、無視の方向で……

「……なら、間違った使い方や、瞬輝丸が本当の意味で魔物になる事を防ぐ為に、封印処理か……場合によっては……より安全を考えるなら……」

チラッと瞬輝丸を見ると、特に気にしている様子はなかった。

……やっぱり承知の上か……なら、躊躇う理由はないな……

「……瞬輝丸は破壊されるんじゃないでしょうか？」

飛矢折

瞬輝丸が壊される？

黒樹君の予想に、あたしは眉をひそめつつ、瞬輝丸を見た。

「まあ、大体そんな所さ」

自分が壊される可能性をあつさり認め、笑みを浮かべる瞬輝丸。

「そんな……だって、瞬輝丸。あなたはちゃんと」

「人格もあるし、人を害する意志もない。むしろ、守りたいと思ってるさ。まあ、それが退魔道具の本能だから当たり前なさ……」

…だが、所詮、あたいは道具さ。所有者の意志には逆らえねえし、飛矢折以外の人間に扱われる気もねえ。だから、あたいは壊される事を望むのさ」

「でも、あななは退魔十本刀って言われるほどの刀なんでしょ？それを壊すなんて……許されるの？」

「ん〜実例もあるからその点は問題ないんじゃないかねえ？だいいち、退魔十本刀って言われていても、もう五振りも残ってねえしな……」

「……」
「そうなんだ……」

……どうすればいいんだろう？瞬輝丸はうちの家宝で……子供の際に、たまに触らせて貰っていた……とてもきれいな刃紋の刀だったのを覚えているし……同時に、これが人を斬る道具だとは、どうしても思えていなかった……まあ、その印象はある意味正解だったわけなんだよね……退魔刀……退魔士……あたしが？

いまいち自分が魔物……まあ、あたしが想像出来る化け物は、武霊ばかりだけど……を生業として戦う事が想像出来ないし、それをしたいとも思わない……かと言って、今、自分の将来を決めるほど、自分の事を考えた事が無い……ただなんとなく、出来れば大学に進学しようかな？程度……でも、

視線を黒樹君に向ける。

黒樹君は、あたしが視線を向けた意味が分からないのか、動揺した雰囲気になった。

あたしはそれに思わず苦笑して、瞬輝丸を見た。

「お？どうするか決めたか？」

瞬輝丸の問いに、あたしは頷いた。

ここ最近、あたしは黒樹君に頼ってばかりいる。

黒樹君はどう思っているかは分からないけど、あたしは頼ってばかりじゃなく……黒樹君の手助けをしたい。

さつきは恥ずかしくて……惚れたとか……否定したけど……うゝ本当の所はよく分からない。この感情が、恋なのか、なんなのか、今まで一度だってこういう事を経験した事がないから……でも、その感情が何であろうと、あたしは黒樹君が困っていたら、黒樹君があたしにしてくれた様に……逃げずに守りたい。

それだけの事を、黒樹君はあたしにしてくれた。

だから、その為には、力が……必要なの！

「瞬輝丸。あたしはあなたを受け継ぐわ」

決意を込めてそう瞬輝丸に言っていると、瞬輝丸は不敵な笑みを浮かべ、「よし！だったら、今日からお前があたいの新たな主だ！」

そう言って小人の瞬輝丸の姿が消え、

「どうぞ」

可憐ちゃんがあたしに瞬輝丸を渡してくれた。

……昔持たせて貰った時より、重い気がする……何でだろう？……刀の意味を知ったから？

そんな事を思いながら、あたしは竹刀袋から瞬輝丸を出し、竹刀袋だけを可憐ちゃんに返した。

何の装飾もされていない漆黒の柄・鍔・鞘。

「巴、柄を持って」

瞬輝丸から聞こえる瞬輝丸の声に従い、瞬輝丸を縦にして、柄を握る。

「少し気持ち悪いかもしれないけどよ、我慢してくれよ？」

「うん？」

「我、瞬輝丸は、飛矢折巴を新たな主とし、飛矢折巴が瞬輝丸を手放すその時まで、飛矢折巴の傍から片時も離れず、運命を共にする事をここに誓い、これを契約とする」

瞬輝丸がそんな事を言い出すと共に、柄を握っている手から『何か』があたしの中に入ってくる感覚に襲われる。

確かに気持ち悪かったけど、それも直ぐに終わって………気が付いたら、瞬輝丸があたしの手の中から消えていた。

「え？……あれ？」

周りを見回しても、どこにも瞬輝丸はなくて、代わりにあたしの肩に小人の瞬輝丸が座っている事に気付いた。

「契約完了つと………巴。あたいを呼んでみな」

？

「………瞬輝丸？」

言われた通り、名前を呼んだ瞬間、頭上に何かが現れる気配と共に、物凄い早さでこっちに迫ってきたので、反射的に受け止めると

………刀の瞬輝丸だった。

………えつと………どう言う事？

思わず黒樹君を見ると、何か言いたそうな雰囲気になった後、小さくため息を吐き、

「………多分ですが、瞬輝丸は契約により飛矢折さんの魂と繋がり、それと共に心の中に仕舞える様になったんじゃないんですか？」

契約？魂？心の中？

「その通りだよ。と言うか、よく分かったな。魔法による契約の仕組みを知ってるのか？」

不思議そうな瞬輝丸の問いに、黒樹君は苦笑し、

「………契約とかそういう話は、アニメや漫画とかでよくある話ですから………そこで得た知識と、今日の前で起きた現象を組み合わせて、何となくそう予想しただけですよ」

「アニメや漫画ね……………まあ、そう言う事にしておくか」

……………何だか引つ掛かる言い方ね。

思わず瞬輝丸の言葉にそう思った時、

(あの男。色々と隠している事がある感じだな)

と瞬輝丸の声がどこからともなく聞こえた。まるで心の中から直接聞えて来るような……………

(まるでじゃなくて、本当に心の中から声を掛けているのさ。だから、返事は心の中でな?)

うん、分かった……………けど、黒樹君が何を隠しているって言うの?

(さあ?それはわかんねえけど……………少なくとも、あたい達が不利になる様な事じゃないだろうさ)

それはそうだろうけど……………本当に隠している事があるのかな?

(まあ、そんな事よりよ)

そんな事って……………

(いや、そんな事さ……………実を言うとよ、あたい単体じゃあたいはそこから一般の退魔刀と変わらねえんだよ)

そこから一般の退魔刀がどんなのかは知らないけど……………どう言う事?
事?

(簡単に言えば、あたいに込められている魔法を使えねって事)……………どう言う事?

(あたいの様な『魔力消費型の退魔刀』は、普通は所有者から魔力を貰って込められた魔法を発現させる。だが、普通の人間は魔法として使えるほどの魔力を持ってねえわけだ)

えっと……………つまり、あたいにはその魔力がないわけ?

(ああ)

なのに、曾お祖父ちゃんはあなたを継承させた……………なんで?

(そりゃ、小次郎も魔力がなかったからな)

え?曾お祖父ちゃんも魔力を持ってないの?じゃあ、どうやってあなたを使っていたわけ?

(間接契約で梅から貰ってたんだよ)

間接契約？しかも曾お祖母ちゃんから？

（梅は一般人だったが、無意識魔力吸収蓄積病って珍しい病気に掛っててな、その病気から得られる魔力を、あたいのもう一つの契約機能である間接契約で貰ってたわけさ）

ふ〜ん？……………つまり、さっき言ってたパートナーって言うのは、魔力を貰える人って事なわけね。

（そう言う事。っで、この場でパートナーとして最適なのが、黒樹夜衣斗ってわけさ）

黒樹君が？退魔士の人達じゃ駄目なの？

（確かに退魔士も魔力を持つちやいるが、それは自身の退魔士能力にほとんど使われちまっている。あたい達まで回せるほど余力を持った奴は一人もいねえわけさ。その点、黒樹夜衣斗の魔力はとんでもねえぜ。なんたつて、あたいが今まで出会ったどの魔法使いより飛び抜けて高い魔力を感じるからな）

じゃあ、黒樹君に間接契約して貰えばいいわけね……………っで、具体的に何をすればいいわけ？さっきみたいに瞬輝丸の柄を黒樹君に貰うとか？

（いいや。違う事をしなくちゃいけねえ）

何をすればいいの？

（簡単な事さ。黒樹夜衣斗と、『接吻』すればいい）

接吻？……………キッ、キスう！？

夜衣斗

瞬輝丸を持ったまま黙り込んでしまふ飛矢折さん。

驚いたり、赤くなったり、表情の変化がある所からすると、俺と美魅の様に、心の中で瞬輝丸と会話をしているのかもしれない。

にしても……さっきからこっちを妙にちらちらと見出しているんだよな……肩に乗っている瞬輝丸の分身体はニヤニヤしているし……ふむ？……まあ、なんであれ、とりあえず、飛矢折さんの話の方は終わった様だし……だとすると、残りは……

西島親子の方に顔を向けると、ひよりさんは相変わらずさゆりさんに寄り掛って、すやすや寝ている……呑気なもんだが……片やさゆりさんは、不安そうにしていた。

……まあ、自分には心当たりが無い事で、しかも、退魔士とか訳の分からない連中の事情でこの場に残されているわけなんだから……不安にならない方がおかしな話か……

春子さんの方に視線を向けると……どうも俺の考えをまだ聞きたいらしく……試しているんだろうか？試しているんだろうか……

……仕方が無いので、ため息一つ吐き、

「……西島さん達の用件ですが……多分ですが、ひよりさんが持っている超能力の事が関連しているんじゃないんですか？」

「ひよりが超能力を？」

驚くさゆりさんに俺は頷きつつ、

「……さきほど、頂喜武蔵の心の中に美魅の能力で潜った時」「ちよつと待って、心の中に潜った？渡り猫の能力で？……渡り猫って、他人と一緒に心の中へ渡らせるほど力の強い魔物だったけ？」

春子さんの疑問に、俺は少し判断に困る。

さつき瞬輝丸に契約の仕組みの事を問われた時……多分、飛矢折さんの手前だった事もあり……思わず契約を実際に体験した事を言わなかった……契約の事を言うとなると、人間じゃないとは言え、美魅と……キスした事を言わなくちゃいけないからだが……ん〜嘘は吐いていないが……隠してしまった事実はどう判断されるか……そもそも、俺が……正確には俺の中にいたサヤが……魔法技術による契約書を持っていた事をどう考えるか……って言うか、何でサヤはあんなものを持っていたんだ？……まあ、普通に考えれば、俺の中にサヤが居る事に、『魔法使いが関わっている』って事なんだろうが……だとすると、あの老人が？

「おーい。夜衣斗ちゃん？」

春子さんの声に、思考から引き戻された俺は、

「……俺の魔力の影響じゃないですか？」

とりあえず嘘は言わない事にした。俺の魔力で能力が向上したのは本当だし……

「……まあ、これだけの魔力量だものね。その中に住めば……パワーアップする……かな？……ん〜……とりあえず続けて」

一応俺の言葉に納得した春子さんに促されて……まだ続けなきゃいけない事に、微妙に納得がいかないが……話を続ける。

「……潜った時にですね。頂喜武蔵達がひよりさんを捕まえる時の記憶を見たんですが、その時に、ひよりさんの姿が消える場面を見たんです。その出来事から考えて、ひよりさんの超能力は、『意図的に喋らない事を発動条件とする透過能力』なんでしょう……そして、その超能力を利用して鬼走人骸の動向を探っていて、武霊により捕まってしまった」

俺の推理に周囲がざわつく。

「探って捕まった？どう言う事？ひよりは家出中にあいつらに誘拐されたんじゃないの？」

さゆりさんのもっともな問いに、俺は頷いて、

「……俺も最初はそうだと思っていましたが……ひよりさん

が自分の姿を消す事が出来る超能力者だと言う事と、捕まった場所が武霊の使える……多分、廃工場……だと言う事を知って、その考えはなくなりました。何故なら、星波町外では武霊は使えないので、ただの人間である鬼走人骸の連中には、ひよりさんを捕まえる事が難しく……星波町と言う場所が、さゆりさん達の家とは大分離れた場所にあるからです」

「え？私、夜衣斗君に私達の家が何処にあるか言っただけからしら？」

「……車のナンバープレートが、ここから県を超えた所にある都市の名前でしたから、そう推察したんですが……違いましたか？」

「うん。違うけど……よく憶えているわね」

「……偶々気になって憶えていただけです……ひよりさんの家が大分離れた所にあると言うのに、ひよりさんは星波町に来ていた。プチ家出と言う割には遠出ですし、何より家出に適した場所じやないでしょうか？普通ならもっと大都市に行くか、友達の家とかに転がり込む……以上の事から考えて、ひよりさんは目的を持って鬼走人骸に近付いたと推論したわけです……つで、そこまで考えると、ただ近付くだけなら、逃げる様な事はしないでしようし、頂喜武蔵も捕まえて……あんな事をひよりさんにしないでしよう。だとすると、ひよりさんは『鬼走人骸の動向を探り、最終的には鬼走人骸を潰そうとしていた』んじゃないでしょうか？」

俺の推論に、さゆりさんは啞然とした顔になり、苦笑して、

「何を言っているの夜衣斗君。ひよりは、普通の……」

固まった。

「……そう。ひよりさんは超能力者です……俺の言葉が信用できないならそれまでの話ですが……」

俺の言葉を首を横に振って否定するさゆりさん。

「夜衣斗君が嘘を吐くなんて思わないわ……でも、だとしたら、ひよりはどうしてそんな事を？……いえ、そもそも、超能力なんて……私には超能力なんて一切ないのに……」

「……………何かしら大きな力を手に入れた人間は、その力に引きつけられるのが、世の常でしょう。そして、さゆりさんに超能力が無いのなら、ひよりさんは一世代目の超能力者で、目覚めた力を使って『弱者を強者から守ろうとした』んじゃないんですか？」

言葉の後半を春子さんを見ながら言うと、春子さんは驚いた顔になり、

「……………流石は夜衣斗ちゃんね……………普通、そこまで辿り着いちゃう？」

春子さんの言葉に、意味が分からないって感じで、さゆりさんが俺に視線を投げ掛けてくる。

「……………確たる証拠があつての推論ではありませんが……………『去年、日本各地で連続して起きた国産テロ』の事は知っていますよね？ 模倣犯の犯行や、重軽傷者全て含めて、『分かっている被害者の数だけでも一千万人近く出た』と言われている」

いきなり話が変わった為か、少しキョトンとしたさゆりさん。

「知ってるも何も……………ひよりが通っている学校でも……………え！？ まさか！ そんな！」

喋りながらある可能性に気付いたさゆりさんに、俺は頷き、

「……………その可能性は高いと思います。ひよりさんはそのテロを行つた集団『弱者同盟』（じやくじやく）に参加していたんでしょう」

夜衣斗

『弱者同盟』

遑れば一昨年頃から起きていた『世の中で強者と分類される様な人達を対象としたテロ行為を主導・実行していた主に学生により構成されたテロ組織』。

彼らの理念は、「虐げられるばかりの弱者には、虐げる強者を打倒する資格がある」と言うもので、その為なら手段を選ばず、殺傷・誘拐・脅迫など、それまで日々ニュースで流れていた様な外国のテロの様な、時にはそれ以上の事をしていた。

最初の頃は、主に不良や暴走族など、弱者同盟に参加していた学生達の身近な相手が対象で、世間も不良同士・暴走族同士の抗争が何かで負傷・死傷が出たと思われていなかったが、次第にその件数が異常な数になり、警察が本腰を入れ始めた時には、日本全国に同盟参加者が広まっていて、その対象はより強い相手へ、より苛烈な手段へと移行してしまう。

教師・警察・暴力団果ては国会議員までテロの対象にされ、銃撃・爆破・毒散布など手段を使うようになり、模倣犯も数多く出た。

その為、分かっているだけでも被害者総数は一千万人近くいるとされ、日本最大のテロ事件と言われている。

もともと、学生が主に行っていたせい、被害とその規模の割には、死者が少なく……いや、正確には、少し違うか……実際に弱者同盟により殺されたと思われる被害者は、約千人。だが、同じ時期に一切の行方が分からなくなった不審行方不明者が一万人近くいる為、実際の所は一万人近い死者が出ているのでは？と考える人も少なくない。

ここまで被害が広がり、一年以上もテロが続いたのには幾つかの訳がある。

まず、第一に、『発覚まで時間が掛った事』

そもそも、最初頃の弱者同盟は、主に復讐がメインだったようで、通常のテロの様に犯行声明を出す様な事はしていない上に、様々な隠ぺい・偽装工作がされていた為、場合によってはそれらは事件にすらなっていないかった。

それらの事件が弱者同盟によるテロと言う事になったのは、昨年の夏休みに弱者同盟の代表を名乗る『イザナミ』ヴァルクユリア』と名乗る少女のネット動画犯行声明によるもので、彼女はそのネット動画でそれらを我々が起こしたテロだと宣言した。それでようやくテロが行われている事を知った警察や公安は、完全に後手に回り、国内テロへの対応に遅れてしまったと言う事。

第二に、『テロに使われた高度な知識と技術』

弱者同盟の参加者の多くは、その名の通り弱者・力の弱い者で構成されていた。弱者と言う意味はかなり幅広い意味で使われていた様で、『何かに劣り、そこに劣等感を抱き、強者に恨みを抱いていたれば大体弱者と言う事にされて、同盟参加者になれた』……らしい。そして、その多くが、肉体的な劣りを持ち、肉体的な強者に虐げられた頭のいい者達だった。その為、多くの犯行が高度な知識と技術に基づいて行われており、それにより犯行を防ぐ事も、知る事も難しくさせた……と言うのがニュースとかで流れる一般的な認識。

そして、第三は、『半年近く経った今でも分からない組織全体像とその資金源並びに資材調達ルート』

根本的な事として、弱者同盟参加者が全国に増えるには、それらの組織力がないと難しい。そもそも、テロに使われた様々な道具や材料を逆算して計算してみると、一国の国家予算並みの資金が必要になる事が分かり、また資金があったとしてもどうやってそれらを購入していたのか、どうやって各同盟参加者に渡していたのかも一切分からなかった。その為、使われた材料から犯人を調べる事が出来ず、止める事も出来なかった。

これら三つ以外にも、そもそも弱者同盟の代表を名乗るイザナミ

「ヴァルキュリアなる人物が何者なのか？どうやって警察や世間の目を掻い潜り同盟参加者を増やしていたのか？など、謎が多過ぎる弱者同盟は、誰にも止められる事なく永遠にテロを起こし続けると思われていた……が、今年の八月中頃の国会議事堂爆破未遂事件を最後にピタリとテロが起らない様になる。

様々な謎と恐怖を残して唐突に終結したそれらテロ事件の事を、世間は『弱者同盟事件』と名付け、今でもその真相を探ろうと様々な所が調べ回っているらしいが……今の所、ネットで見た眉唾物の都市伝説の様な話しか聞いた事が無かった。

だが、今の俺は、その都市伝説でもある程度信憑性が出ている。何故なら、超能力や魔法が実在している事を知ったからだ。

だとすると、もっとも多くネットで噂されている『イザナミィヴアルキュリアと名乗る少女は、他人に超能力を与える超能力者で、弱者同盟達はイザナミから得た超能力で、同盟参加者を増やし、テロ行為を行っていた。だから、ここまで被害が広がった』……とよく流布されている話に、一番の信憑性がある気がした。

確かに超能力者なら、短期間で日本全国に同盟参加者を増やす事も出来そうだし、資金力も資材調達ルートも必要ない。

それに、超能力なら、魔法の存在を隠したい連中が自主的に隠ぺい工作をしてしまうだろうし……それだったら、未だに謎が多いと言う理由も納得出来る。

そして、その噂には、こういう噂もワンセットで流れている『弱者同盟は同じ超能力者達によって密かに倒された』。つと。

……考えるに、その同じ超能力者と言うのは……退魔士達の事を言っているんじゃないんだろうか？超能力者が突発的に生じるものなら、あれだけの規模のテロを起こせるぐらいの超能力者達を止めるだけの数の超能力者が、突発的に生まれるのは考え難い。だとすると、安定的に超能力を継承し、かなりの数がいると思われる退魔士達が弱者同盟を止めたと考えるのが自然。

そう考えると、強者である鬼走人骸を調べていた超能力を使うひ

よりさんは、『弱者同盟の残党』とも考えられる。
じゃなければ、退魔士達が西島親子をこの場に居させない。
要するに、

「……………春子さん達は、西島さん達から、弱者同盟の残党の事を聞き出したんでしょう」

弱者同盟が超能力集団と言う推論の後に、そうさゆりさんに言うと、さゆりさんは不安そうに春子さんを見た。

春子さんは頷き、

「大体夜衣斗ちゃんの言う通りですよ。弱者同盟は、日本政府の依頼で、私達日本の退魔士とその一族達が総出で壊滅させ、今でもその残党を追っています。もつとも、壊滅・追っていと言っても、逮捕するとかそういう事はしてませんし、私達にその権利はありません。ですから、多くの場合は、その超能力を、黒樹家の力で消滅させて、終わりです」

黒樹家の力？……………そう言えば、黒樹家の退魔士能力・黒き大樹は、魔力を喰らう樹。それを使えば、超能力を消す事も出来るって事か……………

「もつとも、ひよりちゃんは私達の調べでは、弱者同盟の中で謀報活動を担当していたみないので、超能力を消すだけじゃなく、ひよりちゃんの交友関係などの事を聞く事と、西島さんの家を調べ許可をいただきたいんです」

「……………そう…ですか……………」

春子さんに俺の推論が合っている事を言われ、流石にショックを隠しきれないさゆりさん。

そりゃそうか……………自分の娘が、知らぬ間にテロ組織に関わっていたと聞けば、誰だってショックを受ける……………春子さんは直ぐにでもひよりさんの事を聞き出したい様だが……………これは……………少し、心の整理を付ける時間があった方がいいな……………

そう思った俺は、気になった事を聞く事にした。

「……………春子さん。大体どこまで合っているんですか？」

「どこまでつて？」

「……………例えば、本当にイザナミⅡヴァルクユリアは、他人に超能力を与える超能力者だったんですか？」

その俺の質問に、春子さんは躊躇を見せた。

どこまで喋るべきか悩んでるかの様にも見える。

「……………口外はしませんよ。第一、そんな事を喋っても科学至上主義が多い現代に置いて、それを簡単に信じる人は」

「そう言う事じゃないの」

俺の言葉を遮って、首を横に振る春子さん。

「弱者同盟事件はね。結構大きくて深い事件なの」

大きくて深いね……………ふむ……………だとすると、やっぱり……………

「……………例えば、国が関わっているとか？」

飛矢折

あたしが黒樹君と……ごによごによ……するしないを瞬輝丸と心の中で口論している間に、話はまたしてもとんでもない方向に進んでいた。

去年、日本のみならず世界中を騒がし、震撼させた事件……テレビをあまり見ない私でさえ知っている弱者同盟事件の話で……しかも、それに国が関わっている？

黒樹君の言葉に、周りがざわつく。

「どうしてそう思うわけ？」

春子さんのその問いに、黒樹君は、

「……簡単な話です。日本全国と言うとんでもない規模で、被害者も一千万人近いと言う事件なのに、日本政府があまりにも後手に回り過ぎている。更に言えば、在日米軍基地にも被害が遭ったつて言うのに、『アメリカ政府は一切このテロには関わろうとしなかった』。アメリカ国内外からいくら避難されても、日本政府が対処すべき事として……まあ、『世界各地で内戦が多発し、それにこごとく介入している』のですから、そんな余力が無いのは分かりますから、多少は納得していたんですが……ですが、こう考えると、アメリカが加入せず、日本政府が後手に回り過ぎた理由がしつくりくるんです……弱者同盟事件は、『アメリカ主導の次世代魔法兵器開発実験』だった……と」

更にとんでもない事を言い出した。

静かになる周囲に、間を少し置いてため息を吐く春子さん。

「その根拠は？」

「……まず、次世代魔法兵器はどんなものかと考え、幾つかのパターンを考えました。一つは、ゴーレムなどの無人兵器。これはロボット兵器の開発と実用がされていますから、それに魔法技術を

入れる事で格段に性能が上がるでしょうし、人的被害の減少は様々な面で急務とされている事ですから、それらの開発研究はまず間違いないとされていると思います。もう一つは、既存兵器への魔法技術の組み込み、もしくは融合。これが一番簡単な事だとは思いますが、これもそうですが、ロボット兵器にも一つ問題点があります。それは魔法の存在を公にしないと大々的に使えないと言う事です。魔法を明らかにすると言う事は、それまで世界各国が隠し続けてきた魔力や退魔士の存在を明らかにしなくちゃいけませんし、それに伴った混乱は、どれだけの規模になるか……想像し難いものがあります。……もしかしたら、魔女狩りの様な事が世界中で多発し、今の人間社会が崩壊する可能性だってあります。そう考えると、魔法の事を公にするのはあまり得策ではありません……まあ、ある程度はごまかしが効くでしょうから、使えなくはないでしょうが……隠し続ける場合、あきらかに物理法則から外れた様な仕様の兵器は使えない。それはいくらなんでもわざわざ魔法兵器を作った意味が無い。更に言えば、今の戦いの主な主戦場は、市街などの大型兵器や大量破壊兵器を使うにはあまり不向きな場所である事が多い様ですから……それらと武霊の事を踏まえて考えると、世界各国が最も開発研究に力を入れているのは『個人兵器』である可能性が高い。……で、個人兵器の開発に力を入れているなら、もつとも手っ取り早いのが人体兵器……超能力者の開発なんじゃないかと思っただけです。実際に表に出ている話でも、とある国の軍には超能力部隊があった……話や、世界各国で国が超能力研究をしている……話はよく聞か話ですからね……まあ、あれらは、退魔士とかの存在を知った今では、ただのカモフラージュばく感じますけど…………つで、超能力が魔法を取り込んだ人間であるなら、魔法を人工的に植え付ける技術が必須。かと言って、科学方面で魔法を取り扱う事は出来ないでしょうし、魔法使いが魔法を植え付ける事は可能でしょうが、それだと、数が少ない魔法使いに依存してしまうでしょうし、負担が大きくなってしまふ。なら、超能力を他人に与える事が出来る超能

力者を作った方がいい……今の時代に偶々超能力を他人に与える超能力者が偶発的に生まれるのは考えにくいですからね……つまり、イザナミィヴァルキュリアは、デザイナーズチルドレンで、日本の次世代魔法兵器開発が武霊なら、アメリカの次世代魔法兵器と考えるのが自然です。日本各地にはアメリカの基地がいくつもありますし、場合によっては他の国よりいくらか無茶や、力押しが効く国ですからね。人口・建物の多さや密集率など、様々なパターンデータも取り易い。万が一、実験が暴走したら、それこそ軍を動かせば直ぐに隠ぺい工作も可能……まあ、そんなところでしょうか？」

一気に喋り過ぎたのか、疲れた様に息を吐く黒樹君。

「……なんか……本当に話が大き過ぎて……そもそも、

「デザイナーズチルドレンって何？」

思わずそう黒樹君に聞くと、

「……簡単に言えば、遺伝子改造された子供達って事です……とは言っても、小麦やとうもろこしなどの食品に遺伝子改造は行われた事があっても、人体に遺伝子改造を施されたと言う話は聞きませんし、現在の科学技術では……多分、不可能でしょう……ですが、そこに魔法技術が加われば、可能なんじゃないんでしょうか？ ホムンクルスとか、そういう系統の話はよくある話ですからね」

「……ホムンクルスって言うのがどういのかは知らないけど……」

「今の黒樹君の推論。どこまで合っているんですか？」

そう春子さんに聞くと、

「ほとんど」

とあっさり言った。

「私の方からちょっと追加するなら、イザナミィって子は、『元々は二十年前に魔法使い達に潰された人工分岐人類研究の産物』らしくてね。作った連中はヴァルキュリアって呼んでるそうよ」

「ヴァルキュリア？……イザナミィがそう名乗ってたけど……」

黒樹君を見ると、

「……………ヴァルキユリアは、北欧神話で出てくる優れた戦士の魂をヴァルハラと呼ばれる宮殿に探し、集める主神オーディンの使者の事ですね……………超能力を与える超能力者……………人を超能力兵士にする人体兵器には、ある意味相応しい名前だと言えますね……………そう言えば、イザナミと言う名前も、日本神話に出てくる国生みと神生みを行った女神の名前ですよね」

……………神様の名前が付けられた人体兵器？……………

「……………それより気になるのは、二十年前に潰されたって言うのはどう言う事なんです？」

あたしが神話とか科学とか入り乱れた話に付いていけなくなっている間に、春子さんの言った事が気になったのか、そんな事を黒樹君が口にした。

「ん〜よくは私達も分かってないんだけど……………ほら、さっき言ったでしょ？三十年前にとある人物によって魔法が復活したって」

「……………ええ」

「その魔法を復活させた人はね。『シエルトン＝シルベリア』って言うイギリス人なんだけど、結構な人格者でね。復活させた魔法を平和利用以外に使う事を良しとしなかったの。だから、最終的に兵器転用目的だった人工分岐人類研究を、彼とその弟子達が潰したらしいの」

そんな人が居るのに……………今は世界中で魔法兵器開発が行われているの？……………もしかして……………

「……………だけど、その研究を潰した直後に、彼の七人の弟子達が彼を裏切って……………彼を殺してしまったそうなのよ」

やっぱり……………

「っで、七人の弟子達……………『七人の裏切りの魔法使い』って私達と呼んでいるわ……………は、それぞれ国に帰って、それぞれの魔法兵器開発を始めてしまい……………今に至るわけ。まあ、だから、シエルトンさんが人工分岐人類研究を潰した時に、アメリカ人だった弟子がその研究を密かに隠し持つてて、完成させちゃったみたいなのよ」

……………ん……………

(どうした巴?)

心の中で唸るあたしに、瞬輝丸が声を掛けてきた。

……………なんかさ。あたし、この場に居るのが場違いな気がしてきたんだよね……………

(巴はそれでいいんだよ。あたいら前衛は考えるのが仕事じゃねえからさ。第一、そう言うのは、頭のいい連中に任せりゃいいのさ)……………それじゃあたしが馬鹿みたいじゃない。

(違うのか?)

へし折るわよ。

(良いじゃねえか。巨乳で馬鹿は男受けがいいんだろ?)

……………へし折ろう。

鞘の両端を持ってへし折ろうとするけど、流星は退魔刀と言う事なのか、ビクともしないで、瞬輝丸は平然としている。

「……………何やってるんです?」

黒樹君が困惑した雰囲気ですべてを掛けてきたので、反射的に瞬輝丸を心の中にしまって、なんでもないと手を振った……………あ、自然に出来た……………なるほど、念じればしまえるんだ……………

「……………そう言えば、聞くのを忘れていたんですが」

「何?」

ふと思い出したのかの様な黒樹君の問い掛けに、首を傾げる春子さん。

「……………その魔法使いの組織名ってあるんですか?いつまでも、魔法使いの組織って言うのもなんですし……………」

「『墮ち人』。それが日本における魔法使い組織の名前よ」

「墮ち人……………話からして、七人の裏切りの魔法使いが日本にもいて……………そいつが、墮ち人のトップなんですわね」

「そいつじゃないわよ。そいつら」

「……………そいつら?日本には七人の弟子が複数いるんですか?」

「そうよ。シエルトンさんは、日本の大学で教鞭を振るいながら、

魔法の研究をしていた人だったからね……だから、日本人が三人弟子の中にいるの」

「……三人……数とか、ある程度分かっているって事は、誰が誰だか分かっているんですか？」

「一人だけね」

「一人だけ？」

「ほら、さつき言ったでしょ？私達鯉の会に協力してくれる変わり者の魔法使いがいるって。その人よ」

「……なるほど……じゃあ、それ以外の魔法使いは誰だか分かっているって？」

「後は二つ名だけしか分からないわね」

「二つ名？」

「その三人は、それぞれどこかしらの重要器官に障害がある見たいでさ、それを揶揄して、『見ざる魔法使い』『聞かざる魔法使い』『言わざる魔法使い』ってそれぞれ呼ばれるそうよ」

三猿？……え？見えざる魔法使い？

その名前に何故か、高木先生の顔が浮かび、あたしは直ぐにそれを否定した……だって、いくらなんでも……ありえないでしょう。それは……

????

暗闇に支配された空間の中に、一つのソファーが浮いていた。

そのソファーに一人の男が座っている。

年頃の五十代前後のその男は、メガネをしているが、メガネが掛るべき耳があるべき場所に耳が無く、酷い傷跡があるだけだった。

その為、メガネはゴム紐で固定されており、またそのメガネには幾つかのコードが繋がっていた。そして、そのコードは男の腰に下げた機器に繋がっていて、メガネのレンズに高速で何らかの文字を流している様だった。

メガネのレンズに流れる文字。

その文字の中に、「転送魔法探知」と現れ、男は眉を顰めた。

直後、ソファーの足下に幾何学的な魔法陣が現れ、そこから女性と少女が現れ、魔法陣は消える。

現れた女性は、大きめのサングラスに障害者用の杖を持った四十代ぐらいの女性。

彼女は、黒樹夜衣斗のクラス担任・高木弥恵。

現れた少女は、肩やお腹など所々に穴の開いた服を着たポニーテールで小学生ぐらいの女の子。

彼女は星波町で暗躍する武霊チルドレンの長女・華衣。

「ようやく帰ってきいたか」

音程もイントネーションも外れた声を上げる男。

耳の器官が完全に壊れている為の喋り方なのだろうが、男が喋ると同時にその外れた声もメガネのレンズに文字かされているので、メガネは耳の器官の代わりも兼ねているのだろう。もっとも、文字化された声を見ながら、

「さあつて、ほうこくをきいこうか？」

一向に直そうとしないので、わざとこう喋っているのかもしれない

い。

「報告？常にこの子達を監視しているあなたに報告する様な事はないと思うけど」

弥恵が、夜衣斗達や武霊チルドレンに対して使った事もない様な無感情な声でそう言い、何事かをつぶやき、それと同時に虚空に現れた小さな幾何学的な魔法陣を手を突っ込み、SDカードを取り出した。

「へえ？そおれは？」

「華衣が取り逃がした渡り猫が、今回の実験を妨害する要因になった事に対する罰則を与えない交換条件よ」

「あああ、美魅様とおかわれーてたあの化け猫かあ………おもしろい結果だあよな？まあさか、魔物のちっからを借りてえ実験体のお、心の潜つてえ薬もお、武霊もお、消しさっちまうっだからよお」

そう言つて陰湿に笑つ男。

そして、ひとしきり笑つた男は、ニタリと弥恵に笑い掛け、

「いいい実験対象にいなりそおうだよなあ？お前の生徒わあ？」

その言葉に、瞬時に杖に手を掛けようとする弥恵を、華衣は抱き付けて抑えた。

「駄目です。お母様」

華衣の声に、瞬時に沸騰した感情を抑える様にゆっくり息を吐いた弥恵は、

「小村………約束が違うわ。私のクラスの子は、実験対象にしないつて約束でしょ？………忘れたなんて言わせないわよ」

言葉にあきらかな殺意を込めて言う弥恵に、小村と呼ばれた男は肩を竦め、

「むかあしみつたあに閃君つてえ言つてくれねえよな。最近」

と抱き付いていた華衣が思わず身体を離すほどの殺気を物ともせず、そんな事を言う小村。

小村閃。

それがこの男の名前なのだろう。

そして、かつて弥恵は閃と親しい間柄にいた事を、閃の発言から窺い知れる。だから、今は、

「……夫を人質に取って、無理矢理言う事を聞かせているあなたを、名前で、君付けで呼べと？」

「けえっさくだろ!？」

さも楽しそうに笑う閃に、今度は華衣が止める事も出来ない速さで、一瞬の内に閃が座るソファアの腰掛けの上に移動し、上から抜身の仕込み刀を閃に突き付けた。

「おおおこええ。流石、おれえ達、七人の内でえ最強とう目される事はあるーな。一瞬で多重防御結界をやぶうりやがってえよ!」

そう言う閃のメガネのレンズには、言葉通り「防御結界が破壊されました」と言うメッセージが何度も流れている。

だが、刀を突き付けられていると言うのに、閃は態度を変えず、それどころか、いやらしい手付きで弥恵の足を触りさえした。

「っで?こっからどおするうんだー?わかってんだろおー?おーれの、身体はー、お前のおっとおっ因果がリンクしってえるっつよ」

因果がリンクしている。

つまり、閃が傷付けば、弥恵の夫も同じ様に傷付く事象が起きると言う事。

それが、閃が自分より実力の勝る弥恵に対しての人質。

しかし、

「だから?」

その弥恵の冷淡な声に、閃の表情が一瞬ひくついた。

「……あなたを殺して、夫が死んだら、私も後を追って死ぬわ。

あなたと心中なんて嫌だけど……最初っからこうしておけばよかったわ」

揺るがぬ決意が込められた覚悟の言葉。

「つまあ」

待てと言つ言葉が閃が発するよりも早く、刀が閃の肩から心臓にめがけて正確に突き

さされなかつた。

次元の違う動きに止める事も出来なかつた華衣は、目の前で起きた現象にただただ驚くしかない。

何故なら、弥恵が刀を動かそうとした瞬間、弥恵の背後から小さな幾何学的な魔法陣が現れ、そこから現れた手により虚空へと弥恵が引きずり込まれ、消えた。

「日向ひゅうがかあ。助かつたぜえ」

そう言う閃の視線の先を華衣が見ると、宙に浮くソファアを挟んで向かい側に、いつの間にか電動車いすに座つた四十代ぐらいの男性があり、弥恵はその男に抱き抱えられていた。

「魁人かいと君……」

閃から日向・弥恵から魁人と言われた男は、弥恵を丁寧に下ろし、電動車椅子に備え付けられたノートパソコンを打つ。すると、

「お前を助けたんじゃない。弥恵姉さんを助けたんだ」

とノートパソコンから人工音声が流れた。

日向魁人ひゅうが かいと。

この男こそが、夜衣斗も前に現れた自称最後の敵にして、魔法使い。

そして、この三人が星波町に武霊をばら撒き、武霊を日本の次世代魔法兵器にしようと暗躍している魔法使い組織『堕ち人』のトツ

ブ『三猿』

『見ざる魔法使い・高木弥恵』

『聞かざる魔法使い・小村閃』

『言わざる魔法使い・日向魁人』

自らの師を裏切り、殺した七人の裏切りの魔法使いの内の三人だつた。

????

「日向あーお前があーいいないとおー高木が暴走気味になるー」
そう閃が言うと、魁人は眉を顰めつつ、弥恵に向かって秘匿念話
（ここまで頑張ってきたんです。もう少し、もう少しだけ我慢し
てください）

（我慢？）

弥恵も秘匿念話で返し、閃は、二人が盗聴防止の念話をし出した
事に、あざけりの笑みを浮かべつつ、華衣から実験の結果報告を聞
き始める。

（そう……………やっぱり、黒樹君が……………）

魁人は弥恵から夜衣斗の名前が出た事に多少驚きを感じつつ、

（はい。ですから、後は条件が上手く整えば……………）

（条件……………『七つの宿命の悪意に打ち勝つ事』だったわよね…
……………）

ギョツと拳を握り締める弥恵。

（悔しいわ。自分の生徒が死の運命に晒されているって言うのに
……………私は……………何も出来ない！それどころか！その死の運命の手助
けすらしているー！）

（だからと言って、捨て身になるのは止めてください）

（……………そうね……………まだ、退場するには早いわね）

（はい……………それに今、あいつも退場すれば……………『最悪の歴史』
を歩む可能性が高くなります）

（最悪の歴史？……………そう、今の状態でも、『お師様の示した未
来』は回避されているのね）

（皮肉な話ですが、今、七人の弟子の中で、最も『シエルトンさ
んの願い』を叶えているのが……………あいつなんです）

（……………確かに叶えてはいるだろうけど……………最良の方法では

ないわ)

(はい。最悪な方法です……もし、このままあいつの暴走を許せば、『シエルトンさんの示した未来』とは別の形で最悪な歴史を歩む可能性もあります……実際にその兆候は去年ありました)

(弱者同盟事件ね……まさかあの『フランク』がヴァルキュリア研究を引き継いでいたなんて……)

(七人の中で最も力を求めていた人でしたから……今思えば、あの人の先導で他の五人は……)

(過去を悔やんでも仕方が無いけど……気付くべきだったわね……)……それで、小村はフランクとどんな取引をしていたか調べは付いた?)

(ヴァルキュリアの実験データとDNAマップの様です)

(……小村は日本でもヴァルキュリアを作る気かしら?)

(それはどうでしょう?既に独自の人工分岐人類と言える武霊チルドレンを作っているんです……それに『ヴァルキュリアの危険性』は、小村も重々承知しているでしょうし……)

(……そうね)

(あと、幾つかの最新兵器も提供されている様です)

(最新兵器?……その中に『AFPS』って言うのもある?)

(確かにありましたけど……どうしてその名前を?)

(武霊使い用に調整する様に小村に頼まれたのよ。もちろん、そんな事をする気もないから断ったけど……)

ため息を吐きながら魁人にSDカードを見せる。

(それは?)

(そのAFPSの調整データよ)

(弥恵姉さん……)

(仕方が無いのよ。AFPSを真つ先に装備させられるのは、ま
ず間違いないくあの子達よ)

視線を淡々と閃に報告している華衣を見る。

(弥恵姉さん。あなたの『慈愛』は……時として悪意になるのは

……分かっていますよね)

(分かってる……ついさっきも悪意になり掛けた所だからね……)
自嘲気味に笑う弥恵。

(でも、それはあなたの『平和』にも言える事なのよ)

(……もちろん、自覚はありますよ……それで、それはどうするんですか?)

(小村との取引に使っわ)

(ブレチル達を助ける為に?)

(そうよ。元々あの子達を守る為に作った物だから、ある意味丁度いいわ)

そう言っつて、弥恵は報告を終えた華衣を守る様に移動した。

「さあつて、とうりひきの時間かあ?」

小村の問いに、弥恵は頷き、

「この中にはAFPSの武霊使い用調整データが入っているわ」

「へえ?そいつはすごいなあ。お前に断られてからあ、苦戦してたんだよー」

「これとあの子達の『しばらくの失敗』を無しにしてくれないかしら?」

「しばらくの失敗?さっきよりい条件、ふうえてねえか?」

閃の苦言に、弥恵は笑みを浮かべる。

「私の生徒に手を出すつもりなら、しばらくは失敗が続くと思いなさい」

その弥恵の宣言に、閃はニタリと笑い。

「いいいぜ。その条件でえ飲んでえやるよお」

「そう。なら、受け取りなさい」

SDカードを閃に投げ渡し、

「帰りましようか華衣」

華衣を促し、この場から帰ろうと背を向ける弥恵。

「だが、いいのかあ?」

その背中に、ニヤニヤしながら言葉を投げ掛ける閃。

「こいつうつとお、今やってるじつけえんの結果次第であ、『武装守護霊計画』はあ、『次の段階』にい進むぞお？」

「言つたでしょ？」

振り返りもせず、

「私の生徒に手を出すなら、しばらく失敗が続くって……………今回も例外じゃないわ」

そう言つて、床に杖を突くと同時に現れた魔法陣の中に、一礼をする華衣と共に弥恵は消えた。

魁人と二人つきりになった閃は、しばらくの沈黙の後、

「どお思う？今のお？」

「さあな？」

魁人は興味なさそうにノートパソコンに言わせ、

「『今月のノルマ分はお前の魔法杖に転送しておいた』」

その発言と共に、閃のメガネのレンズに無数の情報が表示される。船はそれを見ながら、

「日向あく、ここあしばらく何処にいたあんだ？」

一瞬の警戒心の伴つた敵意。

「『答える義務はないはずだが？』」

「きいになあるじゃねえか。兄弟子としてわよお」

「『ノルマさえこなしていれば、その間は何をしても良いんじゃないか？』………それとも、約束を違えて、僕を『監視』していたか？」

その魁人の問いに、閃の顔が一瞬ひくついた。

「っは……………なわけえねえだろ？」

「『なら、問題はない』」

にらみ合うとまではいかないが、ほんの少しの間、交差する二人の視線。

無言の駆け引きの後、魁人は何も言わず転送魔法陣を出し、この場から消えた。

再び一人になった閃は、邪悪と表現していい笑みを浮かべ、

「足掻けばいいさー。どおせ、もお、この流れはかええられやしえね」

そう言って手を振りかざすと、閃の前に地球の立体映像が現れる。その立体映像の地球儀には、様々な場所に何らかの数値とパーセンテージが表示されており、特に大きく書かれているのは、『日本』・『アメリカ』・『中国』・『ロシア』・『EU』で、その全てが高い数値と七十から八十のパーセンテージと高い数値を示していた。

夜衣斗

堕ち人に、三猿ね…………ふむ。もしかして…………

「…………その三猿と呼ばれる中の誰が協力者なんですか？」

その俺の問いに、

「ん〜教えても良いけど、ここ以外でその事を口にしちゃダメよ？もし、堕ち人の連中にその事が耳に入ったら、その人の立場が危うくなるから」

ここ以外ね…………やっぱり、何らかの妨害結界とか、そんなのを張ってるのか？…………まあ、あんな話をしてるんだから、当然と言えば当然の措置か…………何にせよ。

「…………外でそんな事を喋る意味も理由もないと思いますが？」

「ま〜そうかもね…………言わざる魔法使いが私達の協力者よ。つで、名前は日向魁人」

日向魁人ね…………言わざる魔法使い…………言わざるね…………やっぱり、だとすると、

「…………言わざるって事は、口か喉の器官に障害があるって事ですよね？」

「ええ。喉が完治不可能なほど怪我を負って、喋れなくなってるそうよ。しかも、足も悪くて常に車椅子に乗ってるの」

「…………喋れないって事は、どうやってコミュニケーションを取るんですか？」

「ノートパソコンを使って、人工音声で喋ってたわね」

ん〜…………やっぱり、どう考えても自称最後の敵だな…………と言う事は、最後の敵…………日向魁人の敵は他の三猿か？それとも七人の裏切りの魔法使い？…………何であれ、当分は味方って事か…………しかし、

「…………その人は、武霊について何も言っていないんですね」

「ええ、一度も聞いた事がないわ……………最初は忘却現象のせいか
と思つてたけど、夜衣斗ちゃんの話聞いて、話せない理由がある
んじゃないかって考えを変えたわ……………だから、多分だけど、武霊関
連の話は、彼にとつてもかなり危険な話なんだと思うのよね。彼は
敵が多い人みただから……………」

……………つまり、漏れても問題ないギリギリのラインの情報しかこ
っちには提供出来ないって事か……………まあ、自分の名前さえ迂闊に
教えられないみたいだったし……………だとすると……………

「……………春子さんはその日向魁人と会つた事があるんですよね？」

「ええ」

「……………この町で日向魁人と会つた事は？」

「ないけど……………どうして？」

「……………武霊が墮ち人の兵器開発なら、墮ち人の関係者が必ずこ
の町にいるはずですからね……………まあ、流石にトップが常時いるの
はおかしいでしょうが……………なんであれ、構成員がこの町にいるの
は間違いないでしょう。忘却現象がある程度コントロール出来る様
になったとしても、完全にコントロール出来ないなら、この町で研
究実験する必要があるでしょうし……………実際に墮ち人の実験らしい
事件はいくつも起きていますしね」

「確かにそうね……………でも、星波町にはそれらしき施設はないわ
よ？」

「……………何らかの見落とし、もしくはこちらの盲点を突く場所か、
それとも分からなくなる様な何かがあるって事でしょう……………まあ、
それらを調べるのは、星波町を取り戻してからの話でしょうけどね」

……………」

「そうね。夜衣斗ちゃんが手伝つてくれるなら、見つかるかもね」
……………そう言えば、手伝つて言つちやつたんだっけ……………いく
ら退魔士の一族の生まれ……………いまいち現実感がないが……………出来
れば関わりたくはないな……………まあ、そうは言つてられない状況か
……………」

「……………ところで、春子さん達はどうやって、三島忠人から星波町を取り返すつもりなんです」

「え？」

え？つて……………まさか……………

「そうそうさゆりさん。この二人に見覚えはないですか？」

唐突に話を変え、春子さんはさゆりさんに二枚の写真を見せた。あまりの唐突ぶりにさゆりさんは戸惑いつつ、写真を確認。

「……………いいえ。見た事が……………いえ、この女の子は……………確か、一度だけひよりと話している所を見たかもしれません」

「いつ頃か憶えていますか？」

「……………確か、去年の七月頃……………だったかしら？」

「……………そうですね……………後、去年の娘さんの行動を、知っている限りでいいので教えてくれませんか？」

「はい……………とは言っても、去年の春頃から、娘とは疎遠になってましたから……………今考えると、私を弱者同盟に巻き込まない為に私から遠ざかっていたのかもしれないね……………」

「弱者同盟の参加者の大半は……………特に去年頃に参加した子供達は、優しい子や正義感の強い子が多かったみたいですから、きつとひよりちゃんも」

「ええ、ひよりは正義感が強くて優しい子でしたから……………だから、クラスで起きているいじめが見過ごせなくて……………止めさせようとして、逆にいじめの対象になってしまった……………弱者同盟なんか……………」

涙目になってぎゅつと寝ている娘に抱き付くさゆりさん。

流石の春子さんも、なんとも言えない表情になっていた。

弱者同盟の参加者と被害は、主に都市部が多かった。

マスコミとかは、それだけ都市部の子供達の闇がそれだけ大きかった。とか騒いでいたが、個人的には電子ネットワークの繋がりが、郊外などより都市部の方が強かった為だと思っている。実際、去年のネットでは、弱者同盟の話で持ち切りだったし……………なんであれ、

子供……俺達の世代の間は、多少の違いはあれど、どこである
うと同じだと思う。

だから、俺も、もし退魔士の子供じゃなかったら、気付かれずに
守られていなかったら……きっとひよりさんと同じ様に弱者同盟
に参加していた……そんな気がした。

さゆりさんに抱き付かれているひよりさんを見ると、とてもテロ
組織に所属していた人間には見えない、呑気な寝顔を見せている。

不運なのは、鬼走人骸が星波町を拠点とした連中だった事か……
……きっと、弱者同盟事件が起きている時は、星波町にいたか、逃れ
たかして、弱者同盟を撃退していたんだろう。だからこそ、鬼走人
骸はさつきまで健在で、ひよりさんはその調査に、弱者同盟がやり
残した事を片付ける為に、星波町に来て……重いため息しかで
ないな……

んゝにしても……もしかして、春子さん……全く作戦が思い
浮かんでない？

などと思いつながら、春子さんが持つ二枚の写真を何となしに覗き
込むと……

「え？」

思わず驚きの声が漏れた。

そこに写っていたのは、春咲茜と……楠木久思の二人だった。

????

春咲茜は、自分の部屋のベッドの上で寝転がり、ため息を吐いた。黒樹夜衣斗。

彼女にとって嫌な名前だった。

何故なら、自分が参加していた弱者同盟を壊滅させたのは、同じ名字を持つ退魔士達だったからだ。

更に嫌だと思うのは、壊滅直前に出会った黒き大樹の戦巫女と呼ばれる日本最強の退魔士の一人・黒樹夜衣花と名前も、雰囲気も、どこか似た所があるせいもあった。

実はその夜衣斗が本当に黒樹家の人間であった上に、夜衣花と兄妹だと言う事を、茜は知りもしないが、その夜衣花の説得によって、茜は今、ここにいられる。

弱者同盟最後の事件・国会議事堂爆破未遂に、彼女と西島ひより、そして、楠木久思は参加していた。

二人と茜は、イザナミィヴァルキュリアに与えられた超能力の相性から、チームを組んでテロ行為を行っていた。

茜の超能力は『転移人魚』

視認した事がある水場から水場へと瞬間移動する超能力。

ひよりの超能力は、『沈黙隠者』

意図して喋らない事によって他人からその姿を見せなくする超能力。

そして、久思の超能力は『折紙爆弾』

折紙を折る事により、その折紙を爆弾にする事が出来る超能力。

折った回数により、爆発の威力と爆破時間が大きく・長くなる超能力でもあった為、国会議事堂爆破の為に集められた爆破系の超能力者の一人として選ばれ、いつもの様に対象を爆破する様に言われた。

茜が爆破対象までひよりを運び、ひよりが久思が作った爆弾で対象を爆破する。

それが三人のいつものやり方だったが、三人は国会議事堂の爆破に疑問を抱いていた為、作戦に参加するタイミングが遅れた。

そもそも、彼女達は弱者同盟参加者としてテロ行為を行ってはいたが、そのテロで人的被害は一切出していない。

多くの彼女達によつて起こされた爆破テロは、弱者同盟の存在を周知させる事と、情報収集の為がほとんどだった。

爆発で騒ぎを起こし、その間に茜とひよりが情報収集を行う。

そんな事ばかり続けていた為、どんどん過激に、規模が大きくなる弱者同盟に三人は疑問を抱き、躊躇。

だからこそ、作戦に遅れ、黒樹家を中心とした退魔士達との総力戦に直接巻き込まれる事を回避できた。

だが、遅れて参加したからこそ、到着直後に戦闘状態に入っていた黒樹家分家の人間と遭遇し、『黒き大樹の黒樹刀に久思が茜を庇つて貫かれてしまう』。

そして、とっさに逃げた先で、夜衣花に会い、説得されて、見逃される。

弱者同盟壊滅後、目を覚ました久思が記憶と共に超能力を失っている事を知り、茜はショックを受けた。

何故なら、久思とは、恋人とまではいかないが、少なからず互いの事を思い合っていた間柄だったからだ。

だから、彼女は『裏から手を回し、久思が受けていたいじめ問題を表面化させ、星波学園に転校させる様に誘導してしまう』。

そうして、彼の近くで記憶が戻るのを待つつもりでいたのだが、転校させてしまった事によって、新たないじめを久思が受ける様になつてしまい、どうにかしなくてはと思い悩んでいた所、夜衣斗が解決。

そして、今日、その後の事件で引き籠りになつてしまった久思を、
またも夜衣斗のおかげで何とかなつたかもしれないので………何と

なく嫌いだが、好感は持てると言う不思議じゃ状態になっていた。
(彼に任せてばかりじゃなくて、私ももつと久思君と仲良くしたいと……………)

そんな事を思いながら、茜は携帯電話を取り出し、三人で撮った写真を見る。

いい思い出よりも、悪い思い出の方が多い気がするが、それでも茜が生きていた中で一番充実した日々だったと言えた。

久思に、ひより。

ふと少し前に会ったひよりの事を思い出す。

彼女は、他の弱者同盟残党達と繋がって、弱者同盟としての活動を再開しており、茜をその活動に誘うと共に、星波町を拠点に活動し、壊滅前の弱者同盟を何度も退けた鬼走人骸を調べようとしていた。

茜は、鬼走人骸が弱者同盟を退け続けられた理由に心当たりが、ひよりと会った場所が星波町内だった事もあり、武霊だと言う事を分かっていたので、参加出来ない意志と共に武霊の事を警告し、鬼走人骸に関わらない様に言った。

ひよりは茜の言葉に残念がると共に、鬼走人骸に関わらない事を約束してくれたので、ひよりに関しては茜は何の心配もしていない。だが、ひよりがその約束を破り、鬼走人骸を調べようとして捕まってしまう、監禁され記憶を消され、人としての尊厳を奪われる様な事をさせられていた事を知る由もなく、更に言えば、そのひよりさえ夜衣斗により救われている事も知る由もなかった。

夜衣斗

「……………春咲さんと楠木が弱者同盟参加者？」

春子さんのその話に、俺は眉を顰めた。

確かに二人とも互いに弱者同盟に参加する資格はある感じだったが……………あの二人が超能力者？

そう疑問を抱いていると、すすつと春子さんが俺に近付き、小声

で、

「何も確信がなくて言ってるんじゃないのよ？実はね。夜衣花ちゃんがいよいよさんを含む、この三人に国会議事堂爆破未遂の時に会ってるのよ」

国会議事堂爆破未遂！？と言っか

「……………夜衣花。あの事件に関わってたんですか！？」

同じく小声でそう問うと、春子さんは頷き、

「そうよ。あの事件は黒樹家のほとんどの人間が対応に当たってたの。ちなみに私もね……………っで、その時に夜衣花ちゃんが三人を見逃しちゃったわけ」

見逃した？

「……………どうしてです？」

「幾つかの理由はあるけど……………夜衣花ちゃんの場合は気に喰わなかったからじゃない？」

「……………気に喰わない？」

「うん。あの時、退魔士上層部の命令は弱者同盟の超能力者を『殺してもよし』だったわけ」

……………まあ、被害の規模から考えれば、当然と言えば当然の対応だが……………確かに気に喰わないな。

「っで、一部の、特に鯉の会に所属している若い退魔士達は、それに反対していたわけ。だから、見逃したのよ」

ふむ……………確かに、心情的な理由はそうだろうが……………

「……………他の理由として、泳がして国会議事堂爆破未遂に参加しなかった弱者同盟参加者を見付ける為……………とか？」

「さすが夜衣斗ちゃん。分かってるわね」

「……………まあ、よくある話ですからね……………」

……………それにしても……………あの二人が弱者同盟ね……………と
言っか、だから何なんだ？

改めて考え深げに思っていると、ふっとそんな事を思った。

そもそも、俺は退魔士じゃない。

退魔士の家の生まれかもしれないが、弱者同盟にも関わっていないし……俺がどうこうする事じゃないな……よし、気にしない事にしよう。

「あ！そうそう。その子の事だけだ」

まだ小声で話し掛けてくる春子さんは、俺が持っているリュックサックを……絶賛気絶中のメガネベアを指差し、

「夜衣斗ちゃんはその子が何なのか知って一緒にいる？」
などと聞いてきた？

「……美魅と同じ魔物の一種？」

俺の疑問形に、春子さんはため息を吐き、

「やっぱり分かってなかったのね……まあ、当然よね。普通は知らないし、私も夜衣花ちゃんから聞いて初めて知ったんだし」

「……一体何だと言ってますか？」

「この子はね。魔法使い達に、『世界樹渡航生物』って呼ばれている存在らしいわ」

世界樹渡航生物？

「……つまり、こいつは異次元の生物って事ですか？」

「そうよ……しかも、この子は本気になれば『一つの世界を滅ぼせる』……だって」

……はあ？

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 35

飛矢折

世界を滅ぼせる？……………あの人形が？

春子さんの発した言葉に、あたしは眉を顰めた。

さっきも思ってたけど……………あの人形って、あたしが商店街で当て貰った人形だよね？……………なんか喋ったり動いたりするみたいに
も言ってたけど……………

（ありや、ただの人形じゃねえぜ）

人形じゃない？どう言う事？

（あたしも大分昔にちよっと見た限りだけどさ……………あれが本気
になればあたいらが束になってもかなわねえ化けもんだよ）

……………それって……………

「……………それって、どう言う事なんです？こいつは」

あたしも思ってた疑問の声を、黒樹君が口にし、メガネベアの頭に
手を乗せようとした瞬間、

「素手で触っちゃダメ！」

と春子さんが大声を出した。

だけど、黒樹君は言葉の意味が瞬時に理解出来なかったのか、メ
ガネベアの頭に、正確には巻き付いている黒き大樹らしき枝の上に
手を置いてしまう。

その瞬間、何かが破裂する音と共にメガネベアに巻き付いていた
枝が粉々に吹き飛んだ！？

静寂がこの場を支配する。

「えつと……………え？」

目の前で起こった事がよっぽど衝撃的な事だったのか、茫然とし
ている春子さん。

退魔士の人達も大体似たような感じだった。

（……………驚いた。まさかここまで……………）

「ここまで？どう言う事？瞬輝丸？」

（ん？ああ……………さつき、黒樹家の種無しは膨大な魔力を持つて
るって言うってたる？）

ええ。

（っで、あの化けもんに巻き付いていたのは黒き大樹の枝だった
わけだ）

ええ？

（黒樹家の退魔術の中に、黒き大樹の枝を対象に巻き付けて魔力
を吸収させながら封殺する術があんだよ）

封殺？……………え！？あれが！？

（まあ、色々と制約があったり、手間がかかったりする術だった
話だから、あれだけじゃちよつとの間意識を奪う程度だろっけどよ
……………分かんたろ？あれも黒き大樹って事はさ、魔力を持つもんは、
あれに触れただけで魔力を吸い取られちまうわけよ）

うん？

（っで、魔力を持った黒樹夜衣斗が黒き大樹に触った瞬間、破裂
した。あまりにも膨大な魔力を一気に吸収した為に起こったんだろ
うけどよ……………本体から切り離された枝だとは言え、普通はS級退魔
対象でもああはならないな）

……………それで春子さん達はあんなに驚いているんだ……………

（多分、それだけじゃねえだろっさ）

それだけじゃない？

（ああ……………魔力のある場所は、主に心の中、魂の中なわけなんだ
が……………っで、そんな中にあるから、取り出したり、吸いだしたり
すると、どうやって意志力を一緒に消費しちまうわけさ）

えっと……………つまり、魔力をどんな形でも外に出せば、意志力を消
費するって事？

（そういう事さ。そして、黒き大樹の魔力吸収限界をあっさり超
える魔力を消費したはずなのに……………）

平然としてるね……………黒樹君。

周りの反応を不審そうな雰囲気で見回した黒樹君は、今起こった現象がどんな現象か理解したのか、それに関する質問をしないで、「……………こいつに世界を滅ぼせる様な力がある様には見えませんか？」

と聞いた。

問われた春子さんは、若干驚きを引きずりつつ、

「世界の外から来た存在を、『外来存在』って言うんだけど……………そう言う存在って、普通はこつちの世界の人間が召喚術とかで呼び込まない限り来れないのよ。だから、隠語として彼らの事を『お客様』とか言ったりするんだけど……………まあ、それはあまり関係ないわね……………とにかく、この子は単独で、勝手にこつちの世界に入る事が出来る……………らしいわ」

「……………さつきから、だつてとか、らしいとか……………随分曖昧ですね？」

黒樹君の指摘に、春子さんは困った様な表情になり、

「だつて……………仕方が無いじゃない。私の知識は股聞きの股聞きの股聞き知識なんだし」

「……………股聞きの股聞きの股聞き……………」

……………何それ……………

「うん。夜衣花ちゃんの仲間が、日向魁人さんから聞いて、夜衣花ちゃんがそれをちよつと前に私に教えてくれたわけ」

「……………夜衣花からの情報ですか？何でまた……………」

「なんでも夜衣花ちゃんの話だと、同じメガネベアがちよつと前まで夜衣花ちゃんの所に、日向さん経由でいたらしいの……………まあ、夜衣花ちゃんがこの子から聞いた……………じゃなくて、伝えられた？この子、喋れないんだつてね」

「……………ええ」

「つで、それによると、他にも似た個体がいっぱいいるらしいから、同じ子かどうかは電話越しの夜衣花ちゃんには分からなかったみたいだけどね。でも、この子以外の個体を見た事がないつて言っ

てたから、夜衣花ちゃんの所にいた子なのは間違いないんじゃないかしら？」

「……………なるほど……………つまり、このメガネベアは、この町に来る前は、夜衣花の所にいたわけですか……………つで、その間に、夜衣花は世界を滅ぼす力の一端を見た？」

「ん〜そうなのよね……………なんでも、『結末獣』を食べちゃったって話だから……………」

結末獣？……………また新しい言葉が出てきた。

「ん〜でも、私ごときの黒き大樹で気絶するんだから……………どうも信じられない話なのよね……………」

そう言いながら、黒樹君に抱き抱えられているメガネベアをグリグリと撫でた。

「……………さも知ってるかのように言いましたけど、結末獣って何なんです？」

あ、黒樹君も知らなかったんだ。

「そう言えばそうね〜まあ、私もそれほど詳しいわけじゃないけど……………なんでも、『世界樹の枝の先に出来る果実・結末世界果実』が、意志を持った存在。それが『結末世界果実獣』。通称『結末獣』って言うんだってさ」

……………？……………どう言う事？

「……………つまり、『世界が滅んだ可能性の世界そのもの』って事ですか？」

そう言っつて黒樹君は理解できたみたいだけど……………あたしはさっぱり……………なんか、今日はそんなのばかり……………

「……………もし、そんなのが実在し……………見たって事は、この世界にやって……………召喚された？んでしょうが……………それを食べた……………ね」
いまいち釈然としていないのか、歯切れの悪い黒樹君。

「結末獣の存在は、私達退魔士の中でも有名な話だから……………私もどうも信じられないのよね……………」

言ってる本人も自分の言葉に納得いってないのか、こっちも歯切

れが悪い春子さん。

「……なんか、話しの大き過ぎる話ばつかで……」

「……まあ、何であれ……こいつがどんな存在であっても、一カ月近くいる俺からすれば……どうでもいい話です」

そう言いながらメガネベアの頭を軽く叩く黒樹君。

その感じから、黒樹君が、メガネベアを随分信頼しているのが分かる。

あの黒樹君がそんなに信頼するだから、メガネベアはいい子……なのかな？

「……第一、それほど大きな力があるなら、何らかの条件や、制限があるんじゃないんですか？」

「さあ？そこまでは聞いていないけど……確かにそうよね。いつでも使えるんだったら、とっくに世界が滅亡してるかもしれないし……それにしても……起きないわね」

首を傾げる春子さんは、メガネベアの頬を突く……あたしも突っ突きたい……

「……おかしいわね。この子には黒き大樹の力が効かないって話だったんだけど……」

ん？あれ？……黒き大樹が聞かないんだって、瞬輝丸。

（……だとすると、随分規格外の奴だな……あたいは結構長く在るけどさ。そんな奴、初めて聞いたぜ）

初めて？……と言うか、瞬輝丸はどれくらい生きてるわけ？

（物なんだから在るだって……まあ、そんな細かい事はどうでもいいか……んゝ多分、安土桃山時代後期頃じゃね？）

何で疑問形？

（生まれた頃の記憶は曖昧でさ……まあ、刀狩りで集められた刀から造られたって話だから、その頃なんじゃねの？）

……安土桃山時代……

そんな会話を心の中でしている間も、春子さんはメガネベアをいじくり回していたけど……反応はなかった。

……………本当に動くのかな？

そう思った時、黒樹君が唐突に首を傾げた。

多分、心の中であの猫と会話をしていたんだろうけど……………

黒樹君は少し考えた後、メガネベアの耳の近くに顔を近づけ、

「……………ここにいる全員は、俺に深く関わってる。だから、人形の振りをしなくてもいいぞメガネベア」

と言うと……………唐突に、メガネベアの首が動き、黒樹君を見て

頷いた！？

夜衣斗

美魅の話によると、メガネベアとその同類……メガネ動物か？……は、魔法などの『本来の世界にはない何か』を有している者の前じゃないと、自分の正体を晒さない『本能』の様な物を持っているらしい。

例えば、退魔士などの様なこの世界の本来の法則ではない魔法を持つ者や……俺の様に運命を変えられる選択を与えられた物などが該当するそうだ。

その事を美魅はサヤから聞いたらしいんだが……サヤがその事を知っているって事は……やっぱりメガネベアも運命を変えられる選択と何らかの関わりがあるって事なんだろうか？

……まあ、何であれ、さきほどまでメガネベアが動かなかったのは、飛矢折さんや西島さゆりさんがいた為だったようだ。

この二人は……飛矢折さんは少し規格外な気がしないでもないが……いわゆる普通の人。

だから、メガネベアは本能的に動けず、俺がこの場にいる全員に俺に深く関わったと教える事で、『本来の世界にはない運命に選択後に巻き込まれたと認識させた』。

これでメガネベアは動けるようになり、同意の為に俺に向かって頷いたんだが……飛矢折さんが物凄く驚いている。

……まあ、自分が持ってきた人形が、実は人形じゃありませんでした……なんて、普通は驚くよな……ん？

「……そう言えば、メガネベアにそっくりな人形がおもちや屋とかで売られていますよね？あれって、なんかこのメガネベアと関係あるんですか？」

そう俺が春子さんに問うと、メガネベアも同じ事を思っていたの

かうんうんと頷いた。

「さあ？」

さあつて……………あからさまにメガネベアがっかりしているし…

……

「んゝまあ、本当かどうかは分からないけど……………人形の方のメガネ動物シリーズに、シエルトン〓シルベリアが関わってるとか、そんな話があるわね」

シエルトン〓シルベリア？……………七人の裏切りに魔法使い達の師匠にして、魔法を復元した大魔法使い……………か……………んゝメガネ動物の情報を夜衣花の仲間に流したのが最後の敵・日向魁人なら、その師匠は更にメガネ動物の事を知っていそうだな……………まあ、だとしても、既に故人であるなら、それを、人形を作った意図を知るのは難しいか……………メガネベア自身もよく分かってないみたいだしな……………とりあえず放置の方向でいいか……………今はそんな事より、

「……………メガネベア。さっきの春子さんの話は本当か？」

そうメガネベアに問うと、メガネベアは首を傾げ……………そのまま少し固まり、ポンと手を打った。

そして、俺に対して、イメージを送ってきたんだが……………んゝ……………メガネを……………サングラス？……………メガネは……………安全？……………グラスサンは……………危険？……………プリン？……………世界樹の外？……………好物……………がいた時に……………解錠出来る？

……………要するに、普段掛けているメガネは安全装置で、好物……………多分、結末世界果実獣とかか？がいた時のみ、メガネをグラサンに変える事が出来て、それを使う事で本来の力を発揮出来る……………そんな所だろうか？

頷くメガネベア。

……………なんか、やけにシステムの言うか……………まあ、どう考えても自然に発生した生物には見えないよな……………メガネベアは……………だとすると、武霊と似た様な存在なのかもしれない。いや、それ以上か？……………なんであれ、まあ、どうであれ、メガネベアを警戒す

る必要性はないわけだ。

「ふふ。言つとくけど、あれでプリンを許したわけじゃないからね。また私のプリンを食べたら……うふふ」

などと言つて、メガネベアを睨み付ける春子さん。

目があつた途端に、バチバチと火花を散らし出す春さんとメガネベア。

……春子さん以外は……か……それにしても……プリンと結末獣が好物ね……同じ味でもするんだらうか？……まあ、具体的に結末獣がどんなものを知らないから何とも考えようもないが……

とりあえずメガネベアの事は置いておこう。

例え、メガネベアも俺の運命に関わる何かがあるとしても、今回の事に直接関係ある様には見えないしな……それよりなにより問題なのは……

「……春子さん。そろそろ話してくれませんか？どうやって星波町を取り戻すか」

そう俺が言つと、春さんはメガネベアとにらみ合うのを止め……

……へらつと笑い、

「にははは……全く……考えてなかつたり？」

……などと言つた。

……やっぱり……つつか、笑いごとか？……

俺はため息を吐きつつ、統合生徒会長に目を向けると、統合生徒会長も困つた顔をして……頷いた。

……どこら辺で落ち着いたかは知らないが、俺が気絶してから起きるまで、数時間はあつただらうに……それでも退魔士……

……じゃないのか……考えて見れば、ここにいる連中は、退魔士能力とかはあつても、退魔士としての仕事をした事がほとんどないんだらうな……しかも、町一つを取り戻す様な大規模な作戦をした事は……今の時代を考えれば、ありえない事か？……ん……

……

「……………そんなので一体どうするつもりだったんですか？」

俺の困惑を思いつきり込めた問いに、春子さんと統合生徒会長は互いを見合わせ、ちよっと間を置いて、俺を見る。

そして、

「夜衣斗ちゃんなら何とかしれくれるかな？って」「夜衣斗様なら何とかしてくれるかな？って」

……………

夜衣斗

二人の発言に、俺は絶句するしかなく。

……………あ……………もう！ありえないだろう！普通！？俺は基本、この場にいる誰よりも……………素人だって言うのに……………

ちよつと頭痛の様な物を感じ、思わず額に手を当てながら、多分、人生最大のため息を長く吐いた。

（夜衣斗。大丈夫だわよ？）

流石に心配になったのか、美魅が声を掛けてきた。

……………大丈夫だよ……………まあ……………希望的観測で、一応奪還案は……………考えていたから、何とかなると言えば何とかなるかもしれない……………しかしな……………

（しかしな？）

いや……………普通、色々と問題あるだろう？

（？……………何のかわよ？）

……………まあ、何かかは……………直接聞かないとな……………

俺は目を閉じ、少しだけ深呼吸。

「……………俺が何とかしてくれると思ってたって事は、この場にいる全員が俺の指示に従ってくれるって事ですよね？」

その問いに、

「もちろんよ」

と頷いて応える春子さん。

視線を統合生徒会長に向けると、統合生徒会長は応じる様に頷き、周囲を見回すとほとんどの人が頷いた。

……………何だか胃がキリキリしてきた。

「夜衣斗様。わたくし達は、夜衣花ちゃんのお……………お？」

「……………お願いもあつて、今まであまり積極的に接触をしないようにしていましたが……………」

……………何だかね……………」

「今までの夜衣斗様の活躍を、わたくし達は高く評価しているのですわ」

そう言った後、統合生徒会長は困った顔になり、

「実の所を言いますと、わたくし達は退魔士能力の訓練はした事があつても、実際に退魔の仕事をした事がある者はほとんどいませんの」

やっぱりそうか……………だが、

「……………ですが、武霊使いとしてはそれなりの戦闘経験はあるわけですよね？」

「ええ……………ですが、今回はほとんどその経験も役に立たないと思いますわ」

役に立たない？……………つまり、

「……………退魔士の武霊であつても、武霊は武霊と言う事ですか……………」

「はい。ここまで逃げる際に、この中の何人かが武霊を具現化させたのですが……………操られてしまいましたわ」

統合生徒会長の肯定に、俺は思わずため息を吐いた。

オウキに三島忠人の武霊能力が効かなかつたのは……………ガチャポンマンの武霊能力が効いた前後の事を考えれば……………魔力が原因なのは間違いないだろう。

だとしたら、同じ様に魔力を持つ退魔士達の武霊も、魔力を糧にしているんじゃないかと思つたんだが……………どうやら違うらしい……………考えて見れば、自身の退魔士能力に使われている魔力に余剰があれば、退魔士も魔法を使うんじゃないだろうか？……………なのに魔法を使っていると言う話はない……………だとすると、退魔士達の魔力には余裕がなく、その為、退魔士達も武霊を使うのに意志力を消費している。と言う事になる……………まあ、実際に『武霊のみが操られて

しまった』のなら、それは間違いないだろうが……ん……
だとすると、鯉の会の人達は、自身の退魔士能力で戦うしかないっ
て事になる……だが、だとすると……一つ問題があるな……

「……飛矢折さんの話からすると、催眠下にあっても記憶は残
ってる様ですから……下手に退魔士能力は使えませぬ……」

「ええ」

領く統合生徒会長。

さつき統合生徒会長は退魔士の存在は世間一般に対して秘密にし
なくてはいけないと言っていた。

その理由は色々と思いつくが……理由が何であれ、その秘密に
しなくてはいけないと言っているのが……かなり厄介なのだろう。

通常は、隔離結界とか言う人を近付けさせなくする方法などを使
ってるんだろけど……それは忘却現象か、武霊の影響で使えな
いと言っ話し出し……だが……ん……

「……退魔士側にも記憶を操作する技術はあるんですよね？」

「……あるにはありますが、忘却現象ほどではありませんし……
……記憶に関する退魔士能力を持つ退魔士は、基本的に行動が制限
されていますので、わたくし達の仲間にはいないんです。ですが
ら、普段は記憶操作などの魔法が込められた退魔士道具などを使っ
んですが……そう言うのって、高いんですよ……とても全町
民をカバーできるほどの数は用意出来ませんわ……それに、万が
一の為に用意していた記憶操作系退魔士道具も、ここまで逃げる際
に大半を使ってしまったままですし、奪還後に使用しなくてはいけない
人数を考えると……足りない可能性もありますわ」

なるほど、やっぱり逃げる際に各自の退魔士能力を使っているわ
けか……まあ、そりゃそうか……と言うか、高いって……さっ
きから思っていたが……

「……琴野さんって……お嬢様なんですよね？」

そう思わず問うと、統合生徒会長は苦笑して、

「資産家なのは御婆様や両親だけですわ。わたくし個人が自由に

していい資産は全く無いんですよ」

「なるほど……まあ、考えて見ればそうだよな。漫画みたいに、お金を自由に使ってる描写は大体フィクションって事か？……」

「……と言っか、」

「……理事長とご両親は鯉の会メンバーじゃないわけですか？……」

「……はい。御婆様とお父様、お母様は……敵ではありませんが、味方でもないと思いますわ」

「……つまり、関わりを避けていると？」

「ええ。ですから、三人とも、重要な学校行事以外、星波町にほとんど来ませんわ」

「ん……そっち方面から情報を得るのは難しいわけか……まあ、話からすると琴野家は、ただたんに利用されただけって感じがするし、そんな有益な情報はなさそうか？……」

「夜衣斗様」

思考は別方向に働き始めた所に、統合生徒会長は真剣な面持ちで俺の名前を呼んだ……と言っか、いつの間にか黒樹様から夜衣斗様に呼び方が変わってるんだよな……ん……

「夜衣斗様もお気付きだと思われませんが、今回の件は、圧倒的にわたくし達に不利な状況なのですわ」

確かに、武霊も、頼みの退魔士能力も『今のままでは使えない』。「この状況を打破出来るのは、三島忠人の武霊能力が効かない武霊をお持ちの夜衣斗様。あなたしかいませんわ……ですから、星波町奪還は、夜衣斗様中心に必然的になりますの……そうなれば、わたくし達が指揮を取るより、オウキの主である夜衣斗様が指揮を取った方がよろしいかと思えますわ」

「……
「勿論、全力でわたくし達がサポートいたします」

「……
「夜衣斗様」

……………これも、俺が越えるべき死の運命なのだろう。状況から考えて宿命の悪意は、『支配』。

相手は統合生徒会統合副生徒会長兼武装風紀委員会委員長『三島忠人』。

武装守護霊は『ハーメルンの笛吹き男の様な武霊』。

武霊能力は、『笛の音を間接的であろうと聞かせた相手に催眠魔法を掛ける能力』。

そして、その催眠下に入っている人数は、星波町ほぼ全町民と星波学園生徒……部活組と寮生か？

味方は退魔士……の家の人達、大体五十人ぐらい。

しかも、武霊・退魔士能力共にほぼ使えないときている……
……………改めて考えると……圧倒的に不利な人数に思えるが……

……………俺は深いため息を吐き、

「……………分かりました。俺でよければ、星波町奪還の指揮を取らせて貰います」

「夜衣斗様！」

わっとなる周囲に、俺は苦笑して、

「……………その代わりと言ってはなんですが」

「はい。何でしょう？」

「様付けは止めてくれませんか？……………どうも慣れない」

その俺の提案に、統合生徒会長……………いや、琴野さんでいいか……………は、笑って、

「はい。夜衣斗さん」

飛矢折

黒樹君が星波町奪還作戦を指揮する事が決まった後、黒樹君はみんなをドーム状の中心に集め、シールドサーバントで椅子を作つて座らせた。

みんなと言っても、西島さん達とか、非戦闘員らしき人達は他の場所でみんなの夕食の準備をしてる。

……そう言えば…… お腹空いたかも…… お腹が鳴らない様に気を付けなきゃ……

「……そもそも、琴野さん達は……どこまで出来るんですか？ みんなに見られている中、黒樹君は若干躊躇しながらそんな事をみんなに聞いてきた。

意味が分からなかったのか、周りがざわつく。

「あの……どこまでとは、どういう意味ですか？」
みんなを代表する感じの統合生徒会長の問いに、

「……俺は退魔士と言う存在をフィクションの中でしか知りません。ですから、作戦の詳細を考えるには、どうしてもどこまで出来るか知っておく必要があります」

「……それは構いませんが……詳細と言う事は、既に大体の作戦は出来出来ていると言うことでしょうか？」

「……ええ、基礎は出来ています」
頷く黒樹君に、本格的にざわつくみんな。

……基礎は出来てるって……いつ考えていたんだろう？
「躊躇ってたわりにはやる気まんまんねえ」

春子さんがからかう様にそんな事を言う。

「……まあ、一人で奪還する方法とかを、ここに来る前に考えていましたから……」

「一人で……」

絶句するみんな。

その様子に黒樹君は苦笑して、

「……………皆さんが戦っている混乱を利用すれば、どうにか出来るかと思つてましたから……………そもそも、星波町奪還は三つの事をするだけ奪還は完了しますからね」

「三つ？」

黒樹君の言葉に春子さんは小首を傾げる。

「……………『三島忠人の捕縛』・『星波町と星波学園の放送施設奪還』・『携帯音楽プレイヤーで個別に催眠魔法を掛けられている者の解放』の三つです……………それぐらいなら、上手くやれば何とかなると思つてた訳です」

確かにそう言葉にすれば簡単な感じがしないわけでもないけど……………どうなんだろう？言うほど簡単かな？相手は武風の委員長でもある人だし……………

「……………まあ、かなり危険な賭けになったでしょうから……………正直、皆さんの様な味方が出来て、ホツとしている所です」

「まあまあ、嬉しい事を言ってくれるじゃないの……………ん〜でも再び小首を傾げ、

「かなり危険つて？頂喜武蔵との戦いは、逃げている最中だったから、所々しか見れなかつたけど……………今の夜衣斗ちゃんなら、サブアント達を出しまくれれば余裕なんじゃない？」

首を傾げる春子さんに、黒樹君は躊躇しつゝ、

「……………多分なんですけど、意志力の代わりに魔力を武霊の糧とした場合……………いや、魔力じゃなくて、膨大な魔力供給が問題なのかもしれません……………どうも武霊は『壊れる』みたいなんですよ」

武霊が……………壊れる？

「武霊が壊れるつて……………はぐれ化じゃなくて？」

「……………あれは、いうなれば『武霊使い側が壊れた事によって起るはぐれ化』です。ですが、さきほど頂喜武蔵の身に起きたのは、その逆と言えるはぐれ化だったと思われます……………戦いの最後の方

は見えてないですね？」

黒樹君の問いに、春子さんは頷く。

「……………俺が目撃した……………便宜上『逆はぐれ化』とでもいいましようか？……………その逆はぐれ化は、レベル3の状態で武霊使いが意識を失い、その身体が少しずつ消えると言っ物でした……………多分、壊れ、自分を失った武霊が、自己保存の本能で自身の壊れた部分を補う為に、最も組成が近く、最も近くにある自身の武霊使いの魂を喰らってしまう事による現象なのでしょう」

「あゝその現象なら、他の連中にも起きてたよ」

不意にそれまで黙って……………何処から取り出しのか（多分、自分の退魔士能力で取ってきたんだろっけど……………）ハンディカメラで黒樹君を撮っていた芽印がそんな事を言った。

「……………他の連中？」

黒樹君の問いに、芽印は少し考える仕草をして、何かを思い出したのか、黒樹君に近付き持っていたハンディカメラを操作して液晶画面を見せた。

液晶画面で何を見たのか、黒樹君は口元を手で押さえ、顔を地面に向け、暫く固まる。

その姿は考えている様にも見えるし、何かに耐えているかのように見える。

そして、少しして大きなため息を吐き、オウキからリフレクシオンサーバントとスカウトサーバントを出して、

「芽印さん。もう一度今の映像を、こいつに見せながら再生してくれませんか？」

「はいはい。了解」

黒樹君の指示通りに芽印がハンディカメラの液晶をスカウトサーバントに向けて映像を再生すると、リフレクシオンサーバントがその映像を黒樹君の上あたりに大きくして映し出した。

そこに映し出された映像は、芽印が逃げている時に撮影した映像なのか、大きく揺れている上に、時々いきなり場面が変わっていた。

だけど、その全ては、半透明の巨大な武霊達の姿であり………そして、その中にいるその武霊の武霊使いの姿。上手く隠られる場所でも見付けたのか、不意に映像の揺れが止まり、映像が拡大され………みんなが息を飲む。

拡大された映像には、ほぼ首だけになった武霊使いが映り、その消えている部分が瞬く間に広がり、終には消滅してしまう。その隣の武霊も、その隣の武霊も、全部、同じ様に………

黒樹君の様子を反射的に見てしまう。

黒樹君は、命を奪う事も、奪わせる事も酷く恐れている様だった。だから、何のかんの言いながら、黒樹君の前では、結局は誰も殺していないし、誰も殺させていない。

それは『命の重み』をちゃんと分かっているからで………だから、例え相手がどうしようもない連中だったとしても、敵だったとしても、救えなかった命がある事を知れば………きっと………

黒樹君はリフレクションサーバントが映し出す映像を無言で見上げていた。

表面上は変化はない様に見える。

……… だけど……… その両手は強く、強く握られていた。

……… 黒樹君……… あなたは優し過ぎるよ………

夜衣斗

頭の中がぐるぐる回っていた。

相手はひよりさんに……酷い事をした連中だ。

同情の余地はない。

自業自得。

因果応報。

そんな言葉が思い浮かぶ。

そもそも、死んで喜ぶ人はいても、生きていて喜ぶ人はいない様な奴らだ。

……だが、それでも……どうしても……色んな感情が噴き出してくる。

その感情を俺は理解したくなくて、両手を強く、強く握った。

(夜衣斗……)

美魅の心配そうな声に、俺は苦笑した。

……何なんだろうな……そんな事を思う必要はないって思っ
てても、色んな感情が噴き出してくる。

(夜衣斗は優しいだわよ)

……優しいね……これは優しさなんだろうか？……

……いや、何であろうと、今は切り替えるべきだ……今は、
こんな事に思いを煩わせている場合じゃない。

俺は大きく深呼吸して、

「……彼らと頂喜武蔵がこうなったのは、状況から考えて、同
じ原因……多分、堕ち人達がばら撒いている武霊使い強化薬が原
因でしょう」

「ん……つまり、武霊使い強化薬は、使用者に魔力を与える薬
って事？」

春子さんのその問いに、俺は首を横に振り、

「……………正確には、使用者の魂に強制的に魔力孔を開かせ、魔力を流し続ける薬だと思われませう」

「魔力孔？……………じゃあ、薬を打った武霊使いが強化されるのは、強制的に開かされた魔力孔から流れ続ける魔力によって引き起こされるって事？」

「……………もちろん、それだけではないでしょうが……………少なくとも魔力孔を開かせているのは、頂喜武蔵の心の中で確認しましたから、それは間違いありません。そして、流し続けられる魔力により、武霊は……………多分、容量限界になり、壊れる……………頂喜武蔵の心の中で、頂喜武蔵の武霊がひび割れ壊れている様子も、魔力が武霊に流し込まれている様子も確認しましたから、この予想で間違いはないと思います」

「そう……………ん？それを確認したって事は……………」

「……………ええ、壊れた武霊と魔力孔を開かせている武霊使い強化薬の……………なんでしょうね？象徴、化身？……………みたいなのを倒し、頂喜武蔵を……………結果的には、助けました」

「そう……………よく頑張ったわね。夜衣斗ちゃん。えらいえらい」

「そう言って頭を撫でる春子さん。」

……………また頭を撫でられた……………というか、こんなみんなの前で、そんな子供みたいな扱いを……………ん？……………そう言えば……………

「……………ところで、その頂喜武蔵ともう一人が、意識を失った状態でトンネルの中にいたと思うんですが……………」

「周りを改めて見回すが、それらしき姿が見当たらない。」

「俺の問いに首を傾げた春子さんは、芽印さんを見る。」

「見られた芽印さんは、困った顔になり、

「……………ん〜と……………実は……………私の能力で一度に運べる人数は、二人が限度なの。つで、夜衣斗君ともちゃんを運んで、残った二人を回収しようと戻った時には……………」

「……………いなかったと？」

「……………そうなんだよね〜」

と言つてあはあは笑う芽印さん。

……笑い事か？……ん……三島忠人か？……いや、
違つたらな……行動を起こしたタイミングからして、三島忠人は
鬼走人骸との一件を全て見ていたはずだ。だとすると、頂喜武蔵や
……ミラーマンの武霊使いが武霊を失っている。もしくは役に立た
ない事を知っているはず……だとすると……堕ち人に回収
されている可能性が高いか。少なくとも、頂喜武蔵は、堕ち人の実
験対象だつたらうし、その近くに全く関係ないのが倒れていたの
なら、ついでか、誤認しない為かで連れて行くか？……まあ、何
にせよ。同時になくなつたのは間違いないだらうし……なら、
殺されている可能性は低いだらうな……武霊は魂に、精神に寄生
する存在であるなら、解析するなりなんなりするのに生かしている
可能性が高い……まあ、武霊を保管する何かがあるなら話は別だ
が……ん……それがあつたら、殺して奪い取つた方が攫つより簡単か
？……だが、それが大掛かりな装置だつた場合、攫つた後に……
……いや、大掛かりな装置があるなら、鯉の会が気付かないのは……
……

「おゝい夜衣斗ちゃん」

気が付くと目の前に春子さんの顔があり、俺は思わずびくつとあ
りがちな反応をしてしまった。

「攫われた連中の事を心配するのはいいけど、それは、いくら考
えてもしょうがない事よ」

と優しく微笑んで言われた。

「……まあ、それはそうでしょうが」

「それに、私も生かして研究説で間違いないと思うわよ？」

「……だといんですけどね……ん？」

俺、今の考えを喋つてたか？

「……ぶつぶつ考えを喋つてたわよ」

！？

飛矢折

黒樹君が自分の考えを無意識の内に口に行っている事を指摘され動揺している。

「……知らなかったんだ……まあ、聞いた話だと、黒樹君は今まで一人でいる事が多かったみたいだし、今まで癖が出るほど周りを意識せずに考えに集中している状況じゃなかったものね……あんな癖があるなんて、気付かないのは仕方がない事かな？」

黒樹君は恥ずかしさを誤魔化す為か、一回咳払いして、
「……とにかく、大量の魔力を武霊が使い続けると、武霊は壊れる可能性が高いんです」

「要するに、オウキもいつか壊れる可能性があるって事？」

その春子さんの言葉に、ほとんど全員の視線が黒樹君の斜め後ろに立っていたオウキに集まり、その視線に気圧されたのか、オウキが動揺した様に周りを見回す。

「……なんだかオウキが幼く見えて……違和感を感じる……考えて見れば、あのオウキはあくまで武装守護霊であって、黒樹君が考えるオウキ自体じゃないんだよね……」

じろじろとオウキを一通り見た春子さんは、

「……どこも異常がなさそうだけど？」

「……確かに……そんなに頻繁に見ていた訳じゃないけど……外見上は、いつものオウキに見える。」

黒樹君の言う様に大量の魔力で武霊が壊れるなら、何らかの兆候が以前の戦いとか、さっきの戦いとかで出ても……その逆はぐれ化が起きてもおかしくなかったじゃ……

オウキに視線が集まる中、黒樹君は少し考えて、

「……オウキが今まで逆はぐれ化を起こさなかった理由は……多分ですが、三つ思い付きます……一つは、『魔力孔の封印が

さつきまで在った事により、魔力が少量しか出ていなかった為」「
「うん。まあ、それは確かにそうでしょうね……………そう言えば、
何で封印が解けたのかしらね？そう簡単に壊れる様な封印じゃな
ったはずなんだけど……………」
その何となしの春子さんの疑問に、黒樹君は困った雰囲気になっ
た。

言っつていいものか、判断に困っている様にも見える。
ちよつと間を置いて、

「……………まあ、死後の世界を見たからじゃないですか？」
と、子声でとんでもない事を口にした。

「……………夜衣斗ちゃん？」
流石の春子さんも引きつった顔で聞き返す。

「……………死に掛けたんですよ」
「巴ちゃんに倒される前に？」

「……………ええ」
春子さんの発言に、黒樹君が一瞬こつちを見て、頷いた。
気遣つて……………くれたのかな？

でも……………やっぱり……………殺し掛けてたんだ……………あたしは……………
操られていたとは言え、黒樹君になんて事を……………

(生きてんだからいいじゃねえか)

……………そう言う問題じゃないでしょ？

(そう言う問題だろ?)

……………あのね……………

あたしが瞬輝丸の考えに呆れに近い困惑を抱いている間も、黒樹
君の話は続いていて……………

「……………つで、その時に、三途の川みたいな所や、自分の魔力
孔を見たんですよ……………多分、それが切つ掛けで魔力孔の封印が解
けたんじゃないんですか？……………よく分かりませんが、その時には
魔力孔にそれらしき物はなかったですから……………」

「……………そう……………まあ、確かに、死に掛ける事によつて魔法や魔力

を得る人達はいるから……………それでより魔力孔が広がったのかもね……………それで、二つ目は？」

「……………二つ目は、『二体目の武霊・キバが現れた為、俺の魔力が上手く分散された為』」

キバ？……………確か、さつき黒樹君が夜衣花ちゃんを本物か確かめる為に言っていた名前だよ……………

「ふん。さつきも聞いたけど、それがあのお馬さんの名前なわけね……………」

馬？

「ねえ夜衣斗ちゃん。今度でいいからあのバイク形態に乗せてくれない？」

バイク？

「変形機構っていいわよねえ」

変形？……………キバってどんな武霊なんだろう？……………本当に黒

樹君はよく考えてると言うか……………

「……………っで、三つ目なんです……………オウキ……………と言うより、守護機騎シリーズの動力源の設定のおかげでしょうね」

「動力源の設定？」

「……………ええ、オウキをはじめとする守護機騎シリーズにはライオンハート機関と言う……………『契約者の意志力で動作する特殊な動力源が搭載されている設定』なんです」

意志力で動く動力源？……………何だか武霊みたいな設定ね……………

「これは、動力源としての機能以外に、意志力を別のエネルギーに変換する機能や、サーバントなどを作り出すナノマシンを無から創り出す機能もあったりして……………意志力をかなり消費する……………と言う設定なわけです。だから、意志力が魔力に切り替わっても、根本的に同じものであるなら……………その消費の多さと、元からの意志力を使うと言う設定から……………多分ですが……………ある程度大量の魔力に対しての耐性がオウキにはあるんでしょう」

なんだか……………

「武霊になる為に作られた様な設定ね」

春子さんも同じ事を思ったのか、ほぼあたしも思った事と同じ事を口にした。

「……………確かに……………少し都合が良過ぎますね……………」

今度の黒樹君のつぶやきは、聴力を鍛えているあたしが何とか聞き取れるぐらいの声だった。

?……………なんか引つ掛かるつぶやきだったけど……………何が引つ掛かってるのか、あたしにはよく分からなかった。

夜衣斗

都合よさは……特にオウキに関しての都合の良さは、前々から気になっていた。

春子さんの言う様に、オウキの設定は、ある種の世にありふれた設定を多用しているとはいえ、まるで武装守護霊にする為に考えられたように感じられる。

ナノマシンプラットシステム。

簡易格納庫システム。

サーバントシステム。

オーバードライブシステム。

そして、それら中核のライオンハート機関。

……考え過ぎと言えば考えすだと言えるが……俺には運命を変えられる選択と言うのを、『誰かに』与えられたと事実がある。

その誰かは未だに思い出せないが……記憶が封印されているって話だったか……その封印されている記憶が、無意識の内に武霊にするのに最適なイメージを創り出させていたと想定するなら……俺に運命を変えられる選択を与えたって奴は……武装守護霊に對して何らかの知識・関わりを持っている可能性が高いと言う事にならないだろうか？

武霊の実験が始まったのが十年前だとするなら、当然、その準備はそれ以前に行われていただろうし……堕ち人の関係者なのだろうか……そう言えば、最後の敵こと日向魁人は、俺の他に運命を変えられた者は、日向自身も含めて七人いるって言ってたな……ん？七人？……つまり、裏切りの七人の魔法使い……かな……なら、運命を変えたって奴は……七人の師匠・シエルトン＝シルベリア？……その可能性が高……くはないな……よくよく考えて見れば、シエルトンは二十年前に殺されてるって話だし

「ん〜？……ん〜まあ、今考えても仕方がないか……
……どうも直ぐに思考が脱線するな……しかも、気を付けてない
と考えている事を口に出してしまつてみたいだし……まあ、今は流
石に気を付けていたが……」

「……とにかく、いくら他の武霊より逆はぐれ化が起こり難い
とは言え、『同じ武霊』であるなら、魔力で強引に使い続ければ……
……いずれは逆はぐれ化を起こす可能性があります」

俺の予測に、この場が静まり返る。

「……大分俺を……いや、オウキを頼りにしていたんだろう……
……まあ、それだけオウキは強力だって事だよ……そう思うと
自嘲気味に苦笑するしかない。」

「ん〜でもさ」

重苦しい沈黙を明るくする為か、春子さんは笑顔で、

「要は気を付ければいいって事よね？」

気を付ければって……

「……前例がないんです。どこまでが限界で、どう気を付け
ればいいのか……」

「それでも一人で戦う覚悟を決めていたんでしょ？」

……

「……まあ、場合によっては」

「なら、私達がサポートすれば大丈夫大丈夫」

「気楽に言ってくれる……逆はぐれ化を起こして……死ぬの
は俺だつて言うのに……いや、だから気楽に言ってくれるのか
？……なんであれ、
俺はため息を吐き、

「……星波町奪還には、オウキとキバの力は不可欠です。です
から、最悪の状況になった時を想定して……一つ、対抗策を考え
ています」

「まあ、『出来れば使いたくない手段』ではあるが……
「さすが夜衣斗ちゃん。っで、どんな対抗策？」

「……………それを含めて、皆さんの能力を知る必要があるのでは……………」

「分かったわ。……………でも、能力って言うのは、退魔士能力の事？」
春子さんの問いに、俺は首を横に振り、

「勿論、その事とも後で聞きますが、俺が今聞きたいのは、それ以外の普通の人間以上に出来る事をです」

「普通の人間以上に出来る事ね……………ん〜そうね……………各退魔士能力を介して魔力の存在を感知出来るとか、幽霊を見えるとか？」

幽霊？……………なんか今の状況とあまり関係なさそうな話が出てきたな……………まあ、何が役に立つかわからないから、一応詳細は聞いて置くか……………」

「……………武霊使いが具現化していない武霊を見える様になるのと同じ様なものと考えればいいですか？」

「そうね。そんな感じかな？……………でも、この辺りの幽霊は、はぐれに食べられちゃってるのか、全くいないのよねえ〜。だから、武霊使いが幽霊を見れるか、確認しようがないけど、もしかしたら武霊使いも幽霊が見えるかもね」

幽霊がないね……………もしかして……………いや、そう考えるのはまだ早計か……………とりあえず、

「……………そもそも幽霊と言う存在は、退魔士はどう認識しているんです？」

「一般的な考えとそう変わらないわよ？肉体を失った魂？そんな感じ」

……………と言う事は、

「……………根源意志力・魂・魔力以外にも、他の……………意志力物質？」
適当な言葉だったが、どうやらあってるらしく、春子さんが頷いた。

「……………が存在すると言う事ですか……………」

「そうね。あとは『霊力』と『気』とかがあるわよ」

「……………それらは魔力と同質と言うわけじゃないんですね」

「そうよ……………そもそも、魔力は『広がった魔力孔から流れ込んでくる余剰な根源意志力で構成された、世界の理を破壊し、改変する意志力物質』で、霊力は『魂から生じる魂と精神を保護し、増幅させる意志力物質』で、気は『魂から生じる世界の理を維持し、増幅させる意志力物質』って言われているわ。つで、それぞれ性質が違って、反発し合うものだから、『魂の中に魔力』『魂の周りに霊力』『肉体に気』って感じにそれぞれある場所も違うのよ」

「……………つで、それぞれを扱える者達がいる……………魔力を扱う退魔士が幽霊を見えると言う事は、そのどれかを認識出来ているか、扱えるかしていれば他の意志力物質も認識できるって事ですか……………」

「そう言う事。ちなみに、私達は魔法使いじゃないから、魔力は扱えないわよ」

「……………なるほど……………」

「……………あくまでその身の魔法を使えるだけであって、魔力そのものは扱えない……………だから、退魔士能力を通してなんですわ」

「まあ、人によるけどね。ちなみに、前衛組は大体気も扱えるわよ」

「気を？……………と言う事は、」

「……………気が世界の理を維持し、増幅するものなら……………身体能力が普通の人より優れてるって事ですか？」

「そうよ……………まあ、増幅されるとは言っても、巴ちゃんには負けるけどね」

「へ？飛矢折さん？」

「唐突に飛矢折さんの名前が上がリ、思わず飛矢折さんを見ると、飛矢折さんも驚いている様だった。」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 42

飛矢折

飛矢折家には、『気』と言う概念がある。

もつとも、一般的な気概念とは若干違つてて……飛矢折家が元々退魔士の家系であるなら、多分、退魔士達と同じ概念なんだろうな……って思つてたら、やっぱり同じだったみたい……それに、この場にいる黒樹君・西島さん親子以外の気が、『気を操れる者独特の整い方をしている』からおかしいと思つてたのよね……

曾お祖父ちゃん曰く、気とは、魂から生じる意志力の一種。

この世の理を維持し、強化する意志力である為、魂を持つ存在は、その肉体と魂の維持・強化に無意識の内に使われている。

だから、それを操る事が出来れば常人以上の身体能力を得る事が出来て……あたしもそれを利用していたので、女だてらに強いんだけど……あたしの場合は意図的に修行して身に付けた技術。でも、たまに武術家の中にはそれを意図せず身に付ける者もいて……朝日部長や、高木先生もその類の人みたいで、退魔士の人達同様に整つた気を持つていた。

だからあの二人はあんなに強いんだらうけど……星波学園には妙に気を操れる人が多いなあ……って前々から思つてたんだよね……

まあ、普段から見れる様に意識していると、気脈とかを見ちゃつて眩しいんだよね……だから、気を扱える人がこんなにいるなんて、気付かなかつた。

……それにしても……気を操れる者は、意識すれば、その気自体を認識し、感じる事が出来る。って曾お祖父ちゃんに教わつたけど……魔力とか、霊力とかも見れるって話は聞いていなかったな……もしかしたら、今まで魔力とか霊力とかを気と誤認していたかも……

そんな事を思っていると、唐突にあたしの名前が呼ばれて、ちょっとびつくりした。

「……………なるほど、飛矢折さんが冗談みたいに強いのは気のおかげですか……………と言う事は、飛矢折さんの何割か減ぐらいみんな動けるって事ですか……………」

え〜と……………

「私でも本気になれば、建物の二階ぐらいの簡単に飛び乗れるし、スクーターぐらいだったら走って追い付けるわよ。ねえ、巴ちゃん」
何だか自慢げに出来る事を言っつて、あたしに同意を求める春子さん。

……………そりゃ、やろうと思えば出来るだろうけど……………そう言う人並み外れた身体能力は人前で見せるなって、曾お祖父ちゃんに厳しく言われているから、やった事は……………修業中以外やった事は無い。ちらつと黒樹君を見るけど、

「……………今更、その程度は驚きませんよ」

とあたしの視線の意味を理解したのか、そう言ってくれたので、ちよつとほつとした。

……………まあ、本当に今更つて気がしないでもないけどね……………

「……………大体分かりました。後は、この場の全員の名前・退魔士能力・武霊を持っているなら武霊の事を教えて欲しいんですが……………」

……………
そこまで言っつて、黒樹君は少し考えて、

「……………先に言っつておきますが……………俺は、『可能なら三島忠人を、意志力枯渇をさせないで、生きたまま捕縛するべき』だと考えています」

そう言っつと、周りが少しざわついた。

「夜衣斗さん。わたくし達も『出来れば』そうしたいと思っつていますが」

統合生徒会長の言葉に、黒樹君はため息を吐き、そのため息に統合生徒会長は言葉を詰まらせた。

「……………出来ればですか……………」

「……………夜衣斗さん」

黒樹君のつぶやきに、何と答えていいか分からない感じの統合生徒会長。

「……………一つ聞きたいんですが、この中に『人殺しを経験した事がある人』はいますか？」

黒樹君のその問いに、周りはざわつくけど、肯定する人はいない。「わたくし達……………鯉の会の中に人殺しを経験した者はいないと思いますわ……………もっとも、正式な退魔士達は……………その限りじゃないでしょうけど……………」

そうおずおずと言う統合生徒会長に、黒樹君は少し安心した様に、軽く息を吐いた。

「……………正直、人殺しと一緒に行動出来るほど、俺は肝が据わってませんので……………ですから、三島忠人を殺して解決する方向はなしでお願いします」

「……………それは構いませんが……………ですが……………あの能力にそれが可能なのですか？……………その選択肢をなくせば、わたくし達は圧倒的に不利になり……………いたずらに被害を拡大する恐れがありますわ」

黒樹君の宣言に、統合生徒会長は遠慮がちに反論する。

「……………そうですね。確かに、殺害と言う方法をなくせば、こちらに被害が出る可能性も高くなるでしょうね」

「なら、何故ですか？……………何もわたくし達は、黒樹様に手を汚させるつもりはありませんわ」

「……………そう言う問題じゃないんですが……………」

黒樹君ため息一つ。

……………確かに、嫌な覚悟よね……………

「……………今までの一連の事件と状況から考えて、『三島忠人も堕ち人の実験対象である可能性が高い』でしょう。なら、少しでも堕ち人に近づく為に、三島忠人から堕ち人の情報を聞き出すべきです」

「それはそうかもしれませんが……」

「……さつきも言いましたが、堕ち人の研究と実験はある程度成功しつつある可能性が高いんです。それはつまり、『いつ武霊の兵器化が完了してもおかしくない』と言う事です」

黒樹君の指摘に、周囲が静かになる。

「……それが完了する事で、どうなるか……まあ、どうなるにせよ。最悪の事態でしょう……ですから、少しでも堕ち人に関する情報を得られる可能性があるなら……無理をするべきでしょう。勿論、俺が言い出した事ですし、意志力枯渇させないで三島忠人を捕まえるには、美魅の力を借りる必要があります。ですから……」

ちよつと躊躇って、

「……俺が三島忠人と直接戦います」

「夜衣斗さん……」

心配そうに、申し訳なさそうな統合生徒会長に、黒樹君は苦笑して、

「……まあ、そうは言っても、操られた人達を何とかしなくちゃ三島忠人まで辿り着けないでしょうから、その人達はみなさんにお願したいんです」

「それは構いませんが……わたくし達の力は……」

「……大丈夫です。『使える状況を作りますから』」

「……使える状況を作る？……どうやって？」

みんなも同じ事を思ったのか、周囲がざわつく。

「……詳細は、皆さんの事を聞いてから教えますので……」

内ポケットから小さなノート……黒樹君がたまに何かを書いてる……アイデアノートだったかな？……とシャーペンを取り出して、

「……端から、一人ずつお願いします」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 43

夜衣斗

全員の自己紹介を聞き終わると、夕食の準備も丁度終わったこの事なので、夕食の準備もしていたメンバーの自己紹介を聞いて、遅めの夕食を食べる事にした。

みんなが思い思いの仲間と場所で食べる中、俺は一人、自己紹介で得た情報を書いたミニノートを見ながら考えを巡らせていた。

俺の考え一つで、この場の全員の行動が決まり、場合によっては生死を掛ける事になる。

そう改めて考えると、胃がキリキリしてきて、食欲も湧かない……ので、俺は用意された夕食を受け取りに行かなかった。

引き受けるんじゃないかなかつたと後悔している自分がどこかにいるの
がありありと分かるが、だからと言ってもう逃げれる状況じゃない。
覚悟は決めている……いや……決めているつもりではいる……
……だが、今までとは様々な意味で違う今回は……果たして
乗り切れるだろうか？

そんな不安ばかりが頭に浮かび、上手く考えが纏まらなくなってきた。

「黒樹君」

飛矢折さんの声に、負の思考螺旋に陥っていた俺は、はっと我に返り、ミニノートから顔を上げた。

「……大丈夫？」

そう心配そうに微笑んでくれる飛矢折さんに、俺は何故だか少し安心感を覚えた。

「黒樹君、何も貰ってきてないでしょ？何かお腹に入れておいた方がいいよ」

飛矢折さんはそう言って、俺におにぎりやおかずが沢山入った手提げバツクを広げて差し出してくれた。

「……………ありがとうございます」

正直、食べたわけではないが……………飛矢折さんの行為を無下にするわけにはいかないので、バックと一緒に入っていたジューズのペットボトルと一緒にサランラップに包まれたおにぎりを一個貰った。

俺がおにぎりを受け取った事を確認した飛矢折さんは、俺の隣に少し距離を置いて座り、二人の間に手提げバックを置いて、おにぎりを食べ始める。

その食べるスピードが……………ちよつと女の子とは思えない早さで、
(ちよつとだわよ?)

美魅の突っ込みに、俺は苦笑してしまう。

その苦笑を飛矢折さんに気付かれ、飛矢折さんは照れ笑いを浮かべ、

「お昼から何も食べてなかったから、お腹が空いちやっつて……………」

「……………そうですね……………」

俺は苦笑しつつ、おにぎりのサランラップを取っておにぎりを食べ……………? ……なんか、おにぎりの具に今までおにぎりで食べた事がない様な食感が……………てか、甘!? これチヨコレートだ!? 何でおにぎりにチヨコレートが!?

おにぎりにチヨコレートが入っていた事に驚いていると、台所があると言う通路の方から西島さゆりさんが大慌てで走ってきて、

「っごーごめんなさい! ひよりがおにぎりにチヨコレートを入れちゃったみたいなの! もう誰か食べちゃった!？」

さゆりさんの問いに食事をしているほとんどの人が顔を見合わせ
ていて…………… どうやら俺以外に被害者はいない様だった……………

「はぁ…………… いや? 案外いけるか?……………ん……………」

さゆりさんに何度も謝られた後、中身を確認しつつおにぎりを若干無理して二三個食べ、改めてミニノートに視線を移した。

…………… 改めて見ると…………… 何と言っか……………

「…………… 退魔士の人達って、个性的な人達が多いよね」

不意に飛矢折さんが、俺が思っていた事と同じ事を口にした。

その手にはまだおにぎりとおかずが握られているけど……もう十個ぐらい食っていた様な……とりあえず気にしない事にして、

「……普通の人とは違う力を持っているんです。多少は個性が強くて……まあ、自然なことでしょう」

「自然かな？……まあ、あたしも黒樹君も人の事を言えないものね……」

……まあ、確かに……

???

「、『黒樹 春子』」

夜衣斗の呼び掛けに、夜衣斗の一番近くにいた春子が手を挙げた。

「はいはい。まずは私からね」

春子の無駄ににこやかな笑みに、夜衣斗はため息を吐き、

「……いまさら春子さんの自己紹介を聞いても……」

「なにおー！こんな美人で若い叔母さんの情報だぞお。男子なら

喉から手が出るほど欲しいでしょうが！と言っか、おばさん言っな

！」

「……自分で言ったんでしょ……第一、そう言う情報は
いりませんよ……」

再びため息を吐いた夜衣斗に、春子はにやりと笑い。

「……ほづ？そう言う情報？……んふふ。どう言う情報が聞
けると思っただの？」

「……」

「痛い！痛い！無言でチョップしないでっ」

夜衣斗

叔母。少女マンガ家（この点だけは尊敬出来るな……）。鯉の
会星波支部一応のリーダーらしい。だらしなく、家事能力ゼロの自

立していない大人の女性………つてこの間素直に言ったら、「姉さんには言わないでえ〜」と泣き付かれた………しょうもない人だが、俺もある意味人の事を言えないので………場合によっては自分の将来を見ている様な………はあ………

うちの実家が退魔士で、しかも日本五大退魔士家系の一つだなんて言われてもいまいちピンとこないが………とにかく魔法に対して天敵と言えるぐらい強い家系………らしい………まあ、確かに退魔士能力から考えると………天敵と言っても過言じゃないか………

退魔士能力は、『黒き大樹』

魂の中に寄生する魔法の樹。魔力を喰らって成長する性質な為、根は魔力を吸い、幹は魔力を弾き、枝は魔力を斬り、葉は魔力を散らすとの事。さらに、黒樹家の者は一人最低一本、黒き大樹の枝を黒き大樹に生やしたまま加工した黒樹刀くろきかたなを持っているらしく、その刀はいかなる魔物であろうと切れ味を任意で変えて斬る事が出来るらしい。つで、春子さんも例外なく持つているらしいが………なんでも春子さんの黒き大樹は非常に貧弱らしいので、春子さんは分家を含めて黒き大樹使いとして最弱との事。その影響で黒樹刀も小太刀ぐらいにしか作れなかつたとか………まあ、その代わりなのか何なのか、最弱の黒き大樹持ちである妹を心配した俺の母さんが、春子さんを鬼の様に鍛えたらしく、おかげで純粋な体術だけならここにいるメンバー（飛矢折さんを除く）で敵う者はいないらしい………だから母さんを恐れているわけか………まあ、そんな心配をしていた人の子供に、俺みたいな種無しが生まれたと言うのは………何の皮肉何だか………

武装守護霊は黒き大樹の影響でなし。

完全な接近戦タイプか？………前衛戦闘組だろうな………

????

「………そう言えば、日本五大退魔士家系って黒樹家は呼ばれているんですよね」

「そうよ」

「……………何でそう呼ばれているんです?」

「何でって言われても……………ん〜そうね……………それぞれ家系ごとに言われている理由は違うけど……………一つ共通しているのは、数が多
いって事かな?」

「……………つまり、日本の退魔士達の中で最も勢力が強い五家系つ
て事ですか……………」

「そうよ。まあ、他の退魔士家系は、大体五家の分家だったり、
一人から十数人ぐらいしかいないって、所もあるらしいからね〜
……………ちなみに、純粹な戦闘力とか、何かに特化しているとかで考
えると、五大退魔士家系より強い所は結構あるわよ」

「……………要は総合力で考えられているわけですか……………黒樹家に、
操形家に、射眼家……………残り二つの家系はなんて言うんですか?」

「鬼角家。口導家よ。退魔士能力は……………直接聞いた方が早いわ
よ。ここには五大退魔士家系の血を引く子達が全員いるかね」

「……………なるほど……………」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 44

?????

二、『早見はやみ 芽印めいん』

「はい。次はマスメディア部エース兼部長早見芽印ちゃんです」

そう言って立ち上がった芽印に、ほぼ全員からうんざりした視線が向けられ、それで芽印がどう言う人物か大体理解した夜衣斗はミニノートに何事かを書きながら、ぽそつと

「……………春子さんと同種と」

「つて、聞き捨てならない事を言った！」

「何言っているの夜衣斗ちゃん！」

「こんな駄目な人と」「こんな駄目な子と」

「……………一緒にしないで！」

それぞれ抗議の声を上げた芽印と春子の声が重なり、顔を見合わせる二人。

二人の様子に夜衣斗だけでなく、結構な人がため息を吐いた。

夜衣斗

星波学園高等部二年。マスメディア部部长。髪を後頭部でまとめた……………シニヨンヘアだったか？が特徴の可愛いよりカッコいい感じなんだが……………見た目に反して中身が……………まあ、とにかく残念な感じの女性。

マスメディア部は、学園内で新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどのメディアを製作している部活。結構な人数と人気があるらしく、名の通り色々な事をやっているが、主なのは報道なので、俺が星波学園に転校してからよく取材の申し込みを受けている……………まあ、全部断っているんだが……………。

早見家は代々退魔士の情報屋の様な事をやっている退魔士の家系らしく、情報収集能力は高いと……自称。実際にどれくらいの情報収集能力があるかは不明だが、退魔士能力は情報収集に向いていると言える。

退魔士能力は、『瞬またたきあゆの歩み』。

歩く事で自分が行った事がある・直接見た事がある場所に瞬時に移動出来る退魔士能力（一応走っても可能らしいが、それだと上手く移動先をイメージ出来ない為、転送事故を起こす可能性があるらしい）。また、発動条件である歩きが、瞬間移動距離に関わっていないらしく、長距離を移動する際は何歩か歩く必要があるらしい。その為、自分以外の存在も触れる事で一緒に瞬間移動出来るが、意識を失っている人間や、重い物を持って移動するのが大変らしく、両手で持てる重さと距離（手が届く範囲）が限度だとの事。もっとも一緒に歩けるならかなりの人数と一緒に跳べるらしいから……今回は情報収集よりも、人の運搬を頼む事になりそうだな……

武装守護霊は、『Eカメラ』。

珍しい装備型武霊で、撮るとその対象が爆発する使えないカメラだそうだが……EはエクスポージョンのEか？……もしかして、某深夜アニメがイメージの基だったりするんだろうか？……いや、自身を形作るイメージなら間違いなく違うか……カメラは詳しくないんだよな……まあ、関係ない話だが……と言うか、装備型なら、武霊の意志はほとんどないんだっただよな……ふむ……使えるか？

????

「ねえねえ。ちょっと夜衣斗君にお願いがあるんだけど……」

「……取材ですか？」

「何で分かったの!？」

「……何でって、早見さんは」

「あ!芽印でいいわよ」

「……………芽印さんは、マスメディア部の部長なんですよ？……………
ここ一カ月、何度か取材させてくれて人が来ましたからね……………」
「そうそう。夜衣斗君、うちの部員の取材全部断ってるでしょ？
みんな困ってたわよ？」

「……………俺は取材を受ける様な人間じゃありませんから……………」
「それはこつちが決めることだって」

「……………」
「……………前々から気になってたんだけどさ、夜衣斗君って何
で喋る時いちいち間を開けるわけ？こつちとしても聞き難いし、喋
り難いよ？」

「……………口下手ですから、喋る前に一回その喋る言葉を考えてい
るんですよ」

「ふむふむ、なるほどなるほど」

「……………恥ずかしいですから書かないで下さいよ」

「……………うん。書かない書かない」

「……………流すのも、読むのも、見せるのも駄目ですよ」

「ツチ」

「……………」

「パフェとか奢るから、取材させてよぉー」

「……………嫌です」

「じゃあ、昼の学生ワイドショーにゲストとして出てよ」

「……………何がじゃあですか、ちっともじゃあじゃないでしょっ」

「私とデートでどう？」

「……………好きでもない女性とそう言う事は出来ませんよ」

「でも、デートした事ないでしょ？一回ぐらいは経験しておこう
よ」

「……………余計なお世話です」

「私って結構美人でしょ？」

「……………喋らなければ」

「もう。失礼ね！ぷんぷん！」

「……………」

「……………なんだったら……………って、ともちゃん。笑顔で殺気を向けないでくれる？」

「何の事？」

「えっと……………えっと……………きゃー助けて夜衣斗君」

「……………次の人お願いします」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 45

???

三、『心眼しんがん 優癒ゆういゆ』

「あの……さっきは心の中を勝手に見てすみませんでした」
そう言って頭を下げる優癒に、夜衣斗は首を横に振り、

「……気にしていませんよ」

「そうですね……ありがとうございます」

あからさまにほっとした様子の優癒に夜衣斗は苦笑した。

夜衣斗

星波学園中等部二年。ゴスロリ同好会所属……いくつも同好会があるのは面白いが、学校としてどうなんだろうか？……第一、どんな活動をしてるんだ？……まあ、とにかく、ゴスロリの格好をした可愛い女の子。

日本五大退魔士家系の一つ・射眼家の分家らしいが、有している退魔士能力のせいで退魔士の中でも孤立しがちで、その影響が基本的に引つ込み思案な子の様だ。話を聞いている時も、琴野さんの影に隠れながらだったから……まあ、琴野さんを慕っているのはよく分かる。

退魔士能力は『心眼しんがんの瞳ひとみ』。

視界に収めた対象が心を持った存在なら、その心の動きを視認する事が出来る退魔士能力。眼に瞳と言うネーミングセンスが引つ掛かるが……射眼家筋の退魔士能力は大体『眼の瞳』と名付けられているらしい……まあ、名前なんてどうでもいい話か……俺みたいな濃度の濃い魔力持ち以外の人間なら、その考えも読めるらしいので、早見さんと組ませるといいか？

武装守護霊は、『クマ二号』

到達具現化レベルは2。

逆鬼ごつこの時に見たテディベアの武霊。一号は何なのかって気がしないでもないが………テディベアの武霊なら、元となったテイベアが一号なのだろう。能力的には身体の硬化・軟化の mirashii が、それを使った肉弾戦は強力との事。更に言えば、彼女自身の退魔士能力と組み合わせれば、圧倒的な能力差がない限り負ける事はない武霊だと言えるかもしれない。

???

「……………一つ質問してもいいですか？」

「はい。なんですか？」

夜衣斗の改まった質問に小首を傾げる優癒。

「……………その格好に何か意味があります？」

「？」

質問の意味が分からないのか、更に首を傾げる優癒。

「……………いや、退魔士的に」

「特にないですわ。強いて言えば、私の趣味ですの」

何かを答えようとする優癒より早く、何故か琴野沙羅が答えた。

「可愛いですわよね？」

「……………」

夜衣斗が何か言う前に、若干迫力がある笑みを夜衣斗に向けてくる沙羅。

「可愛いですわよね？」

「……………ええ、まあ」

何だか訳が分からないまま同意してしまう夜衣斗。

そして、ある事を納得した。

星波学園には、部活や同好会に所属していれば、それに関した格好のみ学園内で着て生活していると言う生徒校則があり、夜衣斗は前々からそれに関して呆れ、誰が作ったのかと思っていたが……………（琴野さんのせいか……………てか、いいのか、統合生徒会長がそん

な事をして……職権乱用もいい所だよな……)
などと考えながら優癒を見ると、にこにここと沙羅を見ているので、
(まあ、どうでもいいか……)
と気にしない事にした。

???

四、『村崎 好美』

「……お久しぶりです」

「はい……お久しぶりです」

夜衣斗の挨拶に、挨拶し返す好美。

「……」

「……」

そして、互いに無言。

夜衣斗は好美の無感情・無表情に気圧され、好美は何も言われな
いから何も言わない。

何とも言えない沈黙の中、何となしに見詰め合ってしまう二人。

ふと、好美が視線をそらした。

その類は少し赤らんで見えなくもなく、妙な空気になる。

その様子に何人ががニヤニヤしだし、何人がが不機嫌そうになっ
たので、夜衣斗は若干慌てて、

「……えっと、ではどんな能力を持っているか教えてください」

夜衣斗

星波学園高等部一年。高等部生徒会副会長……転校初日に会っ
て以来、会ってなかったが……まさかこんな所で会うとは思いま
しなかった。琴野さんのパートナーらしく、表の学業・裏の鯉の会
の活動を全面的にサポートしている人らしい。無感情で無表情なメ
ガネ娘。

村崎家は小規模な退魔士家系らしいが……なんでも雪女の原型

になったかもしれない退魔士らしい……イメージ的には退治される側の原型になったかもしれないって事は……元々は魔物として認識されていた可能性もあるな……とは言っても、流石にあなたの先祖は魔物として認識されていましたか？って聞くのは失礼だよな……まあ、そもそも今は関係ない話だな……

退魔士能力は『凍り姫』

退魔士能力の中には、女性のみ、男性のみに受け継がれるタイプの退魔士能力もあるらしく、凍り姫はその女性版。名の通り、冷気を操る退魔士能力で、自分の身体のどこからでも冷気を任意の温度で出せるらしく、雪女の伝説とかで雪女が出来る事は大体出来るらしい。話によると、退魔士能力の影響で、雪の降る山の中でも昼寝出来るぐらい寒さに強いらしい。反面、暑さに物凄く弱いらしく、梅雨明けが戦々恐々だとか……流石に暑さで溶けるって事はないだろうが……何であれ、戦闘組か？

武装守護霊は、『雪歌』

雪女が基となってる武霊。どうも村崎さんは自分の家系が雪女の原型になったかもしれないと言う話が好きだったらしく、その為武霊まで雪女になってしまったらしい。雪女に雪女……まあ、相性は良さそうだよな……

???

「……ちょっと思ってたんですが……生徒会には鯉の会の人達が多かったりします？」

「そうですね……学校の重要役職には一人か二人づつ、教師にもそれなりの数います」

「……それはやっぱり、元々星波学園が退魔士達の学園だからですか？」

「いいえ。学内の状況を把握しやすい様に、なるべく役職に付く様に指示しているだけです」

「……そう言うのとは縁遠い生活をしていましたからよく分か

りませんが……なるうと思つてなれる物なんでしょうか？」

「……どうでしょう？……よく言われているのは、魔力や魔法を持っている者は、不思議な魅力を持つと言われていますから、それにも影響している可能性はあります」

「……まあ、魔力って言葉は元々そういう意味がありますしね……」

「……ですから、今の夜衣斗さんならなるうと思えば、どんな役職にも就けると思いますよ？」

「……… どんなんて言われても……」

「私個人としては、武装風紀の委員長になって貰いたいですが……」

………

「……… いやいや、それはちょっと」

「実力的にも、実績的にも申し分ないと思いますが？」

「……… そういう問題ではなく……」

「そうですね」

「……… えっと……… その、すみません」

「お気になさらず、断られる事はある程度予想してましたので」

「………」

「ですが、気が変わったらいつでも言ってください」

「……… いや……… まあ……… どうでしょうね？」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 46

????

五、『操形夜明』

「私は操形夜明ですわ黒樹様」

そう言つてスカート裾を上げて挨拶をするメイド服姿の夜明。

「……………操形？」

聞き覚えのある名字に前髪の後ろで眉を顰める夜衣斗。

「はい。私は操形 昼……………つまり、黒樹様のお父上の弟である操形家現当主の娘です」

「……………」

いきなりの従姉宣言に、驚きのあまり少し停止する夜衣斗。

「……………つまり、従姉と？」

驚きを引きずつたまま何とかそう口にする、夜明は笑顔で、

「はい」

と頷いた。

夜衣斗

星波学園高等部三年。メイド部部长……………逆鬼ごっこ以降度々会つてはいるが……………その度に執事部部长の人と鉢合わせていがみ合つてる印象がある。若干目付きが鋭く……………実は父さんの弟……………現操形家当主で、昼と言つ名前らしい……………なんか知らんが、俺の親の世代の名前が妙に単純だよ……………んゝまあ、そんなに意味はないと思うが……………とにかく、その娘らしく……………要するに従姉だそうだ……………従姉に様付けで呼ばれていたのか……………従姉も従姉でどう言つつもりなんだか……………いや、メイドのつもりか……………

操形家は日本五大退魔士家系の一つ。その為、退魔士となる枠も普通の家より多いらしく、何の苦勞もなく正式な退魔士になれる立

場にあつたらしいんだが……何を思ったのか、武装メイドと言う職業に憧れを抱き、武装メイドになる為にメイドの特訓(?)をしているらしい……最初、次期当主の座を実の兄に取られた事による反発かとも思ったが……どうもうちの妹の所にいるエレアさんに憧れて武装メイドになろうと決めたとかなんとか……

ちなみに武装メイドとは、正式な退魔士になれず、かつ女性である為に表の職業にもなかなか就けない退魔士家系の女性達が始めたものらしく、本来は好んでなる様なものじゃないとか……まあ、近年は操形さん……親類を名字で呼ぶのもなんだな……とりあえず心の中だけでも……夜明さんの様になり方もそれなりにいるらしいので……一概にそうとは言えないって事か？

退魔士能力は、『人形の王』ひとがたおう

人の形をした物に、自らの精神を移す事によりそれを自在に操る事の出来る退魔士能力。個人差がかなりある退魔士能力らしく、人によつては軍隊ぐらいの数の人形を地球の裏側からでも操れるものいれば、一体しか操れないが十メートル以上の人形まで操れる者もいるとか……つで、夜明さんは最大で人と同じぐらいの人形を五体ぐらい同時に操れるらしい……もつとも、実家に置いて来たと言う専用の人形がなければ、それほど戦闘能力が高い能力ではないらしいので……ん……

武装守護霊は、『ペルティア』

昔、犬耳メイドの漫画があつて、その主人公が基になっている模様。一応アニメ化をされた作品だった気がするが……一般的に人気になった記憶はないな……そもそも全体的にはんわかしたのん気な作品だったから、武霊向きなキャラじゃないよな……まあ、武霊化されているなら、ある程度は戦闘能力が付与されているだろうが……ふむ……

????

「そうそう。黒樹様は憶えてらっしゃらないかもしれませんが、

私と黒樹様は少しの間一緒に住んだ事があるんですよ？」

夜明の意外な話に再び前髪の後ろで眉を顰める夜衣斗。

「……………憶えがないんですが……………」

「無理もないですよ。小さい時の話ですし、私だってその時に父が撮った写真を見て何とか思い出せるぐらいですから」

「……………幼稚園に入る前は、よく引越していましたからね……………」

…まあ、そもそも俺は普遍的な記憶力が欠落していると言うか……………」

……………」

夜衣斗の言い訳の様な言葉に、夜明は苦笑した。

「あゝそれはうちの血ですね」

「……………操形家の？」

「操形家の人間って基本的にオタク気質ですから。好きな事しか憶えないですよ」

「……………」

夜衣斗は何とも言えず、溜め息を吐くしかなかった。

?????

六、『口導』くちどう 由雅ゆいが』

「……………口導……………と言う事は、五大退魔士家系の一つの」

夜衣斗の問いに頷く由雅。

「はい。私は口導家の人間です」

「しかも長男なんですよ」

不意に話に入ってきた夜明に、由雅は刺す様な視線を向ける。

「……………それが何か？」

「ええ、何でしょうね？」

由雅・夜明共に互いに微笑んでいるのだが、目は笑っていないわ、火花は散っているわ、夜衣斗はオロオロするしかなかった。

夜衣斗

星波学園高等部三年。執事部部长……逆鬼ごっこ以降夜明さんとワンセットで会っている印象があるが、別にクラスが一緒とか、付き合っているとかではないらしい。意図して会っていないって事は、それだけ二人は縁深いのかもしれないが……常にいがみ合っているのだから良い縁じゃないよな……

退魔士能力は、『まつろわせる言霊』

喋った内容を現実にするとしてもない能力。もっとも、あまりにも物理法則から外れた事を現実にしようとするとその分だけ意志力が消費され、最悪は意識を失ってしまうとの事。これは能力（魔法）に魂が喰われない様にする魂の防衛反応って話だが……ん〜そこから辺は武霊と同じか……っで、能力が高ければ高いほど実現出来る……らしいが、賢さんはまだ未覚醒な為、使えないとの事。もっとも、覚醒すれば、制御の効かない能力らしく、今の様に普通に喋る事も出来なくなるとか……本来は成人近くになると覚醒する退魔士能力らしいのだが、彼の妹はその覚醒がとんでもなく早い上に、歴代最強の力を持っていた為、本来なら彼が次期当主に選ばれるはずだったが、選ばれず、その妹が次期当主になってしまった。そして、その際に激しく反発した為、口導家の正式な退魔士にもなれなくなってしまうたとの事……その為、正式な退魔士になれるのになれない夜明さんが嫌いなんだそうだ。

執事部をやっているのは、武装メイドがメイドと言う言葉を使っている通りほとんど女性で構成された組織らしいので、退魔士からあぶれた男性の受け皿がない。だから口導さんは、その受け皿として武装執事を作ろうとしているとの事。本来あぶれた男性退魔士は一般社会に就職するのが通例だったらしいが、今はなかなか就職先が見付からないらしい。不景気の影響か、退魔士として育てられていた影響か……まあ、どこの社会も時代の変化と言うものには逆らえないんだろう。

ちなみに、武装執事は無いが、召喚執事と言う組織はあるらしく、夜衣花の所にもいるとか……召喚って事は異世界の執事って事か

?.....なんだかね.....

武装守護霊は、『神崎かんざき 雪雄ゆきお』

昔、超能力者物で執事物のライトノベルがあつて、そこに出てくる主人公が基になつていている模様。様々な金持ちのお嬢様がそれぞれ雇つた執事を戦わせて.....なんだつたけ?.....まあ、大分前に見た奴だから、良く憶えていないな.....とにかく、その主人公が基になつていているなら、念動力以外にも結構色々な超能力を使えたはず.....テレポートも使えたっけな?.....ふむ、だったら.....

???

「.....二人共.....まあ、なんです.....とりあえず今回だけでも仲良くやつてくれませんか?」

その夜衣斗の提案に、由雅・夜明の二人は互いに顔を見合わせ、

「私達は仲が悪いわけではありませんよ。そうですね操形さん」

「ええ、口導さん」

とにこやかに言う為、夜衣斗は溜め息を吐いた。

見た目上は確かに仲が良さそうだが、それ以外がどう見ても仲が悪そうに見える。

(まあ、俺がここでとやかく言ってどうにかなるなら、もっと前にどうにかなつてるよな.....)

そう思った夜衣斗は二人を放っておく事にした。

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 47

七、『池上綾子』

「池上綾子だ。一度会った事があるな？」

綾子の問いに夜衣斗は頷く。

「……………女性護身武術部の道場以来ですね……………」

「はん。お前は私が必要になる事はねえからな」

「……………まあ、保健室に厄介なる様な事は極力避けているつもりですからね」

「私としてはじゃんじゃん暴れてほしかったがな」

「……………暴れてって……………」

「そして、じゃんじゃん流血者が出てくれれば言う事なしだったさ」

「……………」

とても保健医とは思えない綾子の発言に、絶句するしかない夜衣斗だった。

夜衣斗

星波学園保健医の一人……………常に禁煙パイプを口に咥えている自称不良保健医の人。見る感じに不良って感じのギラギラした感じの人。流血が大好きらしく、その為に学校保健医になったふしがある……………逆鬼ごつこの時に会ったきりだが……………少し驚いたのが、春子さんと飲み友達らしく、たまに赤井さんのお父さんとも飲んでるとか……………どこでどう言う関係があるかなんてわかったもんじゃねえな……………」

意外な人が意外な才能を持っていたり、イメージと違う特技を持っていたりするが……………この人はある意味そのいい例。なんせ人魚伝説の原型になったかもしれない退魔士家系の出身……………らしい。

退魔士能力は、『魚人化』^{ぎょじんか}

いわゆる人魚の様な姿になる退魔士能力。完全な魚の姿になる事は不可能らしいが、ある程度変化のパーセンテージをコントロール出来るそうだ。だから、よく描かれてるような両足が完全な一つの尾状態にする事も、半魚人の様な姿になる事も可能だとか……それにしても……人魚って（笑）……あまりのギャップに笑うのを堪えるのに結構苦労した（笑）。

武装守護霊はなし。

ん……能力的に海だよな……海か……

???

「ああ、言つとくが……笑つたら殺すからな」

「……な……何をでしょう？」

心を見透かした様な綾子に、若干ドギマギしながらとぼけて誤魔化す夜衣斗。

「はん。お前は春子よりは大人みたいだな」

夜衣斗の対応に感心したのか、嘲つたのか、微妙な笑みを浮かべる綾子。

「綾子おゝそれはちよつと傷付くなあゝ」

本当に傷付いているのか、へらへら笑う春子。

「事実だろうが」

「酷い。酷いわ」

綾子の切り捨てる様な言葉に、妙に大げさに泣いた振りをする春子。

その二人に呆れた視線を向けながら、夜衣斗はぼそつと、

「……どうでもいいですが……緊張感が欠片もないですよね

……」

つぶやき、こっそり溜め息を吐いた。

八、『屋写 あぐり』

「……………学園でお見かけした事がありませんよね？町の方に住んでいる方ですか？」

今まで見た事がないあぐりに思わずそう問う夜衣斗。

「いいえ、わたしはあ、学園寮でえ、寮生のお世話をしてるんですよ」

「……………」
みように間延びした喋り方に、困惑する夜衣斗。

「何かあ？」

「……………いえ」

夜衣斗の沈黙に不思議そうな顔をするあぐりに、夜衣斗は何とも言えず沈黙した。

夜衣斗

星波学園生徒寮寮母さんの一人。他にも寮母はいるらしいが、その人達は一般人なのだそうだ。

妙におつとりと言うか、のろいと言うか……………まあ、とにかくたれ目の美人。色々な意味で無防備な感じな人だが……………その退魔士能力がとんでもなく……………正直、あまりのギャップに少しの間思考が固まって、思わず聞き返してしまったほど……………まあ、代々受け継いでいる能力が、その人に合った能力だと限らないって事だよな

……………
退魔士能力は、『夜叉』

食べる事でその食べたものの能力を一時的に使う事が出来るとんでもない退魔士能力。なんでも彼女の一族は、元々は人喰いをする（そうする事で他者の能力を一時的に手に入れて使っていた）一族だったらしく、それによって過去に退魔対象にされ退魔士に滅ぼされ掛けた所を、十二神将と呼ばれる退魔士達に助けられ、人喰いをしない事を誓い、彼らの配下として働く事を誓ったとか……………まる

で本当に夜叉みみたいな話だよ……まあ、結構近い時代の話らしいから、こっちはインド神話とは関係ないただの偶然だとか……つで、本来は生きた対象から直接食べる事で対象の能力を使う能力である為、今は髪の毛とかを直接食べるなどして能力を使っているとか……ふむ……使えるかも……しかし……髪の毛を直接食べるね……そこはかとなく……ごによごによ……って感じるのは……まずい傾向だろうか？

???

「……ところで屋写さんは夕食の手伝いに行かなくてもいいんですか？」

夜衣斗がふと思った事を口にする、あぐりは照れたように笑い。「私いゝ、慣れない場所だとおゝ、失敗があゝ、多くなっちゃうんですうゝ」

「……」(ドジっ娘寮母……ある意味新ジャンルか……)

などと反射的に考える夜衣斗に、春子はニヤニヤ笑みを浮かべ、「んふふ。夜衣斗ちゃん。あなたの考えている事が手に取る様に分かるわあゝ」

「……何のことでしょう？」
「またまたとぼけちゃってえゝ……萌えるわよねえゝ色々な要素で」

「燃えるうゝ？何が燃えるんですかあゝ」
あきらかに春子が言うもえを別のもえに勘違いしているあぐりに、何と言ったものか思案したが、結局は何も思い付かず深いため息を吐き、あぐりの小首を傾げさせた。

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 48

?????

九、『字導じどう 神楽かぐら』

「……………武霊課にいた婦警さんですよね？」

神楽の顔に見覚えがあった夜衣斗がそう問うと、神楽は嬉しそうに、

「あ！憶えてくれてたんだ。ちよつと嬉しいかな？」

などと言ったが、夜衣斗は若干何とも言えない雰囲気になり、

「……………まあ、警察署はちよつと嫌な思い出が出来ていますからね……………」

「あれ？あの時つて、夜衣斗君も承知してたんだよね？」

「……………承知しているからつて、あの状況が良いイメージに繋がる事はあまりないと思いますよ……………」

夜衣斗は溜め息一つ吐き、それに神楽はにやりと笑つて、

「そう？女の子が二人も泊りに来てくれたの？」

「……………ノーコメントで」

夜衣斗

星波警察武霊課所属の婦警さん（表向きは生活安全課）。星波警察に行つた時に会つた事はあるが……………ショートカットで八重歯が特徴のスポーティな感じのお姉さん。

昔は口導家と対をなす家系だったらしいが、過去に魔法使い側に付いた事により制裁を受け、衰退。今は彼女の家族以外に生き残りはいないとの事……………何と言うか、そう言う事もあるんじゃないかと薄ら思っていたが……………実際にそう言う事を聞く事になるとは……………しかも、あつげらんかと、「まあ、昔の事だから」って言われるとは思わなかったな……………まあ、深刻言われても困つただろうが

……
退魔士能力は、『まつろわせる文字^{もじ}』

書いた文字の意味を現実にする退魔士能力。口導家のまつろわせる言霊を言葉から文字に変えただけの退魔士能力らしいが、発生が違つらしく、こちらは制御が可能な上、書き方やその内容によっては発動に条件を付けたりして取つて置く事が可能なのだそう。しかも、各文字の制限も無いらしく、英語でもいいとか……要は書く側が文字として認識し、意味を憶えてさえすればいんだろう……んゝだとするとかなり便利な能力だよな……まあ、でも、一文字書くのに結構な意志力を消費する上に、まつろわせる言霊と同じ様にあまり物理法則から離れた現象を起こす事を書く意志力の消費がより増加するとの事……使い勝手は良さそうだが……

武装守護霊は、『犬警^{けんけい}』

童話の犬のおまわりさんが基になつていらく、まんま犬のお巡りさんな武霊……銃で撃つたり、警棒で殴つたりするくらいか？……いまいち強そうに感じられないよな……

???

「……そういえば、武霊封じつて文導さん退魔士能力で作られているんですか？」

夜衣斗の問いに、神楽は首を横に振つた。

「違つよ。あれは全部武霊が作ったものよ。じゃなきゃ星波町の外でも文字の記憶が残つちゃうでしょ？」

「……まあ、確かに……武霊封じを主に使っている警察に、まさしく文字に力を込める人がいるものだから、ついそうじゃないかと思つてしまいましたよ……安直でしたね……そう言えば……武霊によつて書かれていますって話は聞いてはいても、実際にそう言つ武霊を見た事ありませんね……」

「それはそうですね。文字に力を込められる武霊は数が少ないから……まあ、夜衣斗君ならその内会えると思つわよ？」

「……………そうですね?」
妙に意味深な事を言われ、夜衣斗はちょっと気になったが、今はその事を聞くべき時ではないと判断して、それ以上は聞かなかったが、後にその事をちよつと後悔する事になるのは少しだけ先の話。

????

十、『凍眼 とうがん 林檎 りんご』

「あの、その……………えつと……………その」

夜衣斗から注目され、みんなから見られていると言う状況に、思いつきり赤面してうろたえる林檎。

小学生なのだから仕方がないと言えば仕方がないが、こう言う状況になれていない夜衣斗の方は内心林檎よりうろたえてたりする。

「……………うう〜」

終には涙目になってしまつりんに、流石に困つた夜衣斗は春子に顔を向けるが、春子は面白そうにしているだけでちつとも助ける気はなさそうだった。

仕方が無いので、夜衣斗は、

「……………無理して自分で自己紹介をしなくてもいいよ」

と言つて他の人に林檎の事を聞こうとしたが、林檎本人が首を横に何度も振つたので、ちよつと迷いつつ夜衣斗は、

「……………分かった……………がんばって」

そう応援すると、林檎は顔をぽろと顔を赤らめ、

「はい……………がんばります」

と小さい声で言われた。

「おお!光源氏フラグ発生!」

とふざけた發現をする春子に夜衣斗は無言でチョップを喰らわした。

夜衣斗

星波学園小等部四年。生き物係で、教室にいるインコと金魚の世話をしているとの事……いや、別にそんな事まで知りたくはなかったが……常におどおどした感じのツインテールの女の子で、クラス男子に好意からよくちよっかいを掛けられそうなほど可愛らしい容姿をしている。実際、よくクラスの男子にちよっかいを掛けられ、泣かされているとの事。

射眼家の分家らしいが、退魔士能力がかなり変質しているので、射眼家の悪癖も受け継いでないとか……て言うか、射眼家の悪癖って？

退魔士能力は、『凍眼の瞳』

視界に入った全てを凍った様に時間を止める退魔士能力。あまりにも強力過ぎる為か、りんごちゃんが子供な為か、使用時間が極端に短いらしく、連続使用も出来ないらしいので、使えない能力とは本人の談……だが、要は使用タイミングの問題だよな……

武装守護霊は、なし。

???

「……ふと思ったんですが……もしかして、武霊発生以降も定期的に退魔士の子供達が星波学園に送られて来るんですか？」

その夜衣斗の問いに、春子は小首を傾げ、

「どうしてそう思うわけ？」

「……林檎ちゃんは、どう考えても十年前は産まれているか産まれてないかの年齢でしょ？しかも、ご両親は町にいないくて寮住まい……なら、つい最近この町に来たと考えるのが自然だと思いますが？」

夜衣斗の推理に話題にされた林檎はポカーンとし、春子はその様子に苦笑した。

「確かに今でも定期的に子供達が星波学園に送られて来るわ」

「……星波町に退魔士が近付くのは禁じられているんですけどよね？」

「そうよ」

「……………意味が分かりませんね」

「ん〜まあ、それぞれ家によつて事情は違うんだけど、概ね『琴野家の援助を得る為に無理矢理子供達を学園に送ってくる』のよ」
急に現れた生臭い話に、夜衣斗は前髪の後ろで目を瞬かせた。

「ほら、星波学園つて元々次世代の退魔士を育てる為の学園だったでしょ？でも、家によつては伝統とか、家訓とかで、子供を家から出したがらない所も結構あつたわけ。つで、それを何とかする為に、琴野家は学園を作る時、各退魔士の家に約束したのよ。子供を学園に通わせれば資金援助を何とかそんな感じの約束をね」

「……………つまり、多くの退魔士家系はあまり裕福ではないわけですね……………」

「そうなのよ。どっかの大家系が退魔士の仕事を牛耳つてたり」

「……………どっかのつて……………」

「まあ、概ねうちなんだけどね」

「……………」

「あと、バブル崩壊の影響とか、不景気とか、そう言うのの影響も結構退魔士社会にもあつたりするのよ」

「……………なるほど、兼業の人もそれなりにいるわけですか……………」

「そう言う事。まあ、兼業の人は自力で何とかなるちゃんるんだけど、それ以外の人達は結構あつぷあつぷなわけ。だから、未知の危険がある場所であろうと、約束を盾に琴野家から強引に援助を引き出す為に、子供を無理矢理転校させてくるつてわけ」

「……………」

あまりの話に押し黙る夜衣斗。

直前まで悪態を吐き掛けたが、流石にその当の本人の目の前で親の悪態を吐くわけにはいかないと夜衣斗は判断したわけだが……………
夜衣斗が林檎の方に顔を向けると、林檎は二人の話を理解出来ていないのか目を瞬かせている。

「まあ、そう言うのは、あくまで大人の間の話だから、送られて

きた子供達はなるべく武霊には関わらせたくないのが……正直な所ね」

小声で、夜衣斗だけに聞こえる様に言った春子の本音に、夜衣斗は溜め息を吐いた。

夜衣斗もそれには同意なのだが、今回はそう言う訳にはいかない状況だったからだ。

「??？」

「はい！どうもどうも！次は僕達ですね」

元気一杯でツンツン頭の小さな男の子が、手を振りながら立ち上がった。

「仕切るな鼠」

妙にがつつりした体格のメガネの男の子が、クイツとメガネを上げながら立ち上がる。

「だねえ」

メガネの男の子に同意しながら、目の細い男の子も立ち上がり、眠そうに眼を擦る。

「別にどうでもいいじゃない。ね」

元気よく飛び跳ねる様に立ち上がるツインテールの女の子。

「誰かが仕切るのは必要な事です」

そう言っ、何故か目を瞑っている妙に落ち着いた感じの男の子がゆっくりと立ち上がる。

「……………別にどうでもいいし……………」

つられた感じでぬるっとした感じの男の子が立ち上がり、ぼそつとつぶやく。

「うんうん。確かにどうでもいいよね」

子供なのに妙に成長した身体付きの女の子が立ち上がり、本当にどうでも良さそうに同意する。

「そうですねえ、仕切りは大切ですよお」

と立ち上がりながらのんびりした感じで反論する全体的にのん気な感じの女の子。

「そうですねえ、仕切りは大切ですよお」

とのん気な感じの子の真似を真似しながら立ち上がるくりくりした感じの男の子。

「そうだねそうだね……っで？何の話？」

立ち上がり一応同意したが、話を聞いていなかったのか、隣の子に小声で聞く全体的に落ち着きがない男の子。

「自分。聞いてませんでした」

口をへの字にして眉間に皺を寄せている男の子が、正直な事を言いながら立ち上がる。

「ん？何を？」

根本的に今までの話を聞いていなかったのか、首を傾げながら立ち上がる全体的にぼけえ〜とした女の子。

「あ！あたしもあたしも」

その全体的にぼけえ〜とした女の子に、妙な同意をしながら立ち上がる猫みたいな女の子。

「……………」

一遍に苦手な子供達が立ち上がったので、ちよつと気圧されている夜衣斗だが、ふつと子供の一人が鼠と言った事と、屋写あくりが子供達を困った顔で見っていた事に気付き、ピンと来て、

「……………十二神将？……………いや、一人多いか？」

とつぶやくと、子供達がにまりとし、

「「そう僕達（私達）は、十二神将プラス猫です！」」

と言つて戦隊物ばくポーズをばらばらに取り、夜衣斗を絶句させた。

十一、『子神弾』

夜衣斗

星波学園小等部六年。ツンツン頭の小さな男の子で、妙に元気でちよこまかと動く男の子。

仕切り屋らしく、大体この子が十二神将の子供達の口火を切る事が多いが、リーダーと言う訳ではないので、大体その事に対して突

つ込まれる様だが、本人はそれを気にしている感じはない。

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家子神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事に関して本人は若干気にしている様だが、概ね受け入れている様に見える。

退魔士能力は、『子神化^{ねがみか}』

鼠の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の鼠ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の鼠と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

退魔士能力をベースにした子神流柔術と言う独自の柔術を使って戦うらしい。

武装守護霊は、『鼠神』

子神家にある掛け軸に描かれている鼠の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た鼠獣人。

十二支の子の神と言う設定の為か、水と冬に関する物を操れるとの事。当然、鼠も操れ、神使としての鼠を大量に出せるとか。

十二神将の子供達は総じて高い能力を持っている様だが………この子供達を戦わせるのは………どうなんだろう？ちらつと春子さんから聞いた退魔士の教育方法では、幼い頃から実戦に近い訓練をさせられる事が多いって話で………本人達もやる気満々なんだが………ん
)……………

????

十二、『丑神^{うしがみ} 剛^{ごう}』

夜衣斗

星波学園小等部六年。妙にがつつりした体格のメガネの男の子。

真面目で融通のきかない性格らしく、弾君に突っ込みを入れるのは大体この子。

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家丑神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事に関して本人は全面的に受け入れている様だった。

退魔士能力は、『丑神化』うしがみか

牛の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の牛ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の牛と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

退魔士能力をベースにした丑神流柔術と言う独自の柔術を使って戦うらしい。

武装守護霊は、『牛神』

丑神家にある掛け軸に描かれている牛の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た牛獣人。

十二支の丑の神と言う設定の為か、土と冬に関する物を操れるとの事。当然、牛も操れ、神使としての牛を大量に出せるとか。

………何と言うか、妙にがつりした体型のせいで、ボディビルダーみたいに見えなくもないが………年齢と身長がその筋肉量とアンバランス過ぎて………失礼だが、若干………

????

十三、『寅神』とらがみ 大介』だいすけ

夜衣斗

星波学園小等部六年。目が非常に細い男の子。

あまりやる気がないのか、気が付くと寝ている子だが、他の子達によると戦いになると獰猛な本性を現すとか………虎だけに？

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家寅神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこま

れた子供の一人だが、その事について本人は全く気にしていない様
だった。

退魔士能力は、『寅神化』とらがみか

虎の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当
の虎ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の虎と会話出来たり、
命令したり出来るとの事。

退魔士能力をベースにした寅神流柔術と言う独自の柔術を使って
戦うらしい。

武装守護霊は、『虎神』

寅神家にある掛け軸に描かれている虎の神様が基らしく、その姿
は墨汁で描かれた様な着物を着た虎獣人。

十二支の寅の神と言う設定の為か、木と春に関する物を操れると
の事。当然、虎も操れ、神使としての虎を大量に出せるとか。

………何となく気になったが、マタタビとか効くんだろうか？漫
画とかだと効くのは定番なんだが………流石に本人に聞く気にはな
れないな………気になるけど………

???

十四、『卯神』うがみ 銀子』ぎんこ

夜衣斗

星波学園小等部六年。やたらとびよんぴよん動くツインテールの
女の子。

何か言う度に、する度にびよんぴよん動くので………可愛いが…
………ちよつとウザいのが正直な所。

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神
将と呼ばれる十二家の内の一家卯神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこま
れた子供の一人だが………その事に対して本人はかなり気にしてい
る様で、その事をそれとなく聞くとじんわり涙目になって………困

った。

退魔士能力は、『卯神化』うがみか

兎の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の兎ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の兎と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

退魔士能力をベースにした卯神流柔術と言う独自の柔術を使つて戦うらしい。

武装守護霊は、『兎神』

卯神家にある掛け軸に描かれている兎の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た兎獣人。

十二支の卯の神と言う設定の為か、木と春に関する物を操れるとの事。当然、兎も操れ、神使としての兎を大量に出せるとか。

ふと思つたが、ぴよんぴよん動くのは彼女が兎になれるからなのか、なれるから意図的にやっているのか……どっちなんだろうか？……まあ、普通に考えれば、意図的にだよな……骨格的に。

????

十五、『辰神』たつがみ 『流星』りゅうせい

夜衣斗

星波学園小等部五年。何故か常に目を瞑っている妙に落ち着いた感じの男の子。

目を瞑っているのは、場合によっては暴走する自身の退魔士能力を抑える為らしいが、完全に目を瞑っていると言う訳ではなく、物凄く薄目で見ているとの事。

退魔士の中でそこそこの勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家辰神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事に対して本人は特に何も感じていない様だった。受け入れていると言うより、気にもしていない様だが……

……
退魔士能力は、『辰神化』

龍の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も出来るとか。完全に獣化すると他の十二神将に比べ、かなり規格外な大きさになる上に、嵐とかも呼んだり、大気をかなり乱すらしい。その為、十二神将の中で唯一完全獣化が禁じられているとの事。

退魔士能力をベースにした辰神流柔術と言う独自の柔術を使って戦うらしい。

武装守護霊は、『龍神』

辰神家にある掛け軸に描かれている龍の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た龍獣人。

十二支の辰の神と言う設定の為か、土と春に関する物を操れる上に、神話とかで語られている龍が出来る大体の事を出来るらしく、それは退魔士能力も同様との事。

……つまり、十二神将最強の存在って事か？……まあ、規模がでか過ぎて使い所が難しい上に、場合によっては暴走するみたいだが……

???

十六、『巳神 義』

夜衣斗

星波学園小等部五年。何だか全体的にぬるつとした感じの男の子。個人的にちよいと苦手な感じだが……まあ、それを表に出すのは年上として……どうだろう？

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家巳神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事に付いて本人は妙な含みを持っている様で……なんか家族に対して取引でもしたみたいな事をちらりと

言った……………したたかと言うか、何と言うか……………

退魔士能力は、『巳神化』みかみか

蛇の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の蛇ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の蛇と会話出来たり、命令したり出来る事の事。

退魔士能力をベースにした巳神流柔術と言う独自の柔術を使つて戦うらしい。

武装守護霊は、『蛇神』

巳神家にある掛け軸に描かれている蛇の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た蛇獣人。

十二支の巳の神と言う設定の為か、火と夏に関する物を操れるとの事。当然、蛇も操れ、神使としての蛇を大量に出せるとか。

蛇か……………テレビ越しに見るのは平気なんだが……………生はちよつと……………なるべく目の前で獣化させない様に、密かにするか……………

?????

十七、『午神』うまがみ 夢子』むね

夜衣斗

星波学園小等部五年。妙に成長した身体付きの女の子。

正直、小学生だと言われなければ、同い年ぐらいだと勘違いしていた。その為、子供服が着られなかったり、ナンパされたりするのが大きな悩みだとか……………

退魔士の中でそこそこの勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家午神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事に対して本人はかなりのショックを受けていたらしく、その事をそれとなく聞くと、身体付きに反してめそめそし出してしまうので……………物凄く困った。

退魔士能力は、『午神化』うまがみか

馬の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の馬ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の馬と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

退魔士能力をベースにした午神流柔術と言う独自の柔術を使って戦うらしい。

武装守護霊は、『馬神』

午神家にある掛け軸に描かれている馬の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た馬獣人。

十二支の午の神と言う設定の為か、火と夏に関する物を操れるとの事。当然、馬も操れ、神使としての馬を大量に出せるとか。

運動、特に持久力が要求される物が得意だとか……馬だからか？

????

十八、『未神^{ひつじがみ} 峰子^{みねこ}』

夜衣斗

星波学園小等部四年。全体的にのん気な感じの女の子。

のん気過ぎでイラっとしなくもないが……まあ、許せる範囲。

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家未神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事に対して本人はのほほんと全く気にしていない様だった………気にしなすぎもどうなんだろう？

退魔士能力は、『未神化^{ひつじがみ}』

羊の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の羊ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の羊と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

退魔士能力をベースにした未神流柔術と言う独自の柔術を使って戦うらしい。

武装守護霊は、『羊神』

未神家にある掛け軸に描かれている羊の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た羊獣人。

十二支の未の神と言う設定の為か、土と夏に関する物を操れるとの事。当然、羊も操れ、神使としての羊を大量に出せるとか。

あまりにもものん気過ぎるので、ちよつと色々心配になるが、話によるといざとなるとんでもないパワーを発揮する上に、やたらと丈夫なので心配するだけそんだとか………いまいち想像し難い話だな………

???

十九、『申神 良助』

夜衣斗

星波学園小等部四年。やたらと人真似するくりくりした感じの男の子。

もつとも真似をしてみると言っても、その対象は仲間内だけらしく、俺に対しては普通に接してきた。

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家申神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事について本人は深くは考えていない様だった………考えたくないのか、考えられないのか………

退魔士能力は、『申神化』

猿の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の猿ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の猿と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

退魔士能力をベースにした申神流柔術と言う独自の柔術を使って戦うらしい。

武装守護霊は、『猿神』

申神家にある掛け軸に描かれている猿の神様が基らしく、その姿

は墨汁で描かれた様な着物を着た猿獣人。

十二支の申の神と言う設定の為か、金と秋に関する物を操れるとの事。当然、猿も操れ、神使としての猿を大量に出せるとか。

真似をするって事は……仲間注目されたいからか？それとも血筋？……まあ、許されるのは子供の内だよな……

????

二十、『酉神とりがみ賢けん』

夜衣斗

星波学園小等部四年。全体的に落ち着きがない男の子。

常にきよろきよろしているせいか、どうも人の話を聞かないわ、人の話を忘れるわ……なんか自他ともに苦労しそうな子だな……

退魔士の中でそこそこの勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家酉神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事に対して本人にそれとなく聞くと物凄く動揺するので……まあ、かなり気にしているのだろう。

退魔士能力は、『酉神化とりがみか』

鶏の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の鶏ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の鶏と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

退魔士能力をベースにした酉神流柔術と言う独自の柔術を使って戦うらしい。

武装守護霊は、『鶏神』

酉神家にある掛け軸に描かれている鶏の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た鶏獣人。

十二支の酉の神と言う設定の為か、金と秋に関する物を操れるとの事。当然、鶏も操れ、神使としての鶏を大量に出せるとか。

……集中力がないんだろうか？……発達障害？……ADH

Dとか？……………まあ、血筋って方がまだ納得出来る。と言うか、安心出来る？

???

二十一、『戌神いぬがみ守まもる』

夜衣斗

星波学園小等部四年。常に口をへの字にして眉間に皺を寄せている男の子。

どうもまじめ過ぎる上に考え過ぎる性格らしく、その性格が災いして周囲の一挙手一投足が気になるが、それを指摘する事により起こるコミュニケーションの齟齬を気にして結局は指摘出来ない模様。つで、そのストレスの現れが口と眉に出ているみたいだが……………。

退魔士の中でそこそこの勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家戌神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、その事に対して本人はかなり不満に思っている様で、何度か自分の家も含めて十二神将の家々に文句を言った事があるそうだが……………当然、取り合ってもらえなかったそうだ。

退魔士能力は、『戌神化いぬがみか』

犬の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の犬ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の犬と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

武装守護霊は、『犬神』

戌神家にある掛け軸に描かれている犬の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た犬獣人。

十二支の戌の神と言う設定の為か、土と秋に関する物を操れるとの事。当然、犬も操れ、神使としての犬を大量に出せるとか。

……………若干、昔の自分に似ている気がするな……………俺も同じ様に真面目だったし、結構眉とかを顰めていた……………もつとも、今は

ある程度妥協と言つか、気にしない様になっているので平気……………か？

????

二十二、『いがみ亥神 もも桃』

夜衣斗

星波学園小等部四年。全体的にぼけえくとした女の子。

ぼけえくとし過ぎて度々人の話を聞いていない時があるのか、よく首を傾げ、聞き返してくる困った子。

もつとも、一度怒ったり、暴走すると色んな意味で止まらなくなるとか……………色んな意味つてどんな意味だ？

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神将と呼ばれる十二家の内の一家亥神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、本人は特に気にしていない様だ。もつとも、星波町に来る前はかなり暴れたって話だから、不満はかなりあったんだろう。

退魔士能力は、『いがみか亥神化』

猪の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の犬ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の猪（豚とも可能）と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

武装守護霊は、『猪神』

亥神家にある掛け軸に描かれている猪の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た猪獣人。

十二支の亥の神と言う設定の為か、水と冬に関する物を操れるとの事。当然、猪（豚）も操れ、神使としての猪を大量に出せるとか。何だか腫れものを触る様に他の子供達が接してるんだよね……………そんなにヤバいのか？……………とにかく、怒らせない様にすればいいんだよね……………

???

二十三、『猫神 奈子』

夜衣斗

星波学園小等部四年。見るからに猫みたいな女の子。わざとやっているのか、髪型が猫の耳を連想する様な形になって……その割にはにやんとか言わないし……いや、まあ、そこまで徹底されると逆に困るか……

退魔士の中でそこその勢力を持ち、昔から活躍している十二神将を裏か支えていた猫神家の末子。

林檎ちゃん同様に琴野家から無理矢理支援を受ける為に送りこまれた子供の一人だが、本人はどう思っているかいまいちよく分からなかった。

退魔士能力は、『猫神化』

猫の姿になれる退魔士能力。半獣状態になる事も、大きさを本当の猫ぐらいにする事も出来るだけでなく、本物の猫と会話出来たり、命令したり出来るとの事。

武装守護霊は、『猫神』

猫神家にある掛け軸に描かれている猫の神様が基らしく、その姿は墨汁で描かれた様な着物を着た猫獣人。

同じ猫であるせいか、妙に美魅が気にしている子。本人いわく気が合いそうだとか……猫だけに？いや、意味分からん。

???

ワイワイ騒ぐ子供達を見ながら、夜衣斗は溜め息を吐いた。

子供が苦手な上に、その子供達の正体や置かれている状況にあまりに現実感を感じないからだ。

更には言えば、夜衣斗は彼らを前線に出すつもりはないのに、彼らの方は自己紹介の時にやる気満々だった為、どうしたものかと迷っ

ているのも一因。

確かに能力を聞く限り全員が全員前衛向きの能力であり、かなり強力だと言える。

だが、だからと言って、小学生達を直接戦闘に参加させていいものか……………

夜衣斗はもう一度溜め息を吐き、とりあえずどうするかは後回しにする事にした。

????

次に立ち上がった人達に、夜衣斗は何とも言えない表情になった。何故なら、全員が全員どう見ても家族ぐるみでいる様だったし、その何人かが学園で教師として見た事がある人達だったからだ。

(……………考えて見れば、退魔士の子供達を養成する為に星波学園が作られたのなら、教える側にもそれなりの退魔士が必要になる……………つまりそう言う関係でこの人達は星波町に来ているのだから……………)

「あ！言つとくけど、この人達は琴野家の資金援助が目的でここにいるわけじゃないわよ？」

微妙な雰囲気張っていた夜衣斗に春子がそんな事を言い出した。

「この人達は、鯉の会の実働メンバーで、かつ、元正式退魔士だった人達なの」

「……………どう言う事です？」

「どうもこうも、この人達は星波学園創設の為に集められた先行メンバーだった上に、元から鯉の会のメンバーだった人達で、星波町に残る為に正式な退魔士を止めてくれた人達なのよ」

「……………正式な退魔士って辞められるんですね……………」

「そりゃ弱小退魔士家系は、五大退魔士家系のせいで回ってくる仕事が少ないからね」

あつげらかんとそんな事を言う春子に、夜衣斗は呆れが含んだ溜め息を吐いた。

????

二十四、『木世』^{きせ}

二十五、『木世 富美』^{ふみ}

二十六、『木世』^{ひふみ}

夜衣斗

星波学園高等部国語教師の夫に、星波学園小等部教師の妻、星波幼稚園に通う娘の三人家族。

夫の一さんは『五行化身』と呼ばれる退魔士の間では有名な五系統家系の出身で、五行化身は異様なほど強力な退魔士能力であるが、継承確率が他の退魔士に比べてかなり低い家系らしく、現在能力を発現させたのは彼だけ。その為、必然的に一さんが正式退魔士になったとの事。

もつとも、いくら強力な退魔士能力を有していても、五大退魔士家系とその傘下に入っている退魔士家系以外の正式退魔士には滅多に仕事回ってこないらしく、仕方なく教師になったとか。ついで、星波学園に来る前の高校で、当時高校生だった奥さんの富美さんと出会い…… 在学中に強引に奥さんの方から結婚を申し込まれ、押し切られる形で結婚したらしい……。どっかで聞いた様な見た様な話だな……。まあ、とにかく……。その後富美さんも教師になり、二人して星波町に来て、鯉の会の要請で正式な退魔士を辞めて星波町に残っている。

ちなみに富美さんは弱い超能力者らしく、木と何となく会話が出る為、同系統の退魔士能力を持つ一さんに惹かれた様だ。

退魔士能力は、『木業^{モクゴト}』

木を操り、木を生み出し、あらゆるものを木と化す退魔士能力。

木が生えていない地帯とかで重宝されそうな能力だが、何でも魔法によって無から生み出された物は、余程条件が整わない限りその存在が定着しないそう。まあ、本来ならそこに存在しない物なのだから当たり前と言えば当たり前か……

武装守護霊は三人ともなしだが、『五行刀』と言う五行思想を体現させる魔法刀を持っているらしく、相生・相剋などをそれを介して出来るとか……。それにしても五行ね……。考えて見れば、世間一般では陰陽師とかって退魔士みたいな扱いをされてるよな……

……でも、出来る事から考えると、陰陽師は魔法使い系ばい様な……？

????

二十七、『火結 桃子』

二十八、『火結 太郎』

二十九、『火結 桃太郎』

夜衣斗

星波学園中等部体育教師の妻に、同じく学園中等部で保健医をしている夫、学園小等部一年の息子の三人家族。

妻の桃子さんは、『五行化身』と呼ばれる退魔士の間では有名な五系統家系の出身で、五行化身は異様なほど強力な退魔士能力である為か、継承確率が他の退魔士に比べてかなり低い家系らしく、それ故に血の維持の為に同じ血族の者の中から結婚相手を選ばれ、無理矢理結婚させられたとか。もともと、二人とも互いに憎み合ってた仲だったので……無駄にラブっててウ……っで、同じ事を息子の桃太郎も思ってる様で、小学一年ながら大人びた呆れた表情を見せていた。若干同情。

退魔士能力は、『火業』

火を操り、火を生み出し、あらゆるものを火と化す退魔士能力。

寒い地方とかで重宝しそうな能力だが、消耗が激しいらしく長時間は無理だとか……火だからか？

武装守護霊は三人ともなしだが、木世さんと同じく『五行刀』を持っていて。つまり、五行化身と呼ばれている退魔士の家には必ず一振りはあるって事か？

????

三十、『土帝 冬四朗』

三十一、『土帝 のん』
三十二、『土帝 かのん』
三十三、『土帝 ゆのん』

夜衣斗

星波学園大学部教授の夫に、星波学園食堂統括栄養士兼調理師の妻、中等部二年の二卵生の双子の女の子の四人家族。

夫の冬四朗さんは『五行化身』と呼ばれる退魔士の間では有名な五系統家系の出身で、五行化身は異様なほど強力な退魔士能力である為か、継承確率が他の退魔士に比べてかなり低い家系らしいが、特に何か対策を取ると言う訳でもなく、のんさんとは恋愛結婚なのだそうだ……………まあ、家柄だろうな……………冬四朗さん。やたらとのん気だし……………

妻ののんさんは、料理限定の予知能力者らしく、自分の作るうとしている料理の結果をある程度知る事が出来るとか……………何と言うか……………やたらと平和な能力と言うか……………まあ、料理人にはかなり重宝しそうな能力だよな……………つで、双子の娘さん達は、父親の能力を受け継いでいるらしく、父親ほどではないが同じ能力を使えるとの事。

退魔士能力は、『土業』

土を操り、土を生み出し、あらゆるものを土と化す退魔士能力。

土木作業とかに便利そうな能力だが……………土ね……………ふむ……………

武装守護霊は四人ともなしだが、やっぱり『五行刀』を持っている。

????

三十四、『金黙 紅』

三十五、『金黙 蒼』

夜衣斗

星波学園警備部責任者の妻に、その部下の夫の二人家族。

妻の紅さんは『五行化身』と呼ばれる退魔士の間では有名な五系統家系の出身で、五行化身は異様なほど強力な退魔士能力であるが、継承確率が他の退魔士に比べてかなり低い家系らしく、その為他の退魔士家系の退魔士能力を取り込もうと昔から積極的に他家から嫁・婿を取っていて、蒼さんも同様らしく、しかも立場的に金黙家より弱い家からの婿養子な為か、妻である紅さんに媚び諂っている。紅さんは無口な性格らしく、何も言っではないが………なんとなくその事を不満そうにしている様な気がする。

夫の蒼さんの退魔士能力は、『電人』でんしんと言う自身を電気にしたたり、電気を操る能力らしく、旧姓は『電渡』かみなりわたりだとか………聞く分にはとんでもなく強力な能力な気がするが………それでも弱い立場ね………退魔士能力は、『金業』きんぎょう

金を操り、金を生み出し、あらゆるものを金と化す退魔士能力。金と言っても黄金を生み出すのは難しい上に、禁止されているとか………まあ、生み出した所で、時間が経てば消えてしまう訳だから………なるほど、だからか………

武装守護霊は二人とも無しで、当然『五行刀』を持っている。

???

三十六、『水錬』すいれん 鋼騎』こうき

三十七、『水錬』 彩』あや

三十八、『水錬』 剛騎』こうき

三十九、『水錬』 彩音』あやね

夜衣斗

星波保育園の保育士の夫に、星波幼稚園の教員の妻、小等部四年の兄、同じく小等部一年の妹の二人兄妹の四人家族。

夫の鋼騎さんは『五行化身』と呼ばれる退魔士の間では有名な五

系統家系の出身で、五行化身は異様なほど強力な退魔士能力である
為か、継承確率が他の退魔士に比べてかなり低い家系らしいので、
近……………あ……………まあ、今の世の中じゃ大っぴらに言ったら
まずい事だよ……………忘れよ。うん。それがいい。ちなみに
何の因果か、四人が四人全員妙に妖艶な雰囲気を持たせさせていて
……………俺としてはちよつとお近付きにならない人達で……………
……………あ！だから幼稚園・保育園に勤めているのか……………
四人とも同じ退魔士能力を持つが、鋼騎さん以外はそれほど強力
ではないらしい。

退魔士能力は、『すいぎょう水業』

水を操り、水を生み出し、あらゆるものを水と化す退魔士能力。
ふと思つて、魔法で作られた水って、飲んだ場合はどうなるんで
すか？つて聞いたら、何でも飲んでしまつと、その人の意志力で自
然と安定化するらしく、時間が経つと体内から消失するつて事はな
いらしい……………つまり、魔法で創造した物が安定する条件として人
間の身体は最適なものの一つつて事か……………

武装守護霊はなしで、もちろん『五行刀』を持っているらしいが

……………ん……………

????

「……………なんで五行化身の人達は武霊使いになってないんでしょ
うね？」

五行化身の退魔士達の自己紹介の後、ぼそつと夜衣斗がそうつぶ
やくと、それを聞いた春子が首を傾げた。

「別におかしなことじゃないでしょ？星波町全体で考えたつて、
武霊使いになつてるのは大体十パーセントぐらいよ？」

「……………だからと言って、五つの家族が全員武霊使いじゃないと
言つのは……………ちよつと不自然な気がするのですが……………」

「考え過ぎじゃない？武霊が憑く条件だつて、まだよく分かつて
ないんだからさ」

「...」

????

「……………」

次に自己紹介の為に立ち上がった人達を見て、夜衣斗は尻込みをしている様だった。

その春子に苦笑して、

「考えて見れば、夜衣斗ちゃんが前に住んでいた所は、『外国の人』が少ない所だったものね」

立ち上がった人達を見た。

全員が全員、外国の、しかもヨーロッパ系の人達だった。

????

四十、『シエルロツテIIソード』

夜衣斗

星波学園高等部二年……………実は同じクラスの人で、イギリス三大退魔士家系の一つソード家のお嬢様。

お嬢様と言っても、家督とか関係ない末娘らしいので、かなり気楽な人物である上に、日本の侍に妙な憧れがあるらしく、語尾に「〜でござるですよ」とか、なんか色々と妙な喋り方をする……………色々な意味で困った人で……………これまでは多分、夜衣花の関係であまり俺に近付いてこなかったんだろうが……………これからはどうだろう？……………あんまり絡まれても困るタイプだよな……………

退魔士能力は、『インビジブルソード』

触れた物質を任意に切り裂く事が出来る退魔士能力。

身体のどこに触れても切れる上に、ある程度熟練が必要だが、間接的に切り裂く事も出来るとか……………つまり、木刀で漫画みたいに斬る事が出来るって事か……………色々物騒な想像が出来る能力だよ

な……………

武装守護霊『宮本武蔵』

…………… どうやら逆鬼ごっこの時に見かけた黒子は彼女だったらしい…………… 侍マニアもここに極まりって感じか？

????

四十一、『シルビィア』クローバー』

夜衣斗

星波学園高等部二年。違うクラスなのでチラッと学校内で見た事がある気がするかな？…………… クローバー王国と言う聞いた事がない小国からの留学生で、しかもその第二王女だとか…………… 王女様って初めて生で見たが…………… 何といか…………… はあ…………… まあ…………… この王女様は、いわゆる腐女子らしく、自己紹介の時にじーっと俺を見て、いきなり、

「ヤイトは受けネ」

などと言われた。

っで、隣にいた飛矢折さんが不思議そうな顔をして、

「受け？…………… どう言う意味？」

と聞いてきたので…………… どう答えたものかと…………… って言うか受けって…………… はあ

退魔士能力は、『クローバーキス』。

キスした相手（もしくはその部位）に幸福もしくは不幸を与える退魔士能力。聞いた感じだと、いわゆる因果律操作の一種の様で、どれくらいの幸福か不幸を与えるかは、そのキスしている時間によって決まり、長ければ長いほど幸福か不幸になるそう。その能力故に、様々な勢力から狙われているらしく、彼女の隣には常に護衛役の退魔士がいて、目を光らせている…………… と言う事は、彼女がこの町に来たのは他の人と違う理由かもしれない。

武装守護霊は…………… あるにはあるが、人前では流石に出すのは恥

ずかしいキャラらしいので、戦力外…… あんなキャラが心の根底にあるなんて…… 筋金入りの婦女子か…… 王女様なのに残念と言うか…… いや？逆にありか？ん〜……

???

四十二、『アンナ＝シールド』

夜衣斗

星波学園高等部二年。イギリス三大退魔士家系の一つシールド家の退魔士であり、シルビアさんの護衛。なので、違うクラスで……

……あのシルビアさん護衛は色々大変そうだな……。

なんでもさつきちよつとだけ電話越しで会話したエレアさんの妹さんらしいが、彼女が幼い頃にエレアさんが一族から追放された為よく憶えていないとか…… 何で追放されたのかは知らないが、彼女は姉の事を気にしている様で、少しだけ会話した俺に様子を聞いてきて、元気そうだったと言ったら、ちよつとほつとした様な嬉しそうな顔をした。ちなみに、妹さんは武装メイドじゃない正式な退魔士だとか。

何だかクールビューティーって感じの人だが…… エレアさんの妹って事は、エレアさんもこんな感じなんだろうか？

退魔士能力は、『アルティメットシールド』

周囲の空間に干渉し、空間断絶の壁を作り出す退魔士能力。

空間そのものを断絶するので、絶対的な防御力を持つ上に、手の届く範囲ならどんな場所にも作り出せる為、場合によっては最大の攻撃力を持つが、手の届く範囲までしか展開出来ないのと、消耗がかなり激しいらしく守る以外はあまり向いていないそうだ。

???

四十三、『テオ＝S＝サラマンダー』
スカレット

夜衣斗

星波商店街からちよつと外れた所に事務所を構えているイタリ
ア人の探偵。

ヨーロッパの各地にいるヨーロッパ退魔士最大勢力『四元素使い』
と呼ばれる一族の出身。

異様に陽気で、女性を見かけたらまずナンパする軽い性格で……
……たまに町で見た事があるが、常に複数の女性をはべらせている人
で……探偵と自己紹介されるまでホストだと思ってた……まあ、
見ようによつてはホストみたいな顔付きだからだろうが……な
んであれ、好きになれないタイプかもしれない……て言うか……
……探偵つてこんな町で依頼来るのか？

退魔士能力は、『サラマンダー』

四元素の火を体現する能力で、五行化身の人達に近い退魔士能力
だが、こちらは既にある物質を体現する物に変換する事が出来ない。
その代わりに、自身を火にする事が出来るらしく、その姿は火の魔
人だとか。

???

四十四、『オティーリエクリア』C『ウンディーネ』

夜衣斗

星波総合病院勤務のドイツ人女性医師。

ヨーロッパの各地にいるヨーロッパ退魔士最大勢力『四元素使い』
と呼ばれる一族の出身。

くそ真面目で、患者であろうと上司であろうと間違つた事をすれ
ば容赦なく叩くとんでもない人………すんごく苦手なタイプ………
メガネを掛けた美人さんなのに………勿体無い様な気がしなくもな
い。

退魔士能力は、『ウンディーネ』

四元素の水を体現する能力で、五行化身の人達に近い退魔士能力

だが、こちらは既にある物質を体現する物に変換する事が出来ない。その代わりに、自身を水にする事が出来るらしく、その姿は水の魔人だとか。

????

四十五、『ユベール』エクストリーム E シルフ』

夜衣斗

フランス人の男性芸術家。

ヨーロッパの各地にいるヨーロッパ退魔士最大勢力『四元素使い』と呼ばれる一族の出身。

星波町の色々な所にちらほらある妙なオブジェとか絵とかをこの人が作っているらしいが………てつきり武霊使いが悪戯でもしたのかと思つてたんだが………芸術は分からない。

退魔士能力は、『シルフ』

四元素の風を体現する能力で、五行化身の人達に近い退魔士能力だが、こちらは既にある物質を体現する物に変換する事が出来ない。その代わりに、自身を風にする事が出来るらしく、その姿は風の魔人だとか。

????

四十六、『ミカ』ファームネス F ノーム』

夜衣斗

星波図書館に勤めるスイス人司書。

ヨーロッパの各地にいるヨーロッパ退魔士最大勢力『四元素使い』と呼ばれる一族の出身。

本好きらしく、やたらと分厚くやたらと難しそうな本を常に持つて、隙を見付けてはそれを読もうとする為………色んな意味で油断ならない人。

日本語がうまく使えないのか、それとも元からののか、無口。また、本を読んでいない時はぼけえ〜とした感じなのだが、本を読みだすときりつとした感じになるので……………人形のような綺麗な容姿も相まって、それで騙される男性が多いとか……………まあ、分からもない。

退魔士能力は、『ノーム』

四元素の土を体現する能力で、五行化身の人達に近い退魔士能力だが、こちらは既にある物質を体現する物に変換する事が出来ない。その代わりに、自身を土にする事が出来るらしく、その姿は土の魔人だとか。

?????

ヨーロッパ勢の自己紹介を聞き終えた夜衣斗だが、どこか引つ掛かる所があるのか、中々次の自己紹介を促さなかった

「沙羅ちゃんを見れば分かると思うけど、琴野家現当主琴野優香さんは、ヨーロッパのある退魔士家系の人と結婚しているのよ。だから、星波学園の創設時に、退魔士育成のバリエーションを考慮してヨーロッパ系の退魔士家系の人達を留学させるって考えられてたんだけど……………まあ、武霊発生でおじちゃんになっちゃったわけ」

「……………おじちゃんって……………現にここに居る人達は？」

「鯉の会のヨーロッパ支部の人達よ。おじちゃんになった計画を利用してちよつと強引に来て貰ったのよ。いざとなったら味方になる戦力は多ければ多い方が良いからね」

「……………なるほど……………一つ疑問なんですけど、他の所には鯉の会の支部が無いんですか？退魔士って世界中にいるんでしょう？」

「あるにはあるけど、不自然な形で人は呼べないでしょ？」

「……………不自然ですか……………ヨーロッパ系の方々は……………まあ、さっきので納得は出来ましたが……………もつと近い所から呼べなかつたんですか？中国とか韓国とか」

「……………」

微妙な表情で沈黙する春子に、夜衣斗は、

（要するに……仲が悪いわけだ）

と察し、それ以上は聞かなかつた。

なお、春子が微妙な表情で沈黙した理由を、夜衣斗は後になって知る事になるのだが、それはまだ先の話。

????

四十七、『先見さきみ かなた』

「初めましてえ〜」

ぬぼお〜と立ち上がり、ほわほわした感じで喋る彼女に、夜衣斗は戸惑いつつも、

「……………初めまして」

と返すと、彼女はにこりと笑い、座ってしまった。

「……………って、自己紹介は!?!」

「あ〜忘れてえ〜ましたあ〜」

夜衣斗

星波学園大学部一年。常にぬぼ〜っとしてて、ほわほわしているお姉さん。

早見家の分家らしいが、血が薄れているのか、能力のせいかな、早見さんとは正反対と言つか何と言つか……………早見さんとは別の意味で関わり難い人。

退魔士能力は、『先渡りさきわたの歩みあゆ』。

魂の一部を先（未来）へと飛ばし、未来の出来事を知る退魔士能力。

……………どうもこの能力は、安定させる事が難しい能力らしく、本格的に能力を使ってなくても、魂の一部が常に現在と未来を行き来してしまつらしく、その為現在の身体が常にぼ〜っとしてしまつとか……………まあ、見る事が出来る未来をある程度指定出来るらしいから、使える能力……………かと思いきや、どうやら魔法などが関わっている未来は見辛いらしく、見る為にはその魔法の事を詳しく知っている必要があるのかなんとか……………だから、特に高度な魔法が多く関

わっているると全く駄目になるらしいが……………ん……………だが、
要は何事も使い様だよな……………

武装守護霊はなし。

武装守護霊が魂に寄生するのなら、魂が常に不安定な彼女には憑
き難かつたって事だろうか？

????

黙々と食事をしている夜衣斗の隣で、間が持たなかったのか、

「予知能力って、本当にあるのね……………でも、どどういう仕組みな
んだらう？」

とちよつと疑問に思っていた事を巴は口にした。

その疑問に、夜衣斗は少し考え、

「……………この世の全てが根源意志力によって構成されているなら
……………まあ、素人考えですが、ある程度予想は出来ます」

「どんな予想？」

「……………仮定の一つとして、基本的に世界は一本道なんだと思
います」

「一本道？……………予め未来が決まっているって事？……………でも、それ
ってさっきの世界樹の話と矛盾しない？」

「……………あくまで基本的にです。樹で例えるなら、年輪の一番真
ん中の部分がそれに当たるでしょう。つで、その『決まった世界』
は、言わば物理法則のみで構成された『最も世界が望む世界の形』」

「？……………よく分からないんだけど」

「……………今まで聞いた話を統合して考えると、世界とは『魂を持
った存在同士が自らを維持する為に創り出した殻』の様なものなの
でしょう」

「殻？」

「……………聞いた感じだと、根源意志力とは『在る』と言う最大最
小意志力。なら、何に対しての在るだと思います？」

「え？……………ん……………無？」

ちよつと考えて自信なさげに言った巴の答えに、頷く夜衣斗。

「……………俺達の中に魔力孔と呼ばれる穴があつて、そこから根源意志力が流れ込んでくる。要するにそこで根源意志力が生じていると言う事で、生じているのなら、生じる原因がある……………つまり、世界の外は無だと言う事です。つで、無は無なのでですから無限です。そんな無に対抗するには、とても固い殻が必要になる。それが世界……………だと仮定できます……………まあ、守るとか維持するとか、そう言う意図があつて世界が出来たつて訳じゃなく、無から生じた在るが、その存在を維持する為に自然と集まつて、結果的に無から有を守る世界が出来たつて方が正しいでしょう。だからこそ、高密度の根源意志力・魂の中に魔力孔があつて……………在るが集まり続ける為に在るが入り続ける穴が自然と出来て閉まらなくなつて考えた方が自然でしょう……………つで、魂を守る為に肉体が出来、肉体を守る為に世界が出来、世界を守る為に現在が出来、現在を守る為に過去が出来、過去を守る為に未来が出来……………」

唐突に夜衣斗が喋るのを止めた。

聞いている巴が夜衣斗の話に困った顔をしていた為だ。

どう簡単に説明すべきか夜衣斗も困り始めると、巴は苦笑して、
「ん〜その世界が魂を守っているつて言うのが……………ピンと来る様な来ない様な……………」

と辛うじて言うと、何かを思い付いたのか、夜衣斗はちよつと考えて、

「……………飛矢折さんが、分かりやすい例えが一つありますよ」

「え？何？」

「……………気です。気は世界の理を維持し、強化する意志力物質だつてさつき春子さんが言つてましたよね」

「ええ。お祖父ちゃんもそう言つてた」

「……………じゃあ、何で世界の理を維持する必要があるんです？」

「……………そう言う性質だから？」

「……………何でそう言う性質になつたんです？」

「それは……………」

「……………そうする因子が、そうなる因子が世界にあるって事です」「じゃあ、世界が、常に無によって脅かされているって事?」

「……………そうなりますね。だから、気と言う意志力物質を魂が創り出した……………多分、気脈とかレイラインとか、そう言うのがあるんじゃないんですか?」

「うん。死んだ人の気が集まって出来た川が色々な所にあるわよ……………そう言えば、気脈は世界を守ってるって話を聞いた事がある」

「……………そんな風を守られている世界ですが、あくまで魂から……………『高密度の根源意志力の固まり同士が発する意志力が干渉し合っただけの世界』だとするなら、『魂と世界はそれぞれ別物』と言う事です」

「うん? そうなるよね?」

「……………ですから、いくら世界が強固な決まった道筋……………『正しい歴史』とでも言うべきでしょうか?……………があるって、魂はそれとは別の未来を、正しい歴史を拒絶する事だっているんじゃないんでしょうか?」

「……………でも、それって未来を予め知っていないと出来ない事だよね?と言う事は……………みんなが予知能力を持っているって事?」

「……………別に予知能力を持っていなくても、未来を知る事は出来ますよ」

「え? どうやって?」

「……………知ること、考える事……………まあ、要するに予測です。人はそうやって色々な未来を知っているじゃないですか」

「確かにそうだけど……………それを知った事で、人は正しい歴史を変えてしまっただけ?」

「……………知り、望み、それを実行に移す……………それだけでも、二つの可能性が生じますよね?」

「えっと……………しなかつた未来と、した未来?」

「……………そう言う事です……………まあ、もつとも、知らなくても正

しい歴史を人は違った方向へ歩もうとするでしょうけどね」

「未来を知らなくても？」

「……可能性・選択肢など、一つ以上の事柄はいくらでもあるでしょ？」

「確かにあるけど……」

「……じゃあ、どれが正しい歴史か分かりますか？」

「え！？えつと……分からない……よね？」

「……そうです。分からない事も、正しい歴史を人が拒絶する要因の一つになるんです。一つしかない未来を知る事で、それに抗う意志が生まれ、一つ以上ある未来がある事で、正しい歴史を歩めない場合がある。それでも、世界は物理法則通りの未来になりたい。でも、魂は己の魂に従った未来に進みたい。だからと言って、どちらかを無くしては、どちらも互いの存在を維持出来ません。魂と言うより魔力孔が無くなれば世界は維持出来ない。世界が無くなれば魂が維持出来ない。言わば、魂と世界は共生関係にあるわけです」

「……話が見えないんだけど……」

「……要するに、互いが互いを納得する形になればいいんですよ。もつとも安定した形、自然な形と言えはいいんでしょうか？」

「どう言う事？」

「……ですから、それが世界樹なんです」

「？」

「……要するに、世界が望む未来と魂が望む未来が違った場合は、世界が分裂する。パラレルワールド創り出すって事です」

「パラレルワールド？」

「簡単に言えば、自分達が住む世界と違った歴史を歩む世界の事です。……つまり、世界樹は、幹が正しい歴史に近い歴史。枝や根が正しい未来や過去とは違った歴史を表しているって事です」

「……ん〜でも、そんな事をして魂は大丈夫なの？分裂って事は魂をそれだけ分けているって事でしょ？それに世界そのものだって」

「…………それは問題ないと思いますよ？そもそも魂も世界も全て根源意志力で出来ているんです。半分にしても、新たに根源意志力を魔力孔から手に入れればいいんです。無が無限なら、それから生じる根源意志力も同じく無限でしょうからね」

「…………分かった様な分からない様な……………つで、それがどう予知の仕組みと関係しているの？」

「…………俺達がいる世界は、基本的に枝世界だと仮定します」

「うん…………え！？どうして！？」

「…………魔法と言う本来の物理法則ならありえない現象・事象を起こす事なる法則があるからです」

「と言う事は、正しい歴史の中には魔法を存在しない？」

「…………え〜っとですね」

どう説明しようか口に手を当てて少し考える夜衣斗。

ちよつとして、リフレクションサーバントを具現化。

「…………魔力孔から出てくる根源意志力が、魂・霊力・意志力じゃなくてこの場合は精神ですね・肉体もしくは物体・気・気脈・世界」

リフレクションサーバントが作り出した空中に浮かぶディスプレイに円を書き、その円の中に口にした名前を書く。

「…………これが魂を持つ存在と世界の簡単な図です……………つで、

これらを維持するのに余った根源意志力が魔力になり、それを使って魔法が構築されるわけです」

魂の円と魔力孔の円の間に新たな円を書き、魔力と書く夜衣斗。

「……………つまり、そもそも魔法は世界にとつて必要なものなわけです。だから、魔法が少しでも使われてしまえば、世界に取ってそれは正しい世界ではなく、それ故に、昔から魔法が使われていると言う俺達の世界は、俺達が生まれた時から正しい歴史から分岐している世界って事になります」

「…………じゃあ、私達は間違っている世界なの？」

「……………どう間違っているかの基準にもよりますけど……………枝世

界だから言っても、どんな枝世界であろうと正しい歴史は存在しているはずです」

「分岐した世界にも？」

「……………分岐した世界は言わば、分岐した要因を妥協した世界です。ですから、分岐した要因を含めての正しい歴史を自然と創り出すって訳です」

「妥協した世界……………あれ？でも、それだと危なくない？」

「……………何がですか？」

「だって、魔法で分岐をし続けるって事は、それだけ物理法則が変わってるって事でしょ？」

「……………あくまで妥協です。物理法則が変わってるんじゃないかって、世界が魔法の存在を渋々認めている。要するに物理法則にプラスしたって事です……………まあ、でも、あまり魔法による分岐が多くなるのはまずいのは確かでしょうね……………じゃなきゃ、退魔士と言う存在は生まれられないでしょうし」

「退魔士が？どう言う事？」

「……………飛矢折さんは魔法についてどう思います？」

「え……………えっと、便利？」

「……………まあ、大体肯定的な考えが出てくると思いますが。そもそも振り幅が無限と言っていていいほどあるんです。上手く利用すれば、どれだけの利益が出るか分かりません……………なのに、退魔士達は過去に魔法使いを排除した」

「危険な人達だったんでしょ？」

「……………確かにそう言う理由もあつたでしょうが、それ以上にその身に魔法を宿す退魔士達だからこそ感じる魔法に対する危機感があつたんじゃないかと思うんですよね。一種の魂と世界の防衛本能って事です。じゃなきゃ、人の中に……………いくら魔力孔と言う穴があるとは言え……………魔法が入り込む事を世界が許さないとしますよ」

「じゃあ、退魔士の人達は世界の防衛本能の為に、分岐人類にされたって事？」

「……………そうじゃなきゃ、何で彼らは退魔士なんて仕事をして
るんです？彼らの様々な能力なら、色々な職業に転用しやすいでし
よ？実際、それを利用して副業をしている人達もいるみたいですし
」
「ん〜でも、他に魔法使いとか魔物とか對抗出来る人達がいない
し……………それに、退魔士能力を表だつて使えば……………迫害されるん
じゃ……………」

「……………確かに、魔法と言う力や技術は、一部の人だけが扱える
物です……………そう言う理由も勿論あるでしょうね……………でも、だつ
たら余計にほつとけばいいと思いませんか？わざわざ自分達を迫害す
るかもしれない連中の為に進んで働きたいとは思わないでしょ？」

「……………確かに働きたくない……………かな？」

「……………まあ、理由はそれぞれの家系で様々でしょうけど……………
その根幹にあるのが世界の防衛本能じゃないと、納得できない部分
はかなりあると思うんですよ」

「う〜ん……………そうかもしれないけど……………でも、仮に世界が妥
協し続けたら、具体的にどうなるんだろう？」

「……………例えば、特定の物理法則が消失するとか、曖昧な世界に
なるとか、空想みたいな世界になるとか……………」

「……………今でも十分に空想の世界な気がするけど……………」

「……………確かにそうですね……………でも、最悪には至ってないから
いいんじゃないんですか？」

「最悪って？」

自分で口にしておいて、夜衣斗は少し躊躇って、

「……………世界の消失ですよ」

「……………世界の消失!？」

「……………世界はあくまで物理法則によって構築されているんです。
それなのに、妥協し過ぎて魔法に物理法則を取って替わられたらど
うなると思います？」

「……………どうなるって……………魔法の世界になる？」

「……………多分、違います……………魔法は、世界構築の為に構築され

るものじゃありません。だから、物理法則に魔法が取って替わってしまったら、整合性が崩れ……一定量の魔法なら世界の自浄作用が働くでしょうが……それ以上になると、連鎖崩壊を起こし、世界は崩壊してしまうんじゃないかと……まあ、その前段階で、普通の人は魂も維持出来なくなるでしょうから、人類滅亡が先でしょうけどね」

「……」

あまりにもとんでもない話に絶句する巴に、夜衣斗は苦笑して、

「……話を戻しましょう……つまり、『予知は正しい歴史を歩んでいるパラレルワールドを見ている』って事です。多くの場合は正しい歴史を歩むでしょうから、普通の事なら高確率で予知が当たりますが、魂の介入ではずれもする。そして、魂以上に可能性の振り幅がある魔法が関わる事で、予知するにはその魔法が存在しているパラレルワールドを探して見ないといけないですからね……だから、魔法が多く関わってたり、高度な魔法が関わってたりすると、予知が、目的のパラレルワールドを探すのがより難しくなるってわけです」

「じゃあ、星波町じゃ予知は使えないんだ……」

少し残念そうに言う巴。

予知が使えれば戦況が有利に働くのは間違いなかったのだが……

「……そうとは限りませんよ」

予想外の夜衣斗の言葉に、巴は驚き、

「え？なんで？武霊とか、忘却現象とかって魔法なんですよ？」

「……ですから、魔法が関わっていない事柄を予知して貰えばいいんですよ」

「？……どう言う事？」

「……予知して貰って、その事柄が予知できなかつたら、そこに魔法が関わっているって事でしょ？」

「あくなるほど……流石黒樹君ね」

「……」

巴の褒め言葉に、夜衣斗は照れるより困った雰囲気になり、巴はそれに思わず苦笑した。

????

四十八、『後見^{あとみ} ねね』

「……………あの……………」

次に自己紹介の為に立ち上がった人物に、夜衣斗は戸惑いながら声を掛けた。

何故なら、立ち上がった女性が立つたまま寝ているからだ。

「あゝこの人はあゝこう言う人だからあゝ気にしないでえゝ」と隣にいる先見かなたがフォローした。

夜衣斗

星波学園大学院生……………つて、星波学園にも大学院あるんだ……………まあ、とにかく、常に寝ている人。その為か、髪の毛も服装もぼろぼろで……………ちゃんとすれば明らかに美人なの……………非常に勿体無い人。

この人も先見さんと同じく早見家の分家らしく……………早見家の分家はこんなばかりなのか？

退魔士能力は、『後渡りの眠り』

触れた対象の過去を見る事が出来る退魔士能力。ただし、過去を見るには過去を見る対象に触りながら寝る必要があるらしく、寝ている間は無防備になってしまう。ちなみに、安定している能力らしく先渡りの眠りの様な事にはならないらしい。また、一度その道のプロなどにより使用された道具や武器などを半覚醒状態で使う事により、そのプロと同じ様に扱う事も出来るらしい……………若干不便なサイコメトリーみたいなものか……………

武装守護霊はなし。

寝てばかりいるから当然か……………

???

四十九、『射眼 可憐』

「…………… 本当に瞳可憐さんなんですネ……………」

改めてまじまじと見た為か、それとも初めて芸能人を生で見た為か、若干いつもと違う夜衣斗。

その夜衣斗に微妙に複雑そうな視線を向ける巴。

その巴を面白そうに見る春子。

その春子を見て溜め息を吐く沙羅。

その妙な連鎖に気付いた可憐は苦笑。

その可憐の反応に周囲の連鎖に気付いた夜衣斗はちょっと慌て、この場に居るほとんどを苦笑させた。

夜衣斗

星波学園中等部二年。瞳可憐の名前で芸能活動をしていて、最近

いろんな所で見かける。その為か、あまり星波学園にいないらしく

…………… 今回いたのは不運なのか幸運なのか……………

日本五体退魔士家系の一つ射眼家の次期当主射眼乙女の妹らしいが、退魔士能力は上手く受け継げなかったらしく、名前も付けられないほど退魔士能力として弱過ぎる魔法が発現し、視力を自由に変えられるぐらいしか出来ないとの事…………… 十分凄い気がしないでもないが…………… 退魔士としてやっていくには力不足なのは間違いないか…………… なお、本来射眼家の血筋の人間は、放浪癖があるらしく、基本的に決まった所に定住しないらしいが、そういう所も受け継がれなかったらしく、琴野家のお世話になっているとか…………… と言う事は、琴野家は芸能関係にも手を出しているって事だよ…………… もしかして、思っている以上に琴野家って規模がでかいのか？

武装守護霊は、無し。

完全に支援組だよ……………

???

五十、『けものぢ獣屋 ゆり』

五十一、『獣屋 さり』

五十二、『獣屋 れり』

「……………」

次に自己紹介の為に立ち上がった三姉妹の次女に睨まれる夜衣斗。理由が分からず困惑していると、長女が笑って、

「ごめんなさいね。夜衣斗君。この子、前のはぐれ警報の事を根に持っているのよ」

ピンとこない夜衣斗に、三女が呆れた表情で、

「前にはぐれ警報を出した直後に、はぐれを倒したでしょ？その時のはぐれ警報で恥をかかされたと思ってるのよ、うちのお姉ちゃんは」

「だって、あんなタイミングで倒す事は倒す事は無いでしょ」

三女の言葉に次女はムスツとし、また夜衣斗を睨む。

謝ったら謝ったで火に油を注ぎそうだったので、夜衣斗はどうする事も出来ず固まるだけだった。

夜衣斗

星波町商店街にあるペットショップ獣屋を経営している三姉妹で、自警団のはぐれ警報担当。

長女のゆりさんが夜・次女のさりさんが昼・三女のれりさんが朝をそれぞれ担当し、星波町の海岸と麓の近くにあるはぐれ監視塔からの連絡を基に商店街にある自警団本部ではぐれ警報を出しているそうだ。

星波学園創設時にテストケースとして呼ばれ、武霊発生の混乱でそのまま星波町に残ってしまい、どうしようか悩んでいる時に春子さんの誘いで鯉の会に入ったそうだ。

学園創設時に生徒として学園に入った為、自警団団長の幸野美春さんと長女のゆりさんは同級生らしく、仲が良いとか。

なお獣屋家は、代々動物関連の退魔を専門に行ってきた家系であり、その関連で昔からペットショップを経営しているらしい……そう言えば、たまにテレビとかで見かけた事がある様な……

ちなみに、ゆりさんはおおらかで、さりさんはプライドが高く、れりさんはまじめな性格をしている模様。

退魔士能力は、『けもの獣の王おう』

名前通り、動物を意のままに操る能力。魂の一部を対象の動物に入れて操る為、操るだけじゃなく、その動物の五感も共有する事が出来るらしい。……まあ、とは言っても操れる動物に得意・苦手があるらしく、ゆりさんは夜行性の動物・さりさんは昼行性の動物・れりさんは特に苦手なものはないらしいが、動物自体が苦手と根本的に自身の能力と相性が悪いとの事……なお、得意な動物と同じ種類の魔物なら普通の動物の様に操れるらしい……と言う事はメガネベアも操れるのか？……いや、あれは動物と言うより……人形か？

武装守護霊はなし。

自警団所属なのに武装守護霊を持ってないのは彼女達だけらしく、だからはぐれ警報担当をしているようだ……彼女達が自警団に入っているって事は、自警団の動きも鯉の会は注視しているって事か？

????

五十三、『むしや蟲屋かがと 夏牙斗』

「むしや蟲屋……かがと夏牙斗……」

とほそつと言った後、黙ってしまうロングヘアの青年。

長く伸びた髪で顔のほとんどを隠している為、どんな顔か分からず、表情も読めないが、

(……………多分、恥ずかしいんだろうな……………)
と同じ様に顔を髪で半分ぐらい隠している夜衣斗は思った。

「大変夜衣斗ちゃん！」

唐突にそんな事を言う春子。

何事かと視線を向けると、真剣な面持ちで、

「キャラが被ってるわよ！」

「……………被ってません」「被ってない……………」

ちよつとずれて互いに否定する夜衣斗と夏牙斗は、困った様に互いを見合わせた。

夜衣斗

星波商店街にある花屋の店員。

春子さん曰くキャラが被っているらしいが……………俺はこんな感じなのか？……………名前の末尾が同じと言えば同じだが、それぐらいだろ？……………多分。

彼も星波学園創設時のテストメンバーで、獣屋さん達同様の流れで星波町に残り、鯉の会に入ったとの事。

詳細は語ってくれなかったが、過去に退魔士の禁を破ってしまつた為に一族から追放された姉がいるらしく、その行方を密かに探しているとか……………つで、俺にそれらしき人を見た事がないかと聞いて来たんだが……………まあ、当然、それらしき人を見た覚えはない。

退魔士能力は、『むし蟲の王おう』

名前通り、虫を意のままに操る能力。獣の王同様に魂の一部を対象の虫に入れて操る為、操るだけじゃなくその虫の五感も共有する事が出来るらしい。人によって操り易い虫が違うらしく、彼の場合は名の通り夏の虫が得意だとの事。また、得意の種類なら、同じ種類の魔物も操れるとか……………凄いが、今は関係ないな……………つで、蟲屋さんの得意な虫は蜘蛛だとか……………

武装守護霊は、『ミルキィ』

……………確か、一昔前にあったアニメのヒロインだったかな？主人

公の姉代わりをする為に未来から送られてきたアンドロイド……いや、女性型だからガイノイドだったか？……ん？どうも実際に完成していない技術の言葉は曖昧でいけないよな……まあ、どうでもいいが……とにかく、そんなキャラだったか……と言うか、これ、戦闘用のキャラじゃ無かったよな……武霊になっただろうなるんだ？何らかの戦闘能力が付与されているとは思うが……と言うか……どんだけお姉さんが恋しいんだろうか……ん？なんか家族関係も微妙に似てるような……いや、似てないか、俺は妹だと知らずにたまに会ってたんだからな……これはこれで凄い状況だよな……

「……？」

五十四、『髪結 零子』
かみゆい れいこ

「ねえ。今回の事が終わったら、私に髪を切らせてくれない？」
そう言っつて、片目を髪で隠し、腰まである髪を腰に巻いた女性が夜衣斗に微笑む。

微笑んでいるが、どこか有無を言わさぬ雰囲気を出しており、夜衣斗は気圧され、思わずちよつと後ろに下がってしまう。

「蟲馬鹿は、駄目だったけど、あなたならまだ間に合うわ。ねえ、私に切らせなさいって、カッコよくしてあげるからさ」

頷けば今にも髪を切りに迫ってきそうな感じに、隣の夏牙斗が首と手を振って無言で止めとけと言っている様だった。

なので、夜衣斗はとりあえず、
「……え？とにかく、自己紹介をしてくれませんか？」
と言うしかなかった。

夜衣斗

星波商店街にある美容院ビューティフルの美容師。

腕はいいらしいが、かなり強引な性格と独自の感性を帯びてい

るせいで、時よりお客の髪を勝手にオリジナルカットで切ってしまう
いよくトラブルになってるとか……っで、それらの実験台とかに
商店街に住む退魔士達がさせられていて、特に蟲屋さんはトラウマ
になるぐらい困った髪型にされたとか………トラウマになるぐ
らいの髪型ってどんな髪型なんだろうか？

髪結家は、昔から床屋や美容院を経営し、それを利用して退魔を
行ってきた為、彼女も自然と美容師になったらしいが………聞く分
には美容師には向かないんじゃないだろうか？何でも芸術家のシ
ルフさんに弟子になれば、弟子になればと言われているらしい………
…やっぱり芸術は難しいな………

退魔士能力は、『髪縄^{かみなわ}』

自身の髪を自在に操れる能力。髪を操る能力の為か、髪が異常に
丈夫なのに柔らかい。その為、普通のはさみでは切る事が出来なく、
美容院にもいけないそうだ。っで、切る場合には、魔法が込められ
たハサミ、特に黒樹家の黒き大樹で作ったハサミが切り易らしい
………妙な所で黒樹家の名前が出てくるな………

武装守護霊は、『鉄男』

………確か、一昔前の映画の主人公だったかな？俺は見た事がな
いが………両手が鉄の改造人間だったけ？………あれ？なんか他に
も同じ様な話の映画があった様な………まあ、興味ないからどうで
もいいか………

????

五十五、『ことこの琴野 さび沙羅』

「わたくしの自己紹介はよろしいですわよね？」

そう言う沙羅に、夜衣斗は微妙な沈黙。
ちよつとして、

「……………言い難い退魔士能力なんですか？」

そう鋭い事を言われ、沙羅は顔を思わず引きつらせる。

その退魔士能力を知っているであろう周囲は困った顔になったので、夜衣斗はそれ以上聞くのを止めた。

夜衣斗

星波学園高等部一年。星波学園理事長の孫娘にして現星波学園統合生徒会統合生徒会長にして鯉の会星波支部の実質的リーダー……………
…肩書きが更に長くなったな……………。

琴野家は、学校運営をメインに間接的に関係ある業界・産業を手広く運営している一族のようで、人工島を買い取れたり、他の退魔士達からたかられても大してダメージを受けないほど資産を持っている模様。しかも、聞く限りでは、親類縁者全て財界人もしくは政界人らしく……………なんか、彼女の一族つて、裏から国を動かせるんじゃないんだらうか？……………そう言えば、星波学園の前身である空港建設も、彼女の家の親類が関わっているばいよな……………ん〜

退魔士能力は不明。

どうも本人が言いたくないらしく……………ふむ……………言いたくない能力ね……………

後で春子さんから聞いた話なのだが、彼女の一族は全世界の退魔士の中で最古かつ最大規模・最大勢力を誇る一族らしく……………他の

国でも大体彼女の一族は財界人・政界人なのだそうだ……って事は、国単位ではなく、世界単位で裏から動かせるって事か？……ん〜……って、肝心の退魔士能力は、色々な意味で表の世界で有名な能力だとか……色々な意味で有名な能力で、知られる事を回避する能力、世界中にいる上にその全てが財界人・政界人……ふむ？もしかして……『あれ』か？……いや、だが、『あれ』だったら、普通は『退魔される側』なんじゃ……だからついさっきまで退魔士が実在する事を知らなかった俺には言いたくないって事か？……ん〜そう考えるとじっくりこないわけもないが……それだけの理由じゃ今ここで言わない理由としては弱いよな……

???

「……………そう言えばさっき、尻拭いって言っていましたけど……汚職事件で捕まった政治家……………確か、鬼角良蔵おにつのりむらでしたっけ？……その人とはどういう関係なんですか？」

夜衣斗のその問いに、沙羅は少し躊躇して、

「わたくし達琴野家は、日本五大退魔士家系の一つ鬼角家おにつのの分家なのですわ」

「……………と言う事は、鬼角家は日本五大退魔士家系の一つだったわけですか……………黒樹・操形・射眼・口導、そして、鬼角家。五大退魔士家系の血筋が一応全て揃ってますね……………なるほど、鬼ですか……………」

夜衣斗の、呟く様に言った最後の言葉に、沙羅は少し警戒する様子を見せた。

その様子に夜衣斗は少し笑って、

「……………まあ、とにかく、丁度夕食の準備が出来た様ですから、ここで一回休憩を取って、その後、主要メンバーだけ俺の所に集まってください。作戦の詳細を決める為に、いくつか聞きたい事、確認したい事がありますので……………」

特に何も聞かない夜衣斗に、沙羅は少しだけ安心した様に小さく

息を吐いた。

飛矢折

遅めの夕食を終えた後、黒樹君を中心にみんなが集まった。

メンバーは春子さん・統合生徒会長・芽印・屋写さん・字導さん・木世一さん・シールドさん・獣屋ゆりさんの八人と……何故かあかし……黒樹君から離れるタイミングを間違えたちゃったみたいで、しかたなくここに居るのが正直な所。

黒樹君は、あたしがいる事を特に気にせず、

「……では、俺の考える星波町奪還作戦をお教えします。素人考えなので、疑問やおかしな所があるとは思いますが、その時は遠慮なく指摘してください」

そう言ってリフレクシオンサーバントを具現化して、みんなの真ん中に星波町の簡易地図を映し出した。

「……まず再確認なのですが、俺達の目的は、星波町を三島忠人から奪還。つまり、星波町住民を含む、ここにいる全員の日常への帰還……そう認識していいですね？」

黒樹君の確認に、全員に頷く。

「……だとすると、俺達側にはかなりの制約が出来てしまいます……一つ、『通常の環境での武霊使用禁止』……これは、三島忠人の武霊能力により武霊を奪われない為の措置です……二つ、『操られている人の前での退魔士能力の使用禁止』……これは操られている人が催眠を解かれた後も操られていた間の記憶を保有している為の対策です……三つ、当然の事ながら、『操られている人への通常の方法での攻撃禁止』……まあ、これは理由を言わなくても分かりますよね？……これら三つの事を作戦の基底とします」

黒樹君のその制約に、ほとんどの人が戸惑いの表情を見せた。

「夜衣斗ちゃん。それじゃ私達は何もできないくない？」

春子さんのみんなの疑問を代表した問いに、黒樹君は首を横に振

り、

「……………三つの制約は一見俺達を何も出来なくさせている様ですが……………要はやりようです……………まあ、その事は後で説明しますから、先に作戦内容を言わせてください」

「それは別に構わないけど……………」

黒樹君の考えがいまいち分からないのか、春子さんはちょっと困った顔になった。

「まず最初に俺達はある場所を奪還します。そして、その時に三島側がするリアクションで、作戦の流れが大きく変わる事を認識しておいてください」

「リアクションでですか？」

統合生徒会長の疑問の声に、黒樹君は頷き、

「……………三島忠人が明確に操っている人達を人質に取る様な行動を見せたら、俺達は多少の被害を無視してでも全力かつ速攻で三島忠人を倒さなくてはいけません」

その黒樹君の言葉にほとんどの人が驚いて、あたしも思わず黒樹君の顔を見つめよう。

「……………操っている人達を安易に人質に取ると言う事は、今回の事に深い考え・目的が無いと言う事です。そんな人間が長期間町を支配し続けたら……………きつと速攻で倒しに行った時に出る被害以上の被害を出し続けるでしょう……………なら、被害が少ない方が……………まだマシなんじゃないんでしょうか？」

「それはそうかもしれませんが……………」

さきほどまで黒樹君が言っていた事と、正反対の事に、全員が困惑した表情を見せる。

「その根拠は一体何なの？」

全員が困惑する中、春子さんが最もな疑問を口にした。

「……………もし、今回の事に三島忠人なりの考え・目的があるのなら、それは今の状態をある程度の期間維持しなくてはいけないと言う事です。何故なら、三島忠人は星波町全体を支配している。つま

り、『町単位で何かをするつもり』だと言う事で……だとしたら、どんな事であろうと、それには多少なりとも時間が掛る。そして、時間が掛ると言う事は、周囲の町や国に不自然に思われる様な事をしてはいけないと言う事です……人質の場合で考えるなら、人質を取ってその人質に仮に俺達が攻撃して死傷者が出た場合、とんでもない異変が起きているわけで……そんな事になったら連鎖的に三島忠人にとって厄介な事が起こる可能性が高い。ただでさえ、俺達のような厄介な事が既に起きている訳で……それを考慮しないなら

「時間が経てば立つほど被害が出るって事ね」

春子さんの言葉に頷く黒樹君、

「……もつとも、俺としては三島忠人が考えなしたと言うのは考え難いんですけどね……今回の事は突発的な事を利用しているとは言え、かなりの事前準備が無ければここまで成功する事はないでしょうからね……ですが、そうになると、星波町奪還はより難しい……腹の探り合いの様な戦いになるでしょうね……」

どこか嫌そうに言う黒樹君。

後で聞いた話だと、黒樹君はじっくり考えるのは得意だけど、瞬間的に考えるのは苦手らしくて、対人戦の様なものも全て駄目らしいんだけど……あたし個人はそうは思えないんだけどな……

「……とにかく、俺達が最初に奪還するのは……ここです」
そう言って黒樹君が指差したのは……星波駅だった。

????

夜衣斗のクラスメイトにして友人の村雲勇人の朝は早い。

まだ人がまばらにしか乗っていない始発電車に乗り、星波町で新聞配達バイトをした後にギリギリの時間で登校する。

それが勇人の日課なのだが、

「……………なんだこりゃ？」

電車がトンネルを抜け、まだ暗い早朝の星波町が窓の外に現れる。はずだったが、先に目に付いたのは、線路上を取り囲むように展開し始めるシールドサーバント達だった。

意味が分からず唖然としてみると、シールドサーバントが見えないシールドを展開し、シールドのトンネルを作り出す。

どう考えても何かからこの電車を守る為にやっているとは思えず、大慌てで周りを見回すと、見た事がない大型バイクに跨って電車で並走する夜衣斗が見えた。

「無免許運転かよ……………」

何となくそう突っ込んでおきながら、こんな時間に夜衣斗がこんな事をしている事に勇人は嫌な予感に襲われた。

その予感はすぐさま現実の物となる。

線路脇の家々から次々に武霊達が飛び出し、シールドを破ろうと攻撃し始め、夜衣斗がそれを撃退する為にバイクからガトリングガンらしき物を出し、連射。

僅かにいる勇人以外の乗客がようやく異常事態に気づき、騒ぎ始め、その内の何人かに武霊使いがいたのか、背後から武霊を具現化。その光景に、勇人はぎゅっと拳を握り締めた。

春休み中に奪われた自分の武霊。

本来の日常にない物なのだから、大して影響は無い。

そう思っていた。

いや、思おうとしていた。

だが、夜衣斗が来てからというものの、武霊に関する事件が立て続けに起こり、その事件全てに夜衣斗が巻き込まれている。

その事に、勇人は歯痒く思っていた。

会ったばかり、出来たばかりの友人であろうと、友の苦境に何も出来ない自分。

ちよつと前の自分であったのなら……

襲い掛かる武霊をたった一人で撃退する夜衣斗の姿に、そう思わずにはいられない勇人は、夜衣斗を見ている事しかできない。

だからこそ、気付いた。

「……………何で自警団の武霊に襲われているんだ？」

勇人が疑問を口にするより少し前に、星波町駅前で最初の動きがあった。

夜も明けていない星波町駅には町中と同様に笛の音の放送がされている。

それにより操られている駅員や出勤・登校の為に駅に来ている人達。

彼らは普段通りの行動をする様に命令されているらしく、意思のない瞳のまま普段通り駅のホームなどにまばらにいた。

そんな所によれよれの作務衣を着たフランス人・ユベールがふらりと現れる。

どこから現れたのか、あまりの唐突ぶりに普通なら驚く所だが、誰も反応らしい反応はしない。

その事に若干寂しそうな顔になりつつ、ユベールは夜衣斗に頼まれた事を始める。

ユベールの退魔士能力シルフ。

それは風を操り風になる能力。

風。すなわち空気の動き。

そして、音は空気の振動。

つまり、やろうと思えばユベールは『特定の音だけ』を増幅する事も、『消す事も出来た』。

不意に駅にいた人達の瞳に意思が宿る。

もつとも、飛矢折巴の様に何らかの異常な行動を命令されたわけではないので、自分達が直前まで意思を奪われていた事に気付いている者はいなかった。

強いて言えば、何故かホームに突っ立って辛そうに目を瞑っているフランス人に不審な視線が集まるぐらい。

もつとも、その視線を受けているユベールは、それを気にする余裕はない。

特定の音だけを消す行為は、繊細でかつ継続的に能力を行使しなくてはいけない作業である為、ユベールへの負担が大きい。その上ユベールは『ある目的』の為に、その範囲を少しづつ広げていた。

駅のホームから駅。駅から駅の周辺。駅の周辺から星波商店街・星波デパートの付近。

そこまでがユベールの限界だったのか、それ以上は笛の音が消える範囲は広がらなかった。

だが、それでも音が消える範囲が広がる度に催眠が解ける星波町住人。

それと共に催眠が解けない住民もあり、その者達は周囲の異変を三島忠人に報告する為に星電を取り出した。

早朝の仕入れから戻った八百屋の主人は、自警団に所属する武霊使いだっただ。

その為、他の星波町住人とは違い、携帯音楽プレイヤーを持たされておられ、それを常に付ける様に命令されていた。

それ故に、ユベールの能力が効かず、催眠下のままである為、催眠から解放された八百屋の主人の妻は夫のいつもと違う雰囲気と眉を顰め、寝ぼけていると勘違いした。

「いつまで寝ぼけてんのあんた！ シャキツとしなさい！」

そう言つて夫の後頭部を叩く妻。

いつもなら、そこで主人はへらへら笑いながら謝るのだが、今日は、

「起きてる」

そう感情のない声で言つただけだった。

不気味なその反応に、妻はようやく夫がいつもしていないイヤホンをしている事に気付いたが、その意味が分からない。

妻が困惑している間に、夫は星電を取り出し、どこかに連絡しようとした。

その瞬間、何かが噴出する小さな音が聞こえ、連絡をしようとしていた夫が意識を失つて倒れる。

「あんた!？」

あまりの事に驚きつつ、反射的に倒れる夫を支える妻。

その近くに唐突にPSサーバントを着た顔馴染みの黒樹春子が現れ、イヤホンと携帯音楽プレイヤーを夫から奪い取つた。

「は、春ちゃん!何!なんなの!なんで!」

訳が分からない妻に、

「ごめんなさい。説明は後ですから、今は黙つて第二シエルターの方に避難してて」

と更に訳が分からない事を言つたが、その見た事が無い真剣な表情に、はぐれの発生で緊急事態には慣れてる妻は頷き、

「分かつたわ。第二シエルターね!でも、夫はどうするの!？」

「今回は役に立たないからそのまま持つてちゃつて!」

武霊使いでもない春子にそんな事を言われ、更に困惑する八百屋の妻だが、妻が何かを言う前に春子はPSサーバントの通信機能を使い、どこかに連絡し始めた。

しかたがないので意識を失っている夫を野菜を持ち運ぶ為のカートに乗せ、外に出ると、同じ様に訳が分からず外に出てくる商店街住人を目撃し、

「今度は何が起こつてるわけ?」

思わずそつつぶやくが、それを答えられるであろう春子は人とは思えない速度でどこかに行ってしまった。

????

星波町駅周辺の異変はすぐさま三島忠人の下に伝わった。

三島忠人は夜衣斗達が星波町を奪還する為に動き出す事を読んでおり、その対策として主要施設がある場所に自警団・武風のメンバーを配置し、かつ武霊使い以外の住民に数分の置きにメールを送信する様に指示を出していた。

その為、携帯音楽プレイヤーにより催眠を掛けられている武霊使い達を警戒していた退魔士達は、催眠が解けた事によりメールが止まり、星波駅周辺を奪還した事を知られるのを遅らせる事が出来なかった。

「星波駅が奪還されたのなら、始発の武霊使いに笛の音を聞かせない様にするはずだ。直ぐに自警団の武霊を向かわせる」

こうして夜衣斗の行動を先読みした三島忠人のその命令で、線路の奪還を始めた夜衣斗の所に自警団の武霊達が現れる事になった。

夜衣斗

反応が思ったより早いな……………。

襲い掛かってくる武霊をキバのガトリングガンで撃退しながら、俺は始発電車と並走していた。

シールドサーバントで電車に笛の音を届かせない様にシールドを張り、そのシールドを破ろうとする武霊達を撃退する……………ん……………
……………作戦には必要な事とは言え、無免許運転と言っか……………人生二回目のバイクは……………いくら自動運転だとは言え、怖いと言っか……………
……………まあ、今はそんな事を気にしている余裕はないが……………

周囲に展開しているスカウトサーバントから送られて来る映像には、武霊使いらしき姿はない。

かと言って、これだけの数を同時に離れた場所から見させる武霊

はいない……………と言う話だから、少なくとも線路脇を目視出来る範囲に居るのは間違いなく……………それはつまり、『目論見通り』と言う事！

飛矢折

はぐれが発生する様になつてから、はぐれ発生ポイントに近い場所・あたしの住む星波町の隣町星取町側の海近くと、星波山の麓にはぐれ発生を監視する為の監視塔が建てられて、普段はそこに自警団員が数人だけ常駐してるんだけど……………

「ぎつしりいますね……………」

隣にいる操形先輩がそうあたしに言い、あたしはうなずいて答えた。

あたしも操形先輩も、PSサーバントを着こみ、後ろには黒樹君から命令権を移譲されたサーバント達が浮いている。

あたし達が居るのは海側のはぐれ監視塔……………の近くの空き家、何でも、星波町の空き家のいくつかは、万が一の場合の隠れ家、もしくは他の鯉の会のメンバーが急遽着た場合の住居にする為に鯉の会が密かに買い取っているらしく、今いる場所もその一つだこの事。

だから、芽印の退魔士能力でここに直接来る事が出来、襲撃のタミングを計る事が出来ているんだけど……………普通は二三人しかない監視塔に、十数人がぎつちり入っていて、その全員が双眼鏡を線路の方に向けて微動だにしてなくて……………何だか気持ち悪い。

ついさっきまで通常の人数しかいなかったのに、奪還作戦が始まつて直ぐに人が集まつてきて、武霊を出して、こうなつただけ……………黒樹君が考えていたより反応が早い様な……………誰かが失敗でもしたのかな？

まあ、なんであれ、誤差の範囲内だろうし、星波駅周辺を奪還すれば、襲撃時間を始発に合わせているから、こっちの次の狙いが始発電車だと直ぐにばれるはずだと黒樹君は言っていた。

だから、逆にそれを利用して、敵戦力を始発電車防衛に回っている黒樹君に集中させ、別動隊で武霊使いを奇襲。

それが黒樹君の次の作戦だった。

そして、黒樹君曰く、

「……………星波町に入る始発電車は、星取町側からです。だとすると、星波町奪還を短時間でやってのけた三島忠人なら、備えをしていないわけがありません。そして、備えるなら線路を見渡せる場所……………海側のはぐれ監視塔が最適でしょう。ここなら武霊使いを一ヶ所に集めて、同時に使わせる事も出来るでしょうし……………守り易い」

だそうだったんだけど……………

「ここを守っている武霊の気配が感じられませんね……………」

あたしも思っていた事を操形先輩が呟いた。

確かに監視塔の周りには武霊の独特の気配が感じられない。

これだけの武霊使いを無防備にするとは思えないし……………かと言ってこんな状況で武霊を出していないと言うのも不自然。

だとすると……………黒樹君が懸念していた遠距離型？

そう思ったあたしは、PSサーバントの通信機能を使って、芽印に繋げる。

今回の作戦を開始する時、黒樹君はあの場にいた全員にPSサーバントを着させた。

PSサーバントは着ると同時に着用者の体内にナノマシンと言うのが注入されるので、これにより、黒樹君の膨大な魔力が間接的に着用者に付与され、あたしの様な魔法をその身に持たない者でも三島忠人の武霊能力が効かなくなる……………らしい。

実際に一度は操られていたあたしが笛の音を聞いても平気なのだから、黒樹君の予想通りなんだろうけど……………

目の前に芽印の顔が映り、

「はいはあくい……………あなたの芽印ちゃんですよ……………」
やや疲れた表情を見せた。

芽印は実働メンバーの移動を担当していて、さつきまでみんなを移動させていたはず。

だから、疲れているのは仕方がないけど……芽印の回復を待たせられるほど状況はよくない。

「持ち場に着いた？」

「持ちろんよ。絶景絶景！」

芽印の基本的な持ち場は、星波町で最も高い場所にある星波デパートの屋上。

もちろん、星波デパートにも携帯音楽プレイヤーで催眠を掛けられている人達が配置されていたけど、それはPSサーバントのステルス機能で見えなくなった実働メンバーが一人一人密かに眠らせて解放しているから、問題はない。

「じゃあ、こっちの方に武霊らしき姿がないか見てくれない？」

「ん〜近くにいな……うわ……」

喋りながらこっち側を見たのか、芽印が何かを見て絶句した。
物凄く嫌な予感。

「えっと、視覚同調機能オン。対象飛矢折巴」

その言葉と共に、あたしの目の前に「早見芽印からの視覚同調を許可しますか？」と書かれているぽいぐちゃぐちゃした文字が出てきた。

……なんか抵抗を感じるけど……

「視覚同調を許可します」

と言うと同時に、もう一つの視界・芽印が見ている光景が現れたんだけど……うわ……これは、ちょっと予想外……こんなふうすればいいんだろう？

芽印から送られてくる映像に映っていたのは、海に浮かぶ『巨大な戦艦』だった。

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 57

?????

武装風紀委員会。

星波町で起こる武霊に関する事件事故を学生が取り締まり、事前に防ぐ為の組織。

通称・武風。

統合生徒会の直轄組織と言う事になっているが、三島忠人が武装風紀委員長になってから独立性を出し始め、小さいざこざを繰り返していた。

その顕著たるものの一つに、統合生徒会が把握していない武霊使いが何人か武風委員になっていると言うのがある。

あれこれ理由を付けて三島忠人がその者達の存在を隠している事に、琴野沙羅は不審には思っても、深くは追求しなかった。

正直、三島忠人の事を独自性が強く厄介だとは思っても、少なくとも生徒を守ると言う一点に置いては、信頼出来る相手だと思っていたからだ。

結局、その思いは見事に裏切られたわけなのだが、そこから考えると、三島忠人は今回の事を武風委員長になった時から準備をしていたと言う事になる。

「あんな武霊……………わたくしは知りませんわね……………」

芽印に呼び出され、星波デパート屋上から海側を沙羅を見ると、そこには巨大な戦艦が海に浮かんでいた。

「でしょ……………って事はさ。武風の『隠し玉』達だよ……………」

「そうなりますわね……………」

芽印の言葉に同意しつつ、沙羅は眉を顰めた。

沙羅の把握している武風の隠し玉は、少なくとも五人。

全員が大学から星波学園に入った者達で、

大学部一年 島村 陽一郎

大学部二年 香城南 「こいつは」
大学部三年 茶郷薫 かある
大学部四年 鳥越道重 みちしげ
大学部四年 島村陽子 しまむら しょうこ
の五人。

その五人は、三島忠人の武風委員長権限で武風に入っているが、その武霊を誰も見た事が無い。

それどころか、武霊使いではないと公言している為、役場からも呼ばれる事が無いので、調べようもなく、巨大戦艦が誰の武霊かは不明。

これにより、武霊使いを気絶させると言う対武霊使い戦術の基本が使い難い。

直接倒そうにも、まともに武霊が使えるのは夜衣斗のみなので、夜衣斗を向かわせれば次の作戦に支障が出る。

かと言って退魔士能力のみで、見た目からして完全に戦闘タイプのレベル2具現武霊と闘うのは明らかに危険。

だからと言ってこのまま手をこまねいていれば、作戦が破綻しかねない為、

「とにかく夜衣斗さんに現状を連絡しましょう」と言うしかない沙羅だった。

夜衣斗

琴野さんからの連絡で、海に出現した見た事がない戦艦の武霊が具現化した事を知った俺は、慌ててスカウトサーバーバントの一機を海の方に向けると……あゝ確か、一昔前にあったアニメに登場する戦艦だったけ？女性ばかりの乗り組員に、気弱で朴念仁の男艦長が主人公の話だった様な……まあ、話の内容より……あれに登場する主人公達の戦艦か……不味いな……あれ、これでもかつてぐらいに新旧入り混じった兵器を積んでるって設定だった……

あんな武霊を持つてる奴がいるなんて聞いてないんだがな……

『今は』 オウキを使う訳にはいかないし…………… っち…………… 仕方がないプランを変更して、作戦を少し圧縮…………… ん？

電車が後もう少して星波川に掛る鉄橋に差し掛かるうとした時、その鉄橋の上に誰かがいる事に気付いた。

先行させているスカウトサーバントのカメラをズームさせると…………… 青葉さん？

????

電車の先頭車両に移動した勇人は、鉄橋に武霊研究部現部長の青葉愛がいる事に気付いた。

周囲で起こっている状況から考えて、武霊使い達が何者かに操られている。

そう考えた勇人は、愛の登場に戦慄を覚えた。

何故なら、武霊を奪われる前まで勇人は武霊研究部に所属しており、愛の武霊の能力を知っているからだ。

「くそ！愛っちが操られているなら、ヤバイ！まともに戦うな黒樹！』一瞬で殺されるぞ』！」

車窓を叩き、夜衣斗に忠告しようとするが、自警団の武霊と闘っている夜衣斗は気付かなかった。

夜衣斗

美羽さんが所属する部活の部長で、死神みたいな武霊を持つ。

その程度の認識しかない人だが…………… たった一人で立ち塞がっている事から考えると、かなり強いって事だよ……………

そう思って警戒した俺は、急いで指示変更をした後、キバに速度を上げさせ、電車の前に出た。

それと同時に、シールドサーバントを大量に追加し、キューブゲージでわざと倒さない様にしていた武霊達を封じ込める。

こうすると再具現化をされるだろうが…………… こいつらに構っている余裕は無さそうだし、あの二人なら上手くやってくれるだろう。

「……………次の段階に進みます」

PSサーバントの通信機能で全員にそう言つと同時に、青葉さんが……………武霊を身に纏つて具現化させた!?

な!レベル3!

????

「……………次の段階に進みます」

その夜衣斗の指示に、少なからず次の段階の為に待機していたメンバーは驚いた。

まだ作戦の第一段階である星波駅奪還及び始発電車の保護が終わった連絡を受けていない上に、その第一段階の作戦変更があったばかりだったからだ。

もつとも、驚きはしても、疑問が浮かぶより早く、作戦第二段階の実行メンバーは動き出した。

何故なら、作戦の第二段階は、タイミングが一つでもずれば失敗するものだったからだ。

夜衣斗が襲撃されると共に、星波海岸沿いのトンネル二カ所に武霊を具現化した武霊使い達が配置された。

もともと近所に住む武霊使いがトンネルを監視していたが、夜衣斗の狙いが『こちら側の戦力増加を防ぐ為の主要交通機関の確保』であると予測した三島忠人の指示により増員された。

三島忠人が星波町全体を催眠による支配下に置いた後、その状態を外から不自然に見せない為に星波町から帰る者達はいつも通り帰している。

当然、催眠が武霊能力によるものであり、笛に音が聞こえないと効力を発揮しない為、星波町に出た者達はすぐさま催眠から解放されていた。

つまり、主要交通機関の出始めを押さえれば、簡単に戦力増加を防ぐ事が出来ると言う事になる。

更に言えば、武霊使いの半分近くは星波町住民以外である為、夜衣斗達が行動を起こすなら、星波町に人が入り出す今の時間が最適

だった。

だからこそ、三島忠人は夜衣斗達の襲撃にすぐさま対応出来たが、三島忠人は本気でトンネルを守る気はない。

何故なら、夜衣斗達が『どう奪還するか』を知る必要があったからだ。

星波町内は常にハーメルンの笛の音を流している。

その為、夜衣斗以外は武霊がほとんど使えない。

これは星波町を支配する際の不確定要素達の動きで分かっている。なのに星波駅は奪還された。

つまり、夜衣斗の『武霊以外の力』があると云う事。

それが何なのか、少なくとも、どう奪還したかを知らなくては、一方的に負ける可能性がある。

だからこそ、今の所奪還されても大して影響のないトンネル二カ所を捨てる事にした。

外から星波町に来る者の大半は星波学園に通う学生であり、学生はまず電車で来るからだ。

もっとも、三島忠人も、ただで奪還させる気は当然ない。

遠見の武霊能力を持つ武霊達により、星波町各所の戦況を見る三島忠人は、特に感情らしい感情を浮かべず、夜衣斗達の動きを待つ。ほどなくして、猛スピードで近づく黒い影達が現れる。

動きが早く視認が難しいが、あきらかにPSサーバントを身に纏った者達だった。

トンネルを守る武霊使い達に敵の出現が伝達され、武霊使い・武霊は身構える。

その瞬間、星波海岸全域に白い煙が発生し、その付近を覆い始めた。

発生源は、いつの間にか海岸上空に展開されていたGMサーバント達。

そして、そのサーバント達が出しているガスは、吸えば瞬く間に

眠ってしまふ睡眠ガス。

だが、それが武霊使い達に届くより前に、武霊使い達は事前に用意していた酸素ボンベを装着。

三島忠人は、GMサーバントの存在を逆鬼ごっこの際に知っていた為、夜衣斗が使うであろうと予想し用意させていた。

スキューバタイピング部や消防署など、とにかく外の空気を吸わなくさせる器具を集めさせ、足りない数はコピー能力を持つ武霊にコピーさせている。

これで睡眠ガスを無効化させたが、三島忠人は自らが見ている遠見能力による光景が全て白くなつた瞬間、夜衣斗が睡眠ガスを使った本当の目的に気付き、眉を顰めた。

第二段階実行メンバーは、夜衣斗の作戦により、ドッペルゲンガーサーバントで自分達の偽者を作り、ステルス機能で密かにトンネル付近まで接近。

ドッペルゲンガーサーバントが動き出し、その動きに反応してトンネルを守っている武霊使い達が動く。

それに合わせて、上空に待機させていたGMサーバント達が睡眠ガスを放出。

その睡眠ガスは、武霊使い達を眠らせる為に放出されたものではなく、その対応で生じる隙を突く為のもの。

夜衣斗は酸素ボンベなどの対策が建てられていると予測し、それらを装着した瞬間に襲撃する様に指示していた。

そして、狙い通りの対応をした瞬間、実行メンバーは武霊使い、ではなく武霊を襲撃。

シールドサーバントで自分達ごと隔離し、外から光が入るが、内側から光が出ない様に設定したシールドの中で、武霊達と対峙する実行メンバーである五行化身の退魔士達。

工場側のトンネルには、木世一・火結桃子・火結太郎。

武霊達に向かって一は手から種を出現させ、指弾で武霊達に撃ち

込む。

気とPSサーバントで強化された指から放たれた種は、武霊にあっさりめり込み、一瞬の間の後、一気に発芽し、瞬く間に木となり武霊を霧散させた。

桃子と太郎は、一によって創られた木に触れ、一瞬の内にして燃やす。

燃える木から次々と炎の獣が現れ、残った武霊達に襲い掛らせ霧散させた。

星降町側のトンネルには、土帝冬四朗・金黙紅・水錬鋼騎。

武霊達が身構えると同時に冬四朗はコンクリートを音を立てて踏み込んだ。

その瞬間、コンクリートがまるで沼にでもなったかのように武霊達の身体が沈み、その場から動けなくさせる。

動けなくなつた武霊達に、紅は両手に次々と投剣を作り出し、投げ付ける。

気とPSサーバントで強化された投擲は、武霊をあっさり切り裂き、背後のシールドに突き刺さつた。

続けて鋼騎が腕を振るうと、指先から高圧縮の水が放出され、武霊を切り裂いた。

自身の退魔士能力で一瞬の内に武霊を霧散させた退魔士達は、間髪入れずにシールドサーバントのシールドを解除し、酸素ボンベを付ける為に動きが鈍つた武霊使い達にPSサーバントの拳銃を連射。撃ち込まれた麻酔弾で意識を失う武霊使い達に、退魔士達は急いで近付き、携帯音楽プレイヤーを外し、シールドサーバント達にトンネル周りにシールドを張らせて音を通さなくさせた。

海上では夜衣斗の意図に気付いた三島忠人の命令で、戦艦の武霊が対空ミサイルを連射し、視界を邪魔するGMサーバントを霧散させた。

続けて大口径艦砲をはぐれ監視塔周辺に向けて連射。

夜衣斗がこれ見よがしに現れていると言う事は、あきらかに大夜衣斗用にどうしても割かないわけには武霊使い達への囮。

ほぼ無防備になっていいるはぐれ監視塔の武霊使い達にはまず間違はなく何者かが接近している。

なら、その周辺に無差別に攻撃すれば、夜衣斗側の何人が削れると言う事。

睡眠ガスやシールドサーバントの意図的に中を見せなくしたシールドなどで、未だにどう戦っているか分からないが、戦艦の艦砲を防げる人間はいないと三島忠人は考えた。

発射された巨大な弾丸は、白いガスの中に入り、間を置かず、凄まじい爆発を起こした。

生じた爆風により、ガスが霧散。

そして、ガスが晴れた場所の光景に、三島忠人は眼を見開いた。何も破壊されていない監視塔周辺がそこに在ったからだ。

飛矢折

黒樹君の指示変更で、あたし達は直ぐに動いた。

ほどなくして白い煙が海岸の方から発生し出し、はぐれ監視塔を包み込んで隠す。

その煙に紛れ、あたし達は一気にはぐれ監視塔に近付く。

この白いガスは吸い込んだら寝てしまう睡眠ガスなんだけど、

「逆鬼ごつこの時に使用してたから、その対策は撃たれているでしょう」

と黒樹君は予想していた。

その黒樹君の予想通り、睡眠ガスがはぐれ監視塔を包み込む前に、自警団の人達が酸素ボンベらしき物を装着しているのが見えたんだけど…… あんなものどこから用意したんだろう？ これも武霊能力？

そんな事を思いながら睡眠ガスの中を駆ける。

PSサーバントの視覚外…… なんとらシステム？…… とにかく、視覚以外の方法で分かる情報を統合して周囲の環境を立体映像として瞳に映し出す機能のおかげで難なく進めるけど…… なんか変な感じと言うか……

ほどなくして、はぐれ監視塔の直ぐ近くまで来れた時、少し離れた場所から物凄い爆発音が連続で起り、あたしは慌てて爆風が届くより早くシールドサーバント達に思念で命令し、はぐれ監視塔を取り囲むようにシールドを展開。

シールドが展開し終わると同時に、あたしははぐれ監視塔に一気に近付き、垂直に飛んで、自警団の人達の所でウイングブースターを展開して、急停止。

続け様にPSサーバントの拳銃を両手に出して、連射。

最初の弾丸ではぐれ監視塔のスピーカーを壊して笛の音を止め、弾丸を麻酔弾に変えて自警団の人達に向けて撃つ。

何人かが武霊を再具現化して麻酔弾を防ぐけど、直ぐに操形先輩が刀で、スピーカーを壊すと同時に具現化させていた操形先輩の武霊ペルティアが爪で倒してくれたので、間を置かずに全員に麻酔弾を打ち込んで気絶させる事が出来た。

全員が気絶した事を確認したあたしと操形先輩・ペルティアは、急いではぐれ監視塔に乗り込み、気絶している全員から携帯音楽プレイヤーを外し、残っているシールドサーバント達にその人達を投げ渡す。

気絶している人達をシールドで受け取ったサーバント達を、直ぐに奪還した星波駅に向けて飛ばし、操形先輩がペルティアの具現化を止めると同時に周囲のシールドを解除させて、その護衛に回した。留めるものが無くなった睡眠ガスが霧散し始めたので、あたしと操形先輩はガスが完全に霧散する前にはぐれ監視塔から飛び降り、芽印に連絡。

連絡を受けた芽印がここに現れると同時に、海側から疲弊したシールドさん……じゃあ紛らわしいから、アンナさんが降ってくる。アンナさんは黒樹君の指示で、睡眠ガスの中、戦艦の武霊から撃ち込まれた砲弾を防いで貰ったんだけど……スカウトサーバントの補助があつたとしても……黒樹君も結構無茶な指示を出す……きつと今頃、不安で不安で仕方がないって感じになってるんじゃないかな？

第一段階の作戦が無事に終了して、気が緩んだのか、思わず笑みを浮かべつつ、黒樹君に連絡を入れようとした。

………繋がない！？

PSサーバントが消えていないから無事なのは間違いないけど……

………黒樹君………

言い知れぬ不安に襲われながら、あたしは事前の黒樹君の指示に従って芽印の能力で星波駅に退却した。

青葉さんと激突する直前まで、俺はシールドさんに出した無茶な命令を心配していた。

スカウトサーバントで砲弾の射入角度と着弾位置は分かるとは言え、音速以上の速度で飛んでくる物体を止めて貰うなんて……正直、最強の盾を出せるとは言え……不安で不安でしようがなかった。

だが、そんな不安を、鉄橋上に現れた青葉さんが吹き飛ばす。いきなりレベル3の武霊具現化をした青葉さんは、手に巨大な鎌を、背に骨の翼を出現させた。

次の瞬間、半透明の骸骨死神を身に纏った青葉さんが、目の前！？ やられる！

いくら向かって進んでいたとは言え、あまりの早さに全く対応が出来ない俺に、キバが命令なしにホーンブレードを出し、大鎌の一撃を柄の部分に当てて防いでなければ……首が飛んでいた。

ぞつとする暇も与えず、青葉さんは飛び掛かってきた勢いを利用してキバの進路を強引に曲げ、ホーンブレードを大鎌で受け止めたまま一緒に星波川へと突入し、盛大な水飛沫を上げる。

川の半ばでキバを騎馬モードにし、ホーンブレード振り回させて青葉さんを吹き飛ばす。

その際に、大鎌の刃がホーンブレードのシールドの刃に当たり、何の抵抗も無く切り裂いた！？

最硬度である気体モードの力場を切り裂くなんて……なんつう切れ味だよ……

驚きを通り越して呆れるしかないその大鎌だが……これだけなら大して脅威に……？

少し油断した事を考えた時、キバが急に暴れ出した。

キバから感じるのは……苦しみ！？

上空に飛んでいるスカウトサーバントから送られて来る映像を確認すると、キバが角の部分から急速に霧散していた。

角と言う事は、ホーンブレードの切り裂かれた瞬間、青葉さんの

武霊能力が発動したって事か!?

そう俺が予想すると同時に、キバの霧散は一気に進み、消えてしまふ。

キバがいきなり消えた事で、川に落ちそうになるが、俺は落ちる寸前でPSサーバントのウィングブースターを起動し、一気に上空に飛び上がる。

それを好機と見たのか、青葉さんが俺の後を追って大鎌を振り被った。

???

青葉愛。

武霊研究部現部長でありながら、歴代の部長の中で最も部活動に不真面目な部長であり、趣味さえまともならどこぞの令嬢に見えるぐらい整った顔立ちをしている為、マスメディア部が勝手にやっている学園内勝手にミスコンランキングで常に上位に入っている色々な意味で有名な高等部二年女子。

有名である反面、その武霊・ハクシについて詳しく知っている者はほとんどいなかった。

どんな武霊かは知っている。

それは事あるごとに愛が自身の武霊を出し、その死神の様な姿を使って周囲を驚かせている為なのだが、その能力を知っている者はほとんどいなかった。

何故なら、日常生活で使う以外、彼女がハクシを出した事がないからだ。

はぐれが発生しようと、そのはぐれに襲われようと、彼女はハクシを使わない。

何らかの意図があるのか、去年の夏頃までは前部長などが彼女を守っていた為、それほど支障がなかった。

それら幾つかの要因が重なって、同じ部活の美羽や元同じ部活だった沙羅さえその能力を知らない。

ただ、強力な武霊である事は、前部長から現部長に任命された事で分かつてはいる。

武霊研究部は、代々部の中で最も強い武霊使いが選ばれるからだ。だからこそ、美羽は夜衣斗の逆鬼ごっこ際に助力を求め、武霊能力を知らないが故に、沙羅は愛をただの強力な武霊使いと無意識に侮り、夜衣斗に注意を促す事を失念。

そして、夜衣斗は一度目撃した姿から、命を刈り取る能力と『それでは足りない予想』をしてしまっていた。

ハクシの武霊能力。

それは、『大鎌の刃に触れた全ての有機・無機に関わらず終わらせる反則的な能力』。

と、

上空に逃げる夜衣斗を追いながら、大鎌を振り被るハクシを身に纏った愛。

避ける事が不可能と瞬時に判断した夜衣斗は、キバを再具現化し様とした。

その瞬間、ハクシの姿が、骸骨の姿から女神を彷彿させる金髪の美女になる。

急激な姿の変化に夜衣斗が驚き、それが一瞬の隙を生じさせた。

その隙を逃さず、愛は夜衣斗に向けて大鎌を振るう。

だが、その大鎌の刃が夜衣斗に当たる直前、夜衣斗は咄嗟に両手に拳銃を出し、愛に向けて連射。

撃ち出された衝撃弾により、愛は僅かに後ろに吹き飛び、それにより大鎌の刃は夜衣斗にギリギリの所で届かなかった。

空振りになった大鎌の一撃だったが、次の瞬間、大鎌の軌跡に光の線が出来、そこからキバが飛び出し、夜衣斗にその角を突きさした。

もう一つ、『女神の姿になり、終わったあらゆるものを復活させ

る反則的な能力』。

その二つのとんでもない能力を有している上に、レベル3具現化。まさに『知られざる学園最強』と言えるのが、青葉愛だった。

夜衣斗

突然目の前で具現化したキバの角が俺に迫る。

俺は咄嗟にウイングブースターの方向を変えるが回避が間に合わず、肩に角が突き刺さった。

肩の肉に冷たい突起物が侵入し、貫通する違和感。

それと共に起きる激痛。

その二つが絶えることなく続き、キバが出現した勢いで俺を空へと突き上げ続ける。

痛い！痛い！痛い！

と頭の中でうるさく警告する俺がいる一方。

冷静な部分の俺が理解していた。

このキバは、『キバじゃない』と。

確かに見た目はキバだが、『その中にはキバがない』。

そう感じた。

そして、分かった。

青葉さんの武霊能力は、『大鎌の刃に依存しており、死神の様な見た目の時に刃に触れると問答無用で終わらせられ、女神の様な見た目の時は、終わったものを復活させる事が出来る能力』。

厄介なのは、復活させられたキバは、キバではないが、その身体はキバであるらしく、俺がいくらキバを再具現化しようとしても再具現化出来なかった。

その事実気付いた時、キバが出てきた勢いが終わり、落下し始める。

咄嗟にウイングブースターで逃げようとするが、キバは首を動かし俺を逃がさない様にした為、激痛で何も出来なくなった。

俺の意思を感じて、PSサーバントがウイングブースターのブーリストを消してしまい、俺はキバに引きずられて落下。

続く激痛をPSサーバントでカットし、下を確認すると、そこには大鎌を構えた愛さんがいた。

身に纏っている武霊の姿は死神の姿になっている。

ぞくつと恐怖を感じたが、逃れようにも、PSサーバントの攻撃力ではキバを倒す事が出来ない。

オウキは『既にここから遠い場所』で具現化しているので、再具現化したとしても、この距離では間に合わない。死。

その文字が一文字頭の中に浮かぶと、あっと言う間に頭の中がその文字で埋め尽くされてしまう。

思考したくても思考出来ず、身体を動かしたくても動かせないほどの死への恐怖。

瞬く間に青葉さんに近付き……………大鎌の刃が……………

ふ……………ふざけるな!!!

????

愛は操られた意思無き意識で勝利を確信していた。

自身の能力で復活させたキバは夜衣斗のコントロール下から離れ、警戒していたオウキは何故か出さない。

理由は不明でも、次の愛の攻撃を防げないのなら、理由を探る必要はなかった。

何故なら、愛の一撃は文字通り一撃必殺。

不確定要素達の基点となっている夜衣斗さえいなくなれば、全てが終わる。

いなくなれば、全てが終わる。

そう思考した愛の頭に、一瞬の違和感が走るが、直ぐに常に耳元で聞えている笛の音によりかき消された。

落下してくる夜衣斗とキバが、大鎌の間合いに入る。

一線を越えてしまう一撃を、愛は何のためらいもなく放った。

キバに大鎌に当たり、キバが再び霧散し、そのまま夜衣斗に刃が

当たろうとした瞬間、

「ふざけるな!!!」

愛の記憶にない夜衣斗のその怒号と共に、夜衣斗は信じられない行動を取った。

触れた瞬間に死が与えられる大鎌の刃を両手で『白刃取りした』。

夜衣斗

咄嗟の反応だった。

死に対する恐怖が怒りに変わった時、俺はPSサーバントの時間感覚加速機能を起動。

全ての感覚がゆっくりになり、感覚的に迫る速度が遅くなった大鎌の刃を両手で白刃取りしてしまった。

丁度白刃取りしやすい角度から迫っていたのと、一切の思考をしていなかった為、ありえないほど無謀な行動だった。

次の瞬間、自分のしてしまった失敗に気づき、俺は死の覚悟をしながら、反射的にウイングブラスターをフルブラスト。

青葉さんの大鎌を振る力と拮抗し、空中に逆さまで止まる……

…のはいいんだが………？………ん？

何故か、いつまでたっても俺は死ななかつた。

………人には効かないのか？

そんなありえない希望を抱きつつ、青葉さんの顔をPSサーバントの頭部カメラで確認すると………驚いている様だった。

………考えて見れば、俺は三島忠人の武霊能力が効かなかったんだよな………だが、同じく効かなかつたキバは、青葉さんの武霊能力によって瞬時に倒された………魔力供給する側とされる側の違いか？………まあ、何にせよ！

「キバ！」

俺の呼び掛けに応え、キバが俺の背中から飛び出す様に再具現化。キバの再具現化に、青葉さんは大鎌で応戦し様とするが、大鎌は俺に押さえられている為に咄嗟の反応が出来ない。

「セレクト。ホーンサンダーブレード！」

俺の命令に空中で回転しながらホーンブレードを展開し、電撃をシールドの刃の中に込めるキバ。

川に着地すると同時に、駆け出し、俺の下を潜り抜ける様に駆け抜け、青葉さんを電撃が溜まったホーンブレードで斬り付ける。

シールドの刃が身に纏った武霊を切り裂き、青葉さんに当たる直前で刃が消え、電撃が解放。

一瞬の内に電撃が身体に走り、身に纏った武霊が霧散すると共に武霊の骨の翼で浮いていた青葉さんが川に落ちる。

寸前で、青葉さんの身体を俺は受け止めたんだが……………その……………

……………なんだ……………物凄く困った位置で受け止めてしまい……………む……………

……………あゝキバ！ぼさつとしてないで彼女を受け止めるって……………

……………いや、早く。お願いだから。

????

星波駅に着いた始発電車から、勇人は転げる様に降り、夜衣斗の下に駆け付けようとした。

だが、ホームから出る階段に足を掛けるより早く、駅の放送が入る。

「星波駅に降りる方に武霊に関する緊急連絡です。武霊に関する事なので、そのまま次の駅に行く方は、聞き流してください」「星波学園に小学生の頃から通っている勇人でさえ、今までこんな放送を駅で聞いた事がなかったので、思わず足を止めてしまう。

星波駅はあくまで途中の駅なので、隣町の星取町以降の農村部から、これまた隣の星渡町以降の都市部に通勤している者達も電車に乗っている。

その為、いくら星波町外に出れば記憶が一時的に消えるとは言え、武霊に関する事を教えたり、知られたりして無用な混乱させない様に徹底されていた。

それなのに今の放送がされたと言う事は、余程の事態が起きている証拠であり、勇人の考えを肯定する物だった。

だから、勇人は急いで階段を駆け上がる。

続く駅内放送は、

「現在星波町は一人の武霊使用により支配下に置かれています。彼の武霊能力は強力な催眠能力で、一部の者しか抵抗出来ません。ですので、彼から星波町を取り戻すまでの間、星波町に降りる方はそのまま第二地下避難シェルターに避難してください」

そう避難を促しているが、だからと言って足を止める勇人ではない。

一気に改札口を抜けると、PSサーバントを着た何人かが、駅の外から第二地下シェルターに向かっている様子が見え

た。

それで夜衣斗の無事を確認した勇人は、少しほつとしたが、だからと言って何も知らない夜衣斗がこのまま愛と戦い続けられ……最悪の事態を改めて予想し、星波川へ急ぐ勇人。

そして、星波デパート前まで来た時、PSサーバントを着た沙羅が大慌てで空から降ってきた。

「村雲様！何処に行くんですの！？」

と声を掛けられるが、

「黒樹の所だよ！」

見向きもせずに走り去ろうとする勇人。

PSサーバントを着ていた沙羅が常人以上の速度で勇人に追い付き、その手を取って止める。

「放送を聞いていなかったのですの！？今の星波町は、耐性の無い人が出れば直ぐに操られてしまうんですわよ！？」

「聞いたさ！だからと言って！ダチを身捨てるって、俺に言うのかよ！」

「そんな事は言っていないせんわ！」

「だったら！」

「駄目です！耐性の無い村雲様がここから先に行ってしまったては夜衣斗さんに余計な負担を掛けてしまいますわ！」

「……………？」

自分に耐性が無いと言い切った沙羅にも疑問を覚えたが、何より夜衣斗の事を名前と呼んだ事に違和感を覚える勇人。

だが、今はそんな事を気にしている場合じゃないと思い。

「だが！相手は愛っちなんだぞ！」

「え！？青葉部長が？」

思わぬ所で出た愛の名前に驚く沙羅だが、愛の武霊能力を知らない沙羅は、

「大丈夫ですわ。今の夜衣斗さんなら、歴代の武霊部長にも負けはしないですの」

「……………」

沙羅の妙な信頼にまた違和感を覚えつつも、勇人は悩んだ。

愛は自身の武霊能力を恐れている。

自身の武霊を嫌っているわけではないが、もし、その問答無用で殺し、殺した相手を自在に蘇らして操る能力が周囲に知られれば、恐れられてしまう。

そう愛は考え、偶然見た者か、武霊研究部の一部の者にしかその武霊能力を教えておらず、口止めもしている。

人に無理矢理スプラッターホラーなどを見せるくせして、と勇人は思わなくもないが、愛がそう恐れるなら、協力しないわけにはいかない。

だが、そこに愛の意思が入っていない上に、人の命が掛っているのなら、話は別になる。

意を決した勇人が愛の武霊能力を説明しようとした時、何かが空か降ってきた。

二人が反射的に身構えるが、降ってきた相手が馬形態のキバに乗った夜衣斗だったので、一瞬ほっとしたが、その夜衣斗の腕の中に意識を失った愛がいたので、勇人は目を見開いて驚いてしまう。

「ほら、無事だったですわ」

と言う沙羅を無視して、ウィングブースターを使いゆっくりキバから降りる夜衣斗に近付き、小声で、

「どうやって愛を倒したんだ？愛は誰も知らないが、学園最強の一人だぞ？」

そう聞くと、夜衣斗は少し困った感じになり、何かを言おうとした時、夜衣斗の雰囲気が変わり、沙羅が息を飲んだ。

「夜衣斗さん！」

沙羅の呼び掛けに、夜衣斗は頷き、

「……………次の段階に進みます……………村雲。青葉さんを頼む」

愛を勇人に渡してバイク形態になったキバに乗り込んだ。

状況の変化があったのは二人の反応から間違いはない。

だから、

「待て黒樹！」

思わず夜衣斗を呼び止めてしまう勇人だが、俺も手伝う。

と言い掛け、口をつぐんだ。

夜衣斗が無事だった事により、幾ばくか冷静になっていた勇人。だからこそ、今の無力な自分がそんな事を言っても夜衣斗を困らせるだけなのは明らか。

しかし、だからと言って、悔しさが出てこない訳が無く、そう言う感情が思わず顔に出ていたのが、

「村雲様……………」

心配そうに沙羅が名前を言った。

「……………」

勇人と沙羅の反応を見た夜衣斗は、勇人を見て少し考える。

「急に呼び止めて悪かったな……………」

そう言う勇人に、夜衣斗は口元だけ笑い、

「……………手伝ってくれないか？」

「??？」

「「え？」」

予想もしてなかった夜衣斗の言葉に驚く勇人と沙羅。

「……………どうも琴野さんも知らない武霊使いが何人かいるみたいだからな……………お前なら他の誰も知らない武霊使いを知ってるだろ？」

「まあ……………多分な……………」

勇人は武霊研究部が最も活動的に動いていた前年度の中核メンバーであった為、当時普通の部員だった上に、途中で抜けた沙羅が知らない事をいくらか知っている。

「だが……………」

夜衣斗の言葉に戸惑うしかない勇人。

「……………それに、新聞配達をしてるんだろ？だったら、星波町の地理も他の誰よりも詳しいんじゃないか？」

そう言って、ハンドルから手を離し、勇人の乗れる場所を空け、キバからPSサーバントを一機出す夜衣斗。

「ちよつと待っててください夜衣斗さん！」

夜衣斗の提案に、流星に止めに入る沙羅。

「次の段階は、夜衣斗さんが『最も危険な目に合う段階』ですわ！一般人である、ましてや、武霊使いではなくなっている村雲様には……………」

心配する沙羅に、勇人は笑って親指を立てた。

「心配すんなって。俺の武霊が『どんな武霊』だったか忘れたか？」

そう言ってPSサーバントを自ら引き寄せ、自ら着る。

PSサーバントの調子を見る様に軽くジャンプを繰り返し始めた勇人に、沙羅は溜め息を吐く。

先程の戸惑いは何処に行ったのか、やる気全開になっている勇人

の様子からして、もう何を言っても聞きはしないだろうと、経験上知っているからだ。

「……………二人とも、無理はなさらないでくださいね」

「ああ！」

沙羅のお願いに、声に出して同意する勇人に、無言で頷く夜衣斗だった。

飛矢折

商店街にある自警団本部は、駅を奪還するついでに奪還し終わっていた。

本来なら常駐しているはずの自警団員がほとんどいなかったのも、簡単に奪還出来た。

つまり、三島忠人にとって自警団本部は大して重要な所ではなかったと言つ事。

本来なら町のスピーカーは全て自警団本部で操作出来る様になっている。だけど、町のほとんどのスピーカーは別の場所から音を出せる様に細工がされてあるらしくて、町全体で流れている笛の音を止める事は出来なかった。

もつとも、それを予想していた黒樹君は、シルフさんの退魔士能力効果範囲内での武霊使い解放が終わった後に、同じ範囲内にあるスピーカーを壊して回る様に指示している。

スピーカーは電信柱に一個一個ある上に、武霊を使って壊すと源さんに直されかねないので、武霊を倒す要領で退魔士能力を使って壊しているんだけど……………それでもちよつと予定より遅れ気味だったのも、あたしも瞬輝丸の試し斬りも兼ねて参加した。

瞬輝丸は刀なので、普通に目撃されたら銃刀法違反で覚えられかねないから、退魔士の人達と同じ様にシールドサーバントでスピーカーの周囲に外から見えなくなるシールドを張って、

「瞬輝丸」

呼ぶと同時に瞬輝丸が頭上から降ってきて、地面に刺さる前に受

け止める。

「……………」

何故か慄然とした表情で小人の瞬輝丸が出てきて、柄に座ったので、思わず

「何？」

て聞くと、

「……………試し斬りがスピーカーって……………あたいを何だと思ってんだ!？」

激昂する瞬輝丸に、あたしはちよつと困った。

「仕方がないじゃない。『本来の力を使えない』あなたを、いきなり武霊に対して使うほど、あたしはあなたを知らないわ」

「だったら、さつさと夜衣斗とせ」

「ぎゃー!」

接吻と言おうとした瞬輝丸をあたしは思わず瞬輝丸を掴んで黙らせた。

黒樹君は作戦中は常に二人以上で行動する様に指示している。

だから、あたしの近くには操形先輩がいて……………シールドの外を警戒していた操形先輩は、不思議そうにあたし達を見て、直ぐに外の警戒に戻った。

……………聞えてなかったみたい。

ほつとしていると、

「あの子も退魔士なんだからよ。あたいの仕組みぐらい知ってると思うがな？」

そんな事を言いながらあたしの肩に小人瞬輝丸が現れた。

手を空けて見ると当然影も形も無い。

どうやら本体の近くならどこにも小人を出せるみたいだけど……………

…仕組みを知ってるの!？」

「退魔十本刀は有名だからな」

そ……………それじゃあ……………

かぁーと顔が赤くなるのが分かる。

(まあ、あの感じだと、あたい達が夜衣斗と組もうと思っ
てい
なんて大半は思っ
てないみたいだがな)

?.....どう言う事?

(そもそも、黒樹家は他家と組むなんて事は滅多にしねえ家だか
らな.....組んだとしても大体他家をこき使ったり、蔑んだり.....
まあ、一部を除いてろくな家じゃねえって事さ)

でも.....黒樹君はそんな家と全く関係なんでしょ?

(ああ、種無しは普通は生まれて時に殺されるからな.....と言
うかよ。夜衣斗本人の問題より、夜衣斗の親族が問題なんだろうよ
.....特に妹がな)

あ.....確かに、随分苛烈な性格みたいだものね.....

「飛矢折様?どうかなさいました?」

「え?い、いえ」

ちよつと心の中で瞬輝丸と会話し過ぎたのか、操形先輩が声を掛
けてきたので、あたしはちよつと慌てて飛び上がり、近くのスピー
カーを斬り落とした。

.....凄いい切れ味.....

スピーカーの接合部分を切ったんだけど、まるで紙を斬ってるみ
たいだった。

.....こんなに凄いの.....これでまだ本来の力を発揮してな
いなんて.....

そんな事を思っていると、PSサーバントの通信機能が起動して、
目の中に小さな画面が現れ、星波デパート屋上から海側を見た光景
が現れた。

「みんなにいくに緊急連絡でえす」

先見かなたさんのその声と共に、屋上からの映像が揺らぎ始め、

「こんなの見えちゃいましたあ」

見える家々から人らしき影が続々と出てきて近くの避難シェルタ
ーに向かう様子になった。

この映像は先見さんが自身の退魔士能力で見ている未来の映像。

奪還作戦を始める前に、黒樹君が実験してP Sサーバントを利用して未来の映像を共有できる事は分かってたけど……改めて見ると不思議な感じ……って、そんな事を思ってる場合じゃないよね……

未来が見えるって事は、見えている人達は普通の星波住民。そして、避難させられると言う事は、三島忠人は人質を使う戦法を使わないと言う事。そして、今回の彼の行動は長期的なものを見越した行動と言う事になって、急いで奪還する必要は無くなった。

……… だけど、そう言う動きがあると言う事は、もう直ぐ大規模な武霊の侵攻があると言う事で……… いよいよ黒樹君がもっとも警戒している奪還作戦の第三段階が始まる。

あたしはぎゅっと瞬輝丸の柄を握り、

「急ぎましよう操形先輩」

そう言っつてスピーカーの破壊をあたしは急いだ。

夜衣斗

(それにしても……………よく愛つちを倒す事が出来たな?)

PSサーバントの接触通信を利用して村雲がそんな事を言ってきた。

接触通信は、PSサーバントを着た者同士が触れる事により可能になる通信で、触れた者同士しか通信出来ない上に、思考による通信なので扱いが難しい。もっとも、その分、他の誰かに聞かれる事もないので、機密性は非常に高く、隠れている時などには非常に重宝するはずの機能だが……………村雲、使いこなすのが早すぎたって……………と言っか、

(……………愛つち?)

(ん?ああ、青葉愛の事だよ)

……………まあ、なんでもいいが……………

(……………青葉さんに勝てたのは……………まあ、運が良かったんだろ
うさ)

(運ね……………運でどうこう出来るレベルじゃないんと思うんだが
な……………)

いまいち俺の説明に釈然としない感じの村雲だが、俺自身もよく分かってない事や、話せない事を誤魔化しながら喋れる自信はないので、黙る。

ほどなくして、駅周辺のスピーカー破壊が終わる報告が入り、俺はシールドサーバントによる駅周辺の完全隔離を多重に行った。

そして、村雲には聞こえない様に通信回線を開き、シルフさんに休む様に連絡。

シルフさんにはPSサーバントを装着させていなかったの、間接的なやり取りだったか……………あの感じだとシルフさんは今回はもう駄目だな……………今にも気を失いそうなほど消耗してる様だったし

……まあ、予想の範囲内だからいいが……。
そんな事を考えていると、先見さんの予知と同じ、星波町住民の避難が始まった。

さて……ここからは瞬間的な読み合いが重要になってくるが……果たして俺は勝てるんだろうか？……いや、そんな心配を今しても仕方がない。

避難をしている人達の避難が、操られているせいもあってか直ぐに終わり、終わると同時に星波町各所から編隊を組んだ武霊使いと武霊がぞくぞくと現れ始めた。

……いよいよか……

思いつき深呼吸し、全員との通信回線開く、

「……もうすぐ作戦の第三段階に進みます……分かっていないと思いますが……全員無理はしないでください」

そう言つて、一旦通信を切り、村雲の肩に手を置く。

「……さつき言った通り……頼む村雲」

「ああ！任せろ！武霊使いとして先輩だった俺の実力を見せてやるよ！」

村雲はそう言つて……多分、にやりと笑つたんだろう。

俺は今の様な状況で笑うなんて事はとても出来ないの……かなり頼もしく見えるな……

そんな事を思いつつ、

「キバ！PSサーバントリンクモード！PSサーバントジェネラルモード」

そう命令すると、俺のPSサーバントのマントがいくつものケーブルに変化し、次々とキバに接続される。

同時に、俺の視界が現実と仮想空間の二つに増え、仮想空間にはスカウトサーバントとPSサーバントから送られて来る映像と、それら映像やスカウトサーバントが集める情報を分析・統合したいくつもの映像が現れた。

キバと繋げる事により可能になるPSサーバントのジェネラルモ

ードは、名前の通り、軍を指揮する為のモード。

一遍に大量の情報を処理出来るモードなんだが……あまりの情報量に自分の身がおろそかになる欠点がある。

だから、星波町の地理にも明るい村雲にキバの命令権を一時預け、俺は指揮に集中する事にした。

……正直、俺が大勢の人を同時に指揮する事態になるなんて考えもしなかった事だが……やるしかない！

俺が心の中で気合を入れると同時に、武霊・武霊使いの編隊が進軍を開始する。

「……………第三段階開始！」

????

武霊と武霊使い達の進軍する様子を遠見の武霊能力で見ながら、三島忠人は思考を巡らせる。

夜衣斗達の攻撃手段が不明なのは先程と変わらないが、その攻撃のどれもがこちらから見えなくさせた後に行われているので、何らかの見せたくない理由がある事は分かった。

その理由は不明だが、それは即ち大規模な攻撃が出来ないと言う事。

GMサーバントのガスによる視界封じは、ガスであるが故に簡単に除去する事が出来る。

その事をあの夜衣斗が気付かないはずは無く、だとすればもうその手は使わない。

残った方法はシールドサーバントによる武霊隔離。

この方法では中でどんな方法を使うにせよ、大規模な攻撃は出来ない。

つまり、数で押ししてしまえば、簡単に崩せる戦法だと言う事だ。

もつとも、三島忠人はそんな単純な事で終わると思っていない。

つまり、これからの戦いは互いの手の内を先に晒し尽くした方が負ける。

「さて……………これだけの戦力差。君はどう引っ繰り返すつもりでいるのか……………まずはお手並み拝見と行こうか？」

そう言って三島忠人が向ける視線の先には、バイクモードのキバに村雲勇人と共に乗って疾走する夜衣斗の姿があった。

飛矢折

最初の攻撃は星波町上空に飛ばしているスカウトサーバントに対して行われた。

遠距離攻撃が出来る武霊達が編隊の先頭に立ち、立ち並ぶ家々に上り、銃撃や電撃、あらゆる遠距離攻撃がスカウトサーバント達に對して撃ち込まれる。

武霊達の動きを見ていたスカウトサーバント達は回避運動。

だけど、何機かが避けられずに破壊されてしまい、あたしが見ている映像のいくつかが消えてしまう。

第二射が撃ち込まれるより早く、あたしと操形先輩組・口導先輩とソードさん組・村崎さんと統合生徒会長組・春子さんと髪結さん組の接近戦担当が、それぞれ別々の場所から後方にいた武霊使い達を強襲。

今回は芽印の能力による接近じゃなく、ノームさんの能力で地下に穴を空けて貫い、そこを通って空き家に入り待機していた。

強襲を警戒していたのか、射撃系の武霊使い達の前に、接近系武霊使いが武霊を具現化。

武霊を倒す為にシールドサーバントが武霊を隔離し様と動くけど、それを読んでいた接近系武霊が接近したシールドサーバントを破壊してしまう。

もつとも、それすら読んでいた黒樹君の指示で、事前にソードさんの力が込められたPSサーバントのナイフを、あたし達は武霊達に投げ付ける。

忘却現象は、武霊に関する事を忘れる現象だから、武霊の力に退魔士能力を乗せれば退魔士能力もついでに忘れられるし、武霊能力として誤認される。と黒樹君は言っていた。

確かに武霊能力と退魔士能力は、両方の能力を詳しく知っていない

いと見分けがつかないと思う。両方とも常識外の能力だものね。

投げ付けられたナイフを弾く武霊達だったけど、ナイフに触れた瞬間に、ソードさんの力が作用して触れた武霊が触れた部分から一気に裂け、霧散した。

驚き一瞬動きが固まる武霊使い達の隙を突き、射撃系武霊使いを狙って麻酔弾連射。

その成否を確認せずにあたし達は急いでその場を撤退し、物陰に隠れる。

ほぼ同時に星波駅側から何かが続で一気に上り、こちらに向けて急降下。

その正体はキバのガトリングミサイルポットから撃ち出された小型ミサイル。

小型ミサイルに気付いた武霊使い達は、迎撃しようとするけど、射撃系の武霊を半分以上失った武霊使い達にはほとんど撃ち落とす事が出来ず、次々と武霊達に命中し、強烈な衝撃と閃光が生じる。黒樹君が撃つたのはスタンミサイルと言うものらしく、強烈な衝撃と閃光で複数の対象を無力化させるとか………もつとも、黒樹君がこれを使ったのは単純にミサイルの効果を期待したものじゃない。ミサイルの影響が消えるか消えないかで、あたし達は物陰から飛び出して、スタンミサイルで気絶するまでには至らなかった武霊使いを次々と銃や刀で気絶させる。

同時に近隣の家々に隠れさせていたサーバント達が大量に飛び出し、あたし達が気絶させた武霊使いを次から次に星波駅に運び出す。更に後方から………あれ？なんで村雲君が？………と、とにかくキバに乗った村雲君と黒樹君が戦場に突入し、動きに精彩さを欠く武霊使い達の中に突入した。

????

遠見の能力で戦場を見ていた三島忠人は、スタンミサイルの閃光をまともに見てしまい、視力を一時的に奪われてしまっていた。

これにより三島忠人は武霊使い達に指示が出来ず、武霊使い達は夜衣斗達の突撃に対応出来なかった。

そもそも、自警団の武霊使い以外は、例え武霊使いであってもただの町民・学生である事が多い。

武霊自体が普段の生活に不必要なものである上に、むやみやたらに使用すれば警察や自警団・武風から注意を受け、場合によっては罪に問われる事もある。

その為、はぐれに襲われるなどの危機的状況にならない限り、武霊を具現化しない事が常であり、それ故にほとんどが戦闘、当然、集団戦闘になれていない。

そんな者達が自分達の判断で行動すればたちまち編隊として機能しなくなる。

だからこそ、三島忠人は武霊使い達に勝手に行動しない様に命令していた。

それを夜衣斗に読まれて、迂闊にも閃光を三島忠人はまともに見てしまったと言う事だが、

「この程度で読み勝ちしたと思っていけないだろうか？黒樹夜衣斗」
そう笑みを浮かべた。

夜衣斗

キバで俺達が突入すると明らかにスタンミサイルの影響下にならない武霊使い達もその動きを止めていた。

つまり、狙い通り、指示をしている三島忠人の目を潰せたと言う事。

最大のチャンスではあるが………これも一回切りの不意打ち。
同じ手はもう通じないだろう。

だからこそ、今、可能な限り助け出さなくちゃいけないんだが………こっちは戦闘出来る人数が最大で三十四人に対して、向こうは星波町民の大体十分の一………どう考えても圧倒的な戦力差があるので、どうしても救いだせる人数は限られてしまう。

眼つぶしだつてそう長くは持たないだろうし……武霊の暴走の可能性さえなければもう少しサーバントを出しても良いんだが……そんな不安と不満を思っている間、村雲はキバを俺以上にうまく操り、武霊・武霊使い間を駆け抜け、ホーンブレードと両肩両腰の簡易格納庫から出したソードアームで通り抜け様に斬り付け、武霊はシールドフィールドの刃で霧散させ、武霊使いは電撃の刃で気絶させた。

時々思い出したかのように繰り出される武霊の攻撃は、時にはバツク走行を利用して下がったり、一瞬だけ馬モードにして飛び上がり、塀の上を走ったり、などしてあっさり避ける。

………なんか、このまま村雲の武霊にしちまった方がいいんじゃないかね？

そんな事を思うと、それを否定するかの様にキバがいらないた。

冗談だよ………まあ、とにかく、なんであれ、これで安心してみんなへの指示に集中出来る。

キバの反応に苦笑した時、進行方向に派手な化粧をしたまるでテレビとかに出てくるホステスみたいな人が現れた。

スタンミサイルの範囲外にいた奴か………

そう判断した時、バイクモードになって道路を走っていたキバが不意に急停止。

「どうした村雲!?!」

意図の分からない急停止に、思わず村雲に問い掛けると、村雲は困惑した様子で下を確認し、

「な!」

?………っげ!

村雲の驚きに釣られて下を見ると、そこにはパワードスーツみたいなを着たスイマーがいた。

しかも、半透明でその中に日焼け美人を入れた………って、レベル3武霊!?!

飛矢折

スタンミサイルで無力化した武霊と武霊使いを次々と倒しながらあたしは星波学園方向に進む。

最初の頃はスタンミサイルの音と光で視覚と聴覚を奪われた人達が相手だったのと、黒樹君の目論見通り三島忠人の目を潰せたのかほとんど動きらしい動きをしなかったので簡単に倒す事が出来た。

だけど、先へ進めば進むほどスタンミサイルの影響を受けない武霊使いが現れ、更にその武霊は段々とPSサーバントの攻撃力では倒し難い武霊になってきていて……

操形先輩の刀が岩の巨人の胴の半ばで止まり、操形先輩は反射的に刀から手を離して距離を取るけど、刀で胴半ばまで切り裂かれていのに岩巨人は平然と操形先輩に殴り掛かる。

避けられるタイミングじゃなかったなので、あたしは咄嗟にシールドサーバントに周囲にシールドを展開する様に命令し、シールド展開が終わると同時に、

「瞬輝丸！」

瞬輝丸を出し、空中で柄を掴み、出てきた勢いを殺さずに回転して操形先輩を殴ろうとしていた岩巨人の腕を切り落とし、続けて下から斜めに岩巨人を切り裂いて霧散させ、直ぐに瞬輝丸をしまつてシールドを解く。

「そ」

操形先輩大丈夫ですか？

と聞くより早く、何か空が降ってきて、道路を削りながら滑り堀を壊して止まった。

条件反射的にあたと操形先輩は銃を出して構え……え！？

空から降って来たのは……キバだった。

慌てて近付こうとした瞬間、空から殺気。

咄嗟に上空を見上げると、半透明の女武者を身に纏った着物姿の女性が薙刀の刃を下に向け落ちてくる。

間違いない狙いはキバ。

あたしと操形先輩はほぼ同時に女武者の武霊使いに向けて銃を連射。

女武者の武霊使いは、こちらの攻撃に気付くと下に向けていた薙刀を素早く回転させ、銃弾を全て弾いてしまう。

だけど、それによって落下の軌道が変わり、少し離れた場所に女武者の武霊使いは着地。

あたし達はすぐさま女武者の武霊使いとキバの間に入り、操形先輩は女武者以外の武霊使いを銃で牽制し、あたしが両手に刀を出して女武者の武霊使いと対峙する。

……ふと思っただけだ……あの女武者の武霊つて、あたしの名前の由来となった巴御前が基なんじゃ……少しやり難いかも……つて！そんな事より！？

巴御前の武霊使いに注意を払いつつ、後ろに視線を向けると、瓦礫の中から村雲君だけが出てきた。

「くそ！黒樹と分断された！」

そうとんでもない事を言った村雲君は同時に立ち上がったキバに素早く乗ろうとして、唐突にその場から飛び退き、両手から銃を取り出し、地面に向けた。

「二人とも気を付けろ！地面を水みたいに潜れる奴がいる！」

村雲君の警告に、地面を注意深く見ると……確かにまるで水のように波紋が生じている場所があつて、そこから機械を身に纏った競泳者を身に纏った日焼け美人が少しだけ顔を出して、地面に潜ったレベル3が二人も！？これじゃ……黒樹君を直ぐに助けにいけない！

「キバとPSサーバントが消えてないって事は、黒樹はまだ無事って事だ」

そう言いながら、あたし達の背後を守る様に背中合わせになる村

雲君。

「誰でもいい！黒樹の救援に向かってくれ！」

村雲君のその言葉は、PSサーバント着た全員に通信され……
それに答えたのは

夜衣斗

全ては一瞬だった。

レベル3のパワードスーツスイマーにキバを止められたと分かった瞬間、ホステスみたいな女性が身に纏う形でガンマンの武霊を具現化。

同時にクイツクドロロー！？

撃ち出された弾丸は、キバが両肩のソードアームで防いでくれたが、防ぐとほぼ同時に近くの塀が唐突にめくれ、そこから女武者の武霊を身に纏った着物姿の女性と、忍者を身に纏った忍者？が現れ、女武者が薙刀を、忍者が忍者刀を俺に振るう。

忍者の攻撃はキバの両腰のソードアームで防いでくれたが、時間差で振るわれた女武者の薙刀の刃がソードアームの腕を切り裂き、キバと俺を繋ぐケーブルが切断。

そのまま俺の首に刃が迫る。

PSサーバントの機能で感覚を加速させているから状況を把握は出来るが、元々闘う事に縁遠い俺にはとても反応出来る連携攻撃ではなかった。

だから！美魅！

（任せるだわね）

俺の呼び掛けに応え、PSサーバントを着た美魅の人形態の手だけが背中から飛び出し、PSサーバントの刀で薙刀の機動を変え、即死を免れる事が出来た。

だが、その直後に忍者の武霊使いによる回し蹴りが俺の腹に入り、後ろに吹き飛ばされる。

地面に当たる寸前で美魅が完全に背中から飛び出し、俺を受け止

めた。

直後に、パワードスーツスイマーの武霊使いが、キバごと地面から空中に飛び出し、回転を付けてぶん投げた！？

まずい！キバと分断された！

更に、女武者の武霊使いがキバの後を追う様に飛び、パワードスーツスイマーが地面に潜る。

これで無暗にキバの再具現化をすれば村雲に危機が及ぶ………かと言ってオウキを再具現化するわけには………くそ！逃げるぞ美魅！（了解だわよ）

俺の指示に美魅は俺を抱えたまま近くの路地に逃げ込む。

まさか一気にこちらが知らないレベル3の武霊使いを四人も俺に投入するとは思わなかった。いや、考えれば、思い付いたかもしれないが……青葉さんがたつた一人で俺を襲撃した事が無意識の内にその考えを排除させていたのかもしれない………だが、だとすれば、青葉さんの不自然な一人での襲撃は、この為の罠だったと考えるのが自然か………やっぱり咄嗟の思考は駄目だな………

自分の考え不足を呪いながら、追ってくる忍者の武霊使いに、牽制の為に両手の空いている俺が二丁拳銃で連射。

同時に近くに念の為に配置していたGMサーバントに目眩ましの為のガスを出させる。

これで多少は時間を稼げるだろうが………どうする？………レベル3二人相手に逃げ切れるか？

そう思った時、唐突な突風が生じ、瞬く間にガスが霧散してしま

う。
風の生じた方向を確認すると、忍者の武霊使いが巻物を啜えてでつかいかエルに乗っかってるのが見えた。

ツチ！やっぱりGMサーバント対策を建てられてたか………
心の中で舌打ちした瞬間、ぞくつと頭上に気配を感じた。

PSサーバントの頭部カメラで確認すると、ガンマンの武霊使いが家の屋根に乗ってこちらを見ている。

反射的に両手の銃を向けるが、その瞬間、ガンマンの武霊使いの両腕がかすみ、俺の両腕に激痛が走った。

確認するまでもなく、両腕を撃ち抜かれたのは明らかで、次の銃撃を防ぐ為に周囲のシールドサーバントを呼び寄せせるが、それらをガンマンの武霊使いに撃ち落とされてしまう。

シールドサーバントが撃ち落とされている間に美魅は逃げようとするが、その足を忍者の武霊使いが乗っているカエルの舌に巻き取られ、転倒。

投げ出された俺が立ち上がるより早く、近くにいたシールドサーバント全てが撃ち落とされ、ガンマンの武霊使いと視線が合う。

判断ミスったな……………

作戦を優先し、オウキを再具現化しなかった事を後悔する俺だが……………もう、間に合うタイミングじゃなかった。

ガンマンの武霊使いの両腕がかすむ。

思わず目を瞑ってしまふ俺だったが……………?……………

……………何ともない?

両腕の痛み以外、痛みを感じないし、意識を失わない。

恐る恐る目を空けると……………目の前には琴野さんがいた。

????

につこりと笑い、何かを言おうと口を開こうとする沙羅だったが、口から出てきたのは真つ赤な血だった。

自分が血を吐いた事に沙羅は驚き、ゆっくり前に倒れ、慌てて起き上がった夜衣斗に支えられる。

抱き支える事により、夜衣斗は確認してしまう。

沙羅の背中に無数の弾痕が出来ている事を。

その光景を屋根上から見ているガンマンの武霊使い・島村陽子しまむら しょうこは、意思無き意識で疑問を心に浮かべていた。

陽子の武霊ガンマン・ジョーカーは、フィクションの世界でしか出来ないガンプレイを可能にする上に、リロードの必要がないリボルバー式拳銃を二丁持つ。それ故に一瞬の内に無数の弾丸を打ち出す事が可能な上に、命中した弾丸の上に弾丸を当てると言うところでもない芸当も平然と出来る。

それらにより、PSサーバントの防御力をあっさり貫通させる弾丸を撃った。

更に言えば、夜衣斗の不確定要素も踏まえて、『PSサーバントを貫通させるに余る威力』を出す為に弾丸を五連続で当たる様に撃っている。

なのに、沙羅に命中した弾丸は、『沙羅を貫通すらしていなかった』。

そのありえない出来事に今の陽子では対応出来ず、故に次の行動に移るのが遅れ、夜衣斗の反撃を許してしまう。

「オウキ！」

叫ぶように自身の武霊を呼ぶ夜衣斗。

その瞬間、陽子の背後にオウキが現れ、殴り掛かってくる。

防御の為にオウキの腕を撃つと、弾丸はオウキの腕をすり抜けた。

貫通ではなくすり抜けた事に、陽子が驚くと、目の前でオウキの姿はかすれ、一機の円盤になる。

ドッペルゲンガーサーバント。

円盤の正体に気付いた陽子だったが、その時には陽子の周りにオウキが無数に現れており、忍者の武霊使い・陽子の実弟である島村陽一郎も似た様な状況だった。

夜衣斗はオウキを出せなくなっているか、何らかの目的の為に別の場所で具現化している。

そう三島忠人は予測していたので、夜衣斗がオウキを初手で出す事ないと指示されていた。

だが、初手で夜衣斗を倒せなかった事により、夜衣斗がオウキを使う可能性が出てきてしまい、例え無数のオウキが全てドッペルゲンガーサーバントであろうと警戒せざる得ず、沙羅を抱えて逃げる夜衣斗を陽子はとりあえず見過ごし、周囲のオウキ達に銃口を向けた。

夜衣斗

美魅と琴野さんと一緒に救援に来てくれた村崎さんの援護で襲い掛かってくるレベル1の武霊達を倒しつつ、俺は逃げた。

抱き抱えている琴野さんは、PSサーバントの治癒機能でとりあえず血は止まっている様だったが、両腕を弾丸が貫通した俺とは違い、背中弾痕の数からPSサーバントの治癒機能だけでは間に合わないのには明らか。

………むしろ即死していないのが不思議なぐらいの重症度なんだが………

かと言って、ヒーラーサーバントを今の俺は出す事が出来ない。

何故なら、オウキとキバは俺から離れた所で具現化中な為、部分具現化出来ない為。

部分具現化であろうと、本体が別の場所に既に具現化していると出来ないらしく………俺は歯を食いしばる事しか出来ない。

ガンマンと忍者の武霊使いを足止めする為に、本来は『第三段階の締め』の為に用意したドッペルゲンガーサーバントを使う事になった上に、琴野さんに重傷を負わせてしまった。

作戦が大きく狂い、窮地に陥ってもなお別の場所にいるオウキを俺が呼ばないのは、俺の腕の中で苦しんでいる琴野さんがそう望んだからだ。

驚く事に、普通なら死んでいる怪我を負いながら、琴野さんは今も意識を失っておらず、それどころか、琴野さんが撃たれた事に反射的にオウキを再具現化しようとした俺を止めさえした。

「わたくしはこの程度では死にませんわ。ですから、作戦を……
続けてください」

そう苦しそうに言う琴野さんの願いを俺は踏み躪れない。

だが、だからと言って、琴野さんがここまで大丈夫な保証はなく、現にPSサーバントから送られて来る琴野さんの身体状況は悪くなるばかりに見えた。

離れているキバからヒーラーサーバントを出し、急いでこちらに向かわせてはいるが、他の武霊使い達に邪魔されてなかなか辿り着けない。

このままじゃ……くそ！こんな事になるんだったら、『予測の確証』を得ておくんだった！

「……………二人とも、少しの間、時間を稼いでくれ！」

俺はそう言っつて、近くにあった空き家に玄関を蹴破って入った。

「…夜……衣斗さん？」

俺に困惑の視線を向ける琴野さん。

ダイニングに入り、そこに在った椅子に琴野さんをゆっくり座らせる。

そして、俺はPSサーバントを脱ぎ、着ていた制服の前ボタンを外し、肩を露出させた。

「なんの……真似です……の？」

そう呆れて見せる琴野さんだが、その目には俺の推測を確信へと

変える事象が起きていた。

俺は溜め息を吐き、

「……………時間も無い事ですし、単刀直入に言いましょう」

俺は『赤くなっている琴野さんの目』を見詰めて、

「琴野さんの退魔士能力は……………いえ、琴野さんの一族は『吸血

鬼』……………違いますか？」

夜衣斗

春子さんの話と琴野さんの忌避具合。そして、伝説上の存在のモデル・あるいはそのものな退魔士能力があるのなら、琴野さんの退魔士能力として考えられるのは一つしかない。

『吸血鬼』

その言葉で一般的にイメージされるのは、最も有名なのはヨーロッパの吸血鬼だとは思うが、探せば世界中の至る所にそれに関する伝説があり、様々な名前で呼ばれている一般的には架空の存在。

語られている場所によって様々な形の吸血鬼が描かれ、漫画や映画などフィクションの世界では頻繁に登場し、話によってはその能力を利用して経済界や政界などに進出し、人を裏から操る描写などもある。

これらから考えると、『全世界の退魔士の中で最古かつ最大規模・最大勢力を誇る一族』『他国でも大体彼女の一族は財界人・政界人』と言う話にぴったり合う。

更に言えば、琴野家の本家の家名・鬼角は、その名に鬼が入っている事から、『鬼』である可能性が高い。

本家筋に近ければ近いほど家名がその一族の退魔士能力を表している事が多い事から、これはまず間違いない事だと思う。

そして、鬼は広い解釈から考えれば吸血鬼と同じ、もしくは近い存在だと言える。

ここまで考えれば、もう琴野さんが吸血鬼なのは間違いないのだろうか……彼女がその事を言わない事に俺は引っかけた。

吸血鬼は確かに昔から恐れられている架空の存在ではあるが、今は好意的な解釈や表現で使われる事も多い。

俺もどちらかと言えば、好意的な解釈や表現の方が好きだし、琴野さんが吸血鬼だったとしても嫌う事はまずないと思う。

そもそも、知名度の違いはあるとはいえ、同じ様な存在である雪女や人魚などの退魔士能力を持つ人達が平然とそれをカミングアウトしたのだから、そう言う関連で言わなかったと考えるのは不自然だとすると考えられる要因は別にあると言う事。

……例えば、彼女自身の『退魔士能力に何らかの欠陥を抱えている』とか……

俺の問いに、琴野さんは答えず、荒い息を吐きながら俺の首筋……そして、傷口の止血が終わってもまだ血が付いている両腕を見て……喉を鳴らした。

「……吸血鬼が退魔士として数えられているのなら、吸血鬼の様な分岐人類と考えるのが自然でしょう……もともと、どこまで吸血鬼なのかは流石に予想は出来ませんが、少なくとも俺の血に琴野さんが反応していると言う事は、少なくとも、『血を吸う行為、もしくは血そのものから意志力また魔力を吸収し、それを身体能力に還元する能力』がある……違いますか？」

俺の再びの問いに、琴野さんは少し迷って……小さく頷いた。

そして、注視していた俺の腕から無理矢理視線を外し、俺を見る。

「夜衣斗……さん……確かに……わたくしは……わたくしの一族は……吸血鬼ですわ」

やっぱりな……と言うか、

「……あまり喋らないで……早く俺の血を吸ってください」
その俺の言葉を琴野さんは首を小さく横に振って拒否した。

「……わたくしなら大丈夫です。時間を経ては……これぐらいの傷……」

これぐらいって……血を吸わなくても高い身体能力を持つって事か？……まあ、だからと言って、

「……その時間が無いんです。このままではオウキの『準備』が終わるまで逃げきれない」

「なら、わたくしを置いていてください」

間髪入れずにそんな事を言う琴野さんに、俺は大きな溜め息を吐いた。

「……………そんな事を俺がすると思っっているんですか？」

「……………ですが……………」

躊躇う様に視線を床に落とす琴野さん。

そして、そのまま動かなくなる。

……………？

床にはPSサーバントに付いていた血が、脱いだ際に飛び散っていて……………ふと我に帰る様に思った。

状況を打開する為に確認のなかった琴野さんの吸血鬼としての能力を使わせようと咄嗟に行動に移したが……………そもそも、琴野さんが自身の退魔士能力を言いたがらなかった理由を、その退魔士能力に何らかの欠陥を抱えているのでは？と考えていたわけ……………

…実は……………物凄く不味い事をしてないか俺？

そう今更な事を思った時、がしっと両腕を掴まれた。

痛いぐらいに強く掴まれたので、抗議の言葉を口にしようとして琴野さんを見て、息を飲んだ。

目は先程より赤く、真紅と言っても良いぐらい赤くなり、不気味な輝きを発し始め、更に口元からはキバが二つ、はつきりと見える。

「う」

喉を鳴らし、俺を掴む腕が震え、ゆっくりと自分の方へ俺を引き寄せ始める琴野さん。

「ごめんなさい……………思った以上に……………夜衣斗……………さん……………血

が……………美味しそ……………う……………で……………我慢が……………責任は取りますから……………いいですよ？ねえ！？」

苦しそくに言葉を紡ぐ度に、言葉とは反して顔が歓喜に満ち始め、言葉自体も最後は喜びと恫喝が同居していた。

と言うか……………責任？

そう疑問に思うと同時に琴野さんは俺を一気に引き寄せ、晒していた首筋に噛みついた。

最初の激痛の後、よく吸血鬼物で描かれている通り、強烈な快感が俺の体中を駆け廻り始める。

気を抜くと声に出してしまいそうなほどの快楽に……頭が痺れる様な……そう言えば……吸血鬼物ではよく吸血鬼に血を吸われて者も吸血鬼になるとか、吸われた吸血鬼に絶対服従になるとか……そんな事が描かれていたな……もつとも、これらも同じ魔法であるのなら、今の俺には抵抗出来る打算があつたんだが……くう……この快楽はあまりにもヤバイ！あまり長く吸われると……快楽で……気絶してしまいそうだ……

ごくごく俺の血を吸い続ける琴野さん。

不意に何か固い物が床に落ちる音が立て続けに起きた。

何とか視線をその音の方向に向けると……それは明らかに弾丸で、琴野さんの体内で留まっていたガンマンの武霊使いの銃弾の様だった。

……つまり、血を吸い始めてたった数秒であれだけの重傷が完治したって事か？……予想はしていたとは言え、驚くしかないな……

そんな事を思いながら、

「……琴野さん！傷は完治した様です！もういいでしょう！」
そう言うが、琴野さんは血を吸うのを止める様子はない。

どうも血を吸うのに夢中でこっちの言葉が耳に入っていない様だった。

……まあ、こう言う状況の描写も吸血鬼物にはなくはないので、一応対策は考案済み。

俺は近くに浮遊しているPSサーバントに思念で命令して、再び装着すると同時に、琴野さんのPSサーバントの命令権を一時戻し、強制的に俺から離れる様に動かしだ。

もつとも、琴野さんの力が普通の人間以上なのか、琴野さんは僅かにしか俺から離れなかったが、それでも何とか琴野さんから離れる。

血を吸われなくなった事で、強烈な快楽がなくなつて……正直、尾を引かれなくもないが……それより、ちよつと自分の下の方を感覚で確認……よし！大丈夫！……何がかは深く考えない！

「ああああ」

？

俺から離れた琴野さんが両手で自分を抱き、

「ああああああああー！！！！！！！！！！」

身体をよがらせながら、まるで快感を感じているかの様に叫び声を上げる。

あまりの反応に、俺が思わずぼかんとしていると、唐突に琴野さんが叫ぶのを止めて、俺の方にゆっくりと顔を向けた。

そして、ぞくつとする。

琴野さんの口から俺の血を僅かに垂らしながら、直前まで目の前にいた人とは同一人物だとは思えない妖艶笑みを浮かべ、

「もつと」

その声を聞いた瞬間、俺の中で何かが、疼いた。

「もつとわたくしに血を吸わせなさい！」

唐突な命令系に、俺は疑問を浮かべるより先に、その命令に従わなくてはと言う強烈な強迫観念に迫られた。

ヤバイ！予想に反してしっかり支配されてるじゃないか！？抵抗しないと、今の琴野さんなら俺が失血死するまで血を吸いかねない！

そう俺は心の中で叫ぶが、身体は琴野さんの命令に素直に従い、ゆっくりと琴野さんの下へ歩み寄り始める。

????

夜衣斗達が中に籠る家の前では、美魅と村崎好美が即席の連携を武霊使いと武霊を退けていた。

美魅が接近戦を武霊・武霊使いを倒し、それを好美が中距離から銃弾で援護し、場合によっては接近戦で美魅と同時に攻撃する。

今の所襲い掛かってくる武霊使い・武霊はPSサーバントでも何とかなる相手ばかりなので、二人だけでなんとかなっているが、

「長いだわね！」

攻防の一瞬の間に好美と背中合わせになった美魅は思わず愚痴を言い、好美は同意見とばかりに眉を顰めた。

「夜衣斗はこんな時に何をやってるだわね！あんた知ってるだわね？」

「……予想は付きますが……そうで合って欲しくくないです」

「？それってどう言う」

意味だわよ。

そう言おうとした時、二人は殺気を感じその場から別々の方向に飛び退いた。

瞬間、直前までいた場所に無数の弾痕が出来る。

殺気のした方向を二人が見ると、屋根の上にガンマンの武霊使いと忍者の武霊使いが悠然と立っていた。

「ヤバいだわね……」

美魅は後部カメラで家の様子を確認するが、妙な気配を感じるくらいで出てくる様子は一切ない。

仕方なく、

「本当に夜衣斗は何をやってるだわね！」

そう叫びながら美魅はレベル3の武霊使い二人に飛び掛かった。

夜衣斗

目の前まで歩み寄り、身体を動かせない俺に、琴野さんはついでとばかりに口付し!?

……って、何なの昨日と言い今日と言い、不幸何だか幸運なんだか……奪われてばっかだし……いや、まあ、それどころじゃないが……

……
短い様な長い様な俺の血の味がする口付けの後、滑らせる様に首元まで口を移動させ……噛み付いた。

一瞬、PSサーバントが防御反応を見せるが、あっさりPSサーバントの防御力を破り、琴野さんの牙が俺の首筋に侵入する。

再びの強烈な快楽に、

……ああ……俺、殺されてしまっただ……

そう自身の軽率さを呪いながら思い、引っ掛かった。

殺される?……誰に?……つて、琴野さんにか……それもい……

……わけないだろうが!

心まで墮ち掛けた瞬間、唐突に怒りが込み上げてきた。

琴野さんに対してではなく、自分に対してだ。

自分の軽率な行動で、琴野さん自身が避けていた吸血鬼としての能力を使わせ、俺を殺させさせてしまう。もっと言えば、そもそも俺の読みの浅さのせいで、琴野さんは普通なら即死しそうな重傷を負ってしまった。そんな事を琴野さんにさせてしまったと言っのに、俺は更に琴野さんに負担を増やそうと言っのか?しかも、殺人と言っつとんでもなく重い罪を?……冗談じゃない!ふざけんなよ

黒樹夜衣斗!

あまりの怒りに心の中で自分を自分で叱責した瞬間、俺の中で何かが弾け、形容しがたい異様な感覚に襲われ……奇妙なビジョンが見えた。

二つの糸が螺旋を描きながら円を描いていて、まるで血管の様に脈打っている。

一瞬、綺麗な円だと思ったが、よく見ると所々二本の糸が絡まっている箇所があり……。勿体無いと思った。その瞬間、まるで俺の意思に反応したかのように二本の糸が絡まっていた箇所が次々と解け始め……

気が付くと、琴野さんが首筋から口を離し、俺の胸に顔を埋めて、泣きじゃくり、

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！……」
と何度も謝っていた。

へ？えくと？……何が起ったんだ？

訳が分からない唐突な状況の変化に、頭が付いていけず混乱するばかりだが……。とりあえず琴野さんの背中を撫でて琴野さんを落ち着かせる。

外の二人が心配になってきた頃に、琴野さんは泣き止み、

「……わたし達種族……近年統一した呼称として『ヴァンパイア』と自らを呼んでいるのですが……」
？

外にいる美魅達がどれくらい持つかも、ニセオウキがどれくらい持つかも分からない状況下で、なんで自らの種族の説明を？

「ヴァンパイアは世界各地に……。夜衣斗様が予想する通り血を吸う事で飛躍的にあらゆる身体能力を向上させる基礎能力と、各血族ごとに違う固有能力を持っていますの……」

各血族ごとに？……

「……つまり、映画とかで表現される狼に変身したり、霧になつたりする能力を全部持っている血族はいなくて、一つの血族に一つの固有能力を持つって事ですか？」

俺の問いにこくりと頷く琴野さん。

「ですが、わたくしの場合違います。祖母がヨーロッパのヴァンパイア血族が一つローズ家から婿を取ったので、ローズ家の固有能力……。ヴァンパイア能力とわたくし達は呼んでいます……。ヴ

アンパイア能力『絶対魅了』を受け継いでいますの」

ヴァンパイア能力絶対魅了？……………さっきのあれか？

「絶対魅了は、『血を吸った相手を魅了し、積極的な絶対服従を強いる能力』ですわ」

やっぱりそうか……………ん？て事は、他のヴァンパイアは、血を吸っても他人を支配できないわけか……………

「そして、わたくしの母は、両家のヴァンパイア能力を上手く受け継いでいるので二つの能力をちゃんとコントロールできるのでが……………わたくしは父が普通の人間であつたせいか、二つの能力が相互干渉を引き起こして……………『さきほどまで』うまく扱えませんでした」

予想は合っていたわけか……………ん？さきほどまで？

俺の疑問を感じ取つたのか、琴野さんの胸から顔を離し、俺の顔を真っ直ぐ見た。

先程見せた妖艶な笑みとは全く違う、嬉しくて嬉しくて仕方がないって感じの微笑みを浮かべていた琴野さんに、俺は訳が分からず眉を顰める。

「でも！夜衣斗さんのおかげでわたくしは自らのヴァンパイア能力を扱える様になつたみたいなんです！」

はぁ？俺のおかげ？……………どう言つ事？

意味がさっぱり分からない事に首を傾げた時、何かが壁を突き破つて入つて来た。

夜衣斗

反射的に琴野さんから離れ、PSサーバントの拳銃を取り出すが入って来たのが村崎さんだったので、拳銃の向ける先を失うが……倒れている村崎さんの姿を見て俺は絶句。

何故なら全身が凍り付いていて、身体の至る所に弾丸が張り付いている状態だったからだ。

俺が啞然としている前で、村崎さんは何事も無いかの様に立ち上がり、パキパキと凍っていた身体の表面を弾丸ごと落とす。

星波町奪還作戦第三段階は、市街戦になるのは間違いない、また前の段階で閉鎖式の戦い方を見せているので、よほどうまくやらない限り、その対策は打たれると俺は考えていた。

その為、広範囲系・放出系の退魔士能力は使い難くなるので、接近系・体現系の退魔士能力を持つメンバーを第三段階参加メンバーにし、PSサーバントを着た状態での退魔士能力の使用を許可している。

忘却現象は、武霊に関する事を忘れさせる現象なので、武霊に能力を乗せる・被せるなどをすれば、例えば退魔士能力を使ってもそれごと忘れられる可能性が高いと判断したからだ。

だから、村崎さんが退魔士能力を使う事は頭には在ったが……実際に目にするると驚くしかない……って、驚いている場合じゃないな。

俺は、慌てて外のスカウトサーバントと視覚をリンクし、外の状況を確認すると……ガンマンの武霊使いと美魅が回る様に超接近戦で戦っていた。

……銃の射線軸上に入らない為には、接近するのが有効って話は漫画とかで見た事があるが……

外の戦いに再び啞然とさせられた俺だったが、ふと村崎さんがこ

つちを見て驚いている事に気付いた。

「……………まさかとは思いましたが……………やはり……………血を飲ませたのですか？」

村崎さんの問いに、琴野さんが顔を赤くする？

一瞬意味の分からない反応だったが……………直ぐにある事を思い出した。それは、吸血と言う行為は『ある行為』と同じと捕えたり、考えたりする作品が……………うわ……………俺はそんな事を琴野さんにしろって言ったのか？……………どうか深読みでありますように……………

「何とも無いんですか？」

村崎さんの問いに、琴野さんは頷き、

「ええ、夜衣斗さんのおかげで」

にっこりと微笑み、村崎さんを何故か驚かせ、

「……………随分、早いですね……………」

早い？……………訳が分からない事を俺に言った。

「やはり、種無しの伝承は」

そこまで村崎さんが言った時、不意に琴野さんが銃を出し、床に向かって発砲した。

床に弾丸が着弾して直ぐに、忍者の武霊使いが床を突き破って現れる。

いつの間に接近してたんだ!?

身構える俺と村崎さんに、琴野さんとはんでもない事を言い出した。

「この武霊使いは、わたくしが倒しますわ。二人は下がっていてください」

?????

琴野沙羅は、ヨーロッパのヴァンパイア血族が一つ・ローズ家の祖父と日本五大分家の一つ鬼角家の分家・琴野家の祖母から両家のヴァンパイア能力を母共々受け継いでいる稀有な存在としてヴァン

パイア達のみならず、一部の退魔士に有名な存在だった。

二つのヴァンパイア能力を有しているヴァンパイアが『現在』では稀有な存在であるのと、母親の由良ゆらがその二つの能力を使って世界各地で活躍したことに加え、父親の鎖牙さかがヴァンパイアハンターだった事も沙羅を有名にしているが、最も沙羅を有名にさせているのが『墮ち掛けたヴァンパイア』だと言う事。

ヴァンパイアが退魔士として数えられる以前、ヴァンパイア種族は二つの考え方により二分されていた。

人類と共存を考える『共存派』。

人類の支配を考える『支配派』。

その考え方の違いは、やがて退魔士・魔法使いを巻き込んだ戦いへと発展し、支配派が駆逐される事により終結した。

俗に『ヴァンパイア大戦』と呼ばれるこの戦いを切っ掛けに、共存派のヴァンパイア達は退魔士として受け入れられ、支配派に多く味方した魔法使いはより危険視され、退魔士が古来魔法使いを滅ぼす切っ掛けになったと言われている。

そして、ローズ家はそのヴァンパイア能力故に、能力に溺れやすい・支配されやすいヴァンパイアと言われており、実際、ヴァンパイア大戦時は、一部のローズ家の人間が自らの能力を自由に使う為に支配派に付いた過去があった。

そもそも、ヴァンパイア種族は、常に自らが得る以上の根源意志力を常に消費しており、他の存在から根源意志力を得なければいけない宿命を背負っている。

それ故に吸血能力であり、それ故に人以上の能力を持ち、それ故に人の道を踏み外し、墮ちやすい。

その顕著たるのがヴァンパイア大戦時に滅ぼされた支配派のヴァンパイア達。

共存派の基本的に平和主義者である為、再び同じ戦いが起きる事を非常に恐れている。

故に、現在のヴァンパイアは、墮ちれば即座に退魔対象になる運

命。

とは言っても、堕ちやすいヴァンパイア血族と言われるローズ家であっても、それほど危険視はされていない。

そのヴァンパイア能力『絶対魅了』は強力で危険な能力ではあるが、その分、身体能力は他のヴァンパイア血族に比べ劣っていた。

劣っているとは言っても、ヴァンパイア基準での話なので、普通の人間からすれば十分驚嘆に値する身体能力だが、退魔士からしてみれば魔物の方が厄介に思える程度にしかなく、更に言えば絶対魅了は強い魔法をその身に宿した分岐人類には基本的に効かない能力でもあるので、比較的簡単な退魔の例として見られる事もしばしある。

故に、堕ちた即、死に繋がるので、ローズ家は他のヴァンパイア血族に比べ異常なほど自身の能力を恐れていた。

それらの理由により、退魔士達はローズ家をそれほど危険視してはいないが、沙羅の場合は別だった。

何故なら、沙羅が受け継いでいる鬼角家の退魔士能力（ヴァンパイア能力）は、『身体系最強の能力の一つ』として数えられているものであり、ローズ家の絶対魅了と組み合わせればとてつもない脅威になる。

しかも、沙羅は母親の由良と違い、半分人間の血が流れているせいか、二つの能力の制御がなかなか出来ず、どちらかを使う度に自らの能力に呑まれ、『能力に自我を支配された状態』になり、大事には至っていないが、何度も事件を起こしていた。

それ故に堕ち掛けたヴァンパイアとして認識され、一部の過激な退魔士達に退魔士対象として命を狙われ、何度も死ぬような目に合っている。

その為、ヴァンパイアハンターと結婚した事により勘当同然となった母・由良は、無理は承知で祖母・優香に頼み込んで、正式な退魔士が近づく事を禁止された町・星波町に、娘を住む事の許しを得た。

ただし、その許しを得る為に、由良からかなり無茶な仕事を幾つ
も押し付けられた為、沙羅は両親とは年に数回しか会えない状況に
なった上に、学園長の孫でありながら寮住まいで、琴野家の資産を
一切使えない微妙な立場になってしまっている。

言わば、夜衣斗と似た様な状況・環境だと言えなくもないが、こ
ちらは祖母・優香が沙羅を琴野家の次期当主に指名しているので、
親族に命を狙われている夜衣斗より幾分かマシだとも言えなくはな
い。

もっとも、それらは、沙羅自身が自らのヴァンパイア能力を使い
こなせなければ全てが駄目になる話だったが………

夜衣斗

自分が倒す宣言をすると同時に、琴野さんが忍者の武霊使いに飛び掛かる。

援護しようか迷っている間に、琴野さんの姿は変化した。

目が吸血時の様に赤く輝き、額に角が二本生え、皮膚が赤黒くなり、身体も少し肥大化して、両手足から鋭い爪が僅かに伸びる。

PSサーバントは着用者の変化にも対応出来る設定なので、多少の変化なら破れるとかはないが……いや、予想はしてたよ？もしかしらたって……まあ、それでもその急激な変貌には唖然とするしかない。

空中で琴野さんの腕が掻き消える。

忍者の武霊使いが防御の為に出した忍者刀を押し折り、琴野さんの拳が忍者の武霊使いの顔に当たり、吹き飛んだ！？

後ろに真っ直ぐ吹き飛んだ忍者の武霊使いは、壁に穴を空け、そのまま外に出てっつてしまい、琴野さんはその後を追って外に飛び出す……え〜っつと……

思わず村崎さんを見ると、何故か安堵の表情を浮かべていた。暴走を懸念していたのだろう。

万が一の為か、その右手には冷気が渦巻いていた。

俺の視線に気付いた村崎さんは苦笑いを浮かべ、

「琴野家……いえ、鬼角家の退魔士能力は、『鬼人化』と言う文字通り鬼になる能力です」

鬼人化……まんまだな……

「ヴァンパイア種族は、何もしていなくてもも人より『あらゆる面で強い種族』なのですが……鬼人化はそれを更に強化させます」
それは見れば分かるが……

???

吹き飛んだ忍者の武霊使い・陽一郎を追って沙羅が家の外に出ると、丁度超接近戦を繰り広げている美魅とガンマンの武霊使い・陽子と鉢合わせになった。

咄嗟にターゲットを美魅から沙羅に変える陽子。

引き金を引こうとした瞬間、陽子は沙羅と目が合った。

瞬間、急激な胸の高鳴りを覚え、引き金を引くのを僅かに躊躇ってしまふ。

ヴァンパイア能力の一つ・絶対魅了は、吸血した相手を絶対的に魅了してしまう能力だが、何も吸血した相手のみに効果があると言ふ訳ではない。

視線・体臭・声などあらゆる五感を通して能力発動中のローズ家のヴァンパイアを感じる事で、強制的に好感を抱かせる。

絶対魅了の副産物的な能力だが、本来は何かの行動を留めるほどの力はない。

だが、ヴァンパイアのあらゆる面を強化するヴァンパイア能力・鬼人化により、その副産物的能力も強化される為、武霊使いでかっ意思を奪われている陽子にも効果があつた。

強制好感により生じた僅かな隙を突き、一気に間合いを詰める沙羅。

陽子が発砲した時には沙羅の掌が陽子の顎に打ち込まれており、陽子の身体がとてつもない早さで後ろに倒れた。

あまりの早さに陽子と闘っていた美魅が啞然としている中、未だにレベル3の具現化中の陽子に対して拳を振り下ろそうとしたが、直後に陽子の武霊具現化が解けた為、拳の行き場を失う。

が、直ぐに握った拳を開き、頭上にその手を移動。

その掌にいつの間にか背後に迫っていた陽一郎の鎖鎌の一撃を鎌の刃の部分で受け止めた。

鎖鎌の刃は沙羅の着ているPSサーバントを切り裂きはしたが、その下の掌を切り裂く事は出来ていない。

しかも、沙羅が掌を握ると、鎖鎌の刃はあっさり砕ける。
陽一郎は鎖鎌の鎖分銅を投げ、沙羅の動きを封じ、頭部に蹴りを放つ。

沙羅は巻き付いた鎖をあっさり千切り、放たれた蹴りを残った手で掴み、そのまま持ち上げる。

あまりにもあっさり持ち上げられた陽一郎が状況を整理するより早く、沙羅は片手で陽一郎を振り回し、勢いを付けて地面に叩き付けた。

その瞬間、陽一郎の身体が丸太に変化。

驚く美魅を尻目に、沙羅は周囲を見回し、おもむろに少し歩き、唐突に地面に拳を突刺した。

踏み固められた庭の土がまるで水のように腕が入る光景に、沙羅自身もちよつと驚きつつ、地面から腕を引き抜くと、沙羅の手と一緒に頭を掴まれた陽一郎が地面から現れる。

地面から引き抜かれた陽一郎が抵抗するより早く、沙羅は空いた方の手で拳を殴打。

くの時に曲がる陽一郎の身体が元に戻ると共に、武霊の具現化が解け、沙羅は慌てて陽一郎を地面に寝かせた。

夜衣斗

……………何？この強さ……………

啞然を通り越して呆けるしかない沙羅さん（鬼人化）の戦闘力。

……………と言うか、俺いらなくない？

そんな事を思った時、村崎さんが溜め息を吐いた。

「ただ」

ただ？……………あ！さっきの話の続きか、

「鬼人化には大きな欠点があるんです」

欠点？

村崎さんがそう言った時、外から何か倒れる音が聞こえてきた。それと共に、

「夜衣斗！沙羅が倒れただわよ！」

と予想だにできなかった事を美魅が言った。

思わず村崎さんに顔を向けると、

「非常に燃費が悪いです……そもそも、ただでさえヴァンパイア種族は、自らの基礎能力を維持する為に、常に自分の存在を維持する以上の根源意志力を消費しているのに、それを強化する能力なんて使うとなれば、ものの数分で気絶してしまうんです」

数分で……どこぞの特撮か？

「しかも、今のがまともにコントロール出来た初めての鬼人化ですから……まあ、これでも持った方もしれません」

そんな事を言いながら、村崎さんは沙羅さんの空けた穴を通って家の外に出た。

その際にぼそっと、

「まったく、好きな相手の血を吸ったからって、ちょっと高揚し過ぎでしょ。もう少し後先を考えなさいよね」

と言っている様に聞こえたが……まあ、多分、気のせいだろう……そうそう都合よく色々はない……はず。

飛矢折

統合生徒会長達が黒樹君の救援に向かった後、あたし達はキバを攻防の基点にして巴御前の武霊使いと変な競泳者の武霊使いと対峙していた。

村雲君からの思念通信によると、黒樹君達を襲ったのは、あたし達と闘っている二人以外にもう二人。計四人に襲われ、しかも、全員がレベル3の具現化が出来る武霊使いだった。

レベル3の具現化を出来る人は、少ないと言われているレベル2の具現化を出来る人より更に少なく、星波学園にも両手で数えるぐらいしかないって美幸に聞いた事がある。

その際に聞いた人の中に、今戦っている人達はいなくて……だとすると、事前に聞いていた三島忠人の隠し玉の五人の内の四人。

そして、村雲君の話だと、あたし達が戦っているのが巴御前の武霊を使う島越道重さんと、アルティメットダイバーとか言うアニメの主人公の武霊を使う香城南さんの二人。

なんで退魔士の人達が調べられなかった情報を村雲君が知っているのかは疑問だけれど……

(何か弱点とかは知らないの?)

そう思念通信を村雲君に送るけど、村雲君は、

(俺はあんまりアニメとか詳しくねえんだよ)

と返答が返ってきた。

……と言う事は、あの巴御前もアニメが基なのね……黒樹君が入れば何か分かったかもしれないけど……大丈夫かな黒樹君……

……統合生徒会長達が救援に向かってそう時間は立っていないけど……何だか妙な胸騒ぎがする様な……

そんな事を考えた時、道路から顔を出していた香城さんが再びアスファルトの中に潜った。

同時に、鳥越さんの姿が掻き消えて、反射的に両手の銃を刀に変え、頭上に重ねて防衛。

読み通り目の前に姿を現した鳥越さんが薙刀を振るい、薙刀の刃と二振りの刀の刃が激突。

一瞬の拮抗の後、二振りの刀身を徐々に徐々に薙刀の刃が切り裂き始めた。

その光景にぞっとした瞬間、あたしの両隣から操形先輩と村雲君が銃撃。

鳥越さんは後ろに跳び、薙刀を振り回して銃弾を弾く。

助かったあたしは、両手の刀を見る。

薙刀によつて斬られた場所は直ぐに修復されるけど………やっぱ
り黒樹君の武霊でも、具現化段階の違いは明白に出るみたいね……
あれ？でも、『頂嬉武蔵と闘った時、黒樹君は互角以上に戦って
た』よね？………何が違うんだろう？

(そんな事は後で考えろって)

瞬輝丸？

(ここはあたいの出番だろ?)

でも………退魔士能力と違って、瞬輝丸は見た目は普通の刀だから、PSサーバントでの誤魔化しは効かない可能性が………

黒樹君は奪還作戦を始める前に、身体系・直接系の退魔士能力を持つ人達だけにその能力の使用を許可してた。

PSサーバントと言う武霊の一部を身に纏っている事により、例え能力を使用しても武霊と一緒に記憶する事になって、忘却現象によつて一緒に忘れさせられる。また、事情を知らない普通の人達にとっては退魔士能力も武霊能力も区別が付かないから、退魔士能力を見られていても武霊能力として誤認する可能性は高い。

でも、広範囲系などの身体から離れた場所に能力を発揮する退魔士能力は、武霊と一緒に見せる事は難しい上に、見られると直接犯罪に繋がってしまう様な武器と同じ様に、例え武霊と一緒に見たとしても別々に記憶される可能性が高くて、その場合は忘却現象が効

かなくなる……かもしれないらしくて……

黒樹君の予想だと、忘却現象が、武霊に関するあらゆる事を忘却させると言うのは、『記憶している本人がその記憶したものを武霊・武霊に関したものと認識している』のと、『実際にその記憶の中に武霊が存在している』のが発動条件になっている可能性が高い……らしい。何を根拠にそんな予想をしたのかは分からないけど……だとすると、武霊と一緒に見せ難い退魔士能力は勿論、既に武器として認識されている様な刀は、忘却現象の適応外に

(いちいち細けえ時代になったな)

細かいって……

(小次郎があたいを使ってた時は、周りなんか気にしてなかったぜ?)

……まあ、あのお祖父ちゃんなら気にしないかもしれないけど……あたしは……

躊躇うあたしに、瞬輝丸は溜め息を吐いた。

(……まあ、要は憶えさせなければ良いんだろ?)

?……そう言う事よね?

(なら、キバに近付きな)

キバに?

(いいから)

?

妙に自信ある感じで言う瞬輝丸に、あたしは疑問を感じながらキバに近づく。

実は、鳥越さんが突撃してきたのと同時に、後ろにいたキバに香城さんが攻撃を開始していた。

アスファルトから姿を現すと同時に、まるで水のようにアスファルトをすくい飛ばす香城さん。

キバはバックステップでそれを回避するけど、一部が足に掛り、瞬く間に固まって道路に一瞬だけ足を取られる。

僅かに生じた隙に、再びアスファルトの中に潜った鳥越さんが飛

び掛かり、キバの腹部に手を触れた。

その瞬間、触れた部分が液状化し、鳥越さんの手がキバの中へと吸い込まれる様に入る。

キバは咄嗟に横に跳んで逃れるけど、その腹部には大きな穴が空いてしまっていた。

その光景をPSサーバントの後部カメラで見っていたんだけど……

…何だろう？ やっぱり、黒樹君が近くにいないと酷く弱くなっている？

そんな事を考えながらキバに近付いた時、小人瞬輝丸が現れ、キバ頭の上に乗った。

（これはあくまで緊急手段だからよ。あまり長い時間は使えないからな）

そう瞬輝丸が言った瞬間、あたしの『全てが一変した』。

飛矢折

全ての感覚が一瞬の内に消失した。

だけど、次の瞬間には、あたしを中心とした半径百メートルぐら
いの全ての光景を『感じる』。

視覚・嗅覚・聴覚・味覚・触覚。

それら五感に加え、気を感じ取る事であたしは周囲の気配を知る。
どれが欠けても、どれかが補える様に、どれでも全力で使える修
業をしているから、何かの感覚が一時的に消失する感覚は経験した
事が何度もあった。

だけど、その五感の全てが同時に消失した事は経験が無い上に、
それらを上回る全く違う感覚を感じた事など一度もない。

ましてや、その今まで感じた事が無い未知の感覚で、あたしはあ
たしの身体がとんでもない事になっている事に気付き、混乱を通り
越して発狂しそうだった。

その未知の感覚は、あたしの身体がいつの間にか霧散し、感じて
いる光景の全てにバラけて存在している事を示し、その範囲が徐々
に徐々に広がっている？

（あゝやっぱりいきなりは無理か）

不意に瞬輝丸の声が聞こえた。

あたしは思わず怒鳴り散らそうとしたけど……………身体がなくなっ
ているので、当然、声が出ない。

瞬輝丸！？一体これは何なの！

仕方なく、心の中で抗議すると、

（心配すんなって、ただ身体の組成がちょっと雷になっただけだ
からよ）

どこがちよつとよ！……………え？雷？

（あたいのもう一つの名は、『雷の退魔刀』。所有者の身体を雷

へと変える魔法を持つのなら……まあ、そうは言っても、その魔法を使う為には膨大な魔力が必要だからよ。所有者にはそれ相応の魔力の持ち主か、どこかから借りられる奴である事が求められるってわけさ)

なるほど……じゃあ、今回はキバから借りたと言う事？

(借りたつて言うより、奪ったが正確だな)

奪った？

瞬輝丸の言葉に、意識をキバに向けると、キバの姿がゆっくり霧散しているのを感じられた。

(あたいには他者から魔力を奪う力もあるんだがよ。加減が効かなくてな……)

それは見れば分かるけど……ねえ？何だか周りの動きがゆっくりになってる様な……

(そりゃそうだ。今のあたい達は、雷だからよ)

……つまり、全てが雷の速さになっているのね……だから、瞬輝丸。

(そう言う事だ。まあ、なんだ。さっきも言ったが、これはあくまで緊急手段だからよ。ちゃっちゃと終わらせねえと直ぐにこの状態が終わっちまうぞ?)

そうは言っても……どうすればいいの？

(思えばいい)

思う？

(どうし、どうしたいか。強く、強く)

強く、強く？

村雲君と操形先輩による銃撃をなぎなたで防ぐ鳥越さん。

あたしは瞬輝丸に言われた通り強く強く思った。

鳥越さんの背後から電気となった瞬輝丸の刃を振るう自分の姿を。

瞬間、拡散していた自分が一瞬の内に鳥越さんの背後に集まり、

あたしとして形作られ、鳥越さんを思った通り斬った。

電気となった瞬輝丸の刃は強烈な電撃を鳥越さんに与え、気絶さ

せる。

それと同時に再びあたしは拡散し、ゆっくり驚く村雲君と操形先輩の背後から二人を襲おうとしている香城さんを発見して、あたしは咄嗟に思った。

アスファルトから飛び出す香城さんの背後から斬りかかる自分を。瞬間、あたしの身体は再び収束して、香城さんの背後に現れ、香城さんを瞬輝丸で斬り、気絶させた。

(ん……なんとか間に合ったな)

そう瞬輝丸が言うと共に、あたしの身体は一気に元に戻り、同時に意識が霞んで……気が付いたら地面に倒れていた。

「大丈夫か？」

心配そうに村雲君があたしを覗き込んでいた。

えっと………とりあえず、

「………大丈夫」

そう言いながらあたしは立ち上がるうとしたけど………何故だか力が入らない。

「まだ休んでろって………よく分からなかったけどよ。キバが捨て身の攻撃をしてあの二人を倒してるからさ………多分、それに飛矢折は巻き込まれたんだろうさ………」

そう言う村雲君の視線の先には、シールドサーバントに運ばれる鳥越さんと香城さんがいた。

………キバが捨て身？………確かにキバはいなくなっているけど………(操形君がそう誤魔化したんだよ)

あたしの疑問に瞬輝丸がそう答えたんだけど………その声は何故か元気がない。

(言っただろう？緊急手段だって………だから、あれをやると、あたしも巴もすげえ疲れんだよ………まあ、つつわけで寝る。しばらくあたいは使えないからな)

え？ちょ！ちよつと！………瞬輝丸？

本当に寝ちゃったのか、瞬輝丸は一切返事をしなくなった。

……………退魔刀って寝るのね……………

そんな事を思った時、PSサーバントの通信機能がオンになった。そして、聞えて来たのは、

「オウキの準備が整いました。予定とは大分違いますが、第四段階に進みます」

黒樹君の声だった……………よかつた無事に助け出されたんだね……………

…まあ、PSサーバントが消えていないから無事なのは分かっていたけど……………

そんな事を思いながらほっとしていると、凄まじい爆音と爆風が唐突に生じた。

明らかに聞いていた第四段階とは違う現象に、音のした方に顔を向けようとするけど……………まだ力が入らない。

「やべえな……………このタイミングであいつを使ってくるなんてな……………」

そうつぶやく村雲君。

何が起ったのか見えている村雲君は、その起った何かを知っている様な感じだった。

だから、

「何が起こっているの村雲君」

「緑川だよ」

？……………緑川君？

あまりにも村雲君の深刻な雰囲気と繋がらない人の名前が出てきたので、あたしは反応に困ったんだけど……………そんなあたしに村雲君は予想外の言葉を口にした。

「みんな知らねえんだよ……………あいつが、『学園最強の炎系武霊使い』だって事をな」

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 73

夜衣斗

鬼人化の反動で倒れた琴野さんを、何故か具現化が解けて俺の所に戻って来たキバを再具現化して乗せ、襲い掛かってくる武霊使いを退けながら、星波駅まで撤退を開始。

その直前に村雲から聞いた話によると、三島忠人の隠し玉五人衆（勝手に心の中で命名）の内、香城南・鳥越道重はキバが自爆攻撃で倒した？らしく……キバにそんな機能は無い筈なので、余波で意識を失っていると言う飛矢折さんが何かをしたんだろう。多分、昨日受け取った瞬輝丸の力を使って……だとすると村雲には勘違いさせたままの方がいいな……って、タイミング的にキバはその力を発動させる為の糧にでも使われたんだろう……何と言うか……主人揃って……妙な偶然と言うか……まあ、とにかく、こっちで倒した二人……村雲の話だと島村陽一郎・島村陽子の姉弟で、隠し玉五人衆の内四人は倒した事になる。

残るは星波学園の周りの海を回遊している戦艦武霊使い大学部三年茶郷薫。

琴野さんの話だと、男装の麗人だとか……女性があのアニメをね……お鍋？

……まあ、何にせよ。予想外の戦力で危機は乗り越える事が出来た。後は、オウキの準備が整い次第……予定とは大分違うが……第四段階に移行するだけだな……

そう思った時、オウキから通信が入った。

無言の通信だが、準備が終わり次第通信を入れると命令していたので……ようやく次の段階に進められる！

即全PSサーバントに通信を繋ぎ、

「オウキの準備が整いました。予定とは大分違いますが、第四段階に進みます」

そう全員に言つと、それまで闘っていた接近戦担当組が一斉に撤退を開始。

突然の撤退に、一瞬動きが止まる武霊使い達だが、直ぐに三島忠人から命令が飛んだのか、一斉に追撃し始める。

……… 本来なら、ここでドッペルゲンガーサーバントを大量に投入して、かく乱させる予定だったんだが………

そうそう予定通り物事が運ばない事に溜め息を吐いた瞬間、

???

三島忠人は、香城南・鳥越道重・島村陽一郎・島村陽子を一辺に投入した事で、勝利を確信していた。

夜衣斗達がどんな方法で武霊を倒しているかは不明でも、その戦い方の基点は夜衣斗である事は間違いなく、夜衣斗さえ倒せばこちら側の勝利は確実になるはずだった。

その為、レベル3の武霊使いであり、学園最強の一角である青葉愛をわざと一人で夜衣斗にぶつけ、レベル3の武霊使いを一人づつ使う印象を夜衣斗に与え、大量の武霊使いを投入すれば個別に戦い始めるしかない夜衣斗達の動きを見越して四人を配置し、夜衣斗を強襲させた。

そして、キバの再具現化をすれば周囲の人間が危機に陥る場所に分断し、武霊のない夜衣斗を二人のレベル3で倒す。

オウキは何らかの逆転の準備をしていて使えないのは、青葉愛の戦いの時に分かつていた。

だからこそ、夜衣斗に勝てる要素はなく、勝利を確信していたのだが、予想外の事が立て続けに起り、結局は夜衣斗を倒すに至らなかった。

姿が鬼の様に変わりレベル3の武霊使いを圧倒した琴野沙羅。

姿が掻き消え、再び現れ倒れた時にはレベル3の武霊使いを倒していた飛矢折巴。

武霊以外の方法で武霊を倒す一端を見れたのが唯一の収穫と言え

なくはないが、だからと言ってそれがこちらの有利に繋がるかは微妙な所。

何であれ、三島忠人は万が一を四人が破れても、成功しても、絶対的に防げない『次の一手』を用意していた。

それは、緑川響。

高等部一年の武霊使いで、戦闘狂のアホだと思われる彼だが、武霊研究部に所属していると言う意味を全員が忘れている。

武霊研究部に入部する条件は、ただ一つ『強力な武霊使いである事』。

つまり、本人はアホでも、緑川響の武霊イフリートは強力な武霊である為、『本人の意思が無い今の状態ならイフリートは最大限の力を発揮出来る』と言う事。

それも、夜衣斗の『オウキを圧倒できるほどの』

夜衣斗

唐突に凄まじい爆音と爆風が生じた。

その二つが収まると同時に、二つが生じた方向に顔を向けると……

……空を貫く炎の柱があった。

しかも、物凄く巨大で……見ている傍から徐々に拡大している様だった。

思わず隣にいた村崎さんを見るが、村崎さんは首を横に振り、こんな事が出来る武霊を知らないと示す。

とにかく状況を確認する為に、スカウトサーバント達を炎の柱の周りに飛ばす。

そして、送られてきた映像を見て、俺は眉を顰めた。

炎の隙間から見える炎の柱の中は……何故か建物などが無事だったからだ。

琴野さんの武霊ヒノカの生み出す炎は、燃やす対象を選べるらしいので……同じタイプの武霊と言う事が……念の為。

シールドサーバントを最硬度のシールドを張らせて炎の柱に突っ

込ませると……柱から出てくる炎の端切れに触れた瞬間、『シールドごと燃え、霧散した』。

……普通、力場は燃えないと思うんだが……流石は武霊って事か……

そう呆れつつ、更にスカウトサーバントから送られて来る映像に注視していると、村雲から通信が入った。

「ヤバいぞ黒樹！」

開口一番そんな事を言われ、俺は再び眉を顰める。

「……と言う事は、この炎の柱を出している武霊使いを知ってるんだな？」

「ああ。と言うか、お前もよく知ってる」

よく知ってる？

「緑川だよ」

「……はあ？」

思わず聞き返してしまうと、

「緑川響。あの筋肉武霊バトル馬鹿だよ」

……そんな風に思ってたのか……まあ、実際その通りだが……

「お前は一回武霊バトルで圧勝しているから信じられないだろうが、緑川の武霊イフリートは決して弱い武霊じゃねえ。むしろ学園最強の炎系武霊だと言ってもいい」

……炎系最強ね……確かにシールドサーバントが燃えた事から考えると、そう言ってもいい気がするが……いまいちこれまでの緑川のイメージと繋がらない。だが、

「今使っている技は、イフリートの『フレイムワールド』って技なんだが……緑川はあの技で、一度『ヒノカを燃やしている』」

っな！……

この村雲の言葉に絶句せざる得ない

炎を燃やす炎って……常識外過ぎる……ん？……

と言う事は……

「……………ちょっと待て！そんなデタラメな技、どうやって防げばいいんだよ！」

「だからヤバいんだって！」

全てを燃やすフリートの炎の柱。

どうする事も出来ないそれを俺は茫然と見る。

あまりにも唐突な、そして、意外過ぎる相手により、星波町奪還作戦第四段階への移行を止めざる得なくなった。

????

緑川響。

武霊研究部の問題児にして、武霊バトル馬鹿でアホ。

それが彼に対する周囲からのイメージだったが、一部の者からは、勿体無い人物と思われていた。

身に付いている筋肉は見せかけではない為、運動能力は非常に高く、運動部の顧問からは武霊研究部にいる事を才能の無駄遣いと思われ、気の短さや意思の弱さから武霊を最大限使えていないと部内から嘆息されている。

本人とその武霊は個別では高スペックなのだが、何故かセットになると互いに弱くなると言うある意味非常に武霊使いとしては珍しいタイプだと言えた。

その顕著な例が、イフリートの最大最強の技である『フレイムワールド』。

この技は、イフリートの周囲に炎の柱に似た結界を作り出し、任意の対象を燃やし尽くすイフリート最大最強の技。

ただし、響はこの技を使いこなす事が出来ない為、封印している。武霊の技なども武霊の一部である為、使う為には武霊具現化同様に武霊使いの強いイメージが必要になる。そして、それは規模が大きく、威力が高ければ高いほど必要だった。

それ故に、気が短く、意思の弱い響には、フレイムワールドを安定させる事も、維持する事も難しく、使う度に周囲を危険に巻き込み、武霊研究部にいた頃の琴野沙羅の武霊ヒノ力を燃やした事があった。

だからこそ、自身の武霊を完全に制御する為に、強い武霊使いに武霊バトルを挑み、鍛えようとしているのだが、今の所それはうまくいっている様子はない。

夜衣斗

……つまり、

「……三島忠人によって意思を支配された事により、不安定だった情動と意思が安定化し、フレイムワールドを使える様になったと?」

「まあ……そう言う事だろうな……」

俺の予想に、同意して溜め息を吐く村雲。

村雲とは星波駅へと撤退中に合流し、イフリート対策の為に緑川の事を聞いたんだが……対策が思い付かない。

フレイムワールドはただ任意の範囲に入って来た対象を燃やすと言うある意味単純明快でシンプルな能力だが、シンプルな分、小細工などで崩せる隙が生じ難い。

強力な武霊能力だった青葉さんの武霊能力が効かなかった俺なら……もしかしたら、効かない可能性もあるが……俺だけ効かなくてもな……俺個人に戦闘能力があればいいんだが、それらは一朝一夕で身に付くものじゃないし……どうする?

幸いなのか何なのか、フレイムワールドが発動してから、三島忠人に支配されている武霊使い達はフレイムワールド内に引き上げているので、考える時間はあると言えばあるが……炎さえ燃やすと言うのがかなりのネックだった。

ただの炎ならサラマンダーさんや火結さん達に頼む事も出来るだが……仮にサラマンダーさんを炎に紛れ込ませてフレイムワールド内に侵入させても、見付かってしまうと……焼死させられかねない。

何か……緑川を大きく隙を作る『何か』があれば……

そう思った時、早見さんから通信が入った。

「「はいはい。あなたの芽印ちゃんですよお」」

「……………」

「「……いや、あのね。そこで沈黙されると私としても大いに

困るんだけど……………」

俺は溜め息一つ吐き、

「……………なんです？こちらはあまりよろしくない状況なので、手短かに」

「はいはい。えっとね。次の電車がそろそろ到着しそうなんだよね……………つで、緑川君のお母さんの話によるとね」「

緑川のお母さん？

そのある意味タイムミングの良い人物の話に、俺は僅かな光明を見出す事になった。

飛矢折

接近戦担当班の撤退が完了してから少しして、あたしは星波デパートの屋上で監視をしていた。

瞬輝丸を使った影響で、未だに全身に力が入らないから、これぐらいしか出来ないんだけど……………

緑川君が武霊で作り出したフレイムワールドは、徐々に広がりながら且つ星波駅に向かって進行していた。

あれのせいで夜衣斗君の作戦はまた変更せざる得ない事態になっていて……………黒樹君はその進行を少しでも遅くする為か、実験の為か、シールドサーバントを大量に使ってシールドの壁を作ったりしてたけど……………どれもフレイムワールドの炎に触れた瞬間、焼失してしまう。

オウキにあっさり倒された緑川君の武霊が、こんなにも強力な能力を持っているなんて……………

あたしにはどうする事も出来ない事態に、あたしは思わず深いため息を吐いていた。

「あらあら、思わせぶりな溜め息ね。恋？」

不意に芽印が隣に現れ、そんなふざけた事を言う。

あたしは溜め息を吐き、

「あなたの冗談に付き合っただけの体力はないわ……………」

「酷い！私は冗談なんか言っていないわ！」

大げさな感じで嘆く芽印に、あたしは白い目を向けつつ、

「……………っで？どうする事になったの？」

「あ、その事なんだけど」

あたしの問いに、ころっつと態度を変える芽印に、あたしは呆れるしかない。

黒樹君は、星波駅に帰ってから直ぐに、主要メンバーを集めてフレームワールド対策を考える作戦会議を開いていた。

それに芽印も呼ばれていたので、何らかの作戦が決まったと思っ

ただけど……………芽印から聞かされた対イフリート緊急作戦に、

あたしは困惑して思わず、

「大丈夫なのそれ？」

っつて聞いてしまうと、流石の芽印も、

「分かんない」

と困惑しているようだった。

????

フレ임ワールドを展開しながら宙に浮くイフリートの真下に、
緑川響はいた。

三島忠人に指示された通り、場所・時間・ルートで歩き、イフリートを具現化し、フレ임ワールドを発動。
ただそれだけ指示。

ただそれだけを成功させる様に、響の意志力・集中力を四散させない様に、命令は単純明快。

かつ青葉愛の様に自由戦闘を可能にするほど意識は残されていない。
い。

理由は二つ。

響の役割に意識は必要ないと、そうでもしないと『フレ임ワールドが目的を達するまで持たない』為。

フレ임ワールドは意志力の消費が激しい技であるのと、響自体に意志力が少ない事が、催眠下であろうとフレ임ワールドの維持時間を短くしている。

その為、少しでも維持時間を長くする為に、ゆっくりと歩く響。
何度目かの曲がり角を曲がった時、長い一本道の先に商店街と駅が見える場所まで来た。

展開中少しづつ広がる性質があるフレ임ワールドは、あと数歩でシールドサーバント達が張るシールドに触れる所まで接近している。

そして、そのシールドの先には、夜衣斗がいた。

もっとも響は夜衣斗を視界に収めても何の反応らしい反応もせず、ただゆっくりと一歩前に進み、不意にその歩みを止めてしまう。

響の侵攻を見ていた三島忠人は、不意に歩みを止めた響に眉を顰

めた。

意識を残さないほどハーメルンの笛を使った場合、命令以外の何らかの事が起きると、何も出来なくなる。

だが、状況が瞬時に変化する戦闘ならいざ知らず、響に与えた命令はフレイムワールドを展開しながら駅まで歩けと言う単純明快なもの。

何が起ろうとその命令に支障が出る様な事にはならない。

なのに、歩みを止めた。

三島忠人は遠見の武霊能力を使っている武霊使いに命令し、響が凝視している視線の先を映させる。

そして現れた映像に、三島忠人更に眉を顰める事になった。

映像に移るのは、キバに乗って夜衣斗の隣まで移動している小学校高学年ぐらいの全く同じ顔の二人の女の子達。

その女の子達の正体を三島忠人は、『武装風紀委員長だった事もあり知っていた』。

ひめね ひめうた
緑川姫音 姫歌。

ショートボブ

緑川響のと同じ髪型である上に、格好も常に同じである為、中々二人の区別が付かないが、右目の下にホクロがあるのが姉の姫音・左目の下にホクロがあるのが妹の姫歌と聞いてはいる。

もつとも、そっくりな双子だからと言う理由で知っていたわけではない。

彼女達は、星波町で数人しかいない『武霊封じの文字を書ける武霊使い』。

それが彼女達の最も重要な正体。

つまり、双子の武霊の能力で響は止められている。

三島忠人はそう判断した。

だが、それは三島忠人が三島忠人であるが故にしてしまった『間違った判断』だった。

どうやら賭けはうまくいったみたいだな……………

歩みを止めた緑川を見て、俺はほっと一息吐いた。

「うわあ、本当に操られてるよへタ兄」

「でも、操られている方が全然強そうだよ？」

「じゃあ、このままにして貰おっか？」

「うふふ。それいいかも」

と、とんでもない事を俺の後ろで言っているのは、緑川の妹達で、一卵性の双子である上にわざと似た格好をしているらしくて、一見するとどっちがどっちか分からないが……………右目の下にホクロがあるのが姉の姫音で、左目の下にホクロがあるのが妹の姫歌だと言う話。

一部の武霊使い達には『小悪魔双子姫』と言われている子達らしく……………まあ、その呼び名の通り、小悪魔な性格で、お姫様の様に『わがママがある程度許される立場』にある。

それは彼女達の武霊が星波町でも五人としない武霊封じの文字が書ける武霊だからだ。

それを聞いた時、事前に彼女達の事を聞いておけばよかったと思っただが……………まあ、過ぎた事はどうしようもないし、本来ならまだ星波町に居ないはずの時間だとか……………

姫音の筆の姿をした装備型武霊『筆神』。

姫歌の女性書道家を基にした武霊『筆女神』。

その二体が協力する事で武霊封じの文字を書けるらしく、二体で書く事により意志力の消費が他の武霊封じを書ける武霊使いより低いので、最も警察や自警団・武風に重宝されているとの事。

だからこそ、周囲の大人は彼女達が機嫌を損ねて武霊封じの文字を書かなくなる事を恐れ、ある程度のがママを聞いてしまうわけだが……………教育上よくないよな……………

まあ、とにかく、彼女達がそんな立場にあると言う事は、それだけ犯罪武霊使いによく思われない。

だからこそ、彼女達の事は一部の武霊使いにしか知らされておら

ず、星波町に居るだけで危険にさらされる可能性がある為、普段は隣の親戚の家に預けられ、星波学園に通っている。

つで、本来ならまだ登校時間ではないのでここにいるのはおかしな話なのだが……まあ、例によってわがママを発動したとか……まあ、俺にとって今回のわがママはかなり幸運だと言えた。

何故なら、彼女達の立場を一番苦慮しているのは、兄である緑川響だからだ。

緑川は、何とか彼女達と一緒に暮らせる様に、自分が強くなって彼女達を守る様に、自分も武霊も強くなるうとして……自分より強いと思う武霊使いに片っ端から武霊バトルを仕掛けていたそうだ……まあ、当の彼女達はそんな緑川をもつともわがママが言える相手として認識しているらしく……色々と大変らしい。

まあ……つまり、それだけ緑川は妹達の事を思っている。

三島忠人の催眠が『本当の催眠』でないのなら、完全な抵抗は出来なくても、強い思いが生じれば何らかの弊害が出る可能性が高い。そう考えた俺は、彼女達と彼女達の母親に協力を要請し……結果、目論見は予想以上に成功した。

……そして、俺の予想が正しければ、三島忠人は緑川が動かなくなつた事を、彼女達の武霊能力によるものと曲解しているはず。その隙を……突く！

「……二人ともここから本番だからね」

「はーい。任せて黒樹お兄ちゃん」

二人同時にそう言つて、小魔の笑みを浮かべる緑川姉妹。

なんだか……思わず緑川に合掌したくなつた。

????

立ち止まる緑川響を再び歩かせる為に、三島忠人の指示が飛び、フレームワールドの中から武霊が次々と飛び出し周囲の建物を壊し始める。

緑川姉妹の武霊能力により足止めされているのなら、周囲の建物のどこかに文字が描かれていると三島忠人は考えた。

だが、実際には文字など書かれておらず、ただ緑川響が何より守りたいと思っている自分の妹達に、危険なフレームワールドを近付けたくないと言う思いによって三島忠人の催眠に対して抵抗しているに過ぎない。

三島忠人が見当違いな対策を打っている間に、夜衣斗は次の対フレームワールド作戦を開始した。

「アーテステス。こちら姫音」「と姫歌だよ」「
「ヘタ兄聞えているう」「

星波町の各所にある自警団本部と繋がっているスピーカーから緑川姉妹の声が聞こえ始めた。

前の段階で、夜衣斗達は自警団本部と繋がっている笛の音が出ていないスピーカーは壊していなかった。

それは、全てのスピーカーを壊してしまうと次のはぐれ発生に対する対応が出来ない、とは言わないまでも、何らかの支障が出る可能性があると考えた為だった。

三島忠人も、夜衣斗ならそう思うだろうと考え、スピーカーが一部残っている事を不自然に思わず、また、対して問題ないとしてフレームワールドの燃やす対象には入れていない。

しかし、その残ったスピーカーから緑川姉妹の声がし始めるとは予想もしていなかった。

しかも、

「「発表しまあゝす」「へタ兄は每晚」「私達と電話を
して無事を確認しないと」「寝られないほどのシスコン」「
「でゝす」「」

その流れる内容に意図が分からなさ過ぎて、三島忠人は困惑する
ばかりだった。

夜衣斗

自警団本部に繋がるマイクを持ち、緑川姉妹は口々に緑川の恥ず
かしい秘密を暴露する。

曰く、テストで0点を連続して取って親に酷く怒られ、尋常じゃ
ないほど大泣きして児童相談所に通報された。とか。

曰く、好きな人に勇気を出して告白したら、物凄く拒絶されて暫
くご飯もたれられないほど落ち込んで、げっそり痩せた。とか。

曰く、Hな漫画をベットの下に隠してて、その内容が……………っ
て!?

ぎゃー何やってるんだ緑川の奴うううう!？あれほど慎重に隠
せと言っているのに思いつきりばれているじゃないか!？…………ど
うか俺のだと気付かれていませんように……………って不味い!

俺は慌てて春子さんと通信を繋ぎ、

(……………言ったら……………分かってますね?)

(…(も、勿論よ!)(…)

思考通話でとりあえず脅しておく。

……………これだけじゃ安心出来ないな……………暫くシールドサーバン
トを使って監禁しとくか……………

そんな事を考えながら緑川の様子を見る。

激しく動揺しているのか、微動だにしていなかった緑川の身体が
小刻みに動き出していた。

よし!今だ!

俺は春子さんの問題をとりあえず放置して、作戦を次の段階に進
める為に指示を出した。

????

テオ「S」サラマンダーは、フレイムワールドの炎の中で来ている白いスーツの襟を正し、白い帽子を被り直した。

彼は自身の退魔士能力で炎の魔人と化している。

その為、視覚的にはテオは炎と一体化しており、フレイムワールド内で待機している三島忠人側の武霊使いに気付かれずに悠々と緑川響の背後まで移動出来た。

フレイムワールドは燃やす対象を認識していないと、例えば通常なら簡単に燃える物であろうと燃える事はない。

その特性を見抜いた夜衣斗は、テオに危険なフレイムワールド内への侵入を頼んだ。

そして、その危険性を可能な限り減らす為、緑川姉妹による足止め兼陽動を行った。

夜衣斗の目論見は見事に成功し、妹達の秘密の暴露に動揺している響の背中に、緑川姉妹が書いた武霊封じの札を張ろうとポケットから札を取り出す。

これを張れば、上空にいるイフリートは消え、フレイムワールドは消える。

そうなれば、一気に逆転に転じる奪還作戦第四段階が始まり、状況が一変するはずだった。

だが、不意にスピーカーから緑川姉妹の声が聞こえなくなる。

それにぎよつとしたテオは、札を張るのを止め、気配を消しながらゆつくりと後退。

武霊使いは武霊を具現化させられる様になった段階で、感が鋭くなる。

これは武霊呼ばれる魔法生物に魂が直接接触れる事により、普通は眠っている第六感が活性化する為じゃないかと退魔士達は考えていた。

その感の鋭さは、個人によって大きく違いはあるが、少なくとも

ある程度集中している状態で誰かが近付けば、その気配に気付くぐ
らいの感の良さは確実にある。

だからこそ、集中力を削る為に緑川姉妹に兄を動揺させる暴露を
させていたのだが……

テオは夜衣斗の指示通り、無茶はせず、スピーカーから緑川姉妹
の放送が再開するのを待つ事にした。

ただ、フレームワールドに入る前の段階で燃やす対象に確実に入
っているであろうPSサーバントを脱いでしまっているので、何が
起ったか正確な情報が得られず、普段は異様に陽気なテオも流石に
顔を曇らせた。

第四章 『それぞれの裏、さまざまな真実』 77

夜衣斗

不意にスピーカーから緑川姉妹の声が聞こえなくなった。

その事態に流石の緑川姉妹も戸惑いの表情を見せる。

俺が確認を取るより早く、早見さんから連絡が入り…………… 自警団本部が襲撃されたとの事。

…………… まあ、地面の下までシールドは張ってないからいつかはシールド内部に襲撃を掛けてくるとは思ったが…………… このタイミングでとは思わなかったな…………… やっぱり向こうの方が一枚上手か？ そんな事を思いながら、俺は特に何もせず、緑川の様子に注視した。

何故なら、シールド内部でどこが襲撃されても対応出来る様に準備済みだったからだ。

…………… まあ、強いて問題があるとすれば…………… やる気満々のあの子達ぐらいか……………

???

自警団本部が襲撃されたのは、緑川姉妹が兄の恥ずかしい秘密を暴露し始めてから少し経った後だった。

夜衣斗の予想通り、地中を進みシールド内部に侵入した武霊使い達は、すぐさま自身の武霊を具現化し、町の各所のスピーカーに繋がる配線を切断した。

三島忠人の当初の予定では、緑川響のフレームワールドが駅周辺に張っているシールドを燃やした後、地上・地下から同時侵攻するはずだった。

だが、緑川が予想外の足止めをし始めたので、タイミングを見計らって地下を掘り進めていた武霊使い達は先行する形で襲撃してしまっ

これは三島忠人が命令の盗聴を懸念し過ぎた事により、襲撃タイミング・場所を予測されない様に地下襲撃メンバーの中に一切の通信手段を持たせず、三島忠人側からも新たな追加命令をしなかった為に起った。

もつとも、三島忠人はそれでも問題ないと考えていた。

何故なら、三島忠人にとって意図は不明だが、夜衣斗の何らかの思惑が緑川姉妹の放送を妨害でき、自警団本部を奪い返せば駅周辺での笛の音を再開する事が出来る。

武霊を展開しながら地面から出てきた武霊使い達は自警団本部にゆっくり近づく。

自警団本部に配置されている者を警戒しての動きだが、その本部周辺の商店街店舗から出て来たのは、PSサーバントを着た十二神将の子供達だった。

普通なら、子供達が出てきた事に驚くだろうが、催眠状態にある武霊使い達は特に驚かず、代わりにスピーカーから催眠の笛の音が聞こえてこない為に正気に戻っている武霊達は戸惑いの様子を見せる。

そんな武霊達の様子を気にも止めず、武霊使い達は自身の武霊達を子供達に向けようとした。

だが、その時、

「あらあらあゝ持ち場に居ないと思ったらあゝ、こんな所に居たのねえ」

と言いながらPSサーバントを着た屋写あぐりが自警団本部から現れた。

一斉にびくつとなる十二神将の子供達。

実は十二神将の子供達の本来の持ち場は、商店街ではなく、星波駅近くにある第二地下避難シェルター周辺。

夜衣斗が考える最も最後に侵攻されるであろう場所だった。

その事を夜衣斗は子供達には言っていないが、その事を気付いた一部の子供達が、戦力に余裕が無いのに結局自分達を戦わせない

事を選んだ事に不満を覚え、勝手に持ち場から離れ、最も狙われるであろう自警団本部の警護をしていた。

しかし、彼らは失念していた。

シールドが張られた星波駅周辺が襲撃された場合、残された戦力で防衛しなくてはいけない。

そうなるかと必然的にあぐりが出てくると言う事を。

寮暮らしては知らない夜衣斗は知る由もないが、あぐりは怒らせてはいけない寮母として寮生の中で有名で、かつ、その退魔士能力・夜叉を発動した時、

「こいつはお仕置きが必要だなああ!?」

不意におつとりした口調と表情から、鬼の様な荒々しい口調と表情になり、十二神将の子供達の顔を青くさせた。

彼女の性格は豹変する。

そして、その姿を一気に猫の半獣の姿にと変化させた。

実は猫神奈子だけは十二神将の子供達とは別行動を取っており、他の子供達が勝手に持ち場を離れた事を誤魔化す役割を引き受けていたのだが、当然ばれて現在お仕置き中（正座）。

その彼女から直接髪の毛を少し食べた後、芽印により自警団本部に送られ、現在に至る。

猫の半獣と化したあぐりに、ターゲットを変更した武霊達が殺到。

「遅え！」

あぐりは後ろに大きく跳び、建物の壁を蹴り、一気に下降。

武霊達の間を猛スピードですり抜け、その際に二体を伸びた両手の爪で切り裂き、霧散させる。

「逃げんなよ！」

着地した先にいた丑神剛をそう脅し、硬直する剛の頭をがっしり押さえ、髪を噛み切り飲んだ。

瞬間、あぐりは牛の半獣となり、迫って来た武霊の一体を腕を掴み、振り回す。

更に近付いて来た武霊達を巻き込み、吹き飛ばし、武霊使いに向

けってぶん投げる。

流石にそれに巻き込まれる訳にはいかないの、投げられた武霊の武霊使いは具現化を止めた。

その瞬間、いつの間にかその武霊使いに接近し、しかも行き掛けに巳神義の髪を食べていたのか蛇の半獣と化したあぐりが、蛇の軟体でその武霊使いに巻き付き、一瞬で締め落とす。

意識を失った武霊使いから素早く離れ、捕まえようとした人タイプの武霊に巻き付き、首筋に噛み付いて毒を注入した。

毒を注入された人タイプの武霊は、瞬く間に霧散。

あぐりはそのまま近くにいた武霊使いに巻き付き、首を絞めて意識を落とした。

そして意識を失った武霊使いをそのまま盾に使い、あぐりの強さに警戒し始めた残った武霊と武霊使いと対峙する。

武霊使い達の意識が完全にあぐりに集中した瞬間、

「みんな！今だ！」

子神弾の合図で一斉に十二神将の子供達が半獣化し、それぞれがそれぞれの特徴の技を使って武霊・武霊使いに飛び掛かり、武霊を霧散させ、武霊使い達を気絶させた。

これにより自警団本部を襲撃した武霊使い達は全滅したが、

「あなた達い〜」

退魔士能力を解いていつもの感じに戻ったあぐりの声にびくつとする子供達。

「手伝ってくれてえ〜ありがとうねえ〜」

あぐりのお礼の言葉に、ホツとする子供達だったが、

「でもあ〜……………それで許すと思ってるのかこのクソガキども！」

退魔士能力も使っていないのに再び荒々しい口調と表情になったあぐりに、

「「「」」、ごめんさなあ〜い」「」

一斉に逃げ出す子供達だったが、ほどなくして全員捕まり、先にお仕置き中の奈子同様にしばらく正座かつ長いお説教される事にな

つ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5073f/>

武装守護霊(旧)

2011年5月2日17時07分発行